

青森県埋蔵文化財調査報告書第82集

和野前山遺跡

昭和58年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第82集

和野前山遺跡

八戸北バイパス建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和58年度

青森県教育委員会

序

本報告書は、一般国道45号線八戸北バイパスの建設に伴い、路線内に所在する和野前山遺跡の記録保存のため、発掘調査を実施し、その結果をまとめたものであります。

本調査で、多量の土器、石器とともに、縄文時代の竪穴住居跡や平安時代の掘立柱建物跡等が発見されました。特に、平安時代の掘立柱建物跡は、県南地方では初めての検出例であるなど大きな成果を収めることができました。

本報告書が、今後の埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いと思います。

ここに、調査の実施及び本報告書の作成に当たって種々御指導、御協力をいただいた調査員をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和59年3月

青森県教育委員会

教育長 ニッ森 重志

例　　言

1. 本報告書は、昭和56年度に実施した八戸市大字市川町字和野前山16ほかに所在する和野前山遺跡の発掘調査報告書である。

2. 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、他は文末に記した。

3. 記述ならびに挿図は、原則として次の基準にしたがった。

(1) 遺構番号については、検出順に番号を付したが、本報告書作成において若干の移動がある。

(2) 遺物には観察表を付し、出土地点・法量及び諸特徴を一覧できるようにした。

(3) 挿図縮尺は、原則として次のとおりとした。

住居跡……1/40・1/60、土壌……1/40、溝状ピット……1/60。

土器実測図……1/3・1/2.5、土器択影図……1/2.5、石器実測図……1/1.5・1/2・1/3

(4) 繩文時代の遺物分類は、次のとおりである。

土器は、一部を除いて、型式編年における細別をほぼそのまま群別とした。

第1群……爪形文系土器、第2群……日計式土器群、第3群……貝殻文系土器、第4群……ムシリ式土器、第5群……赤御堂式土器、第6群……早稻田5類土器、第7群……長七谷地群土器、第8群……早稻田6類土器、第9群……特殊なもの及び特定困難なもの。
他に土器片錐

石器類のなかで、剥片石器類と石斧・石錐・礫器等については、各名称ごとの分類したが、磨石・敲石については敲磨器と一括し、以下のとおり分類した。

類……三角柱状磨石、類……スタンプ状石器、類……敲石、類……凹石、類……凹石に近似のもの、類……球形のスリ石、類……石皿・台石、類……ハンマー・ストーン。

(5) 繩文原体については「日本先史土器の繩紋」(山内1979)に依拠したが、その理解が不充分な点もあると思われ、この責は執筆者が負うものである。

4. 資料の鑑定並びに同定等については、下記のとおり依頼した。

青森県立八戸高等学校教諭松山力氏　　石質鑑定

元奈良教育大学教授嶋倉巳三郎氏　　樹種同定

青森県機械金属試験所　　鉄滓分析

5. 発掘調査及び本報告書作成に当たって、次の諸氏並びに機関から御協力、御教示を得た。

(敬称略、順不同)

石岡憲雄、館野孝、原川雄二、馬目順一、工藤竹久、芳賀英一、山内幹夫、西田茂、工藤利幸、鈴賀良一、小笠原幸範、中村五郎、青森県立郷土館、八戸市教育委員会、盛岡市教育委員会、財団法人岩手県埋蔵文化財センター、宮城県教育委員会文化財保護課、財団法人福島県文化センター。

6. 遺物の観察表は、縄文時代の遺物 第 章末、歴史時代の遺物 第 章末に一括して記載した。

7. 注は、各章ごとに記載し、引用・参考文献は巻末に一括して収録した。

8. 実測図中における表現方法のうち、スクリーン・トーンの使用部分は下記のとおりである。



D 遺構セクション図の地山

繩文時代石器

敲磨器類

A つるつるしている部分 E 使用痕跡部分 G 小さな凹みが、多数ある部分

D 中間的な部分 鍛磨器 類 鍛磨器 類

E 面の強く荒れている部分 F 凹み部分 A つるつるしている部分

石斧 その他

E 敲き（潰し）整形部分 A スリの痕跡のある部分 E 敲打痕のある部分

歷史時代

B カマド焼土部分、焼土遺構焼土部分のうち硬い部分、土師器壺内黒部分

C カマド袖等焼化部分、焼土遺構の焼土部分のうち柔かい部分

D 砥石使用面、土師器坏外面調整部分（特にみがき部分）

E 須恵器火ダスキ部分

還元炎焼成の十器断面は墨塗りとした。

他の使用部分は、そのつど実測図中に記載した。

9. 写真図版の番号は、実測・拓影図の番号と同一である。

目 次

序	
例言	
第 一 章 調査概要	1
第 1 節 調査要項	1
第 2 節 調査に至る経過	2
第 3 節 調査方法と調査経過	3
第 二 章 遺跡の概要	7
第 1 節 遺跡の位置と周辺の遺跡	7
第 2 節 地形と地質	7
第 三 章 繩文時代の遺構と遺物	19
第 1 節 検出遺構と遺構内出土遺物	19
第 2 節 遺構外出土遺物	63
1 . 土器	63
2 . 土器片錘	116
3 . 石器	122
第 3 節 分析と考察	191
第 四 章 弥生時代の土器	251
第 五 章 歴史時代の遺構と遺物	254
第 1 節 検出遺構と遺構内出土遺物	254
第 2 節 遺構外出土遺物	278
1 . 土器	278
2 . その他	279
第 3 節 分析と考察	281
第 六 章 溝状ピット	288
第 七 章 科学的分析	317
1 . 鉄滓	317
2 . 樹種	318
第 八 章 まとめ	319

第 章 調 査 概 要

第1節 調 査 要 項

(1) 調査目的

建設省一般国道45号線八戸北バイパス建設工事に伴い、当該路線内に所在する和野前山遺跡の発掘調査を実施して、その記録保存を行い、埋蔵文化財の活用をはかるものである。

(2) 調査期間

昭和56年4月20日から昭和56年10月31日まで

(3) 遺跡名及び所在地

和野前山遺跡 八戸市大字市川町字和野前山16外

(4) 発掘調査面積

11,000m²

(5) 発掘調査依頼者

建設省東北地方建設局青森工事事務所

(6) 調査受託者

青森県教育委員会

(7) 調査担当者

青森県埋蔵文化財調査センター

(8) 調査協力機関

八戸市教育委員会

(9) 調査参加者

調査指導員	村越 潔	弘前大学教育学部教授 青森県文化財保護審議会委員
"	小井田幸哉	青森県文化財保護審議会委員
調査協力員	吉田月二郎	(前・八戸市教育委員会教育長)
"	岩谷喜代美	八戸市教育委員会教育長
調査員	松山 力	県立八戸高等学校教諭
"	橋本 正信	県立三戸高等学校教諭(現・県立七戸南高校教諭)
"	山田 奉文	県立八戸工業高等学校教諭
調査補助員	千葉 正人	

調査補助員 鳴海 亘

" 佐藤ゆかり

" 成田 文子

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 北山峰一郎（現・県立郷土館副館長）

" 工藤 泰典

次長 古井 瞳夫

調査第二課長 山田 洋一

" 主査 三宅 徹也

" 主事 白鳥 文雄

" 臨時職員 中嶋 久彰（昭和58年8月31日退職）

第2節 調査に至る経過

八戸北バイパス建設は、国道45号の八戸市高館付近の交通緩和をはかる計画されたもので、昭和49年に、建設に先立ち埋蔵文化財の分布調査を実施した。その際、確認された遺跡は、売場遺跡、大タルミ遺跡、和野前山遺跡である。

和野前山遺跡は、3遺跡のうち、八戸北バイパス路線の最も上北郡百石町寄りに所在し、繩文時代の早期、前期、晩期、及び歴史時代の遺跡と推定されているものである。

八戸北バイパス建設に係わる埋蔵文化財の調査は、昭和54年度の売場遺跡を通る路線予定地内的一部3,000m²を最初に、55年度には同遺跡の一部1,000m²、56年度には和野前山遺跡の11,000m²を手がけることになった。また、大タルミ遺跡については、昭和56年度に試掘調査を行い、その路線内の範囲を明らかにした後、発掘調査は昭和57年に実施することにした。

和野前山遺跡の発掘調査は、昭和55年10月に発掘調査計画が確定し、昭和56年3月5日正式に東北地方建設局青森工事事務所長から依頼を受けた。昭和56年4月1日県教委から承諾の回答を送付し、同年4月3日付けで委託契約を締結した。昭和56年4月21日から10月31日までおよそ6か月間にわたる発掘調査を開始したが、予想以上の遺物量が出土し、調査は難航した。

昭和57年3月31日付けをもって、建設省青森工事事務所長あて委託業務完了報告書及び費用精算書、調査概報を提出し、報告書は昭和57年度刊行とすることとした。その後建設省青森工事事務所の都合により、昭和57年度予定の報告書刊行は、一年延期され、昭和58年度刊行となつた。

（山道紀郎）

第3節 調査方法と調査経過

1. 調査方法

調査区の設定

路線中心抗 247と 248を結ぶ線と、247の上でこの線と直交する線を基準として、4 m × 4 mの小グリッドを設定した。小グリッドは、東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付し、この組み合わせによって呼称した。更に調査の円滑化を図るため、小グリッドの5の倍数ごとに20m × 20mの大グリッドを設置し、東西ローマ数字、南北を算用数字（5の倍数）の組み合わせにより呼称した。

発掘方法

大グリッドのラインに沿って土層観察のための「あぜ」を残し、土層はローマ数字をもって呼称した。

<遺構の調査方法>

遺構は、各種類ごとに確認順に番号を付した。遺構の調査は堆積土の状態を観察するために原則的には四分法を用い、規模の大小や遺構の性格によって、二分法・半截・その他を用いた。遺構内の堆積土層は算用数字を用いた。

遺構の実測における縮尺は、基本的には20分の1とし、遺物出土状態・規模の大小によって10分の1・その他とした。

記録保存のために、適宜写真撮影を行った。

<遺物の取り上げ方法>

遺物は、遺構及び層位ごとに取り上げることを原則とした。遺物の出土地点を記録し、層位・標高と出土状況を台帳に記入した。遺構外出土遺物は、大グリッドごとの通し番号とし、小グリッド単位で取り上げた。また、遺物密集部分では小グリッドを16分割し、1 m四方単位に取り上げた。

取り上げに際しては、種類ごとに色分けをしたカードを使用した。（土器 - 白・石器 - 青・その他 - 赤）

2. 調査経過

4月21日、器材運搬を行った。22日、関係機関・調査員等による発掘調査の打ち合わせ会議を行い、調査方法等の具体的な事項について話し合い、共通理解をはかった。翌23日には作業員の説明会を行った。

調査は、まず大グリッドの設定、続いて500分の1の地形図の作成と順に進み、27日からは作業員も入り、本格的な調査を開始した。地形図作成中に、路線幅杭として当初の図面とは異

なる杭が敷設されていることが分かり、委託者に設計変更の有無を確認した結果、調査面積が追加される可能性を示唆された。

5月、調査区南側の15、20 大グリッドから粗掘作業に入ったが、この地点は谷地形を成しているため黒色土が厚く、また、湧水もあり、開始早々から作業の難航が予想されたことから、急きよ調査工程を変更し、遺物が最も多く採集された30・35 地区に調査の主体を移した。粗掘が進むにつれて歴史時代の住居跡等のプランが確認され、不明瞭ではあるが溝状ピット等も確認され始めた。また、縄文時代の遺物の分布状態もほぼ明らかになった。遺物の密集度に差があり、特に集中するいくつかの部分をユニットに分けて調査を行った。

その後は、確認順に遺構の精査を行い、並行して縄文時代の遺物上げ及び他のグリッドの粗掘を行った。30～40 にかけては縄文時代の遺物が厚く堆積しており、通常、遺物の集中部においては遺構が検出されることが多いために、特に30 においては遺物取り上げを先行させることとした。

8月に入り、委託者から、路線変更に伴う調査面積の追加とその調査依頼が出されたため、該当する地域の遺物の包含状態を確認の上で、表土剥ぎに重機を導入した。遺物集中部及び遺構の精査は継続して行い、遺物の出土が少ない45 から北側部分は、試掘先行で遺構の確認を行った。

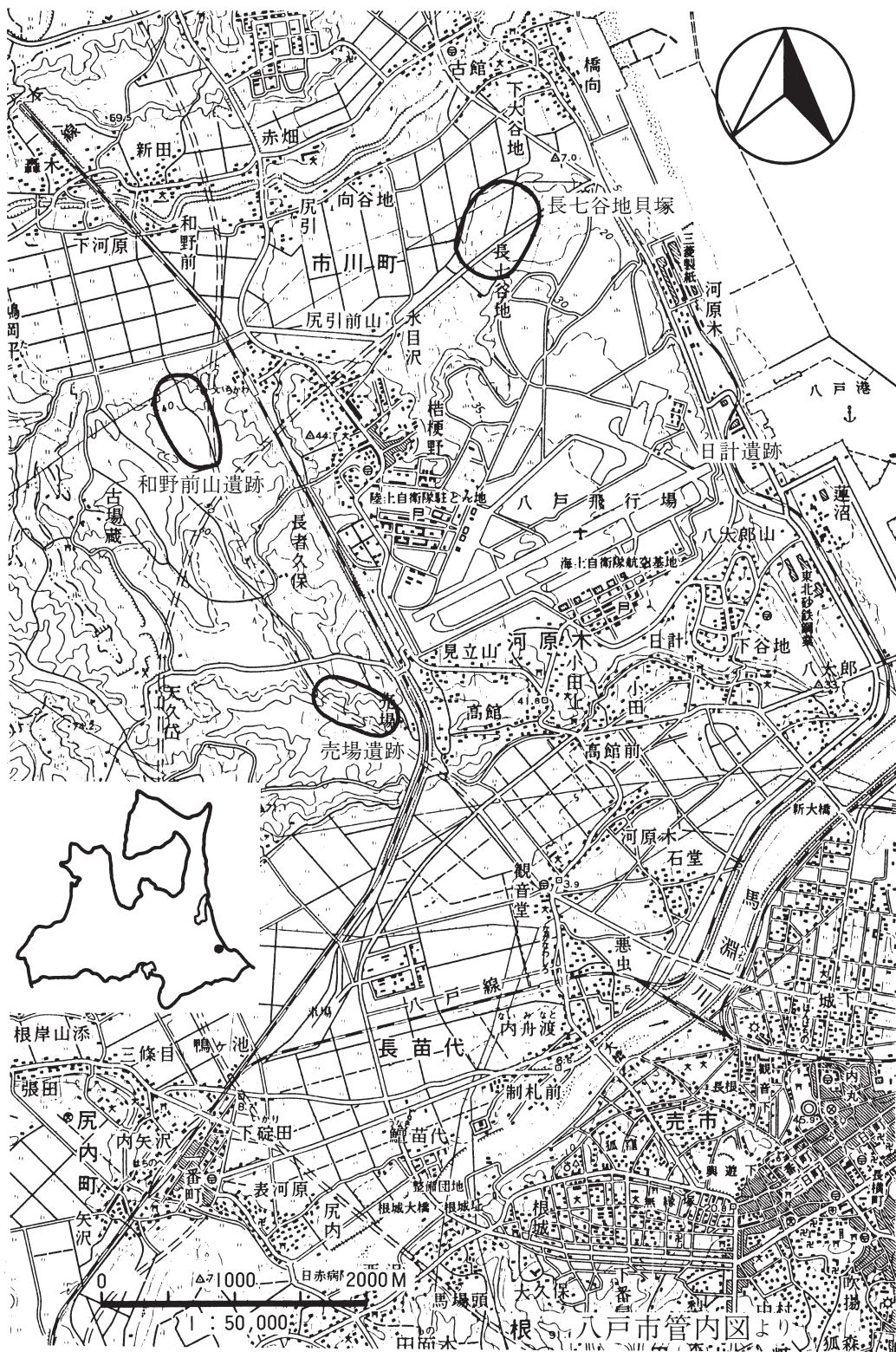
9月中旬、遺物密集部の遺物上げをほぼ終了し、遺構確認の掘り下げを行った。また、第3号住居跡に係る道路部分の付替えが決定し、遺物・遺構の集中度が低いと思われる地区を付替え道路部分に定め、この地区の精査を優先させたところ、予想に反して、住居跡をはじめとする遺構が検出され、調査の手順は変更を余儀なくされた。このため、全力をこの部分の調査に投入した。

道路付替え後、第3号住居跡及び未精査部分の調査もようやく終盤を迎え、10月30日、資材庫解体、調査区周辺の整理を行い、翌31日、全調査を終了した。

(白鳥文雄)



第1図 グリッド・遺構配置図



第 章 遺 跡 の 概 觀

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

和野前山遺跡は、八戸市街地から北方 6 kmの地点にある東北本線陸奥市川駅の裏手一帯で、五戸川によって形成された沖積平野の右岸に張り出した標高約20mの舌状台地上に立地する。

本遺跡の北東約2.5kmに昭和56年 5月に国の史跡に指定された長七谷地貝塚が所在し、南方 2 kmに売場遺跡が、更に南東3.5kmには日計遺跡が所在する。

長七谷地貝塚は、江坂輝弥氏による昭和31年の調査以降、青森県教育委員会、八戸市教育委員会によって分布・試掘並びに緊急調査が数次にわたり実施されている。この結果、繩文時代早期末葉から前期初頭にかけての各々地点を異にする貝塚や集落が検出され、その膨大な各種遺物とともに当該時期の研究上数多くの重要な資料を提供した。一方、売場遺跡は、青森県教育委員会で昭和54・55・57年の3か年にわたって調査され、現在資料整理中の遺跡である。また、この売場遺跡は、繩文時代早期中葉の貝殻・沈線文系土器以降、前期初頭まで間断なく集落が営まれていたことが明らかとなっている。近接して立地するこの3遺跡は、今後、当該時期の研究上特に比較検討される良好な遺跡といえよう。また、売場遺跡では本遺跡の歴史時代の住居跡と幾分近接した時期の住居跡が10数軒検出されている。日計遺跡は繩文時代早期初頭の日計式押型文土器の標式遺跡であり、本遺跡においてもその関連資料が出土している。

(三宅 徹也)

第2節 地 形 と 地 質

1. 周辺地域の地形と遺跡の位置

青森県東部の上北地方南部を東へ流れて太平洋に達する奥入瀬川（相坂川）と、岩手県境を越え北東方へ下って太平洋に注ぐ馬淵川の下流とにはさまれた地域は、おもに、春梁山脈の東側斜面に続く丘陵・段丘群で占められている。丘陵・段丘群は、東北東～北東方へ流れる諸河川によっていくつかに分断され、いずれも東北東～北東方へ、高度をしたいに感じながら、並行して帯状にのびている。

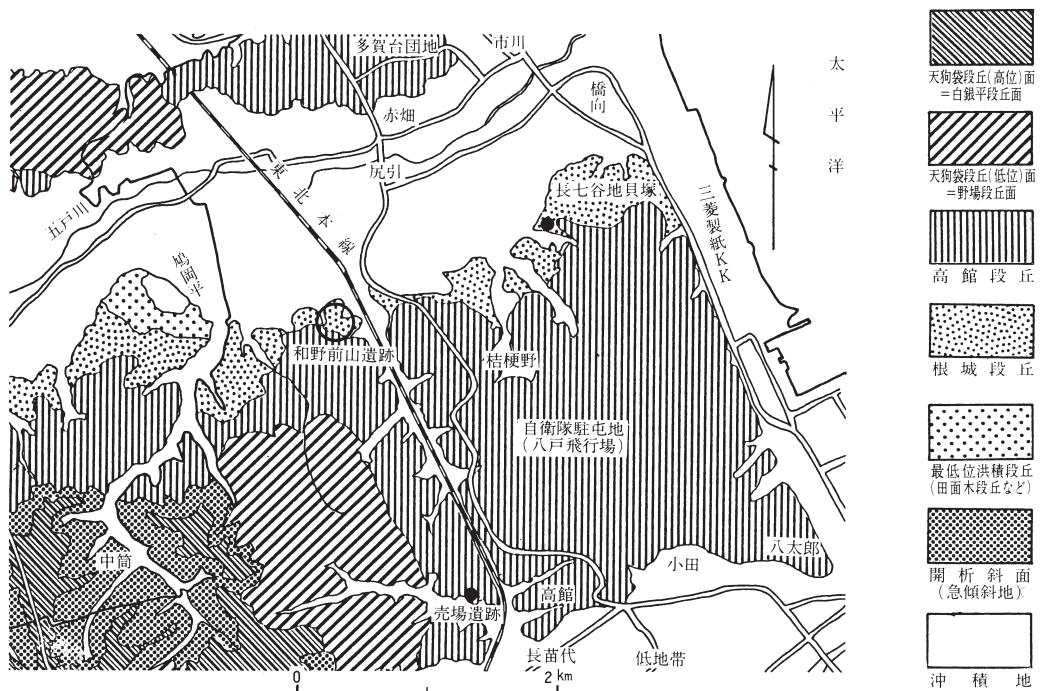
和野前山遺跡は、このような帯状にのびる丘陵・段丘群の一つ、五戸川と浅水川の間を東北東にのびる幅 4 km前後の丘陵・段丘群の北縁に続く長七谷地段丘の上、丘陵・段丘群の末端部北端から西南西方へ約3.5kmの地点（北緯40°33'40" 東経141°26'10"）にある。

第1表 青森県南東部の段丘と被覆火山灰層下限

区分(中川 久夫:1961)	八戸付近	被覆火山灰層下限
沖積地 I 平野	海岸平野・河岸平野	
洪積段丘	II 低位段丘	田面木段丘 八戸火山灰層 長七谷地段丘(仮称) 高館火山灰層上部 根城段丘 高館火山灰層上・中部
		III 中位段丘 高館段丘 高館火山灰層下部
	IV 高位段丘 天狗岱段丘	天狗岱火山灰層
	V 最高位段丘 九戸段丘	

この地域周辺の段丘群は第1表のように分けられている。このうち、長七谷地段丘は、従来の区分にはなかったが、昭和52年度以来の青森県教育委員会による長七谷地貝塚（本遺跡の東北東方約2km）発掘調査の際、貝塚のある段丘が、従来の根城段丘よりは新しく田面木段丘よりは古い段丘面をもつことが判明したことから、筆者が仮に命名したものである。（青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集、長七谷地貝塚、29頁 - 昭和55年）。

五戸川と浅水川の間の丘陵・段丘群の東部、本遺跡立地点を含む段丘群は、高位より低位へ天狗岱段丘・高館段丘・長七谷地段丘の3段に分けられる。そのうち、天狗岱段丘はさらに、高位の白銀平段丘と低位の野場段丘とに細分される。それぞれの平坦面の最低海拔高度は、天狗岱段丘高位面（白銀平段丘面）が約80m、天狗岱段丘低位面（野場段丘面）が約60m、高館



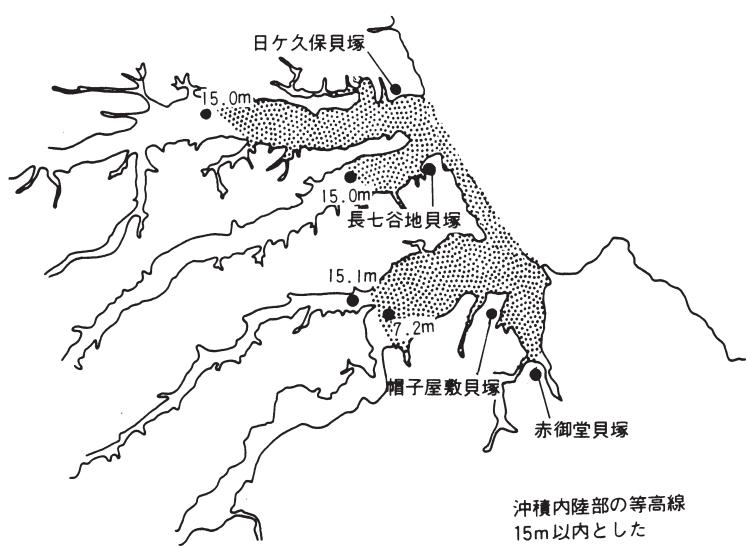
第3図 地形区分図

段丘面が約25m、長七谷地段丘面が約15mである。これらの段丘は、五戸町東部以東で平坦面がよく保存され、なかでも本遺跡のすぐ東を走る東北本線以東の高館段丘面は、ごくゆるやかにほぼ北方へ傾斜しているものの、平坦面はきわめてよく保存されている。

第3図は、遺跡周辺地域の地形区分図である。段丘分布の特徴は、図でも明らかなように、より東により低位の段丘が分布するとともに、その北側はより高位の段丘の北東縁を鍵型に巻いて西南西方にのび、より北側により低位の段丘が、段丘群のつくる台地ののびる方向（西南西～東北東）に並行して帯状に連続することである。

以上の段丘群と、北方を東へのび末端部に多賀台団地の立地する段丘群との間には、五戸川の流れる沖積地が西南西から東北東にのび太平洋岸に達している。この低平な沖積地は、本遺跡の西方約2kmの鳩岡平付近より広くなり、幅2km前後となる。鳩岡平付近から太平洋岸までの部分を市川低地帯と呼ぶことにする。同様の比較的広い低平な沖積地は、北方の奥入瀬川最下流域の百石町から八戸市市川（本遺跡の北々東ほぼ3km付近で市川低地帯と合同）にかけての地区、南方の馬淵川最下流域の尻内町・長苗代・河原木・沼館地区、その東に接する新井田川最下流域の類家・小中野地区にも広がっていて、それぞれ百石低地帯・長苗代低地帯・類家低地帯と筆者は命名している（八戸市教育委員会文化財シリーズ第24号、八戸の地質、11～12頁・昭和58年）。これらの低地帯は、いずれも繩文海進時には太平洋に続く入江となっていた地域で、低地帯に接する段丘縁には、日ヶ久保貝塚・長七谷地貝塚・帽子屋敷貝塚・赤御堂貝塚などの著名な遺跡が存在している（第4図）。

本遺跡の東～南東方には、南々東方約2.5kmに谷頭をもち、高館段丘を刻んで北々西方へ直線的にのび、東方約300m地点で市川低地帯に達する谷がある。この谷の谷底部の狭長な沖積地を東北本線が通りぬけている。その谷壁は急傾斜地となっている部分が多く、段丘面と谷底との高度差は20～25m程度である。一方、本遺跡の南西側には、南々西方5km付近に谷頭をもつ、直近地域でもっとも大きい谷があり、天狗岱段丘・高館段丘・長者久保段丘を



第4図 繩文海進時の海域と貝塚

刻みこみ、本遺跡の西方約1kmのところで市川低地帯に達している。この谷の上流部は北東方にに向かうが、中筒部落の南東方約750m付近ではほぼ直角に折れて北西方に向かい、中筒で南西方からの支谷を合わせたあと、中筒部落の北西方約600m付近で再びほぼ直角に向きを変えて北東方に向かい、古場蔵付近で南東方からの支谷を合して、北々東に流れ下る、いわばS字型の流路をもっている。この谷の谷底の狭長な沖積地と、周囲の段丘面との高度差は、上流部で約30m、中流部で50~50m、下流部では周囲の段丘面が低いので20m程度となっている。谷壁は開析されて比較的急な傾斜地となっているところが多い。以上に述べたような谷やその支谷あるいはその他の小規模な谷に沿う狭長な沖積地やその谷壁の傾斜地を除いて、前述したように平坦な段丘面が各所に広く残されている。

本遺跡の北側に広がる市川低地帯を通りぬける五戸川は、十和田湖の南方の迷ヶ平付近に水源を発する、流路延長50.7kmの2級河川で、現在この川にそって地方主要道が通り、十和田湖への一つのルートとなっているが、先史時代からこのルートはよく利用されていたものと考えてよい。

本遺跡の立地する長七谷地段丘は、南方の平坦面の保存のよい高館段丘の段丘崖にあたる北斜面に接して、北方にはりだす舌状地となっている。東西に続く長七谷地段丘は、これを各所で刻んで市川低地帯に開く、ごく小規模な谷によって区切られているので、総括的には北方に傾斜するものの、東西方向にも波状に起伏している。本遺跡の舌状地はその一部で、西縁の小谷と東側の小谷の間の幅約250m、はり出しの先端縁から南方へ奥行き約300mの規模をもっている。東隣には同様規模の舌状地があり、また西隣にも同様規模の舌状地がある。なお、本遺跡の海拔高度は13~23mでなだらかな丘状の傾斜地に遺構が分布している。

2. 周辺地域の地質

八戸付近には、第2表に示したような地層群・火成岩類が分布する。

本遺跡周辺地域には、そのうち、鮮新世の斗川層（鎮西、1958）相当層、洪積世の段丘堆積物、洪積世から沖積世にかけての火山灰層群、及び沖積地堆積物が分布している。

斗川層相当層は、本遺跡をその北縁にのせる段丘群（台地）の南縁にあたる浅水川沿いの豊崎地区から正法寺・笠ノ沢付近にかけての段丘崖と、遺跡のすぐ東方に南々東方から走る東北本線に沿う谷の谷壁や鉄道・宅地造成地などの切り割りに、断続して露出している。おもに中粒~細粒の砂岩や泥岩、あるいは凝灰質あたは浮石質の粗粒砂岩で、サイシウキリガイダマシ（巻貝）ナカジマキララガイ・エゾタマキガイ（二枚貝）のほか、タマガイ（巻貝）オオノガイ・ザルガイ・サラガイ・イタヤガイ（二枚貝）に属する貝類など、多種類の貝化石を産出する。斗川層相当層は、第三紀（6500万~180万年前）鮮新世（500万~180万年前）の中頃に形成された浅海性の地層とみなされている。

第2表 地質層序表

地質年代	層		序
第四紀	沖積世	-苦小牧火山灰層-	
		-十和田a降下火山灰層-	沖積低地——泥・砂・礫など
		-十和田b降下火山灰層-	台地部—{ 黒色土 火山灰(浮石)
		-中 振 浮 石 層 -	
		-南 部 浮 石 層 -	
		-二ノ倉火山灰層-	
	洪積世	八戸火山灰層 (田面木段丘)	火山灰・浮石・浮石流凝灰岩
		高館火山灰層 長七谷地段丘堆積物	粘土質褐色火山灰(ローム)・浮石・浮石流凝灰岩・浮石質凝灰岩
		根城段丘堆積物	河成礫
		高館段丘堆積物	シルト・砂・砂礫
	天狗岱段丘堆積物	天狗岱火山灰層	粘土質褐色火山灰(ローム)・浮石
			砂鉄質砂・砂礫
第三紀	鮮新世	斗川層相当層	シルト岩・砂岩・凝灰岩・礫岩
	中新世	名久井岳安山岩類相当層	凝灰岩類・安山岩 シルト岩(頁岩)・砂岩・礫岩
先第三紀	先 第 三 系		チャート・石灰岩・粘板岩・砂岩 輝緑凝灰岩・玢岩・花崗閃綠岩

天狗岱段丘には、斗川層相当層の上に不整合に、層厚数m以上の砂礫層と砂鉄質砂層がのっていて天狗岱砂礫層と呼ばれる。この中の砂鉄質砂層は、近年まで本遺跡の南方およそ2km付近を中心に、東北砂鉄鋼業KK天狗岱鉱業所の手によってさかんに採掘(露天堀)されたが、現在は放置され、平坦な天狗岱段丘面中に、クレーター状の沼地として残されている。天狗岱砂礫層の上には、整合的に天狗岱火山灰層・高館火山灰層・八戸火山灰層などの褐色火山灰、いわゆるロームを主とする陸成の火山碎屑物層がのっている。

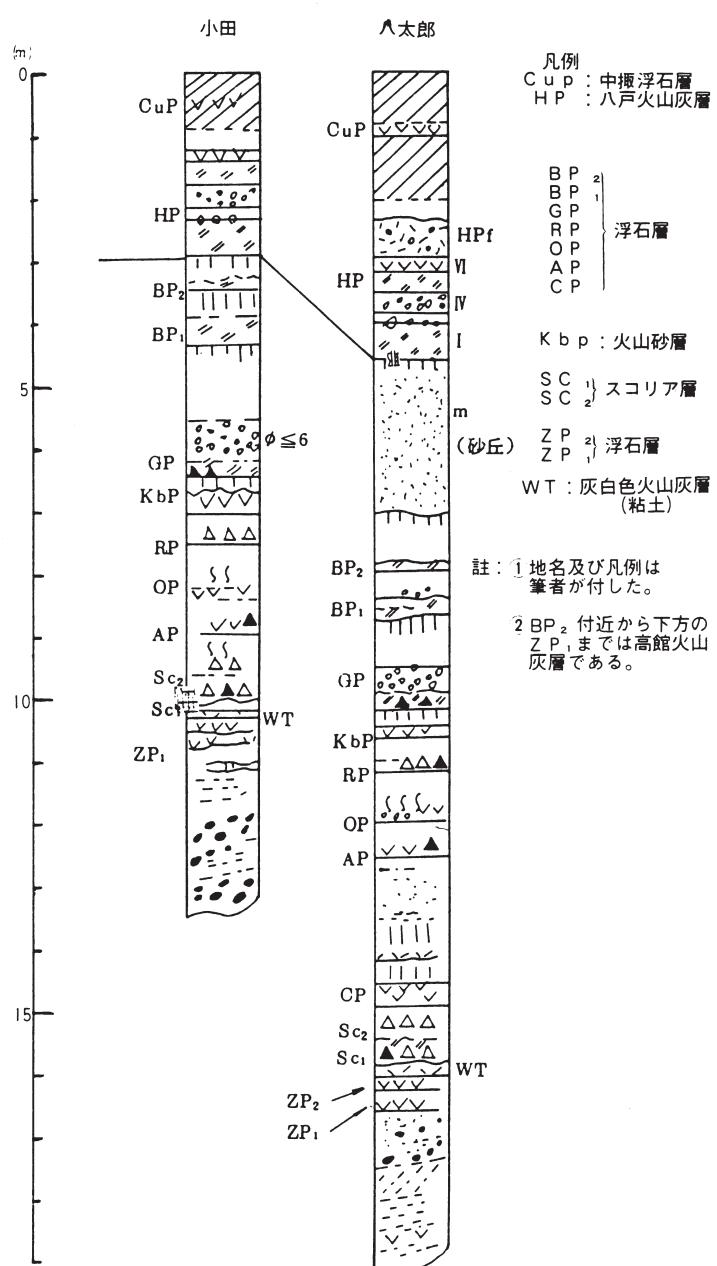
天狗岱火山灰層は、天狗岱付近でその厚さ約4m、暗赤褐色のしまった粘土質火山灰を主とし、3~4層の粘土化した浮石層をはさんでいる。

高館火山灰層は、厚さ7~10m(八戸付近)明褐色~黃褐色の粘土質火山灰を主とし、10層余りの、それぞれ特異な層相をもつ、層厚数~数十cmの粘土化した浮石層と火山砂層あるいはスコリア層をはさんでいる。大池昭二ら(1970 & 1979)は、これらに対し第5図(大池ら、1979)のように、Z P₁~B P₂の略号を与えて区別している。

高館段丘には、斗川層相当層の上に不整合に、層厚5~10mの高館段丘特有の段丘堆積物(高館砂礫層)がのっている。高館段丘堆積物は、礫質粗粒砂層や中礫を主とする砂礫層などで構成され、斜交葉理がよく発達している。なお、ところによっては塊状の中粒砂層となっている。

これら段丘堆積物の上には
一見整合的に高館火山
灰層がのっている。
(第5図)。

長七谷地段丘では、斗
川層相当層の上に不整合
に、礫層・凝灰岩層・砂
泥層などの水成堆積物が
のっているが、その厚さ
は少なくとも5m以上と
推定される。その上には、
GPを下限とし、上半に
BP₁・BP₂などの浮石層を
含む高館火山灰層上部
と、それより新しい八戸
火山灰層などがのってい
る。本地域の西方から上
北地方にかけて分布する
大不動浮石流凝灰岩は、
BP₁の直上に整合にのる
が、その中に包含される
炭化樹幹は¹⁴C法により
 25560 ± 1340 年B.P.と測
定され、またBP₁直下よ
り採集された炭化木片は
 23140 ± 1020 年B.P.とな
っている(いずれも大池
昭二、1978)ので、高館
火山灰層上部は、数万年
前からおよそ2万年前ま
での時期(旧石器時代後
期)に堆積したものであ



第5図 周辺地域の火山灰(代表的地点の柱状図)

ろう。

第3表 八戸火山灰層序表(八戸付近)

沖積地を除くすべての地形面を覆って分布する八戸火山灰層は、八戸付近で厚さ2m前後、西方に厚さを増し、南と北に薄くなる。下部は、未風化部分で灰白色、風化部で明黄褐色～淡褐色を呈する、粘土質または砂質の浮石質火山灰層と固い浮石(粒径数mm～数cm)がくずれやすい状態で密集する浮石層との互層で、大池らはこれら各層を下から～層に分け区別している

	層相	層厚(cm)	備考
VII	褐色火山灰	20～50	上部黒色土へ漸移
VI	浮石	10～30	粒径0.5～2cm程度の浮石
V	粘土質砂質火山灰	20～40	よくしまる
IV	浮石	20～40	粒径0.5～5cm程度の固い浮石
III	砂質火山灰	4～8	よくしまる
II	浮石	3～6	粒径0.5～5cm程度の固い浮石
I	粘土質砂質火山灰	30～60	中位に浮石層、その他数列の浮石列

(1970)(第3表)。上部は、褐色火山灰(ローム)層で、ふつう20～50cm、ところによって80cm程度の厚さである。なお、上北地方から八戸市・三戸郡下の、東北本線の西側に分布し、十和田湖方向にむけて厚さを増す八戸浮石流凝灰岩は、八戸火山灰層中の層の直上にのるが、この中に含まれる炭化樹幹について、¹⁴C法により12700±260年B.P.(大池昭二、1964)の測定例があり、また八戸火山灰層直下の埋没直立樹幹について13770±510年B.P.(大池昭二、1977a)同じく炭化木片について13960±510年B.P.(大池ら、1977b)の測定値が得られているので、八戸火山灰層のうち少なくも～層は13000年前(旧石器時代末葉)前後の火山活動により降下したものであろう。

八戸火山灰層上部の褐色火山灰層は、地表にむけてしだいに腐植土化し黒色土類に漸移する。八戸付近における黒色土層の厚さはふつう數十cmであるが、ところによって2mをこすところもある。黒色土中には、下から南部浮石層・中摺浮石層・十和田b降下火山灰層・十和田a降下火山灰層などの火山噴出物がはさまれる。このうち、和野前山周辺地域には南部浮石層は分布していない。ただ、中摺浮石層より下の黒色土層中には、粒径0.5～1cm、ときに2cm程度の黃橙色・灰白色を呈する浮石が、ところにより密に、ところによりまばらに散在していてもしかすれば南部浮石層をつくる浮石の降下時に、主分布地域の外側に同時に降下したものかもしれない。

中摺浮石層(大池ら・1966)は、アワズナと呼ばれ、上北地方から岩手県北部一帯の脊梁山脈より東側の地域に広く分布し、十和田湖直近地域を除けば、細礫・粗粒砂もしくは中粒砂程度の浮石粒が密集した、黄色～黃橙色の浮石砂層である。層厚は、十和田湖直近地域を除いて10～50cm程度で、東方で薄くなり、またちぎれて塊状に黒色土中に断続するようになる。¹⁴C年代による測定は、中摺浮石層そのものについての測定例はないが、直下の腐植土について4200±110年B.P.(八甲田湿原グループ・1969b)、あるいは6550±170年B.P.(松井ら・1969c)が

あり、また、三戸町泉山遺跡の土壤内に埋められた中撒浮石とみられる堆積土について 4440 ± 140 年B.P.(青森県教委・1976)さらに、中撒浮石層直上の土層について 3920 ± 140 年B.P.(松井ら・1969c)などの例があることから、最近までは、およそ4000年前(繩文時代中期後半~末葉)の火山活動によるものと考えられてきた。しかし、ここ数年の間に、岩手県二戸市上里遺跡を含むいくつかの遺跡で、繩文時代前期の円筒下層d式土器を伴なう遺構によって中撒浮石層が切られている疑いのきわめて濃い場所や、少なくとも中期後半よりは前の時期の降下を示すような場所が発見されてきた。さらに昨年(1983)には、明瞭に中撒浮石層の上に円筒下層d式土器や円筒上層a式土器の乗っている場所が、十和田市明戸遺跡で発見されている(十和田市教育委員会)。以上の事実を総合すれば、従来中撒浮石層と同定してきた地層が、一連のものである限り、その降下時期は繩文時代前期末葉よりもっと前の時期にさかのぼることは確実と考えてよい。

八戸市付近の台地の黒色土層は、中撒浮石層の下限を境界として2分することができる。下位の黒色土層は、一般に粘性が大きくかなり粘土質で、新鮮な滑らかな断面は石けん状の光沢をもっている。色調は、下位の八戸火山灰層中の褐色火山灰層の直上では、褐色火山灰に近い暗褐色(標準土色表による。以下同じ)を呈し、上方にむけて次第に暗色の度合いを増し、中撒浮石層直下で黒褐色を呈する。なお、南部浮石層が介在する地域では、南部浮石層直下はところにより黒褐色である。中撒浮石層より下方の黒色土層中には、前述のように黄橙色~灰白色の浮石が散在し、ところどころで散在の密度を増している。

中撒浮石層より上位の黒色土層は、中撒浮石層直上では中撒浮石層の浮石砂が密に含まれるため、黄色がかかった砂質の暗褐色土であるが、上方にむけて混入する浮石砂の密度が小さくなるにつれて黒味を増し、黒褐色~黒色(乾燥部では灰黒色)を呈する。これらの部分は、中撒浮石層より下位の部分に比べて粘性が小さいが、黒味の強い部分はやや粘性が大きく、また、数mm程度の粒径をもつ固い白色浮石が散在している。

十和田b降下火山灰層は、新郷村ニノ倉ダム付近では上下2層で構成され、下部は厚さ数cmの灰白色浮石層、上部は厚さ10cm余りのよくしまった青灰色砂質火山灰層(通称青バン)である。このうち、砂質火山灰層は、十和田湖中ノ湖付近を西限とし20km以内に分布が限られる。灰白色浮石層は、十和田湖中ノ湖付近を西限とし、十和田湖中渡~五戸町中心部~福地村法師岡~南郷村島守中心部~岩手県軽米町小軽米~同町大清水~同県二戸市米沢~同市下斗米牛間館~田子町野面~同猿ヶ平付近を順次結んだ長楕円状の地域内に、十和田湖に近いほど連続的に、離れたところほど断片的に分布する。しかし、以上の範囲外の地域でも、その周縁部では地表直下の黒色土中に、固い白色浮石の密集(例えば、八戸市鶴窪遺跡)する部分や散在する部分があって、十和田b降下火山灰層中の浮石部の周縁相と考えられ、本遺跡にも同様のものが存在する。新郷村咽畠遺跡・三戸町泉山遺跡では、十和田b降下火山灰層浮石部直下に繩文

第4表 十和田火山完新世火山灰編年表(大池昭二:1978)

編	年	火 山 灰	^{14}C 年 代 ・ 遺 跡
B.P.			
1,000年	土師器時代	毛馬内浮石流 十和田-a	1280±90 (平山ら、1966) くるみ館遺跡-平安中~末期 堀野遺跡-A.D.810 (草間、1965)
2,000	(弥 生)	十和田-b	1180±80 (大池ら、1974) 2200±100 (大池ら、1974) 泉山遺跡II層-大洞A'式
3,000	繩文時代		{ 五戸町西張遭跡-十腰内1式 大湯ストンサークル-3680±130 (渡辺、1966)
4,000			3920±140 (松井ら、1969)
5,000		中 振 浮 石	泉山遺跡III層-4440±140 青森県教委、1976)
6,000			泉山遺跡III層下部-円筒上層d式 4200±110 (八甲田湿原研究グループ、1969) 6550±170 (松井ら、1969)
7,000			三戸町境ノ沢遺跡
8,000			{ 類家自然貝塚 5280±100 (大池ら、1972) 日ヶ久保貝塚 5850±105 (大池ら、1972) 類家貝塚、長七谷地貝塚
9,000			三戸町館遺跡
10,000	先繩文時代 (晚期旧石器時代)	南部 浮 石	8600±250 (大池ら、1970) 三戸町寺ノ沢遺跡-田戸下層式
13,000		二ノ倉火山灰	三戸町赤坂遺跡 ? ● 階上村角柄折遺跡-無文土器
		八戸 浮 石 流 八戸降下浮石層	12,700±260 (大池、1964) 埋没林-13,770±510 (大池ら、1977) 長者久保遺跡

第5表 黒色土層層序表

年代	記号	土層	火山噴出物	備考
歴史時代	I	暗褐色土層		耕作土・その他の表土
	II	灰黑色土層	十和田a火山灰層	固い白色浮石粒が散らばる。
			十和田b火山灰層	
繩文時代	晩期	暗褐色土層		黒色土層の下半は中振浮石への漸移部で暗黄褐色。
	後期			
	中期			
前中期	IV	粘土質黒褐色土層 粘土質暗褐色土層 粘土質浮石質暗褐色土層	中振浮石層	上部から下部への土層の特徴変化は特定の年代ごとの変化を意味しない。
	早期	粘土質黒褐色～暗褐色土層	南部浮石層	南部浮石の直上に浮石がちらばる。
			二ノ倉火山灰層	
中・旧石器時代	V	褐色火山灰層	八戸火山灰層	
		泥・砂・礫層	高館火山灰層	
		基盤岩の風化土層	天狗岱火山灰層	

時代晩期のすべての型式の土器が存在する一方、直上部以上の土層中には土師器などの遺物が各地で発見されている。しかし、筆者の知る限りでは、十和田b降下火山灰層と続繩文時代（弥生時代）の遺物・遺構との関係が確認された例はない。¹⁴C法による絶対年代の測定では、2000年前頃の値を示す例がいくつもある。上位の十和田a降下火山灰層との間の腐植土の特徴などをも含めて考えると、その降下年代を続繩文時代（弥生時代）初頭とするのが、今のところもっとも適当のようである。

十和田a降下火山灰層は、新郷村二ノ倉ダム付近で10cm程度の厚さの灰白色～淡灰黄色の細粒火山灰で、十和田湖より離れるにつれ薄くなり、またシルト～粘土質となる。大池昭二（1972）によれば、岩手県堀野遺跡の住居跡覆土中に発見された火山灰層や、秋田県くるみ館遺跡を覆うシラス（洪水流堆積物）がこれに相当することから、その降下時期は平安時代中期～末期であるという。本層の分布は確認された範囲に限ってみても、北は青森市から南は八幡平付近まで及んでおり、一部に宮城県北にも存在するという見方がある。本遺跡では、本層は見当らなかったが、周辺地域では、遺跡の遺構や小規模な埋没凹地の覆土中に点在している。

以上、述べてきた高館火山灰層のほとんどと、八戸火山灰層以降のすべてが、十和田火山に由来するものであるが、そのほかに、十和田a降下火山灰層より上位に、起源を異にする降下火山灰層が県内の各地に点在しているが、本遺跡では見当らなかった。これについては、本報

告書では説明を省略する。

遺跡周辺の沖積低地については、詳細な資料を得られなかつたので詳述できないが、八戸市の新井田川と馬淵川とにはさまれた両川の河口付近での沖積層の厚さは、100～120m程度のようである。東方の長七谷地貝塚の南西に接する小谷でのハンドオーガーによるボーリング結果をみると、沖積面より2～3mの深さまでは、湿地性植物（ほとんどヨシ）の腐植を無数に含む粘土質の運積土で、その下、がおもに砂層あるいは泥層となっている。新井田川の河口に近い左岸の沖積地では、標高2mの沖積面下の1m程度までに、上記と同様の腐植に富む運積土層があり、それより下方の少なくも5mは、海成の泥質砂層となつていて、沖積面下5mほどの部分に貝化石層（類家貝層）が50cmほどの厚さで拡がっている。貝化石層に含まれる貝類のほとんどはマガキで、これの¹⁴C年代測定値は、5280±100年B.P.（大池ら・1972）となっている。これらを総合してみると、八戸付近の河川の河口に近い沖積地の大部分は、沖積面下1～3m程度の運積腐植土層を除いて、海成の砂層・泥層を主としているように推定される。

3. 遺跡の層序

実際に発掘された部分の層序は、大まかに下から、高館火山灰層上限部・八戸火山灰層・黒色土（腐植土）層の3群に分けられる。発掘に当っては、これらを13層に細分し、下から上へ順に～層とした。

層は、高館火山灰層の上限部に相当する褐色火山灰（ローム）層である。

～層は、（2）地質の項の本文と第3表に示した八戸火山灰層下部に相当する部分で、八戸火山灰層の区分に従えば 層は 層に、 層は 層に、 層は 層に、 層は 層に、 層は 層に相当する。

層は、粒径3cm前後のものを主とする黄褐色浮石が多量に含まれる黄褐色土層で、八戸火山灰層の区分の 層に相当する浮石層の風化土である。

層は、粒径2～5cm程度の黄褐色浮石が多く混った暗褐色土層である。ち密で、上位の層より一層よくひきしまって堅く、粘着力（粘性）と湿性に富む。下位の 層と上位の 層の中間的特徴を示す漸移層である。

層は、部分的な特徴の変化から、 c層・ b層・ a層の3つに区分できる。 c層は 層の主体となっている。いわば標準的な土層である。黒褐色で、粒径2～5cmの黄褐色浮石が多量に混り、粘性と湿性に富んで、しまって堅い粘土質の土層である。 b層は c層に比べ全体に明るい色調のしまりのない暗黄褐色土層である。 a層は c層に比べやや明るい色調をもつ暗褐色土層で、しまりがあり、 c層と同様の浮石が混っている。

以上に述べた の両層は、中摺浮石の降下以前に形成された腐植土で、それらに混る浮

石は 層に由来するものと考えられる。

層は、さらさらした感じの砂質の暗黄褐色土層であるが、ところどころで一層砂質の明黄褐色土に変化する。砂質で黄色気味の特徴をもつのは、砂粒大の黄色浮石粒が密に含まれているため、これら砂粒大の浮石は中摺浮石層に由来するものである。したがって本層は中摺浮石降下後に形成された土層である。なお、Kライン30~32のグリッドでは、 層に相当する部位に、 層よりやや暗い色調の土層があって、これを '層とした。 層と '層の上下関係は確認できなかった。

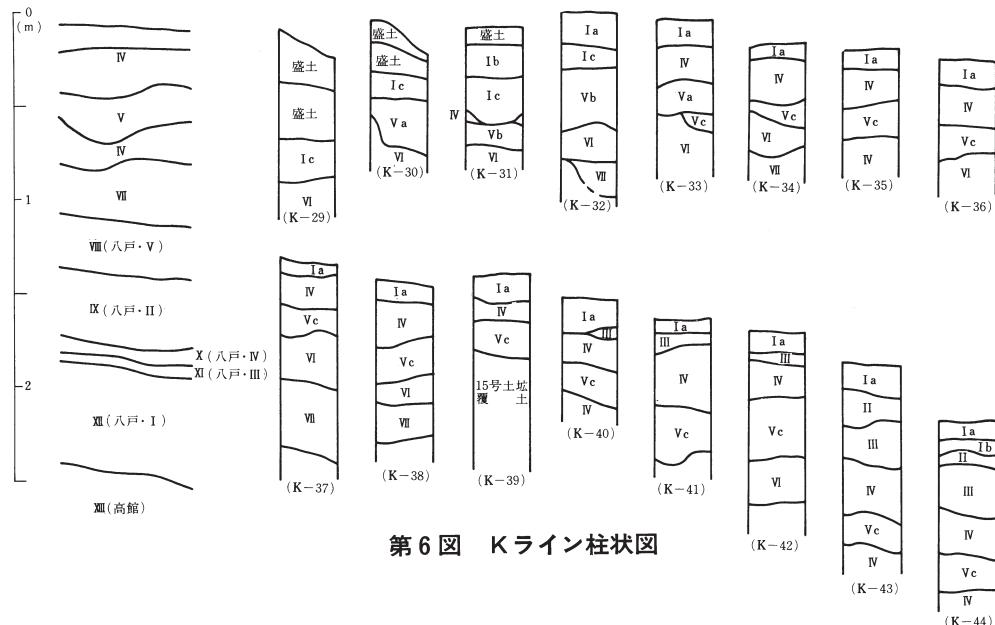
層は、粘性に乏しく、また湿性に乏しいため乾燥しやすい黒色土層で、良くしまり、粒径5~10mmの固い白色浮石が多量に含まれている。この白色浮石は、十和田b降下火山灰層の浮石部に相当するものである。

層は、粘性・湿性に乏しい暗褐色土層で、黄褐色浮石と 層中に含まれるような白色浮石が含まれている。Kラインに沿うグリッドでは、40ラインより北側のグリッドに分布し、Kライン上のその他のグリッドではほとんど確認できなかった。

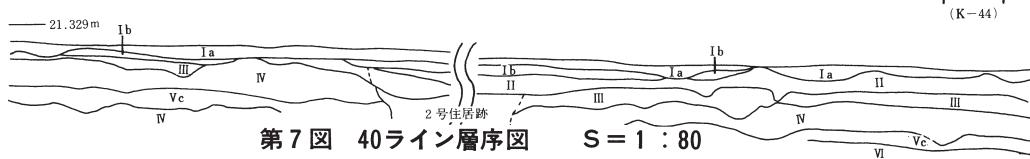
層は、茶褐色の耕作土で、 a・ b・ cの3層に区分した。このうち、 c層には炭化物が含まれている。

以上の土層区分の標準としたグリッドは、深堀りした40ライン（東西方向）とKラインの37グリッドである。

（松山 力）



第6図 Kライン柱状図



第7図 40ライン層序図

S = 1 : 80

第 章 繩文時代の遺構と遺物

第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

1. 検出遺構

繩文時代の竪穴住居跡と考えられるものを5軒検出した。また、土壙17基と特に掘り込みをもたない焼土遺構を3基検出した。

なお、遺物の密集度にかなりの差がみられ、当初、竪穴住居跡をはじめとする各種遺構は、遺物の密集部直下に存在するものと想定された。しかし、予想に反し、遺構は遺物分布の疎な部分に検出され、削平された35部分を除き、遺物包含層である第層除去後の第層の中位で、しかも染みのようなおぼろげな状態でしか確認し得ないものが多かった。

第5号竪穴住居跡（第8～11図）

<位置> F-35グリッドを中心として、その周辺のグリッドにかかる。

<覆土> 4層に区分できた。全体的に5mm～2cm大の浮石粒を多量に含む。1・2層が特に多く含み、3層は少ない。4層は、浮石の含有状態は3層に類似するが、黄褐色土を多く混じえる。

<形状> 長軸7m、短軸5m70cmの楕円形と推定される。北東コーナーは4・5号溝状ピットによって切られている。

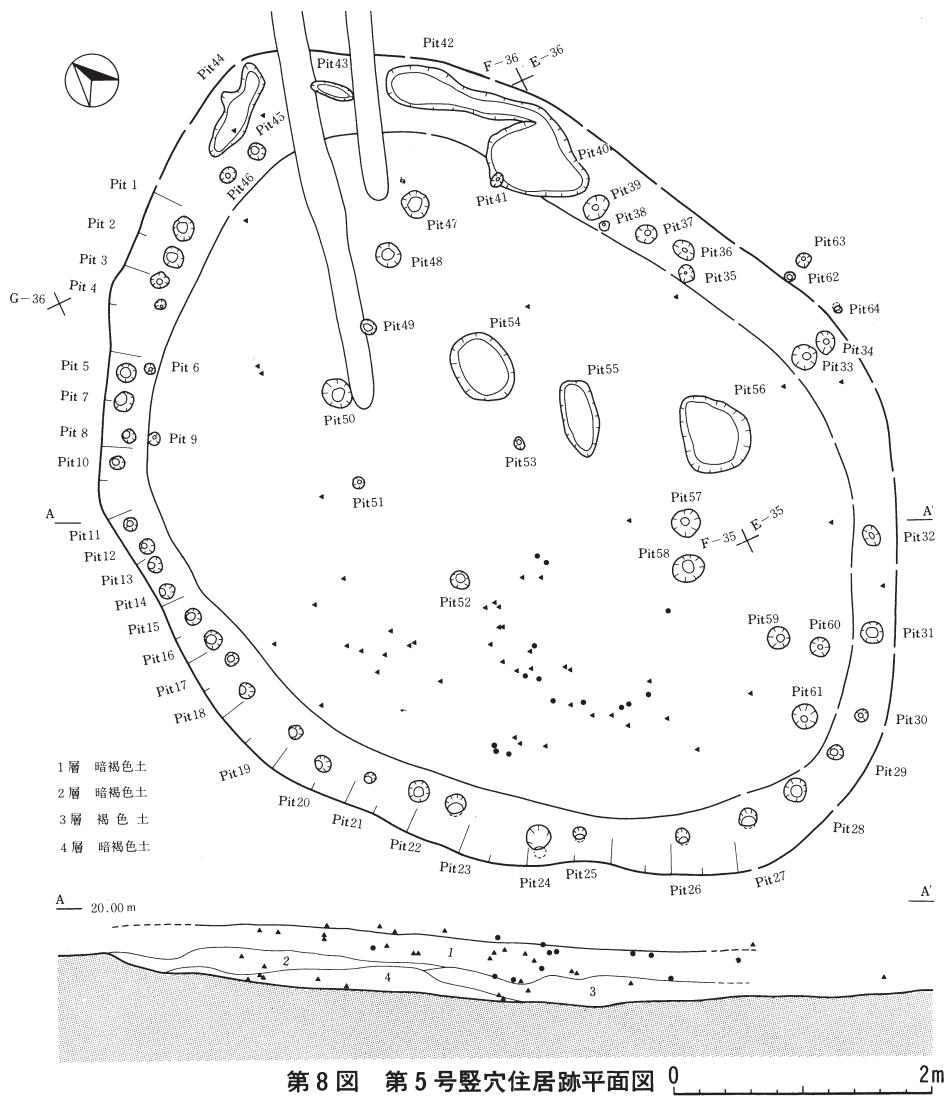
<壁> 地形が西から東へ傾斜しているため、西側で20～30cmの壁高がみられたが、東壁・南壁等は確認できず、柱穴の配列によって推察した。壁は緩やかな角度で立ち上がる。

<床面> 若干すり鉢状に凹む。中央部分は、八戸火山灰層のであるため非常にかたい。

<柱穴> Pitの類は、住居外かと思えるもの3個を除き61個。うち柱穴と考えられるのは55

第5表 第5号住居跡ピット一覧表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形							
大きさ	12×10	10	7	6	16	8	17	11	10	11	12	13	13	12	13	15	10	12	11	13	9	16
深さcm	13	12	13	10	9	10	12	10	7	8	12	15	25	26	15	25	15	15	20	16	17	19
備考							斜	斜		斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜
No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44
平面形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	楕円形	不規形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	不規形
大きさ	15	18	10	11	15	19	13	10	17	18×12	20	19×15	14×11	19×12	16	8	23×17	45×35	12×8	80×20	22×7	78×23
深さcm	17	18	15	16	23	33	11	27	15	12	61	42	7	8	23	8	20	8	10	3～8	9	11
備考	斜	斜	斜	斜	斜																	
No.	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64		
平面形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形		
大きさ	9	8	13	12	8	15	6	13	5	35×28	38×17	37×33	15	16×13	11	10	12	8	12	6		
深さcm	7	8	5	18	13	35	20	46	7	10	9	10	38	45	24	26	30	12	6	11		
備考																						

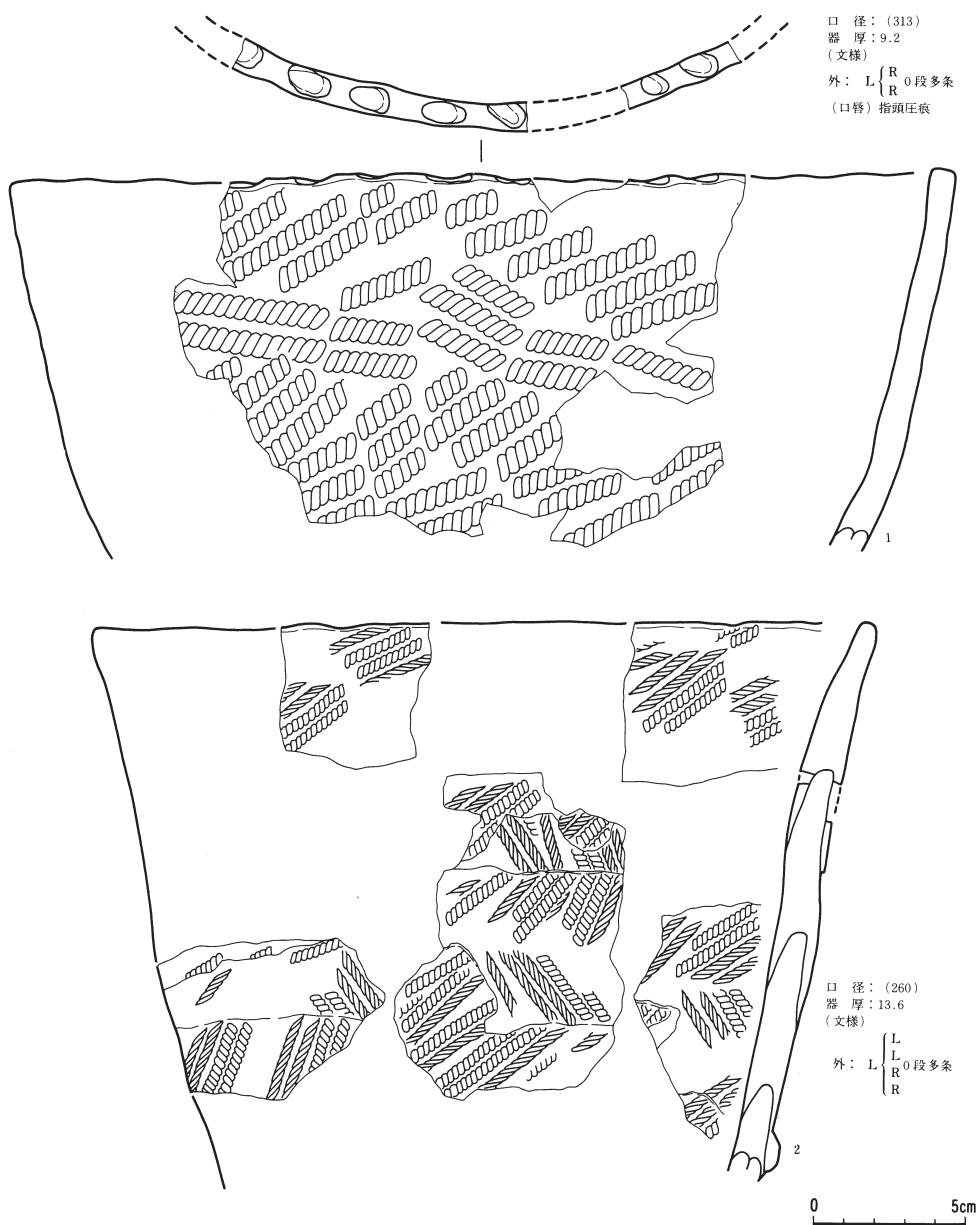


第8図 第5号竪穴住居跡平面図 0 2m

個である。西側の壁の明瞭な部分では、径が10~20cm、深さ約20cmの柱穴が緩やかに立ち上がる壁のほぼ中央部に並ぶ。この壁柱穴は斜めのものが多い。プラン内にも10個の柱穴が見られるが、相互の関係は不明。また東側に深さが8cm前後の浅い皿状のピットが4個ほどみられる。

<出土遺物> 土器、フレーク、礫等南西部分に多く分布し、その他の部分では非常に少ない。

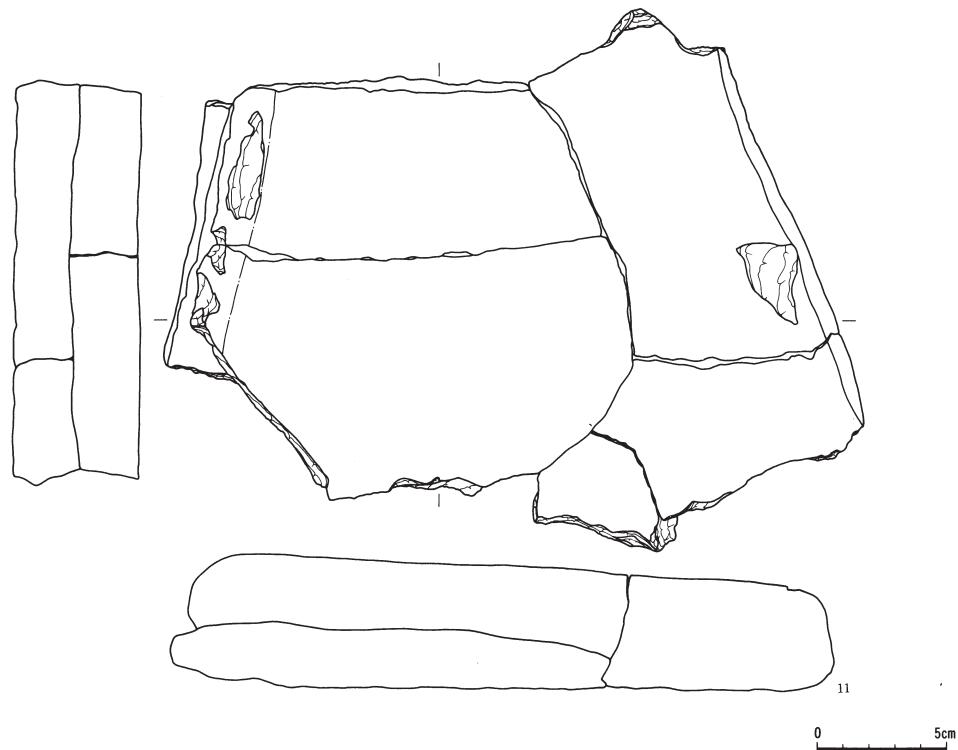
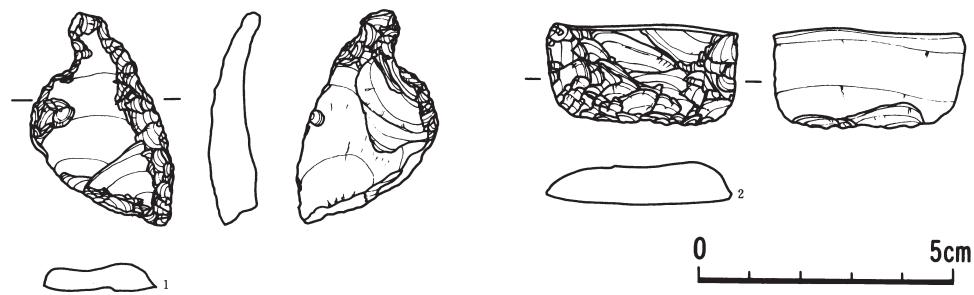
土器（第9図） 2個体出土した。1は、O段多条LRを横位・斜位に施文し、不規則な羽状を構成している。また、口唇部には指頭圧痕を施文している。2は、粘土帯の接合と縄文の施文順序等を知り得る好資料である。これについては、第6群における「土器製作」の項で述べる。



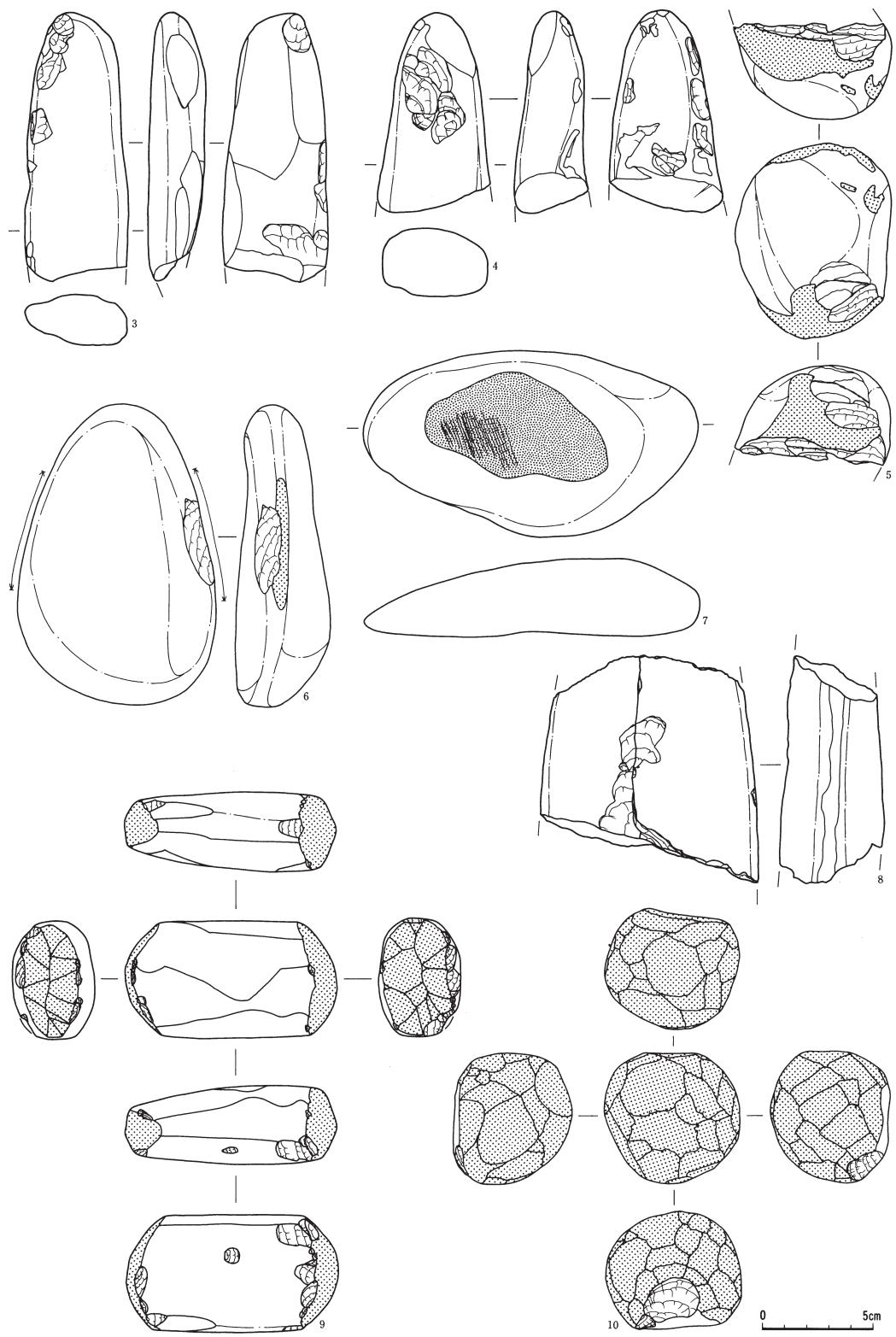
石器（第10～11図）　剥片石器は、小形の縦長石匙（1）と削器（2）が各1点出土した。石匙は焼け弾けを生じている。削器は、末端が強いヒンジをなす剥片を折断（？）し、折断部分と左側縁に約45°、また右側縁に約60°の分厚い調整を施している。他にフレークが1点ある。礫石器の類としては、器体制作時の剥離を残す磨製石斧の破損品が2点（3・4）、敲磨器類が2点（6・8）、同類が3点（5・9・10）、同類が1点（7）、同類が1点（11）

の計11点出土した。8は、第13号土壙内出土品との接合資料である。9は、磨製石斧を転用したもので、機能面は表裏に分かれ、棱をなしている。4は、凹凸の著しい機能面中に浅い線条痕をもつ。石皿は、本住居跡内から出土したものは、小破片が1点でしかなく、他の6片は、E - 33、F - 34、G - 34、F - 40、K - 42の各グリッドから出土し、接合したものである。

このほか、安山岩や砂岩等の自然礫が5点出土したが、うち3点が焼けている。



第10図 第5号竪穴住居跡出土遺物(2)



第11図 第5号竪穴住居跡出土遺物(3)

第6号竪穴住居跡(第12~14図)

<位置> D - 33グリッドで検出したが、道路にかかる部分は調査し得なかった。

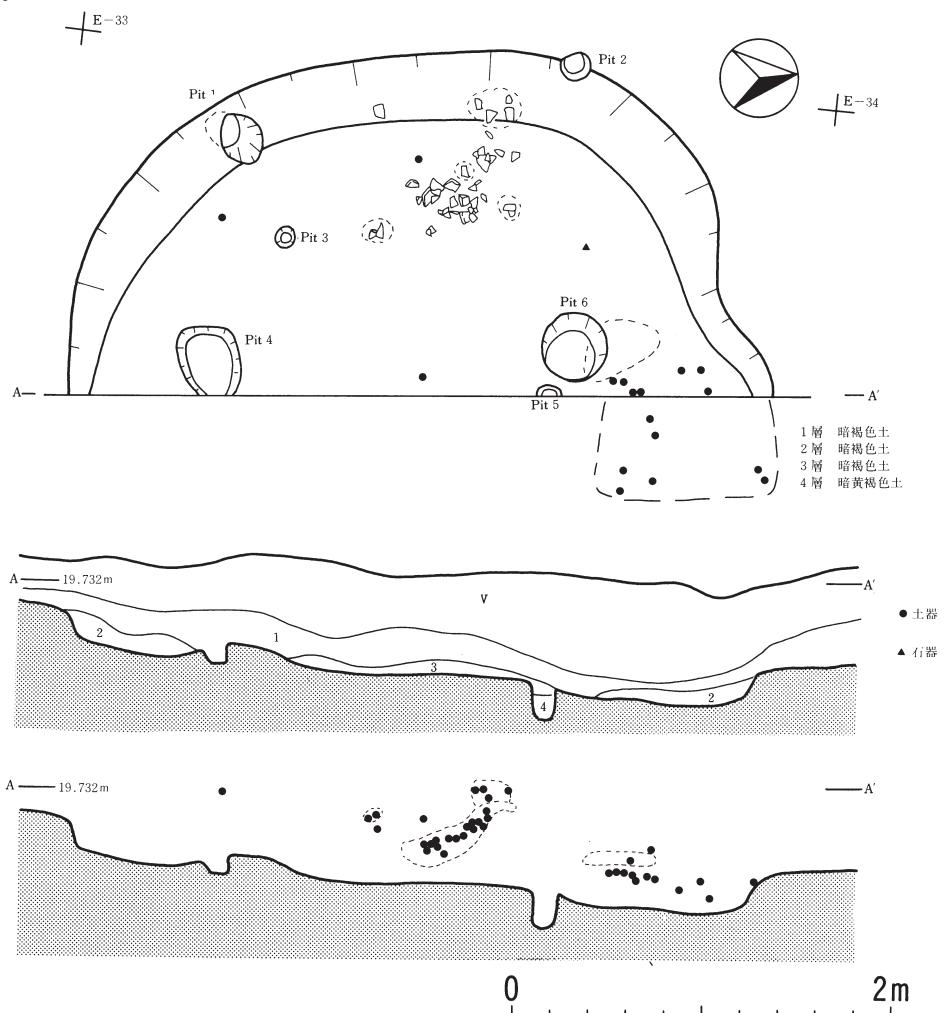
<覆土> 標準土層の第1層下を3層に区分した。1・2層は第1層に類似するが、色調により分けた。3層は2~3mm大の浮石層を多く含み、かたい。4層は柱穴内にのみみられたもので、砂粒・浮石粒・暗褐色土を混じ、かたく締まる。

<形状> 直径3m60cmのほぼ円形と思われる。

<壁> 壁高は20cm前後で、垂直に近い状態で立ち上がる。

<床面> 一部では断面図にみられるように凹凸をなす部分もあるが、全体的には平坦である。床面はやわらかい。

<柱穴> ピットが壁中に2個、内部に4個検出されたが、柱穴用のものであるかは断定し得ない。



第12図 第6号竪穴住居跡平面図

第6表 第6号住居跡ピット一覧表

No.	1	2	3	4	5	6
平面形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形
大きさcm	25×21	12	11	40×33	14	34×26
深さcm	20	15	17	16	20	31.9
備考	斜					やや斜

<出土遺物>（第13・14図） 住居内の西側と北側に土器がまとまって出土したが、部分的にしか復原し得なかった。床面上のものはない。すべて第6群土器（早稻田5類）である。11個体あり、他の住居跡に比べて非常に多い。第14図14には繩文施文時についたと思われる爪形が残されている。石器は、若干の打ち欠きをもつもの（礫器？）が1点である。他に小自然礫が38点出土したが、このうち22点が焼けている。焼石は安山岩とチャートが各9点、凝灰岩その他が4点である。

第7号竪穴住居跡（第15図）

<位置> F-42グリッドで検出したが、道路にかかる部分は調査し得なかった。

<覆土> 標準土層の第層下を4層に区分した。1層は第層と余り変わらないが、やや色調が明るく、かたい。この1層は、住居跡の内外を覆っており、この中で壁の立ち上がりの延長を確認することができなかった。2層は2～5mm大の浮石粒を多く含み、3層はローム粒を多く含む。また、4層は炭化物を少量含む。

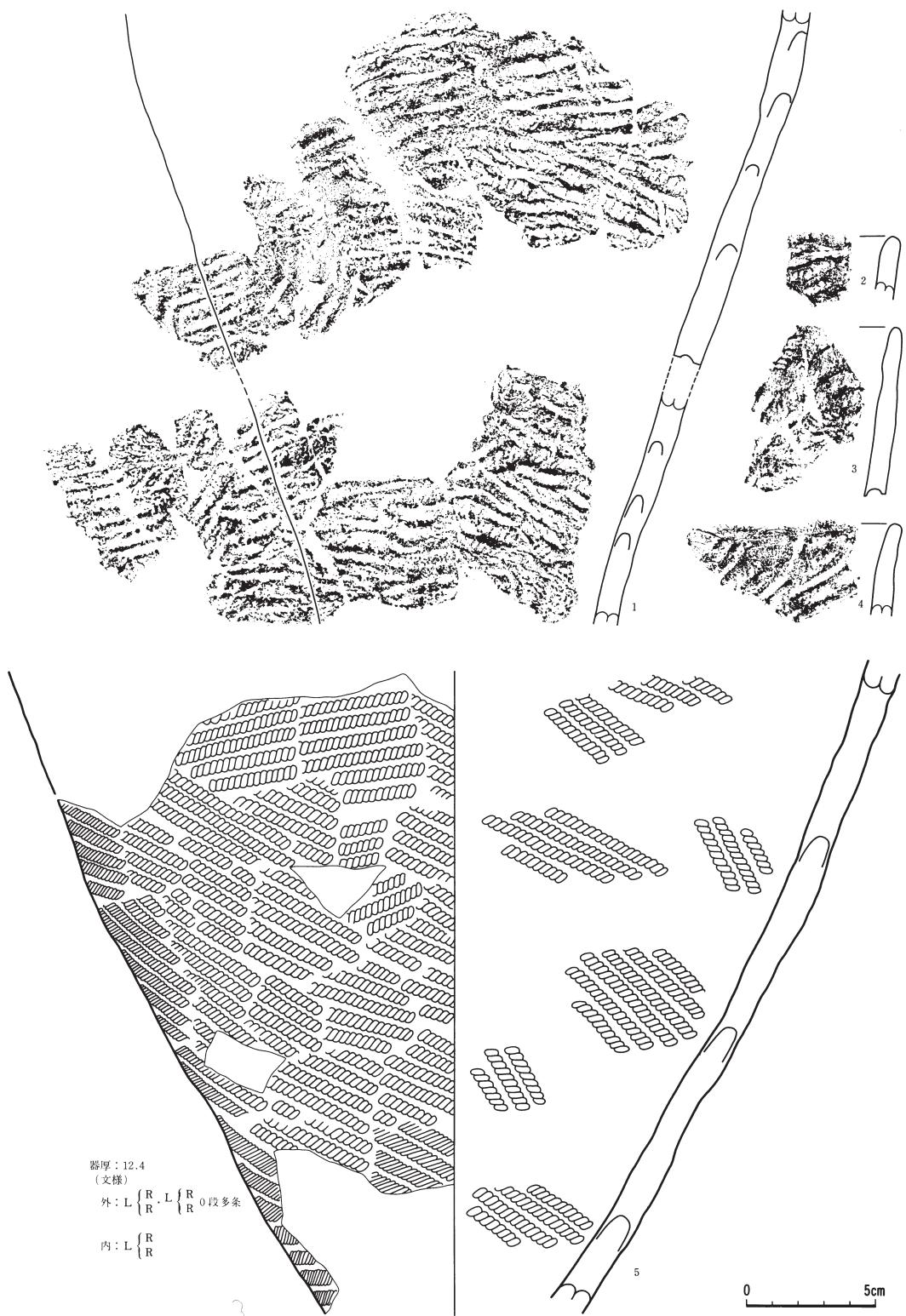
<形状> ややゆがむが、直径3m50cmのほぼ円形と思われる。南壁の一部は第3号土壙により切られている。

<壁> 8～10cmと低く、緩やかな立ち上がりを示している。

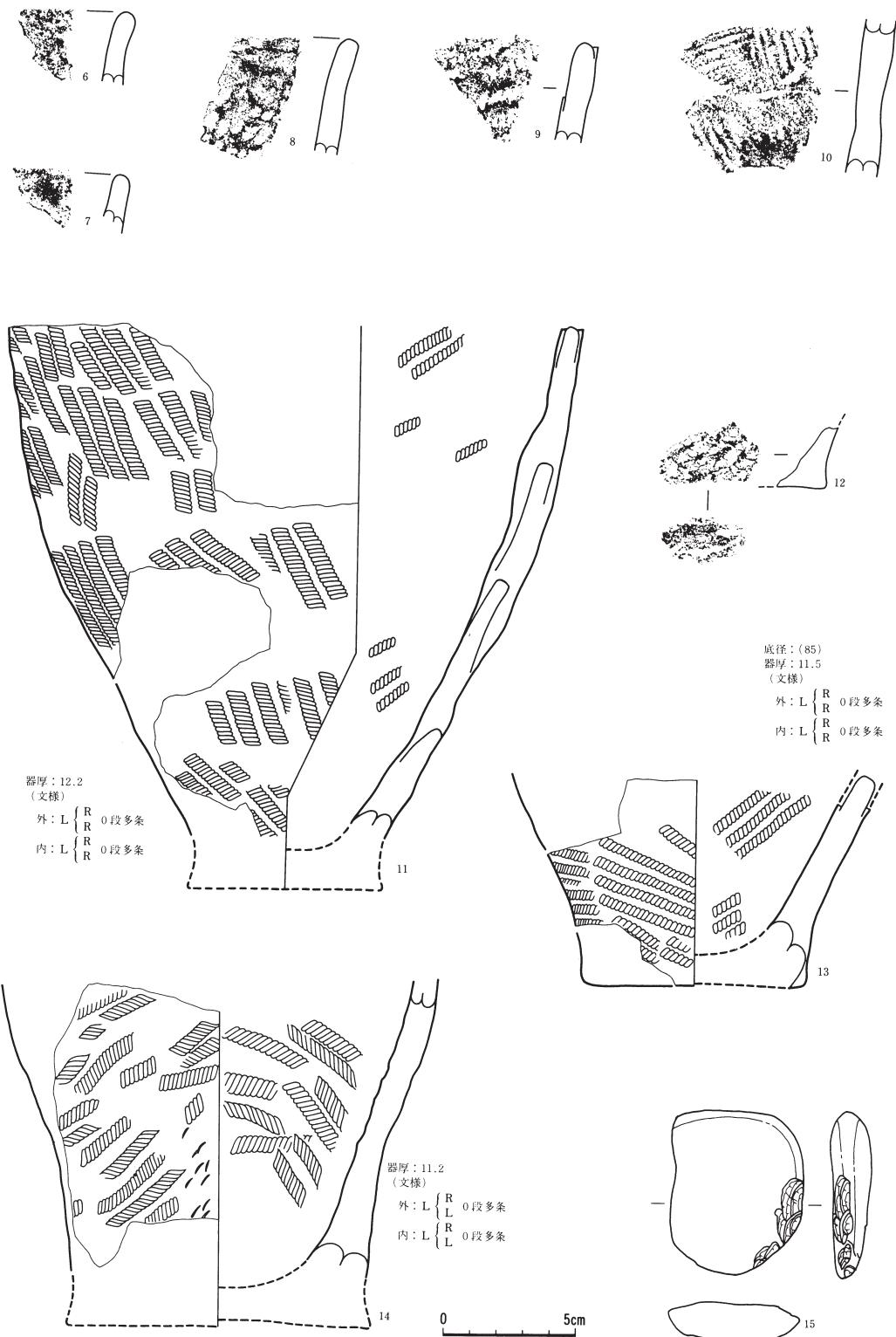
<柱穴> 柱穴・ピットの類は全く検出されなかった。

<床面> ほぼ平坦である。かたく締った部分はなく、全体的にやわらかい。

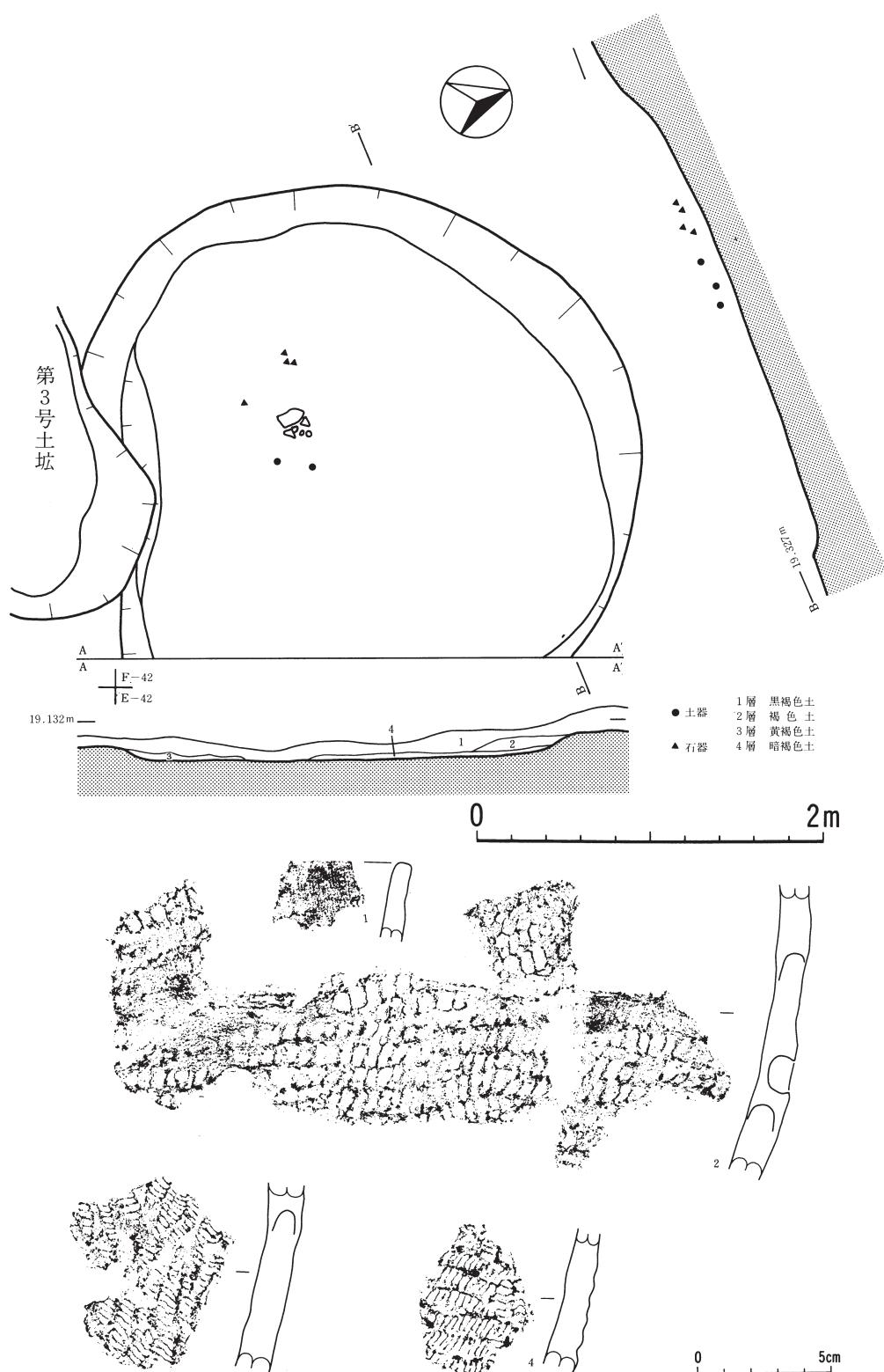
<出土遺物> 中央部やや南側で、若干の土器と自然礫が出土した。土器は3個体で、第6群土器（早稻田5類）である。



第13図 第6号竪穴住居跡出土遺物(1)



第14図 第6号竪穴住居跡出土遺物(2)



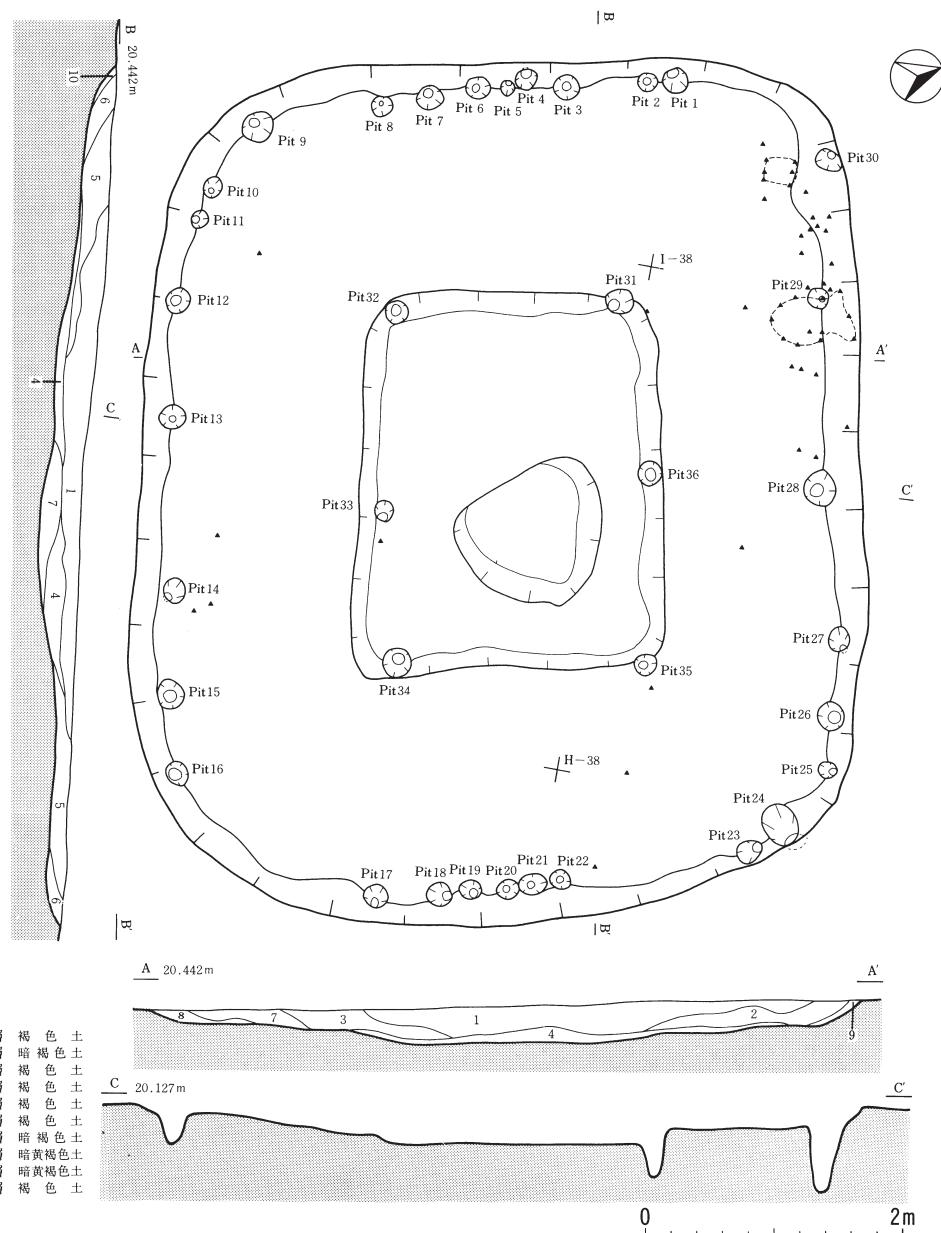
第15図 第7号竪穴住居跡平面図および出土遺物

第8号竪穴住居跡（第16・17図）

<位置> H-37・38グリッドを中心として、周辺のグリッドにかかる。

<覆土> 一応10層に細分できたが、大きな変化はなく、色調や浮石の含有状況等によって区分した。7層は浮石粒を最も多く含み、10層は壁崩壊土と黒色土の混合したものである。

<形状> 東西6m70cm、南北5m40cmの隅丸方形である。



第16図 第8号竪穴住居跡平面図

<壁> 地形が西から東へ緩やかに傾斜しているため、確認し得た壁高も、西壁20~15、北壁20~10、東壁10~5、南壁10~5cmと、全般に西側が高く東側が低い。

<柱穴> 壁と床面の接する部分に30個の壁柱穴が並ぶ。径・深さとも20cm内外のものが多く、やや斜めに掘られている。柱穴は、70cmから1m強の間隔を置くが、西壁と東壁では対応するように柱穴の間隔が狭い。

第7表 第8号住居跡ピット一覧表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	
大きさ	20	16	20	17	11	19	21	12	24	17	13	18	20	21×17	24	20	19	20	18	17	22×17	22
深さ cm	31	43	15	28	10	19	19	22	22	8	8	25	22	24	30	25	29	41	28	46	47	22
備考	斜		斜	斜		斜	斜	斜		斜		斜		斜	斜	斜	斜				斜	
No.	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36								
平面形	円形	楕円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形							●
大きさ	20	35×27	15	28	19	28×24	17	22×15	20	18	16	22	22	19								
深さ cm	20	25	20	22	23	40	14	22	46	29	16	56	37	25								
備考	斜	斜	斜	斜	斜		斜															

<床面> 各壁際と東壁付近を除き、敲き締めたように非常にかたい。また、全体的に東側に緩やかに傾斜する。

住居内のほぼ中央に、東西2m90cm、南北2m30cm、深さ10~3cmの方形の浅い掘り込みがあり、この掘り込みの各コーナー、および南・北壁のほぼ中間部に、他の壁柱穴より深い柱穴が各1個ずつ計6個配されている。掘り込みはほぼ垂直である。更に、やや東側に寄った場所には、径がほぼ1m、深さ5cmの掘り込みがあるが、底面は、掘り込みの深い東側が比較的やわらかい。焼土はみられない。

<出土遺物> 北壁の西側部分で、壁中間部から床面にかけて、黒曜石、頁岩のフレーク・チップの集中部が2か所みられた。土器は、全く出土しなかった。

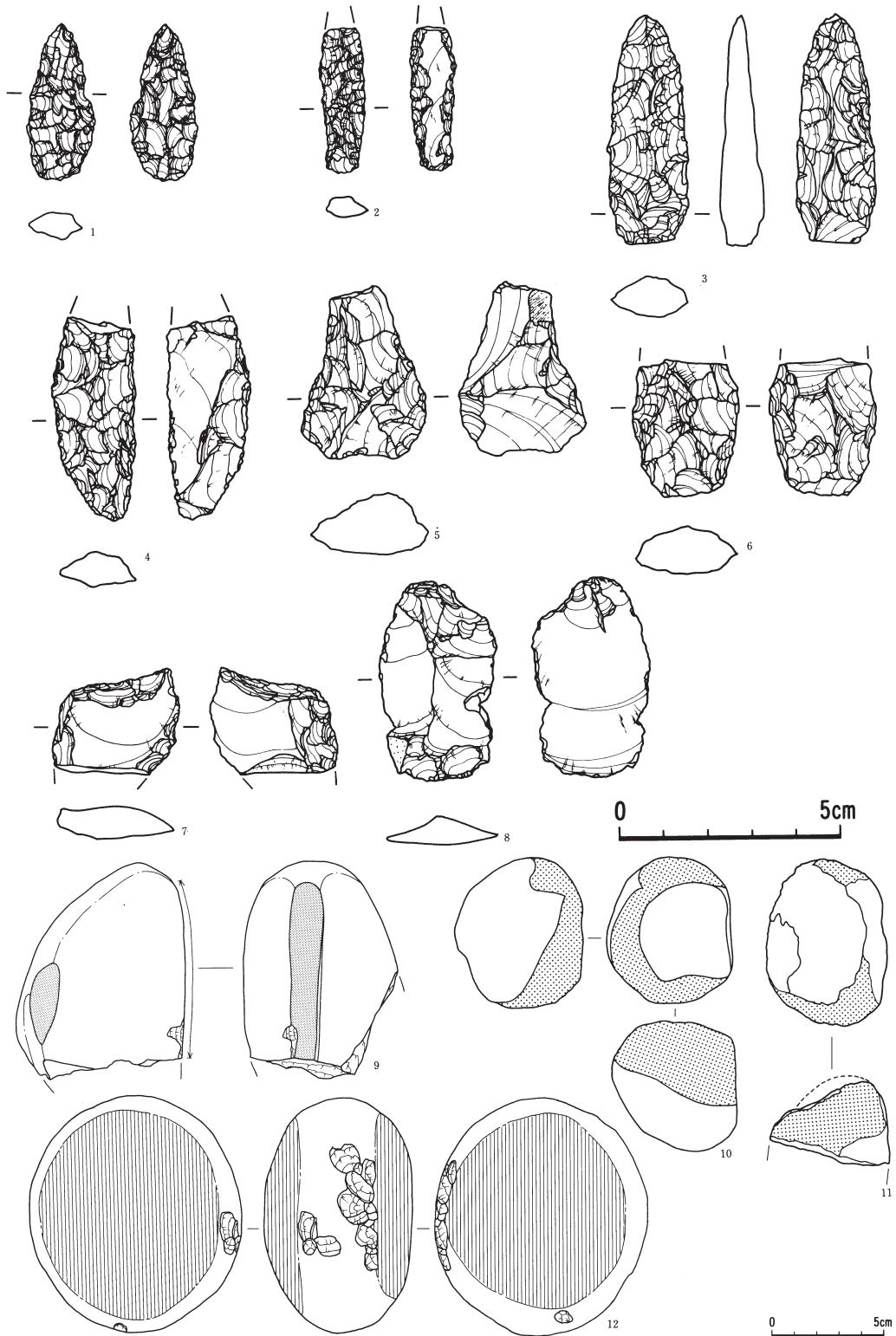
剥片石器は、石鏃3点(1・2)、石槍2点(3・6)、石匙(4)、不定形石器が3点(5・7)出土している。1は、尖頭部方向からの3条の細長い剥離がみられ、また、両側面は分厚く、やや磨滅している。石鏃とするよりは石錐の可能性が強い。5と6は黒曜石製で、前述のフレーク・チップと同一母岩であるため、本住居跡内で製作されたものであろう。

礫器の類は、敲磨器類が1点(9)、敲磨器類が4点(10・11)、敲磨器類が1点(12)出土した。12の側縁に、敲きによって生じた小剥離がみられる。

第9号竪穴住居跡(第18~22図)

<位置> H・I-39グリッドを中心にして、その周辺のグリッドにかかる。

<覆土> 全体的に5~10mm大の浮石粒を含み、あまり変化はみられないが、その多少等によって8層に区分できた。浮石の混入量は、3層が他に比べて少なく6層が多い。7層は壁崩壊土である。



第17図 第8号竪穴住居跡出土遺物



第18図 第9号竪穴住居跡平面図

<形状> 東西6m80cm、南北7m30cmの隅丸方形を呈すると思われる。東側コーナーは、歴史時代の住居跡及びその付属施設により切られている。南西コーナーは明瞭であるが、これに続く南壁は不明瞭であり、浅く細長いピット29の存在を考えると、南壁は、本来ほぼ直線をなすものと考えられる。

<壁> 地形が西から東へ緩やかに傾斜しているため、西壁は明瞭で約20cmの壁高をもつが、東壁は5cm内外と低い。

<柱穴> 壁柱穴は、西壁にのみ11個確認された。すべて壁と底面の接する部分にあり、やや斜めに掘られている。住居跡内部に柱穴のうち、16~23はほとんどが40cmを越える深いものである。壁柱穴のなかで40cmを越えるものは5・9・11であるが、17が北側にやや寄る以外、それぞれ直線をなしており、上屋構造との関連が考えられる。

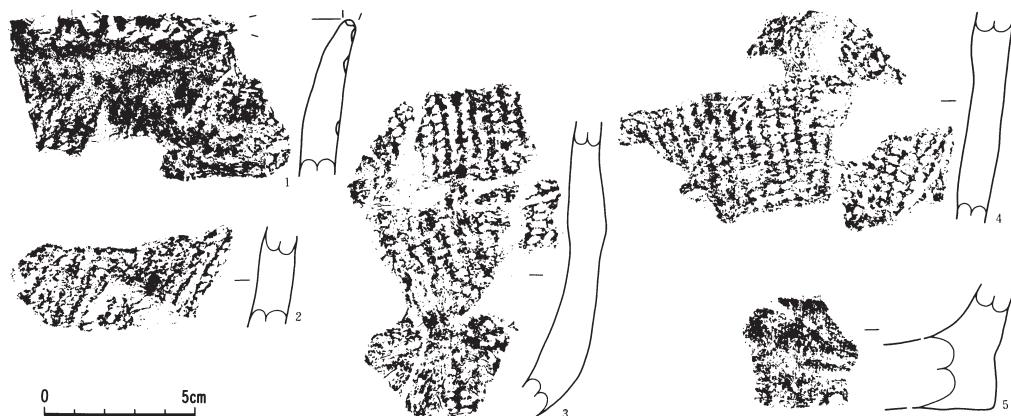
第8表 第9号住居跡ピット一覧表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
平面形	円形	円形	楕円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形	円形	
大きさ	15	19	29×20	30	27×24	24×14	17×15	15	18	10	16	22×18	12	18	19	25	20	23×20	23×20	20×18	37×22	21
深さ cm	17	16	29	40	31	30	23	43	31	42	12	14	22	26	49	49	46	38	56	13	46	
備考	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	斜	
No.	23	24	25	26	27	28	29															
平面形	楕円形	円形	円形	楕円形	楕円形	楕円形	楕円形															
大きさ	18×15	14	16	78×63	18×14	40×32	10×20															
深さ cm	42	21	24	6	13	14	4~5															
備考																						

<床面> 中央部がかたく締まり、周辺はやわらかい。また、Pit15~18よりも約50cm西側で若干の段差があり、壁側が一段高くなっている。

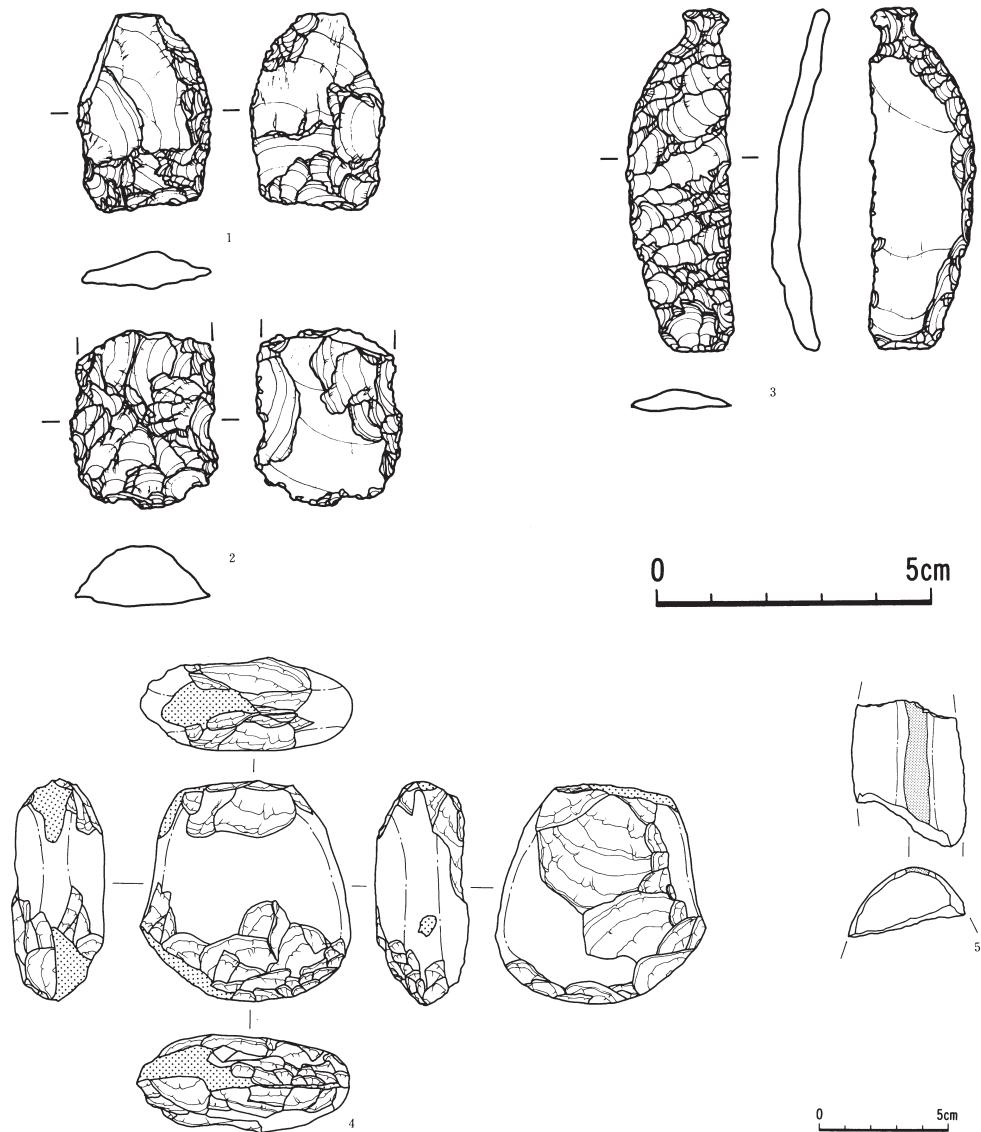
<出土遺物> 住居内からは土器2点、石器は自然礫を含めて50点散在して出土した。これらのうち、西壁近くに石錘9点、石斧1点(8)が壁の上から流れ込んだ状態で出土した。

土器(第19図) 1個体だけの出土で、第6群(早稲田5類)に含まれるものと考えられる。底部は覆土の上層部、他は住居跡外である。同一個体のため一応本図に組み込んだが、本来的には住居跡に伴うものとは思われない。口唇部上端に繩の末端刺突を加え、口縁部に3条の繩の側面圧痕を施文している。器面はR Lの縦走する繩文である。

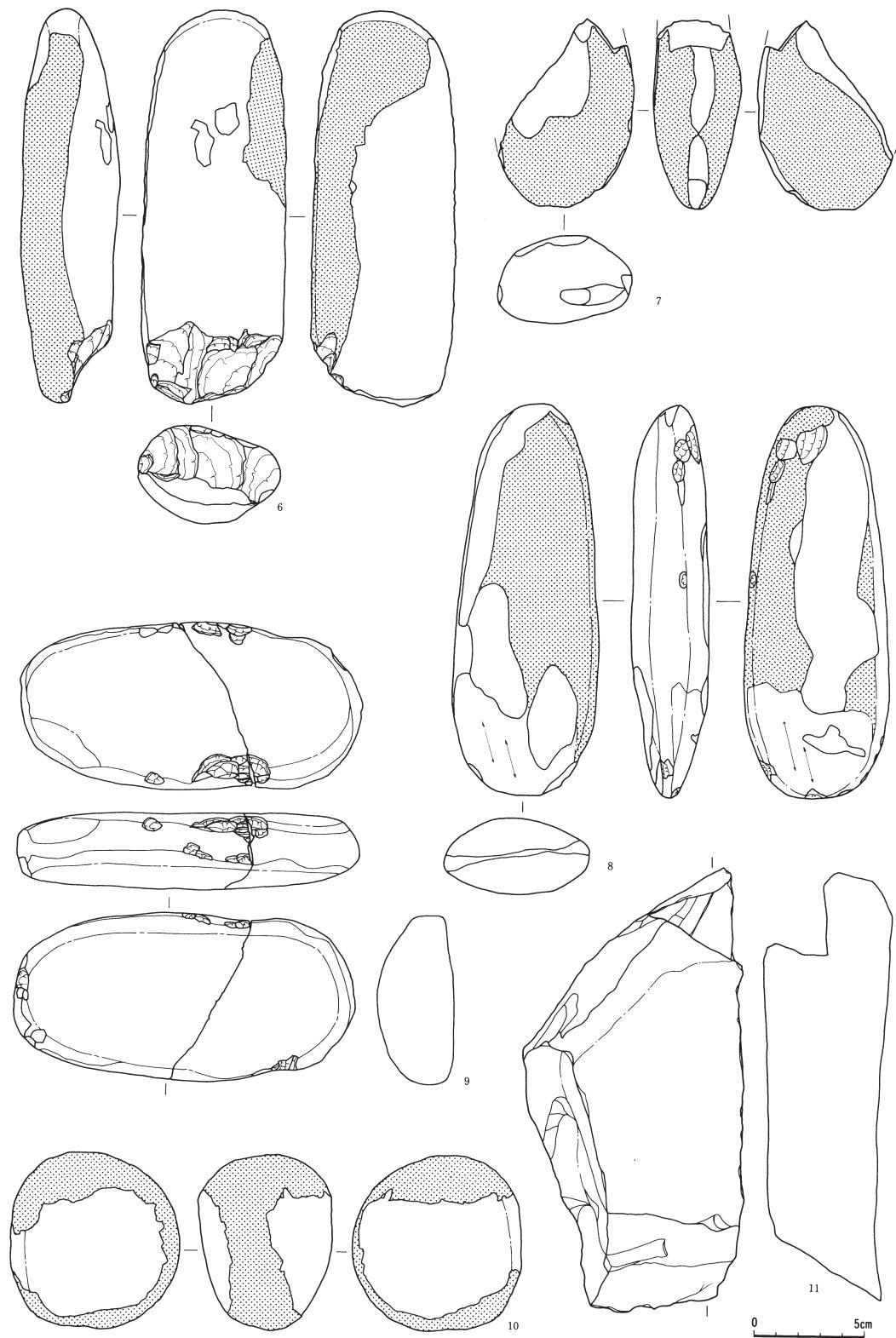


第19図 第9号竪穴住居跡出土遺物(1)

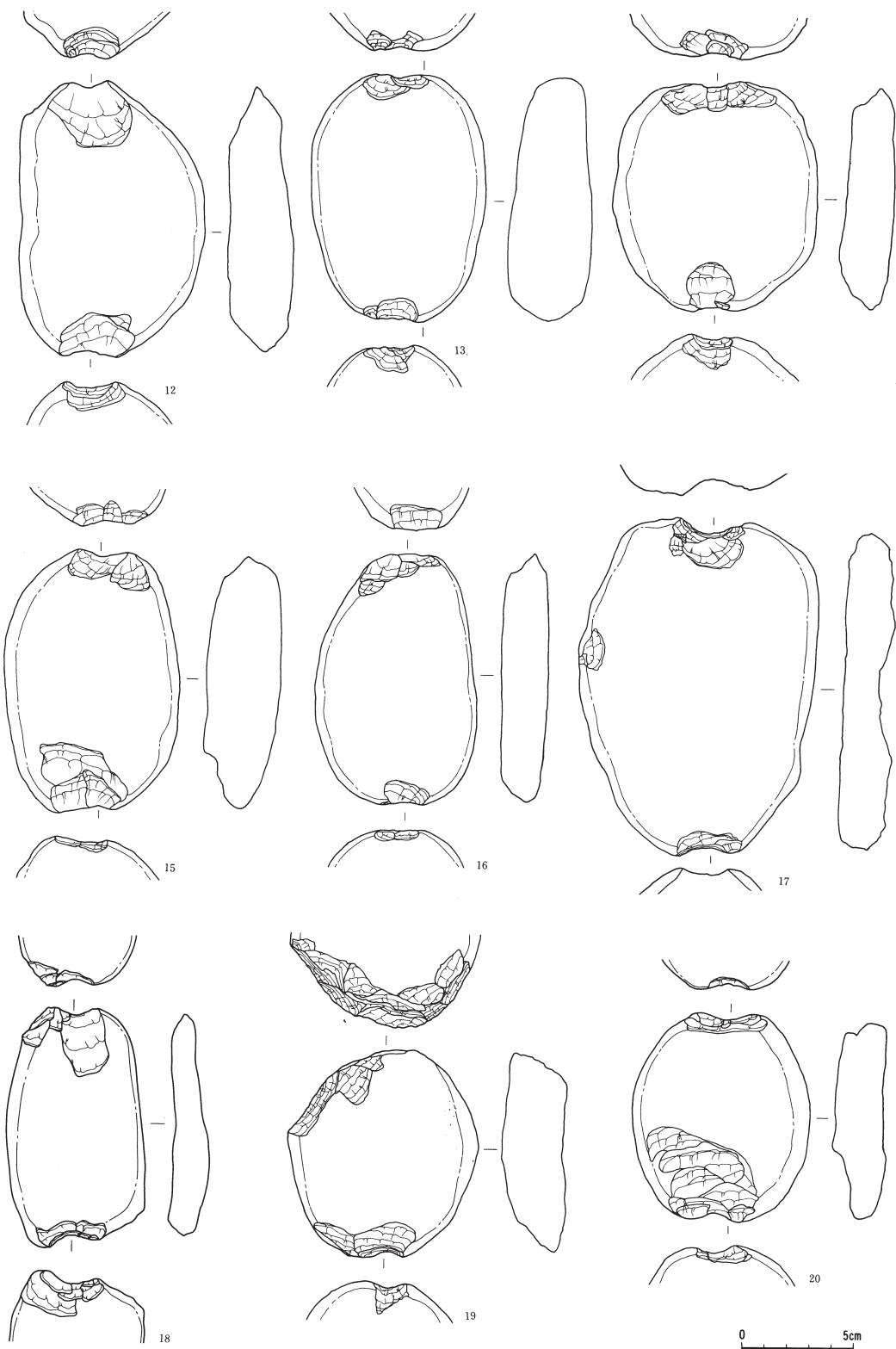
石器（第20～22図） 石器は上記のほか、石皿の断片2点、敲磨器 類1点（5）、石斧2点（6・7）、石錐1点、敲磨器 類3点（4・9・10）、台石1点（11）、石匙1点（3）、不定形石器2点（1・2）が出土している。石匙は、主要剥離面に背面調整用の打面をもつ。9は、C-34グリッド出土品との接合である。



第20図 第9号竪穴住居跡出土遺物(2)



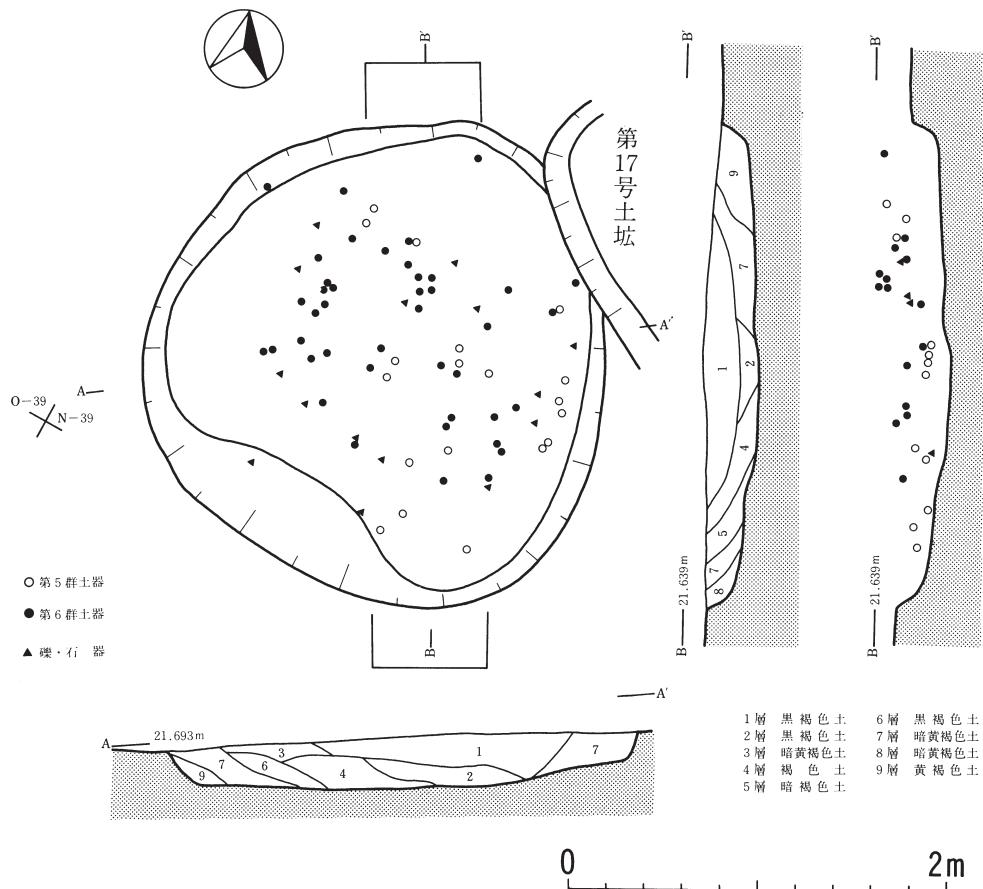
第21図 第9号竪穴住居跡出土遺物(3)



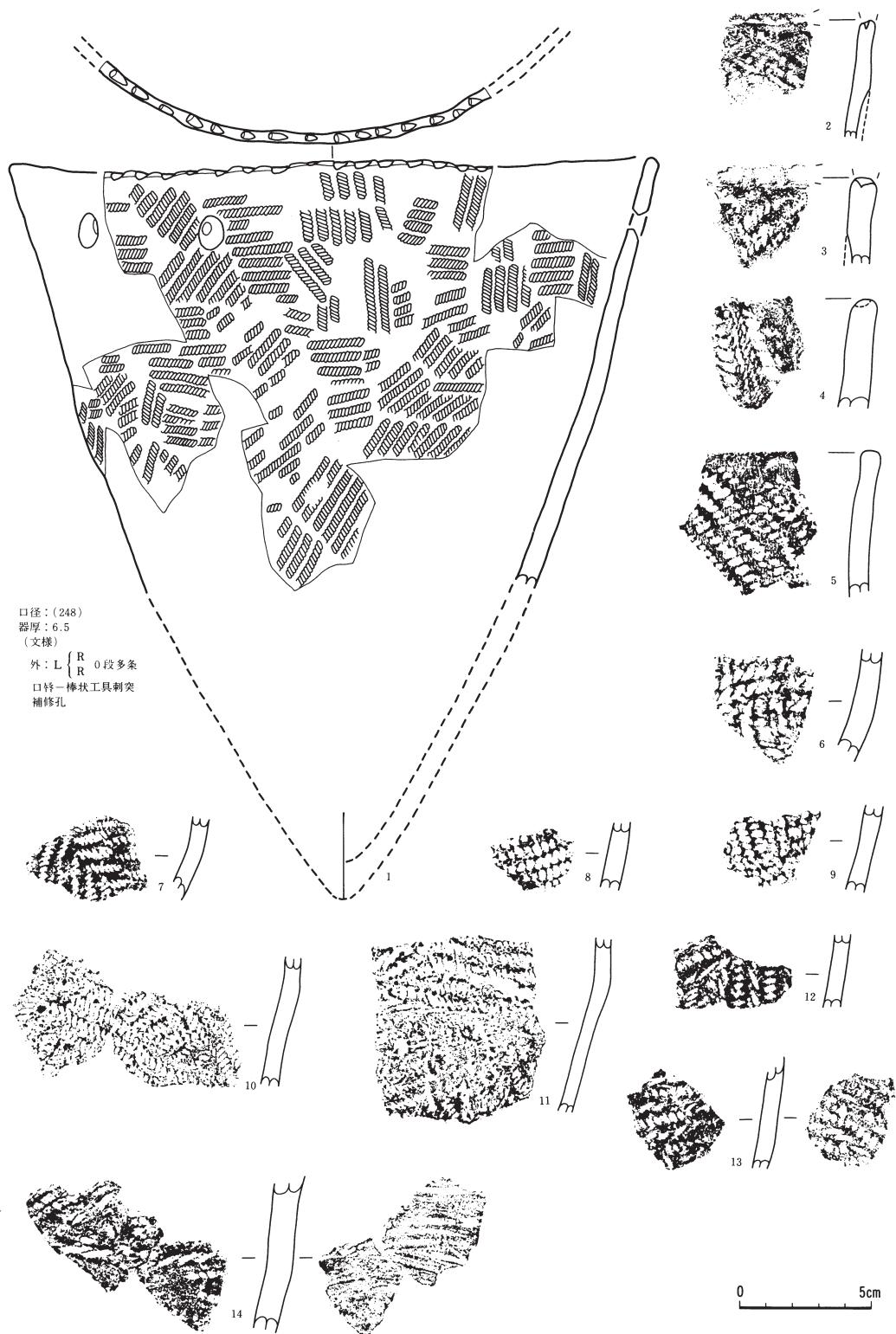
第22図 第9号竪穴住居跡出土遺物(4)

第1号土壙（第23～26図）

- <位置> N-39グリッドで検出した。住居跡とも考えられるが、ここでは一応土壙として報告する。
- <覆土> 9層に区分したが、全体的にさほど違わない。各層とも浮石粒を多量に含むが、特に1・6・7層が多い。9層は壁崩壊土である。
- <形状> 長軸2m52cm、短軸2m46cmの卵形で、深さは20cmである。
- <壁> 東側一部を除き明瞭で、55°前後の傾斜で立ち上がる。
- <底面> ほぼ平坦であるが、中央部が若干皿状に凹む。この中央部に、46×38cmで深さ6cmと20×16cmで深さ4cmの、ともに浅いピットが2個存在する。底面は、八戸火山灰層のであるためかたい。
- <出土遺物> 壁際を除くほぼ全面に分布・包含されていた。土器は、赤御堂式と早稲田5類の両者があり、覆土の上層部では両者混合するが、底面近くの覆土1層下部や5層・7層には赤御堂式の大形破片が多量に含まれ、早稲田5類土器は、わずか1片である。



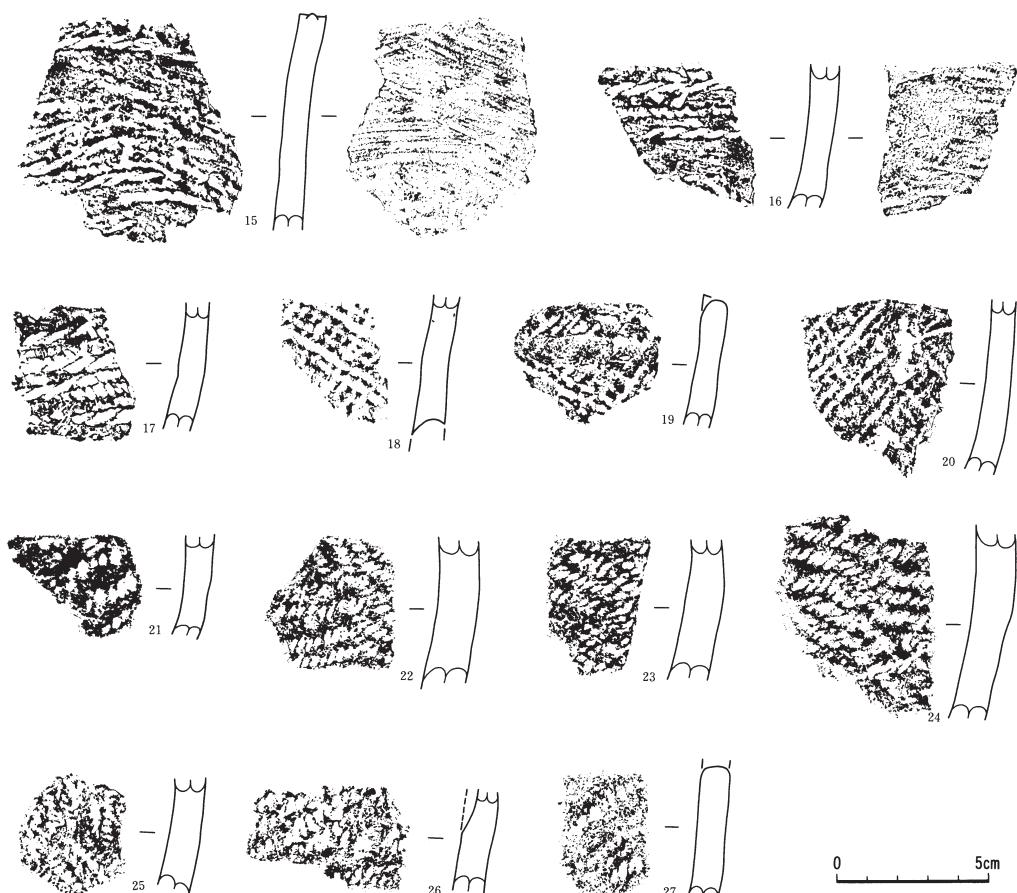
第23図 第1号土壙平面図



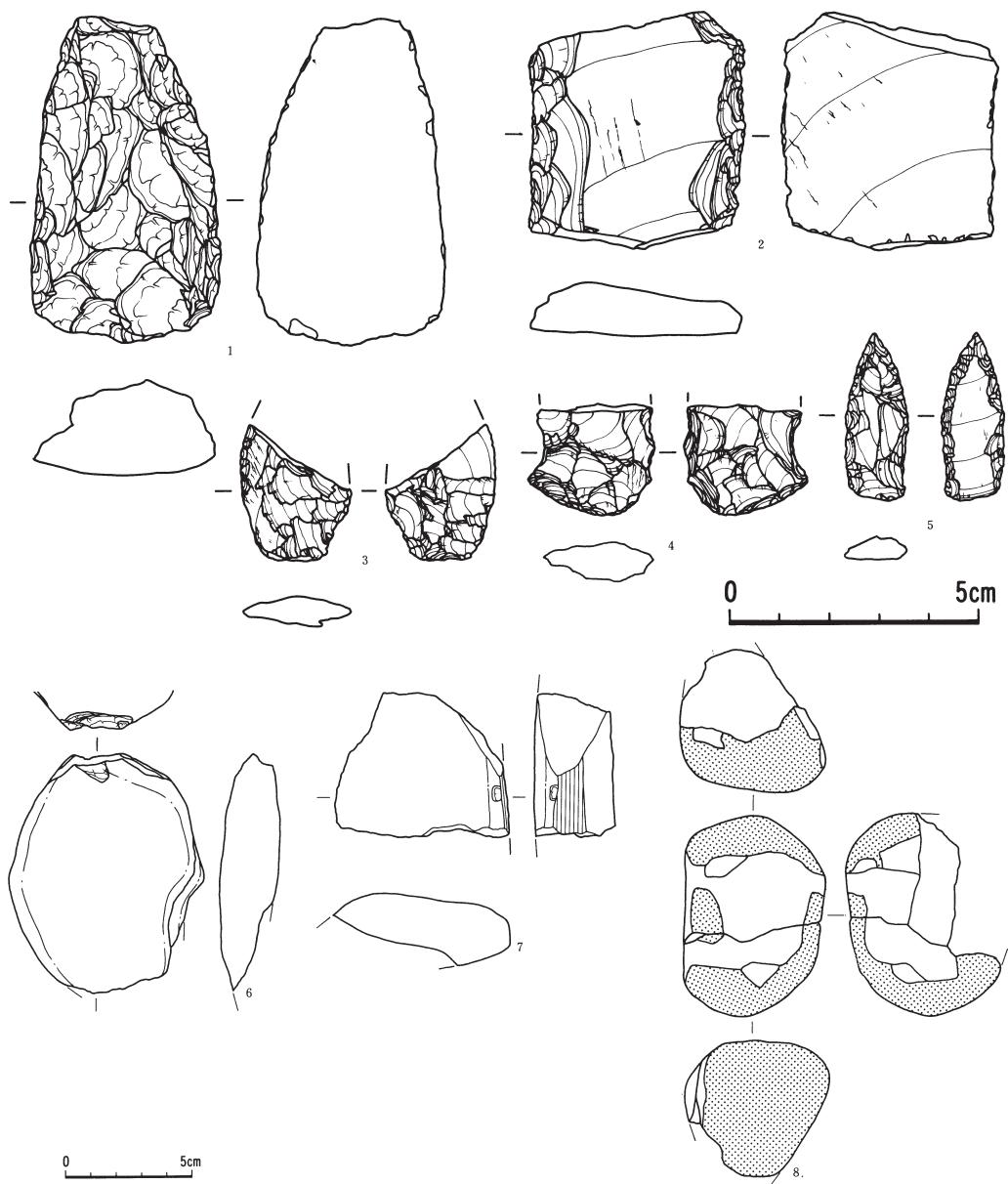
第24図 第1号土塙出土遺物(1)

土器（第24・25図） 第5群（赤御堂式） 3個体出土した。いずれも内面に縄文ないし条痕をもたない。1は、胴部上半部がほぼ $\frac{1}{2}$ 残存する。底部を欠くが、本遺跡で復原された唯一の赤御堂式土器である。推定口径は24cmである。口唇に棒状工具による刺突文を施文し、器面には、O段多条によるL Rを回転方向を変えながら施文している。内面には指頭の圧痕を残している。10・11は同一個体の底部近くと胴下半の破片で、縄文は施文方向を変えて施文している。11は若干屈曲する。縄文原体は、R 1本とO段多条のL 2本を右撲りしたもので、上の縄文は明瞭であるが、下半は施文圧力が弱く不明瞭である。第6群（早稻田5類） 12・13は同一個体で、縄文原体はLとR各1本の縄文を右撲りにしたものである。一応本類に含めたが、器厚が薄いこと。纖維の含有がごく微量であることからするならば、赤御堂式の可能性もある。14～16は同一体で、内面に条痕文を施文している。

石器（第26図） 剥片石器は、石鏃1点（5）、不定形石器3点（2～4）が出土した。礫石器は、小形の打製石斧1点（1）、石錐2点（6）、敲磨器 類1点（7）、敲磨器 類1点（8）が出土した。8は、近くのL-40グリッド出土品との接合である。



第25図 第1号土塙出土遺物(2)



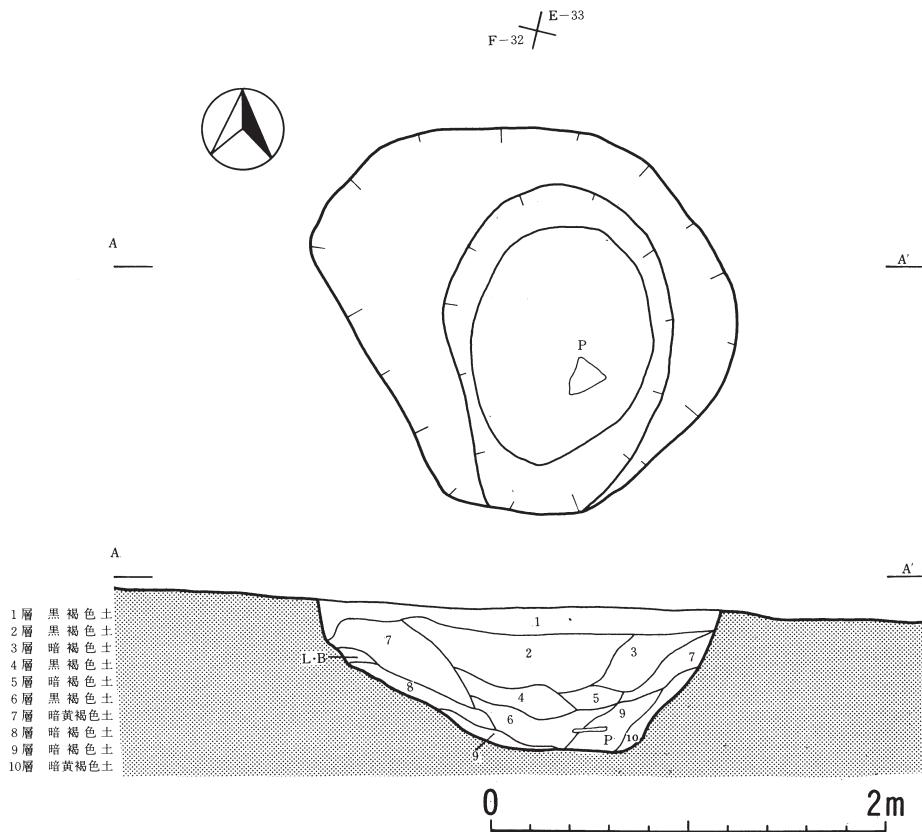
第26図 第1号土塙出土遺物(3)

第2 土塙 (第27・28図)

<位置> E・F - 32グリッドで検出した。

<覆土> 若干の色調・粘性等の差違から10層に区分できたが、混入物が各層ともほとんど変らず、1~1.5mm大の浮石粒を多く含む。図の右側が黄色味が強く左側が黒っぽい。全体的にかたくしまる。

<形状> 長軸2m20cm、短軸1m90cmの不整円形で、深さは73cmである。



第27図 第2号土塙平面図

<壁> 東壁側が60°強であるのに対し、西壁は約30°と緩やかな立ちあがりである。

<底面> 開口部に比べて底面は非常に小さく、85cm×65cmの橢円形を呈する。ほぼ平坦である。

<出土遺物>

土器（第28図） 土器は3の第3群b類（物見台式）と考えられる1点を除き、すべて第6群土器（早稻田5類）に含まれる。1は底面に近い9層から出土した口縁部破片で、口唇部に円形の棒状刺突文を施し、他の器面はL 1本とR 2本をごく弱く右撫りにした繩文を施している。6は胴部下半の破片で、内面に条痕と繩文を施している。

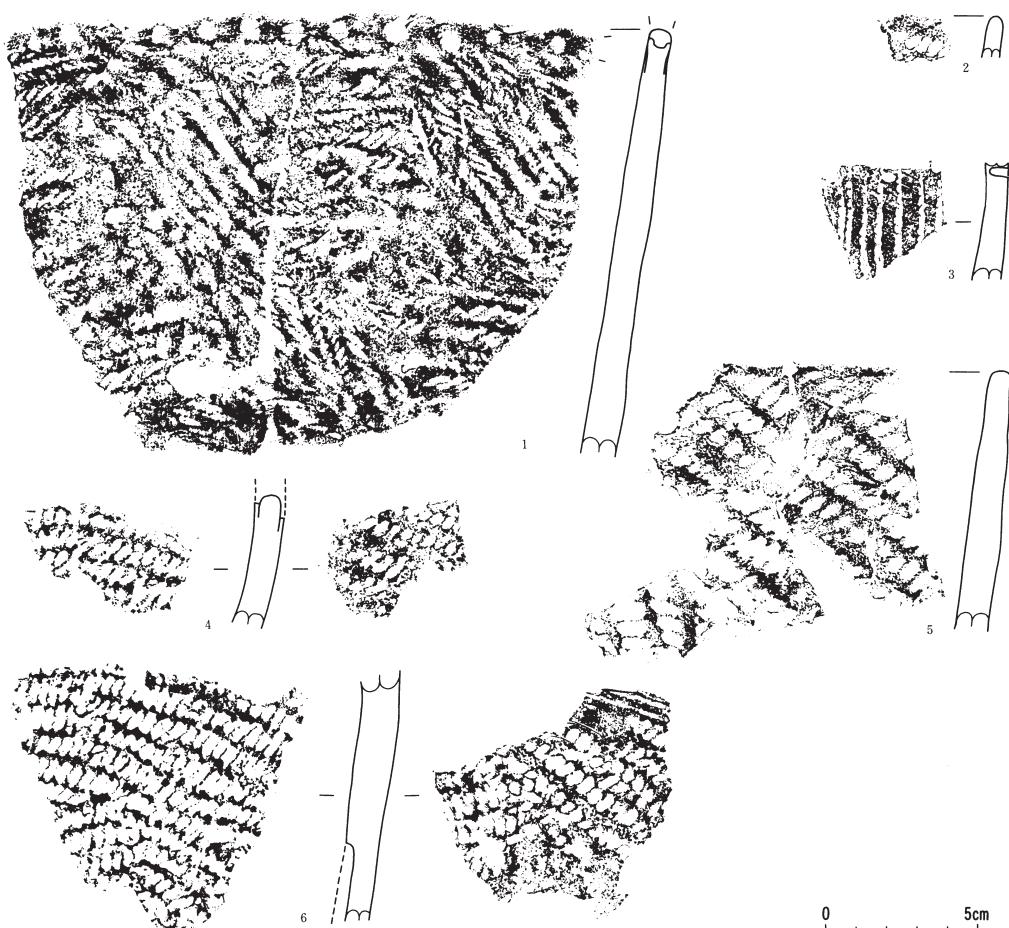
石器 敲磨器類の完形品が1点と、若干の使用痕跡をもつ破損礫2点、他に自然礫8点である。このうち、使用痕跡をもつ礫2点と自然礫5点が焼けている。

第3号土塙（29~31図）

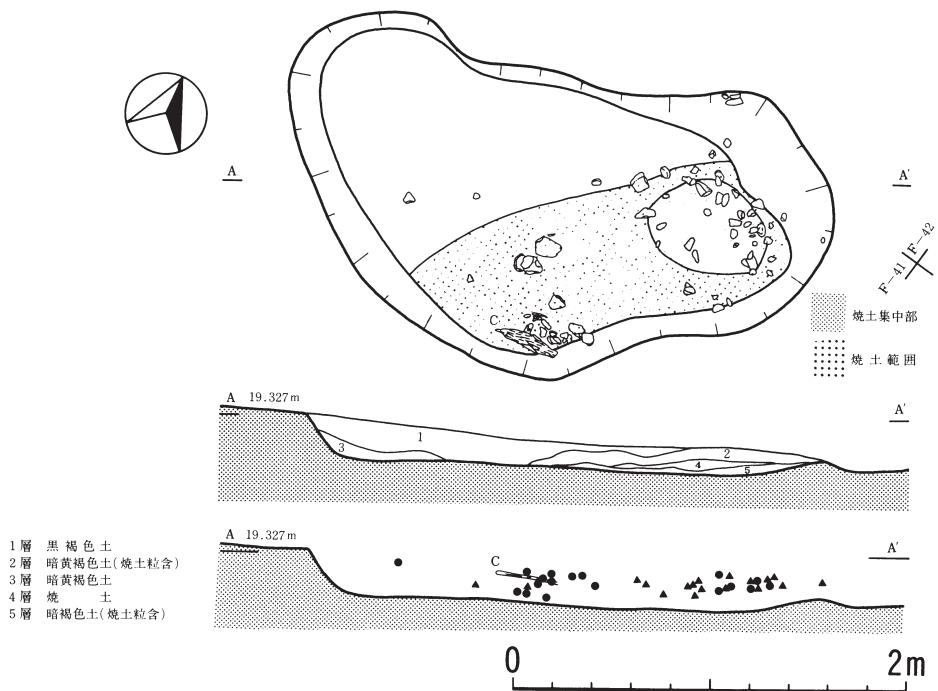
<位置> F - 41グリッドで検出した。第7号住居跡の南壁の一部を切っている。

<覆土> 4層に区分できた。1層と2層は余り変わらないが、2層は4層とともに炭化物や焼土粒を多く含む。3層は1層に壁崩壊土が混じったものである。底面から5cm浮いて焼土が約2cmの厚さでみられた。

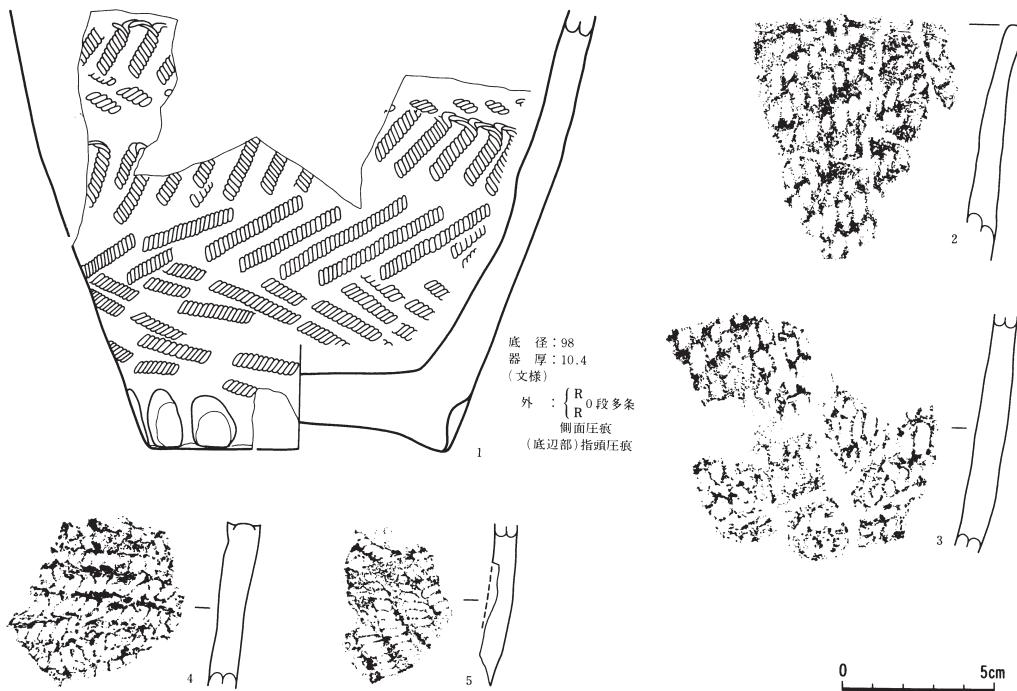
<形状> 長軸 2 m 87cm、短軸 1 m 54cmの不整な隅丸三角形で、深さは24cmである。
 <壁> 西壁から南壁は45°前後の傾斜をもつが、北壁は10°前後と非常に緩やかな立ち上りである。
 <底面> ほぼ平坦で、さほど堅くない。
 <出土遺物> 西壁寄りの中央部と北側の2か所に集中するが、中央部には土器と若干の礫が集中し、北側では礫が集中する。また、中央部からは長さ35cm、幅7cmの炭化材とクルミの炭化片が1点出土した。焼土の範囲は、この遺物集中部分に一致し、しかも最も焼土の厚い部分は北側の礫集中部に一致する。礫は計58点あり、径10cmを越えるものもあるが、5~6cm大のやや扁平で重量も100g以内に小石が多い。石質等は別表のとおりであるが、チャートと安山岩は計45点で約78%を含め、安山岩は19点中17点、チャートは26点中14点が焼けている。58点中焼けた礫は、39点で67%を占めている。



第28図 第2号土塙出土遺物



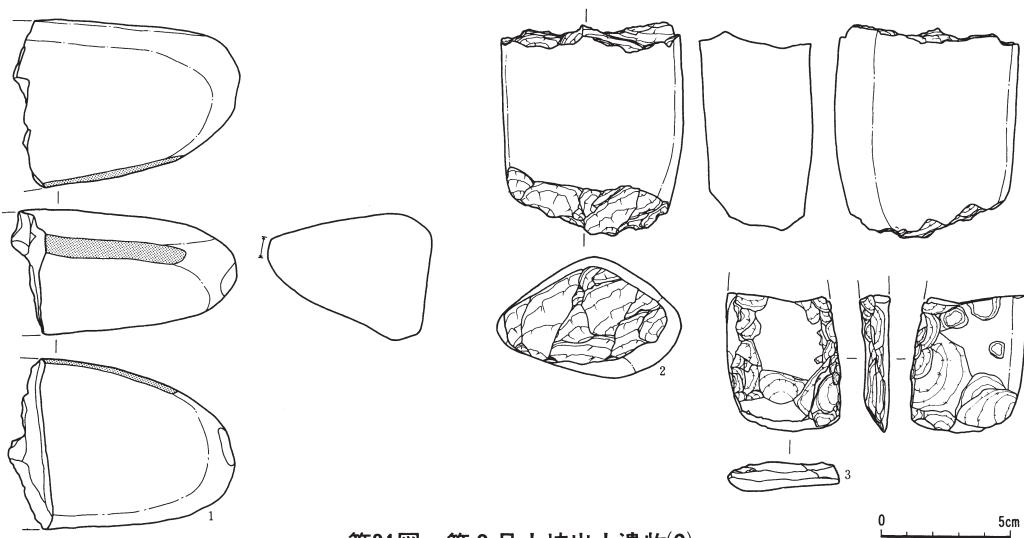
第29図 第3号土塙平面図



第30図 第3号土塙出土遺物(1)

土器（第30図）すべて第6群土器（早稻田5類）に含まれる。1は、ほぼ中央部から出土したものである。胴部下半から底部までの約 $\frac{1}{2}$ が残存する。O段多条のL Rの側面圧痕と回転施文による文様であるが、側面圧痕の上下では繩端部を主体に横位に回転し、以下底部までは同一原体を用い、回転方向を変えて横位の羽状繩文を構成している。底辺部には指頭圧痕を巡らしている。底部は上げ底である。2・3は同一個体で、同じ中央部から出土。

石器（第31図）剥片石器ではなく、すべて礫石器である。敲磨器類が1点（1）、表と裏に剥離し焼け弾けを生じた磨製石斧が1点（3）、4個のパンチ痕をもつ礫器が1点（2）の計3点出土した。



第31図 第3号土塙出土遺物(2)

第3号土塙内の礫

	チャート	安山岩	真岩	砂岩	凝灰岩	石英ホルンフェルス	ホルンフェルス	計
点数	26	19	4	3	3	2	1	58
%	44.8	33.0	6.9	5.1	5.1	3.4	1.7	100
焼礫	14	17	2	2	3	1	0	39
%	35.9	43.6	5.1	5.1	7.7	2.6	0	100

第4号土壤（第32図左・第33図）

<位置> O-37グリッドに位置する。周辺は、基本層序の第1層である八戸火山灰層のまで削平されている。

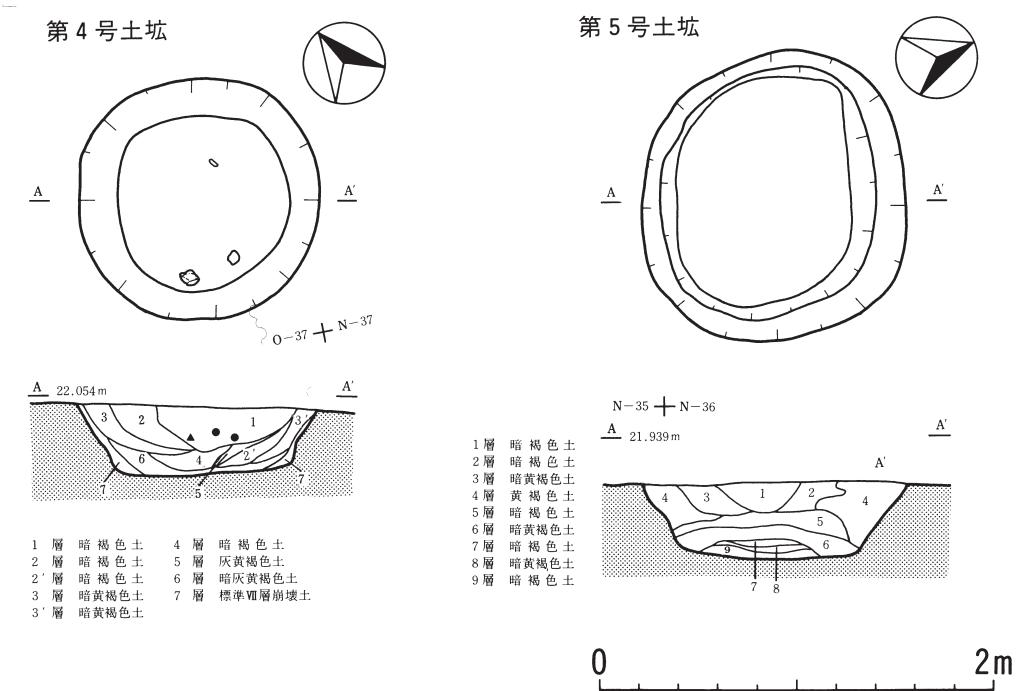
<覆土> 7層に区分できた。各層とも浮石粒を多量に含むが、全体的にかたく締まっている。粒子の大きさはやや異なり、1層と4層が1cm大と大きく、6層が5mm大、その他は2~3mm大である。また、1層と2層は、他の層よりも黒色土との混合の度合が大きい。

<形状> 直径1m20cm強のほぼ円形である。

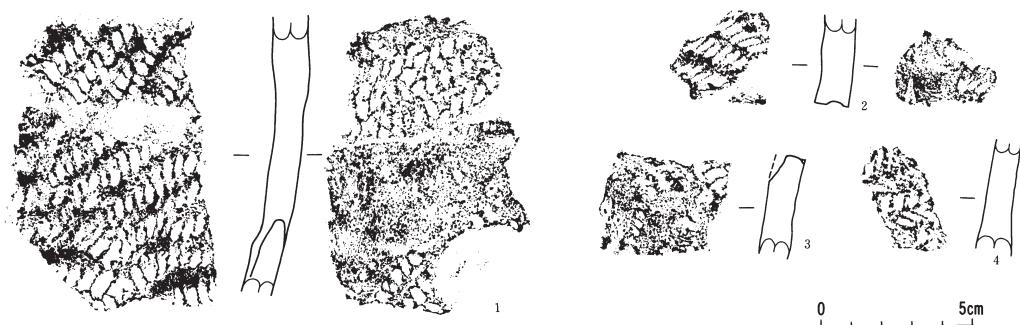
<壁> 約60°の角度で斜めに立ち上がり、その高さは西側で50cm、東側40cmである。

<底面> ほぼ平坦である。

<出土遺物> 第6群土器（早稲田5類）に含まれる土器片が4点、自然礫が1点出土した。



第32図 第4・5号土塙平面図



第33図 第4号土塙出土遺物

第5号土壤 (第32図右)

<位置> N - 36グリッドで検出した。

<覆土> 合計9層に区分できたが、各層はさほど変わらず、全体的にかたく締まっている。

1層は浮石粒の含有量が最も多く、3層は壁崩壊土の混入が多い。4層は標準土層・の壁崩壊土が混合したものである。また、6層は黄褐色土の混入が多い。

<形状> 長軸1m50cm、短軸1m30cmの楕円形で、深さは40cmである。

<壁> 約50°~60°の傾斜をもち、中段からやや広がるが、壁崩壊土の4層の状態から、本来はもう少し急な立ち上がりをもつと思われる。

<底面> 若干なべ底状である。

<出土遺物> フレーク1点とチャートの礫3点で、うち2点は破損礫である。

第6号土塙(第34・35図)

<位置> G-43グリッドで検出

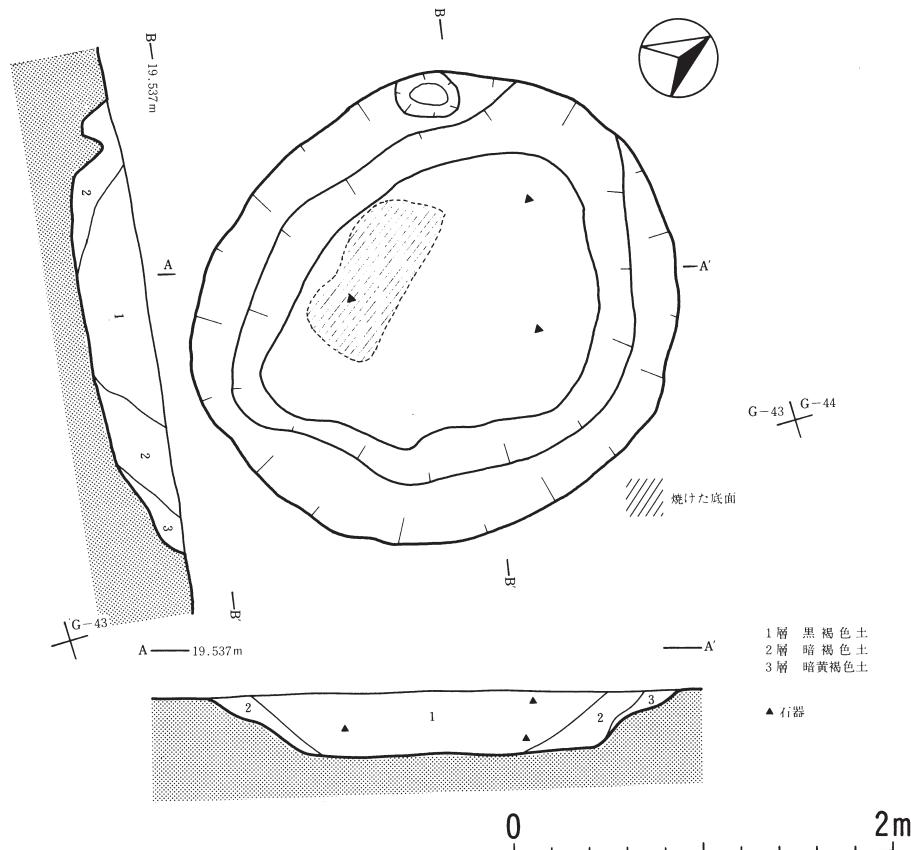
<覆土> 3層に区分できた。各層とも浮石粒を多量に含むがかたく締まっており、その粒子の大きさは1層が大きく、2層がこれに次ぐ。

<形状> 長軸2m64cm、短軸2m36cmの橢円形で、深さは34cmである。西壁に35cm×23cm、深さ14cmの小ピットが1個みられた。

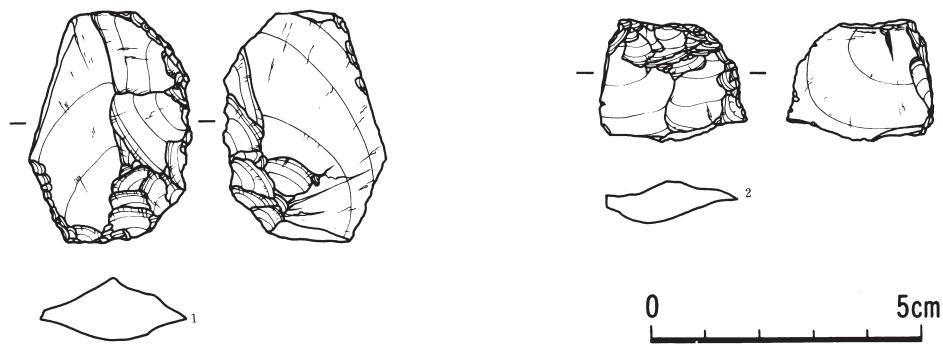
<壁> 約25°~30°の角度で緩やかに立ち上がる。

<底面> 平坦で、かたくしまり、一部が焼けて赤化している。

<出土遺物> 不定形石器が2点出土した。



第34図 第6号土塙平面図



第35図 第6号土塙出土遺物

第7号土塙 (36図左・第37図1~3)

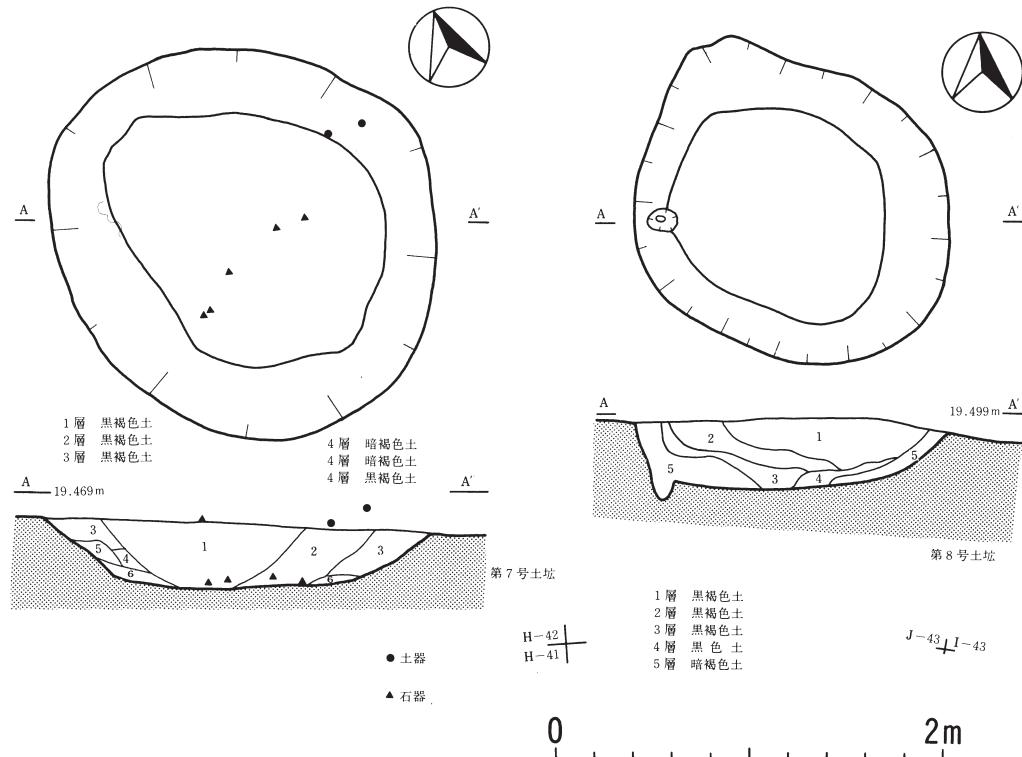
<位置> H-42グリッドで検出した。

<覆土> 全体的にかたく締まっている。6層に区分でき、1層は炭化物を若干含む。2層は1層に類するが、1mm~10mm大の浮石粒を多量に含む。また、4・5層の浮石粒は全般に小さく、含有量も他に比べて少ない。

<形状> 長軸2m12cm、短軸1m98cmの卵形に近い円形で、深さは36cmである。

<壁> 約30°~40°の傾斜で緩やかに立ち上がる。

<底面> 平坦である。



第36図 第7・8号土塙平面図

<出土遺物> 土器片2点いずれも確認面のもので、第6群土器(早稲田5類)に含まれる(第37図1・2)。

石器は、確認面でフレイクが1点、他は底面ないし底面直上である。石鏃(第37図3)と敲磨器類の破損品及びフレークが2点出土した。

第8号土壌(第36図右・第37図4)

<位置> J-43グリッドで検出された。

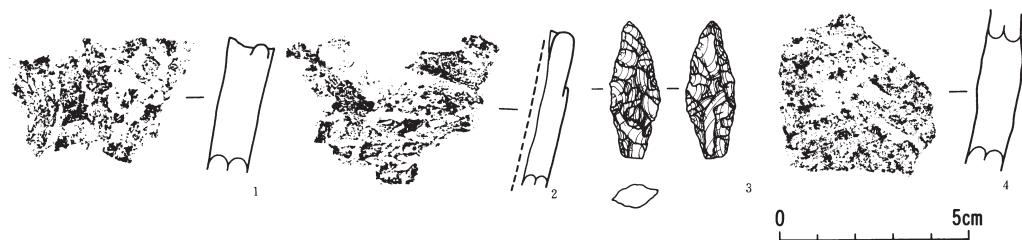
<覆土> 5層に区分できた。5層は、黒褐色土と壁崩壊土との混合土である。1~3層は、さほど変わらないが、1層に浮石粒が多量に含まれ、他は少ない。

<形状> 不整な円形で、長軸1m82cm、短軸1m62cm、深さ37cmである。

<壁> 西側は約75°と急角度で立ち上がるが、東側は40°と緩やかである。西壁に接し、径10~15cmの楕円形をなす深さ10cmの小ピットが存在する。

<底面> 全体的になべ底状を呈する。

<出土遺物> 第6群土器(早稲田5類)に含まれる土器片が1点出土しただけである(第37図



第37図 第7・8号土塙出土遺物

第9号土壌(第38図)

<位置> -42グリッドで検出した。

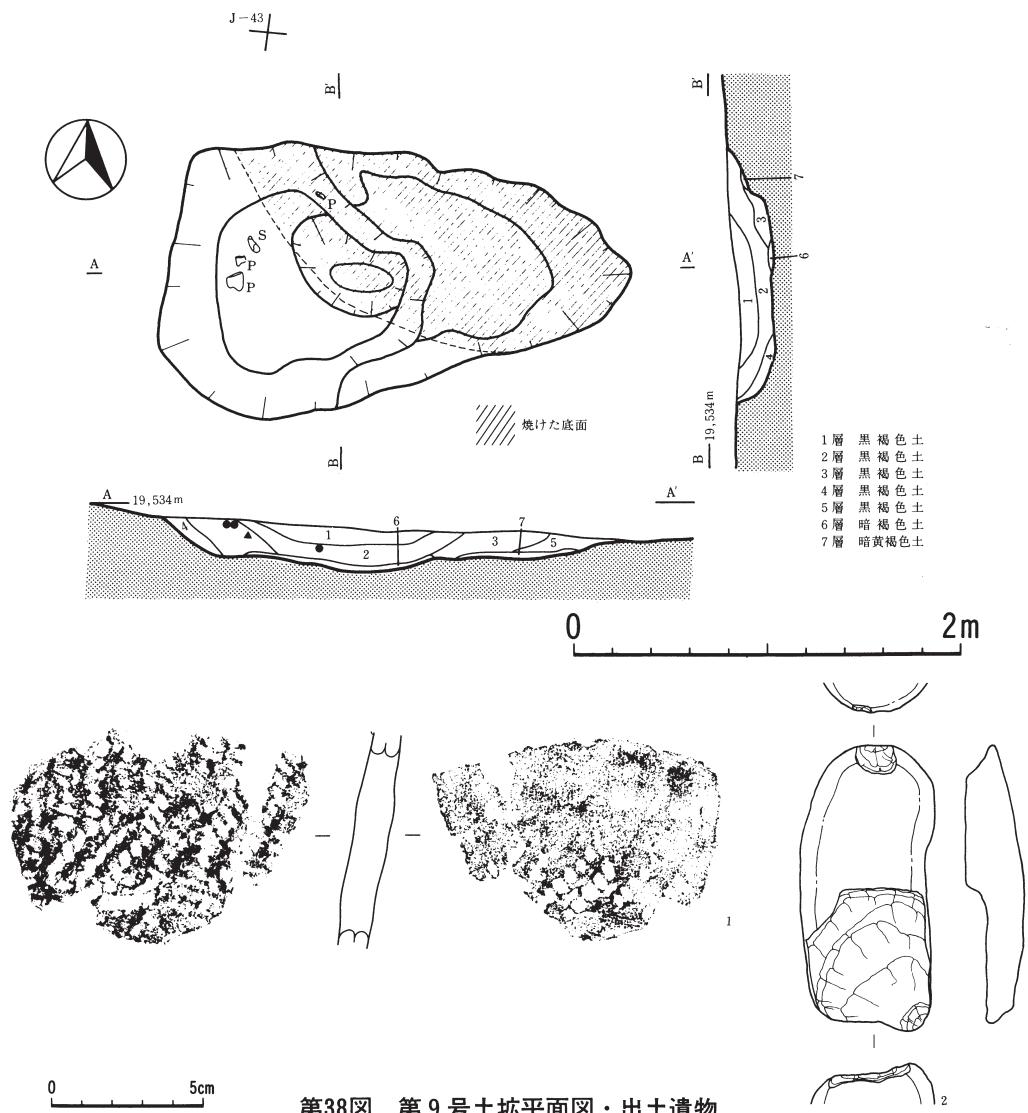
<覆土> 7層に区分できたが、4・6・7層を除く各層は、浮石粒の混入の度合による差である。4層は壁崩壊土を混じえ、7層は床面のロームと黒褐色土の混合したもので、6層は焼土粒や灰が混じる。

<形状> 長軸2m50cm、底辺1m40cmの不整な二等辺三角形で、深さは20cmである。

<壁> 西壁は約45°前後であるが、東壁は15°前後と非常に緩やかな立ち上がりを示している。

<底面> 全般的に凹凸がみられるが、ほぼ中央部が他の部分より凹む。底面の東側半分は焼けてかたく締まっているが、6層の分布状況とは若干異なっている。

<出土遺物> 第6群とした早稲田5類の破片3片と石錐が1点出土した。



第38図 第9号土塙平面図・出土遺物

第10号土壤（第39図）

<位置> - 30・31グリッドで検出した。

<覆土> 5層に区分できた。1層と2層は類似するが、2層は黑色土の混入が多く、また、浮石粒の粒子が細かい。3～5層の各層も類似するが、3層はローム粒、4層はロームブロックを含む。5層はローム粒とブロックを多く含む。

<形状> 長軸が4m38cm、短軸1m48cmの不整な三角形で、ピン状を呈する。深さは最深部55cm、東側深部33cm、西側深部45cmである。当初、別々の土壤と考えたが、層序の検討から1つの土壤と判断した。

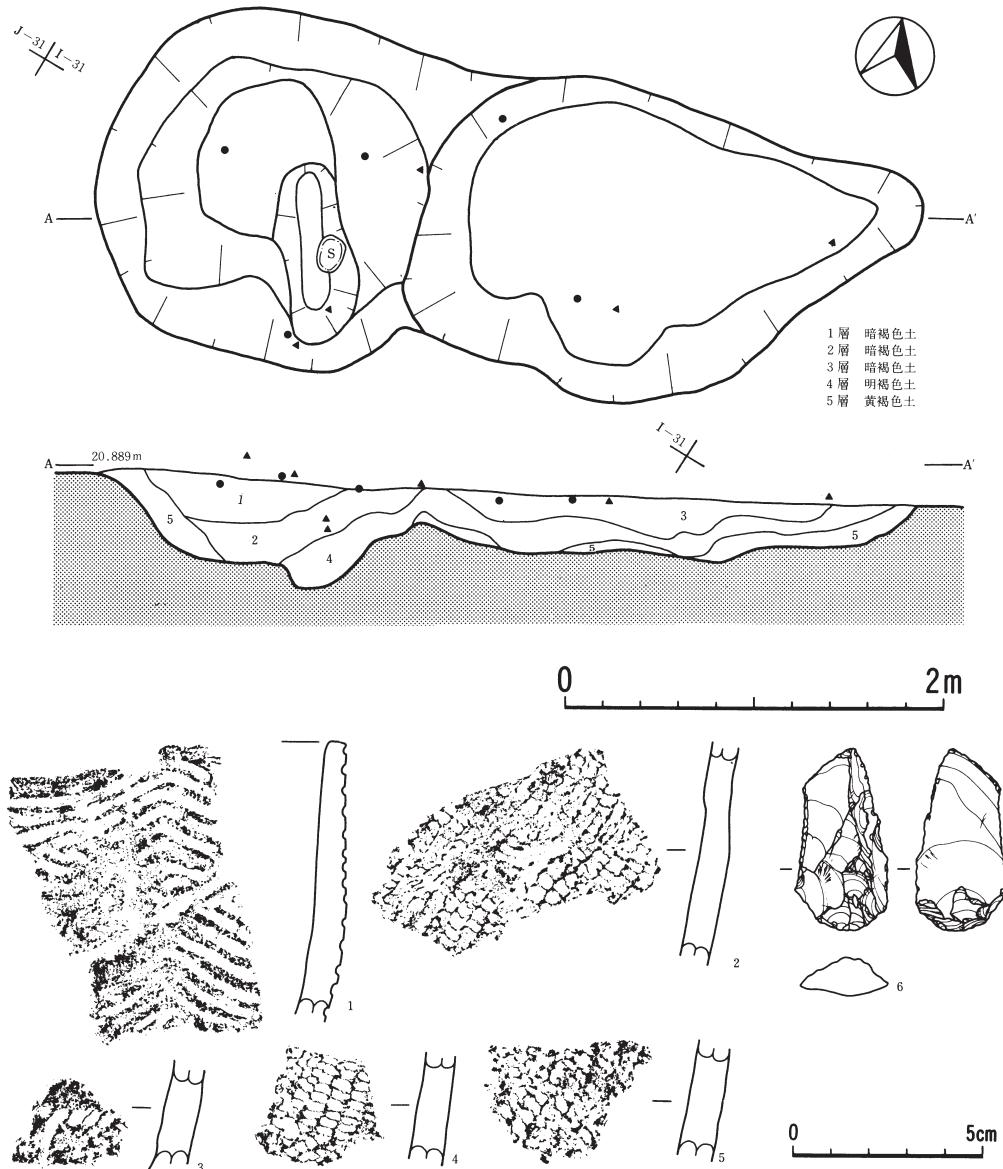
<壁> 西側50 東側35 前後で立ち上がる。

<底面> 西側に96cm × 38cm、深さ10cmの楕円形ピットをもつ。

<出土遺物> 土器は、第6群（早稲田5類 - 3）、第8群土器（早稲田6類）が出土した。

石器は、不定形石器が1点、自然礫が6点である。

本土壙は早稲田6類期のものであろう。



第39図 第10号土壙平面図・出土遺物

第11号土壙（第40・41・42・44図）

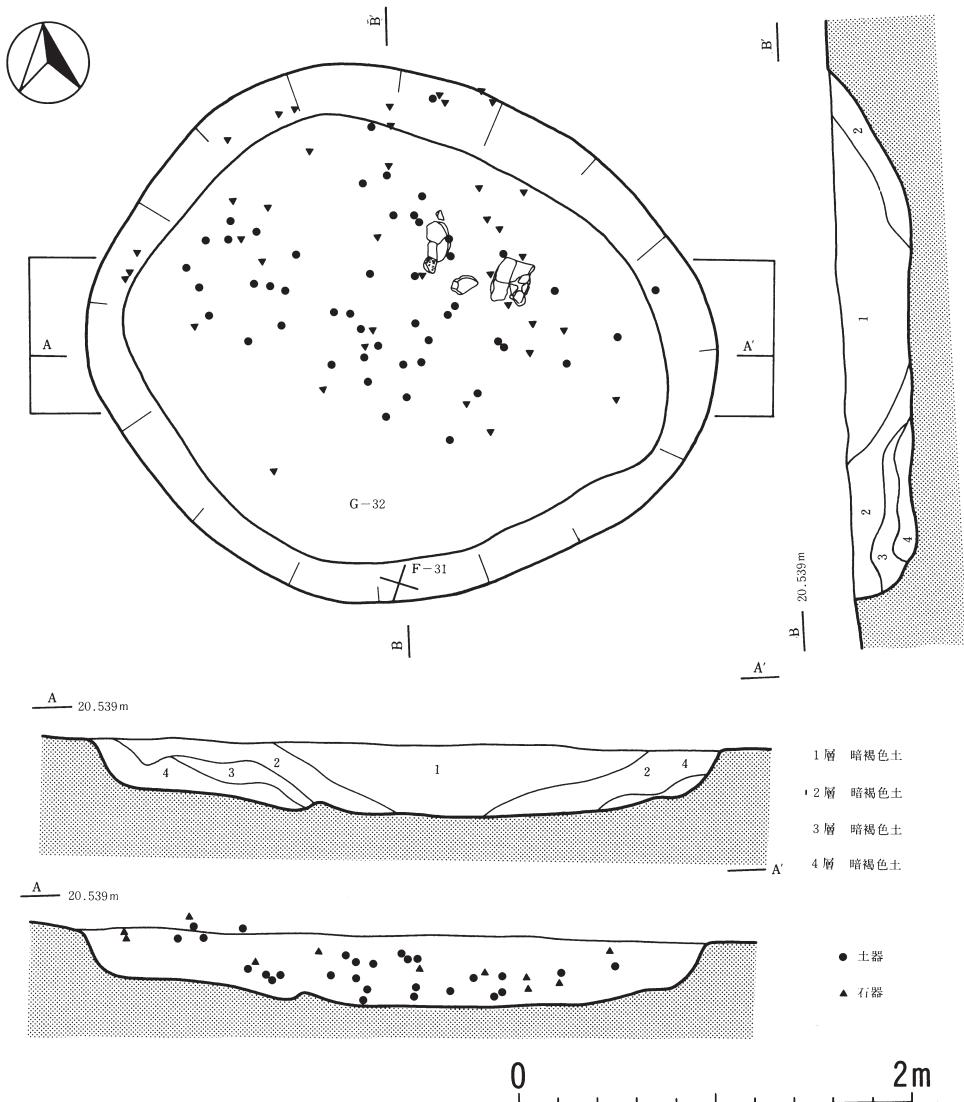
<位置> F・G - 32グリッドで検出した。

<覆土> 4層に区分した。各層ともさほど変わらないが4層は八戸火山灰粒を多量に含む。

<形状> 長軸3m20cm、短軸2m75cmの卵形で、深さは36cmである。

<壁> 北側が約32°で緩やかであるほかは、50°~60°の傾斜で立ち上がる。

<底面> 若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦である。



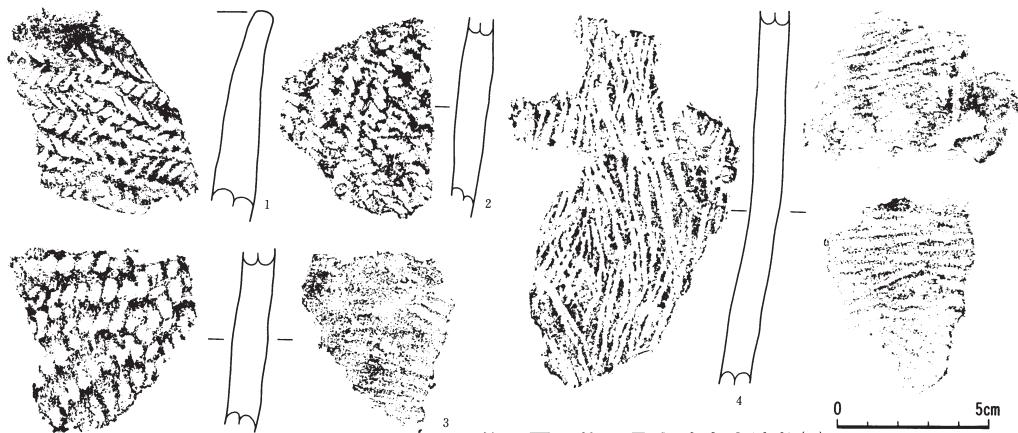
第40図 第11号土塙平面図

<出土遺物> 全体的には西壁側に少ないが、ほぼ全面に分布していた。底面に密着したもののはほとんどなく、多くは若干浮いた状態で出土した。

土器(第41・43・44図)すべて第6群土器(早稲田5類土器)に含まれる。

5は約 $\frac{1}{2}$ 残存し、復原されたが、底部をはじめ口縁部や胴部の一部破片は、D-33、E-33、

F - 33・34・第14号土壌など周辺の諸グリッドからも出土している。口唇部に半截竹管状工具による刺突を施し、口縁直下及び頸部に、口唇と同様の工具による縦位の短沈線を施文し、口頸部文様帯を区画している。この間に、胴部の繩文と同一の原体による側面圧痕を横位に5段施文している。胴部は、2段L Rと1段Rを右撫りにし、R繩を完全に撫り戻したもので、斜位回転を主体とした横走繩文である。底辺部には指頭圧痕文を巡らしている。本例は、竹管状工具による短沈線を用いていること、また、明確に文様帯を区画すること、更には繩文原体等、他とは多くの点で異質である。4は胴部下半の破片で、表面にやや担難な木目状撫糸文を、内面に条痕文を施文したものである。7は胴部破片で、繩文原体の側面圧痕文をもつ例である。



第41図 第11号土塙出土遺物(1)

石器(第44図) 石錐が1点(2) 敲磨器類が3点(1ほか) 類が4点(3・4・7ほか) 石斧の欠損品が1点(5) 剥片が6点出土した。なお、石斧は第14号土壌内出土品との接合である。また、礫が11点出土し、礫石器・礫の合計20点のうち16点は焼けている。

第12号土壌(第42図)

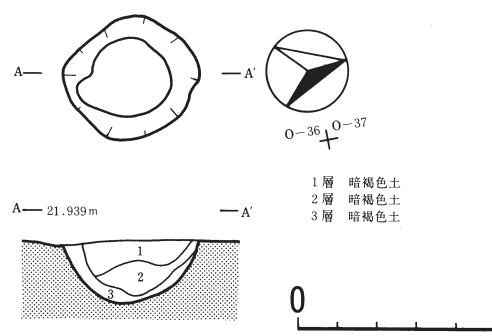
<位置> O-36グリッドで検出した。第4号土壌に近接する。

<覆土> 3層に区分できたが、各層ともさほど変わらない。1・2層はかたく締まっているが、3層はもろい。各層とも5mm大の浮石を多く含む。

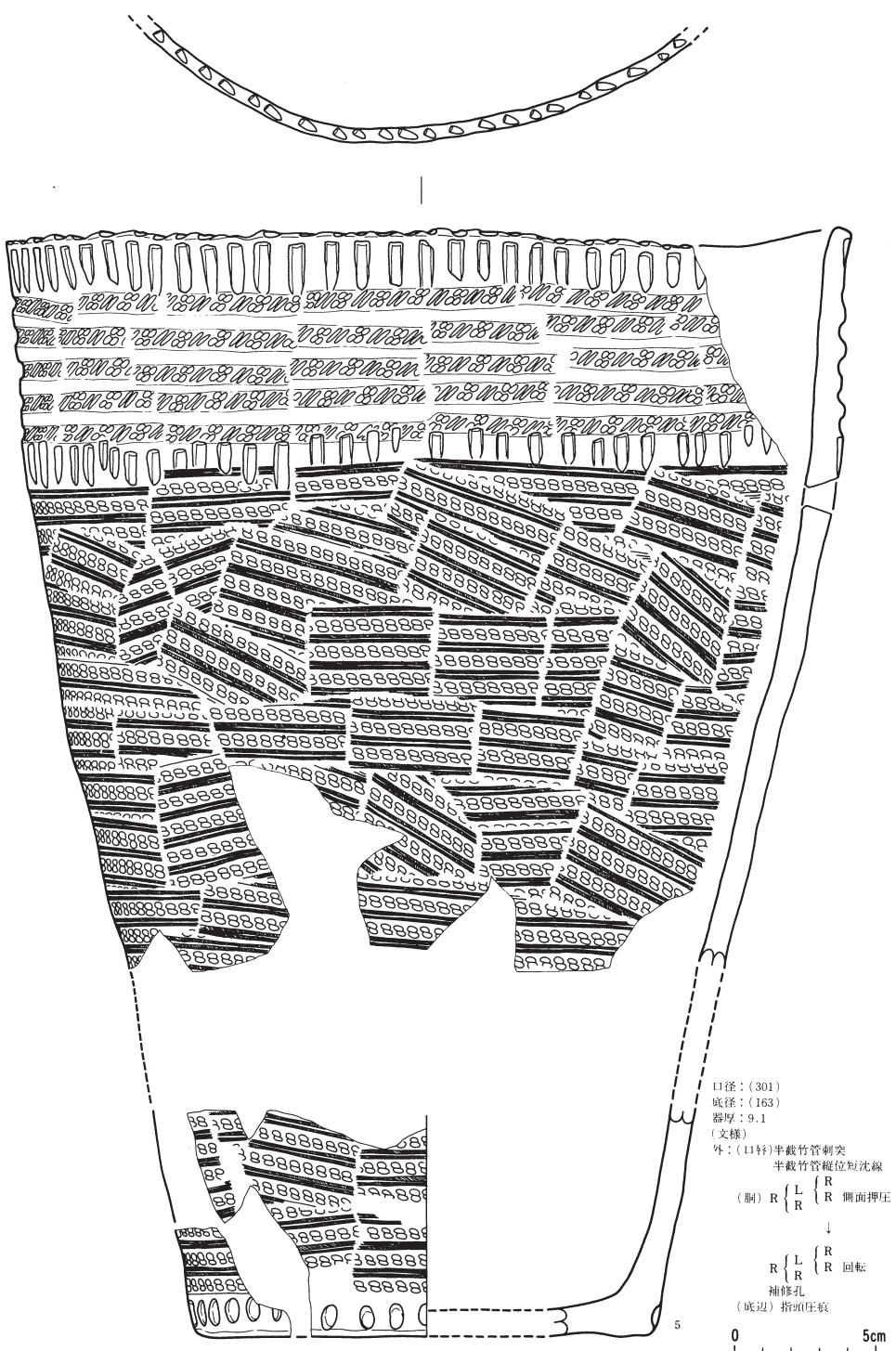
<形状> 長軸70cm、短軸65cmのやや不整な円形で、深さは32cmである。

<壁・床面> スリ鉢状を呈する。

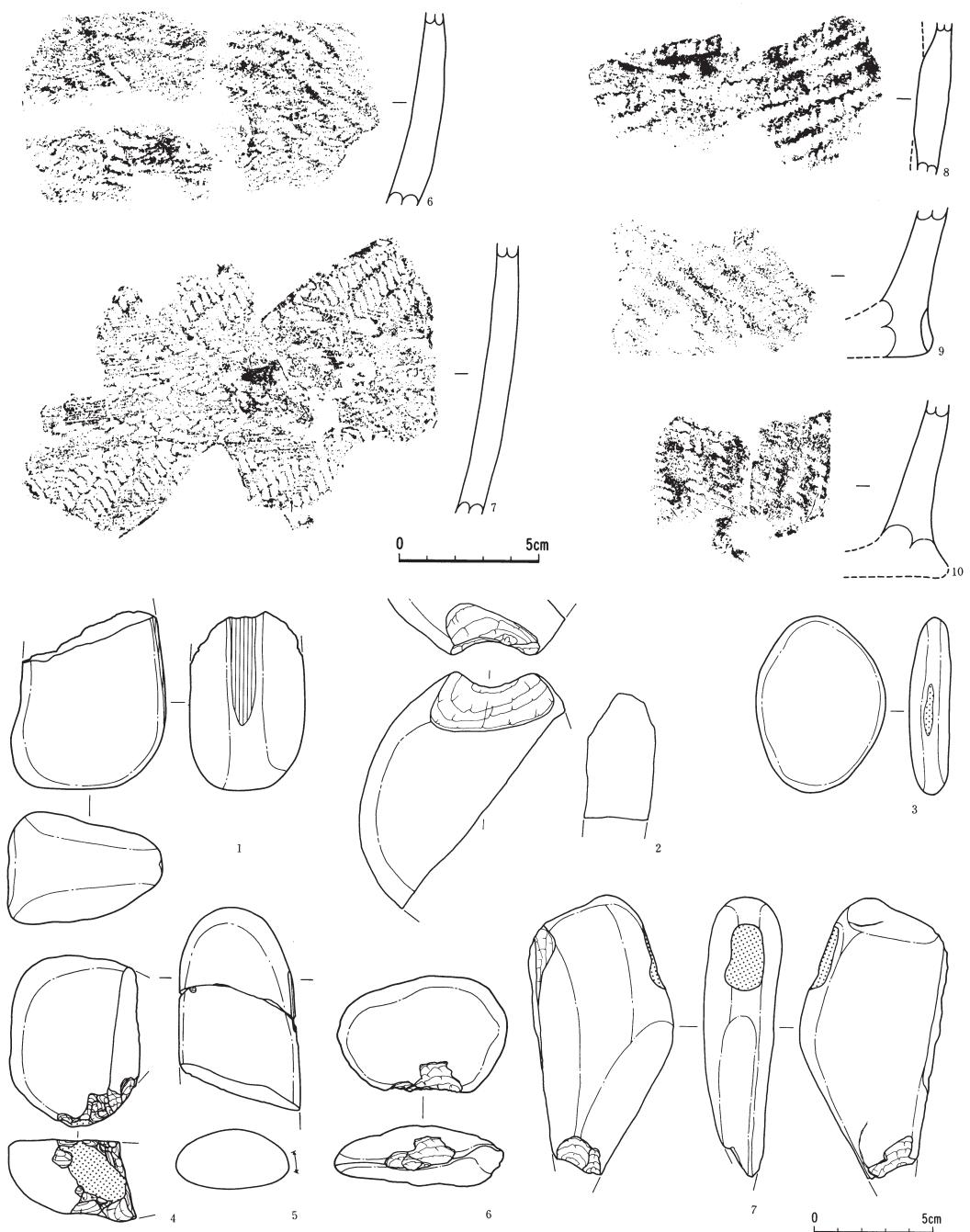
<出土遺物> 出土していない。



第42図 第12号土塙平面図



第43図 第11号土塙出土遺物(2)



第44図 第11号土塙出土遺物(3)

第13号土塙 (第45図・47図)

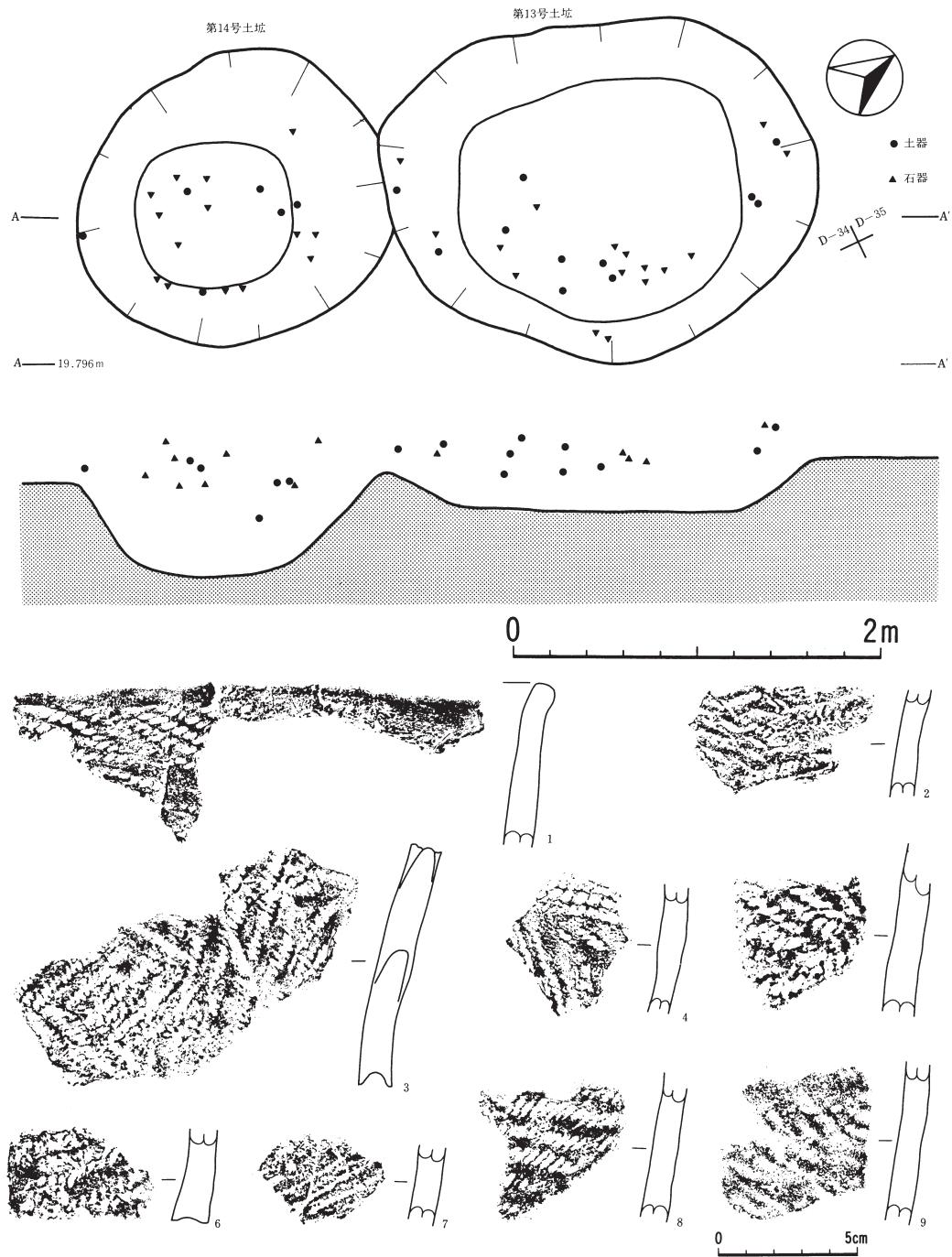
<位置> D - 34グリッドで検出した。第14号土塙と接するが、その前後関係は不明である。

<形状> 長軸 2 m70cm、短軸 1 m89cmの楕円形で、深さは27cmである。

<壁> 北側は38 南側は23 前後で立ち上がる。

<底面> ほぼ平坦である。

<出土遺物> 土器（第45図）すべて第6群土器（早稲田5類）に含まれる。底面直上のものはない。



第45図 第13・14号土塚平面図・第13号土塚出土遺物

1は、第14号土壙の1と同一個体であり、2は第6号住居跡の4と同一個体である。4のほぼ中央部には、原体の側面圧痕が施されている。

石器（第47図） 第14号土壙との一括で取り上げられたものが多く、本土壙のものであることが明確なのは、石槍2点とリタッチをもつ剥片が一点だけである。

第14号土壙（第45・46図）

<位置> 第13号土壙に接し、D - 34グリッドで検出した。

<形状> 長軸1m74cm、短軸1m61cmのほぼ円形で、深さ55cmである。

<壁> 45°～50°の傾斜で立ち上がる。

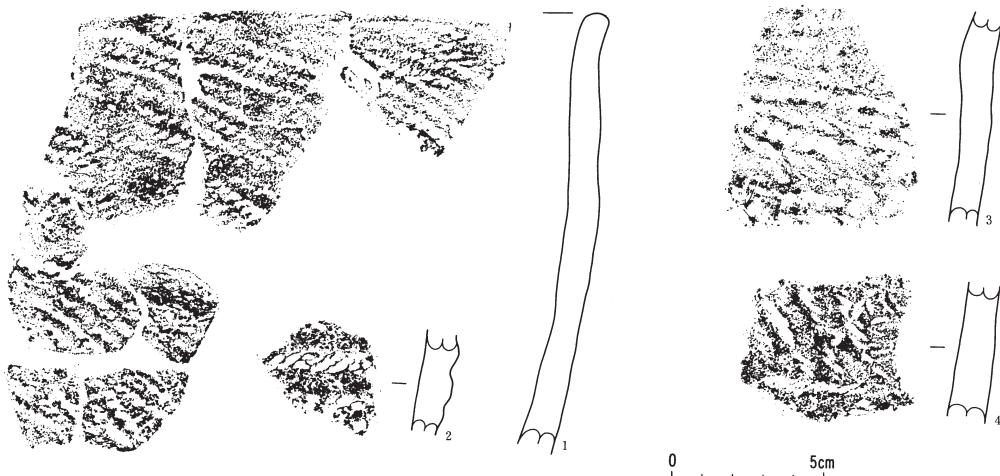
<底面> なべ底状を呈する。

<出土遺物> 底面直上のものはなく、すべて覆土の上層部からの出土である。

土器（第46図）すべて第6群土器（早稻田5類）である。

1は第13号土壙の1と同一個体であり、2は第11号土壙内出土の5と同一個体である。4は右撲りの繩2本をごく弱く右撲りにした原体で、ほぼ横位と縦位に回転施文したものである。

石器（第47図）本土壙出土であることが明確なものは、石槍、不定形石器、敲磨器類、剥片各1点である。



第46図 第14号土壙出土遺物

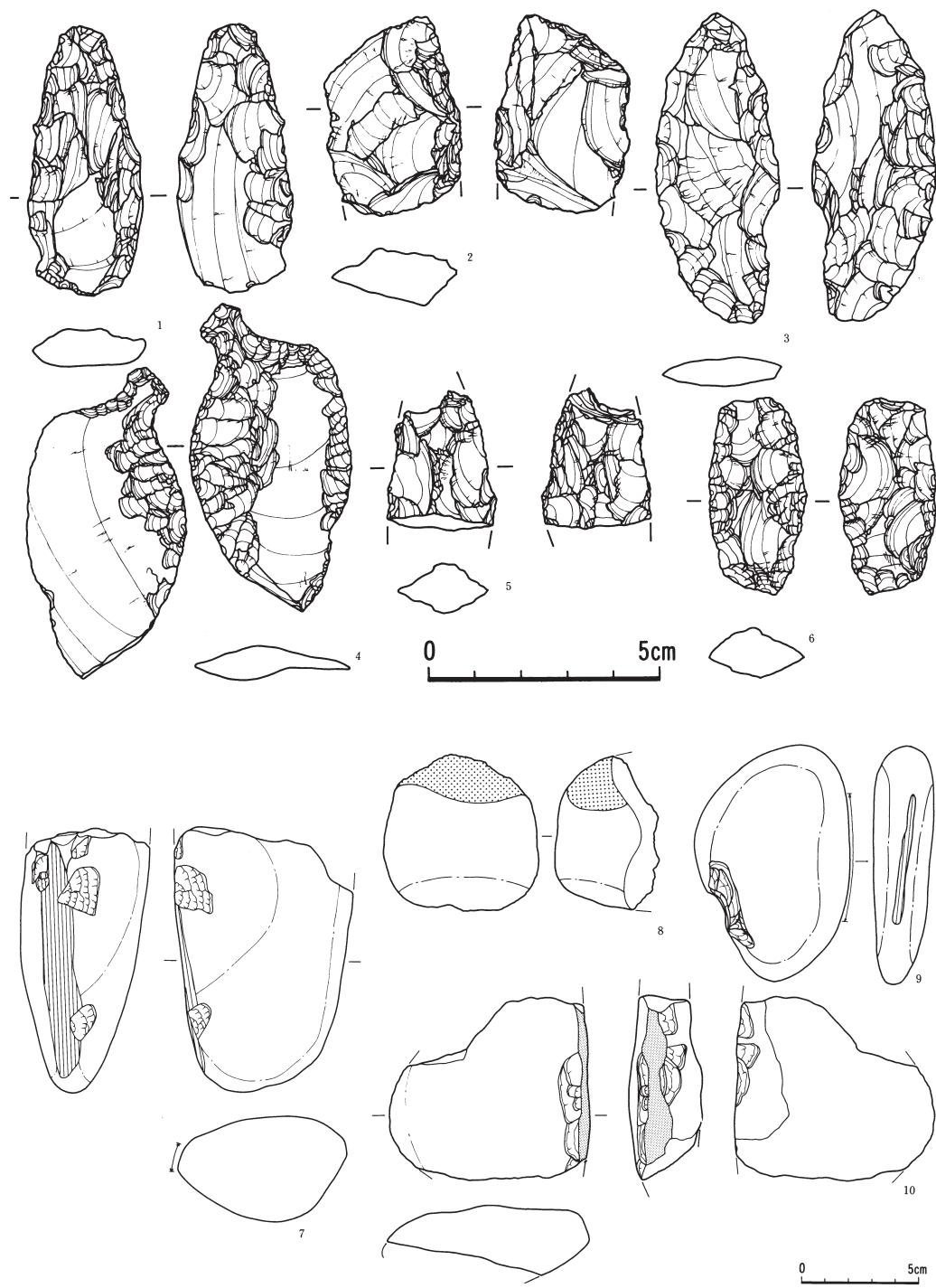
第15号土壙（第48図・同図1・2・5）

<位置> J - 39グリッドで検出した。

<覆土> 3層に区分できた。底面から7cmの厚さで焼土が堆積し、その上位の1・2層にも若干焼土粒がみられる。浮石粒の大きさは3層の方が大である。

<形状> 長軸1m40cm、短軸92cmの橢円形で、深さは21cmである。

<壁> 各壁とも60°前後の急な傾斜で立ち上がる。



第47図 第13・14号土塙出土遺物

<底面> ほぼ平坦である。

<出土遺物> 底面の焼土内から石匙等削器の類が3点出土した。土器はない。

第16号土壌（第48図、同図3・4）

- <位置> J - 39グリッドで検出した。第15号土壌に近接する。
- <覆土> 1層のみで黒褐色土である。5mm大の浮石粒を少量含む。
- <形状> 長軸1m18cm、短軸93cmの橢円形で、深さ11cmである。
- <壁> 20°前後で緩やかに立ち上がる。
- <底面> ほぼ平坦である。
- <出土遺物> 底面から磨製石斧と不定形石器が各1点出土した。

第17号土壌（第49～51図）

- <位置> M・N - 39グリッドで検出した。第1号土壌を若干切っている。
- <覆土> 全体的に類似するが、浮石粒の混入量や粒子の大小等による差から10層に区分した。
- <形状> 長軸4m22cm、短軸1m54cmの長楕円形で、深さは最深部で89cmである。
- <壁> 短軸では60°前後で「U字」状に立ち上がる。
- <底面> 中央部やや西寄りの部分に最も深い部分があり、西側に1段、東側に2段の細長い平坦部をもつ。

<出土遺物>

土器（第49・50図） 第2群（日計式繩文土器、1～3）、第5群（赤御堂式、4～7）、第6群（早稻田5類、8～14）、第7群（長土谷地群、17）が出土した。各々混在しており、本土壌は長土谷地群の時期と考えられる。

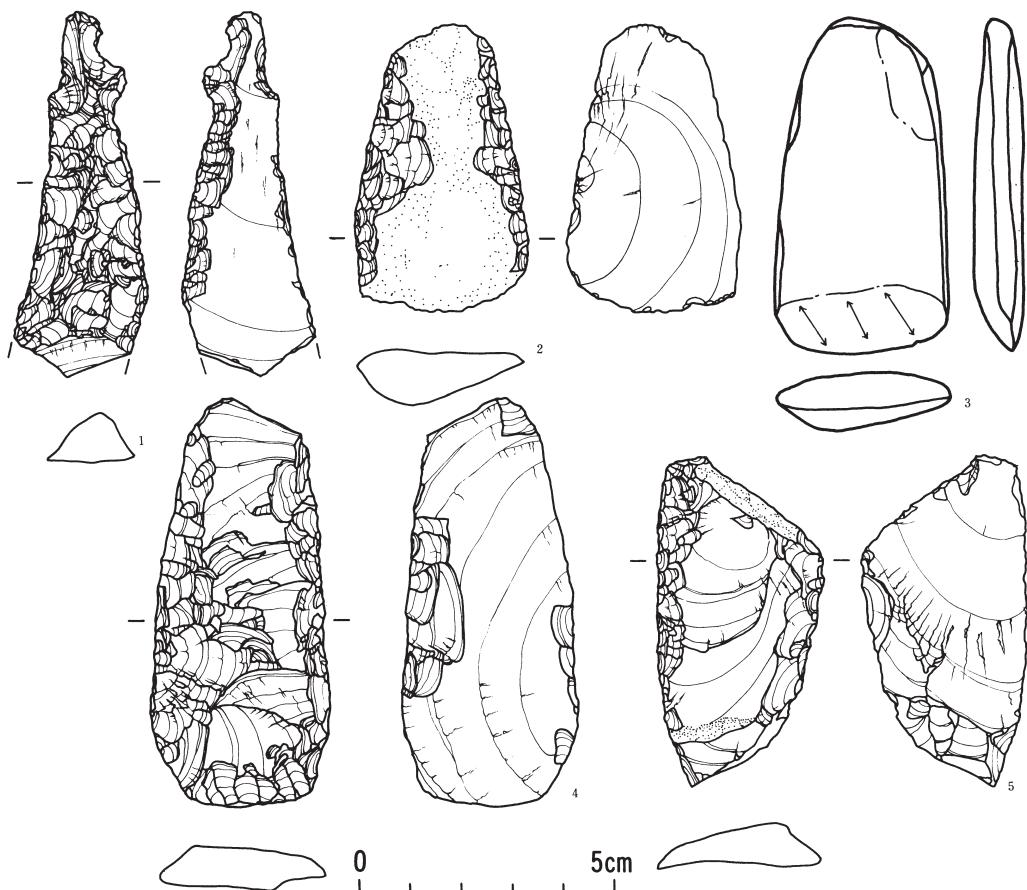
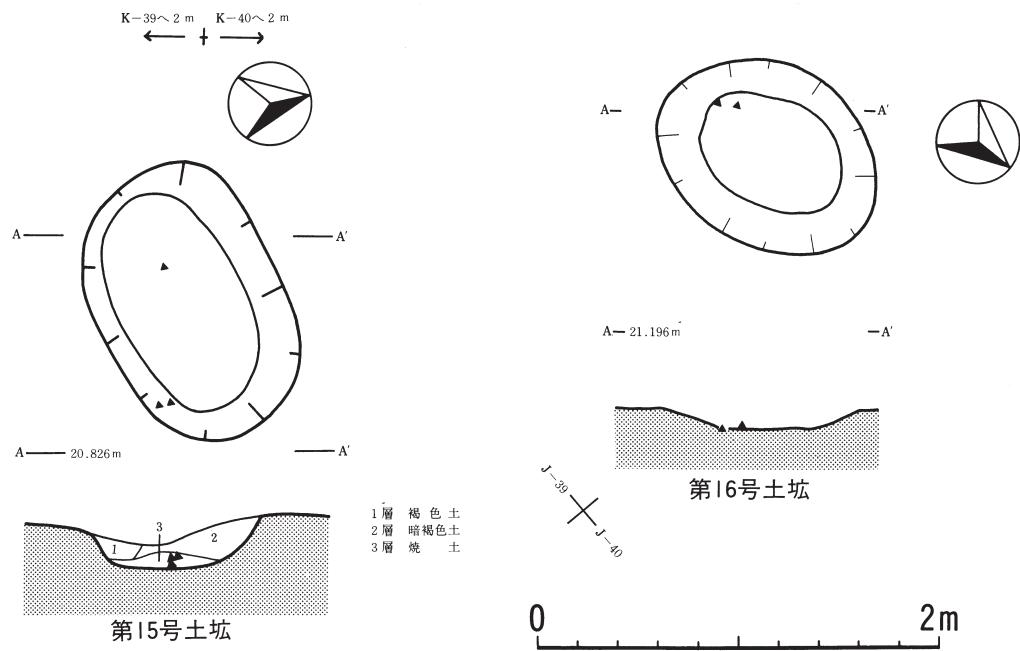
1には1条の沈線がみられるため、口縁部近くの破片であろう。繩文は0段多条によるものである。13・14は同一個体であり、直前段反燃によってほぼ完全に撫り戻した繩文である。17は丸底と推定されるもので、文様は結束しない異原体による羽状繩文である。原体の回転時には、繩端部を特に強く押捺している。

石器（第51図） 剥片石器ではトランシェ様石器（1）、石槍（4）、不定形石器（2・3）が出土し、礫石器では石斧（5・6）、石錐（7）、敲磨器類（敲石、9）、敲磨器類（石皿、8）が出土した。6はN - 40グリッド出土品との接合である。

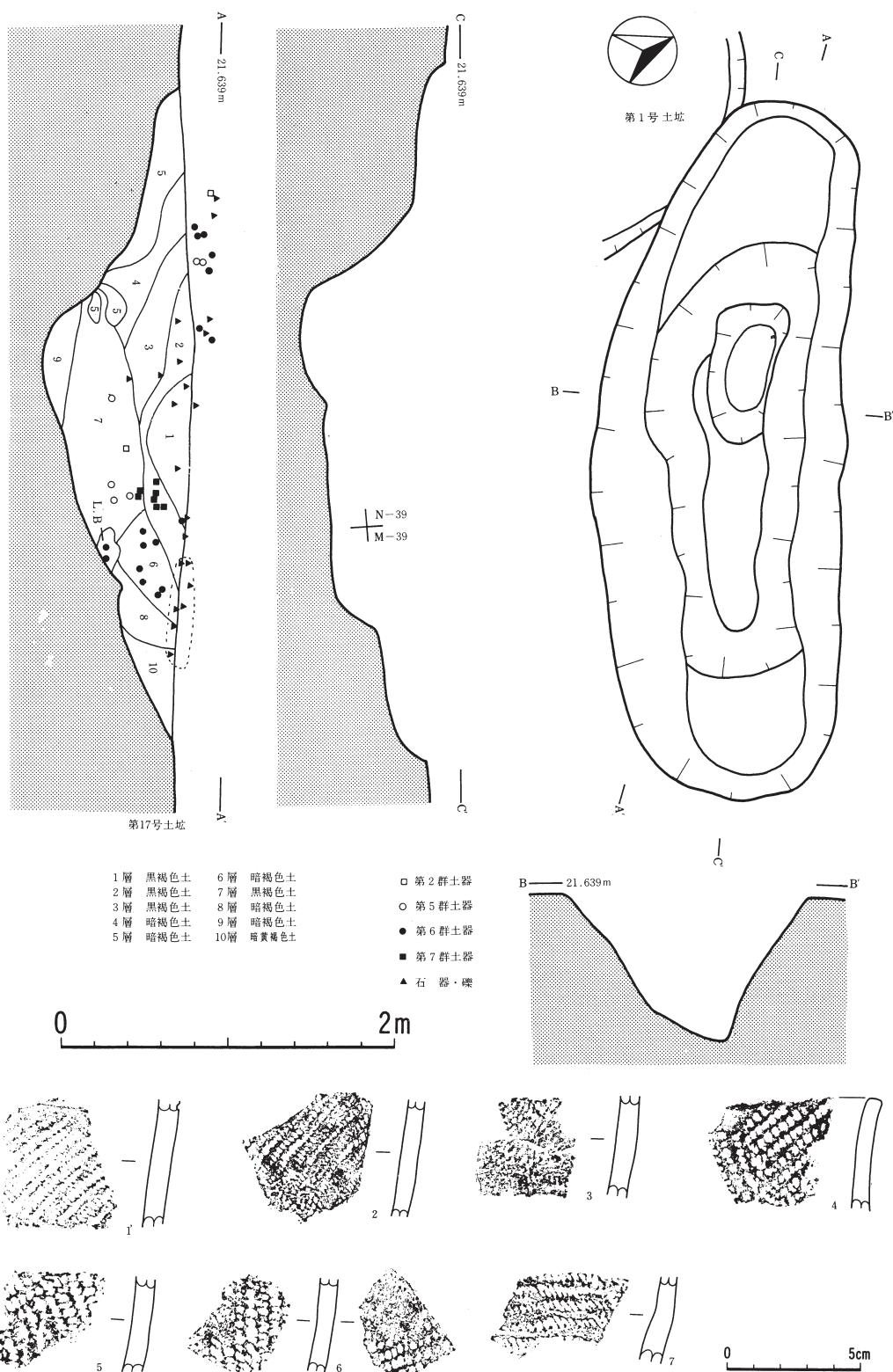
焼土遺構

F - 35・G - 35グリッド（径50cm）とF - 37グリッド（30cm×45cm）及びL - 37グリッド（径85cm）の3カ所で検出した。いずれも明瞭な掘り込みをもたず、焼土は2～8cmの厚さをもっていた。前2者は、第1層下部から第1層上部にかけて検出されており、第6群土器（早稻田5類）期のものと考えられる。後者は、削平された状態で確認されたが、周囲は第1層上部であり、前2者と同様の時期と考えられよう。

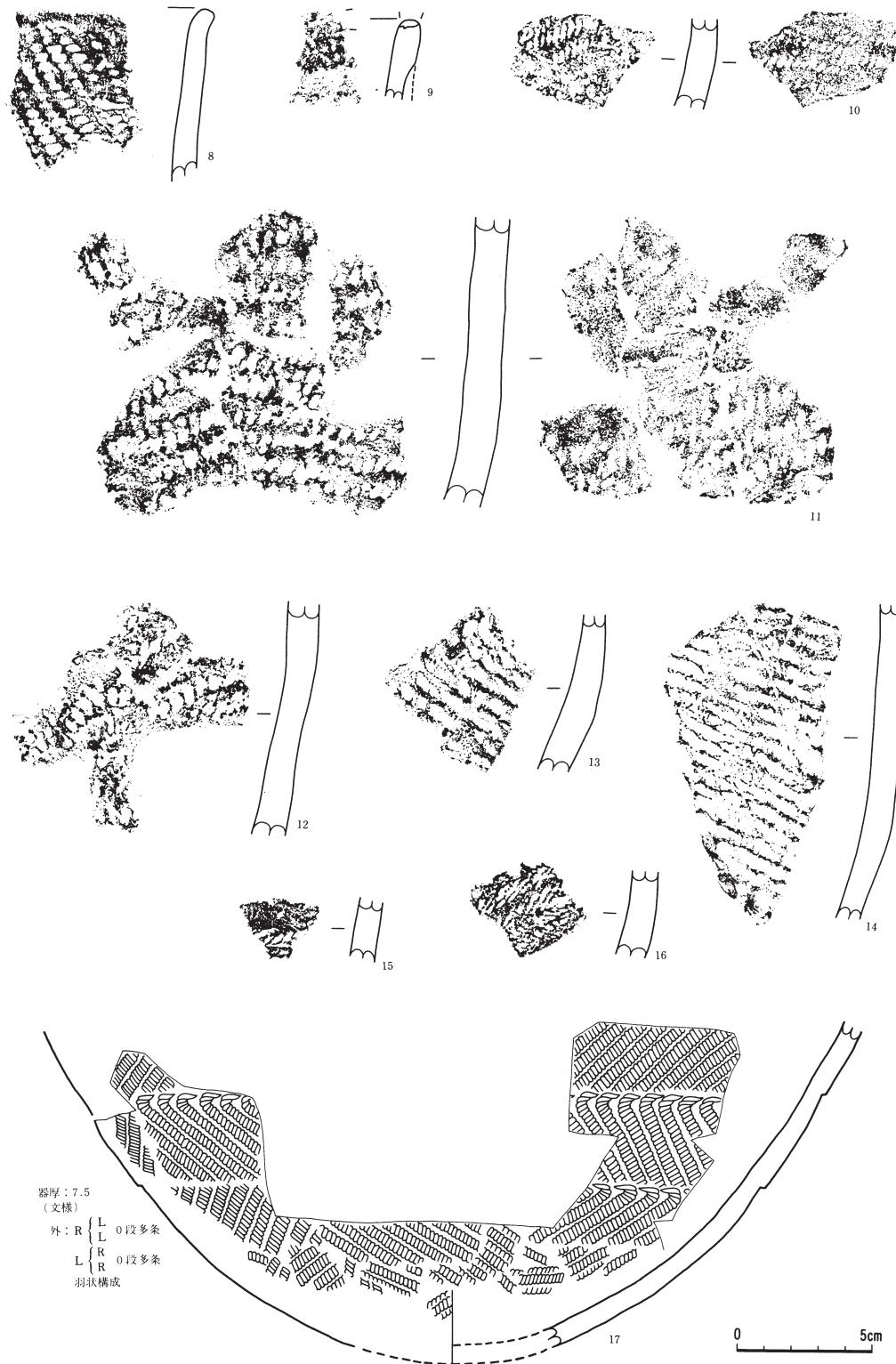
（三 宅 徹 也）



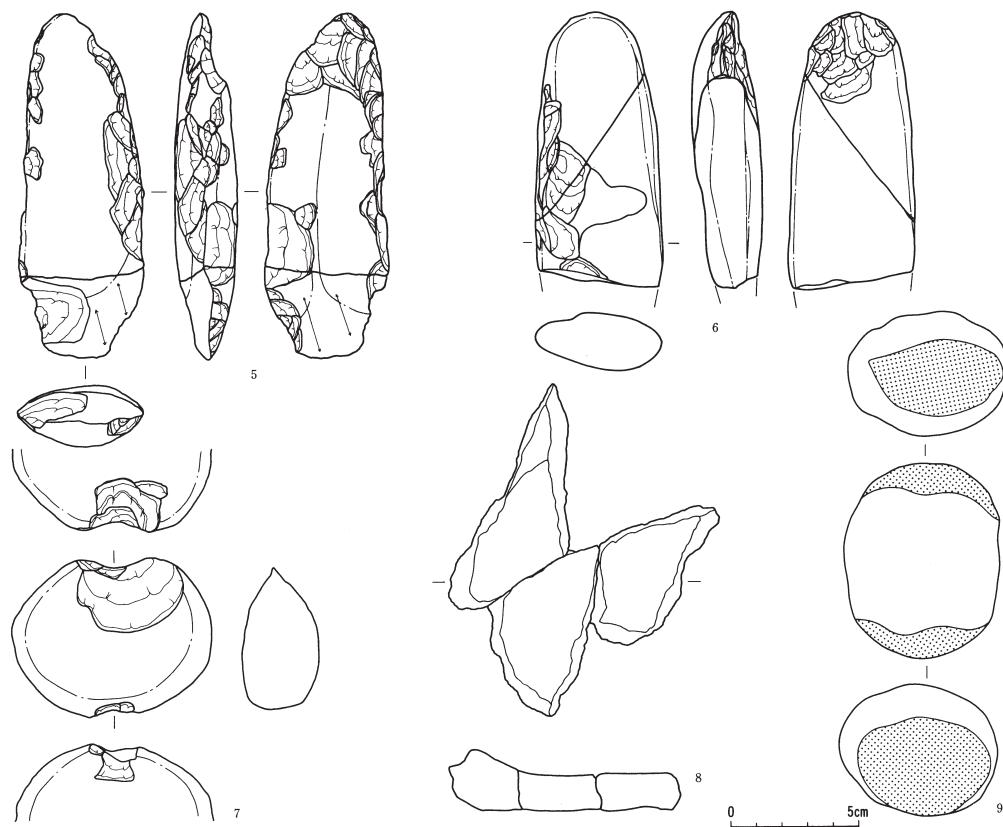
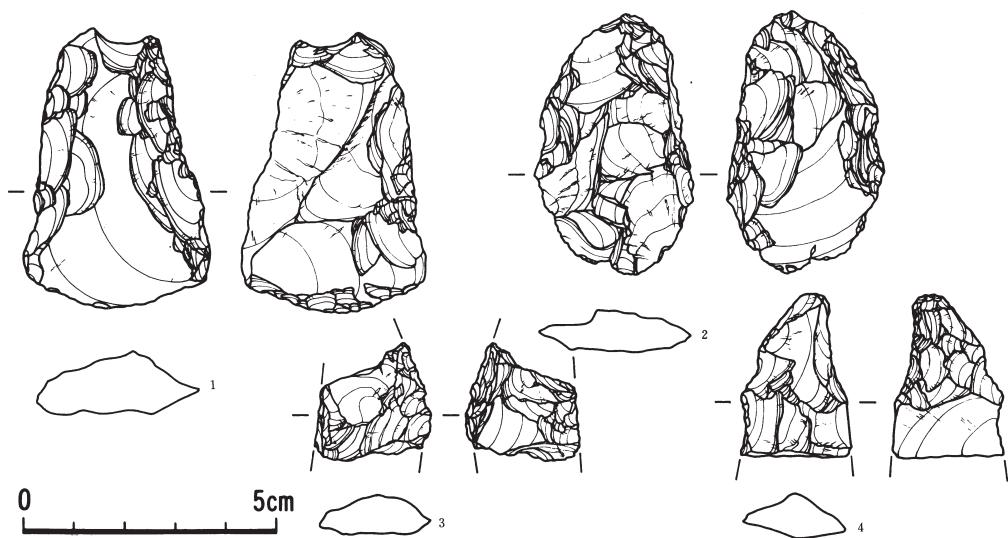
第48図 第15・16号土塙平面図・出土遺物



第49図 第17号土塙平面図・出土遺物(1)



第50図 第17号土塙出土遺物(2)



第51図 第17号土坑出土遺物(3)

第2節 遺構外出土遺物

1 土 器

第1群土器（第53図1）

爪形文が施文された土器で、鴨平(2)遺跡（青森県教育委員会1983b）出土の第1群土器に類似するものである。

F-31グリッドから、親指の爪大のものが1点出土した。出土層位は第1層で、本遺跡の主体をなす第6群土器と同一である。

器厚は、4mmと非常に薄く、焼成は良好で堅緻である。色調は黄灰色を呈する。胎土には微細な砂粒を含むが、植物性纖維は含まない。

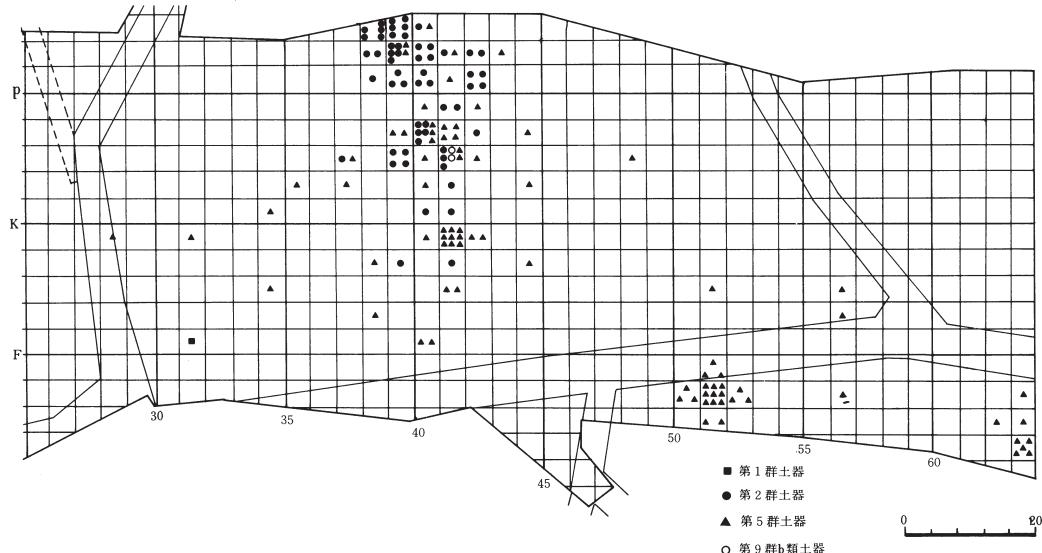
爪形文は、長さ5~6mmの浅く直線的なもので3段施文されている。各爪形文の間隔は、1~2mmと狭く、中段で5個施文されている。

第2群土器（第53図2~29）

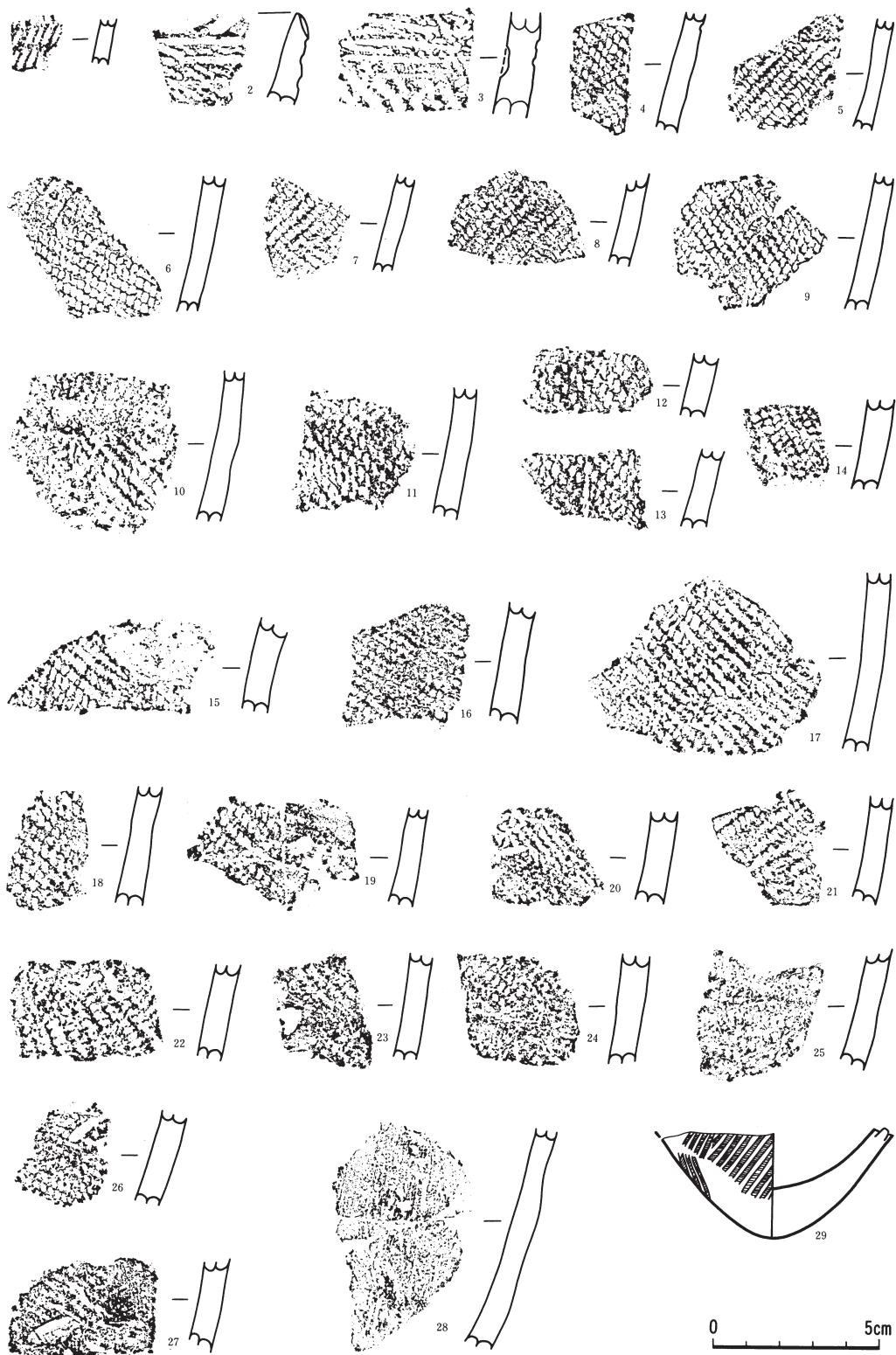
鴨平(1)遺跡（青森県教育委員会1983a）の第1層出土土器や、馬目順一氏が「東北系羽状繩文土器」と称したもの（馬目他1982）に相当する。

<分布と層位>

第17号土壤出土の3点を含め、合計63点出土した。その大半はM~R-38~42の間の諸グリッドから出土したものであるが、特に、南側斜面に寄ったP~Rに集中していた。出土層位は、第1・2・5層と様々であり、また一括処理されたものが多いため主たる包含層は不明である。



第52図 第1・2・5群・9群b類土器分布図



第53図 第1群(1) 第2群 (2~29) 土器拓影図実測図

<個体数>

15個体前後であり、5と7、6と8、10~13、17・19・20・22~25がそれぞれ同一個体である。また、9は6と同一個体の可能性がある。

<器形>

尖底の深鉢形であるが詳細は不明である。

<胎土>

胎土には、多量の食物性纖維を含み、器面の内外にその走痕が明瞭である。砂粒の含有は、5~9に目立つが、他は非常に少ない。一般に、白色凝灰岩の粉末と考えられるものを極く微量に含み、また、沼鉄の小粒子を微量に含むもの(6・7・9・28)もある。粘土に緻密なものを使用しているが、焼成がさほど良好でないためか撫るとその微粉末が付着する。色調は明黄褐色を呈するものと、黃灰色を呈するもの(2・4・15・16・18・26)とがある。

器厚は、5~9.5mmの間で6~7mmのものが多く、全般的に薄いといえる。内面は、砂粒のやや大きめのもの以外、横位に平滑に調整されている。

<口唇部>

口唇部をもつものは2の1点だけである。外削ぎされており、先端の丸い棒状工具による斜位の短沈線 刻目 を施している。

<口縁部文様>

口縁部及び口縁部付近と考えられるものは、第17号土壙出土のものも含めて4片である。すべて、繩文施文後に先端の丸い棒状工具により浅い沈線を施したものである。2で2本、3では4本、4では1本観察される。

<文様>

a. 繩文を施文したものの(2~26・28)

沈線以外の文様は、無文のもの2個体(27・28)を除きすべて繩文である。これには斜行繩文と、羽状繩文とがある。斜行繩文には、無節(29)・単節・複節(10~13・18)がある。左撫りが1点(21)ある以外、すべて右撫りである。羽状繩文は、無結束の撫りの方向が異なる原体によっている。なお、5・7、及び6の上段は、O段多条による原体である。

繩文の施文は5~9を除き、全般に浅く不明瞭である。また、節の大きさは、長さ2.2~3.9mm、幅1.4~2.3mm、平均2.9mm×1.9mmと非常に小さい。

b. 無文のもの(27・28)

5点で2個体分である、28の器面に、若干の擦痕がみられる程度で、他は纖維の走痕だけである。

第3群土器(第54図30~33)

貝殻文系の土器である。第2号土壙内出土の1点を含め4点出土した。これをa～cの3類に細別する。いずれも、胎土には植物性纖維を含まないが砂粒を多く含み、白色凝灰岩粒は少量である。

a類(30) 寺の沢式(名久井1974)にやや類するものである。

波状口縁を呈し、口唇は若干外側を削がれている。口唇上面に貝殻腹縁刺突文を施文している。器面装飾は、アナダラ属の貝殻による腹縁文と、先端の尖った棒状工具による刺突文である。刺突文は8ヵ所に施文され、約4mmと深いものである。2～3条の横位に施文された貝殻腹縁文により文様帯を区画し、口縁部では縦位に、下位では斜位に貝殻腹縁刺突文を施文している。

b類(31・32) 物見台式(江坂1950)に相当すると思われる。

31は波状口縁を呈する。縦位の貝殻腹縁文と、2ヵ所に深さ約7mmの刺突文をもつ。32は胴部破片である。横位の貝殻腹縁文と、その上約5mm(破損部)に横位の沈線が施文され、その沈線文上に1個の刺突文がみられる。器面内外は良く調整されている。

c類(33) 無文土器であるが、器面の内外に調整痕と思われる擦痕をもつ。

第4群土器(第54図34・35)

条痕文系の土器で、ムシリ式(江坂1955)に相当するものである。

2片は同一個体である。器面の内外に貝殻条痕文をもち、また、器表面に斜位の沈線文を施文している。

第5群土器(第54図36～第55図71)

早稻田4類(佐藤他1958)赤御堂式(江坂1957)にほぼ相当するものである。

<分布及び層位>

破片数は153点で、全体的に散在しているが、その中では第1号土壙周辺や、50～65に幾分集中する傾向がみられた。包含される層位は、第層又は第層である。

<器形>

復原し得たものは、第1号土壙出土の1個体(第24図1)だけで、底部の角度が鋭角的な尖底の深鉢形土器である。

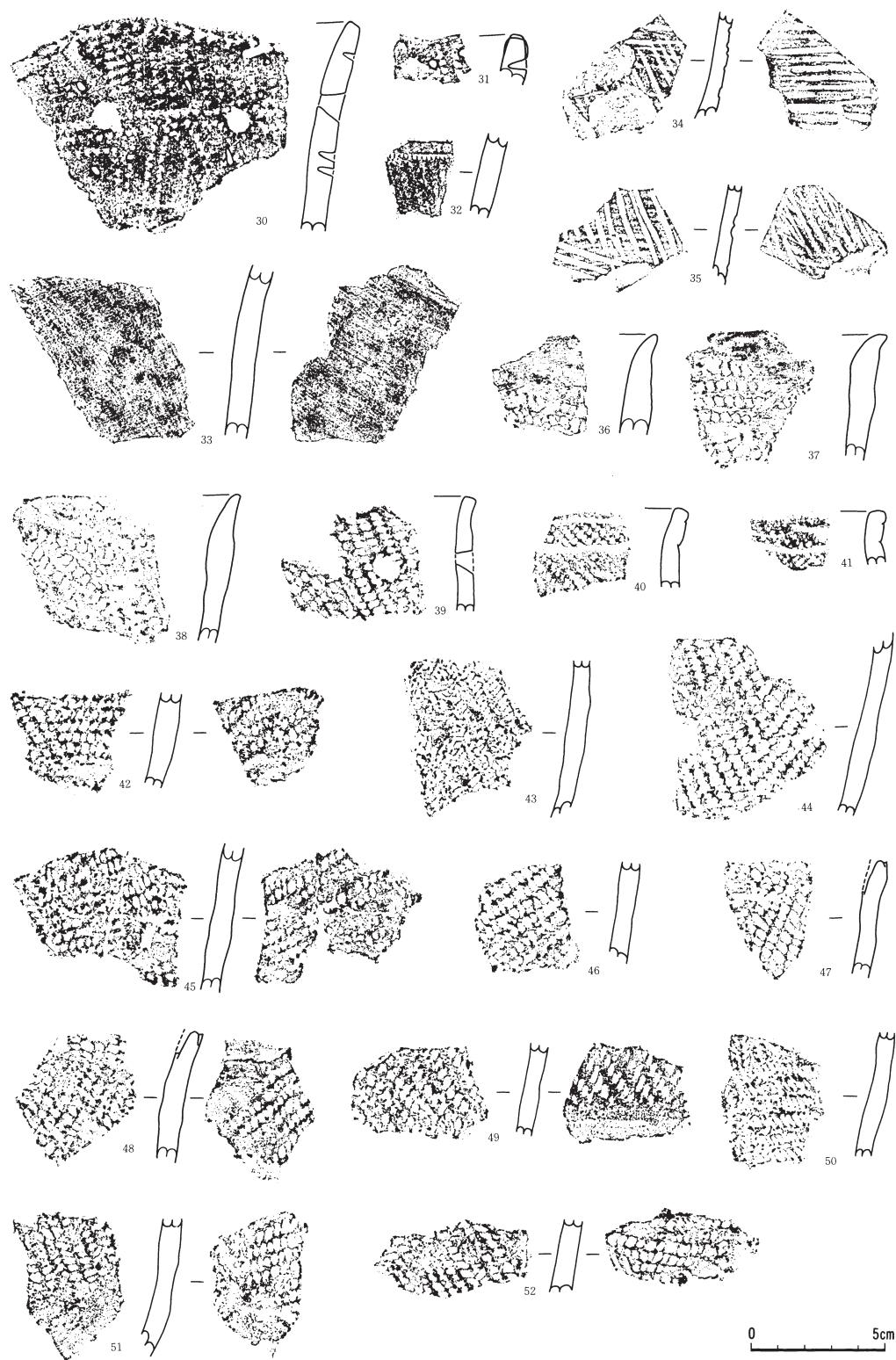
<胎土等>

胎土には、砂粒、白色凝灰岩粒、沼鉄を含むが、植物性纖維は含まない。

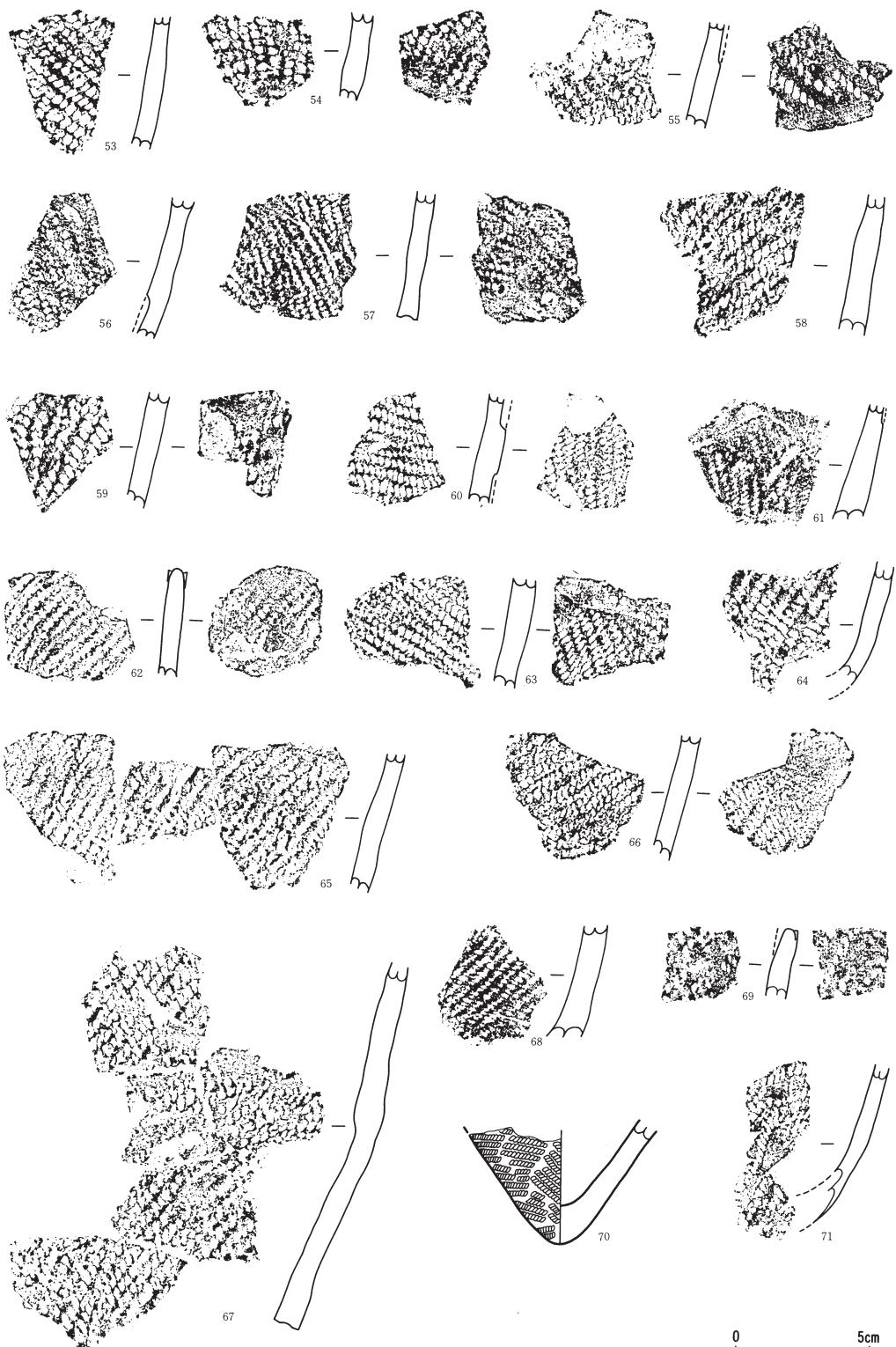
器厚は、36～38の口唇部付近及び58や67の底部近くが10mm前後である以外、5～7mm前後(平均6～9mm)で、第5群土器に比べて非常に薄い。また、粘土帶の幅は3mm前後である。

<接合>

接合面を観察し得るものは少ないが、接合部の断面部状は第5群のそれに類似する。しかし、



第54図 第3群(30~33) 第4群(34~35) 第5群(36~52) 土器拓影図



第55図 第5群土器拓影図実測図

下方への粘土の引き伸ばしは余り長くはなく、その結果、特に肥厚したものは67以外はない。接合と繩文の施文順序を観察し得たものはない。

<口唇部>

口唇部資料は、第1号土壙出土資料以外では6点で4個体分である。

36・37(同一個体)及び38は、口唇部は外側に薄く摘み出されて内削ぎ状であるが、その直下は分厚く肥厚している。39は極くわずかに「く」の字状に外反している。40・41は同一個体で、口唇部を「く」の字状に外反させ、この部分に幅1cm前後の粘土紐を貼り付けている。

<文様>

1. 口唇部

口唇部に施文のあるものは、1号土壙の2個体(第24図、1・2)以外にはない。この2個体は、棒状工具による刺突文を施文したものである。

2. 器内面

内面に繩文を施文したものは、約半数にみられ、器表面と同一の原体を使用している。無文のものの多くには、指頭の圧痕が残されている。

3. 器表面

全体に繩文を回転施文しており、特に文様帯を構成したものはない。繩文の回転方向は横位施文のほか、方向を変えて施文した不規則な羽状繩文であるもの(38・29・44ほか)も多い。

4. 繩文原体

用いられる原体には、O段多条によるもの(43・45ほか)と、通常のRL・LR、及び綾杉状の繩文(71・第1号土壙第24図2・10・11)とがある。右撲りと左撲りはほぼ同数である。

第6群土器(第58~77図)

早稻田5類(佐藤他1958)に相当するもので、本遺跡の主体をなす土器である。

<分布と層位>

30 ~ と40 ~ の間に主として分布していた。この中でも、30 ~ 40にかけては特に集中する部分と散在する部分とがみられ、密集部分にはユニットの名称を用いた。なお、分布状況等については第3節において述べることとする。包含される層位は第 層を主体とするが、一部第 層にも含まれていた。

<土器の製作>^(注)

1. 胎土

胎土には、植物性纖維・砂粒・白色凝灰岩・沼鉄を含む。

最も普遍的に含有されているが植物性纖維と砂粒であるが、個体によりその含有量に差がある。植物性纖維は、量の多少にかかわらず、器面の内外でその走痕が観察されるが、特に多

量に含むものや、纖維がほぐれずまとまっている部分などでは、器面が剥落するなど強く荒れているものが多い。砂粒は、全般的に細かなものを混入しているが、なかには径 5 mm ほどの大きなものを多量に含む例もみられる。

白色凝灰岩と沼鉄は、大半の土器に含まれるが、いずれか一方を欠くものもあり、また、量の多少、粒子の大小等の差が大きい。白色凝灰岩は、径 7 mm の大きなものから粉末状のものまで様々である。沼鉄は、いわゆる高師小僧と称されるもので、大きなものでは径 5 mm、長さ 15 mm ほどの管状のものがそのまま含まれているものもあるが、多くはつぶされた粒子状のものである。

2. 粘土帯の接合と施文

a. 粘土帯

粘土帯の幅は、上下に接合面を観察できる資料からみると、2 ~ 3 cm のものから 5 ~ 6 cm のものまであるが、後者が非常に多く、全体的に幅の広い粘土帯の積み重ねによって製作されていったことがわかる。その厚さは、6.4 ~ 15.1 mm、平均 10.3 mm と厚手である。

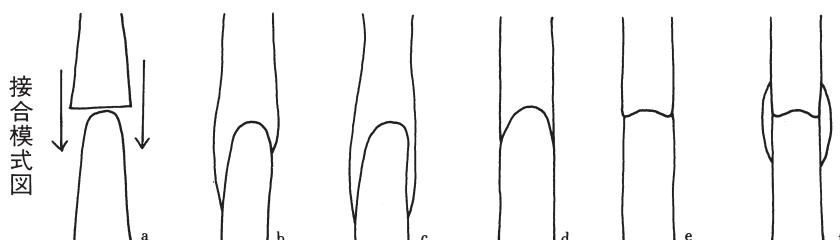
b. 接合面

接合面の断面形状は、口縁部側が滑らかな凸状、底部側は滑らかな凹状をなすものが圧倒的である。器表面をみると、口縁部側は 2 cm 前後の幅で剥落し、その面にも器表面と同一施文の繩文が観察され、その端部の断面形状とともに疑似口縁を呈するものが多い。したがって、粘土帯の積み重ね以前に繩文を施文していることが明瞭で、粘土帯の積み重ねは、下位の粘土帯がかなり乾燥してから行われたことになる。同様の剥落が内面にもみられるものが多い。

剥落した粘土の厚さは、表裏各々 2 ~ 6 mm、平均 4 mm であるため、剥落しなければかなりの厚さになるわけである。したがって、接合面を観察し得ない破片であっても、特に分厚い部分が接合部であること、及びその間隔によって粘土帯のおおよその幅を知ることができる。

c. 接合の手法

粘土帯に繩文を施文した後、その上部に別な粘土帯を重ねるわけであるが、下位の粘土帯の表裏面を覆う粘土が剥落する例が多い一方、これに接する上位の粘土帯の底部側の表裏が剥落した例は、それと思える 1 例だけで（第69図201）模式図 f のような粘土の重なりを観察し得る例も 1 例（第68図195）しかない。このことから、上部に比べて下部が厚い粘土帯を作り、これを重ねて表裏両面とも下方に 2 ~ 3 cm 引き伸ばす手法がまず考えられよう。全般に内面のほ

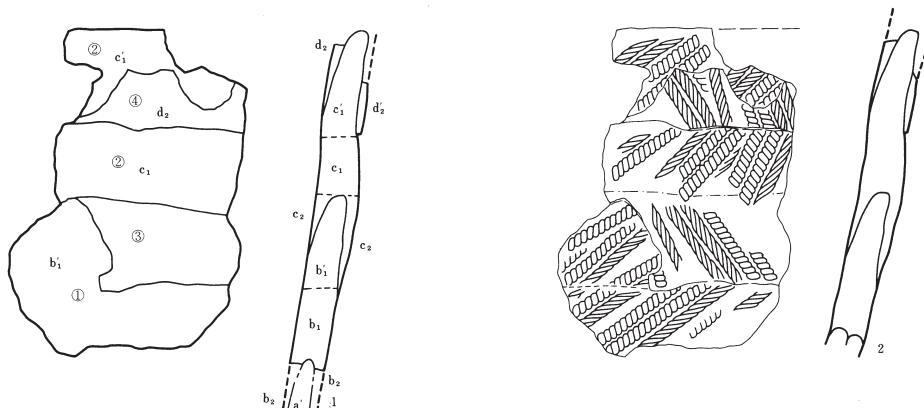


うが表面よりも長く引き伸ばされている。これにより、底部側の接合部の断面形状が深い凹みを呈することになる。もう一つの手法は、粘土帯を重ね、更に別な粘土を接合部の表裏に貼り合わせる手法であるが、接合面の断面形状・剥落のあり方から、この手法によったと推察されるのは特に上記した2例しかない。

以上のような作業を繰り返し器形が制作されるのであるが、これを明瞭に示す資料があるので、それにしたがい制作順序を要約してみる。

- 1 . a 粘土帯に幅5.4cmの b 粘土帯を積み重ね、下方に引き伸ばす（ a 粘土帯及び b 粘土帯の引き伸ばされた部分は剥落）
- 2 . b 粘土帯に繩文を施文（ の部分）
- 3 . b 粘土帯の上に幅5.4cmの c 粘土帯を積み重ね、下方に 3 cm引き伸ばす（覆われた部分 b₁・覆った部分 c₂）
- 4 . c 粘土帯に繩文を施文（ と の部分）。・ のいずれが先か不明であるが、第3工程の結果、すでに繩文が施文された b 粘土帯の b₁部分は覆われているため、新たに施文しなければならない面は幅8.5cmとなっている。したがって、この幅の施文は1回では困難で、施文を分けて行ったと考えられる。とではその施文方向を変えており、また b 粘土帯の引き伸ばされた部分（ b₂）上に施文された繩文 も同じ施文方向を探っている。これは、繩文を羽状に構成するために意識的に施文方向を変えた可能性が強い。
- 5 . 4 以降は3・4工程の繰り返しと思われる。

以上の工程にしたがって器形が作られるが、やわらかい粘土帯の引き伸ばしや繩文の施文に



接合と施文模式図

伴って、器面内に指頭の凹凸が強く残されるものと思われる。なお、器形の製作は、まず底部から作られるが、器内面の処々に施文されることのある繩文や条痕を施文する段階を知り得る資料はない。しかし、器表面の繩文と相前後して行った可能性が強い。

3. 器形

完全に復原し得たものではなく、第11号土壙内出土土器（第43図5）がそれに近い唯一のものである。したがって本類土器の器形については、口縁部や底部等の形状から類推することにする。

a. 口縁部

口縁部資料は、微細なものや遺構内出土分も含めて174個体と少ない。ただし、明らかに同一個体と断定し得たもの以外は別個体として処理したため、実数は更に少ないのであろう。

緩やかな4波状口縁を呈すると思われる1例（第58図72）を除き、すべて平縁であるが不規則な小波状を呈するものが多い。口縁部の立ち上がり状態は、ほぼ直立するもの、やや外傾するもの、強く外傾するものなどがみられるが、全体的には内湾気味である。また、口縁部近くが若干「く」の字状に外反するもの（第63図113外）も、多々みられる。

口径を推定し得るものは少なく、最小で17.6cm、最大で38.9cm、平均で29cmである。

口唇部形状は、丸みをもつものが圧倒的に多く、平坦に近いものがこれに次ぐ。また、口唇部は若干薄く作られるが、肥厚したものもある（第67図181・187）。

b. 底部

底部はすべて平底である。小破片を含めても77個体分しかなく、このうち遺構内出土が15個体分を占める。

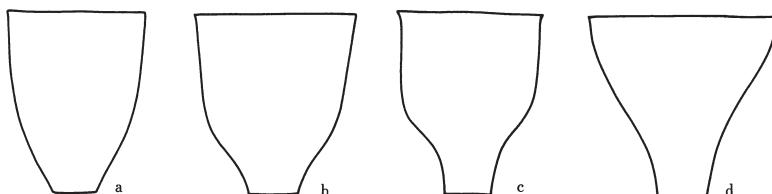
底径を推定し得るものは18点で、最小5.6cm、最大16.3cm、平均9.7cmである。

底部周縁が張り出して「く」の字状を呈するものは、極くわずかなものも含めて12点で、15%を占めるにすぎない。上げ底を呈するものは19点で約25%である。底面が小さいため不明なものの中に上げ底であるものが含まれているとしても、40%以内と考えられる。第30図1が約9mmの強い上げ底を呈するが、他は2~4mmの極く弱いものである。

立ち上がりは、第62図91のように直ちに大きく外傾する例は少なく、多くは若干直立し、その後やや内湾気味に強く、あるいは弱く外傾しながら立ち上がる。

胴部

立ち上がり状態には、ほぼ直立するもの、やや外傾するもの、大きく外傾するもの、底部側にやや膨らみをもち口縁部側がほぼ直立するもの等がみられる。



器 形 模 式 図

以上に基づき、本類土器の器形は次のように推察される。

- a . 底部から口縁部へ緩やかに立ち上がる直線的なもの。
- b . 底部から大きく開いて胴部下半に膨みをもち、口縁部へは緩やかに立ち上がるものの。
- c . 底部から胴部中央まで緩やかに立ち上がり、胴部中央に膨みをもって、口縁部へは緩やかに立ち上がるものの。
- d . 底部から胴部中央まで緩やかに立ち上がり、口縁部へはやや内湾気味に大きく開くもの。
なお底径は口径の約 $1/3$ （恐らくはそれ以下であろう）と極端に小さい。器高との関係は不明である。

<文様>

施文部位は、内面・口唇部・口頸部・胴部・底部とすべての部分が対象となっている。また、種類は、各種繩文原体による回転文・圧痕文・指先による指頭圧痕文・竹管や棒状工具による沈線文・刺突文・貝殻による条痕文などがみられる。繩文による文様はすべての部位に、沈線文や刺突文は口唇部及び口頸部に、指頭圧痕文は口唇部・口頸部・底縁部に、また、貝殻条痕文は器内面にそれぞれ用いられている。

1 . 器内面

内面に繩文ないし条痕文、または両方を施文したものがある。個体分けしていないため、その占める割り合いは不明であるが20~30%と思われる。施文が全面に及ぶと思われるものは少なく、処々に施文され、その占める面積は恐らく内面の $1/4$ 以下であろう。

2 . 口唇部

口唇部に何らかの施文をしたものは、不明2個体を除く174個体中46個体で、約27%を占める。繩文を施文したものは20個体で、その手法には、回転施文・末端刺突・側面押圧と、撚糸文を施文したものが1個体（第67図187）ある。竹管や棒状工具を用いたものは15個体で、これには深い刺突文・鋸歯状の刻目文・同一方向の刻目文がある。また、指頭圧痕文を施文したものは11個体ある。

3 . 底部

77個体中底部に繩文を施文したものは、39点で約50%、無文が15個体で約20%を占めるが、このほか残存する底面積が小さすぎるため不明のものが23個体ある。したがって底面に繩文を施文するものの割合は更に高率となろう。使用する原体は胴部のそれと同一である。

底部の外周縁に指頭の圧痕文をもつものが33個体で約43%、繩文を回転施文したもの2個体（第62図97・98）繩文原体の側面圧痕のあるもの1個体（90）何ら施文のないもの41個体で約53%である。指頭圧痕は、主として指先を底面側に向けて押し付けたもので、個体によりその強弱に差があり、最も強いもので深さ4mmくらいである。各圧痕の間隔は、広いもので1.5cm前

後で、この場合 9 個の圧痕が巡っている。

4 . 器表面

繩文原体

器表面において、文様構成をなすものは少なく、大多数は单一の繩文原体を全面に施文したものである。これを口縁部資料174個体（不確実なものは別個体として扱ったため、厳密には150個体前後と思われる）中、微細破片のため原体の判別が不明のもの53個体分を除く123個体に限定してみると、66個体分約54%が単節の繩文、圧痕綾杉状を呈する特殊な繩文が49個体約40%、直前段反撫りの繩文 2 個体、結束第 1 種羽状繩文 2 個体などである。一方、複節の条をもつものは第43図 5 を除き全くない。このように、前 2 者の繩文が圧倒的多数を占めるが、更に原体そのものでは、いずれも 0 段多条によるものが多く、一般に節が大きく、また、各条間が大きいことなどがその特徴として挙げられる。

a . 2 段単節の繩文

ほとんどすべて、通常の、ないしは 0 段多条による単節の繩文であるが、第60図78は、0 段多条による R 繩 2 本と通常の R 繩 1 本を左撫りにしたものである。器面にみられる節の大きさは、長さ 2.8 ~ 10.4mm、幅 1.9 ~ 5.8mm とかなり変化に富むが、その平均は長さ 6.1mm、幅 3.1mm と他の群に比べて非常に大きい。^(注2) このように節が大であることは、ある程度条間が開くことにもなるが、かなり強く施文されているにもかかわらず、その条間が 7 mm 以上開くものも多い。したがって、単に原体そのものが太いだけでなく、原体製作の際の撫り合わせがかなり弱いことによって生じたものと考えられ、これはまた圧痕綾杉状と称される原体の製作と関連する。節の長さと幅の比がほぼ 2 : 1 であることは、0 段多条によるものが非常に多いことを示している。なお、2 段単節の繩の場合 L R と R L の比はおおむね 6 : 4 である。

b . 圧痕綾杉状を呈する繩文

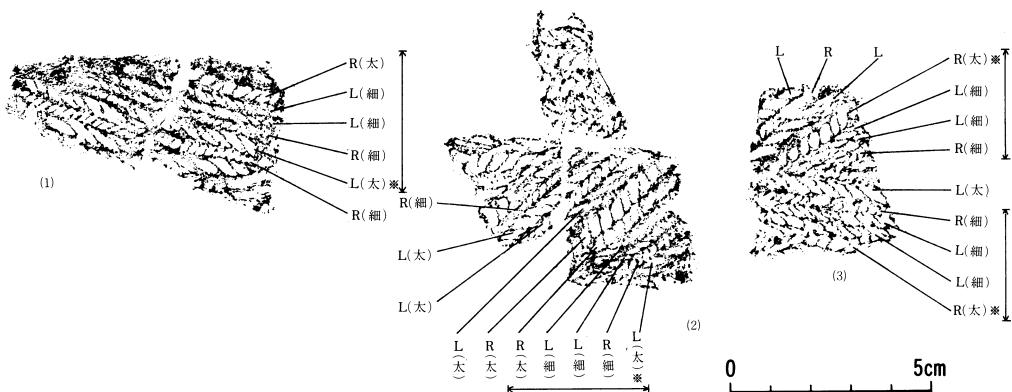
圧痕綾杉状を呈する繩文とは、主に 1 段 L と R の繩を各 1 ~ 2 本をいずれかの方向に極く弱く撫り合わせて製作される原体で、佐藤達夫氏によって用いられた名称である（佐藤他1958）。佐藤氏はその後「撫り合わせ原体」と称した（佐藤他1961c）が、また最近では「撫り戻しのかかった繩文」、「一方の原体に撫り戻しが見られるもの」とも表現し、例えば R {^L_R} と表記している。しかし、例としてあげた R {^L_R} の原体でいえば、土器器面には、単節 2 条無節 2 条ではなく、通常の節をもつ単節の条が 2 条と、幾分細長い節をもつ単節の条が 1 条の計 3 条が出現したものが圧倒的で、文様は「繩の束」に近似したものであって、「撫り合わせ」「撫り戻し」という表現やその記号から受ける印象とは大きく異なる。それは、2 本の繩を撫るというよりもむしろ一定方向に捻りを加えて絡ませたものといえるほどで、絡んだ繩の描く螺旋は非常に緩やかである。繩文原体は組み合せる繩の種類と方法、撫りを加える方向とその強弱等により、実に様

々な変化を生じている。これに対し、単に各々に加えられる撲りが非常に弱いということをもって、別種類の繩と称し得ないのは当然であるが、記号は別としても本類土器を特徴づけるこの種の繩による文様を表現する名称としては、製作技術的なものよりもむしろ佐藤氏が当初用いた「綾杉状の繩文」が最も適切であろう。

この綾杉状の繩文は、1段のLとRを用いていずれかの方向に若干撲って作られるが、1対1の2本・2対1ないし1対2の3本及び2対2の4本の組み合わせのものが多い。しかし、なかには第56図示したように、8本組み合わせたものもある。

(1)と(2)は同一個体で、(1)は口縁部である。(1)には、同一回転施文によることの明らかな条が6本、(2)には10本みられる。これを撲りの方向及び繩の太さ等から観察したところ、矢印の間が両者の一致する部分で、更に(2)では左上方に右端の条の同一の条が施文されていた。したがってこの土器に施文された繩文原体は、Lの太い繩が2本、Lの細い繩が2本、Rの太い繩が2本、更にRの細い繩が2本の合計8本の繩が用いられ、順序を変えて左撲りされたものと考えられた。

(3)は、上方が横位に回転施文された繩文、下方が斜位に回転された繩文である。同様に観察したところ、上方の7条及び下方の5条のうち4条は同一で、施文方向を変える際に原体の上下とも入れ替えたものであった。したがって、合計4条の互いに欠いている条を加えたものが本来の原体となる。この原体は、Lの太い繩3本・Lの細い繩2本・Rの太い繩1本・Rの



第56図 特殊な綾杉状繩文

細い繩2本の合計8本を用い、順序を変えて左撲りにしたものと考えられた。

以上のように観察されたが、製作実験では「極く弱い撲りを加える」手法では、常に2~3条の繩が隠れ、製作し得なかった。しかし、軸の周囲に並べて固定し、いずれか一方にはねた場合には、整然とした施文が可能であった。つまり、単軸絡条体の一類と考えられるものであるが断定はできず、ここでは綾杉状の繩文原体のなかには単軸絡条体によったものがある可

能性を指摘するに留める。

なお、撚り合わせによって一方の繩が完全に戻ったものには、第60図79の口縁部側に施文された正反の合による例と、第11号土壙出土第43図5に示した異段の繩によるものの2例がある。

c . 直前段反撚りの繩文

いわゆる撚り戻しのなされた繩文原体で、右撚り・左撚りのほかその撚りの強弱により2種類ある。

a . 撚り合わせが強くなされたもの（第60図79の胴部、第74図253）

b . 撚り合わせが非常に弱くなされたもの（第67図176・181、第74図251・255）

aは通常の方法で行われ、繩文はすべて無節の条である。1段無節の原体を施文した可能性も否定し得ないが、b及び綾杉状の繩文の存在を考えるならば、直前段反撚りによって作られたものであろう。

bは綾杉状の繩文と同様に作られるもので、ほとんど撚り戻されることなく、各条はやや細長い節をもつ。

直前段反撚りの繩文を施文したものは少ないが、a種よりもb種であるのが多い。

d . 結束第1種の羽状繩文（第59図74、第63図110、第63図111）2個体。

110は0段多条のR繩2本を結束し、1本を右撚りにし、他の1本は通常のとおり左撚りにしたものである。

111は撚りの方向の異なる2本の繩を結束し、通常の撚りを行ったもので、縦位回転施文した例である。

e . 絡条体による繩文（第41図4、第61図83、第77図295～301）

6個体（295～298は同一個体）である。多軸によるものはない。

単軸絡条体第1類、いわゆる撚糸文であるものが多い（83・295～300）。

第41図4は、単軸絡条体1A類、いわゆる木目状撚糸文である。細いL繩2本を束にして軸に巻き付けたものであるが、粗雑な作りである。軸に固定するための繩（同じく細いL繩2本）がみられる。

301は、施文の重なり等で不明な部分があるが、短軸絡条体は第4類であろう。

<分類>

口縁部ないし胴部に文様帯を構成するものは少なく、23個体分しかない。他は、すべて回転施文された繩文のみである。なお、口縁部文様帯を構成するものは、13個体である。

A類 文様帯を構成するもの。

口縁部文様帯の幅については、第43図5が約9cm幅である以外、極く狭いと思われるが、小破片が多いこともあり明瞭でない。

1種 半截竹管状工具による沈線文を施文したもの。

3個体であり、単独施文のものと、他施文具との複合施文のものがある。

イ.(72) 地文をもたず、器面全面に横位・斜位の沈線文を施文したものである。1例のみであるが、これは縄文施文を竹管による沈線文に置き換えたともいえる。4波状口縁を呈することも含め、本類土器では希有な例である。

ロ.(100・101) 同一個体である。地文の縄文を残したまま、指頭圧痕文とやや乱雜な鋸歯状沈線文を施文したものである。

ハ.(第43図5) 口縁部直下および頸部に短沈線文列を巡らして口縁部文様帯を区画し、この間に胴部と同一原体による側面圧痕文を5段施文したものである。文様帯を明確に区画している点、及び使用原体など本類土器の中では異質である。

2種 指頭圧痕文を施文したもの(第58図73、第63図102、第67図187、第181図10)

1種に含めたものを除くと、4個体にみられる。口唇部直下に1列施文している。このほか胴部に施文したものが1例ある(第181図10)。

3種 縄の側面圧痕文による文様をもつもの

文様帯を構成するものの中では最も多く、遺構内出土の3個体を含めて16個体であるが、口縁部に限定すると6個体しかない。文様には、横位に1~4段施文したものと馬蹄形のものがある。

a 横位の側面圧痕を施文したもの

1. 横位の側面圧痕を1条もつもの(第63図103、第77図292)

1条であるため、特に文様構成をなしたとはいえないものである。103は口唇直下に施文したもので、292は胴部に綾杉状の縄文原体を用いたものである。

2. 主として、無文面上に横位の側面圧痕を2~4段施文したもの

イ. 口縁部に施文されたもの(第19図1、第59図75、第63図104~106)

第9号住居跡(遺構外)の1は、地上文に施文している。

75は、0段多条LRを用い、口唇直下では条をほぼ横走させ、以下を斜行縄文と側面圧痕文を交互に施文している。

105・106は同一個体で、側面圧痕文を2段施文し、その幅は3cm弱と狭い。

ロ. 胴部に施文されたもの(第30図1、第44図7、第59図76、第67図188~第68図194・196・197)

一応胴部に施文されたものは別扱いしたが、75の例もあり、口縁部から側面圧痕と縄文の施文が交互になされ胴部中央付近まで至った可能性もある。

文様帯以下には縄文を施文しているが、真下はその下縁に沿って縄の末端部分を特に強く回

転施文して文様帯を明瞭なものにし、それ以下は横走・斜行の繩文であり、第30図1のように羽状を構成するものもある。188・189・193・197は同一個体である。

b . 馬蹄形の側面圧痕をもつもの（第63図107、第68図195）

口縁部に施文されたもの（107）と胴部に施文されたもの（157）の2片2個体である。いずれも、特に無文帯に設けず、地文としての繩文の上に1列施文されている。

B類

特に文様帯を構成せず、各種繩文のみを施文したもので、本類土器の大半を占める。

繩文の施文段階はすべてが最終段階というわけではなく、粘土帯の積み上げと交互に行われるものがあることも関連すると思われるが、繩文原体の回転方向は、口縁部・胴上部・胴下部等部位別の観察、あるいは同一個体と思われるものの観察等いずれをとっても一定であるものは少なく、様々な回転方向を採用している。本遺跡では大半が破片であるという制約のため、全体的観察に基づいた分類は不可能であり、個々の破片に観察される状態を分類せざるを得ない。

以上の理由によりB類の分類は、便宜的ではあるが口縁部・胴部を問わず、繩文原体の種類とその施文によって生じた文様の2点の組み合わせによって行っておく。器内面の施文については、分類から一応除外した。

繩文原体

- 1種 完全な撲り戻しの直前段反撲の繩文
- 2種 不完全な撲り戻しの直前段反撲の繩文
- 3種 2段単節の繩文
- 4種 直前段合撲（正反の合）により一方を完全に撲り戻した繩文
- 5種 直前段合撲ではあるが綾杉状を呈する繩文
- 6種 異段の繩文
- 7種 結束第1種羽状繩文
- 8種 単軸絡条体第1類（撲糸文）
- 9種 単軸絡条体第1A類（木目状撲糸文）
- 10種 単軸絡条体第4類

11種 上記原体の組み合わせによるもの

多くは繩文原体の項で述べており、特に説明を要しないが若干の補足をしておきたい。

3種、つまり2段単節の繩文を施文するものの中には、0段多条のものを含める。第60図78は、通常のR繩1本と0段多条のR繩2本を左撲りにしたものである。第6号住居跡内出土の例（第13図5）は、通常のLRと0段多条によるLRを用いたもので、本来的には異原体の

文 様

- a 斜行するもの
- b 縦走するもの
- c 横走するもの
- d 横位羽状を呈するもの
- e 縦位羽状を呈するもの
- f 施文方向が一定でないもの

組み合わせであるが、両者とも単節であることから3種に含めた。

10種、つまり異原体の組み合わせによるものは極く少数で、確認し得たものは2例しかない。第60図79の口縁部側が第4種、胴部が第1種である。また、第61図83は第3種と第7種の組み合わせである。

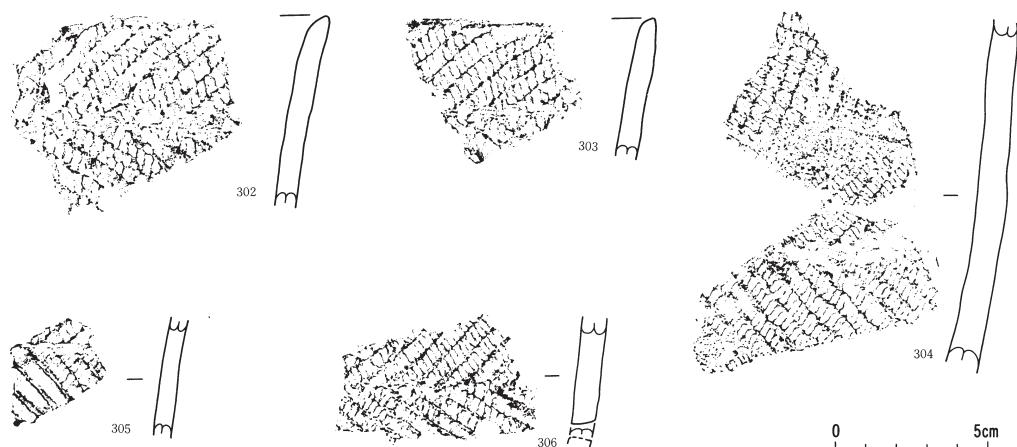
以上の原体のほかに、第74図、260のような例がある。これは綾杉状の繩文原体を製作し、一部では条間に沿って、他の部分では各条をまたいで不規則に巻きつけたと推定されるもので、附加条の1種と考えられるものである。綾杉状の繩文原体の製作については、すでにその撫り合せ方法と、一部に絡条体によって製作されたものがある可能性を指摘しておいたが、これとは別に、附加条によるものもあると考えられる。しかし、本遺跡における綾杉状の繩文原体にあっては、それと断言し得るものがないため、すべてを綾杉状の繩文として一括した。

第7群土器（第50図17、第57図302～306）

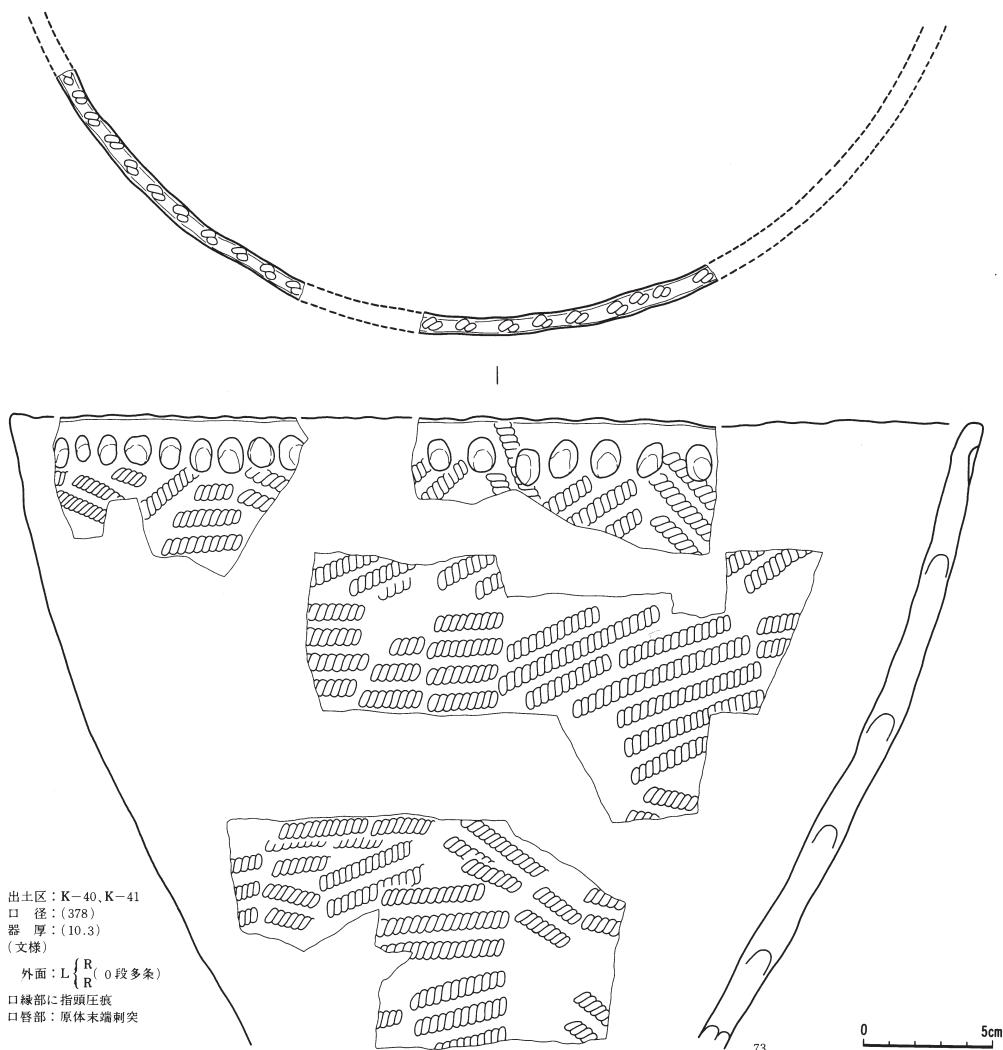
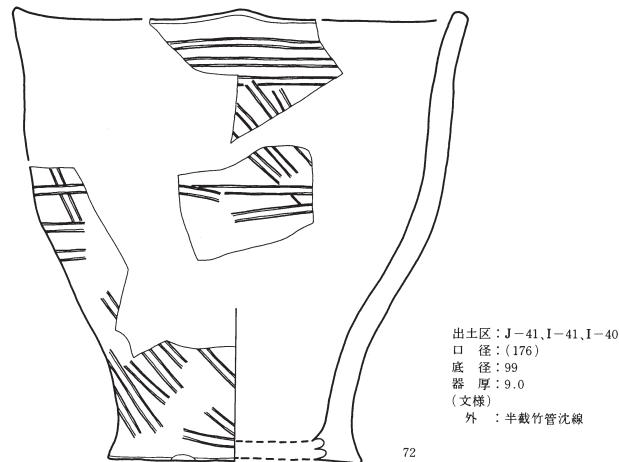
長七谷地貝塚の報告において、大湯卓二氏により提唱された長七谷地群に最も近似するものである（青森県教育委員会1980g）

個体数は、第17号土壙内出土のものを含めて5個体と少ないため、特に、細別はしない。

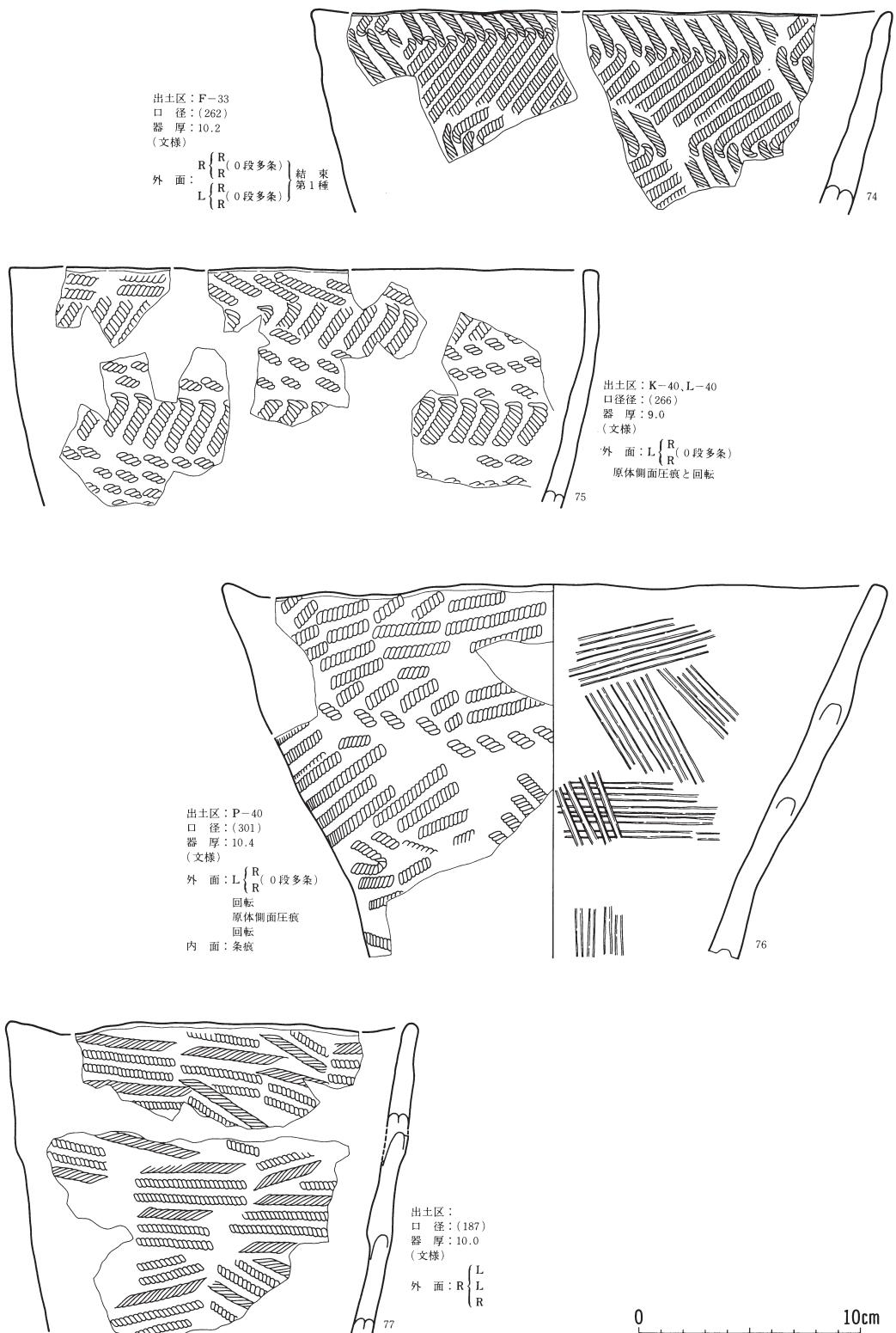
口縁部の2片は、同一個体である。口唇部は、若干内削ぎされ、ヘラ状工具により滑らかに調整されている。0段多条によるR L、L Rの繩を、結束せず別々に横位に回転して羽状繩文を構成している。原体の末端を別の細い繩でしばった結節も一緒に施文されている。他の破片もほぼ同様である。304は、いずれも0段多条であるが、特に、上位の繩は条数が多いと思われる。また、305の繩文の節は不明瞭である。胎土には、植物性纖維、砂粒、白色凝灰岩粒を含むが、沼鉄は5個体とも含まない。



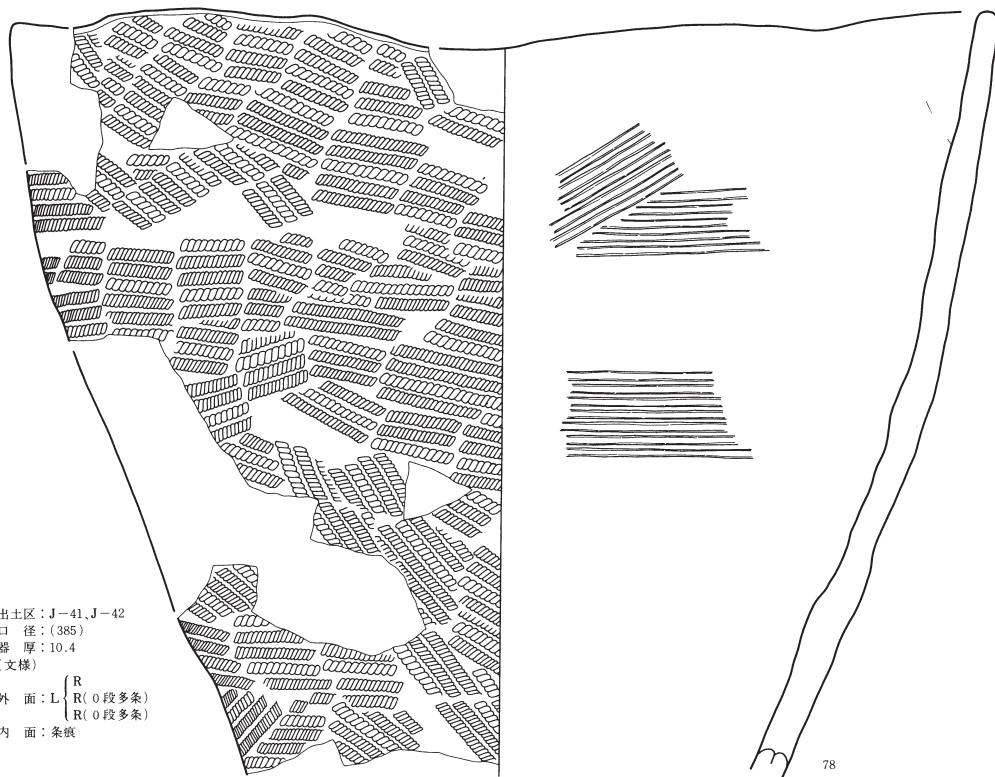
第57図 第7群土器拓影図



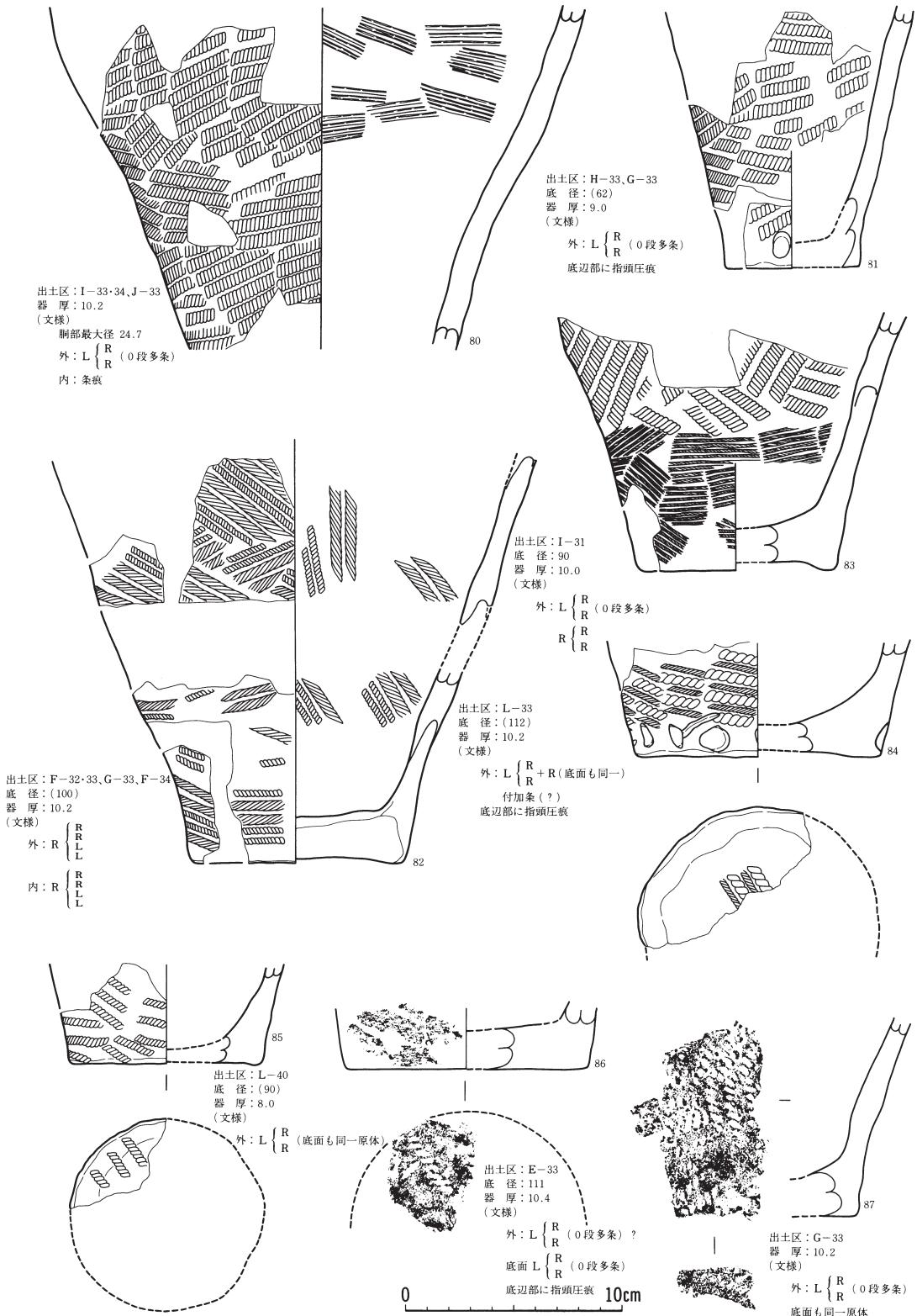
第58図 第6群土器実測図(1)



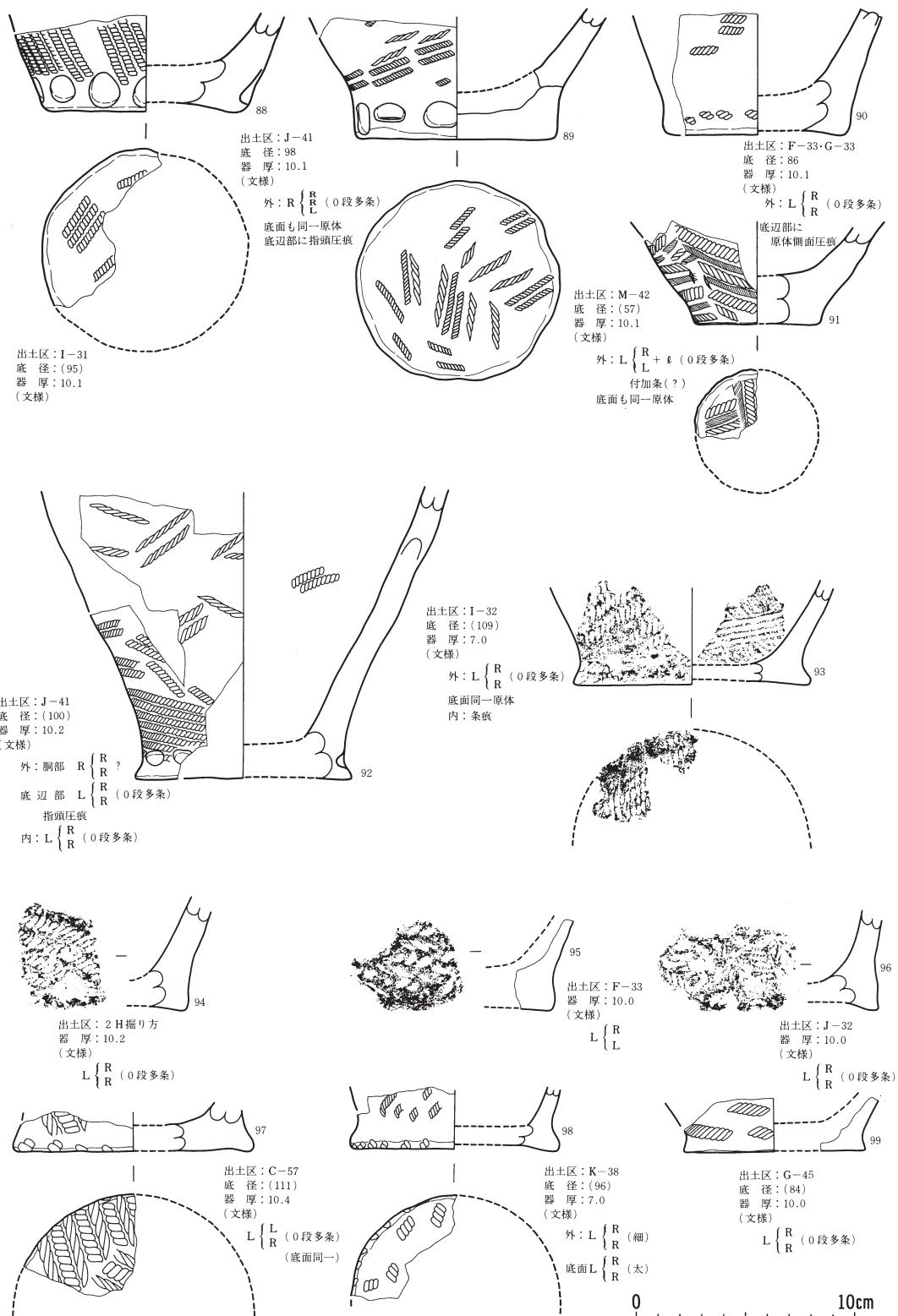
第59図 第6群土器実測図(2)



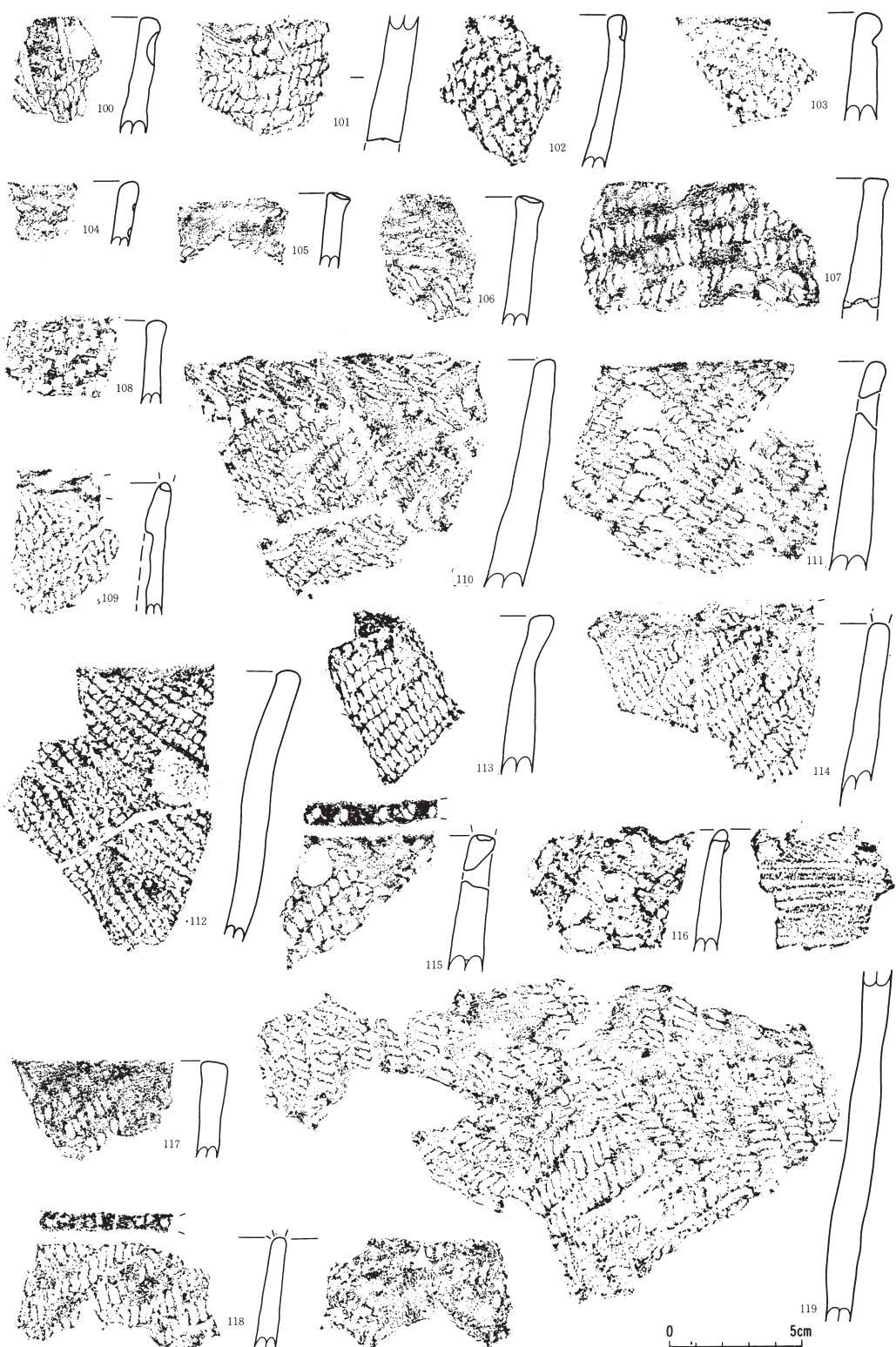
第60図 第6群土器実測図(3)



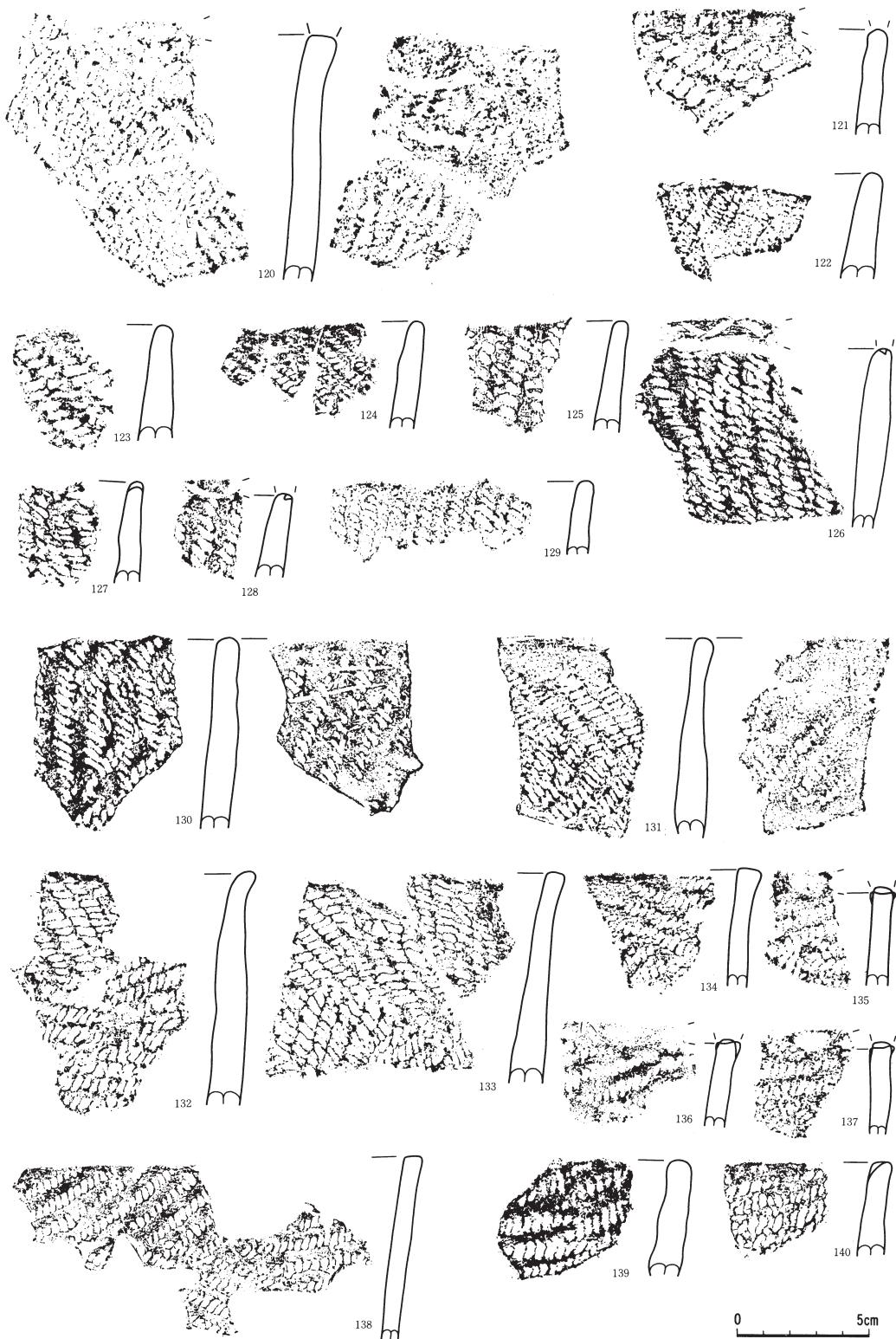
第61図 第6群土器実測図(4)



第62図 第6群土器実測図拓影図(5)

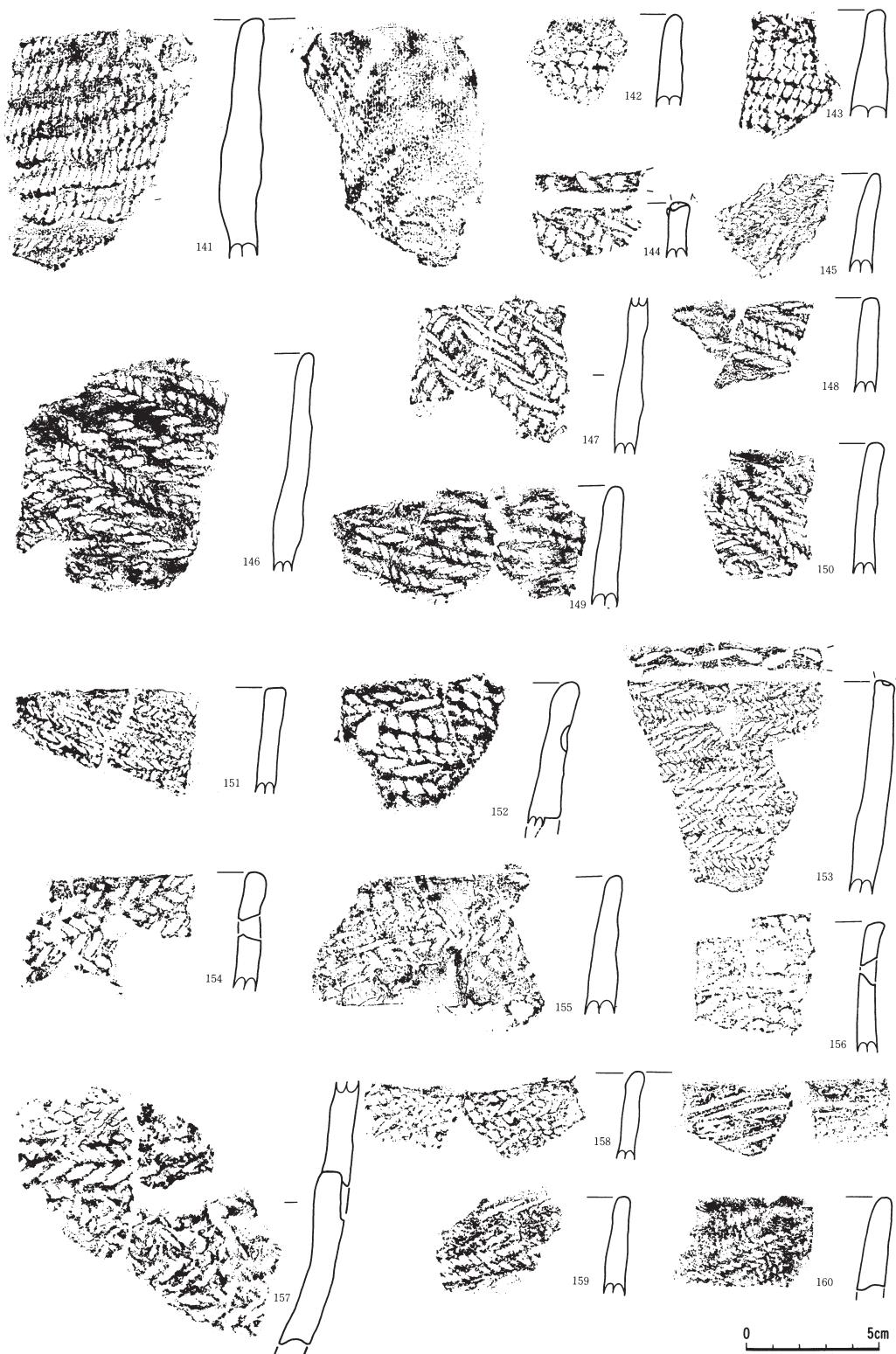


第63図 第6群土器拓影図(1)

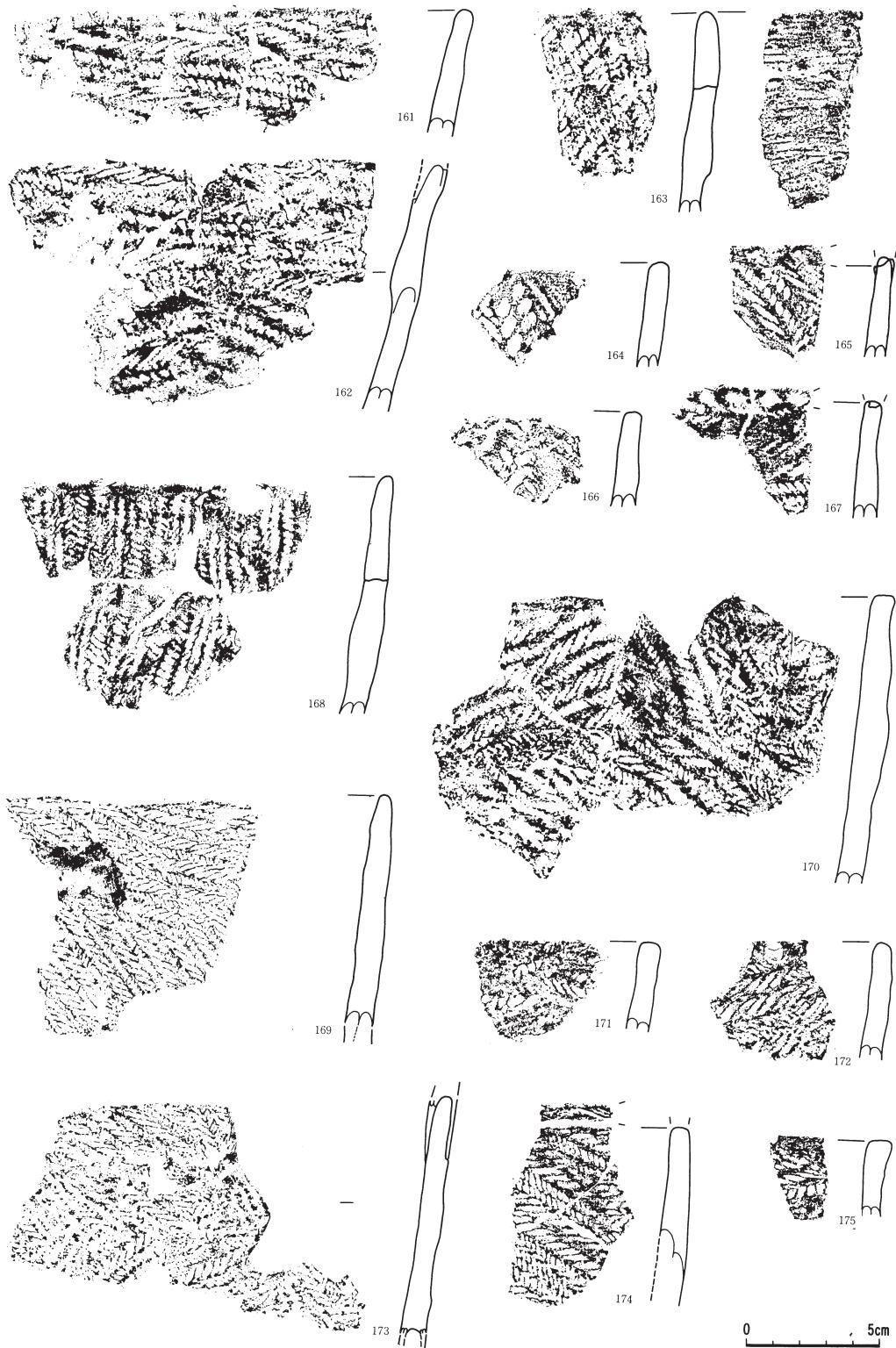


第64図 第6群土器拓影図(2)

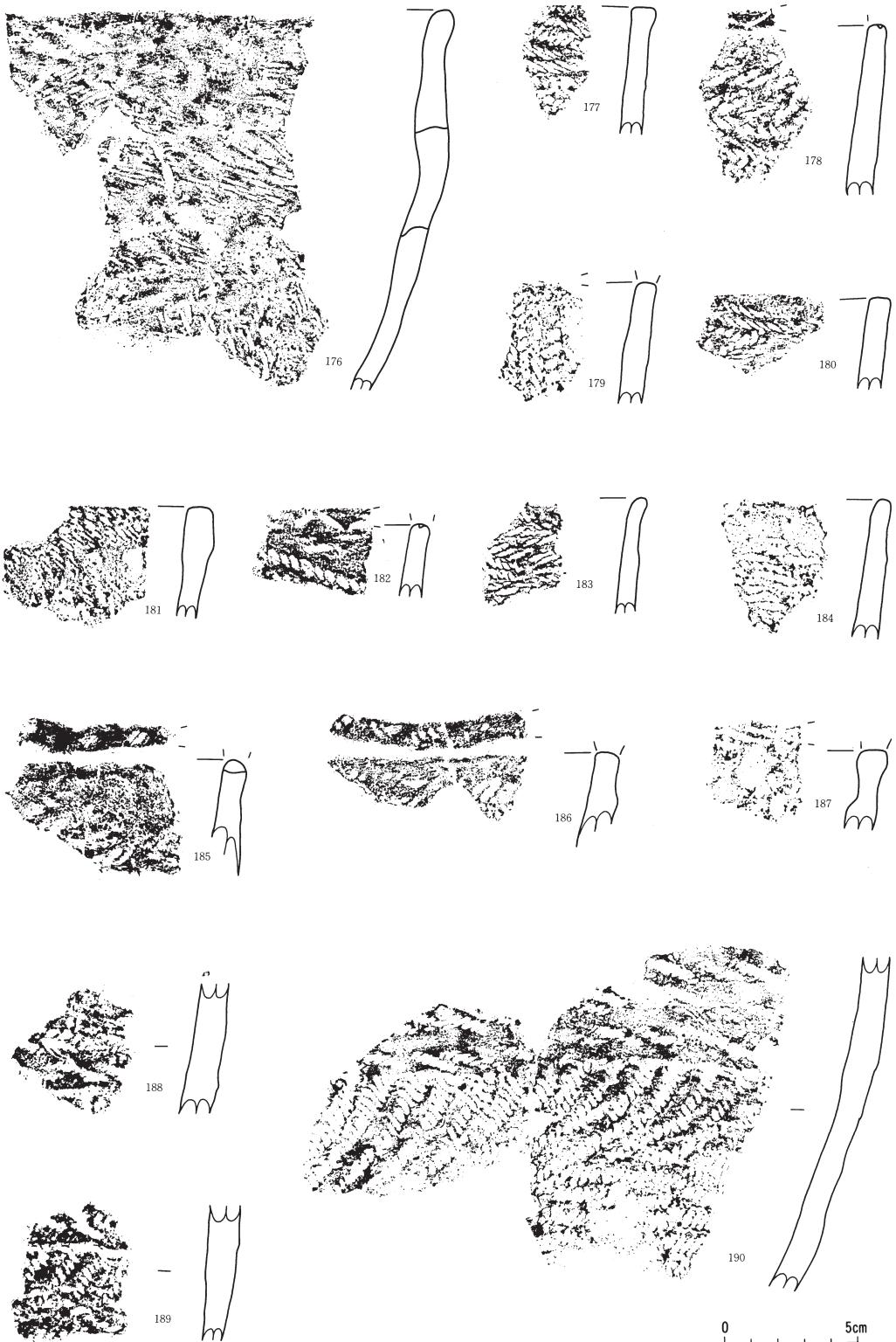
0 5cm



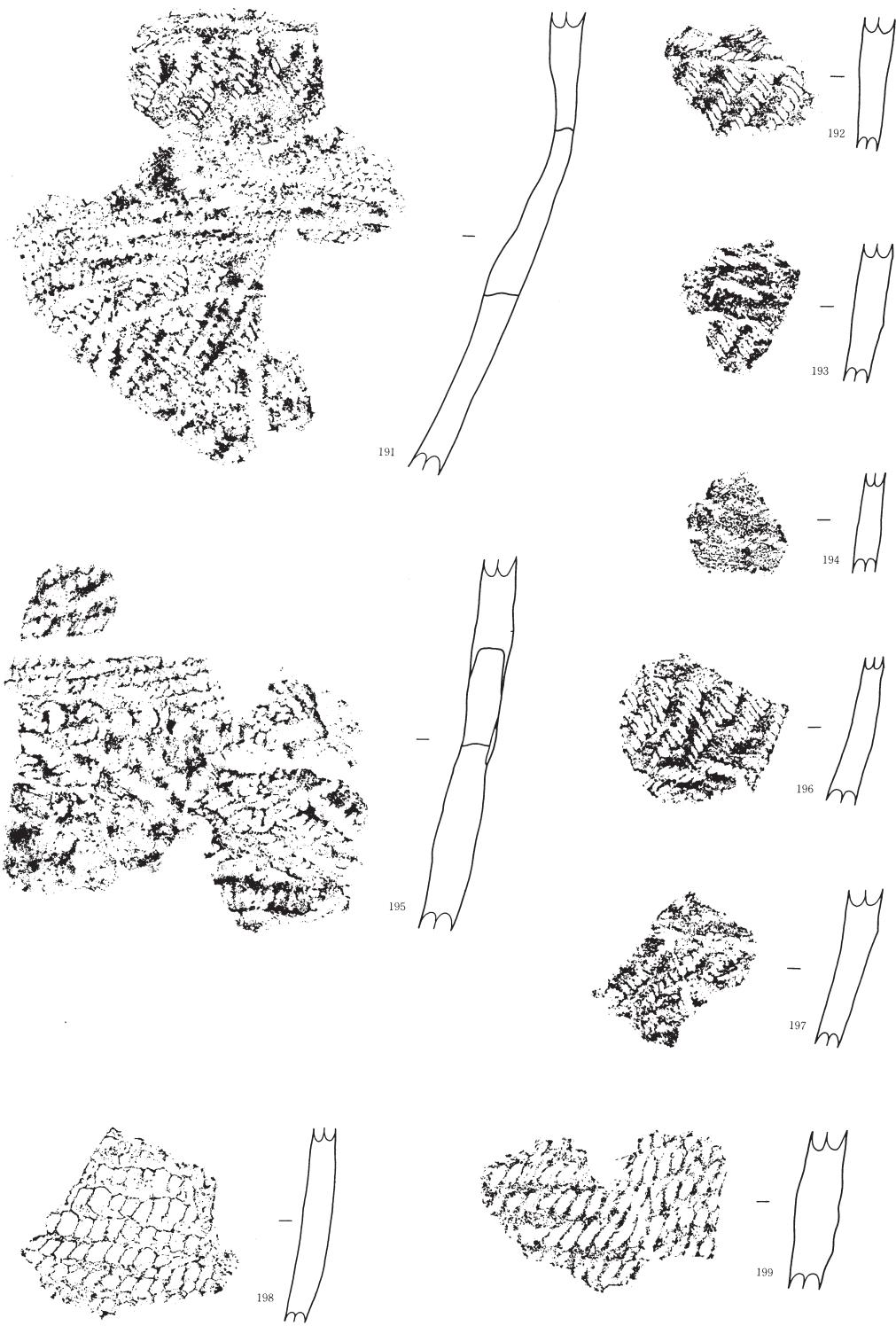
第65図 第6群土器拓影図(3)



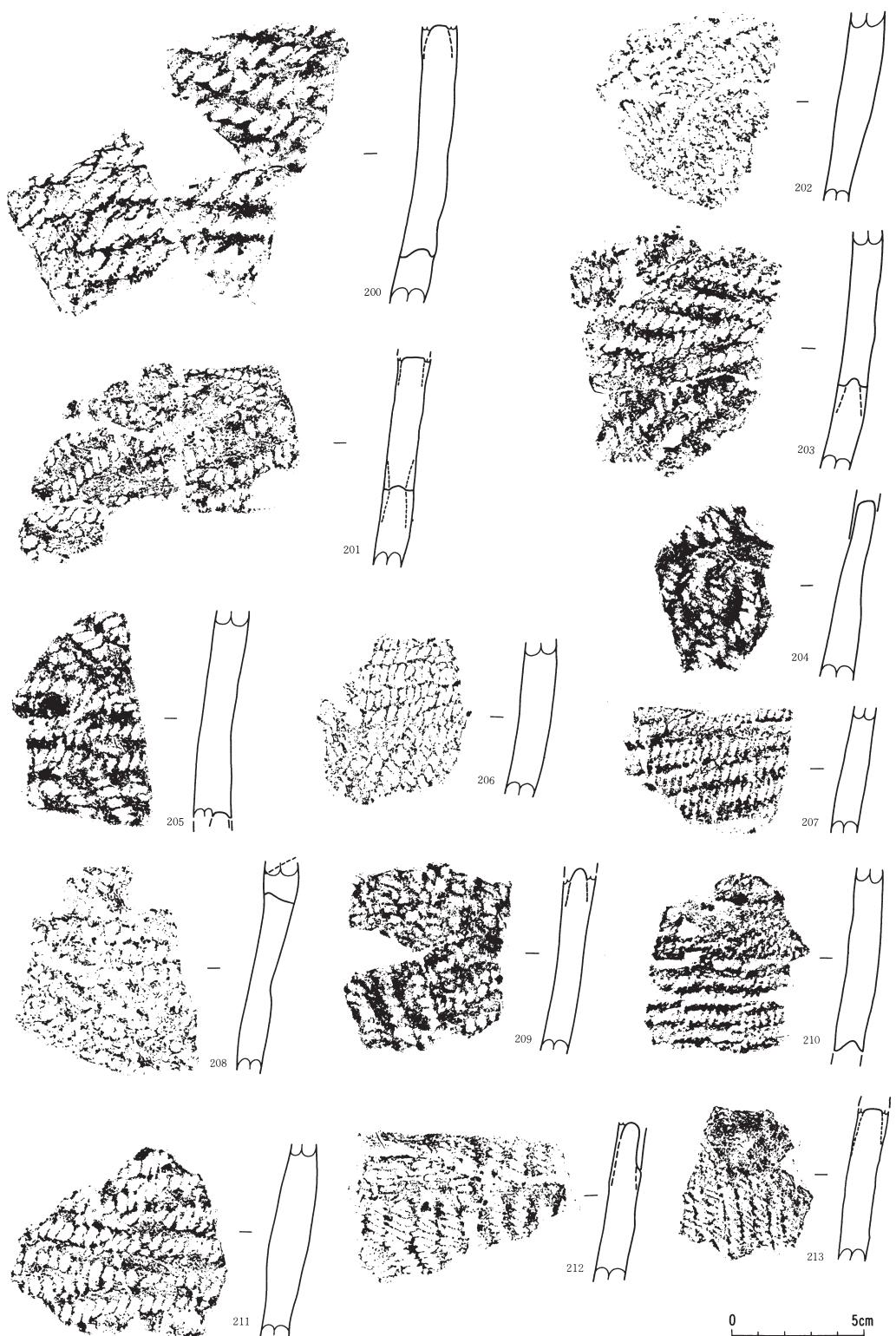
第66図 第6群土器拓影図(4)



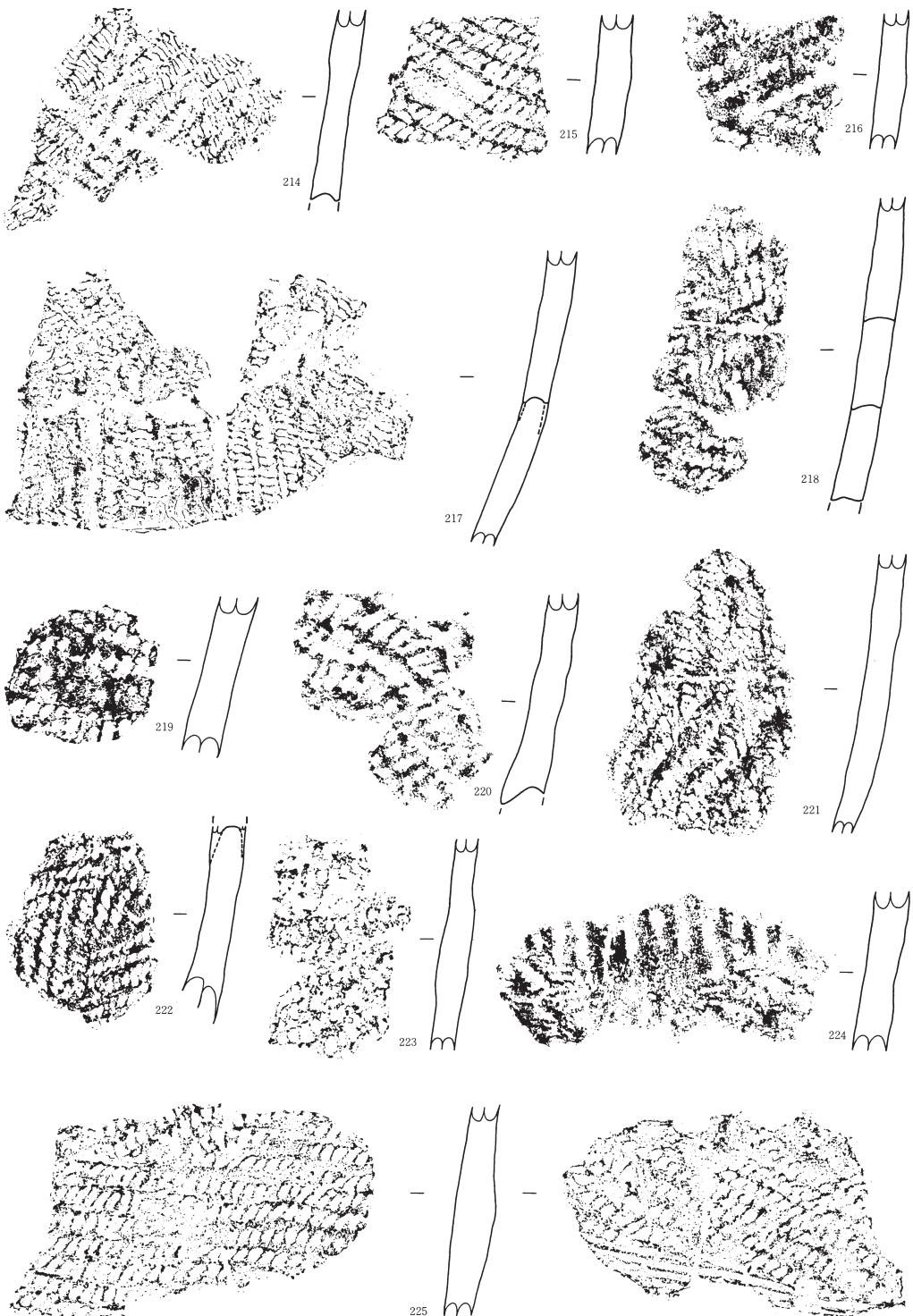
第67図 第6群土器拓影図(5)



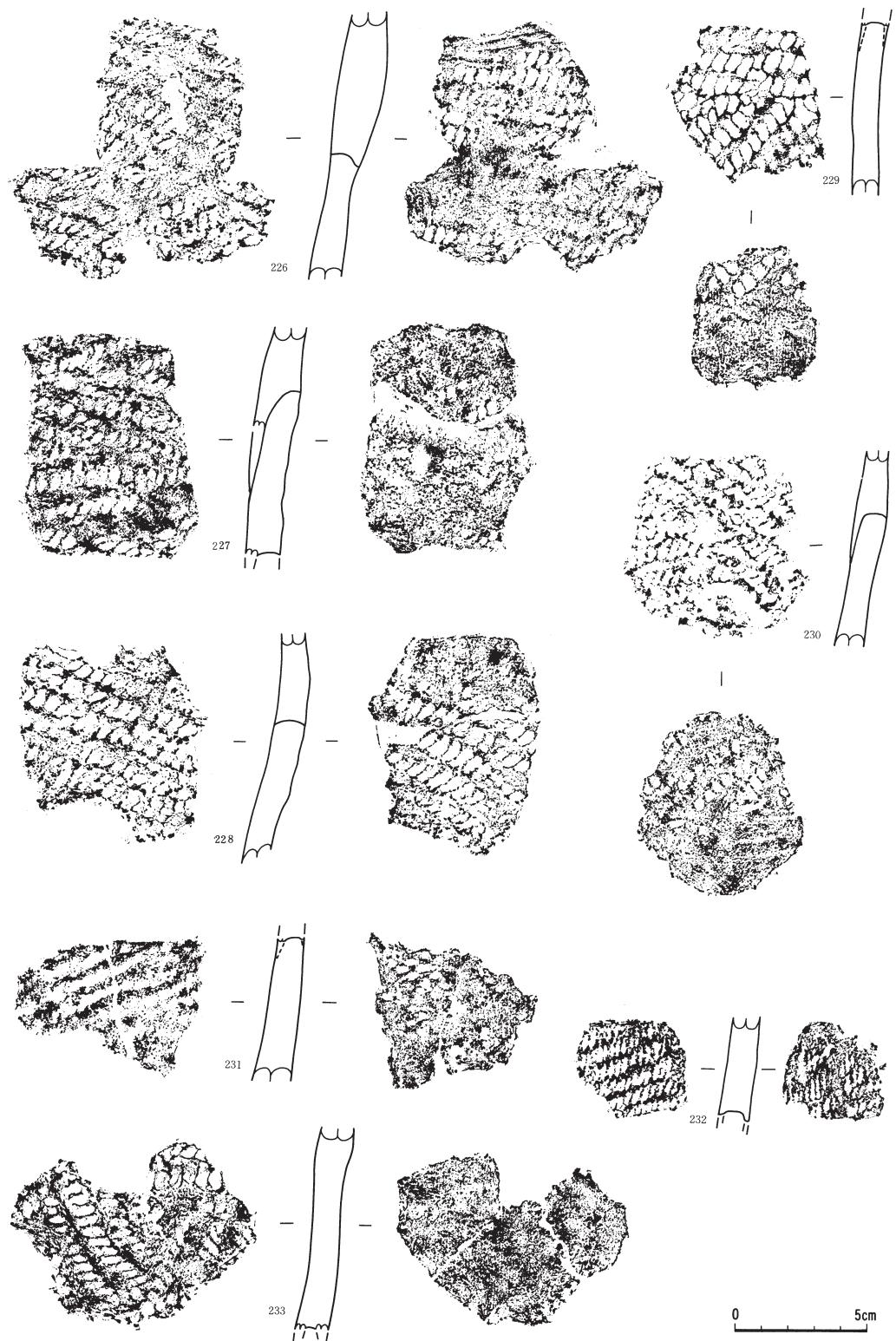
第68図 第6群土器拓影図(6)



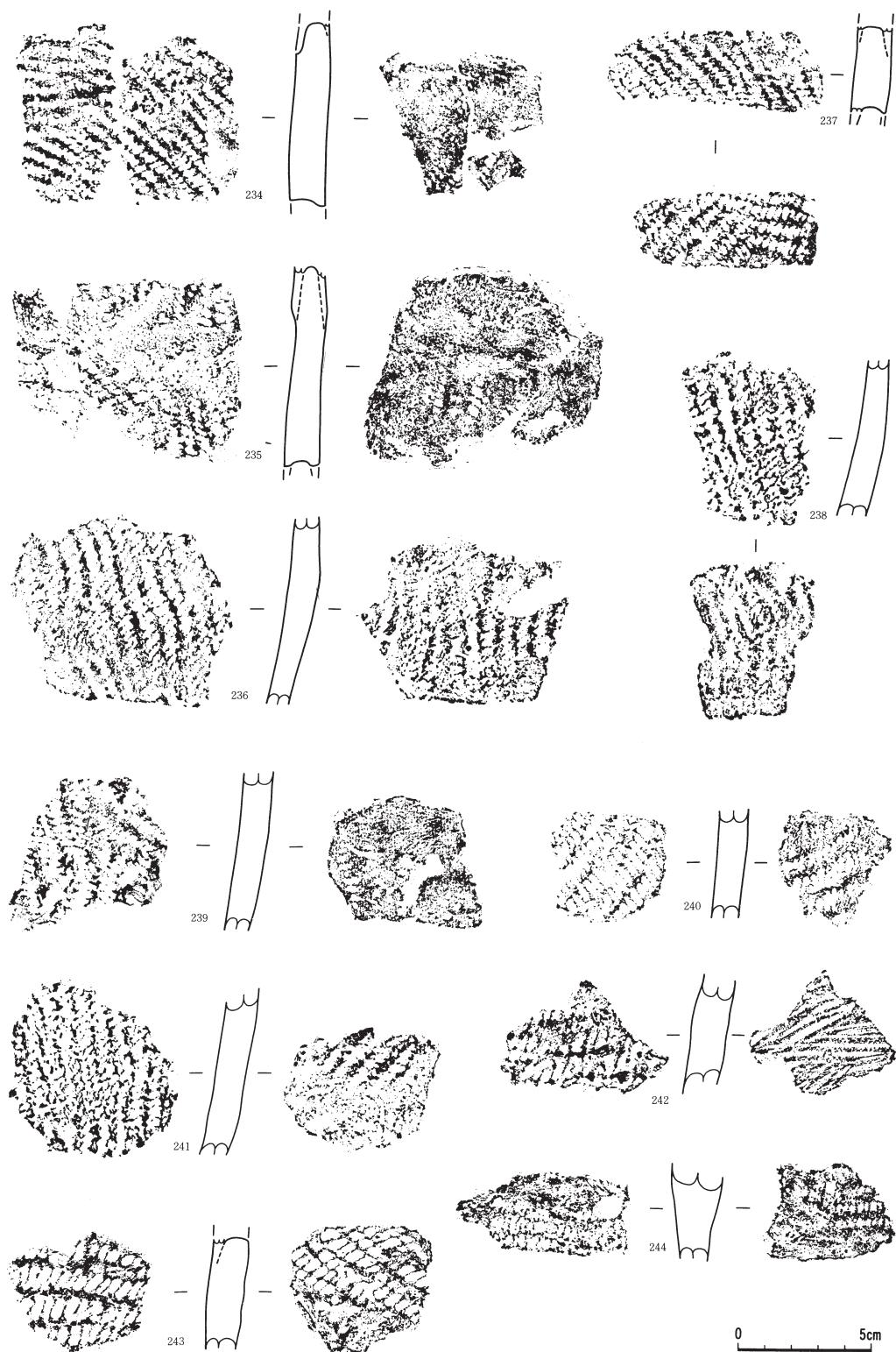
第69図 第6群土器拓影図(7)



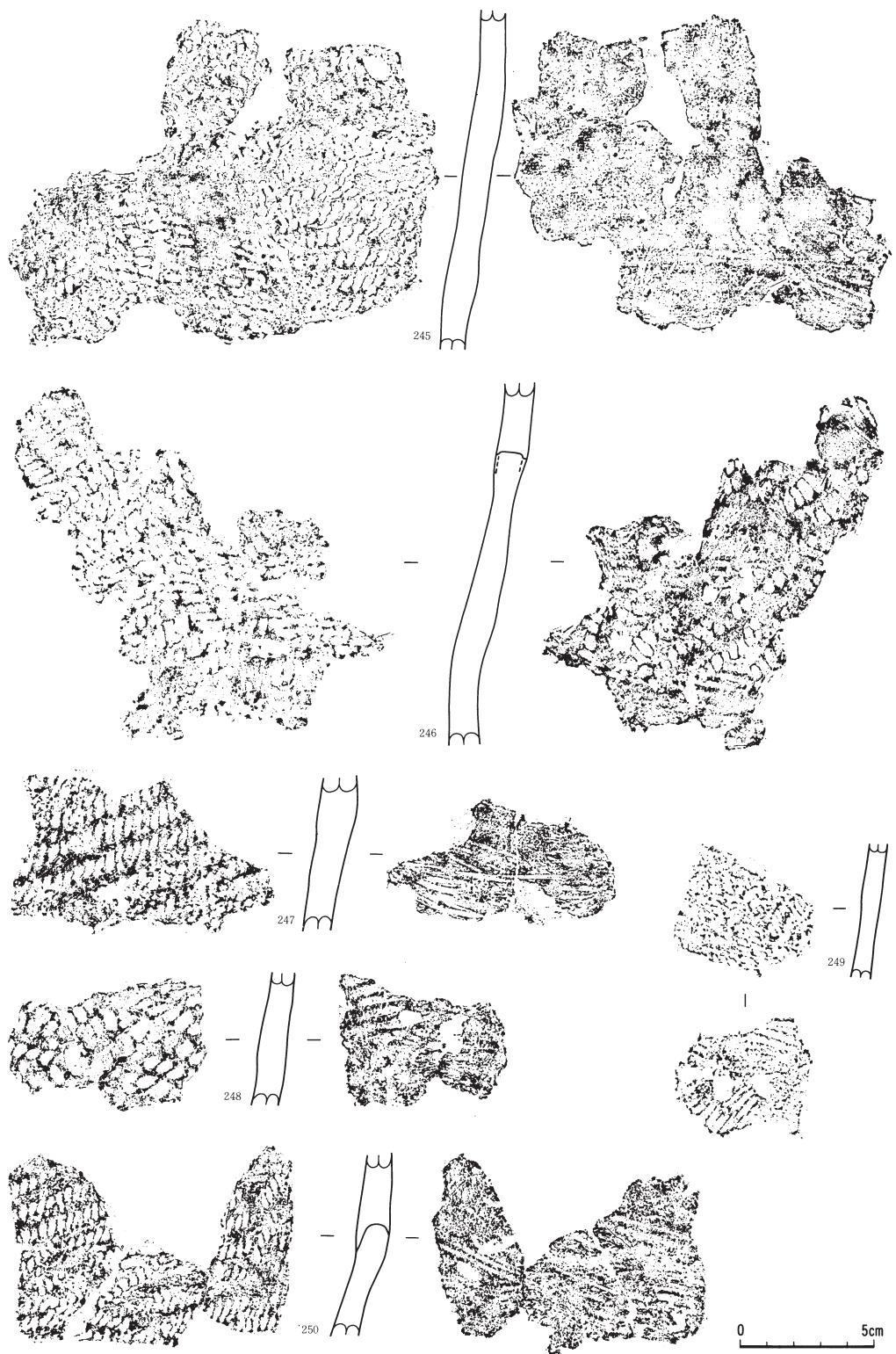
第70図 第6群土器拓影図(8)



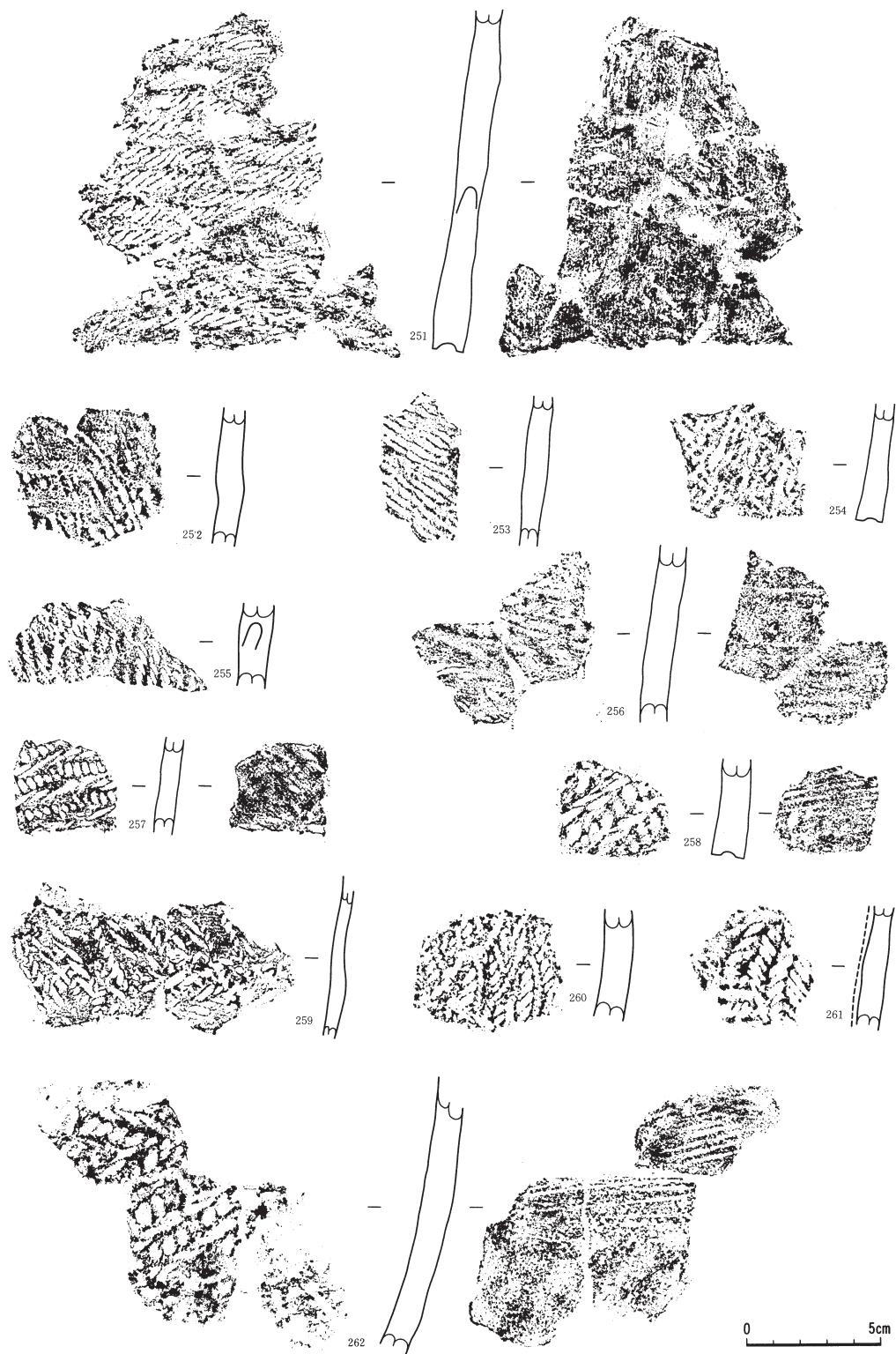
第71図 第6群土器拓影図(9)



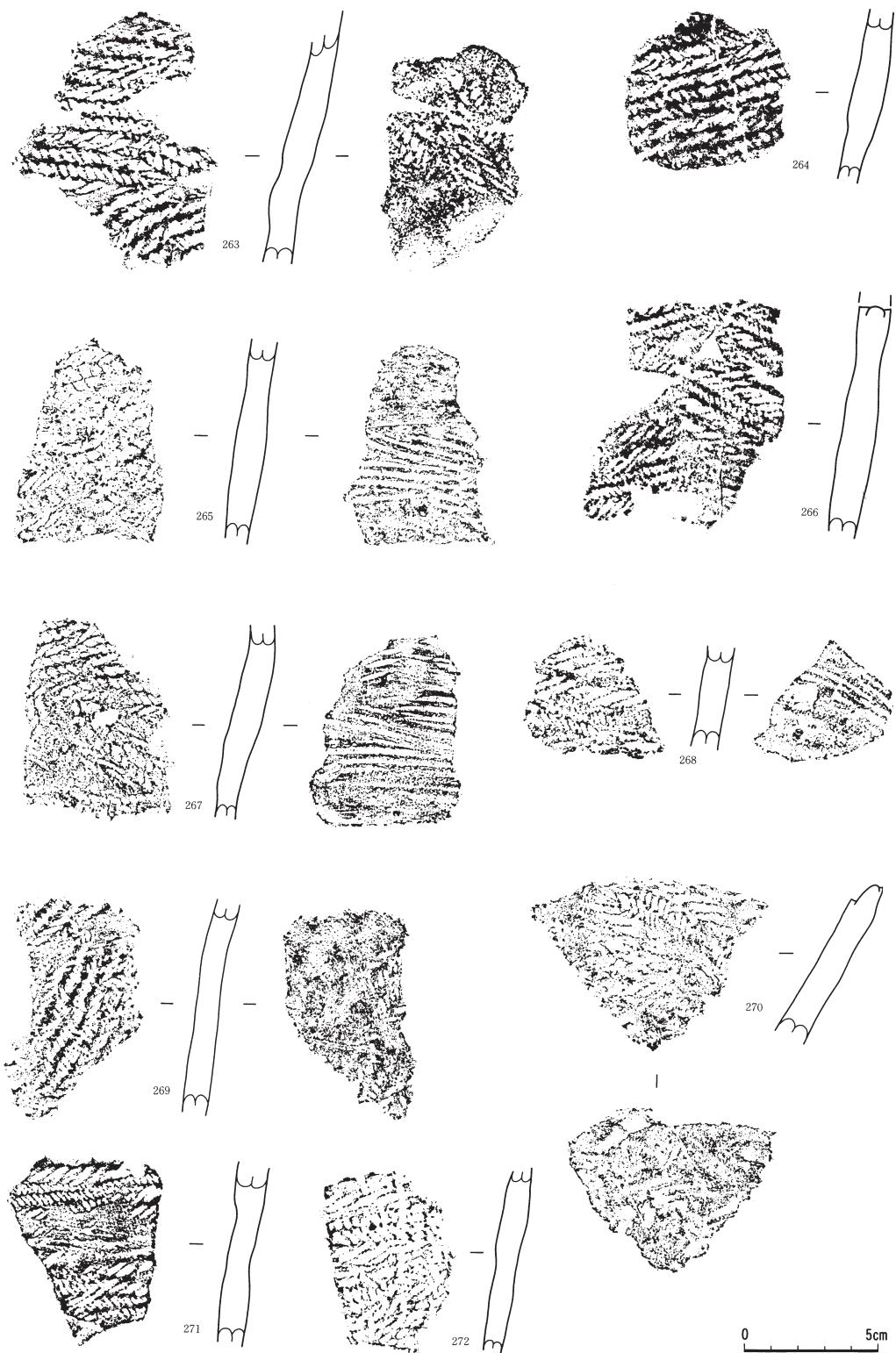
第72図 第6群土器拓影図(10)



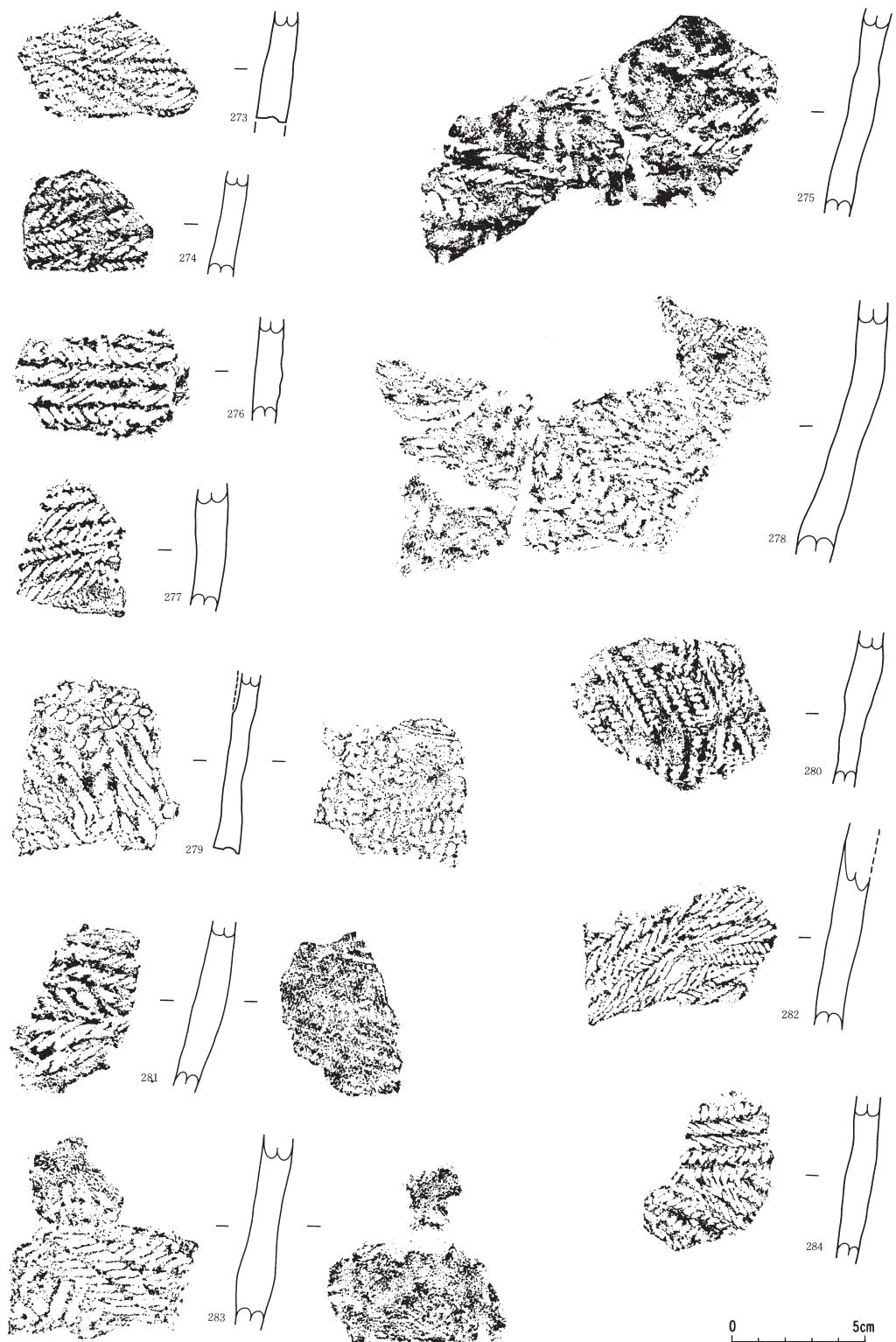
第73図 第6群土器拓影図(1)



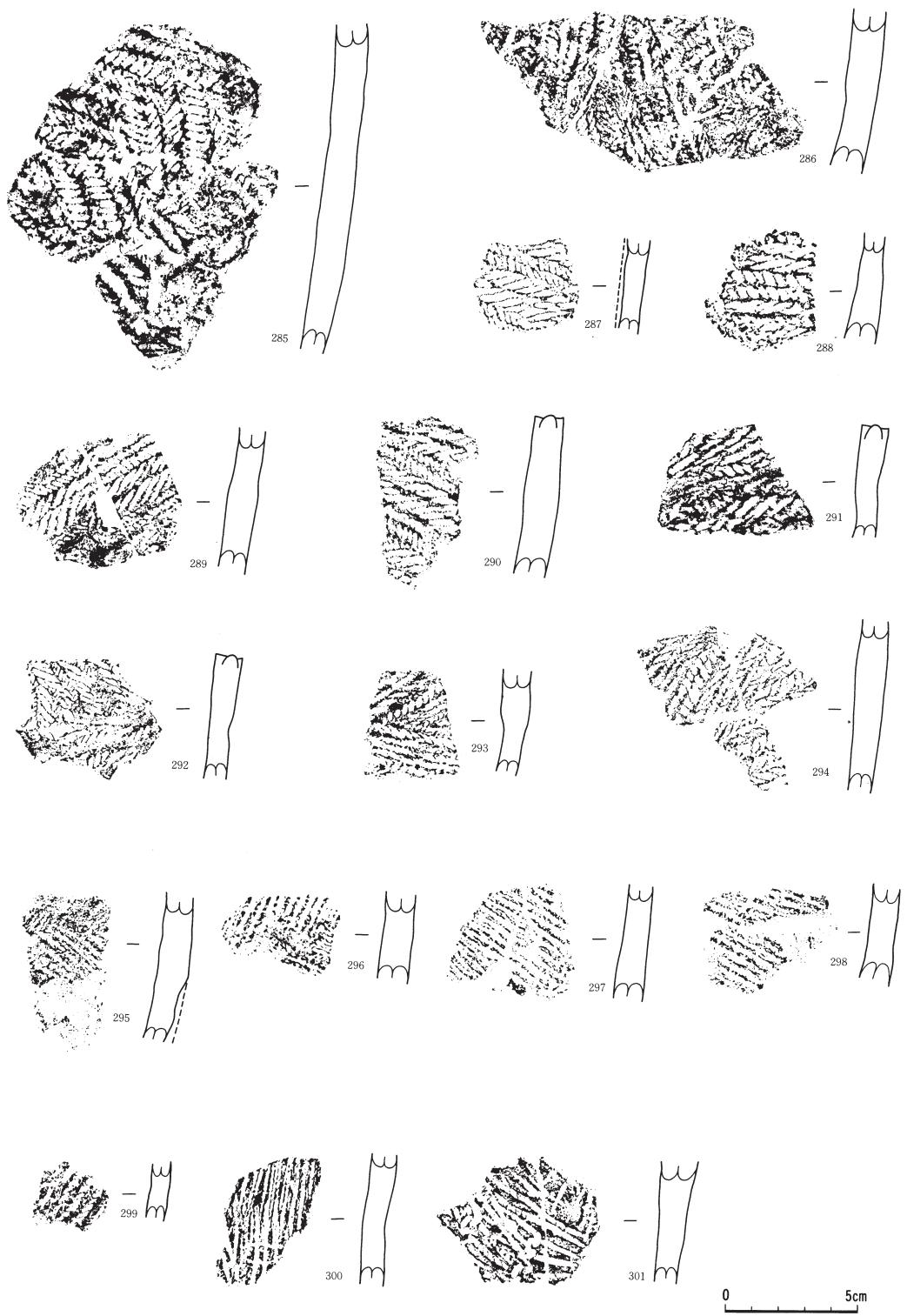
第74図 第6群土器拓影図(12)



第75図 第6群土器拓影図(13)



第76図 第6群土器拓影図(14)



第77図 第6群土器拓影図(15)

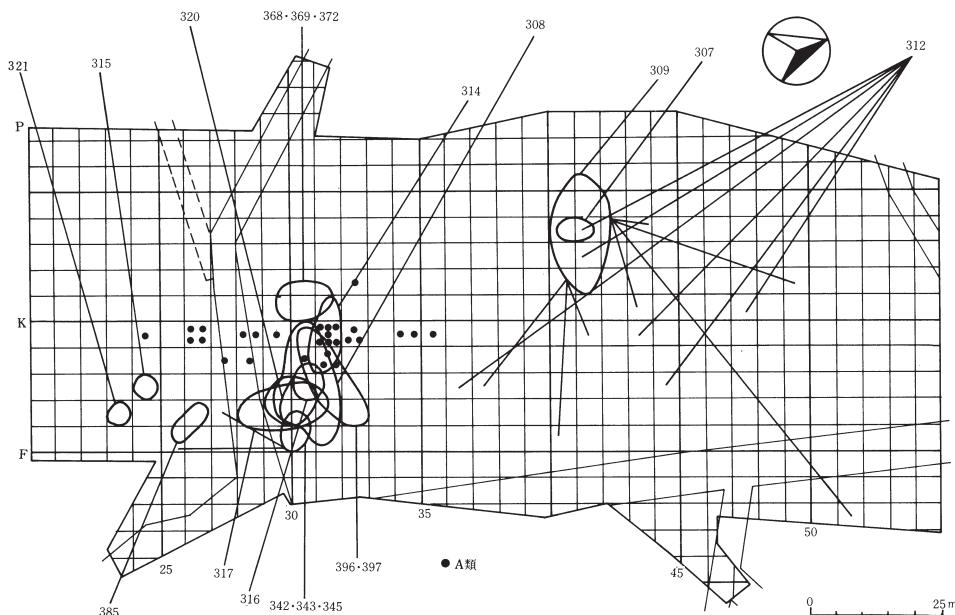
第8群土器（第79～87図）

本県における既知の形式では、早稲田6類（佐藤他1958）に最も近似するものである。

<分布及び層位>

ほぼ2ヶ所に分かれて分布していた。その1つは、ユニット3と称したF～L-29～30グリッドとそれに近接する20・25であり、前者が特に密集していた。他の1つは、ユニット5と称したL～P-40～41グリッドである。ユニット3は、他群の土器をほとんど含まないが、ユニット5では第2・5・6群土器と平面的には混在した部分がある。

本類土器は、中摺浮石のばらつきのみられる層の直下に包含されている。ユニット3ではその下位に遺物はほとんどみられないが、ユニット5ではその下位の第・層に第6類土器等が包含されていた。



第78図 第8群土器の分布概略と接合

<胎土>

多量の植物性纖維を含み、器面の内外においてその走向が明瞭に観察し得るものが多い。砂粒は、全体的に小さくその含有量も少ないが、中にはやや大粒のものを多量に含み器面がざらつくものもある。焼成は、全般的に砂粒の含有量の少ないものが軟質、多いものがかたく締った感がある。その他、細かな白色凝灰岩末、沼鉄を微量に含むものがあるが、まれに多量に含むものもある。

<成形>

第6群土器と異なり、明瞭な接合面を残すものではなく、粘土帯の幅・積み重ね方法等は不明である。なお器厚は5~12.6mm、平均8.3mmである。

<器形>

平縁ないしは小波状口縁をなす尖底の深鉢形土器である。

小波状口縁の土器は、半截竹管による連続押し引き沈線によって文様を構成する土器に多いようであり、復原・図上復原されたものでは、4波状・8波状をなす。その他、ほぼ繩文のみを施文した土器の大半は平縁であるが、中には不規則な小波状を呈するものもみられる。底部は、資料数が少ないため明確ではないが、やや膨らみを持った尖底が多いと思われる。しかし、丸底気味のものも2例あり(318・410)、この2例とも乳頭状の突起が附されている。

<口唇部>

ヘラ状工具等で調整され、平坦でやや角張ったものが多く、その上端面は平らなもののが外側に傾斜したものもある。内側に傾斜したもの・丸みをもつもの・とがるもののはまれである。

<内面調整>

全般的に、ヘラ状工具等で平滑に仕上げられ光沢をもつものも多々みられるが、器面が荒れて砂粒の露出したものや纖維の走痕が著しく、器面本来の状態をとどめていないものもある。

<文様>

半截竹管による押し引き沈線文や、結節回転文などによって口縁部文様帯を構成するものが少数で、大部分は器面全面に単一の繩文原体を回転施文したものである。これを次のように5類に分けた。なお、器内面及び口唇上面に施文したものは全くない。

A類 器面全面に半截竹管の押し引き沈線による文様構成を行ったもの。

B類 口縁部または底部付近に半截竹管の押し引き沈線による文様が施文されたもの。

C類 口縁部文様帯に結節回転文を施文するもの。

D類 口縁部文様帯に繩の末端による刺突文を施文したもの。

E類 文様帯を特に構成せず、器面全面に繩文を施文したもの。

以下順をおって述べることにする。

A類(第79図310・311、第83図323~341・344)

器面全面に、半截竹管の押し引き沈線による文様構成を行ったもの。

恐らく、半截された竹管様の施文具の丸みをもった外側を器面に当て、左から右へ断続的に引いた沈線文(以下単に押し引き沈線文と略す)を器面の全面に展開しているものである。

6個体分で、すべて小破片のためその全容を十分把握し得ないが、図上復原を試みた2例からある程度知ることができる。

実測図の311は、第83図326・330ほか4片の破片をもとに図上復原したもので、8波状をな

す小型の尖底土器と考えられるものである。

口縁に沿って 1 条の、また、胴部に 6 条の平行な押し引き沈線を施文し、この間に口縁部文様帯を構成している。更に、この下部には、同一施文具による刺突文列と押し引き沈線文を平行に、交互に施文している。

口縁部文様帯の構成は、1 条の押し引き沈線文による波状文を横位に巡らし、これによって区画された文様帯に、主にその波形に沿った「U字」形ないし「逆U字」形の押し引き沈線文を充填したものである。波状文の頂部は、口縁の波底部に位置するように割りつけている。

実測図の310は、第83図331・332を基に図上復原したもので、前者と同様 8 波状をなす小型の尖底土器と考えられるものである。口縁に沿って 3 条の押し引き沈線文を巡らし、この下部に同一手法による波状文を 2 段施文しているが、各々の波頂部と波底部は相対する位置に割り付けられ、ほぼ菱形を構成する。これによって区画された文様帯中に、上段の波状文内ではその波形とは逆の、また、下段の波状文内ではその波形に沿った押し引き沈線文を充填している。

個体数が少なく、しかも図上復原という制約はあるが、ほぼA類土器の基本的な文様構成が把握し得るであろう。つまり、文様構成の基本は、横位に展開する波状文であり、各個体の差は、この波状文の緩急や波状文による区画帯のなかに施文される押し引き沈線文様にあるといえよう。その細部が異なる例としては、334では波状文による区画帯内に縦位の押し引き沈線文を施文しており、339では上下 2 段に施文された波状文の波底部と波頂部を、「C字」状の押し引き沈線によって連結したものなどがある。

底部そのものの文様は不明であるが、340や344などをみる限り底部近くまで横位の押し引き沈線文を施文している。ただし、その施文方向は344の場合右から左へ移動し、口縁部や胴部とは逆方向である。

B 類（第79図307・308、第83図342・343・345 同一個体）

口縁部または底部付近に押し引き沈線文が施文されるもの。

この B 類に属するものは 3 個体である。施文部位の組み合わせは、口縁部と底部付近、口縁部のみ・底部付近のみの 3 通りが考えられるが、1. 繩文の地文上に幅広に文様帯を構成したもの、2. 口唇直下に幅の狭い文様帯を構成したもの、3. 底部にのみ文様帯を構成したものの 3 種に分けることとする。各種とも 1 個体のみである。

3 点とも小型の尖底土器である。307は 4 波状口縁、308と345は平縁である。また、307と308は底部近くが若干膨らみをもつ尖底であり、345は上記 2 点よりも尖底の度合が強い。

307は地文として、R L とO段多条 L Rとの結束第 1 種による羽状繩文を施文している。

口頸部は、無文化せず羽状繩文を残したまま押し引き沈線による口縁部文様帯を構成している。口縁部文様帯は、上下に押し引き沈線文を巡らして胴部文様帯と区画し、この間に波頂部が口縁

のそれと一致する大きな波状文を描き、この区画帯中に波形に沿った押し引き沈線や、各波頂部・波底部間を連結する直線的な押し引き沈線文を施文したものである。この土器に施文されている押し引き沈線文は、その施文具の移動が長目であるため、いわば節が長い点や波状文の施文数が少なく空白部が目立つ点、更には地文を残したまま施文する点などA類と異なっている。

308は、口縁に沿っての押し引き沈線文を施文し、以下R Lの斜繩文を全面に施文した後、結節文を間隔をあけて約10段施文している。

342・343・345は同一個体である。長目に作ったループ部分のみを、口縁部から底部まで層状に幾段も施文し、底部近くにのみ押し引き沈線文を3条横位に施文したものである。

C類（第79図309・312、第84図348）

口縁部文様帶に結節回転文に施文したもの。

3個体あるが、復原し得たのは1個体である。

312は、口唇部直下に2条の結節回転文を施文し、以下ループ文を帯状に施文している。断定はできないが、原体の途中に作ったループ文の可能性がある。

309は、同じく口唇部直下に1条の結節回転文を施文したものであるが、一部に3本組紐による結節かと思える部分がある。以下は、他に例をみない原体で、L R繩1本とL繩2本を左撚りしたもの2本を、更に右撚りにして撚り合わせたものである。

348は、口唇部直下に3条の結節回転文を施文し、以下胴部に斜行繩文を施文したものである。

D類（第80図314）

口縁部文様帶に繩の末端による刺突文を施文したもの。

314に示した1個体だけである。口唇直下に繩の末端刺突を巡らし、胴部には0段多条L Rの斜行繩文を、更に胴部の処々に結節回転文を施文している。

E類（第80図313、第81・82図、第84図346・347・349～第85～87図410）

文様帶を構成せず器面全面に繩文を施文したもの。

基本的には、一種類の繩文を横位に回転施文するが、細部において若干異なる。

繩文の節は、長さが2.4mm～6.0mm、幅が1.3mm～3.2mm、平均4.4mm×2.1mmでその比は約2：1であり、0段多条の原体が多用されていることと合致する。

使用原体は、前述した特殊なものとの外、次の種類がある。

1. 単節の繩文

約35個体分出土した。

単節の繩文には、通常のものと0段多条のもの、更に1段多条のものが1個体（355・356）などであるが、0段多条のものが多い。

数例を除き、横位回転施文が主体で、特に原体末端部を強く押捺して回転施文したものは、

ほぼ底部下半近くまで横位施文されている。しかし、それ以外のものでは施文方向を変化させ縦位の羽状や格子目状としたものがある。386・389、390～392は同一体であり、部位により文様が異なっている。

2 . 複節の繩文 (352・362～364・366・370・408)

5 個体あり、370はその末端をループしたものである。

3 . 結束第1種羽状繩文 (393～399)

B類の1例を除き、5個体にみられた。

393は波状口縁をなす。

395・397・398は同一個体であり、また、394も同一個体の可能性がある。口縁部は、結束部の一方のみを幾段か施文した斜行繩文とし、胴部は両方を施文して横位の羽状繩文、底部付近では縦位の羽状繩文とするなど、部位によって施文手法を変えている。

4 . ループ文 (315・370・371372・374・378～385)

約15個体分あり、単節の繩文に次ぐ。多くは、0段多条の繩文を用いている。

ループの部分が強く押捺して回転され、層状的効果をもつが、371・373のようにそれが顕著でないものもある。また、その作りには小さな物 (371他) と細長いもの (381他) とがあり、更にその部分のみを回転したもの (381他) と、ループ部分以外も回転したもの (315他) とがある。

5 . 結節回転文 (308・309・312・314・348・407)

単独で全面に施文された例はなく、口縁部文様として用いた例を除くと、308・314・407の3個体である。

その他、繩文原体の開いた方の末端を結んだ細い紐の部分も一緒に施文したものが1例ある (401)。

第9群土器 (第88図414～422)

所属する土器群が不明確なもの、及び特殊なものを本群とした。

1類 (414)

口唇部が内側に削られたもので、繩文の節の大きさ、砂粒が少なく植物性纖維を多量に含み、器面にふれると粉が付着する等の諸特徴は、第2群土器に類似する。

2類 (415・416)

魚骨回転文土器である。使用された魚骨は異なり、415はニシンの骨に類似する。^(注3) 416の魚骨名は不明であるが、この下には節の非常に細かな繩文が施文されている。いずれも多量の植物性纖維を含むが、415は416に比べて砂粒を多く含み、焼成も良い。胎土等は1類と同様で、第2群土器に類似する。

3類 (417・418)

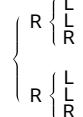
同一個体である。非常に細い1段Lの繩を軸に巻いた単軸絡条体第1類で、口唇部直下に押圧した絡条体圧痕文、以下、若干間隔を開けて縦位に回転施文したいわゆる撚糸文である。胎土に植物性纖維・砂粒・白色凝灰岩末・沼鉄を含む。全体的に第6群土器に属すると考えられるが、絡条体圧痕文を施文した例がないため、一応分離した。

4類(419)

半截竹管の半截面を器面に当てて引いた沈線を施文したものである。胎土・調整・焼成、0段多条による繩文の節の大きさ等は第8群土器に類似する。同B類とは、単に半截竹管の使用する面が違うだけとも考えられるが、特殊な例として分離した。

5類(420)

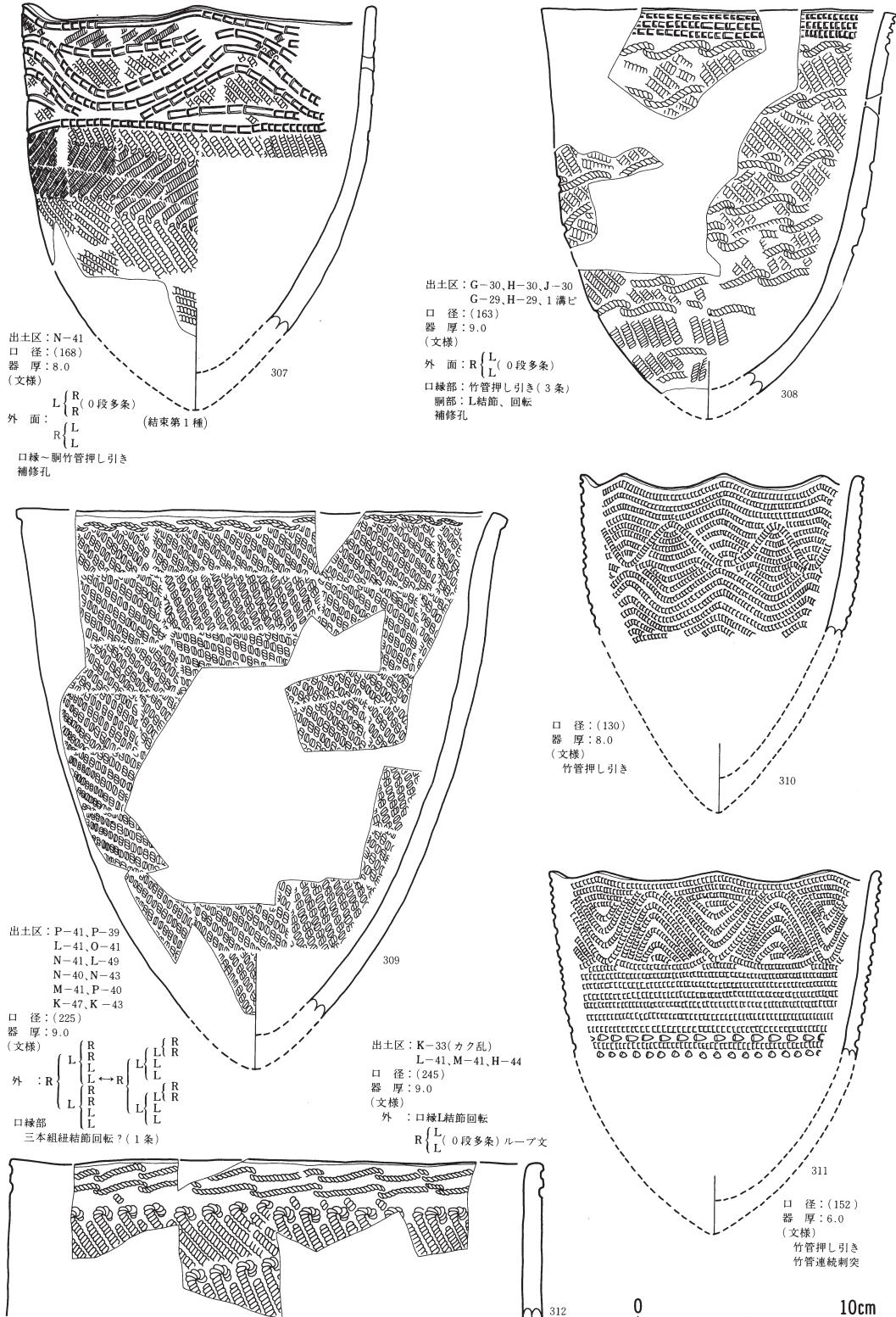
器厚はやや厚く、口唇部の丸い点は第6群土器に類似し、内面調整等は第8群土器に類似す

る。施文原体は L  又は L  と考えられ、第79図309の胴部に施文された繩文

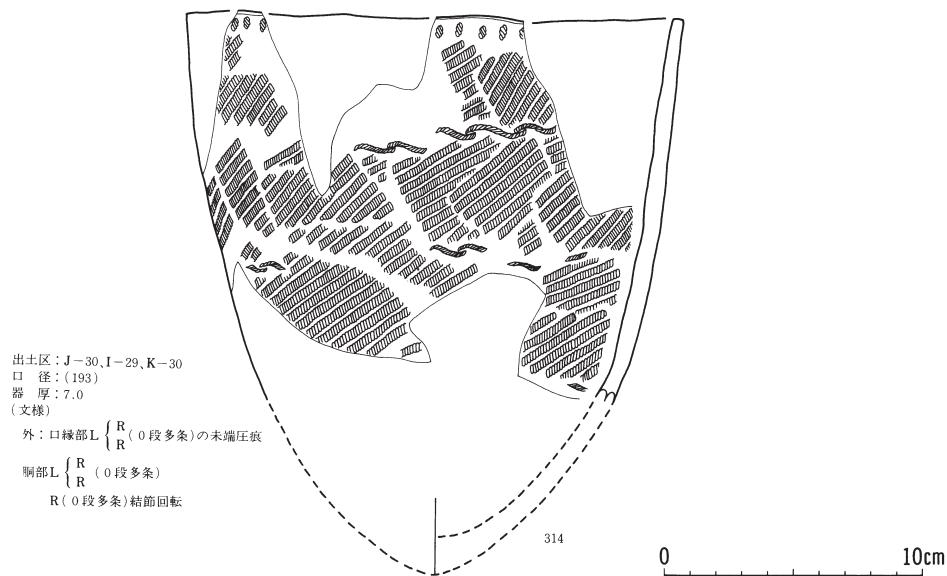
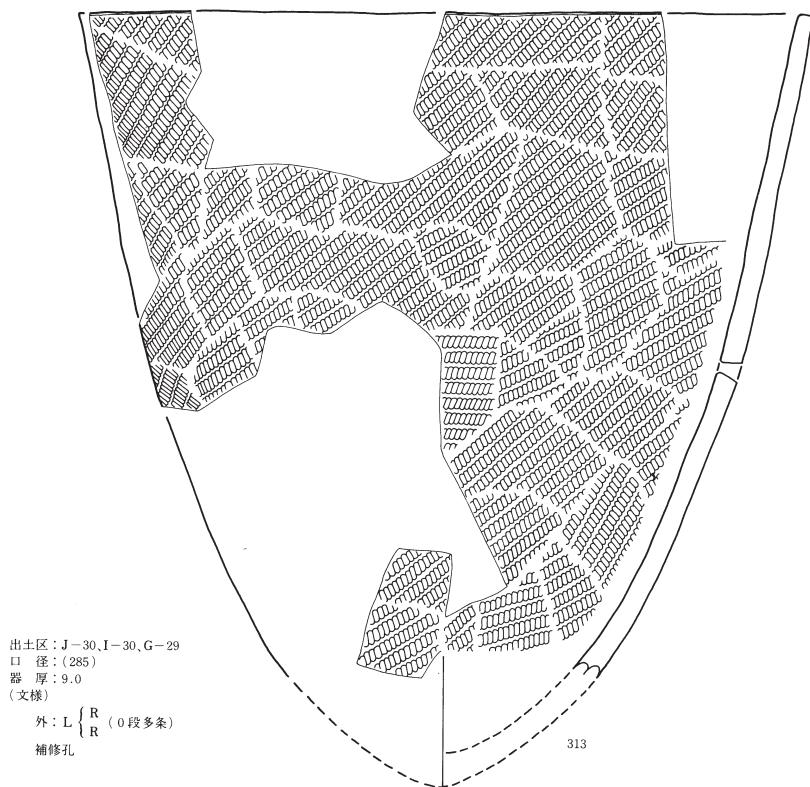
を類似する。出土位置からみても、第8群土器に含まれるものと考えられるが、特殊なものとして一応分離したものである。

6類(412・422)

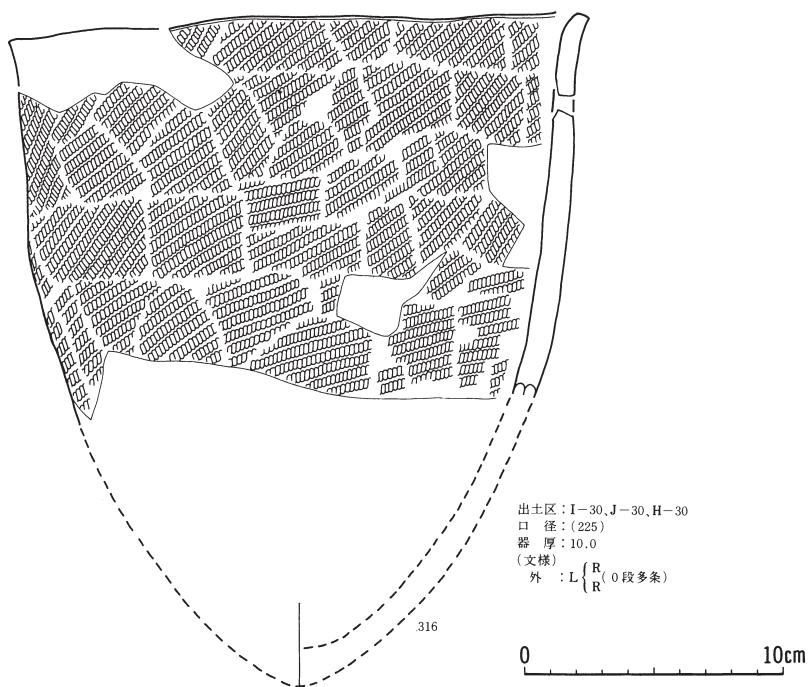
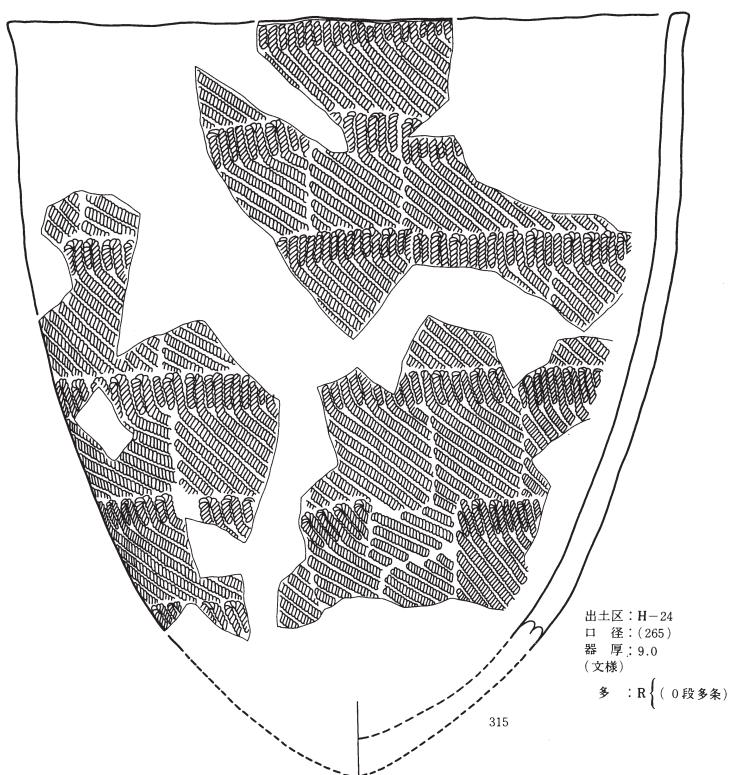
同一個体で、421は口縁部片である。やや不規則な網目状撚糸文を乱雑に施文したものである。第6群又は第8群土器のいずれかに含まれるものであろうが特定し得ない。単軸絡条体という点からすれば、第6群土器に含め得るかもしれない。(三 宅 徹 也)



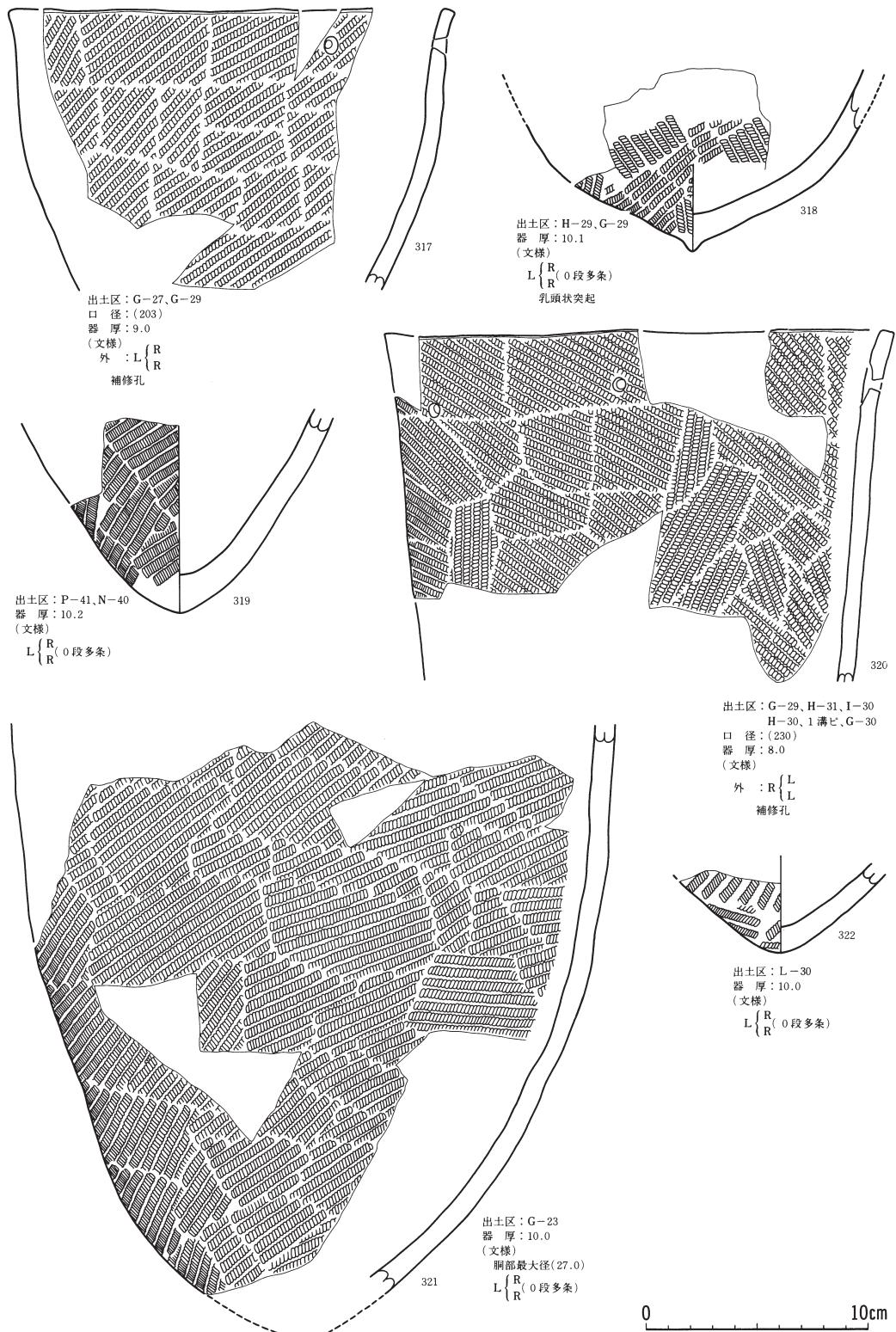
第79図 第8群土器実測図(1)



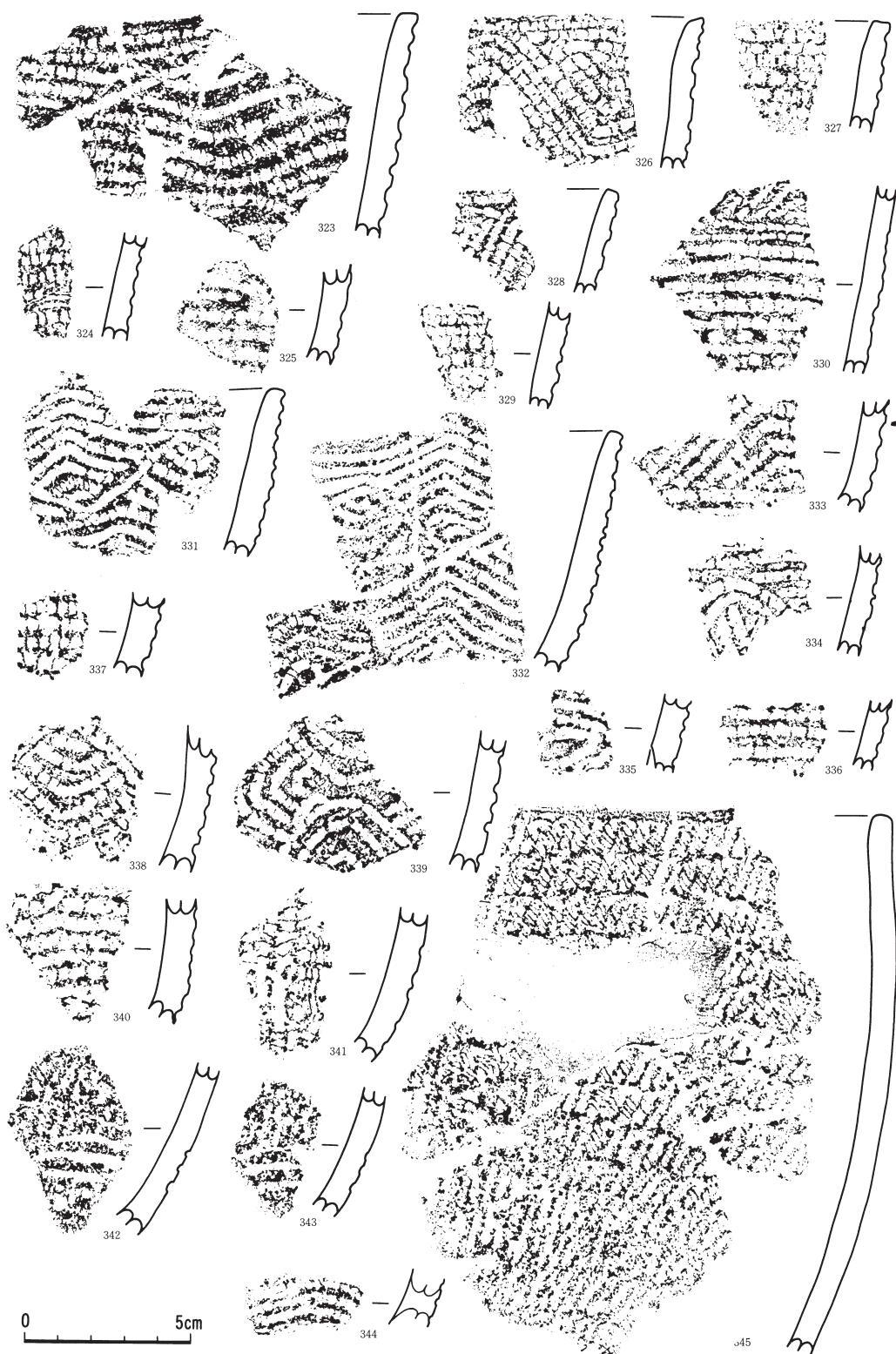
第80図 第8群土器実測図(2)



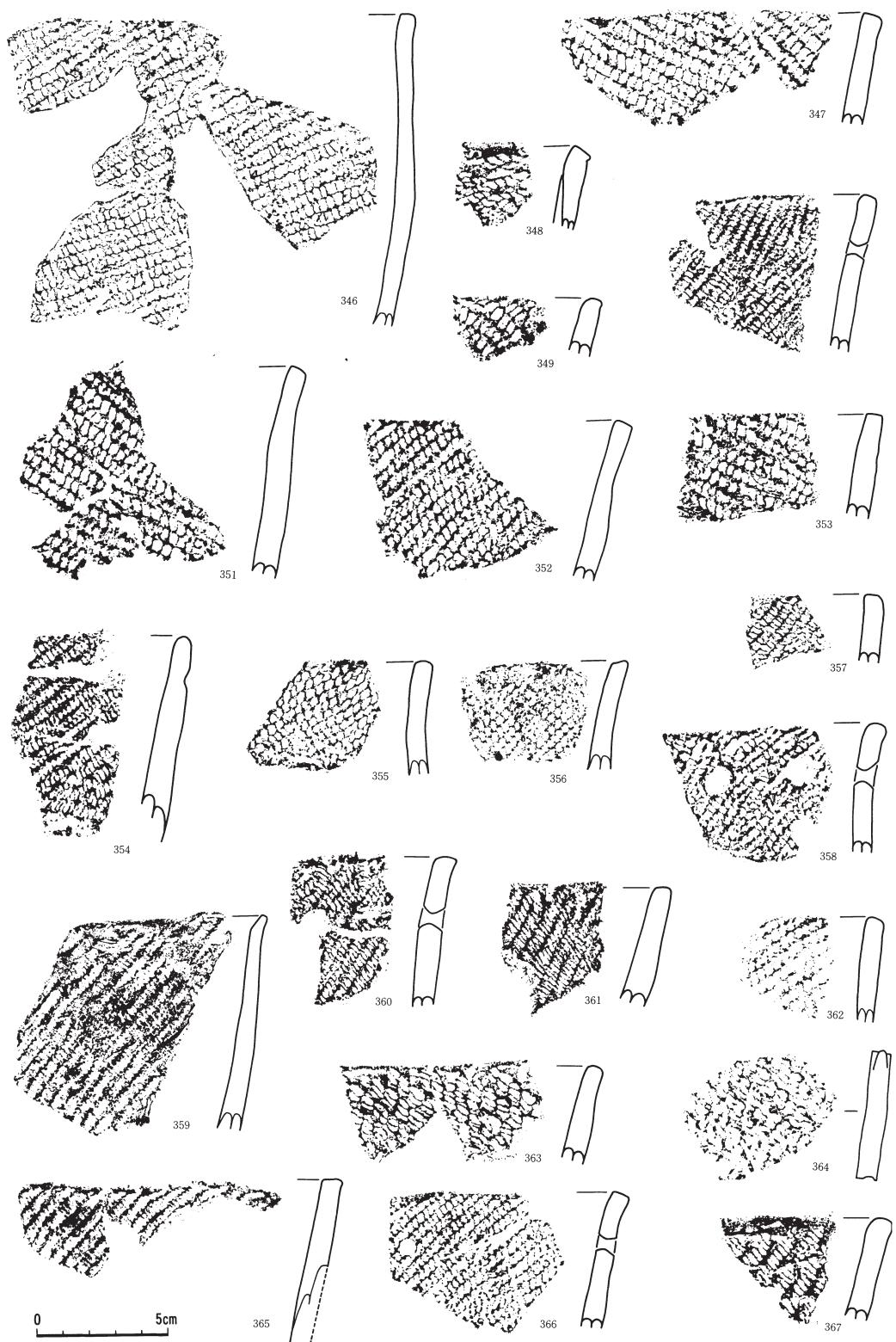
第81図 第8群土器実測図(3)



第82図 第8群土器実測図(4)



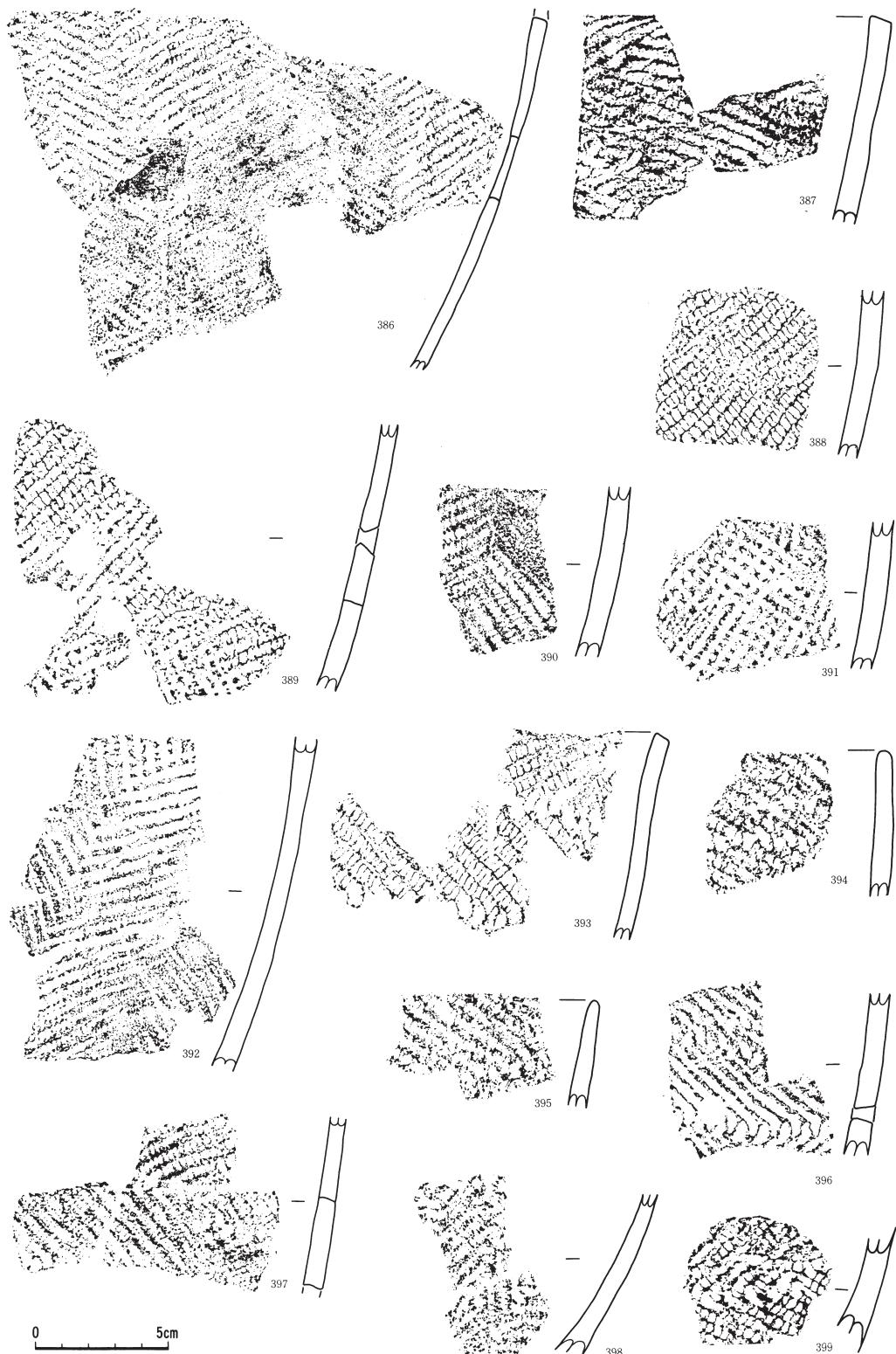
第83図 第8群土器拓影図(1)



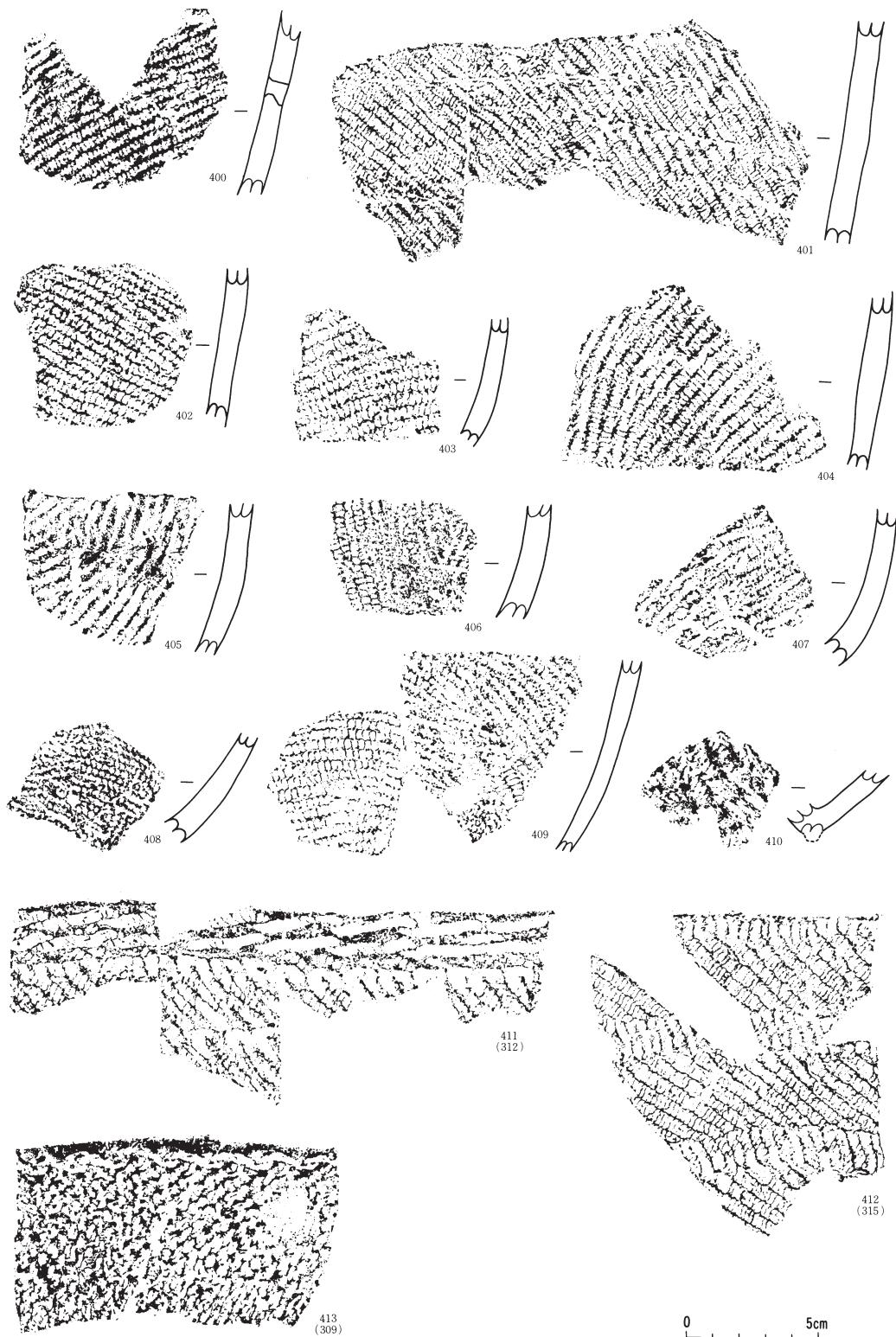
第84図 第8群土器拓影図(2)



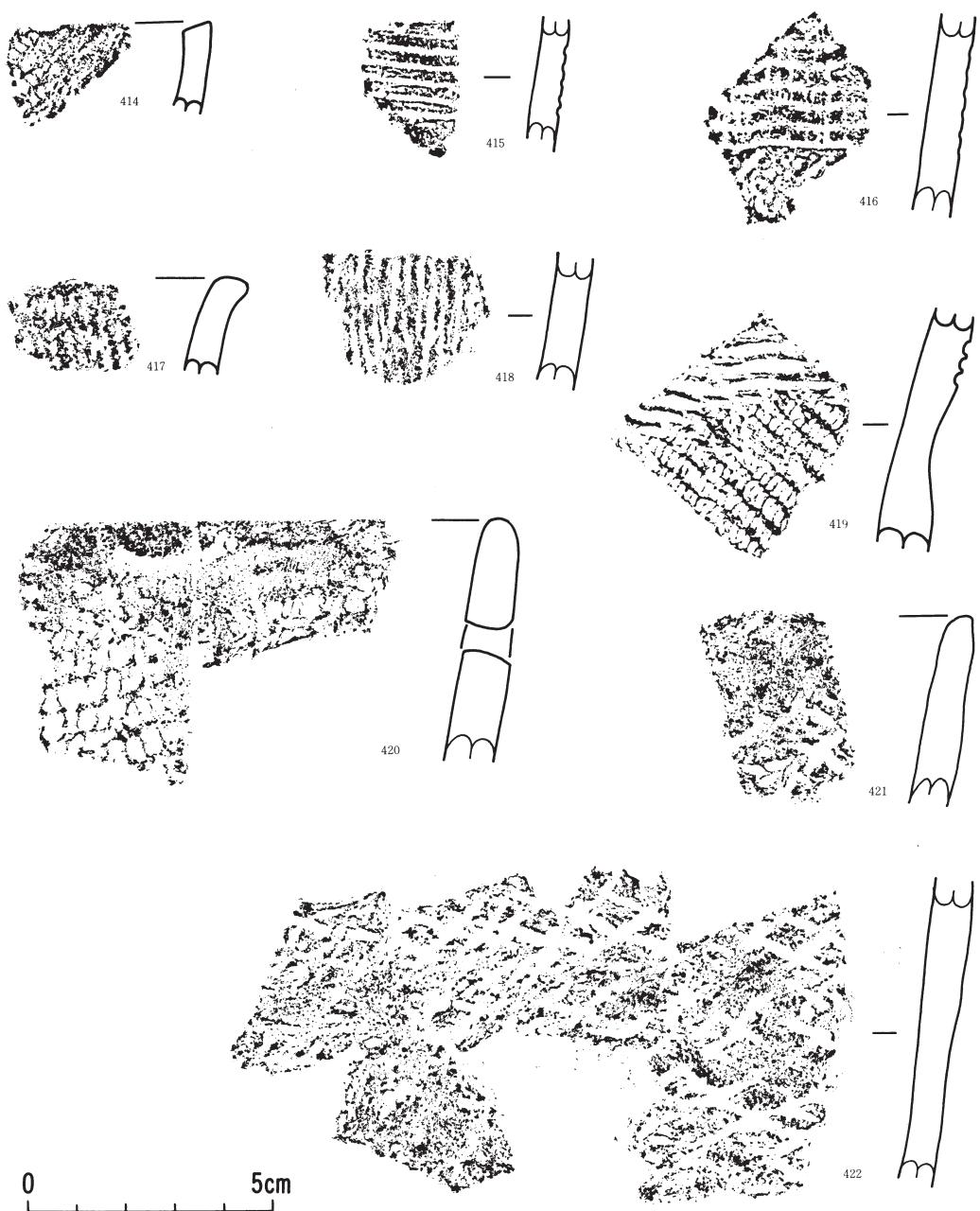
第85図 第8群土器拓影図(3)



第86図 第8群土器拓影図(4)



第87図 第8群土器拓影図(5)



第88図 第9群土器拓影図(6)

2. 土 器 片 錘(第89・90図)

20点出土した。完形品11点、一部欠損品5点、破片4点である。

<分布>

H - 30グリッドを中心に、G - 30、H - 29、G - 25グリッドから出土した。出土層位は第層及び第層で、共伴する土器は第8群(繩文前期初頭、早稻田6類に比定される)である。また、遺構内出土のものはない。

以下、分類・観察等は福田友之(青森県教育委員会『発茶沢』青森県埋蔵文化財調査報告書67集、1981)を参考にした。

<形態>

資料数が少ないため細部にわたる形態の分類は難しいが、大まかに次のように分類される。

類(6点)周縁が全体的に丸みをもつもので、基本的に橢円形を示し、諸形態の中で最も多い。(1~6)

類(2点)縦辺・横辺が直線的で基本的に長方形を示す。(7、8)

類(5点)一方の横辺が著しく短く、切り込み部とその周辺を若干残すもの。(9~13)

類(4点)横辺の長さが異なり、縦辺中央部に最大幅をもつもの。(14~17)

類(3点)~類にあてはまらない不定形のもの。(18~20)

18は五角形を、19・20は不整方形を示す。

全体の比率は、類30%、類10%、類25%、類20%、類15%であり、類が最も多いが、多数を占めるものではない。

<大きさ>

(長さ)対象資料は16点である。最少58mm、最大104mm、平均79.9mmで70mm台のものが37.5%を占める。形態別にみると、類は76~102mmで90mmを超えるものが4点ある。類は1点104mmで最大のものである。類は68~84mm、類は62mmと79mmであり、類は58~72mmで最小のものを含む。

(幅)対象資料は19点である。最小48mm、最大68mm、平均56.4mmで、最小から最大まで平均的に分布している。形態別にみると、類は48~65mm、類は48mmと56mm、類は49mm~61mmであり、類は58~68mmで最大のものを含む。類は48~65mmである。

(重量)対象資料は16点である。最小31g、最大62g、平均46.9gで、50g以上と50g以下の2つのグループに分けられる。形態別にみると、類は35~62gで最大のものを含む。類は56g、類は36~57g、類は37~53gであり、類は31~46gで最小のものを含む。

(厚さ)対象資料20点である。最小7mm、最大10mmで、8mmのものが最も多く13点で、65%を占める。厚さは、素材となった土器破片に左右されるが、形態別では類に最大の10mmのものが多い。

(長／幅)長さ・幅ともに知り得る資料16点の中で、20(長さ60mm、幅65mm)を除く15点は長さが幅を上回る縦長のものである。

<製作工程>

土器片錐の製作工程は、一般に、素材の選択(第1工程)、成形及び整形(第2工程)、切り込み(第3工程)の順序で進められる。

(第1工程)素材となる土器破片を選択する工程である。すべて第6群土器(縄文前期初頭・早稻田6類に比定される)の胴部破片を素材としており、口縁部や底部の破片はみられない。しかし、成形・整形の段階で口唇を除去した可能性もある。

素材となった土器(破片)と製作された土器片錐の繩かけ方向との関係から、

第1類 土器(破片)の縦位方向と繩かけ方向が一致するもの

第2類 土器(破片)の横位方向と繩かけ方向が一致するもの

第3類 土器(破片)の斜位方向と繩かけ方向が一致するもの

(右下り第3a類、左下り第3b類)

に分類される。

最も多いのは第1類14点で、全体の70%を占める。以下、第3類4点(a類3点、b類1点)の20%、第2類2点の20%の順である。一般に、土器(破片)の縦位と繩かけ方向が一致すると湾曲が小さくなり、繩の遊びが少なくなる等の利点があったと推定される。

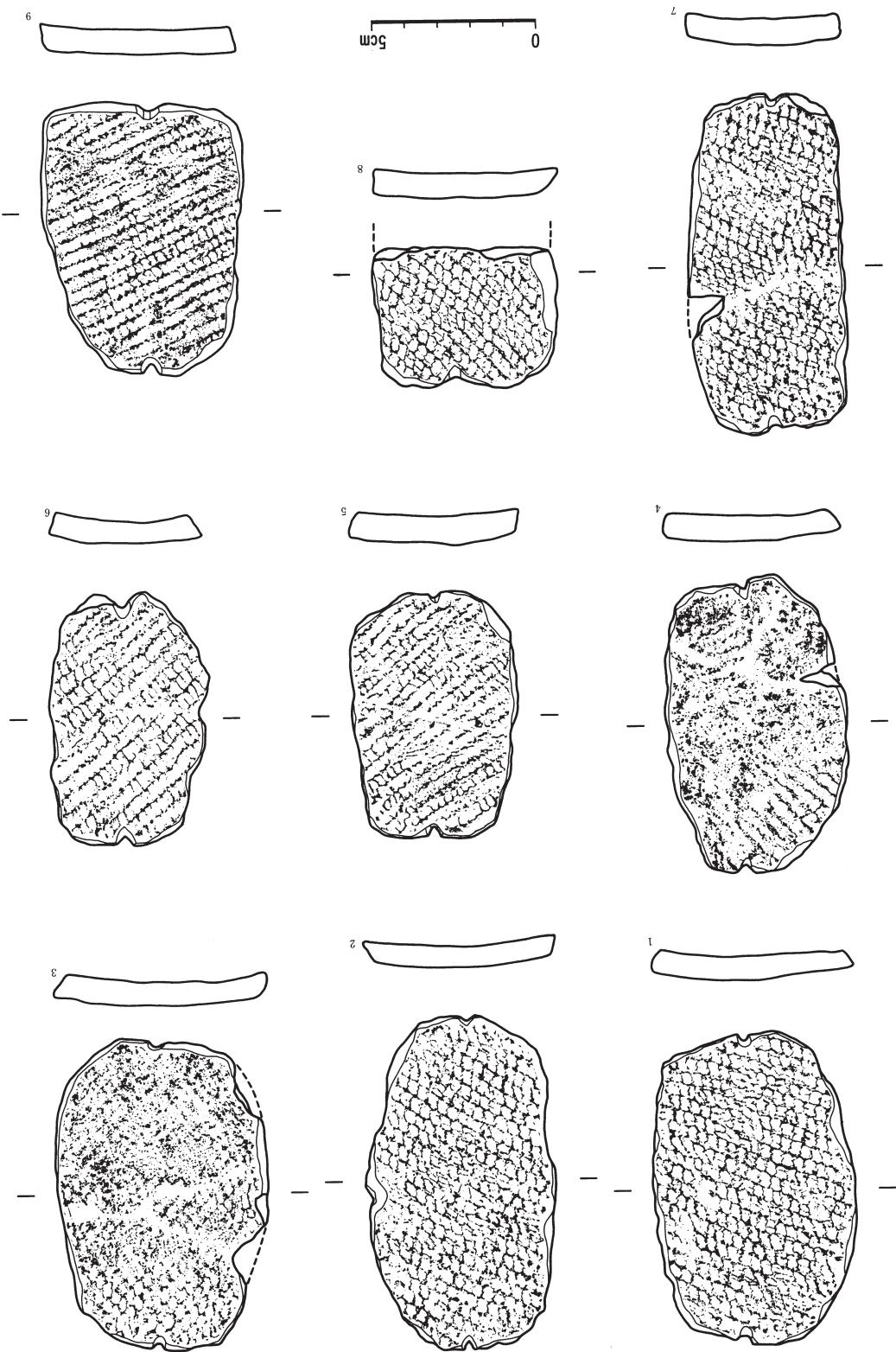
また、1、2、7、8、10と5、9、13、19は胎土・焼成・施文文様から、それぞれ同一個体から製作されたと考えられ、1個の土器から数個の土器片錐が製作されたことを示している。

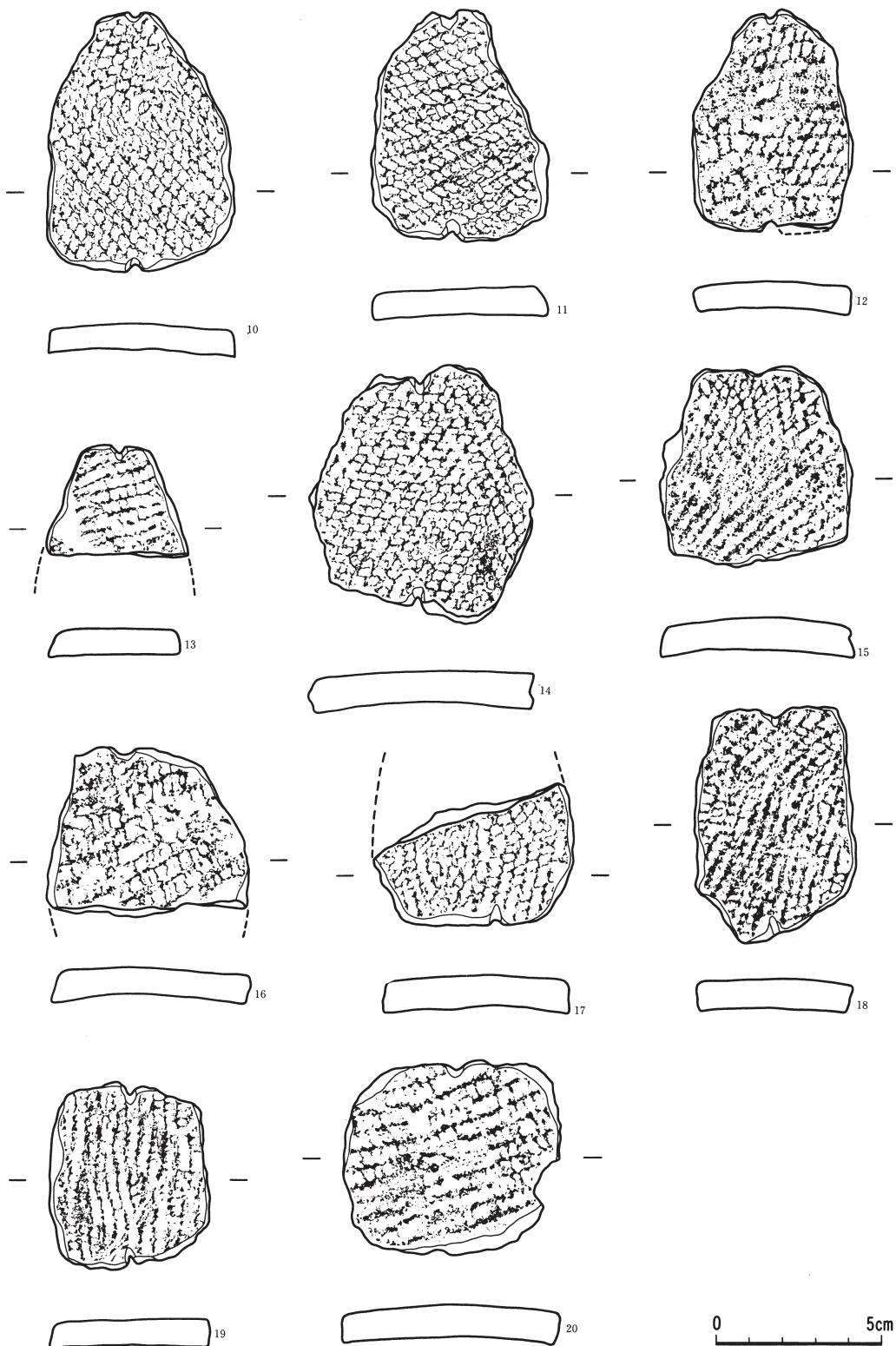
(第2工程)素材として選択された土器破片を、打ち欠き・擦りなどによって整形する工程である。この工程において、大きさ特に重量は、錐という機能により大いに制約を受け決定される。しかし、31gから62gまで平均的に分布し、最大が最小の2倍とかなりばらつきがあることから、複数の土器片錐をもって、錐としての機能を果たす重量を確保した可能性も考えられる。一方、形態もこの工程において決定される。形態別に長さ・幅・重量の平均値を比較してみると、最も基本的な形態と思われる ・・・ 類が、やや複雑な形態の ・・・ 類よりも比較的大きく、 ・・・ 類間では、明確な差違は認められない。また、素材の選択に当たり、 ・・・ 類は繩かけが最も有効と考えられる第1類に含まれる。以上の2点から、 ・・・ 類は比較的大型の土器破片を素材として、繩かけ方向を選びながら成形されたもので、 ・・・ 類は土器破片の形を利用しながら調整程度の成形を施したものであると推定される。

形態別平均値

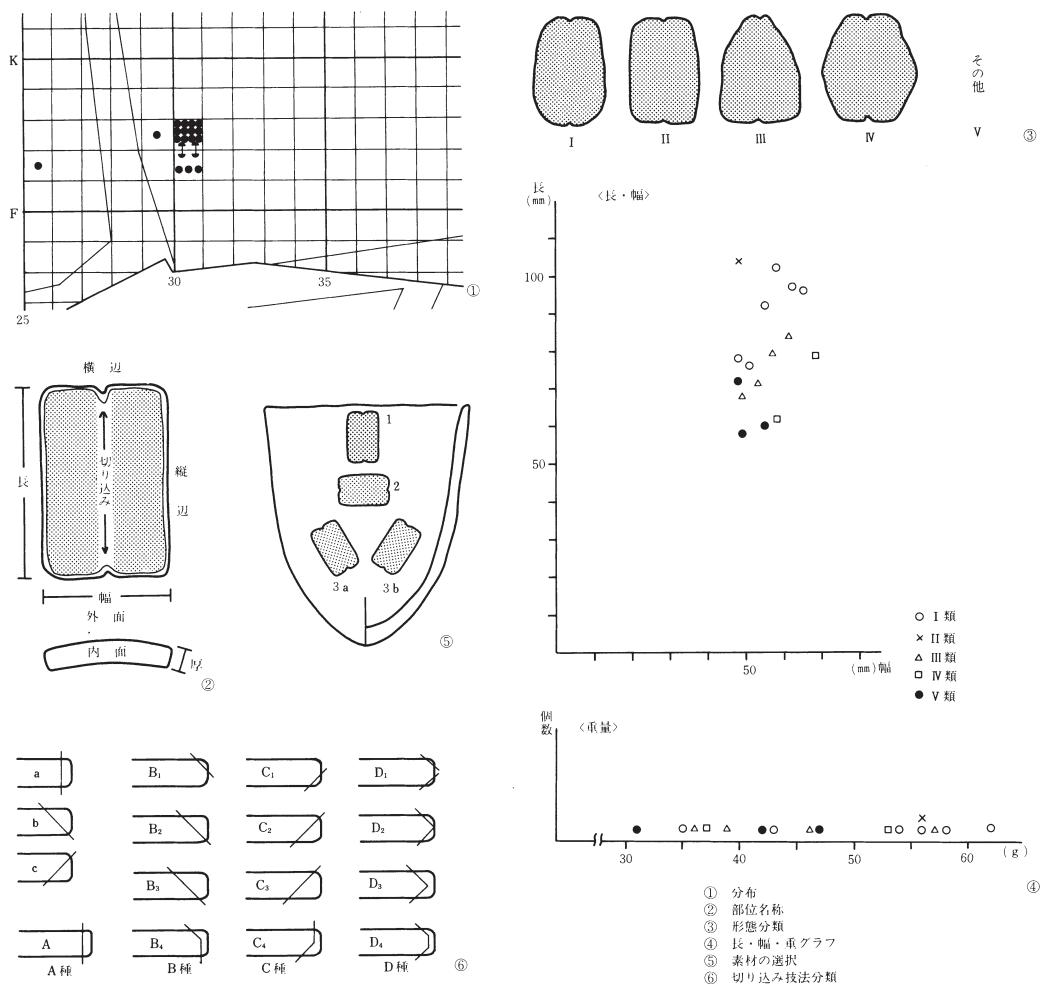
整形については、磨滅との区別が明確ではないが、破片を除く資料16点のうち、全周縁を整形したと認められるのは1点(18)で、逆に全く整形がみられないものが1点(14)ある。残りの

第68图 土器片鳞拓影图(1)





第90図 土器片錘拓影(2)



第91図 土器片錐

14点は部分的に整形し、そのほとんどが切り込み部周辺を整形している。

(第3工程) 繩かけ用の刻みをつける工程である。破片を除く16点のうち、15点は両横辺に切り込みをもつ。20は片方にだけ切り込みをもち、それが製作途上のものかそのまま使用されそのまま使用されたものかは不明である。

切り込みの技法には、外面から内面へ縦位に切り込みを入れるa技法、外面から内面へ斜位に切り込みを入れるb技法、内面から外面へ斜位に切り込みを入れるc技法が考えられ、その組み合わせによって4種13技法に分類することができる。

全資料中、a技法のみを用いたA種は6例みられ、比較的湾曲の少ないものに多く用いられている。b技法のみ、又はb+a技法を用いるB種は18例と最も多く、特に、全く整形面を残さないB₃・B₄類は合わせて13例と、全体の37%を占めている。c技法のみ、又はc+a技法を

用いるC種は全くみられない。b+c技法、もしくはa+b+c技法を用いるD種は10例を数えるが、整形面を残さないD₃・D₄類に限られる。各種において、成形・整形面を残さないものは、繩かけの効用としてはかなり有効であると思われる。

切り込みの形状はV字状、又はU字状を示し、幅は3~5mmで、4mmのものが最も多い。深さについては、2~4mmで2mmのものが最も多い。使用された繩の太さは、直径1~2mm前後と推定される。

今回の調査で出土した土器片錐は、繩文時代前期初頭の土器片を素材として用いており、土器の縦位方向と繩かけ方向を一致させているものが多数を占める。

形態からは大きく4分類されるが、主流をなす形態はなく、長さ・幅・重さにおいても、最大値最小値間に大きな開きがある。

整形は、切り込み部周辺と周縁の一部に限られるもおがほとんどを占め、切り込みは、V字状又はU字状を示し、外面から内面に向けて斜位又は縦位に入れるものが多い。

ほぼ同時期の土器破片を素材としている発茶沢遺跡出土のものと比較すると、計測値においては近似値を示すなど類似点は多いが、本遺跡例の方が成形・整形工程の面からは、かなりていねいに製作されている。

(千葉 正人)

第10表 形態別平均値

	長 mm	幅 mm	重 g		長 mm	幅 mm	重 g		長 mm	幅 mm	重 g
I 類	90.2	56.5	51.3	III 類	75.5	55.0	44.5	V 類	63.3	54.0	39.7
II 類	104.0	52.0	55.0	IV 類	70.5	61.5	45.0				

第11表 土器片錐観察表

No.	グリッド	層位	形態	長さ mm	幅 mm	厚 mm	重量 g	素材	切り込み	備考
1	H-30	V	I	97	62	7	62	1	B ₃ B ₃	完形品
2	G-30	V	I	102	58	7	58	1	A A	完形品
3	H-30	V	I	96	65	8	(55)	1	B ₃ A	一部欠損、推定重量56g
4	H-30	V	I	92	55	8	(53)	1	B ₃ B ₃	一部欠損、推定重量54g
5	G-30 H-30	V	I	76	51	8	43	1	A B ₄	完形品
6	表 採	I	78	48	7	35	1	D ₃ D ₃		完形品
7	H-30 G-30	V	II	104	48	8	(55)	1	B ₄ D ₄	一部欠損、推定重量56g
8	H-30	V	II	(43)	56	8	(25)	1	D ₄ —	破片
9	H-30	V	III	84	61	8	57	3 a	D ₃ B ₃	完形品
10	H-30	V	III	79	57	8	46	3 a	D ₃ B ₄	完形品
11	H-30	V	III	71	53	8	39	2	B ₁ B ₄	完形品
12	H-30	V	III	68	49	8	(35)	1	D ₄ A	一部欠損、推定重量36g
13	H-30	V	III	(34)	(43)	8	(12)	1	D ₃ —	破片
14	H-30	IV	IV	79	68	10	53	1	B ₄ B ₃	完形品、整形なし
15	H-30	V	IV	62	58	10	37	3 a	A B ₂	完形品
16	G-30	V	IV	(52)	60	8	(39)	1	B ₁ —	破片
17	H-30	V	IV	(42)	60	10	(26)	1	— B ₃	破片
18	H-30	V	V	72	48	8	42	2	B ₁ B ₂	完形品、全周縁に整形
19	G-30	V	V	58	49	8	31	1	D ₃ D ₃	完形品
20	G-25	III	V	60	65	10	46	3 b	B ₁ —	一部欠損、推定重量47g

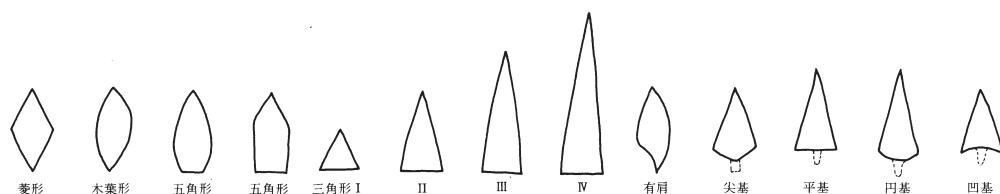
註 () 内は一部欠損・破片の残存最大値

3 . 石器

石鎌・石槍

石鎌や石槍の分類は、調整部位や器体の全体的形態、茎の有無、基部形態等に基づき、これらの組合せで行うことが多い。そしてこれらの形態的特徴に、ある程度時期差や地域差のあることも知られている（工藤1977他）。しかしながら、例えば基本的形態が三角形であっても、その中には正三角形を呈するものや二等辺三角形を呈するものがあり、更にその中でも幅の広いもの、狭く長いものなど様々で、器体のもつ形態の実現はかなり困難といえる。また、石槍は、「明確な型式分類がなされていない」（鈴木1981）のが現実でもあり、何らかの有効な基準を模索せざるを得ない。石鎌や石槍の実態究明には、上述した形態に基づくほかに、通常その長幅比も検討されることが多い。このことから、長幅比を器体の形態と結合させて分類した方が、実際の器体のもつイメージが從来以上に表現できるのではないかと考えられたため、本遺跡の石鎌及び石槍の分類は、下記に基づいて行うこととした。

基本形態	基部形態	長幅比
A 不定形	a 凹基	1.99以内のもの
B 三角形	b 平基	2.0~2.99までのもの
C 五角形	c 円基	3.0~3.99までのもの
D 木葉形	d 尖基	4.0~4.99までのもの
	e 有肩	5.0~5.99までのもの



石鎌分類模式図

石鎌は、上記分類に先立ち有茎と無茎に分ける。有茎石鎌の長幅比は、茎を除いたものである。以下分類にしたがって述べるが、ここでは主として基本形態と長幅比による分類を用い、基部形態は補助的な説明に用いた。

1 . 石鎌（第92図1～第95図85）

遺構外出土の石鎌は85点である。完形ないし略完形は59点で69%、欠損26点で31%である。石槍との区別が困難なものもあるが、長さ・幅のほか重さ（5 gを基準として）をも参考にして器種分けをした。

有茎鎌と無茎鎌がある。欠損品の多くは無茎鎌と考えられるため、有茎鎌は8点で約10%、

無茎鏡は77点で90%を占めることになる。

有茎鏡 (1 ~ 8) 8点

数量が少ないので特に細分化せず、一括して述べる。

基本形態はすべてB(三角形)であり、長幅比が1であるもの(4・5)が2点、他はすべて2である。基部形態には、b(6) c(3・8) d(1・5)等がみられる。また、側縁が丸みを帯びるもの(3・6)や、先端部のみとがるもの(3)などがある。

茎を含めた長さは2.4~4.25cm、幅は1.3~1.8cm、厚さは0.4~0.9cm、重さは0.85~(5.7)gの間である。1と5は玉髓である。

無茎鏡

A 不定形なもの (49・66・69・70)

は49の1点で他の3点は2である。ただし、49はB(三角形)に含めるほうが妥当かもしれない。

B 三角形を呈するもの (12~16・22・24)

(16)と(12~15・22・24)がみられるが、特に12、22は2に近いものである。c(円基)は22・24の2点で、他はすべてa(凹基)である。全般に調整の度合は良いが、16や24など極小な剥片を素材としたものは、周縁を若干調整しただけである。

長さは1.9~4.55cm、幅は0.95~1.7cm、厚さは0.15~0.55cm、重さは0.36~3gの間である。

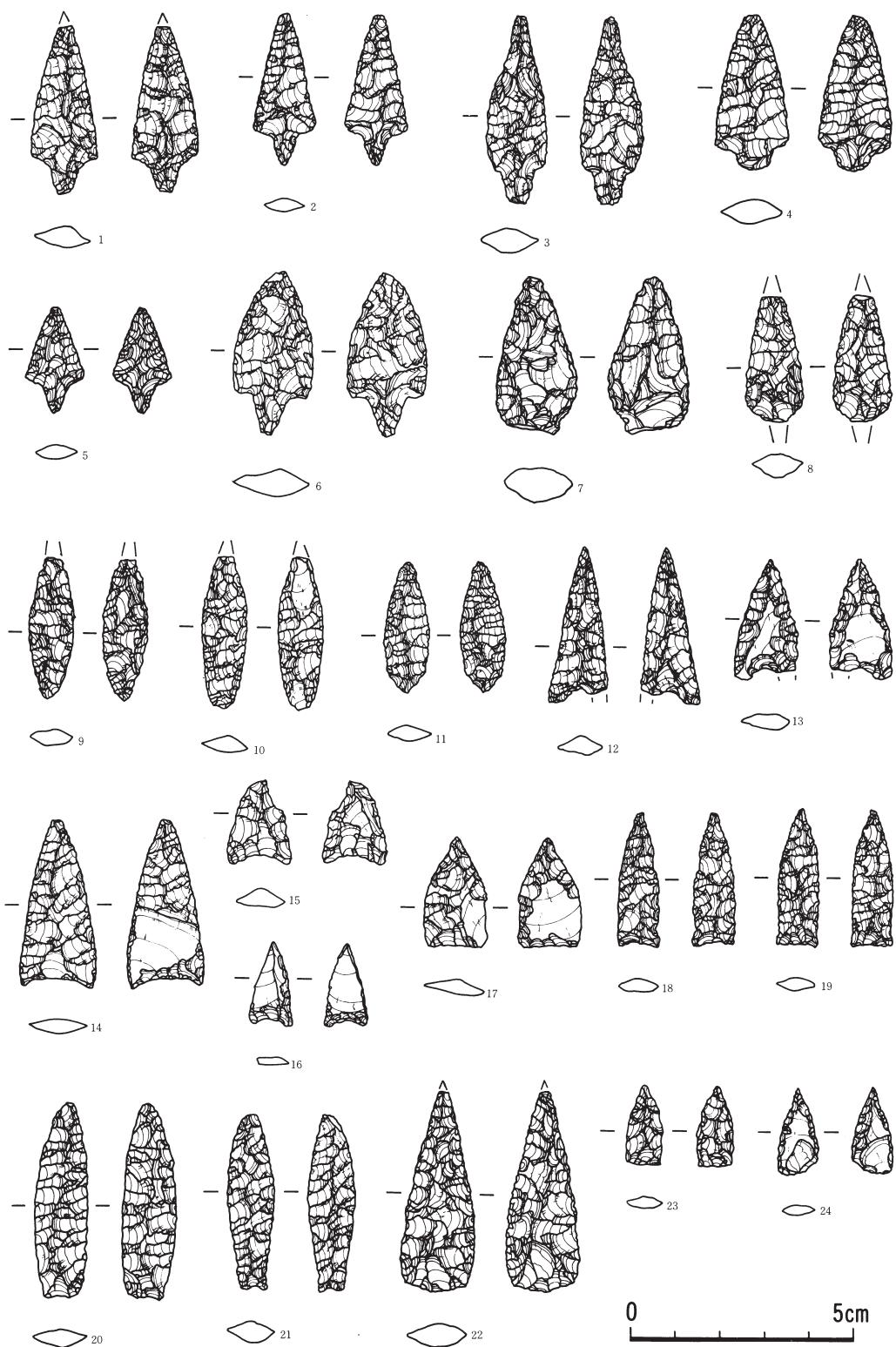
C 五角形を呈するもの 19点

が1点(17) が7点(23・29~33・71) が8点(18~21、25・26・28・34・39) が2点(35・38) は1点(36)である。基部はbないし cが多く、aは3点(18・20・21)である。周縁だけを調整した29、基部をほとんど調整していない32を除くと、調整は全体的に良好である。

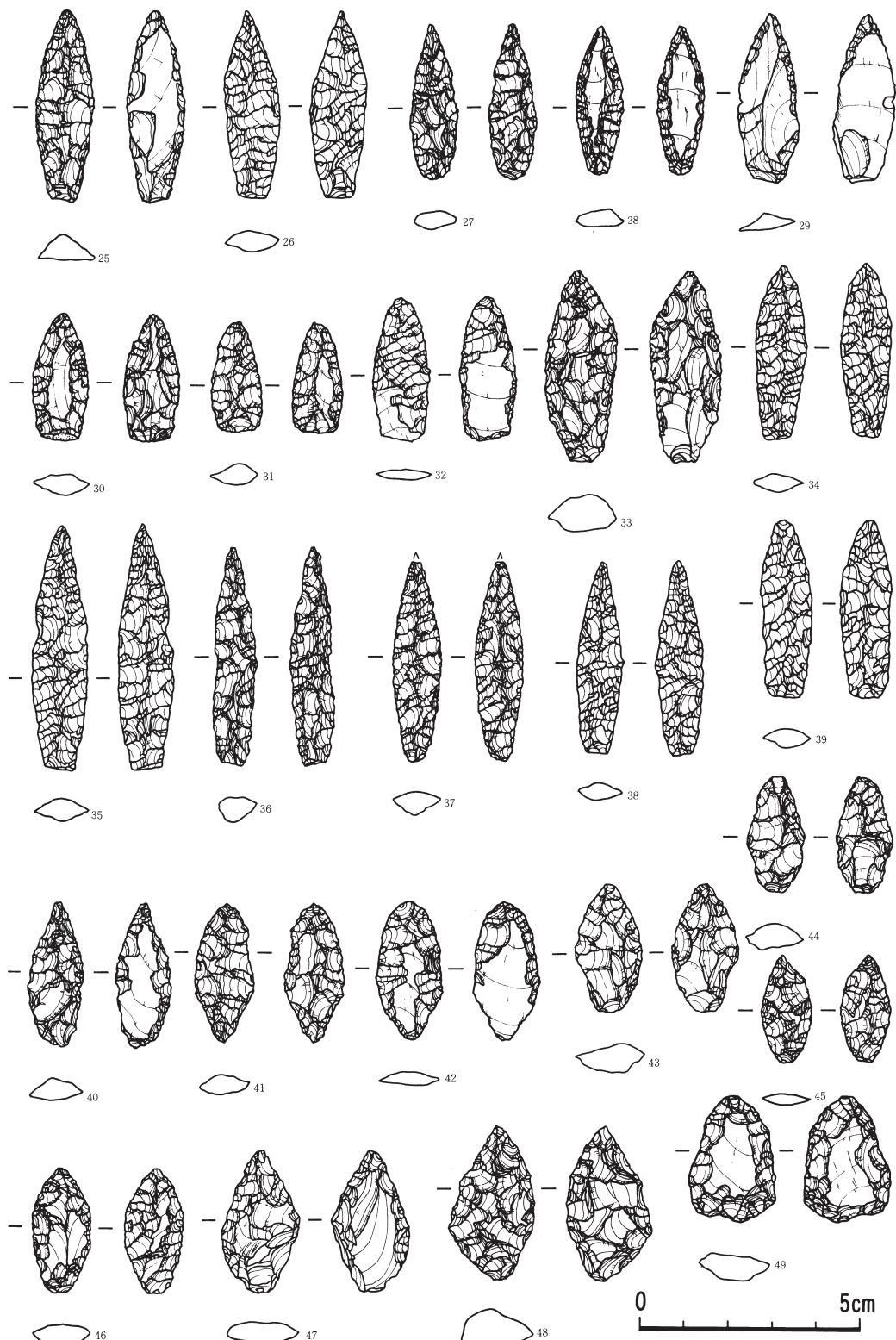
長さは1.75~5.5cm、幅は0.8~1.65cm、厚さは0.3~0.85cm、重さは0.2~5gの間である。33は幅・厚さ・重さとも他に比べてかなり大きな数値をもち、異質であるため木葉形に含めるほうが妥当かもしれない。20は緑色頁岩である。

D 木葉形を呈するもの 18点

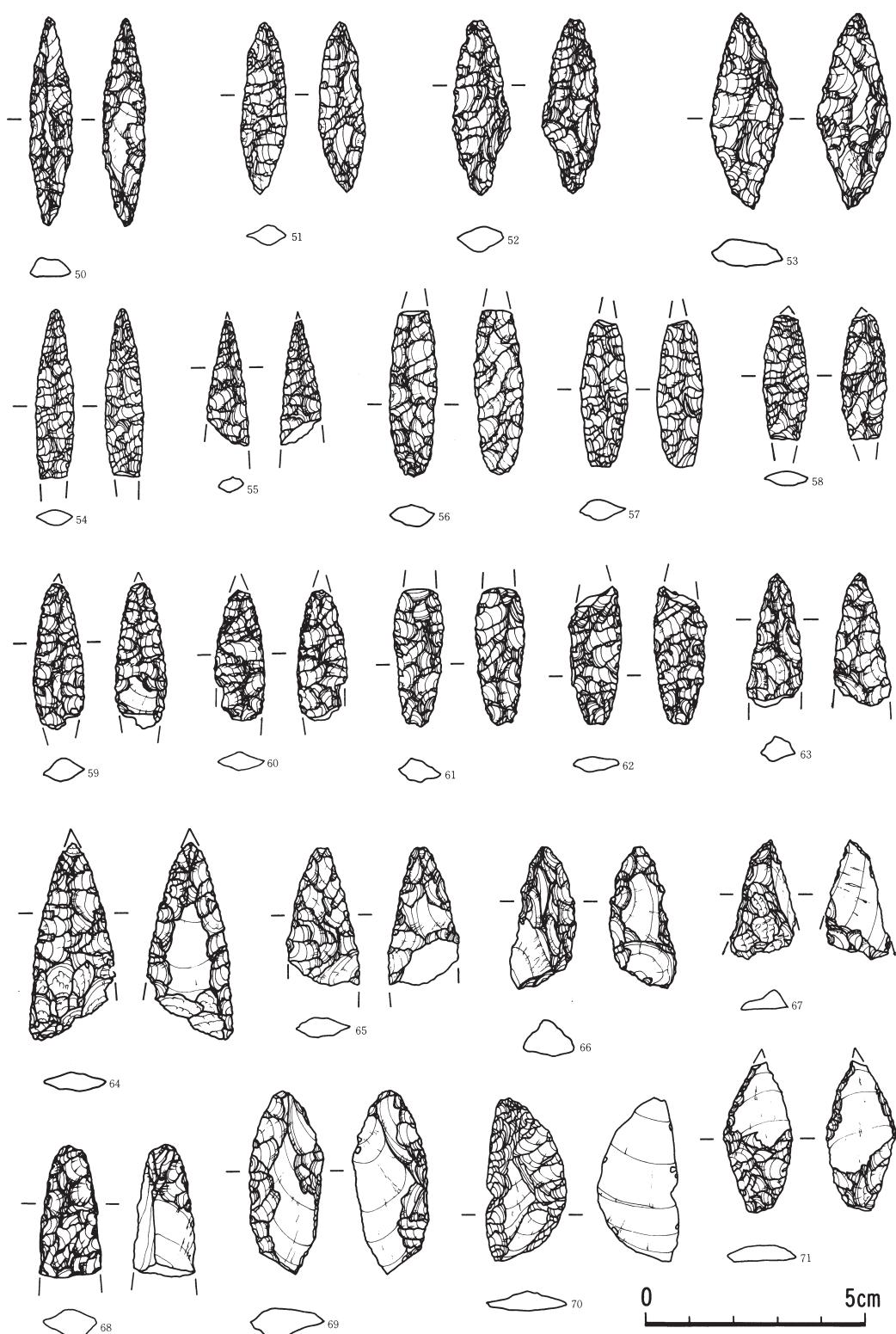
が2点(47・48) が8点(40~46・53) が6点(9~11・27・51・52) が2点(37、50)である。 は幅広のややすんぐりしたもので、木葉形という名称が適切であるが、 は狭長であり柳葉形と称する方が適切であろう。しかし、長幅比が3:1以上のものを柳葉形として表現した場合、石槍における典型的な木葉形と称されるものまで含んでしまうことになるため、ここでは柳葉形という名称は用いない。また、53は本来的には菱形を呈するもので、別分類すべきかもしれないが、他にも判断の困難なものもあり、あえて木葉形に一括した。多



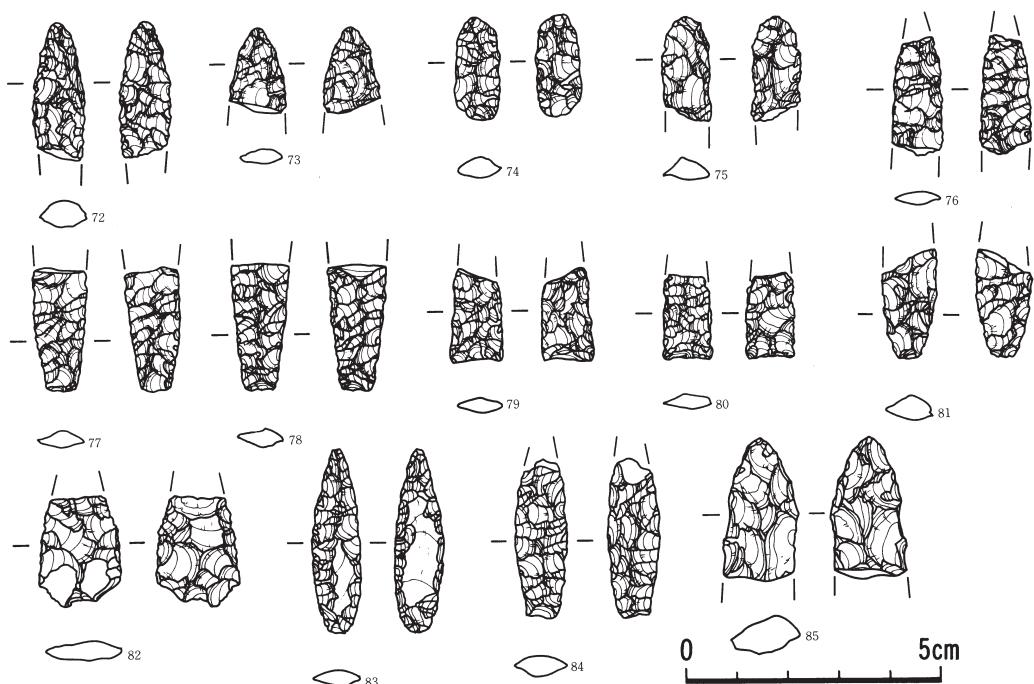
第92図 石器実測図（石鏃 1）



第93図 石器実測図（石鏃2）



第94図 石器実測図（石鏃3）



第95図 石器実測図（石鎌4）

くはほぼ中央部が最大幅を示すが、11はやや下がりいわば尖基状を呈する。52は一見有肩のようであるが、それは側縁を調整しきれなかったために基部側が若干よじれた結果である。また、この基部は石錐として用いられたと思われ、磨滅している。

長さは2.4~4.8cm、幅は1.0~2.5cm、厚さは0.35~0.85cm、重さは0.5~5 gの間で、全般的に

- に重いものが多い。45は黒曜石、47は玉髓である。

2. 石槍（第96図86~第99図161）

遺構外出土の石槍は90点、うち完形ないし略完形は30点で33%、欠損は60点で67%である。欠損品のうち中間部残存のものが8点である。なお、88、93、109~111、115等は、石鎌の大きな部類と大して違わない。石鎌の中で最も重いものは有茎鎌の7で、欠損重量で5.7gあり、完形ならば6gを超すことは確実である。しかし、それ以外で最大値を示すもの2点が5gであるため、本遺跡では主に5gを超えるものを石槍として扱っている。

形態はすべて木葉形と称してもよい（D - 木葉形）が、その中のバリエーションとして、基部が平坦なもの（C - 五角形）、肩部作出のあるもの（De - 木葉形有肩）、側縁の調整が雑で凹凸の著しいもの（A - 不定形）に分類した。

A 不定形なもの 7点

器体の表裏面・側縁の調整が非常に雑で、側縁の凹凸が著しい。

が1点（108）、が6点（104・106・107・109・111・115）である。104の基部はb（平

基)である。

C 五角形を呈するもの 3点

各側縁は直線的でなく、緩やかな曲線であり、木葉形の基部を切断したような形態である。したがって、本来的には五角形とは称し難いが、一般的な木葉形と区別するため、この形態名を用いる。

が2点(94・98) が点(112)の計3点で、欠損品の中にも4点(143・145・149・161)みられる。器体の調整は、後述するD・Dに比較し、表裏面とも全般に丁寧である。

D 木葉形を呈するもの 19点

が5点(95・96・100・105・138) が11点(91~93・97・99・101・103・106・110・115・116) が2点(87・88) が1点(86)である。

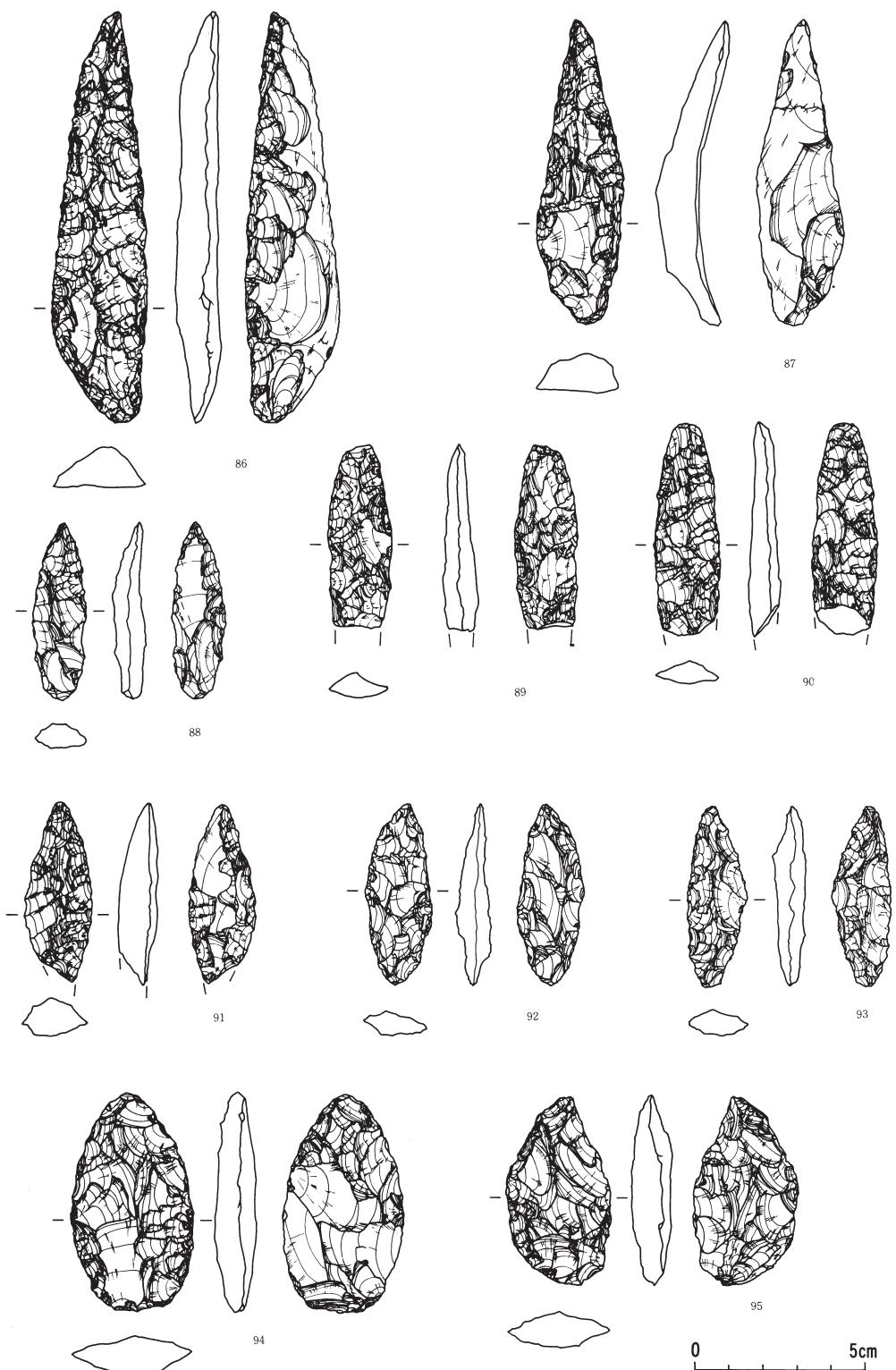
88は先端部が磨滅しており、石錐として使用されたようである。玉髄の縦長剥片を素材としており、打面を残している。86は、通常半月形と称されるもので、縦長剥片を素材としている。右側縁では、主要剥離面の調整後に背面調整を行い、ほぼ直線をなす側縁を形成している。左側縁の湾曲部から先端にかけては、特に先端部周辺は、急峻な調整がなされており、その断面形状はほぼ正三角形を呈する。基部に打面を残している。87は、強く湾曲した縦長剥片を素材とし、主として背面の全面に調整を加えたものである。先端部の調整及び断面形状は87と同様である。

本類の 及び の器体調整は に比べると特に粗雑である。96・100・101・110の各基部に打面部分を残している。

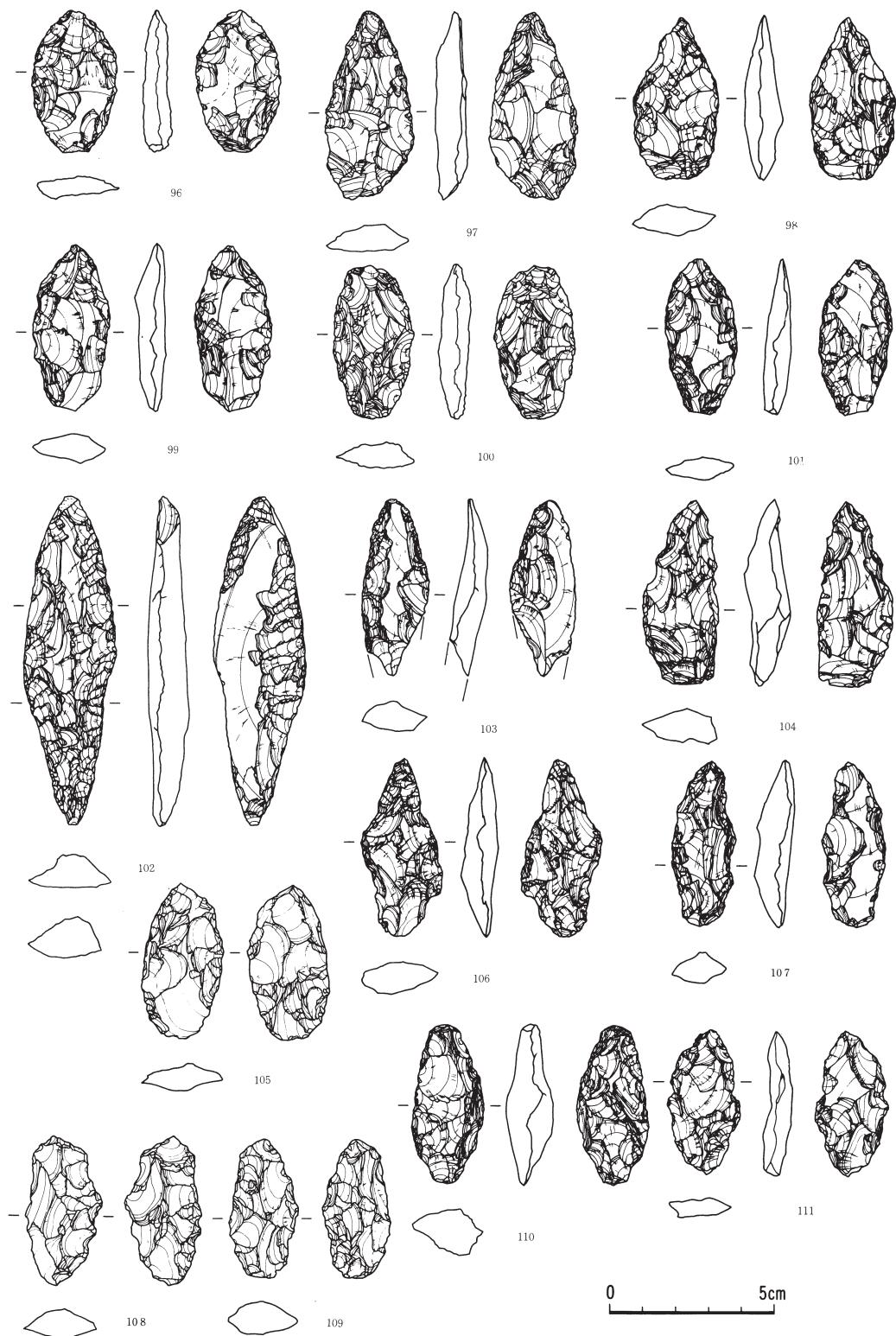
De 木葉形を呈し、有肩のものである。

完形品は に属する1点(102)で、横長剥片を素材としている。主要剥離面の調整は、打瘤部分と先端及び基部周縁であるが、背面基部に幾度か調整を加えた後、最後に近い段階で肩部および基部の作出を行っており、その断面形状は86・87の先端部と同様、ほぼ正三角形を呈する。また、打瘤部分の調整は、その部分の背面調整の後に行われたものである。なお、本石槍は有肩であるという認識に基づいたものであるが、基部側の調整のあり方は、87や86の先端部と同一である。したがって先端部と基部の位置関係が逆転する可能性もある。このほか、欠損品が2点(117・118)みられ、特に117の肩部の作出は明瞭である。

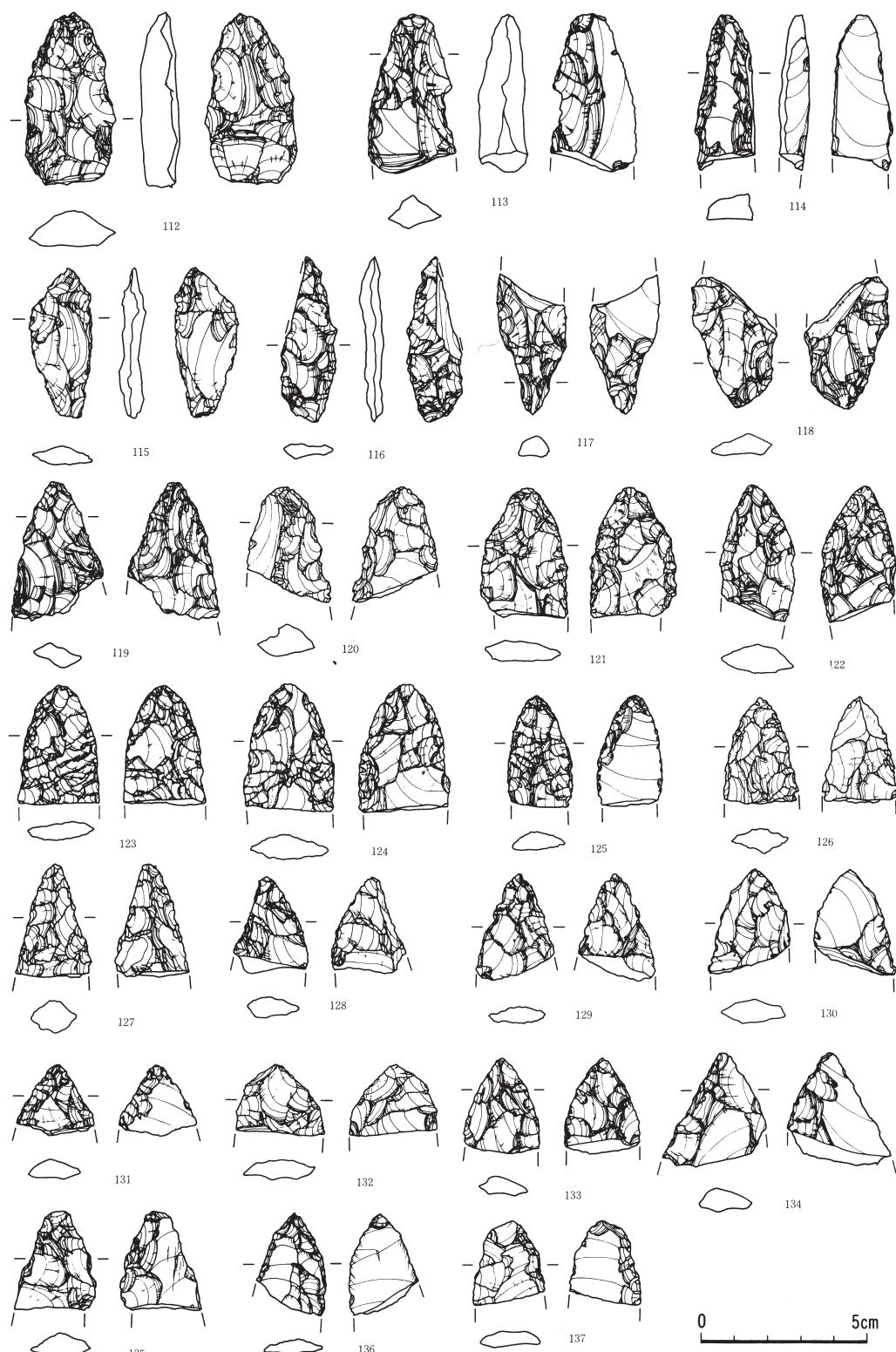
以上のように完形品ないし略完形品を主とした分類をしたが、それは全体の33%でしかない。その中ではD(木葉形)が圧倒的で、特に が多数を占めている。これら に器体調整は全般に粗雑であり、大きさにおいては石錐と大差なく、工藤竹久氏の分類(工藤1977)のC類にほぼ相当するものである。しかしながら、欠損品の中には、先端部・基部にかかわらずかなり丁寧な調整を加えたものや器体を薄く仕上げたものが多く、この点D に類似する



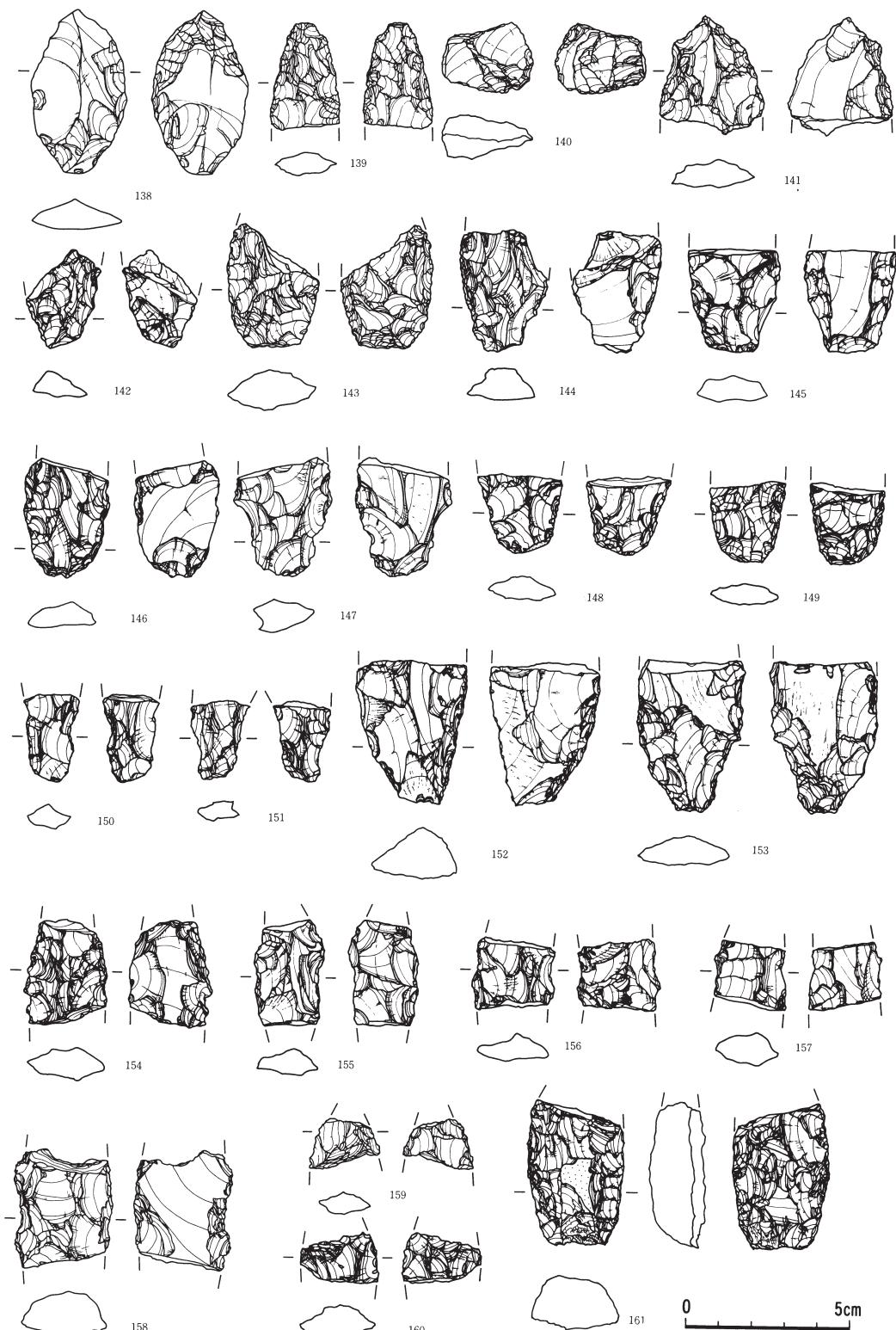
第96図 石器実測図（石槍1）



第97図 石器実測図（石槍2）



第98図 石器実測図（石槍3）



第99図 石器実測図（石槍4）

ものといえる。また、80・90は、完形であるならば、その長幅比は4.0を超える。つまりDと推定され、更には、この2点と幅や断面形状が類似する中間部残存品（154～160）もある。したがって完形品の観察では、ややは、30点中4点しかないが、本来的には、及びの数量は・とほぼ同数に近いと推察される。

（三宅徹也・中嶋久彰）

3. 石匙（第100図162～第105図246）

164点出土した。これには、形状とつまみの位置関係による縦型石匙と横型石匙がある。縦型石匙は148点で90%、横型石匙は16点で10%を占める。

A. 縦型石匙

縦型石匙の完形ないし略完形品は約50%である。また、平均的な大きさは、長さ5.7cm、幅2cm、厚さ0.8cm、重さ9.4gである。

側縁の形状により、4類に細分した。

類（162～165・168～174・177～179・224・225）

- 側縁が内湾し、他の側縁が弧状に膨らむもの。

171の1例を除き、すべて右側縁が内湾する。つまみは膨らむ方の側縁、つまり左側に反りぎみにつけられるが、177～179は逆である。器体の稜線は右側に片寄り、不等辺三角形の断面形状を呈するものが多い。それは、背面全体でのほぼ最終段階において、右側縁に65°～75°と急峻な調整を施したことによる。先端部は細く鋭く尖るものが多い。173・177・225等、他に比べて幅広いものもあるが、177を除き、右側縁は他と同様特に急峻な調整を施している。

177は、先端部が丸みをもち、幅広・扁平であり、また右側縁に急峻な剥離は特に施していないためこれを類bとし、他を類aとして区別する。

類（166・180～190・192～194・196・198・200・203・204）

- 側縁が直線的で、他の側縁が弧状に膨らむもの。

166を除き、すべて右側縁が直線をなしている。つまみは類と同様左側に反りぎみにつけられているが、中央につけられているものもある（173・177・225）。断面形状等は類と大差ないものが多い。

182・193は、調整等が類bと同様であるため、類bとする。

類（167・175・195・205～207・227）

両側縁が直線的であるもの

つまみはほぼ中央につけられるが、167は左側に片寄る。先端部形状には尖るもの（175）、平坦なもの（227）、丸いもの（205）がある。断面形状等はほぼ・類aと同様である。

類（199・202・209～223・226・230・231）

両側縁が弧状に膨らむもの。

これには、先端が尖るもの（210～212他）と平坦ないし丸みをもつものとがある。前者は上記各類のaにほぼ共通する特徴であるが、特に急峻な調整をもたず、全般的に幅広、扁平である。したがって、やや異なるが一応類aとする。先端部に籠状石器と同様に60°～70°位の急峻な調整を加えたものがあり（217～219・222）、これを類cとする。これらには側縁部の刃コボレとともに、磨滅し光沢を生じた使用痕が先端部に観察される。この類cは他に比べて肉厚である。類bは、上記以外のもの（201・214・215・222・230他）とした。全般的に幅広・扁平で、周縁に若干の調整を加えたものが多い。類におけるつまみはほぼ中央につけられるが、若干左側に反りぎみなものもある。

素材となる剥片には、縦長剥片と横長剥片がみられ、完形ないし略完形品60点中、縦長剥片が45点で75%、横長剥片15点で25%である。縦長剥片を素材としたものの中で、つまみを剥片の末端側に作出了したものが6点みられる。

弧状に膨れた側縁、つまり左側縁の主要剥離面に調整を加えたものがある。これには、背面調整の際の打面としたものと、背面調整後に行ったものとがみられる。前者を、一応背面調整用打面と称しておくが、これをもつものは10点（177・182・183・193・197・213・216・220・224・227）あり、やや扁平であるがaとした197を除き、すべて各類のbに分類されたものである。この中で、193は先端部にのみ認められ、177・182・216・224では左側縁から先端部にかけて認められる。この調整用打面をもつものの背面は、幅広であるにもかかわらず第1次剥離面を残すものはない。なお、219における主要剥離面の調整は、背面調整用のものとは断定できないが、170や180等の例から、主要剥離面そのものの調整も兼ねて用意された可能性もある。後者に属するものはかなり多い。代表的なものとしては、166・173・181・219などがある。ただし、166は直線をなす側縁に施されている。これらには、主要剥離面における打瘤部分の調整もあるが、一種の刃潰しと考えられる。それは、・類における刃コボレ等の使用痕を観察すると、主として、内湾ないし直線をなす側縁を生じており、反対側に生じた例は少ない（169の主たる使用側縁は左側縁であるが）ことから、刃部は主として右側縁、背は左側縁と考えられるためである。恐らく、調整用打面も刃潰しを兼ねたものであろう。

B . 横型石匙

縦型石匙と同様、刃部形状等に若干の差をみることができるが、資料数も少ないとめ一括して述べる。

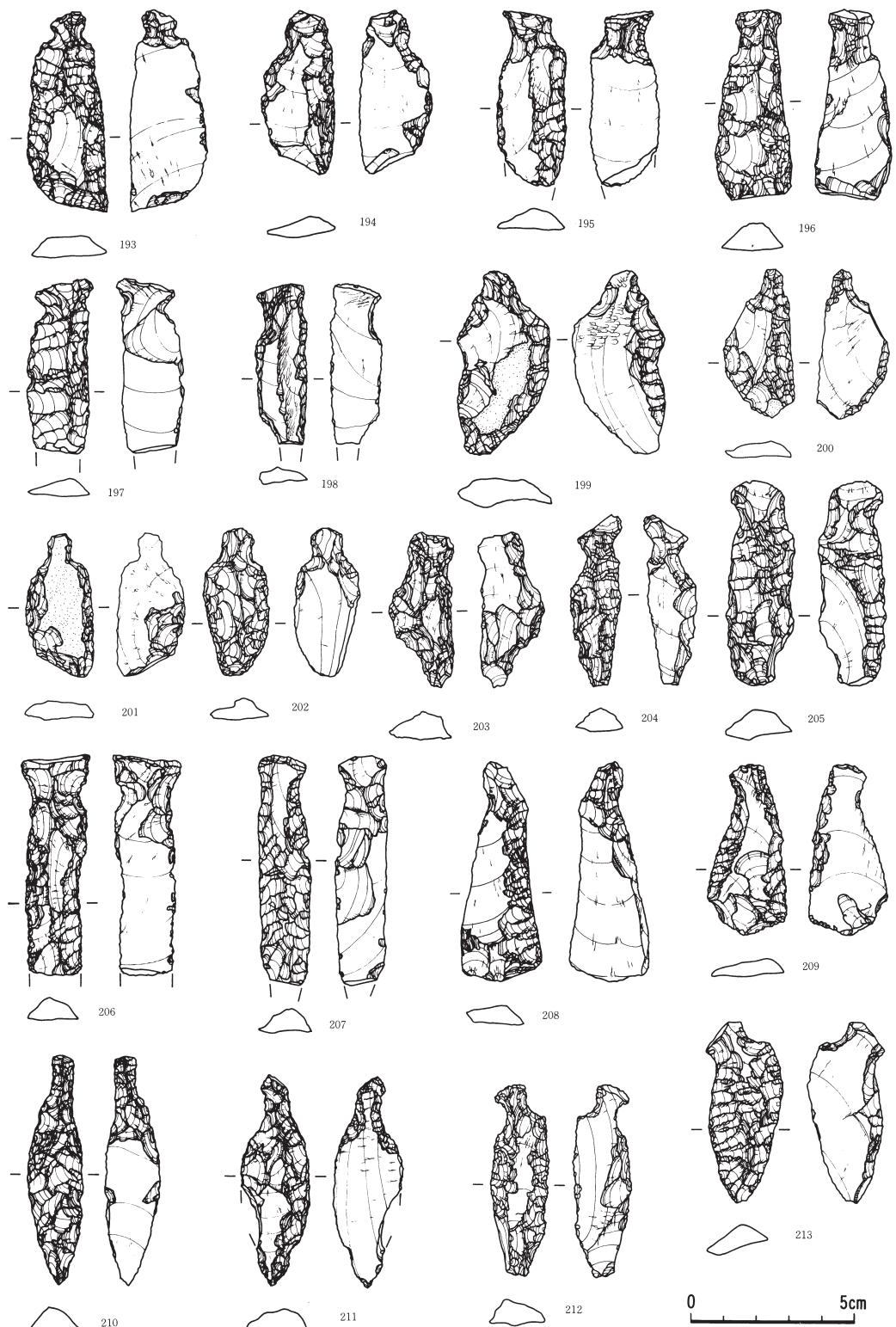
刃部形状には、若干内湾するもの（238）、直線的なもの（232・235他）、弧状に張り出すもの（233・234他）がある。つまみの位置には、ほぼ中央につけられ、全体的に正三角形ないし二等辺三角形を呈するもの（232他）と、左右のいずれか一方に片寄ってつけられ不等辺三角形を呈するものとがある（238他）。縦長剥片ないしはそれに類する剥片を用いたものには、234・238・240



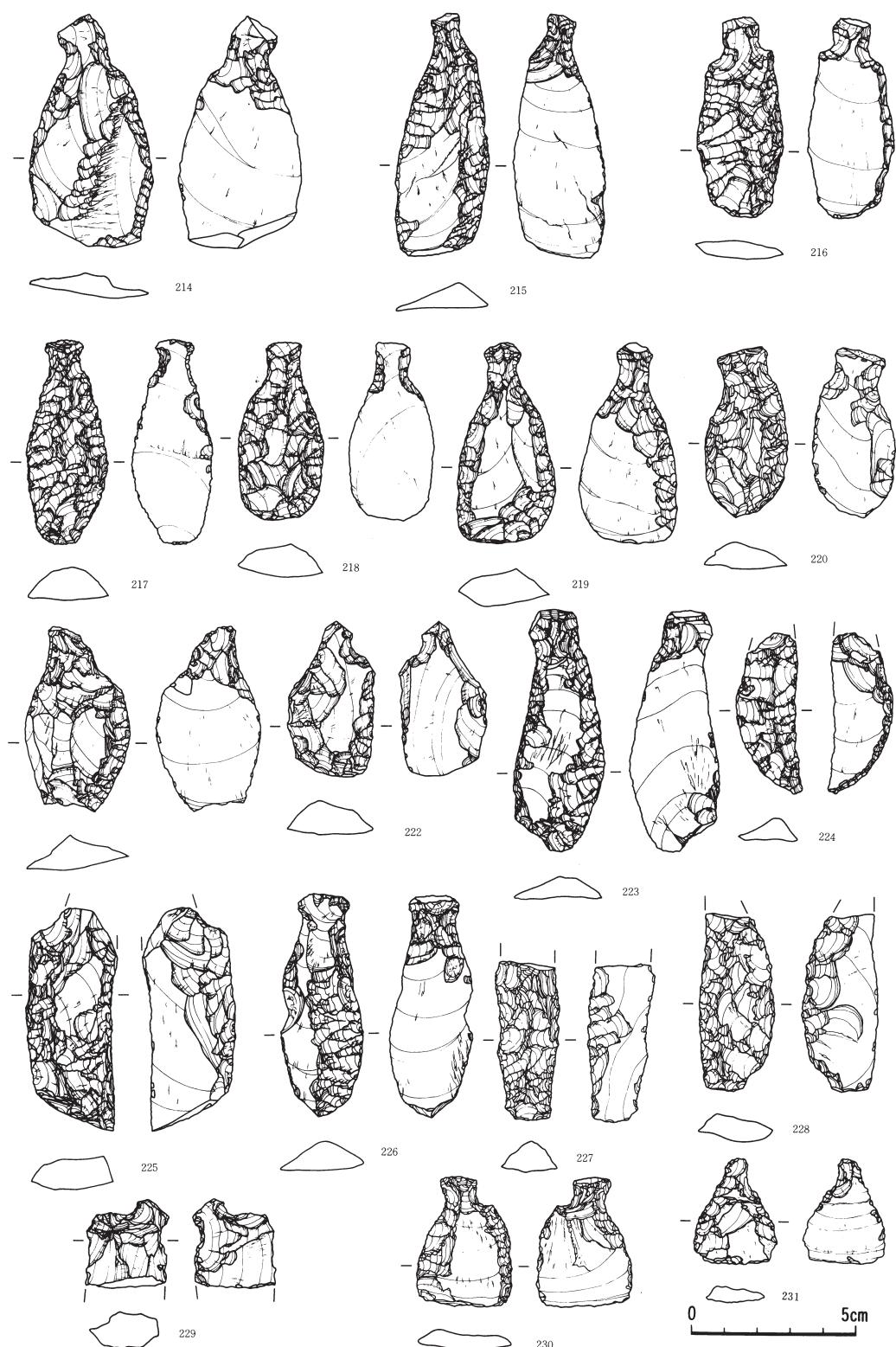
第100図 石器実測図（石匙1）



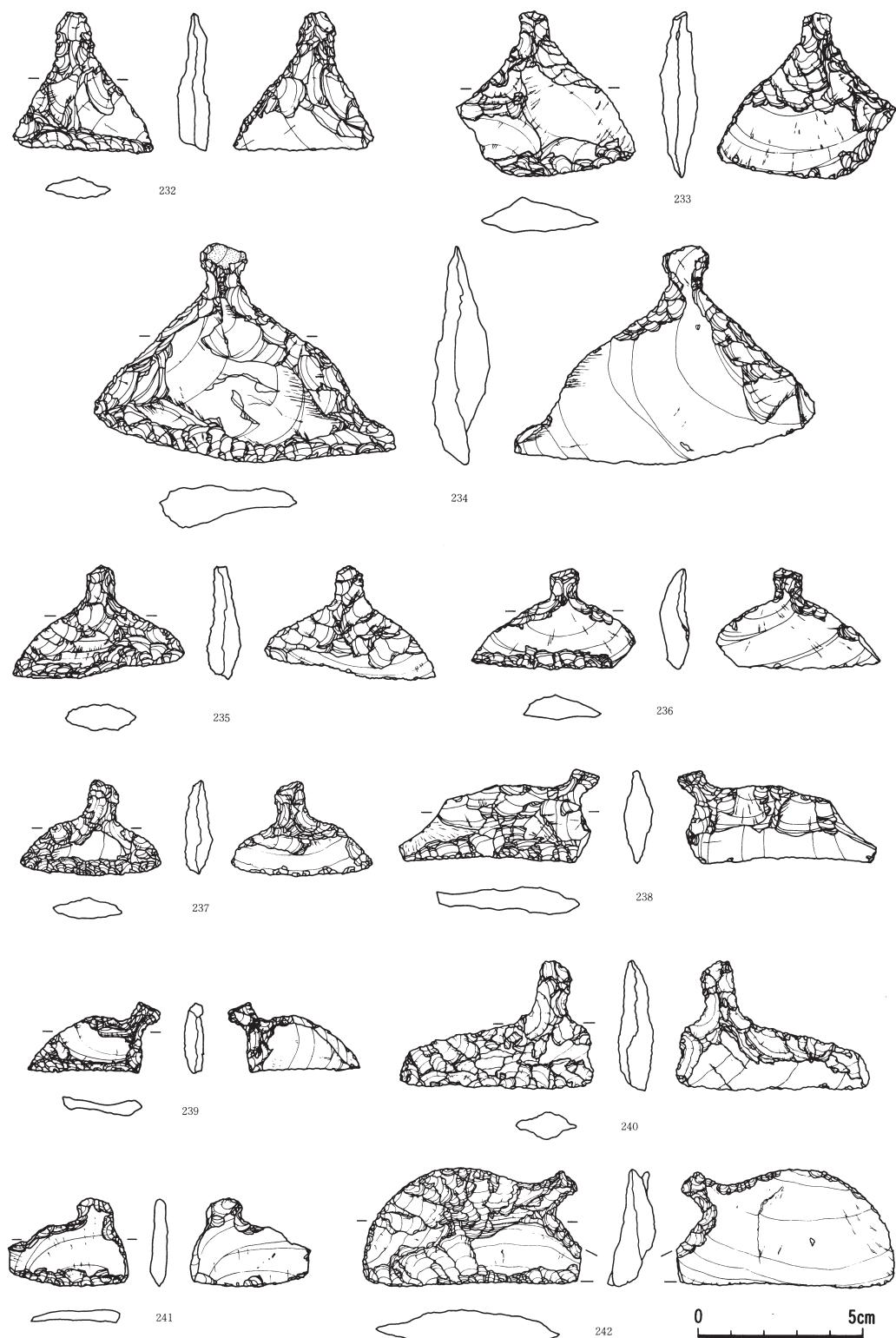
第101図 石器実測図（石匙 2）



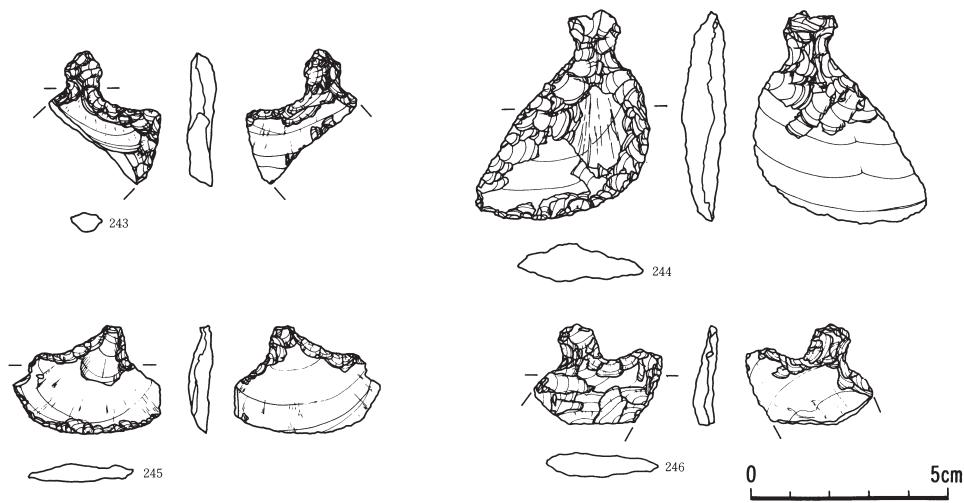
第102図 石器実測図（石匙3）



第103 図 石器実測図（石匙 4）



第104図 石器実測図（石匙5）



第105図 石器実測図（石匙 6）

他がある。多くは背面に刃部作出を行うが、236・241・245では主要剥離面になされてい。刃部角には239・241が 45° と鋭角であり、240が 70° と最も鈍角である。主要剥離面の調整は、刃部裏面には行わず、つまみを中心とした背に相当する部分に行っている。（中嶋久彰）

4. 篠状石器（第106図247～第109図280）

搔器的機能をもつものの中で、石篠・篠状石器と称されているもので、34点出土し、うち24点が完形品である。

分類

分類は、刃部形態で大別し、更に全体的形状で細別した。

類 刃部が丸みをもつもの（10点、274～256）

a 二等辺三角形を呈するもの（8点、247～254）

b ほぼ長方形を呈するもの（2点、255・256）

類 刃部が直線的なもの（14点、257～270）

a 二等辺三角形を呈するもの（8点、257～264）

b ほぼ長方形を呈するもの（3点、265～267）

c 長さと幅がほぼ等しく、台形を呈するもの（3点、268～267）

資料数が少ないため不十分ではあるが、刃部形態では直線状をなすものが多く、全体的な形状では、二等辺三角形を呈するものが完形品24点中16点と約70%を占め、ほぼ、この形態が篠状石器の基本的なものといえよう。

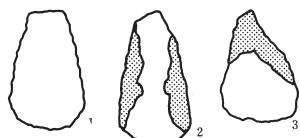
用いる素材には、縦長剥片と横長剥片がほぼ同数ある。類bに横長剥片を利用したものはないが、他の各類とも両方を素材としており、形態により素材を選択するような傾向はない。

末端が強いヒンジフレクチャーをなす剥片を用いたものも3点ある(265・270・275)。

素材の一次剥離面は、器体の調整によって、ほとんど残存しないが、主要剥離面の調整には幾つかの種類がある。

1. ほとんど無調整なもの

(1点 247)

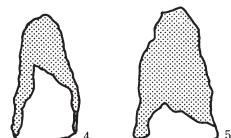


2. 一側縁ないし両側縁に調整を施したもの

(9点 248・249・256・257・260・263・265・266・267)

3. 基部周辺にのみ調整を施したもの

(2点 251・264)

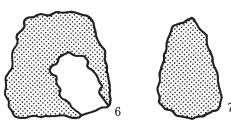


4. 両側縁と基部に調整を施したもの

(5点 250・252・254・258・259)

5. 刃部付近まで調整を施したもの

(3点 261・262・267)



6. 刃部の極く一部を除き調整を施したもの

(2点 288・269)

主要剥離面の調整度合

7. 全面に調整を施したもの

(2点 268・269)

以上のように、主要剥離面の全面に調整を施すものは非常に少なく、調整は、側縁及び基部を主体として行い、刃部は、主要剥離面の滑らかな面をそのまま残すものが多い。また、打面や打瘤の高まりを残すものではなく、ほとんどが除去されている。主要剥離面は平坦なものが多いため、全体的には反り身になるものもある。更には急峻な角度をもつ調整も多い。したがって、これらの調整が主要剥離面を平坦にするために施されたものとは思えず、むしろ側縁の凹凸が少なく直線的であることから、ほぼ二等辺三角形を呈する器体を作るためのものと考えられる。

刃部の角度は、35°~85°までかなりばらつくが60°~70°の間に集中する。類の平均は70°、類の平均は65°であり、余り差はみられない。なお、平均は66.4°である。

刃部は、主に最大幅の部分から作出されている。この部分は最大厚ないしはそれに近い部分であるため、急峻な刃部が形成されることになる。

刃部の主要剥離面側には、刃コボレや光沢、線状痕など使用痕と考えられる痕跡をもつものが多い。

(佐藤 隆司)

5. トランシェ様石器(第109図281・282)

2点出土した。形態的には籠状石器に類するものである。

刃部は、第1次剥離面をそのまま利用し、281は、この刃部以外の背面のすべてを、主要剥離

面では両側縁及び基部側を調整している。282は、直線状にするためか、刃部である第1次剥離面を若干調整している。背面は、この刃部を除くすべてを、主要剥離面では両側縁を調整している。刃部はいずれも直線的である。

(中嶋久彰)

6. 彫器(第109図283~285)

両面加工品ないし削器の類の側縁に、樋状剥離を加えて彫刀面を作出したものが3点出土した。

283 縦長剥片を素材として石槍状の器体を製作し、剥片の末端に残された平坦面(剥片剥取の打面とは反対側の打面であろう)を打面とし、樋状剥離を加えて彫刀面を作出している。打面と彫刀面の角度は約70°である。彫刀面の主要剥離面に刃コボレが生じている。

284 分厚い両面加工品の急峻な刃部をもつ端削器面的なものを素材とし、この刃部を打面として側縁を断ち切る樋状剥離を加えている。打面部分は除去されている。また、刃コボレが生じている。

285 側縁の一部に平坦な節理面を残す縦長剥片を素材とし、石槍状の器体を製作している。素材の打面部側から左右に樋状剥離を加えて、斜めに交叉する彫刀面を作出しているが、その後打面は除去されている。彫刀面は、左側では側縁を絶ち切るが、右側では表面と節理面を切る。

286 樋状剥離を加えて彫刀面を作出したものではないが、上記3点と同様の機能をもつと考えられる。両側縁を調整した削器を、側縁から加撃して折断したものである。3か所のコーナー部分、特に左側の尖った上下部分とも摩耗が著しい。また、上下の折断面には刃コボレと思われる微細な剥離が数多くみられる。

(中嶋久彰)

7. 削片(第110図287・288)

2点出土し、いずれも欠損品である。

287 打面部を欠き、断面は三角形を呈する。樋状剥離面を除く2面は、数多くの剥離面からなっており、樋状剥離面はこれを切っている。したがって、両面加工された器体の側縁に、樋状剥離を加えたことによって生じた削片であることは明らかである。焼け弾けを生じている。

288 末端部を欠く。打瘤は残るが、打面は新たに欠いており、調整されたものか否かは不明である。断面は三角形を呈する。末端が若干ヒンジをなす剥片の、末端側面を打面として樋状剥離を加えたことによって生じた削片で、樋状剥離面は第1次剥離面及び剥片の主要剥離面を切っている。a面末端部の剥離は、削片剥取後のものである。

(中嶋久彰)

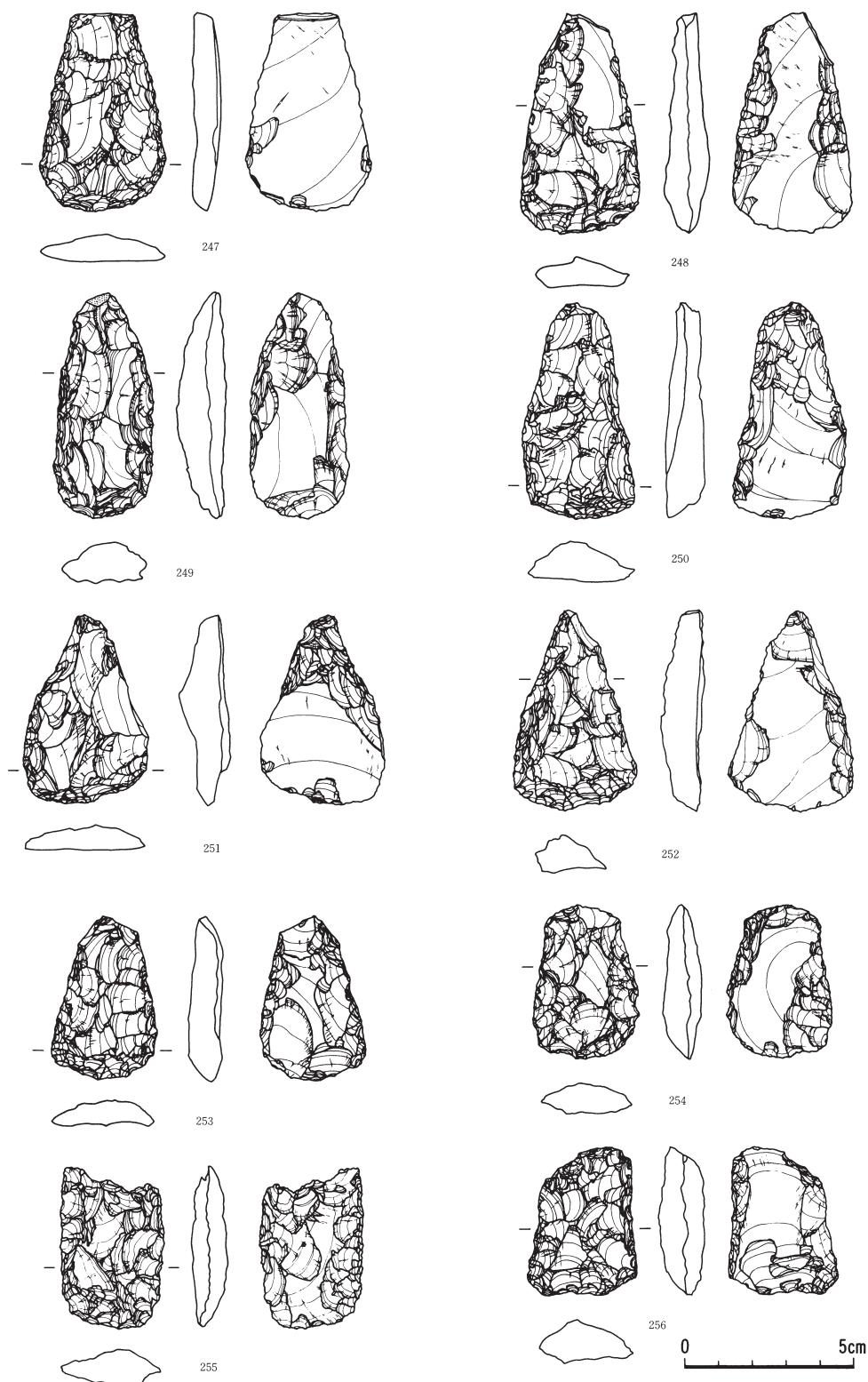
8. 石錐(第110図289~297)

9点出土した。

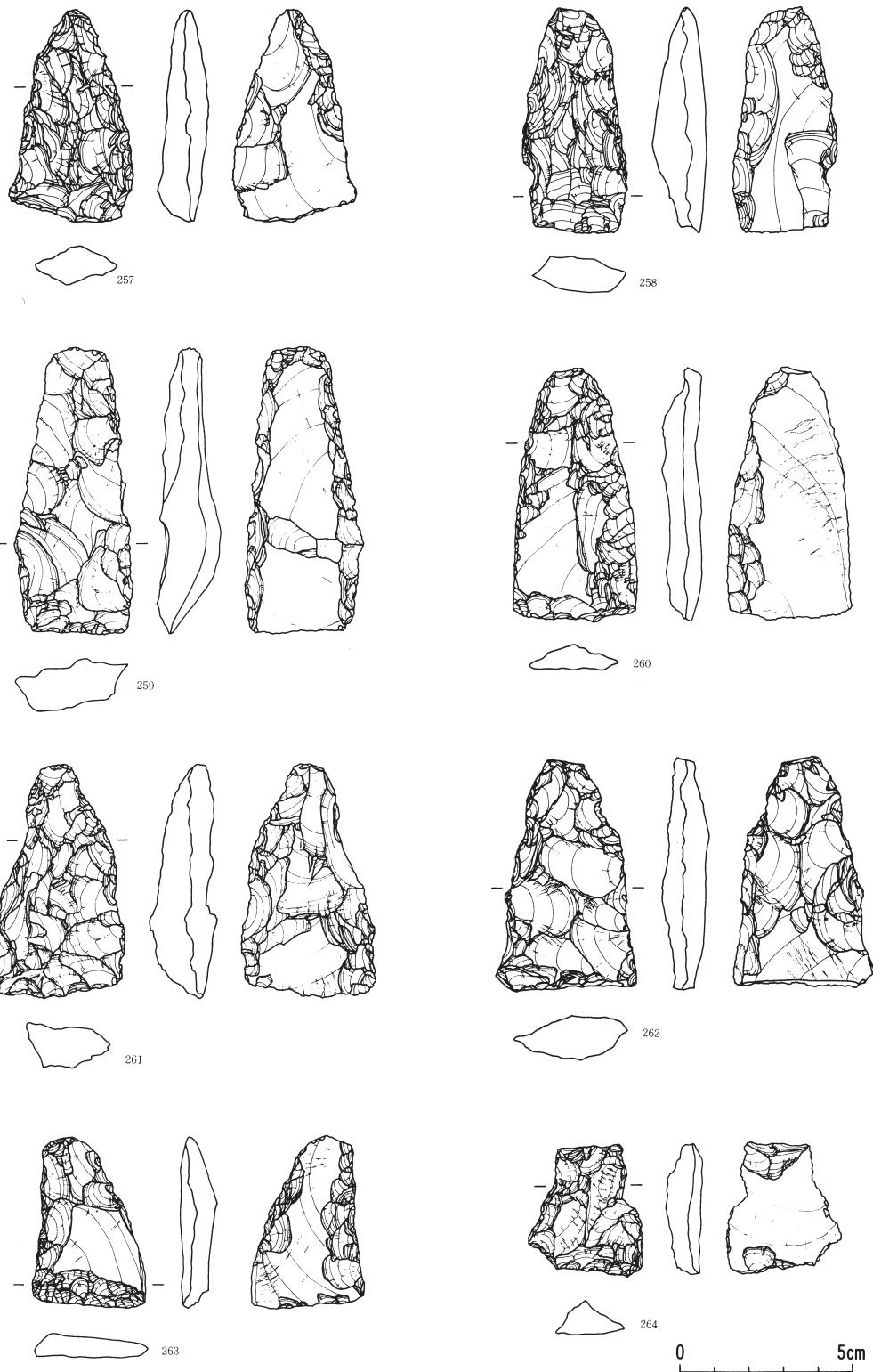
a(291・294)

石鎌状の器体をもつもので、断面が菱形の刃部を作出している。

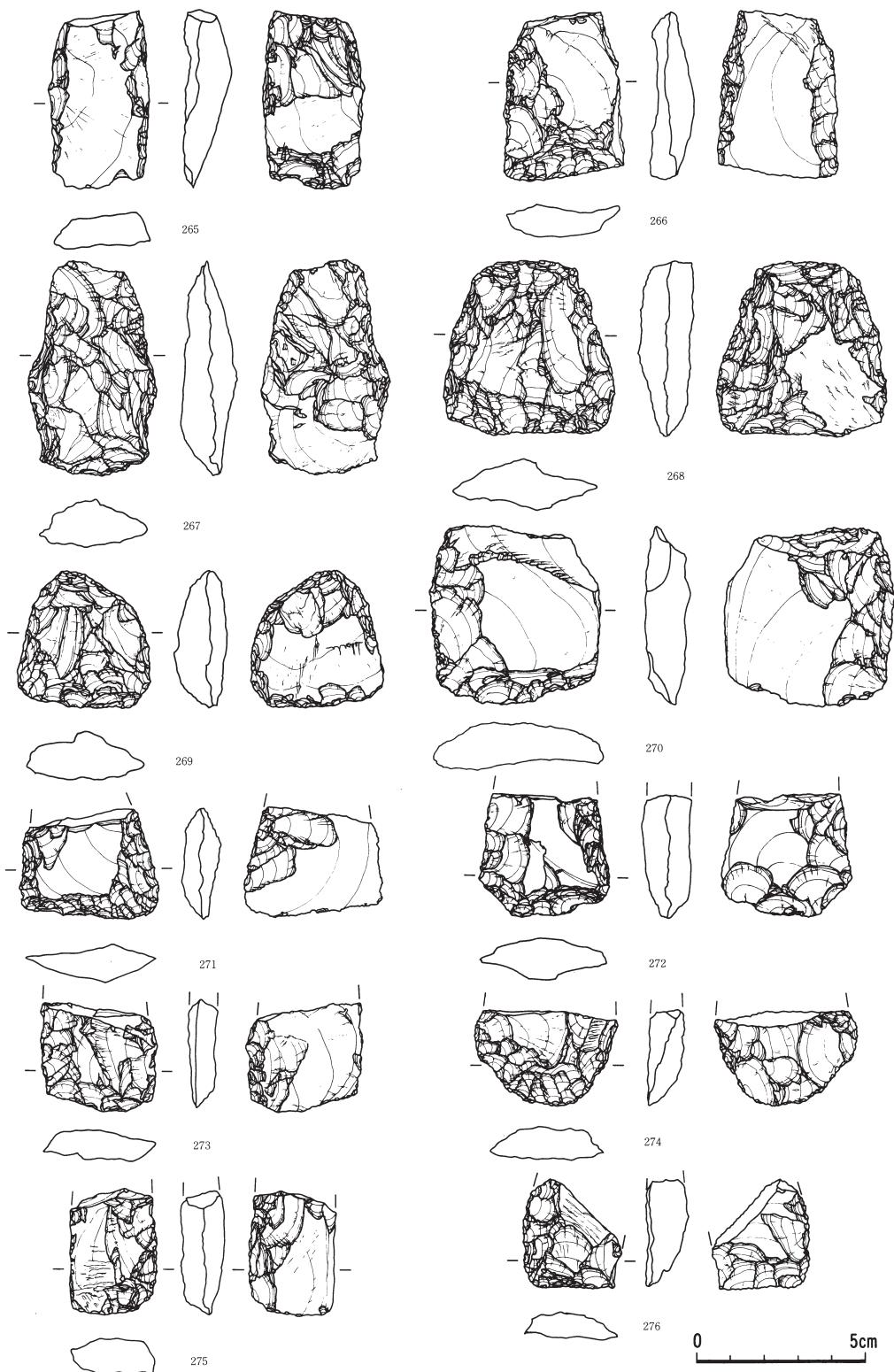
291は、特に丁寧な調整を加えて、細長い器体を製作している。



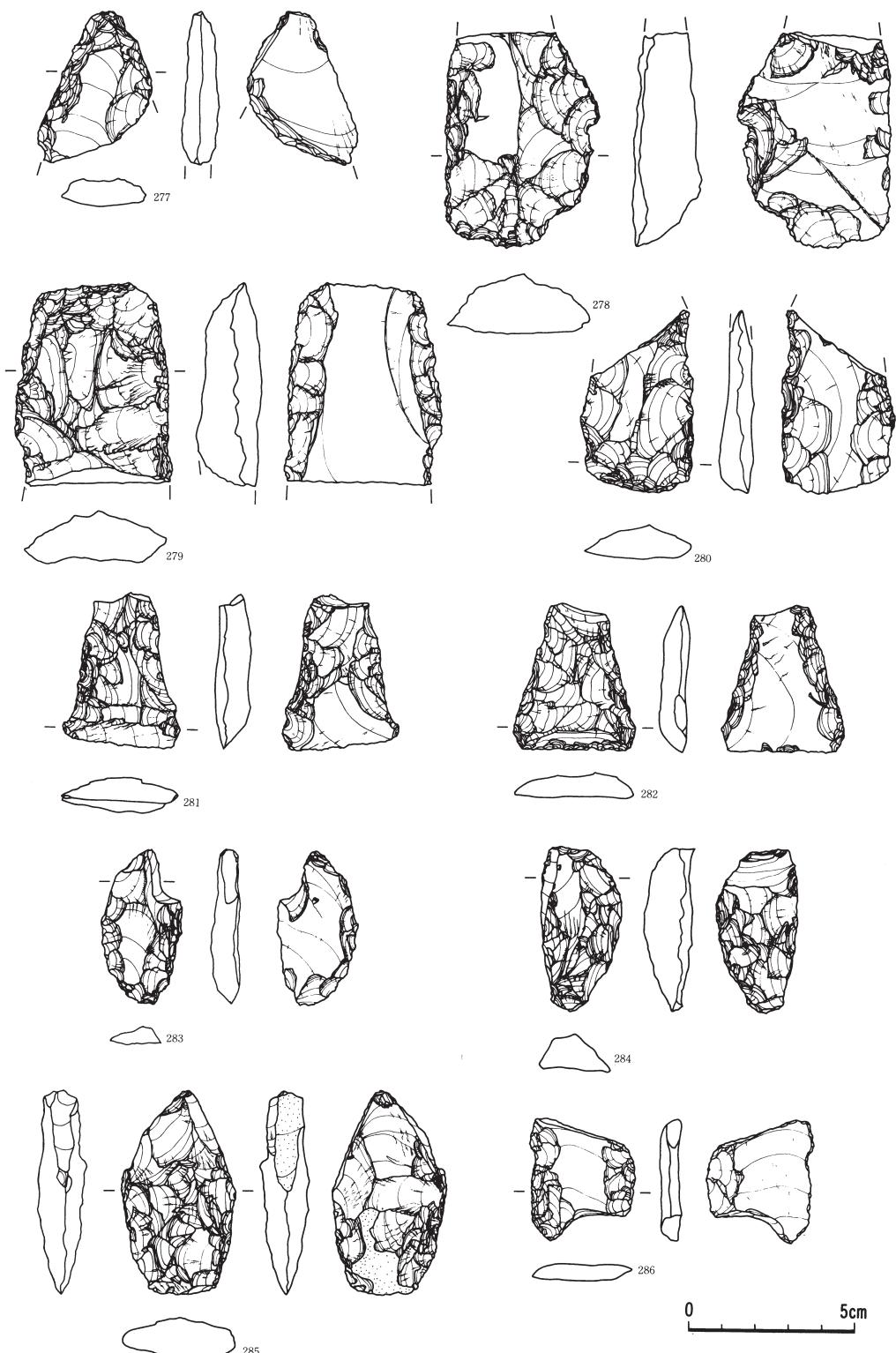
第106図 石器実測図（石籠1）



第107図 石器実測図（石籠2）



第108図 石器実測図（石範3）



第109図 石器実測図（石籠4・トランシェ様石器・彫器）

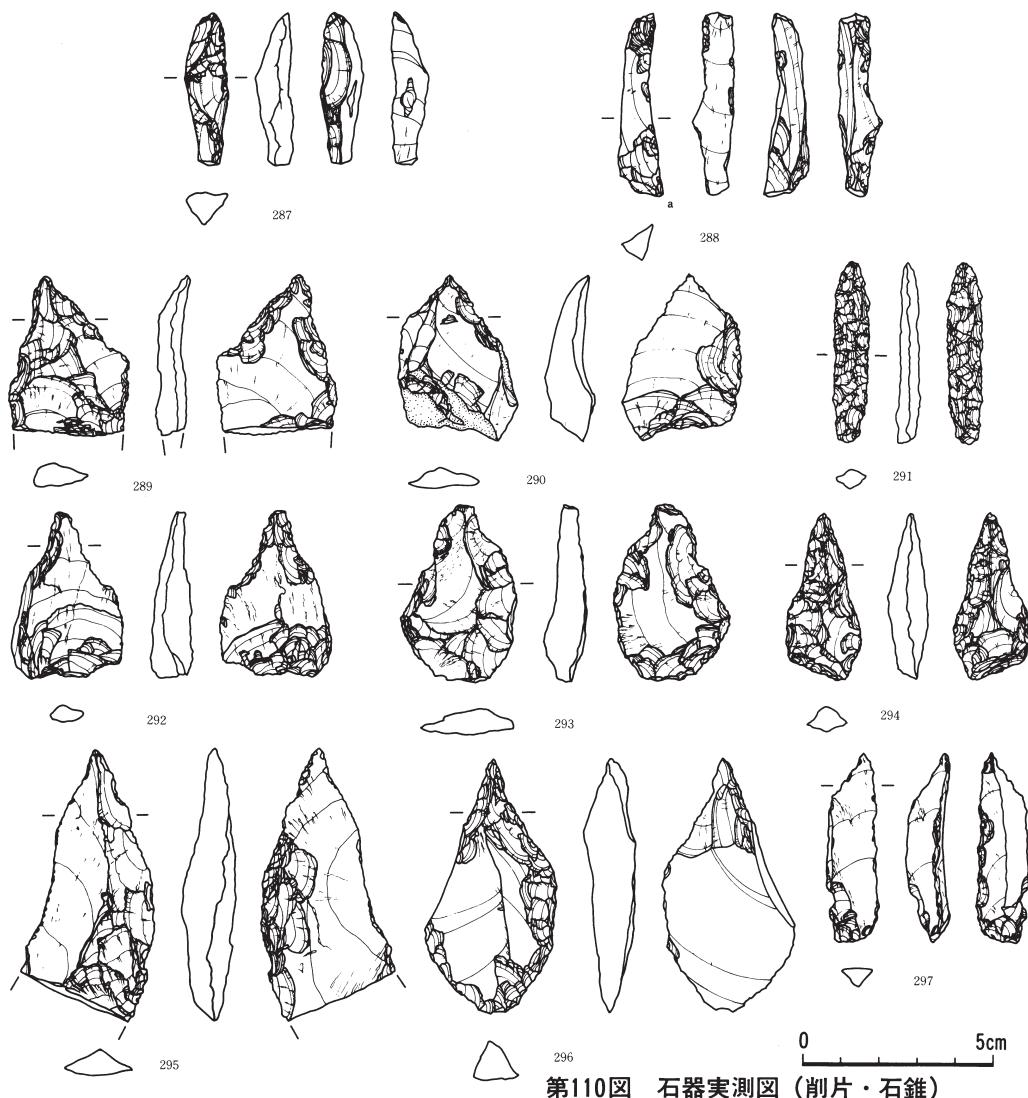
b (280・290・292・293・295・296)

縦長もしくは不定形剥片の一端に、断面が三角形ないし菱形の細長くとがる刃部を作出したものである。295・296は、刃部以外の周縁も調整している。289・295の刃部は摩耗している。292・293は刃部を欠く。

c (297)

節理面で破損した削器を再加工したものである。

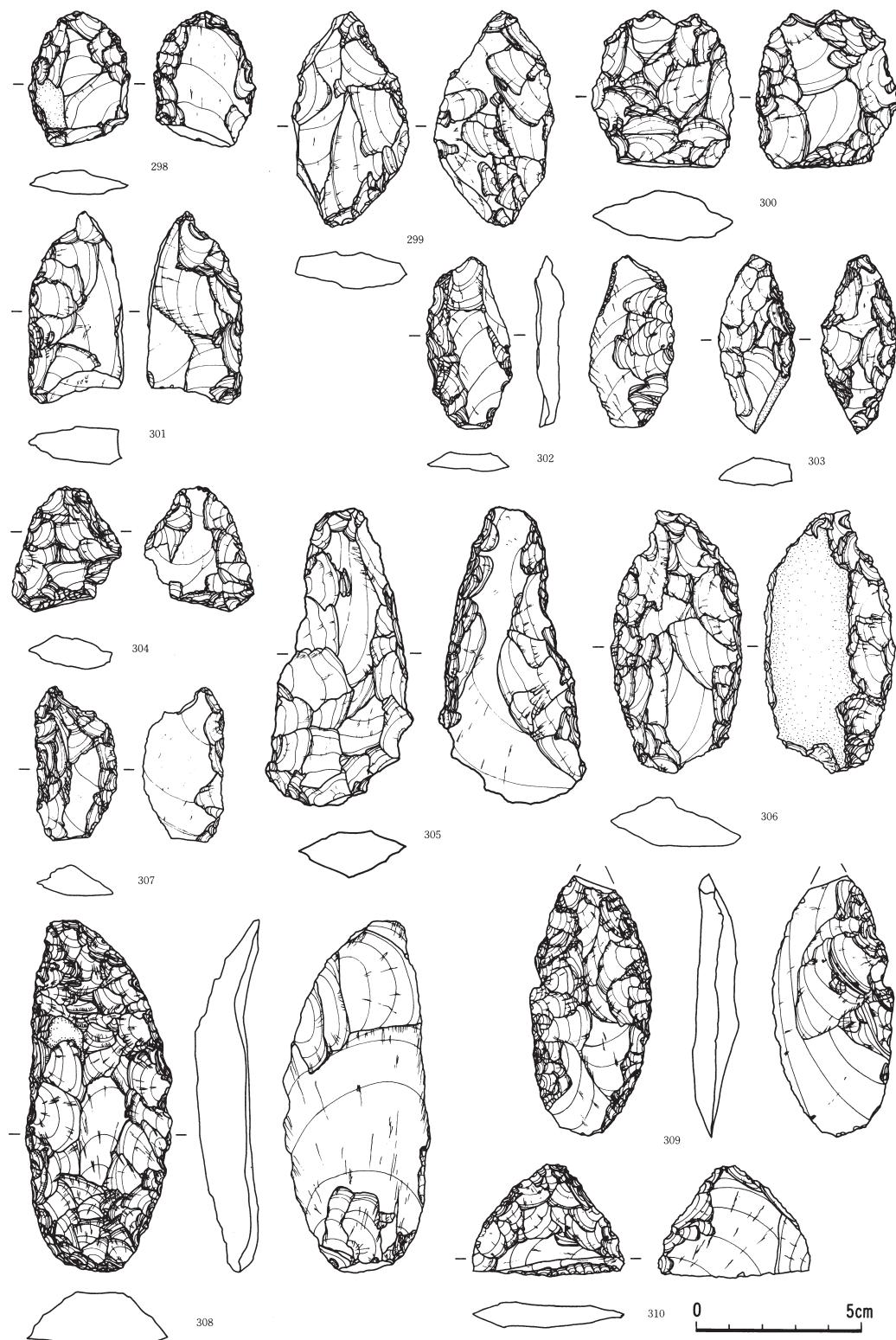
(中 嶋 久 彰)



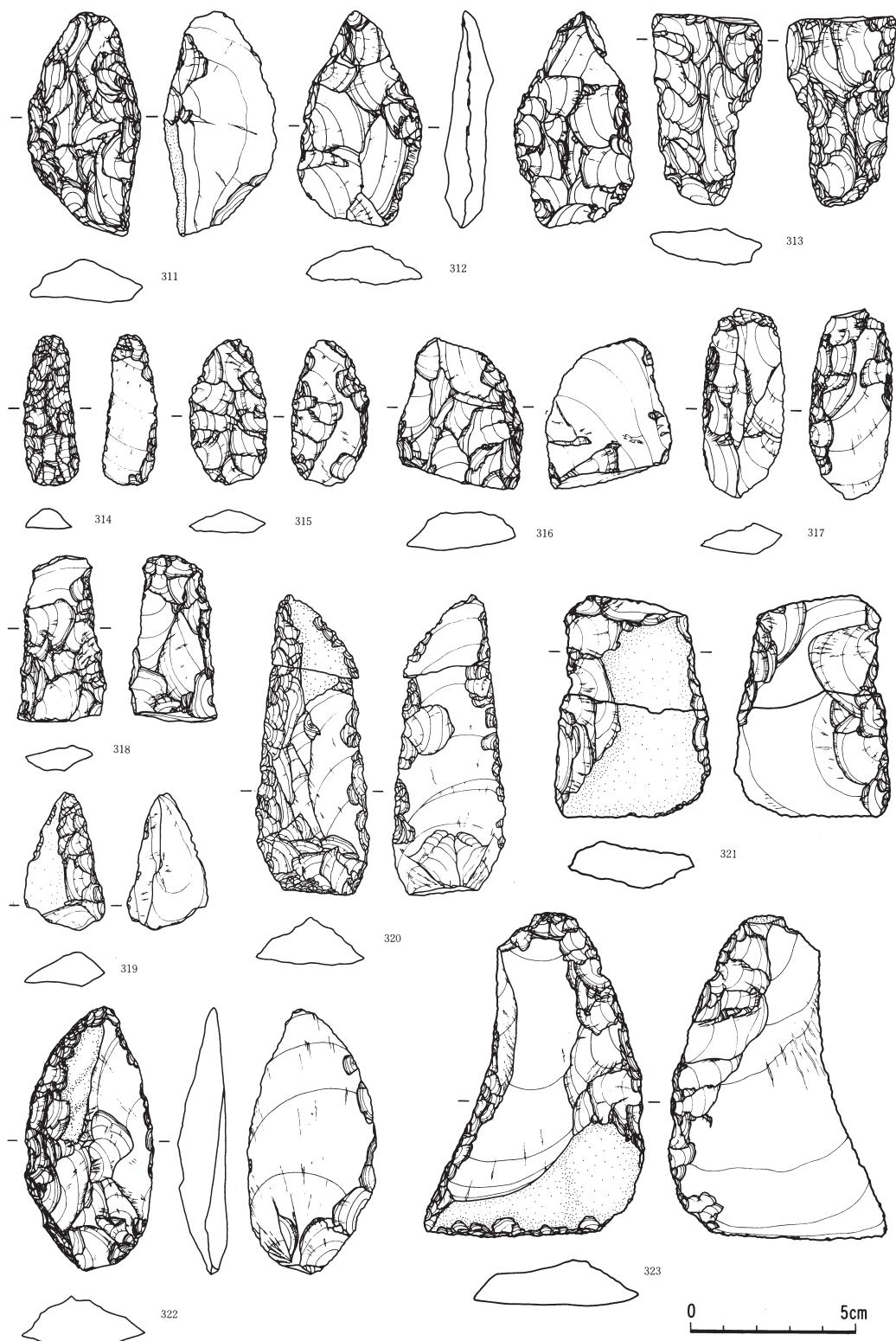
第110図 石器実測図 (削片・石錐)

9 . 不定形石器 (第111 ~ 114図)

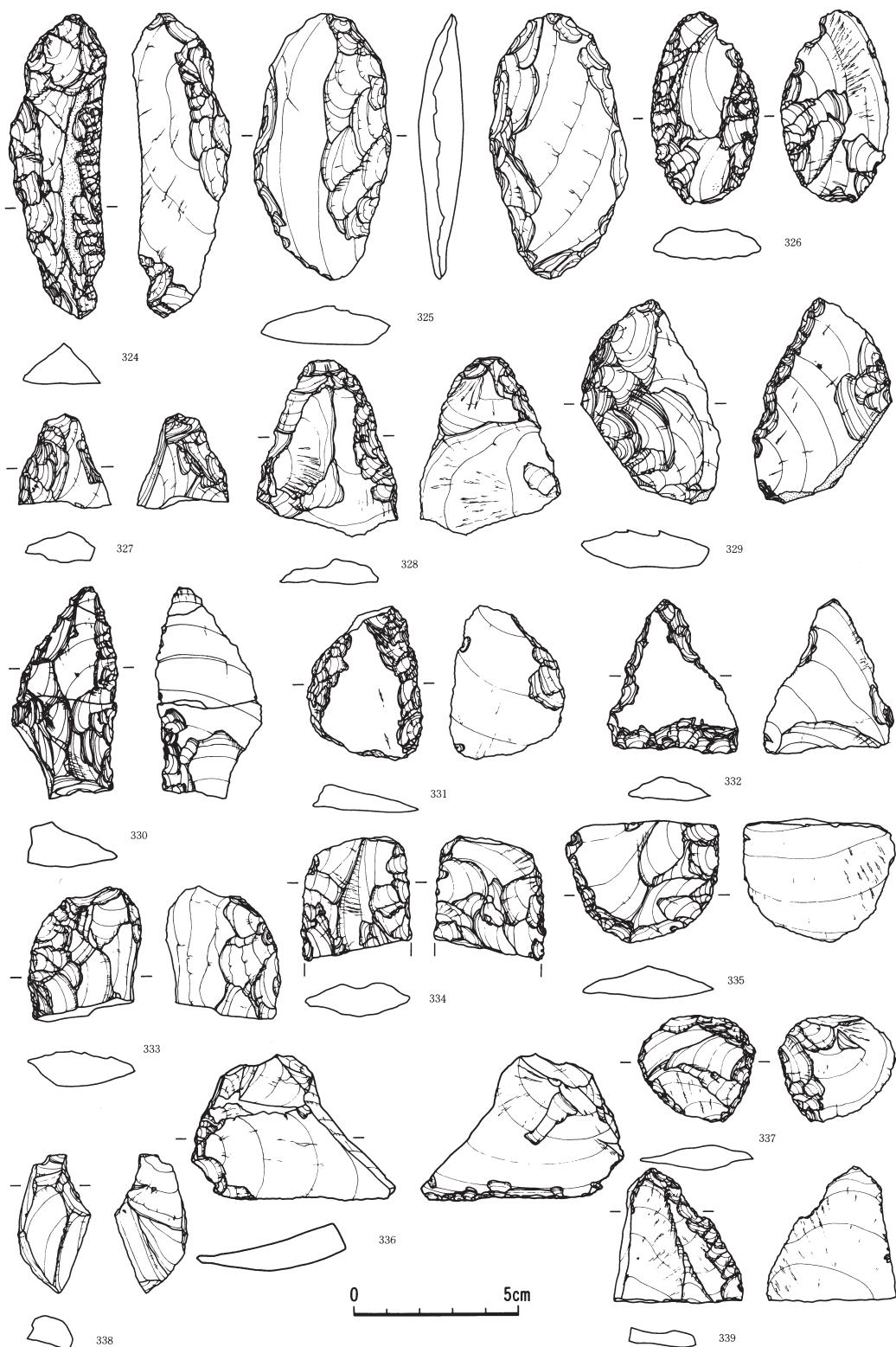
縦長剥片、横長剥片ないしは不定形な剥片を素材とし、これに調整剥離を加えたものであるが、特定の名称が付されていないものをすべて不定形石器とした。



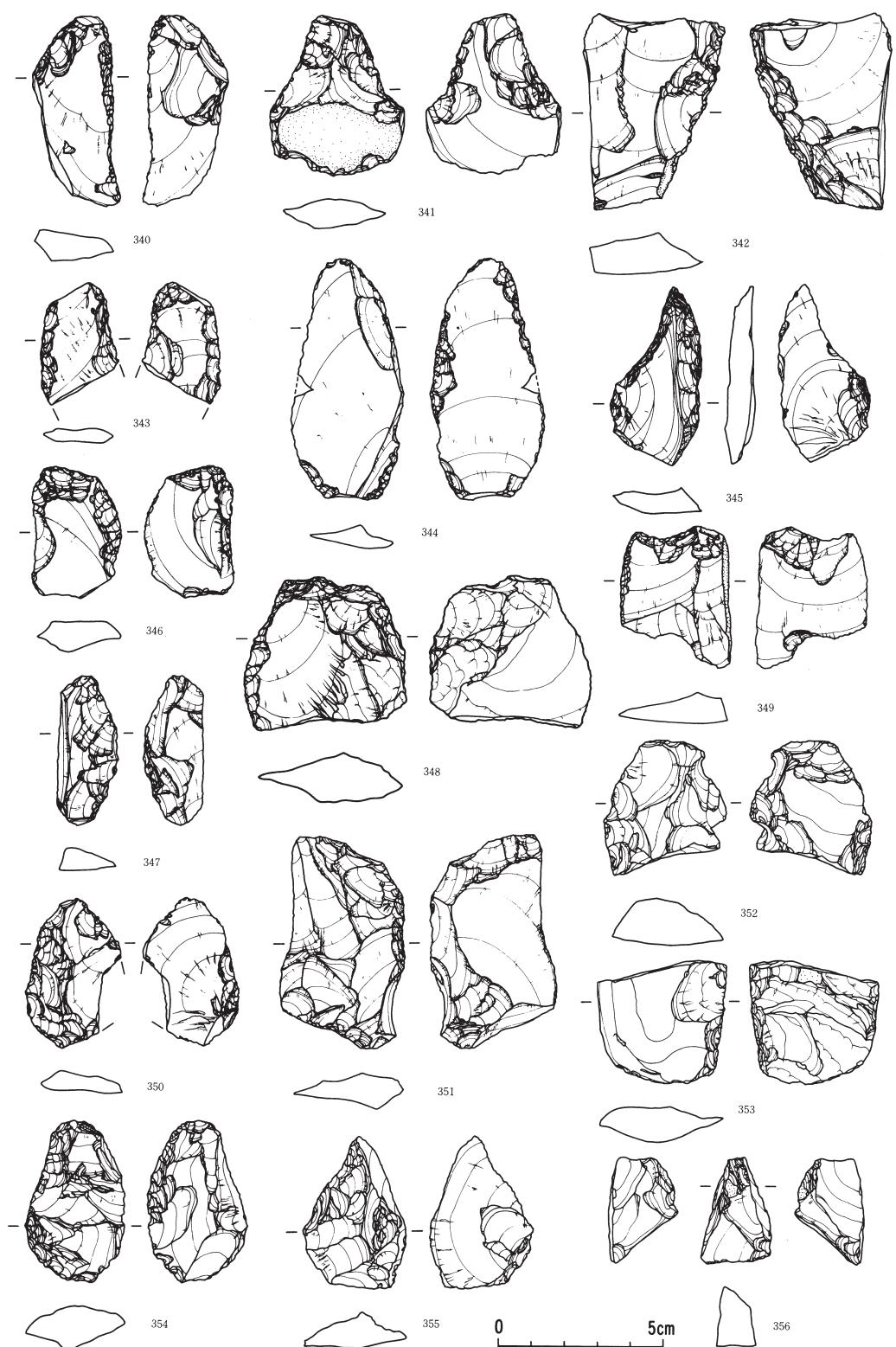
第111図 石器実測図（不定形石器 I 類 1）



第112 図 石器実測図 (不定形石器 I 類 2)



第113図 石器実測図（不定形石器II類1）



第114図 石器実測図（不定形石器II類2）

この不定形石器には、調整が両面に及ぶもの、又は背面のかなりの部分に及ぶものと、主として背面の両側縁又は極く一部に若干施されたものとがある。前者を 類 (第111・第112図) 後者を 類 (第113・第114図) とするがこれらについては特に説明を加えない。ただし、 類 中には定形石器に含めた方が良いと思われるのが何点があるため、以下例記しておく。なお 類は68点、 類は158点である。

石槍の可能性のあるもの 299・303・309・313

箇状石器の可能性があるもの 314・336

石錐の可能性があるもの 345

10. 石核及び剥片類

以上のほかに、石核や剥片類が422点出土した。

石核と思われるものは、5点とも剥片剥取後に壊されたものか、非常に小さなものである。したがって、剥片剥取の技法をほとんど看取し得ない。

R - フレイクは、129点で意識的に加えたと考えられる剥離面をもつが、特に刃部等を作出したとは思えないものを含めた。

U - フレイクは、156点で使用によって生じたと思われる刃こぼれをもつものである。

フレイクは、上記以外で、約2cm以上の大さをもつものとし、チップは以下のものとしたが、その基準に特に意味はない。フレイクは132点であるが、チップは数量を把握していない。

なお、R - フレイク、U - フレイク、フレイクは、上記基準で区別したが、実際には剥片剥離の際に生じることもあり、各々断定はできない。

上記剥片類は、全般的に小さなものが多く、良好な縦長剥片類はほとんどみられない。また、礫表皮をもつものは約70点である。

(中嶋久彰)

11. 石斧 (第115~120図 第27~29表)

97点出土した。遺構外出土は、完形品30点、欠損品53点で、遺構内出土は、完形品6点、欠損品8点である。接合により完形品となったものは欠損品として取扱い、遺構内外出土の破片が接合したものは遺構内出土とした。また、遺構内のものも分類中に含め、遺構の項で説明できなかったものについて補足する。

磨製石斧・打製石斧に大別し、更に形態、製作技法、最終加工段階等により細分した。

擦切磨製石斧を a類、局部磨製石斧を b類、磨製石斧を c類とし、刃部が両面加工の打製石斧を a類、その他の打製石斧を b類とした。

文中()は欠損品・〔〕は遺構内出土のものである。番号は整理番号である。表参照

< a類 擦切磨製石斧 >

2点出土した。完形品1点、欠損品1点である。

2 刃部に対して全体が斜めに傾いた特異な器形である。右側縁に表裏両面からの擦り切りの痕がみられる。擦り切り後、全体的に研磨されているが、表裏両面ともに、何プロックかのスリ方向の異なる面で構成されている。刃部の断面形状は片刃である。

22 脳部破片であるが、下端は刃部に近い部分である。右側縁に表裏両面からの擦り切り痕がみられる。折り取った痕跡としての稜は、完全に研磨されずに残存している。左側縁は、中央部に若干の稜を残すが、ほぼ平坦に研磨されている。両側面の形状から、両刃であったと推定される。表面中央に、縦方向の擦り切り痕がみられるが、これは、この石斧の製作における加工痕ではなく、作出前か欠損後における加工の痕跡と推定される。

< b 類 局部磨製石斧 >

1 点出土した。

3 磨製石斧 c タイプの欠損品の基部を再利用したものである。

刃部は研磨によって作出されている。

< c 類 磨製石斧 >

45点出土した。完形品17点、欠損品28点で、うち遺構外出土は完形品12点、欠損品21点である。また、遺構内出土の破片と接合したものもある。〔85〕〔86〕

全面研磨

乳棒状のもの 4 (20)(27)(両刃)

両側縁に研磨による平坦面を構成するもの

他の加工痕を完全に磨消しているもの 10 (両刃) 17 (両刃) (23) 基部

両側縁及び表裏面に剥離痕を残すもの 8 (両刃)

両側縁に研磨による稜を持つが、平坦面を構成するには至らなかったもの

5 (両刃) [85] 88 (片刃)

5は、頭部もやや平坦に加工している。88は、脳部中央から基部にかけて敲打痕を磨消しきっていない。

刃部及び刃部側縁に稜を持ち、器面に剥離痕を残すもの 6 (両刃) [89]

非常に多くの剥離痕を残し、剥離痕跡をほとんど磨消していない。研磨による面が数面認められるもの 9 30 (共に刃部欠失) 非常に雑な作りである。

側縁に研磨の痕跡が認められるが、剥離及び敲打の痕跡がほとんど磨消されていないもの

13 (片刃) 18 (両刃)

13は、表面の凸部分が研磨されるが、面の中での低い部分は自然面を残している。

両面を研磨

片面に自然面を残し、他の面及び側面を剥離及び敲打の後、研磨するもの。自然面部分にも

研磨の痕跡が認められるが、剥離及び敲打痕を磨消しきっていない。

11、12、16（両刃）片刃に近い。

ともに小型で薄手である。12は、側縁の一部に研磨痕が認められる。

両面を研磨するが、両側縁は剥離の痕跡をそのまま残すもの14（片刃）〔84〕（両刃）

14は、台形を呈しており、幅に対して器長は短い。欠損後、頭部を敲打、研磨により整形し、再使用したものと思われる。

刃部だけを研磨

自然面を部分的に残すが、全面を剥離及び敲打により整形し、刃部を研磨によって作出するもの 7（21）（両刃）〔81〕

その他

片面に自然面を残し、他の面及び側縁は剥離及び敲打による。刃部と側縁に研磨が認められるが、自然面を残さない面は粗割時の剥離痕がそのまま残る。19（両刃）

一側縁と片面の一部を剥離・敲打により整形し、刃部と側縁の一部に研磨が認められる。

他の側縁及び片面は、自然面をほぼそのままに残す。29（両刃）

側縁及び器面を剥離及び敲打により整形し、刃部を研磨する。

一側縁及び器面には自然面が多く残る。31（両刃）

刃部及び側縁が研磨されており、他は自然面である。器面の一部にも研磨痕が認められる。

17（両刃）22（片刃）

局部磨製石斧に含められるが、側縁と表面の一部に研磨痕があることからこの類とした。

頁岩の破片から作出されたものであり、全体に石箆の製作法に似ている。刃部に0.4～0.7mm幅で研磨が施されていることから石斧の類とした。研磨痕は刃部にしか認められない。15

類 打製石斧

34点出土した。完形品13点、欠損品21点であり、うち遺構外出土は完形品12点、欠損品21点である。

< a 類 >

刃部が両面加工のもの 44（56）（両刃）

44 全体は、敲磨器 類に属する。刃部は大きく破損しているが、側縁部に両面からの加工痕跡が認められる。一側縁はスリ面を構成し、他の側縁は片面からの剥離が裏面中央まで及んでいる。

刃部作出の剥離が、スリ石の刃部作出の剥離より風化が進んでいることから、斧を転用してスリ石としたものと思われる。

< b 類 >

刃部が片面加工のもの

刃部だけを加工するもの（局部打製）35 36

刃部以外にも加工痕跡を有するが、器体を完全に整形するに至っていないもの 40

一側縁から表面中央まで剥離されている。

片面に自然面を残すもの 46 47 50 51 53 63 65 [78]

側縁部を両面から加工するもの 46 63

側縁部を片方から加工するもの 49 50 51 53 58 63 [78]

51と[78]は非常に小型である。

46は片面及び側縁を剥離及び敲打（潰し）により整形している。

一部分に自然面を残すもの 48

刃部の一部分だけに自然面を残し、器面全体は剥離により整形している。

作出部に敲打痕が見られる。

両面に自然面を残すもの 37 38 39 42 45 47 52 57

片面は側面を剥離し、他の面は頭部及び基部表面まで剥離しているもの 37 38 42

片面だけ加工しているもの 45（小判形を呈する）

両側縁と刃部を剥離及び敲打しているもの 47

周縁すべてを剥離により整形しているもの 52（長方形を呈し、非常に小型である）

刃部を除いて、側縁及び頭部を剥離によって整形しているもの 39 57

39は、刃部の幅が非常に狭く、頭部とほとんど変わらない。

欠損品であり、欠損部分に片面から若干の剥離を施して刃部を作出し、再使用している。

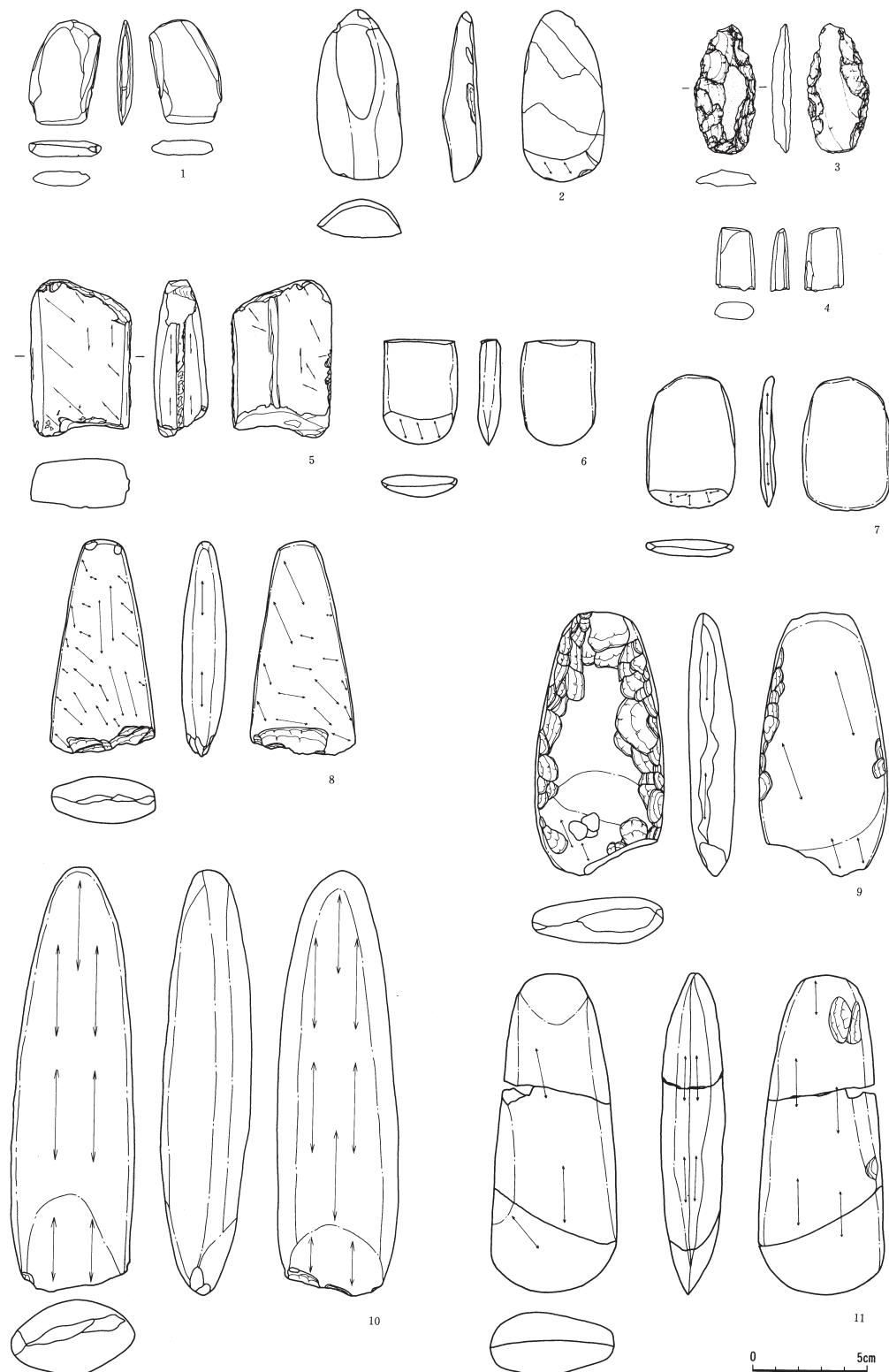
その他

敲打（潰し）による整形があるもの 43 [(82)] [(83)] の 3 点がある。

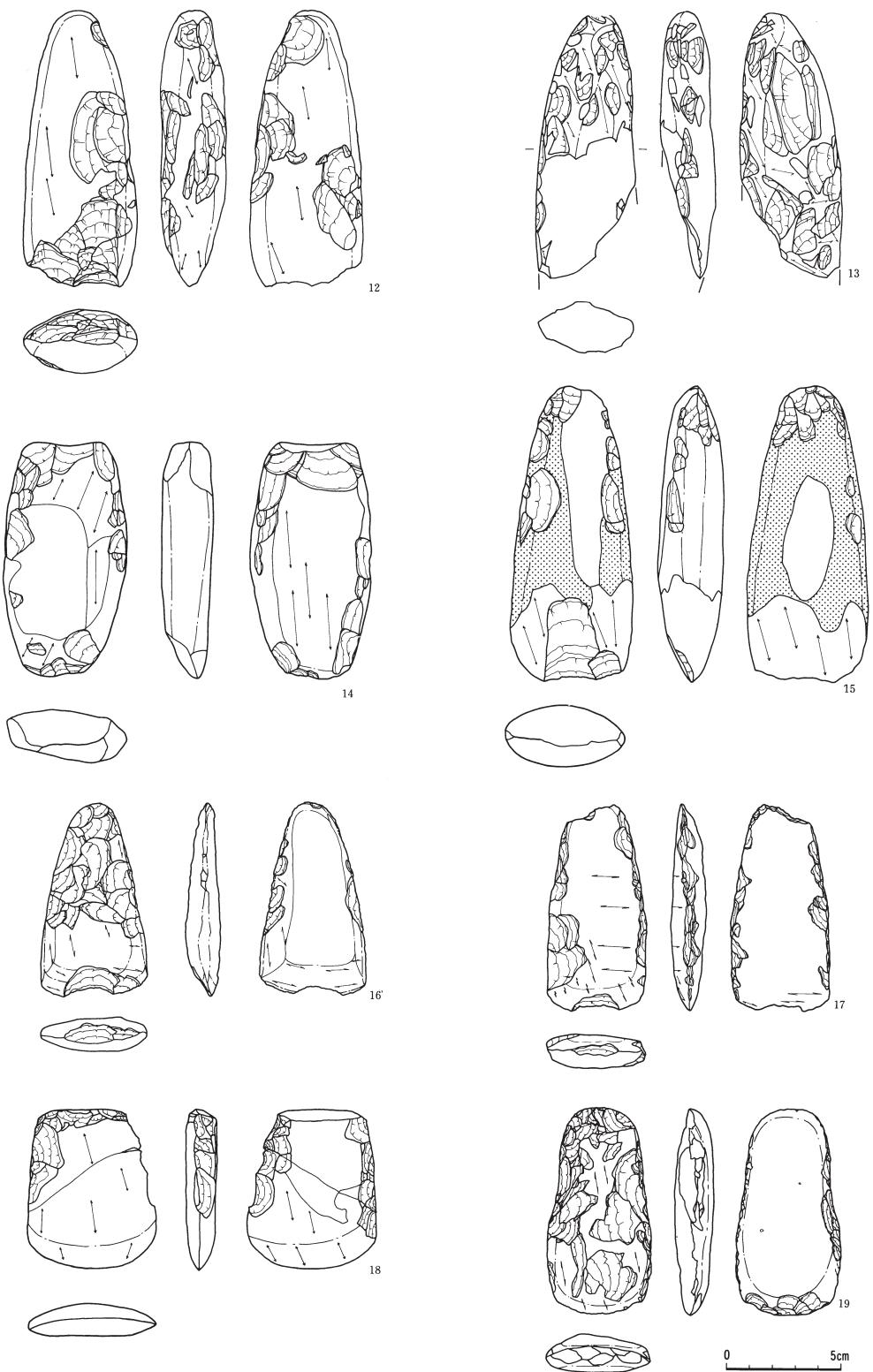
43 一側縁は敲打（潰し）されており、他の側縁は剥離と研磨がみられる。スリ面は連続しておらず、一方の面は表面に傾斜し、一方の面は裏面に傾斜している。頭頂部にも研磨面がみられる。刃部は片面加工であり、剥離によるものと思われるが、刃部近くまで敲打痕がみられる。

83 表面の $\frac{2}{3}$ と裏面の一部を、ていねいに敲打（潰し）しており、自然面を多く残す。刃部は片面加工によるものと思われるが、使用によるものと思われる剥離により明確ではない。刃部に湾曲するスリ面様の部分が認められるが、人為的に作出されたものか、使用による潰れかは不明である。

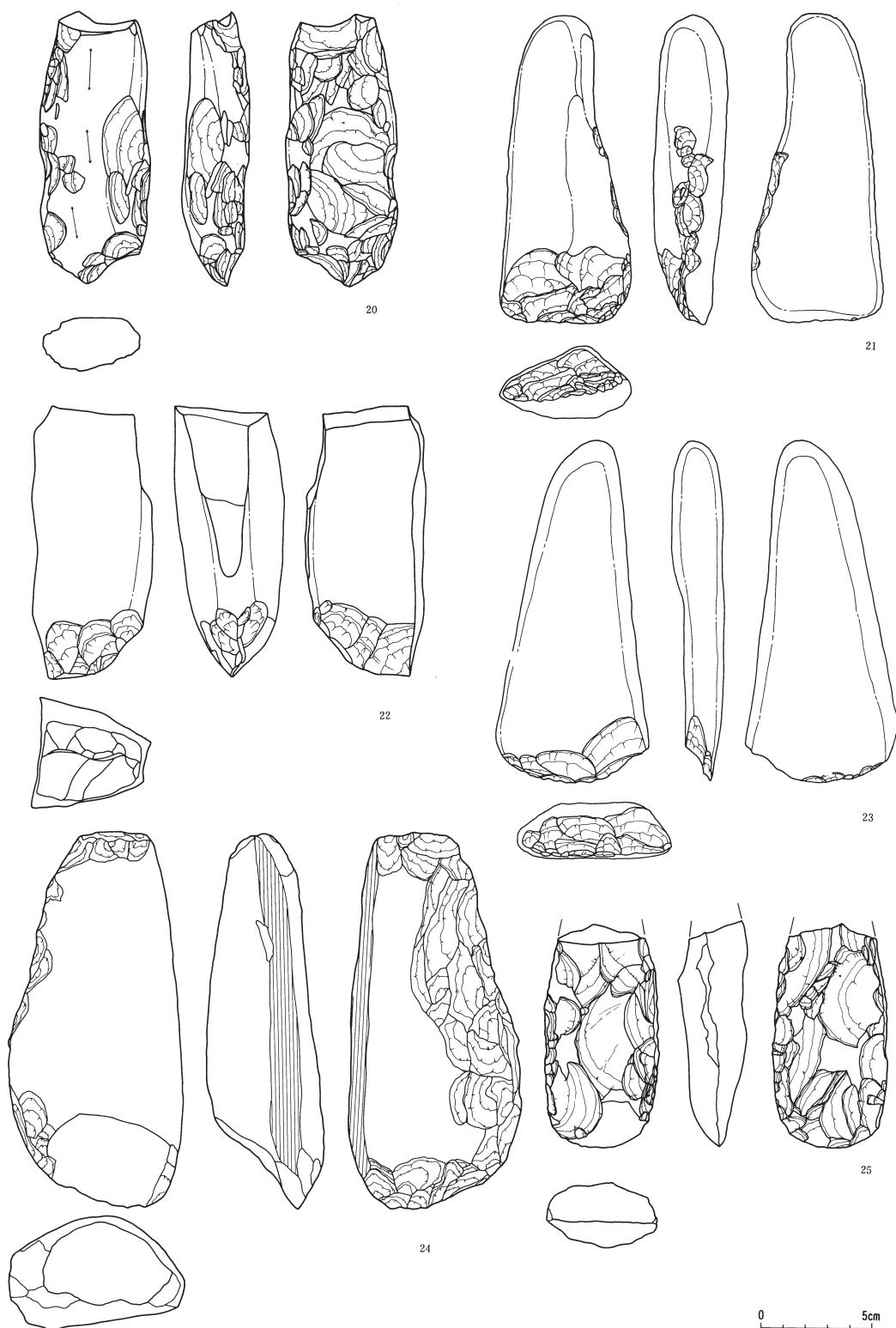
82 表面に一部自然面を残すが、他はすべて敲打されており、刃部は敲打後、スリによって整形されている。刃部は面を構成しており、基部の可能性も考えられる。



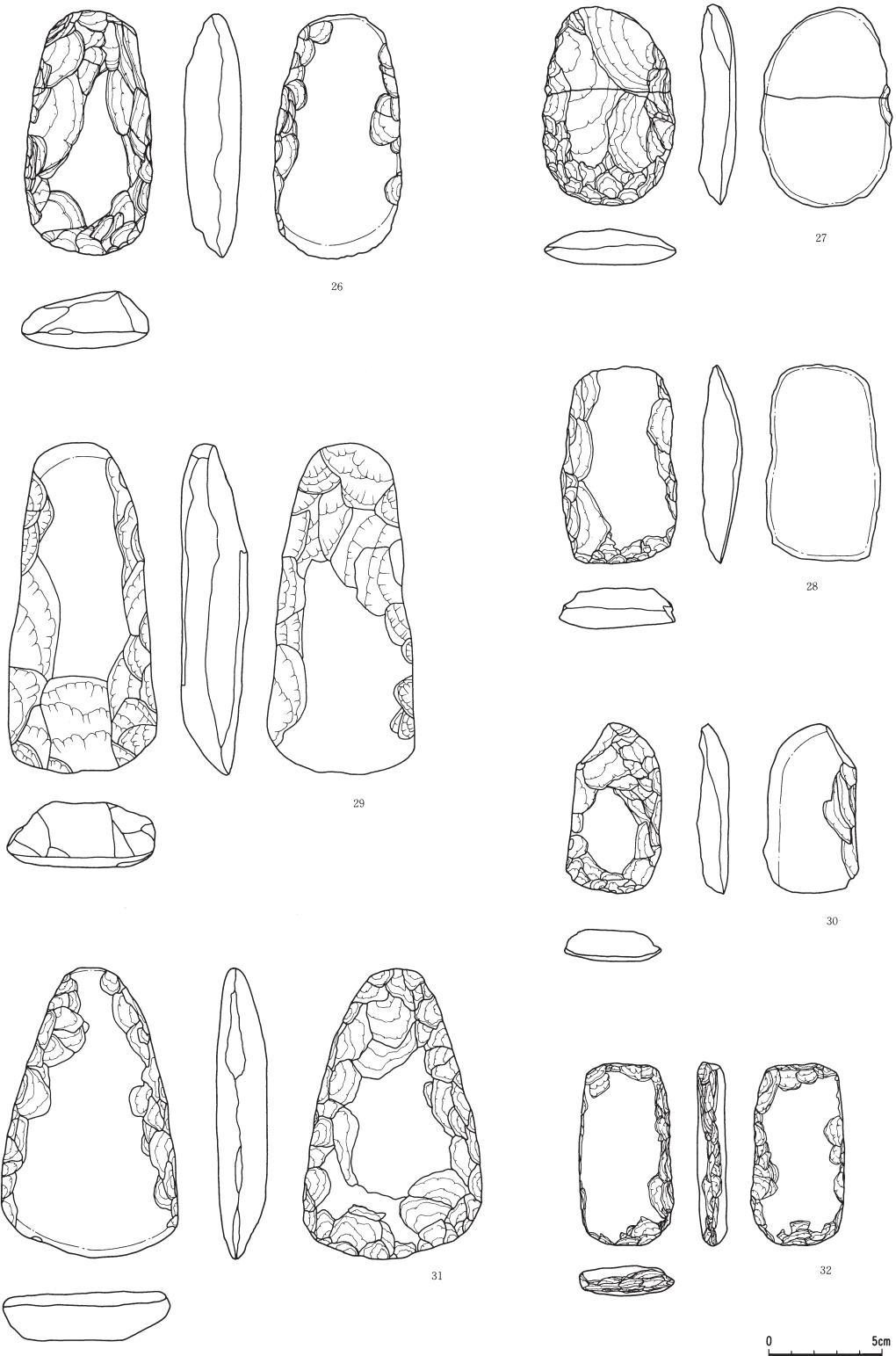
第115図 石器実測図(石斧1)



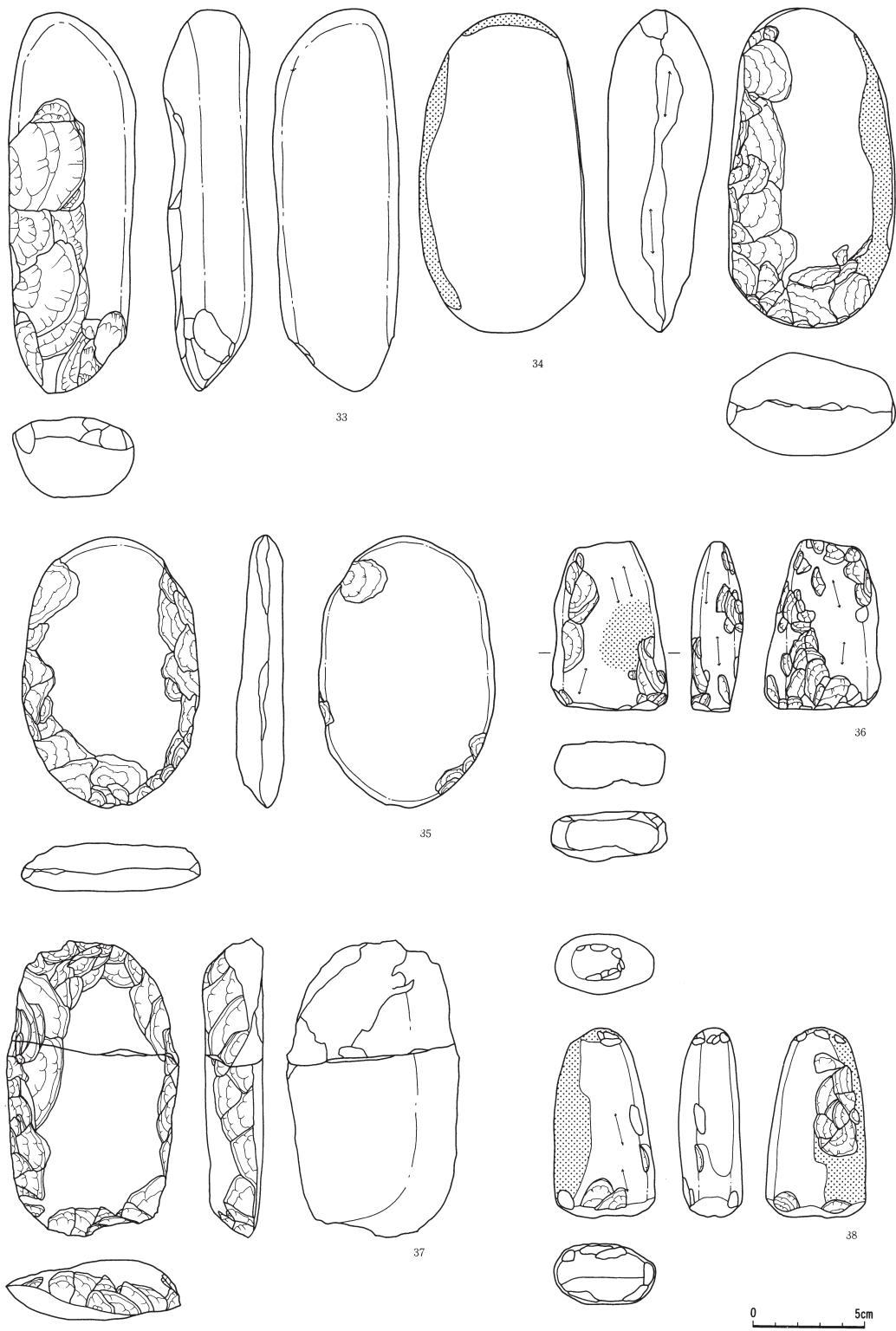
第116図 石器実測図(石斧2)



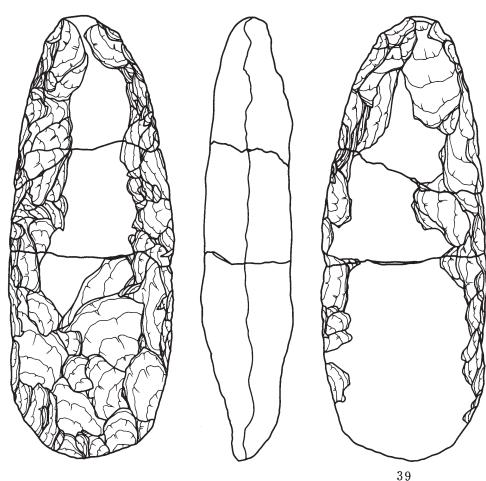
第117図 石器実測図（石斧3）



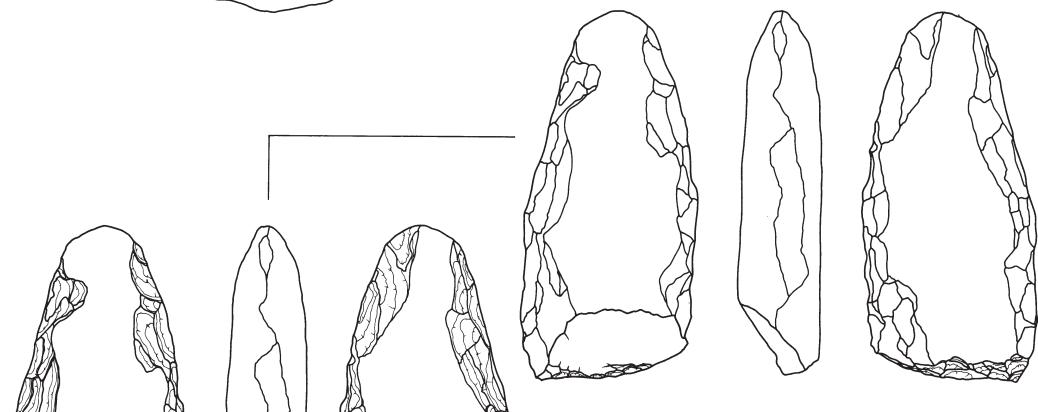
第118図 石器実測図（石斧4）



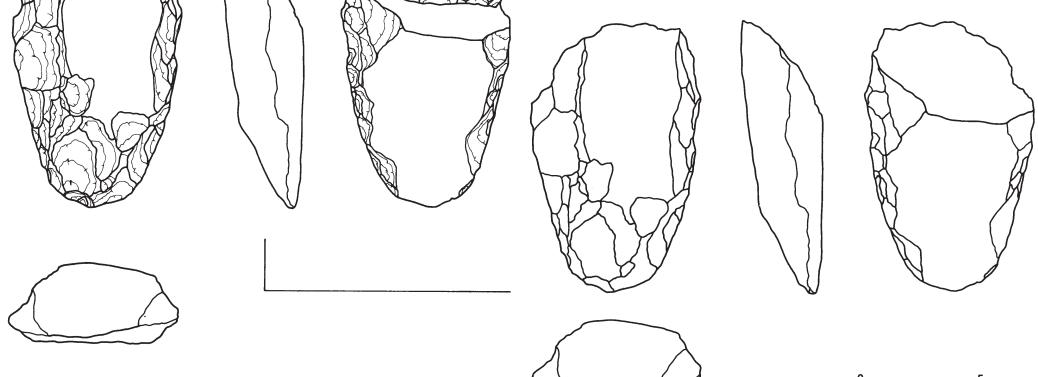
第119図 石器実測図(石斧5)



39



40



0 5cm

第120図 石器実側図（石斧6）

<刃部形状>（破損により、刃部の原形が明確でないものを除く）

両刃で円刃のもの12点、両刃で偏刃のもの1点、片刃で円刃のもの18点、片刃で直刃のもの4点、片刃で偏刃のもの5点である。

磨製石斧は、両刃で円刃のものがほとんどを占め、片刃のものは、擦切磨製石斧・局部磨製石斧を含む小型で薄手のものである。（片刃円刃8点、片刃直刃1点、片刃偏刃2点）

打製石斧では、両刃で円刃のものが1点あり、他は片刃である。ほとんどが片刃で円刃のものである。

刃部に若干の片寄りのみられるものは偏刃には含めず円刃とした。

使用によると思われる刃部の破損がみられるものは31点ある。また、頭部に打痕等の使用痕があるものは非常に少ない。

再利用しているもの 41・57・58

44 スリ石に転用、 a類参照

57 c類の基部を、敲き石に転用したものであり、敲磨器 a類に分類される。欠損面を使用している。

58 c類の基部を、敲き石に転用したものであり、敲磨器 類に分類される。欠損部を使用している。両側端部に敲打痕が認められるが、欠損面には使用痕跡が認められない。

<石質>

素材としたものの石質は次のとおりである。

輝緑岩41点(42.2%) 安山岩13点(13.4%) 珈岩・砂岩各9点(9.3%) 頁岩8点(8.3%)
輝緑凝灰岩5点(5.2%) ホルンフェルス・玄武岩各3点(3.1%) 凝灰岩2点(2.1%) 粘板岩・緑色凝灰岩・閃緑岩・斑駁岩各1点(1.0%) (白鳥文雄)

12. 石錘（第121～124図、第29～30表）

118点出土した。うち12点が接合し、総点数は112点である。遺構外出土は、完形品66点・欠損品28点である。接合により完形品となったものは欠損品に含めた。遺構内出土のものも含めて分類した。番号は整理番号である。表参照

抉りの部位による分類

類 掊りが長軸線上にあるもの。

a 掊りが素材のほぼ中軸線上にあるもの。

b 掊りが素材の中軸線上からそれるもの。

類 掊りが短軸線上にあるもの。

類 掊りが3か所以上にあるもの。

ほとんどの石錘が a類に含まれるが、大きさ・形状は多岐にわたる。

類は、4・24・61・118の4点である。

4・24・118は、短軸の中軸線上に抉りを作出しており、61は、短軸の中軸線上からそれた位置に抉りを作出している。

類は、15・65の2点である。

15 長軸線点に2か所と、一側縁に1か所の抉りを作出している。

65 平面形は方形で、扁平である。4辺の中央にそれぞれ非常に小さな抉りを作出している。

抉りの作出法は、両面からの剥離によるものが大多数を占める。一端が両面から、一端が片面からの剥離によるものが6点あり、両端が片面からの剥離によるものは皆無である。抉りの先端が面を構成するものも2点ある。

平面形状では、素材の選択により多くの形状が認められる。

1 卵形もしくは小判形で、ほぼ左右対称のもの、2側縁の一方がほぼ直線で、他方が弧状を呈するもの、3ほぼ方形を呈するもの、4長方形のもの、5その他があり、2が10点と小数であることを除くと、他はほぼ同量である。

厚さがほぼ均一なのは17点と少なく、断面形状がレンズ状もしくは三角形を呈するものが多数を占める。厚さが均一なものは、1のタイプにほとんど包含される。

長さは、5.5cm～15.3cmであるが、9.5cm～11.4cmに集中し、特に9.5cm～10.3cmに集中する。平均は9.9cmである。

幅は、4.1cm～10.5cmであり、7.0cm～8.7cmに若干集中する傾向を示すが、全体的に広がりを見せる。平均7.7cmである。

厚さは、1.4cm～5.2cmであり、2.3cm～3.5cmに大きく集中するが、1.9cm～2cm・3.9cm～4.0cmにも集中する。平均は2.9cmである。

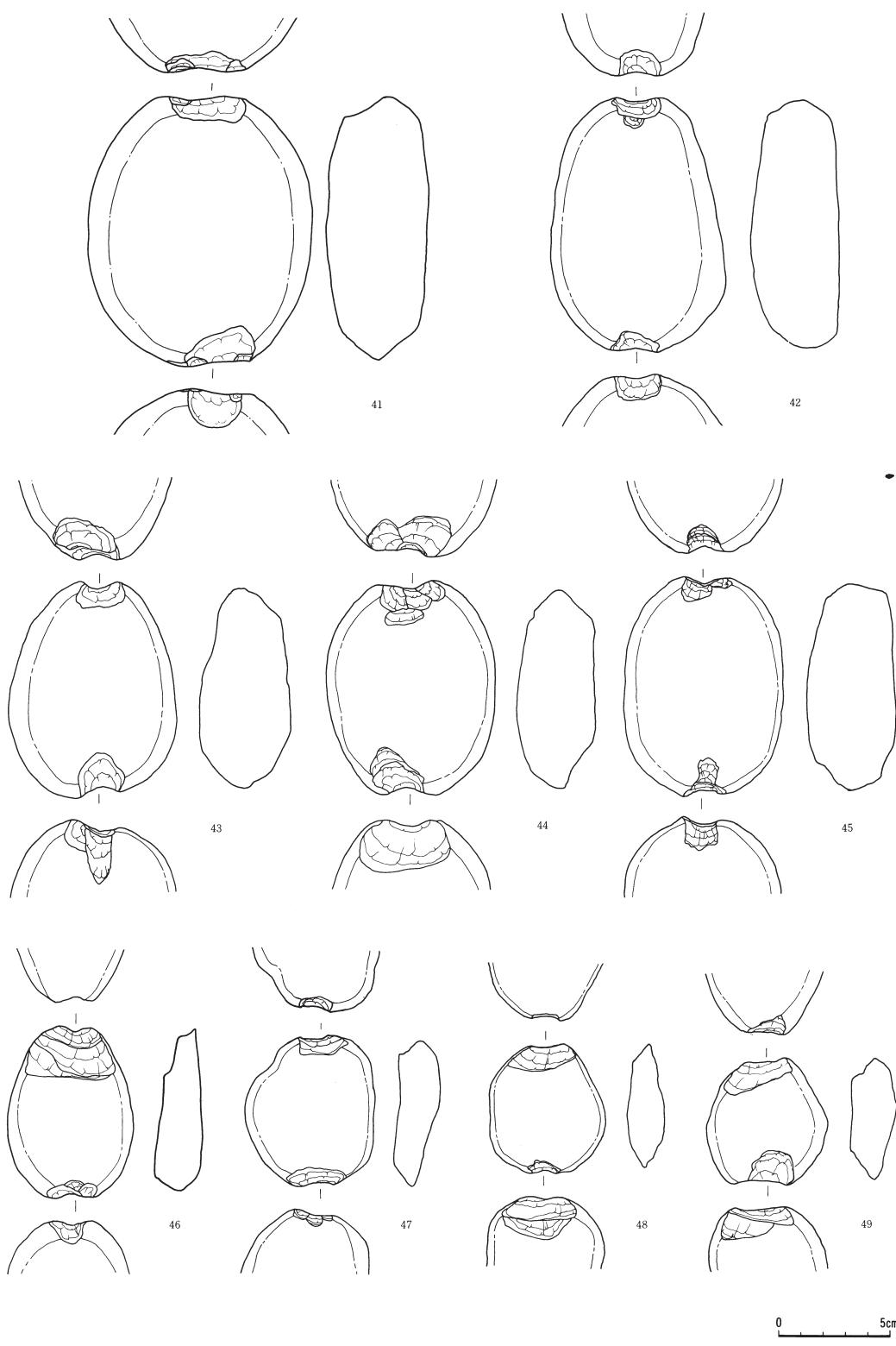
重さは、63g～822gであるが、60g～140g・170g～180g・300g～480gに集中する。特に300g～500gには全体の50%が含まれ、100g～140gに14%が含まれる。平均は327gである。

素材としたものの石質は、安山岩が44.6%を占め、チャート20.5%、砂岩14.3%、凝灰岩6.2%、頁岩5.4%、石英ホルンフェルス4.5%、その他4.5%である。

欠損品の石質は、安山岩33.3%、チャート・砂岩各18.5%、石英ホルンフェンス11.1%、その他31%で、全体の比率と大差ない。

各部位間の比率は指数であらわした。長幅では6.7～1.0にほとんどが含まれる。長厚では2.5～3.3に多く集中し、2.5～4.0にほとんどが含まれる。抉り度では9.4～9.7に集中する。偏平度では、2.0～5.0にほとんどが含まれる。

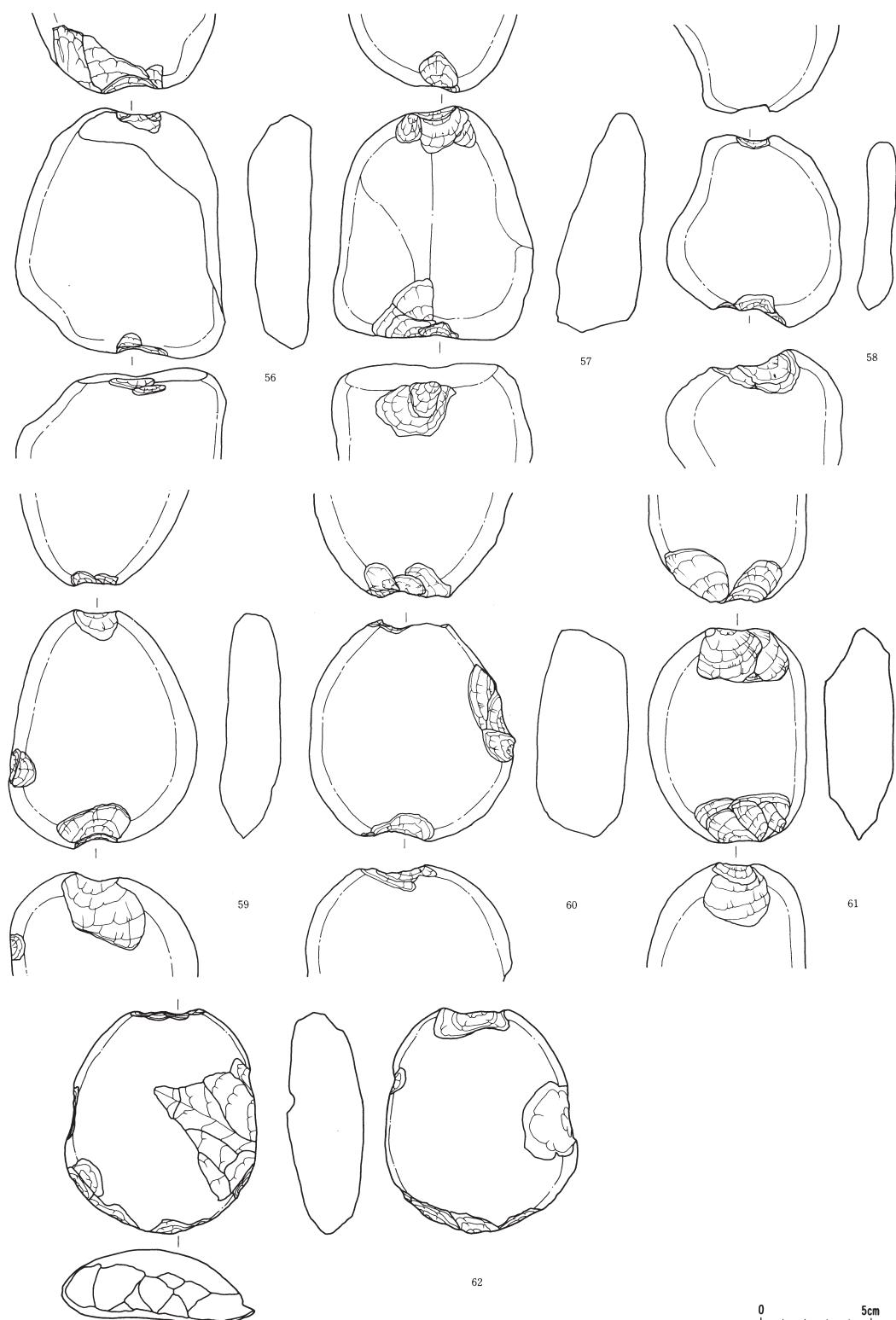
このことから、本遺跡出土の石錐は、幅は長さと同等から1.5分の1で、厚さは長さの2.5分の1から4分の1のものがほとんどであることが理解される。遺構内出土のものは、この範囲



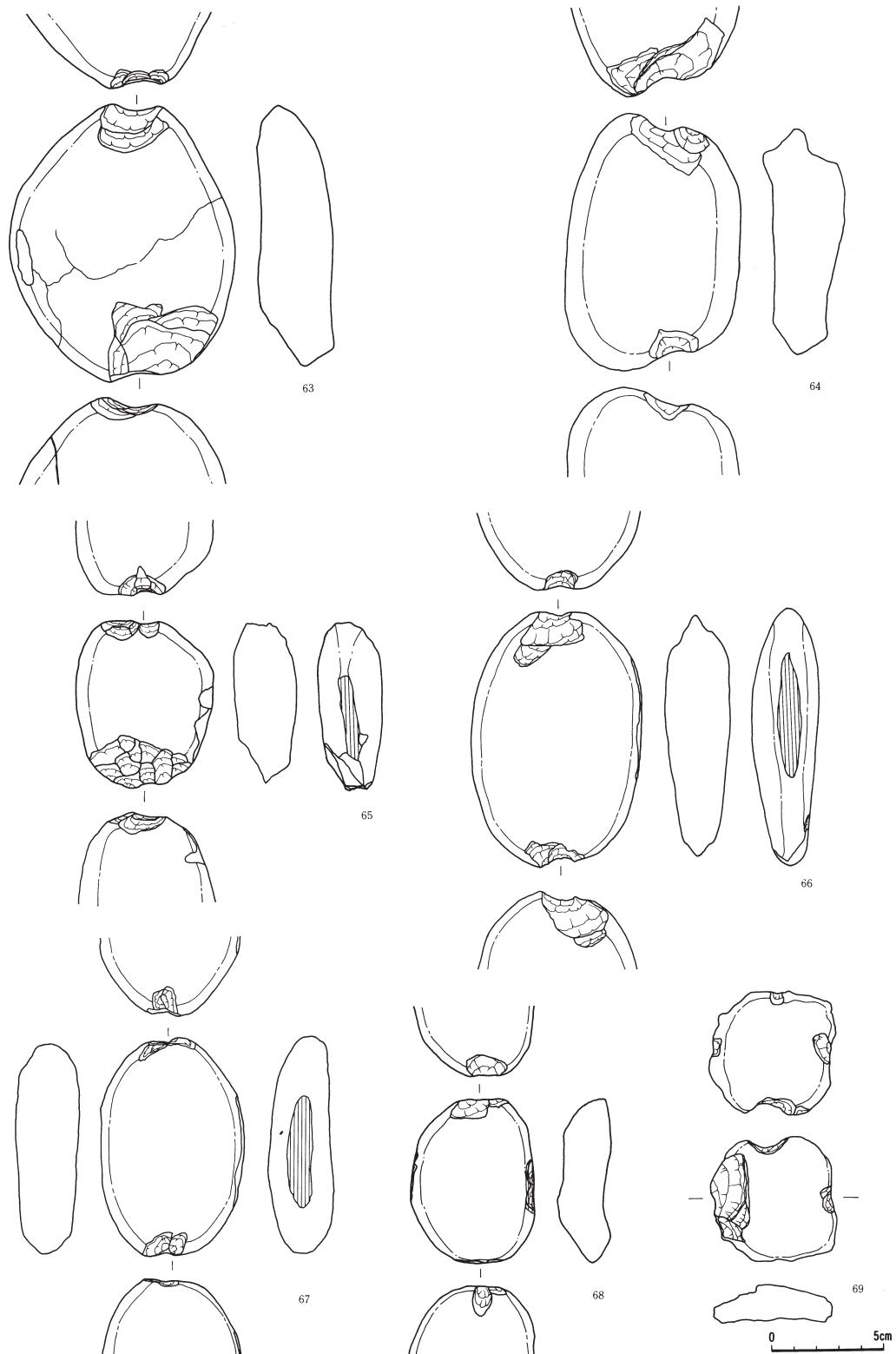
第121図 石器実測図（石錐1）



第122図 石器実測図（石錐2）



第123図 石器実測図（石錐）



第124図 石器実測図(石錐4)

からはずれるものが多い。

抉りは、長さ全体に対して非常に小さく、大きなひっかかりを必要としなかったものと推定される。

8 cm以下の小型の石錘が19点出土した（欠損品を除く）。石質別では、安山岩10点、チャート5点、凝灰岩2点、輝緑岩・頁岩各1点であり、類1点を除いてすべてa類である。これらは、長幅指数では若干数値の高い方に片寄り、長厚指数では全体の傾向とほぼ合致する。このことから、小型のものも若干縦長ではあるが、極端に薄いものや肉厚の素材を使用せずに、錘としてのほぼ基本的な比率の中で製作されたものと思われる。重さは63g～221gと広がりを見せる。

石錘以外の使用痕跡のあるものは、21・25・31の3点がある。

21 一側縁に $5.2\text{cm} \times 0.8\text{cm}$ の敲打痕及びスリ痕が認められる。

25 一端に敲打痕が認められる。

31 一側縁に $3.7\text{cm} \times 0.7\text{cm}$ のスリ痕が認められる。

焼化を受けたもの、及びスス状炭化物の付着したものが欠損品を含めて31点あり、安山岩製のものが13点ある。

（白鳥文雄）

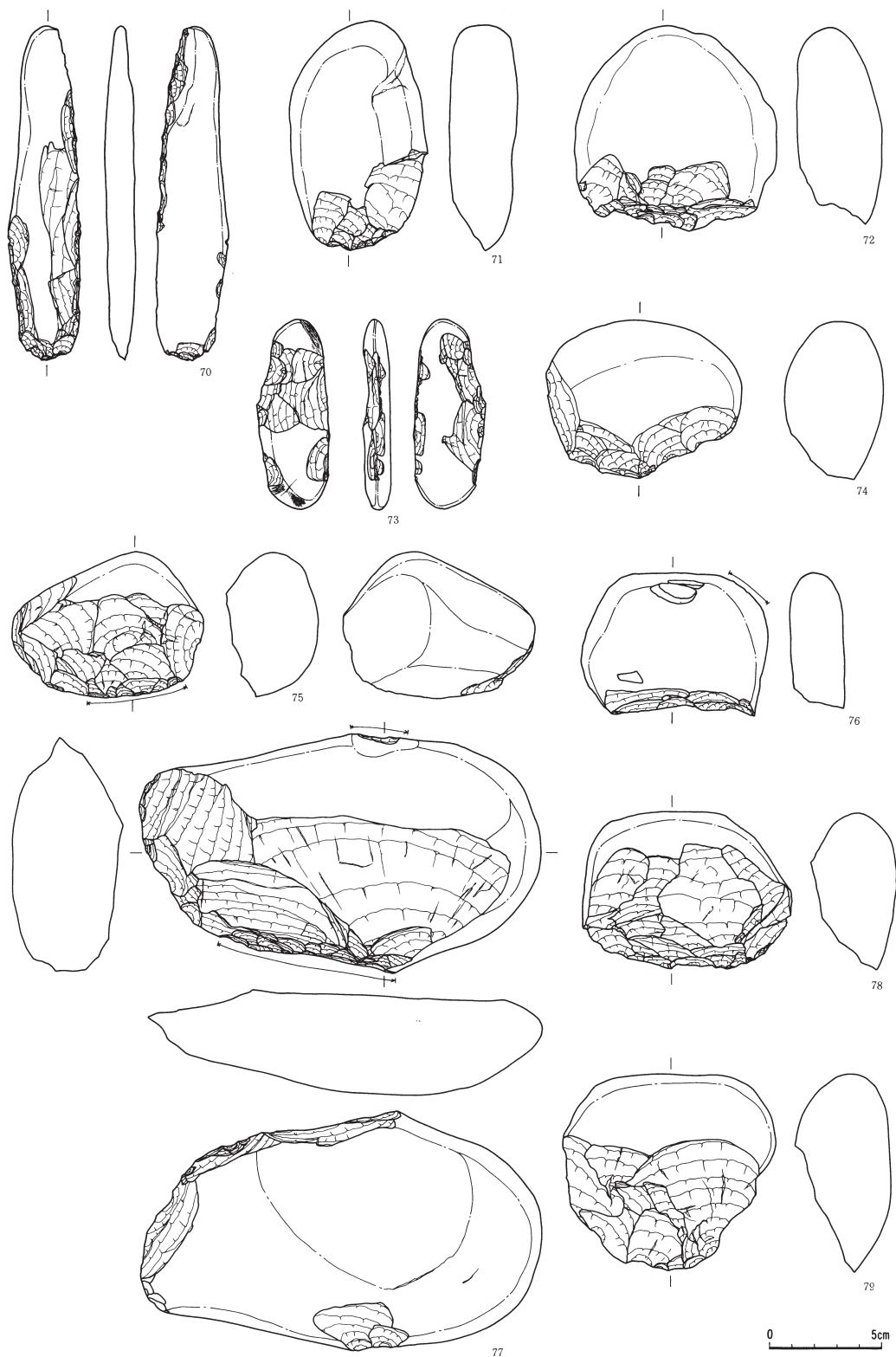
13. 石剣様の石器（第125図70）

出土資料は1点である。棒状の薄い粘板岩を用いたもので、表面右側縁は先端から $\frac{2}{3}$ 、左側縁は $\frac{1}{3}$ ほど、また、右側縁裏面は基部から $\frac{2}{3}$ ほどを調整している。削器の一種とも考えられる。

14. 磔器（第125図71～79）

チャート・安山岩・砂岩等のやや偏平な円礫の一端を打ち欠いて、部厚い刃部を作出したものである。9点出土したが、うち7点は、打ち欠きがパンチを用いた間接打法によることが明瞭である。

71は長軸の一端に刃部を作出したもので、パンチ痕が3か所にみられる。72はパンチ痕が4か所にみられ、刃部の凹凸が著しい。74はパンチ痕が4か所にみられるが、その他パンチを当てるものの剥離に至らない痕跡が4か所にみられる。75は礫のほぼ半分を周囲から剥離したもので、パンチ痕が2か所みられる。76はパンチ痕が3か所にみられ、他のコーナーに敲いた跡をもつ。78にはパンチ痕が2か所みられる。79は弧状に張り出す刃部が作出されており、パンチ痕は3か所にみられる。77は上述のものに比べて大型であり、両面に荒い剥離を加えて80°前後の刃部を作出しているが、パンチ痕は認められない。73は上記のものと大きな差があり、本来は礫器に含まれないものであるが、取あえず本類に含めた。



第125図 石器実測図(石剣様石器・礫器)

15. 敲磨器

類（第126図80～第132図122）

一般に、断面形状が三角形のずんぐりした自然礫の稜に細長の機能面をもつもので、磨石、擦石・穀櫂石・特殊磨石等と称されているものである。

完形品67点・破損品169点の、合計236点出土した。ただし、接合による完形品5点と接合したものの破損品であるもの13点を各1点として含む。また、完形及び破損しているが機能面の完全なものが98点ある。なお、遺構内のもので完形品2点、及び破損品9点は、この数に含まれていない。

石材は、砂岩・安山岩・玢岩・凝灰岩・閃緑岩・輝緑岩・チャート・頁岩・礫岩の9種類が使用されているが、その約70%を砂岩及び安山岩が占めている。

重量は、完形品67点でみると、77g～1785gで平均672gである。

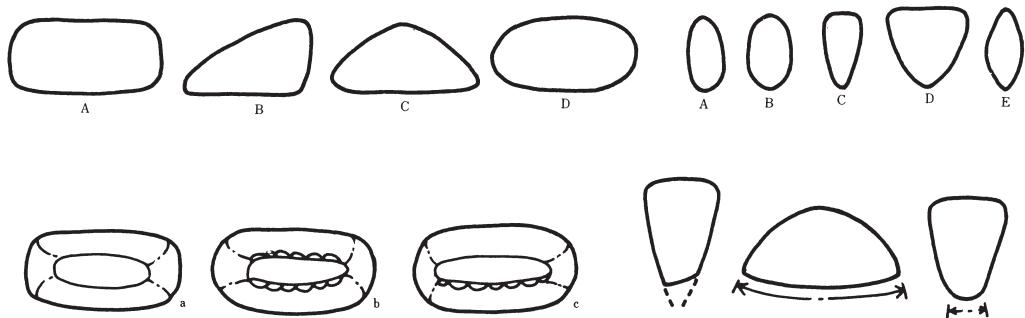
平面形状は、A・角の丸い長方形のもの約20%、B・角の丸い直角の三角形のもの約15%、C・角の丸い二等辺三角形のもの約10%、D・橢円形のものが約45%、不明のものが約10%である。また、断面形状は、A・橢円形のもの約14%、B・膨らみをもった橢円形のもの約25%、C・上部の狭い逆三角形のもの約25%、D・上部の広い逆三角形のもの約34%、その他菱形及び不明が2%である。この両者を組み合わせると、DB・DDが圧倒的で、以下AD・DCと続く。

機能面の長さは2cm～17cmで平均10cmであるが、礫の最大長に占める比率は29%～95%、平均70%である。また、その幅は0.1cm～3.2cm、平均1.2cmであるが、礫の最大幅に占める比率は7%～51%で、平均26%である。

敲磨器類は、大概以上の特徴をもつが、これを機能面の側縁に剥離をもつか否かによって次のように分類した。

- a 機能面の側縁に剥離をもたないもの（第126図～第128図）
- b 機能面の両側縁に剥離をもつもの（第129図・第130図）
- c 機能面の一側縁に剥離をもつもの（第131図・第132図）

aに属するものは、機能面が完全なもの98点中41点で42%、bは40点で41%、cは17点で17%



形態・分類模式図

%を占め、機能面が不完全なものは138点中 a が68点で49%、 b が47点で34%、 c が23点で17%をそれぞれ占めている。両者を併せると236点中 a は109点で46%、 b は87点で37%、 c は40点で17%である。 b と c には、剥離の多少にかかわらず剥離をもつということで分類した。このため、 a ないし c に含めた機能面の不完全なものは、完形品ならば本来 b ないし c に分類される可能性のものを含んでいることになる。しかし、完全・不完全にもかかわらず、両者はほぼ近似した値を示しており、これを大概の傾向としてみることができよう。

機能面の両側縁に剥離をもつものの場合、両側縁の剥離の状況が同程度のものはほとんどなく、一方が小剥離、他方がそれに比べて大きな剥離、また、その数は、一方が少なく他方が多い等の違いがみられる。

^(注4) 機能面の感触 非常に感覚的なものであり統計処理にはなじまないが を、1・つるつるした面ないし礫表面と同程度のもの、2・礫表面とは異なり非常にざらざらして荒れた面のもの、3・そのいずれともつかない中間的なものに分けて観察した。ただし、1にはつるつるして光沢をもつ例は少なく、むしろ器表面と同程度ないしはそれよりやや荒れた面であるものが多い。また、2には単に荒れてざらざらしているだけでなく、機能面中に小さな凹みが多数あり、それが特に集中する部分をもつものもある。

同一の機能面である場合、その機能面のどの部分も同様な感触を得るもののが圧倒的であるが、1と2、1と3、2と3など明瞭に異なるものが5点ほどみられた。機能面が完全なもの96点中1は24点で25%、2は34点で35%、3は38点で17%、また、不完全なもの135点中1は53点で39%、2は35点で26%、3は47点で35%である。合計231点でみると1は77点で33%、2は69点で30%、3は85点で37%と、それぞれほぼ $1/3$ と均等な比率を示している。

上記 2 種の細分項目を組み合わせたものが表12である。a が55点で23.8%と最も多く、次いで b₂ の43点18.6%、a₃ の35点15.2%、b₃ の34点14.7%と続くが、c 種は各々ほぼ類似した比率を示している。そして、a には機能面の荒れたものは少なく、また、b には機能面のつるつるしたようなものが少ないことは、剥離の有無と機能面の状況との間に、ある程度の相関関係があるものと考えられよう。

機能面には、更に別な特性が認められる。機能面は、決して平坦をなすものではなく、その長短両方向ともに凸状の曲面をなす。そして、機能面幅の広いものの中には第127図93に示した

第12表 敲磨器 I 類分類構成表

ように、片減りしたと考えられるものが236点中43点で約18%存在する。この中には不確実なものは含んでおらず、実数は更に多いと思われる。43点中 a は17点で39.5%、b・c は各13点30.2%で大差はない。しかし、面の感触からすると、1と2を併せもつ1例を除き、42点中1が18点で42.9%、2が5点で11.9%、3が19点で45.2%となり、面の荒れが強い2に属するものには、片減りしたものが非常に少ないことがわかる。そして、bやcに属するものの中で片減りしたものは、その大半が機能面側縁の剥離のない方、ないしは剥離が少なくまた小さい方に生じている。

機能面は通常一面だけであるが、2ないし3稜使用したものが8点ある。また、側面部がややスレしているようなものが2点、一般的な凹石ほど明瞭ではないが、側面に若干凹んだ部分を持つもの4例、長軸の端部にタタキ痕のあるものが23例、また他の稜の一部にタタキ痕のあるものが4例ある。

本石器の約70%は破損しているが、その破損状態は機能面にほぼ直交するものが多い。

火熱を受けたものは127点で54.5%を占めるが、これを破損品だけでみると、117点で86.3%の高率を占めており、破損後の使用の一端を知ることができる。また、炭化物やタール状のものが付着したり、こびりついたものが53点みられた。 (三宅徹也・佐藤ゆかり)

類 (第133図123・124)

通常、スタンプ状石器と称されているもので、2点出土した。

棒状の礫が分割され、分割面の周辺が使用により若干潰れている。これに接する礫面には、その使用に伴う小剥離が並んでいる。分割面の大半は、分割時の状態を保っている。

124は側面にも敲き潰れの痕跡をもっている。

類 (第133図125～第137図160)

通常、敲石と称されるものである。遺構外出土は95点、うち完形品は49点である。

様々な形状をした、ほぼ拳大の自然礫の一端か両端、または、周縁に使用痕跡をもつものである。平坦面を利用したものはない。ここでは、一応礫の長さ・幅・厚さの比を参考に、その形態に基づいて細分した (第148図参照)。

a種 棒状の礫を用いたもの

b種 扁平な円盤状の礫を用いたもの

c種 やや分厚い円盤状の礫を用いたもの

d種 球形ないし卵形の礫を用いたもの

a種 (第133図125～133)

棒状の礫を用いたもので、13点出土した。うち10点が完形品で、接合が1点、破損品が2点である。

棒状の礫の一端または両端に敲き潰れの痕跡をもち、その面に接した礫面に、同方向からの小剥離が並ぶ。機能面は全体的に曲面をなすが、やや平坦な小さな面の集合であり、特に125・129・132では明瞭である。130は他とやや異なり、上方では2面の機能面が稜をなしている。また、その面は他の資料と比べてやや滑らかであり、礫面には剥離がみられない。

132と133は、礫面を調整したと考えられるものである。

132は、上下方向からの剥離が主体であるため、使用による弾けとも考えられるが、側面からの剥離も幾つかみられるため、器体調整を行ったものと考えられる。133は、自然面が一部にしか残存せず、他の面は機能面に類するざらざらした面をしており、自然面を敲き潰して調整したものと考えられる。

b種（第134図134～140）

扁平な円盤状の礫を用いたもので、11点出土した。うち6点が完形品、1点が接合したもの、4点が破損品である。

円盤状の礫のほぼ全周縁に敲き潰れの痕跡をもつが、やや長めのものは主として長軸の端部に使用痕をもつ。a種同様、機能面に接する礫面に、小剥離をもつものが多い。

138は半欠品で、残存部で見る限り、表裏とも大きな剥離が巡っていると思われる。使用による弾けというよりは、円盤状に調整した剥離と考えられる。135は、全周に使用痕をもつが、各周縁が表裏面に分かれ、稜をなしている。剥離をもたない点や機能面の状態等も含め、a種の130に類似する。

c種（第135図141～147、第136図150、154）

やや分厚い円盤状の礫を用いたもので23点出土した。うち15点が完形品、接合が3点、破損品が5点である。

円盤状で、b種に近似するもの（143・146・147ほか）はほぼ全周縁を、やや長目でa種に近似するもの（141・144・145ほか）はその長軸の一端ないし両端を使用している。機能面に接して剥離をもつものともたないものとがあるが、a及びb種に比べてその出現率は低い。

141～143の機能面の一部は抉れている。143は、130・135ほどではないが、表裏の面が稜をなし、他の状況も類似する特徴をもつ。

d種（第136図148・149・151～153、155～157、第137図158～160）

球形ないし卵形の礫を用いたもので、49点出土した。完形品は少なく18点・接合3点・破損品は28点である。

長軸の一端ないし両端を使用したもの（148・149ほか）と、ある程度の稜をなす部分を回転させて使用したもの（158～160）があり、破損品の多くは後者である。

破損したものを除くと、使用に伴う剥離をもつものは、他種に比べて極端に少ない。機能面

の多くは幾つかの小さな面の集合であるが、149・156など観察し得ないものもある。151の機能面の一部は、若干抉れている。

類（第137図161～165）

凹石の類で、5点出土した。164が砂岩で、他はすべて安山岩である。

161は右側に凹部があり、左側と裏面は類と同様に面が荒れている。162は両面を使用している。

類（第138図166～172・174）

凹部が明瞭でなく、面が強く表れているものである。類とは使用頻度の差であろうか。12点出土したうち、破損品は4点である。石材は安山岩8点、砂岩2点、ホルンフェルス・凝灰岩各1点である。

168は、左右両面と下面を使用しており、166・169～172等の裏面にも同様の痕跡が観察される。

類（第138図173・175～180）

やや扁平ないし球形の円礫の平坦面に、擦った痕跡のみられるものである。7点出土したうち、破損品は1点である。石材は、安山岩3点、閃緑岩2点・砂岩・ハンレイ岩各1点である。

175の表面はつるつるしており、光沢をもっているが、裏面には敲打の痕跡がみられる。177の左右両側面には敲打痕及び擦り痕跡がみられる。すべて裏面も使用している。175の表面以外は、擦った面であるがややザラザラしている。

類（第139図181～第141図189～201.203）

肉厚な自然礫を用い、平坦面に摩耗した面のみられるもので、石皿・台石の類である。

本来は、かなり大型であると思われるが、すべて破損品で、小さな断片が多い。この中には、分割し再加工したものや、破損により廃棄されたもの、また、破損後もそのまま使用され続けたものもあるが、2～3例を除き特定し得ない。

183は接合例であるが、ほぼ同じ大きさに分割（破損？）され、その両方の周縁を再加工したものである。

使用した面の状況には、皿状に凹むもの（181・182・184他）摩耗してはいるがほとんど変化のないもの（187・189・195他）また、焼け弾けもあるが、更にそれに類した弾け痕や凹凸をもつものがある。（196・201他）。使用面が片面のものと両面のものとがある。

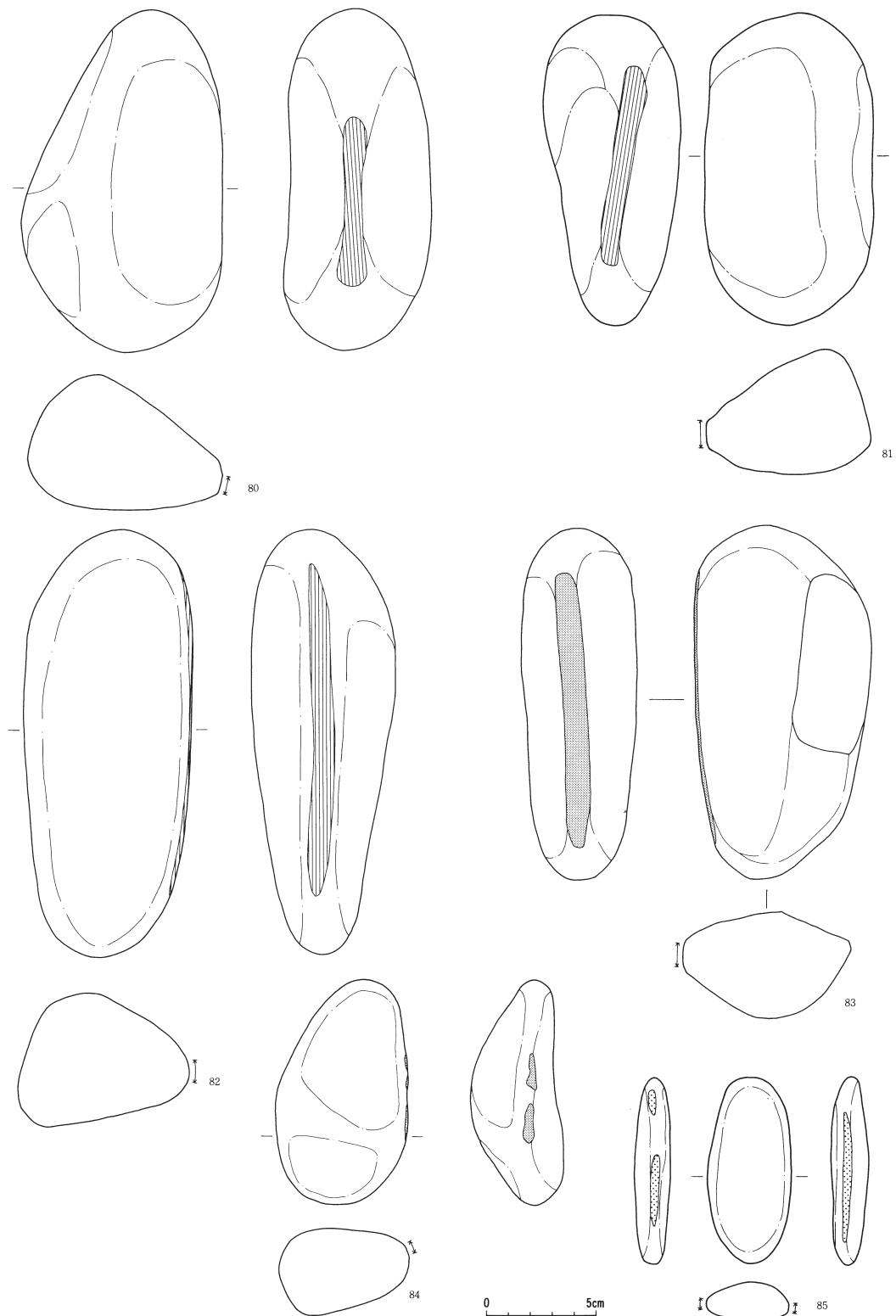
類（第141図202.204）

ハンマーストーンと称され、石器製作に用いられたと考えられるものである。

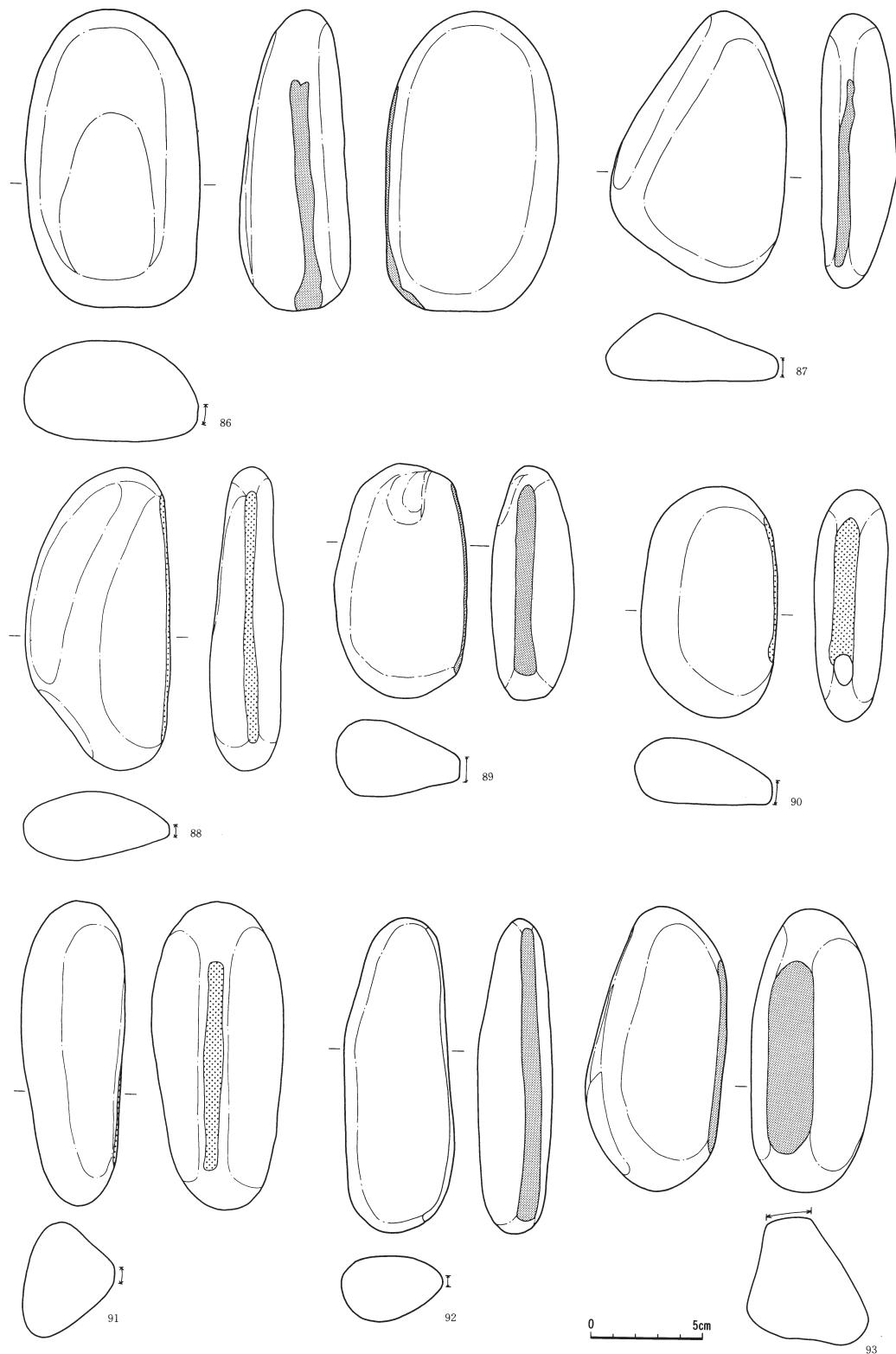
自然石の稜をなす部分や端部が剥離したり、潰れたりしている。また、機能と直接関係するかどうか不明であるが、礫表面に細かな弾けやヒビが多数みられる。

一応、単一の機能をもつと考えられたのはこの2点であるが、敲磨器1類中において、反対の稜を用いたものが数例みられた。

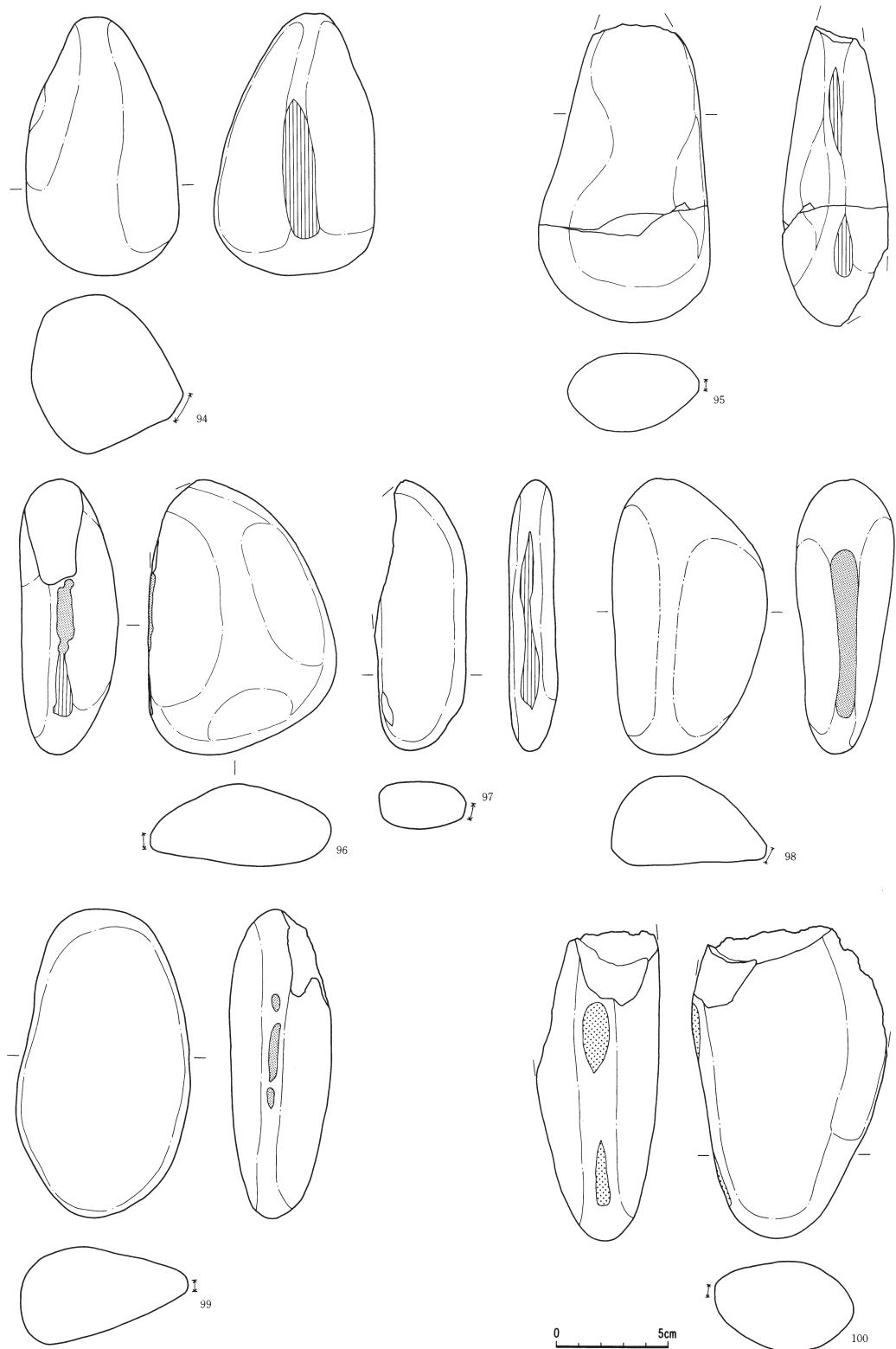
（三 宅 徹 也）



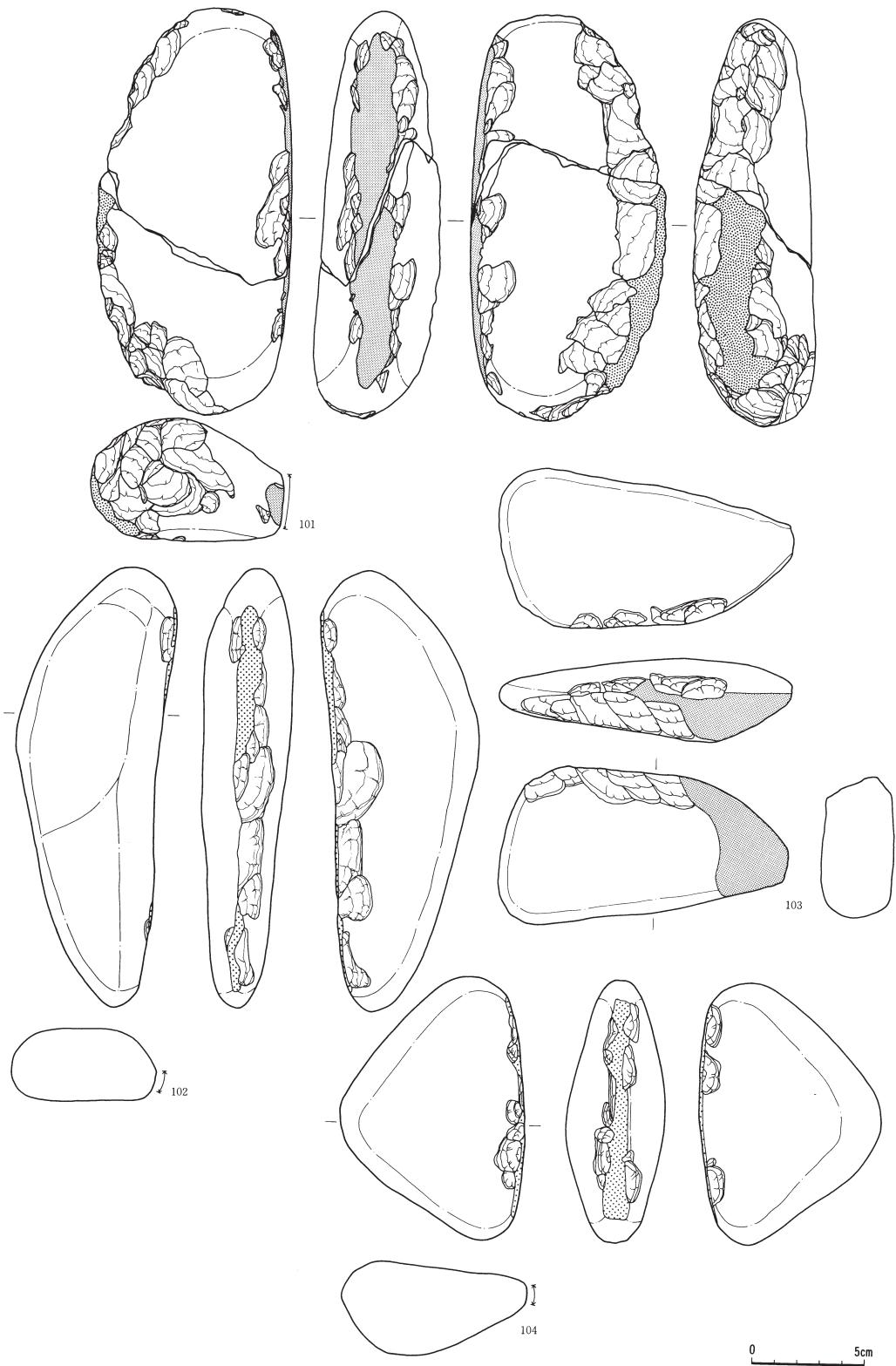
第126図 石器実測図（敲磨器 I - a 類 1）



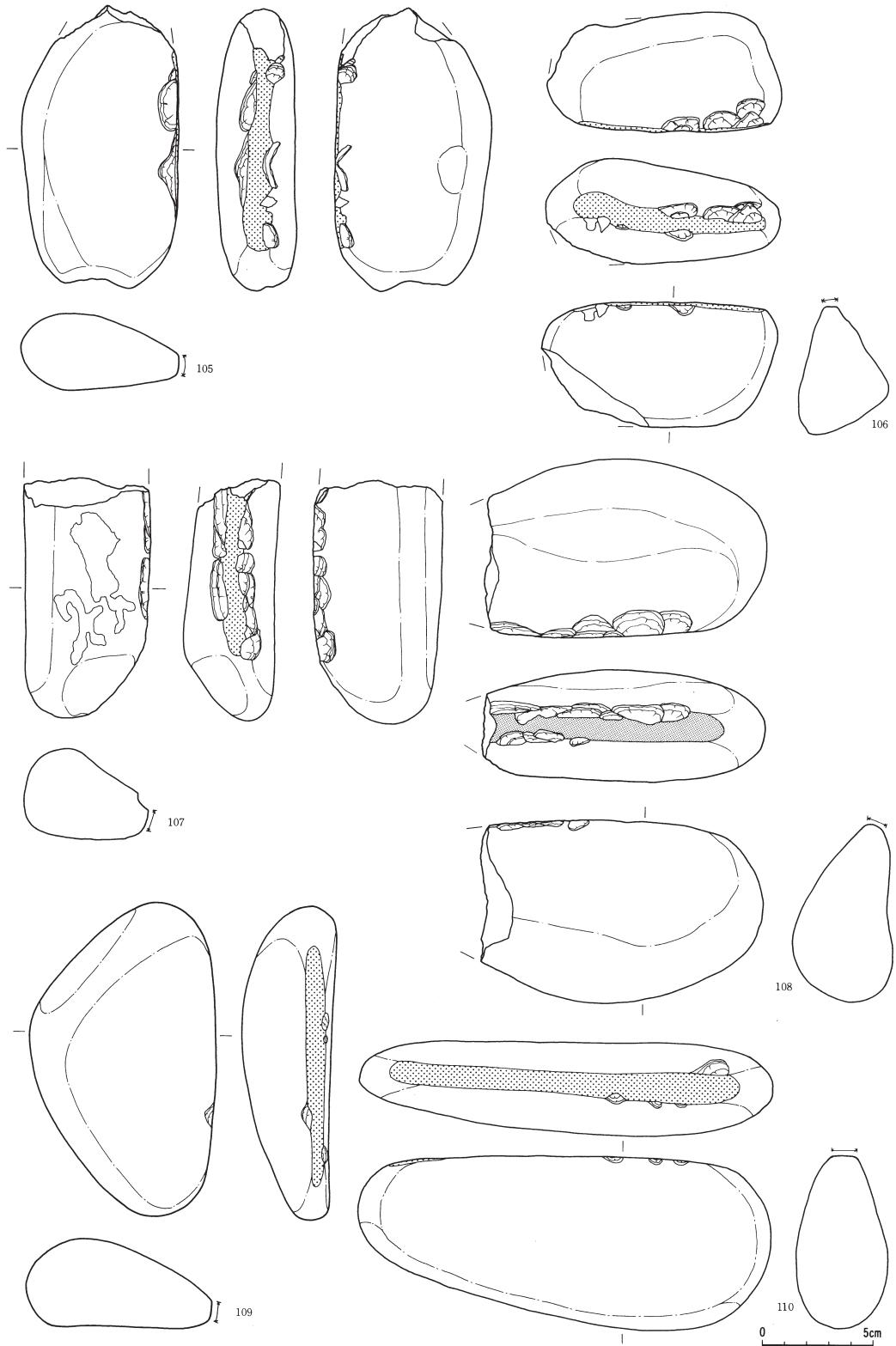
第127図 石器実測図(敲磨器 I - a 類 2)



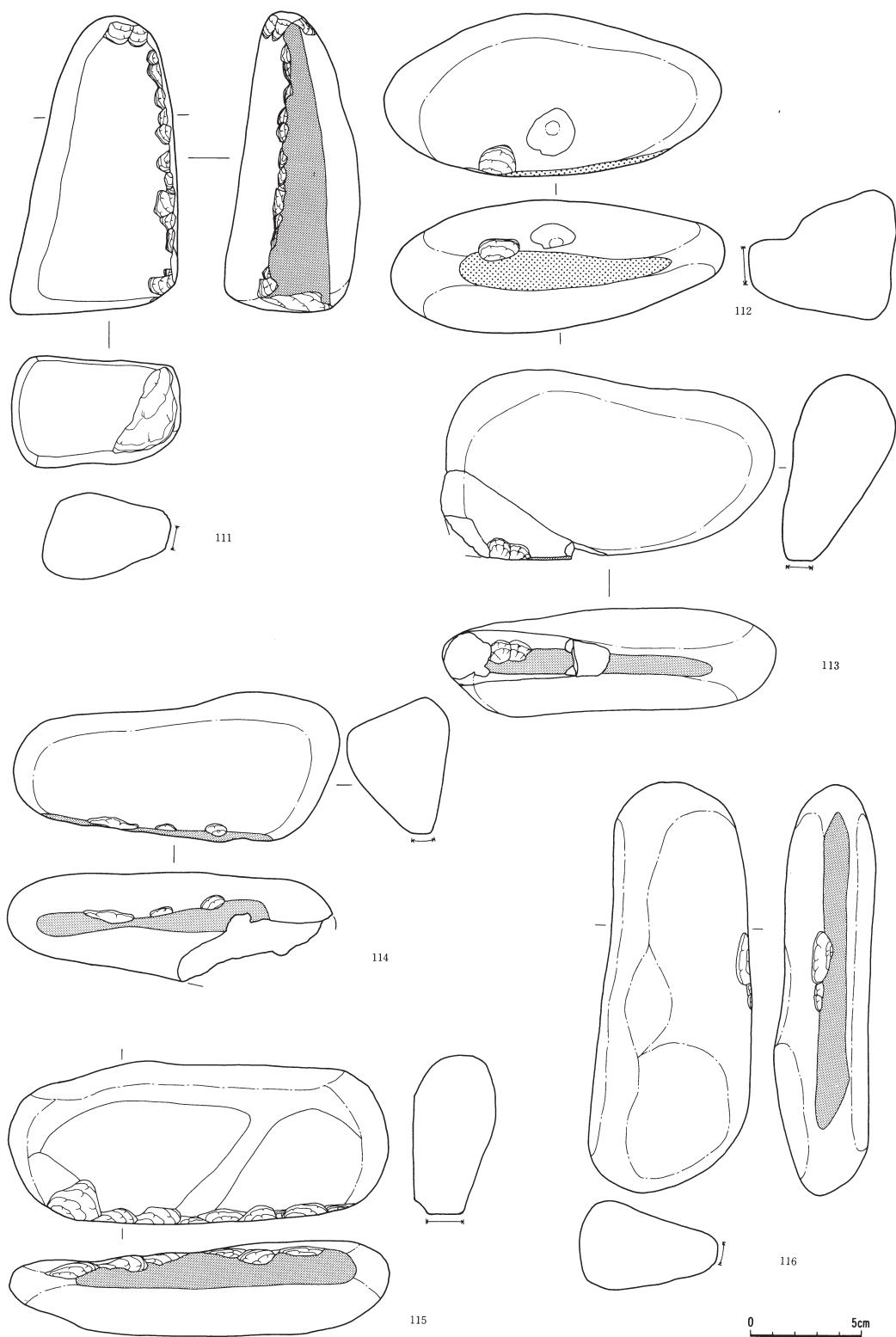
第128図 石器実測図（敲磨器 I-a 類 3）



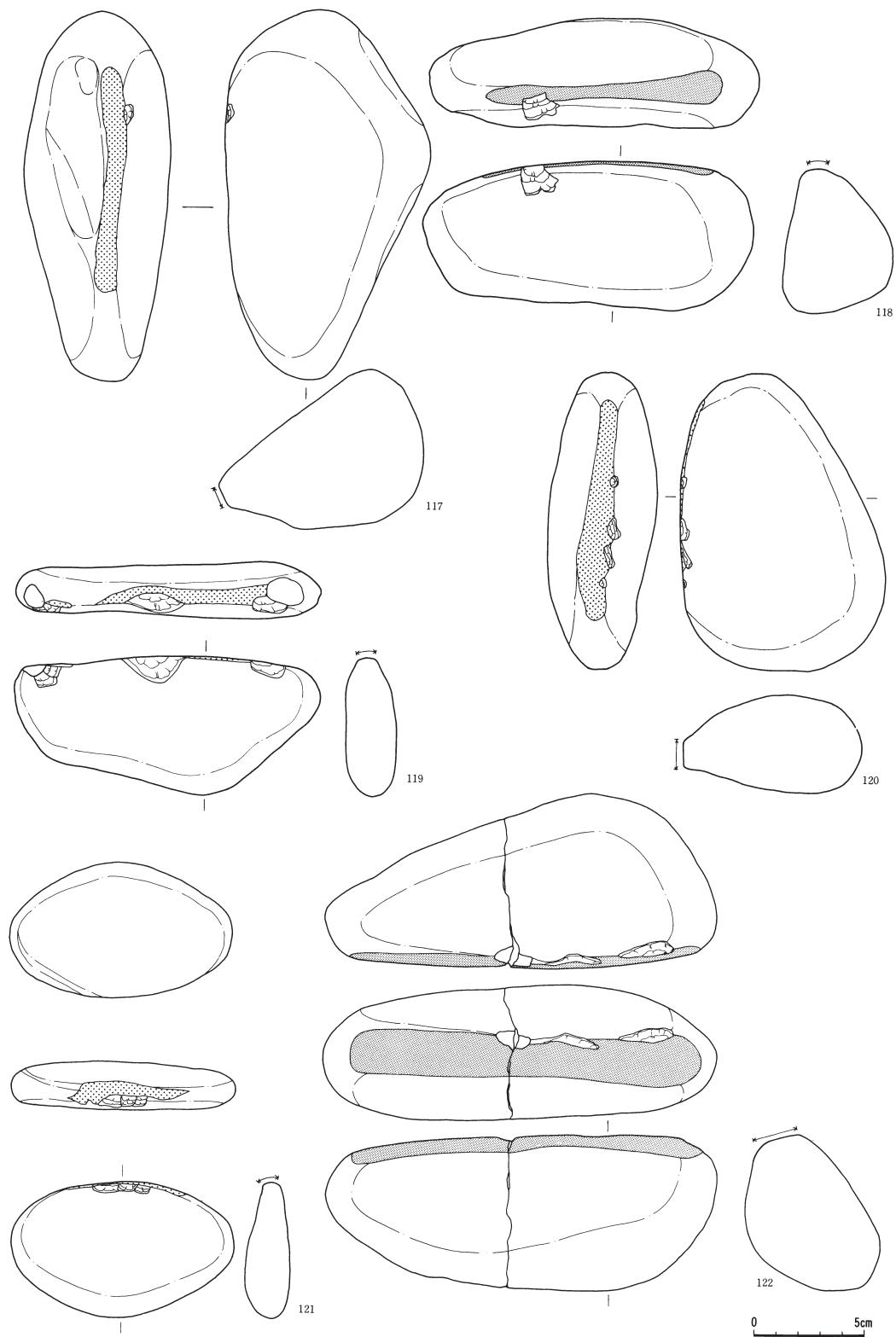
第129図 石器実測図（敲磨器 I - b 類 1）



第130図 石器実側図（敲磨器 I - b 類 2）



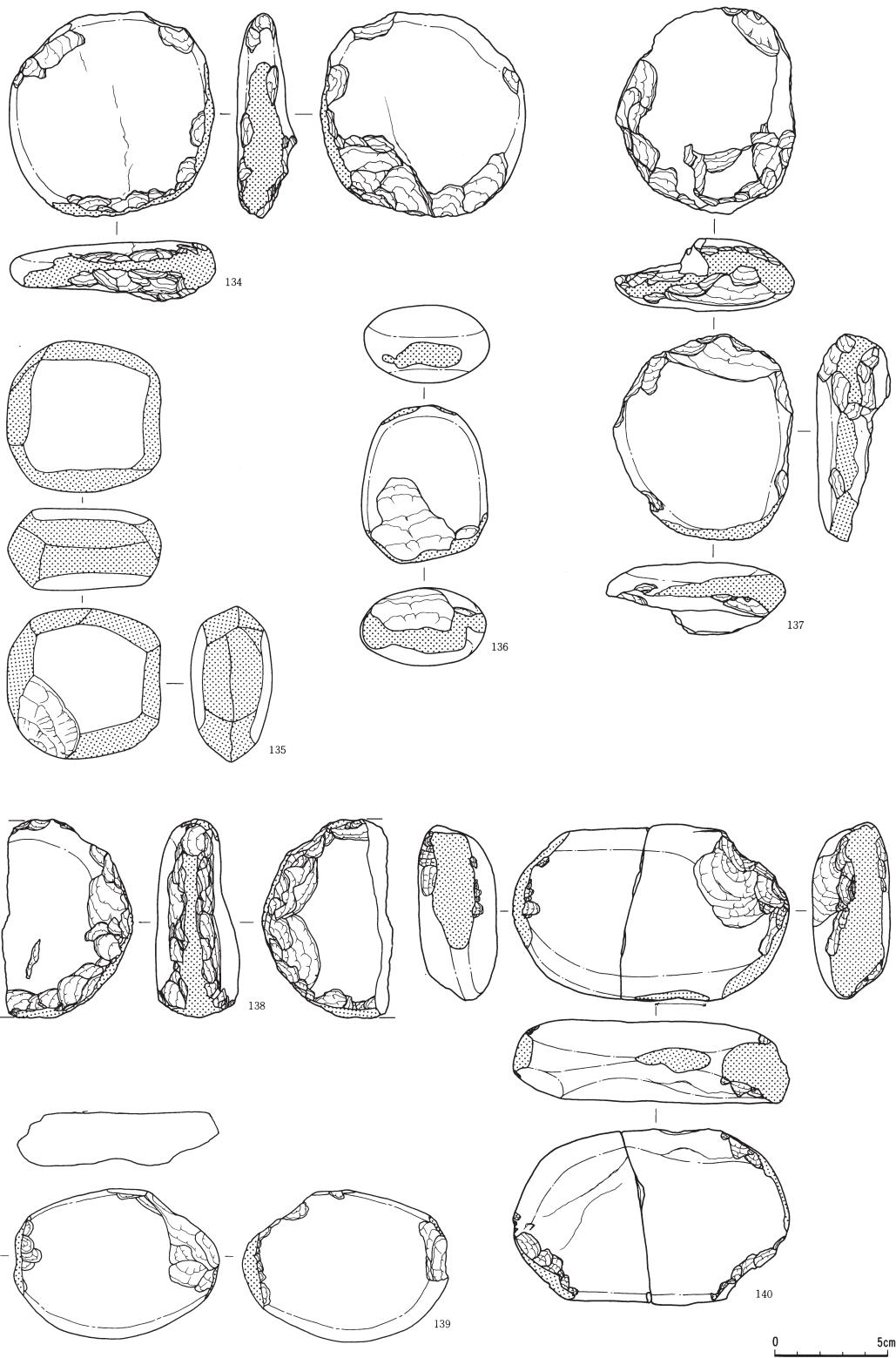
第131図 石器実測図（敲磨器 I-c類 1）



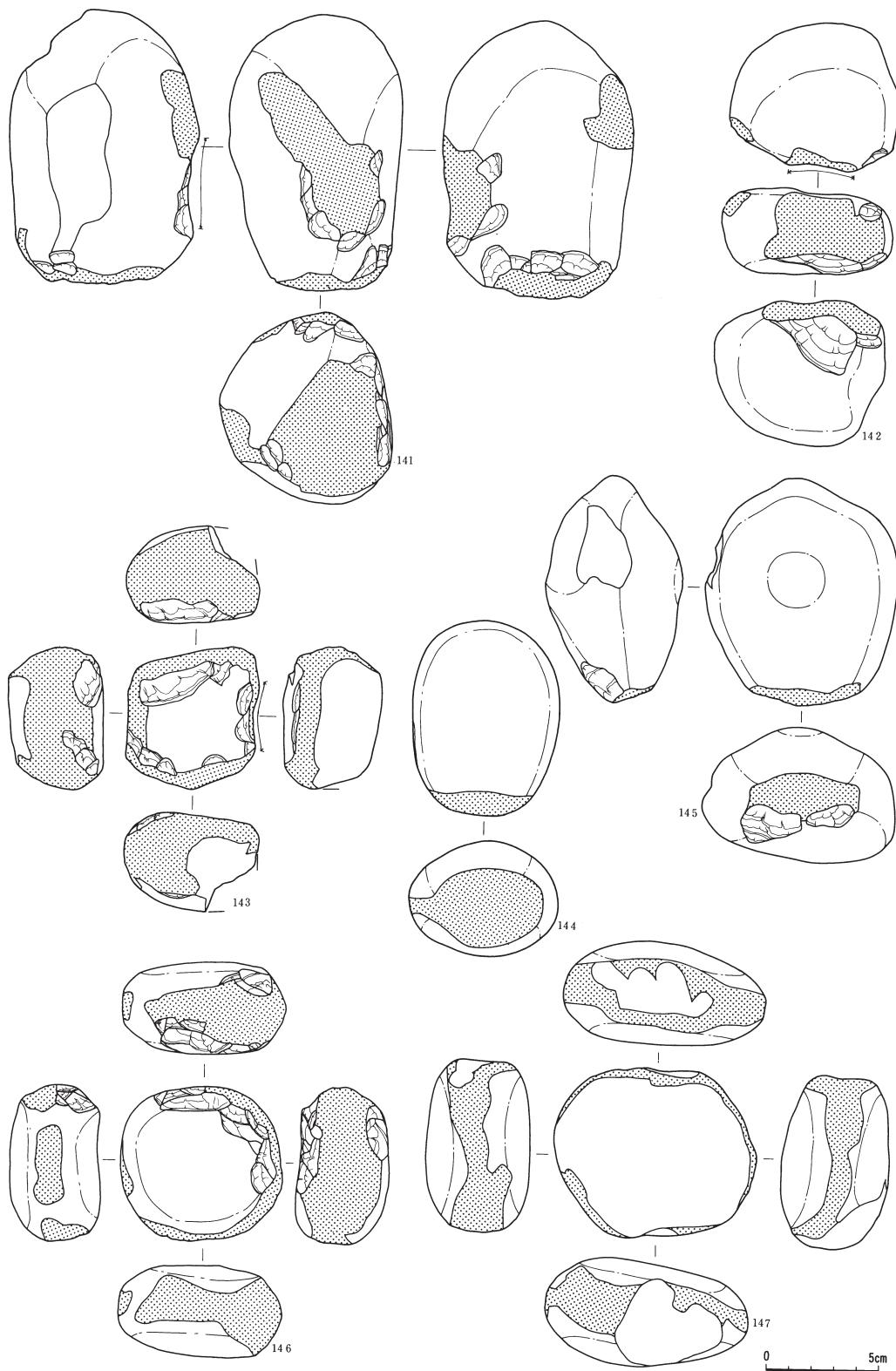
第132図 石器実側図（敲磨器 I -c類 2）



第133図 石器実側図（敲磨器II・III-a類）



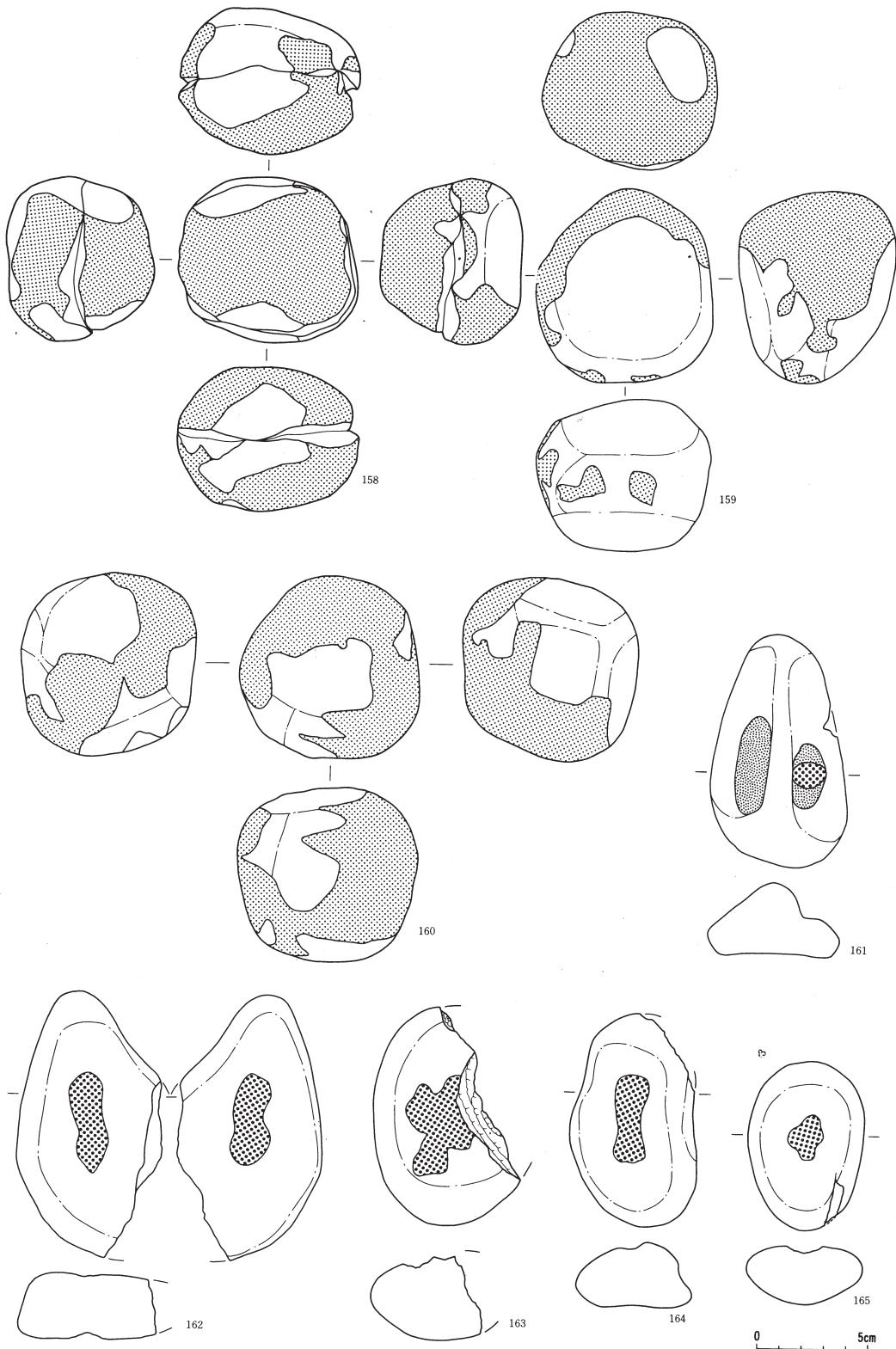
第134図 石器実側図 (敲磨器III - b類)



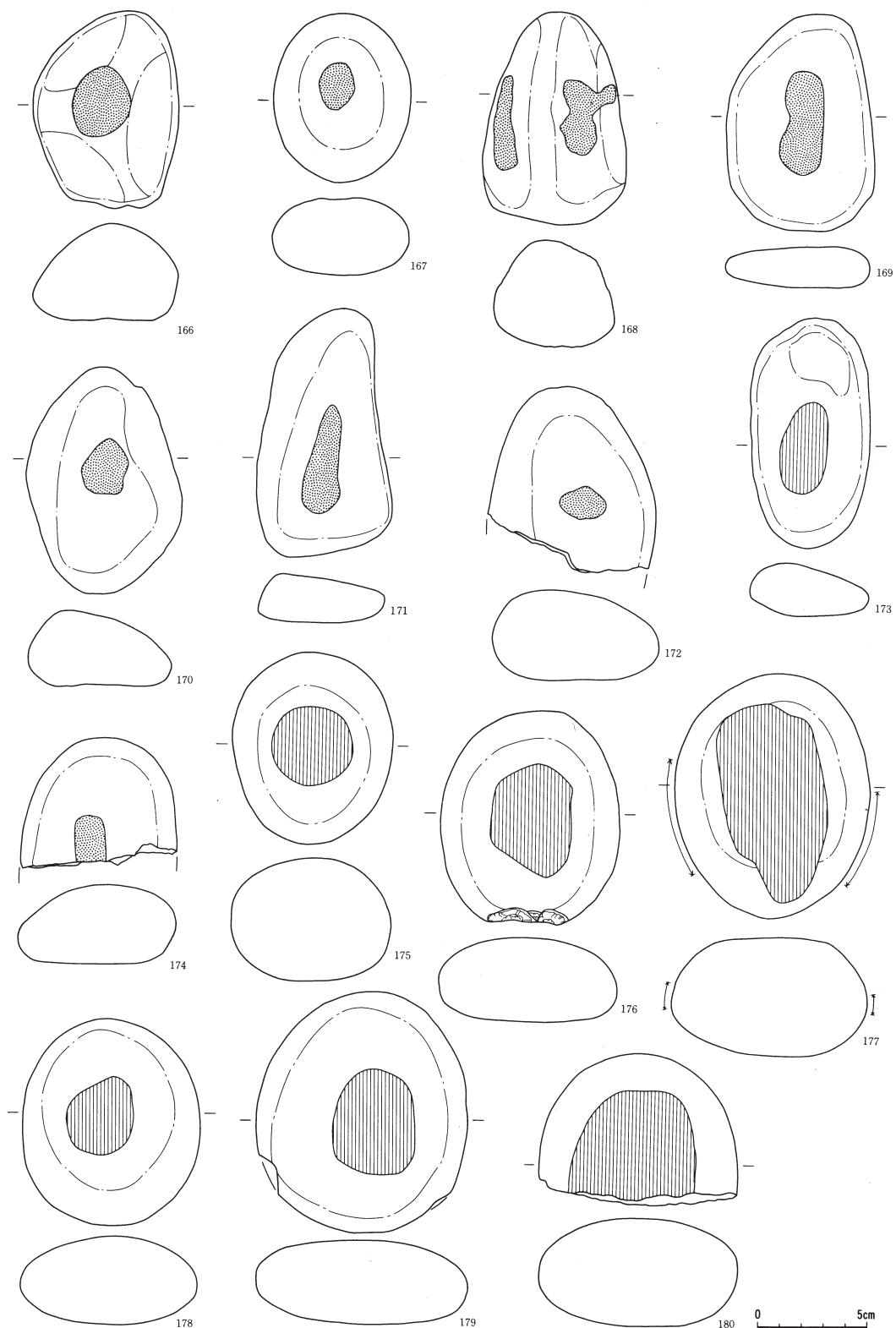
第135図 石器実測図（敲磨器III-c類）



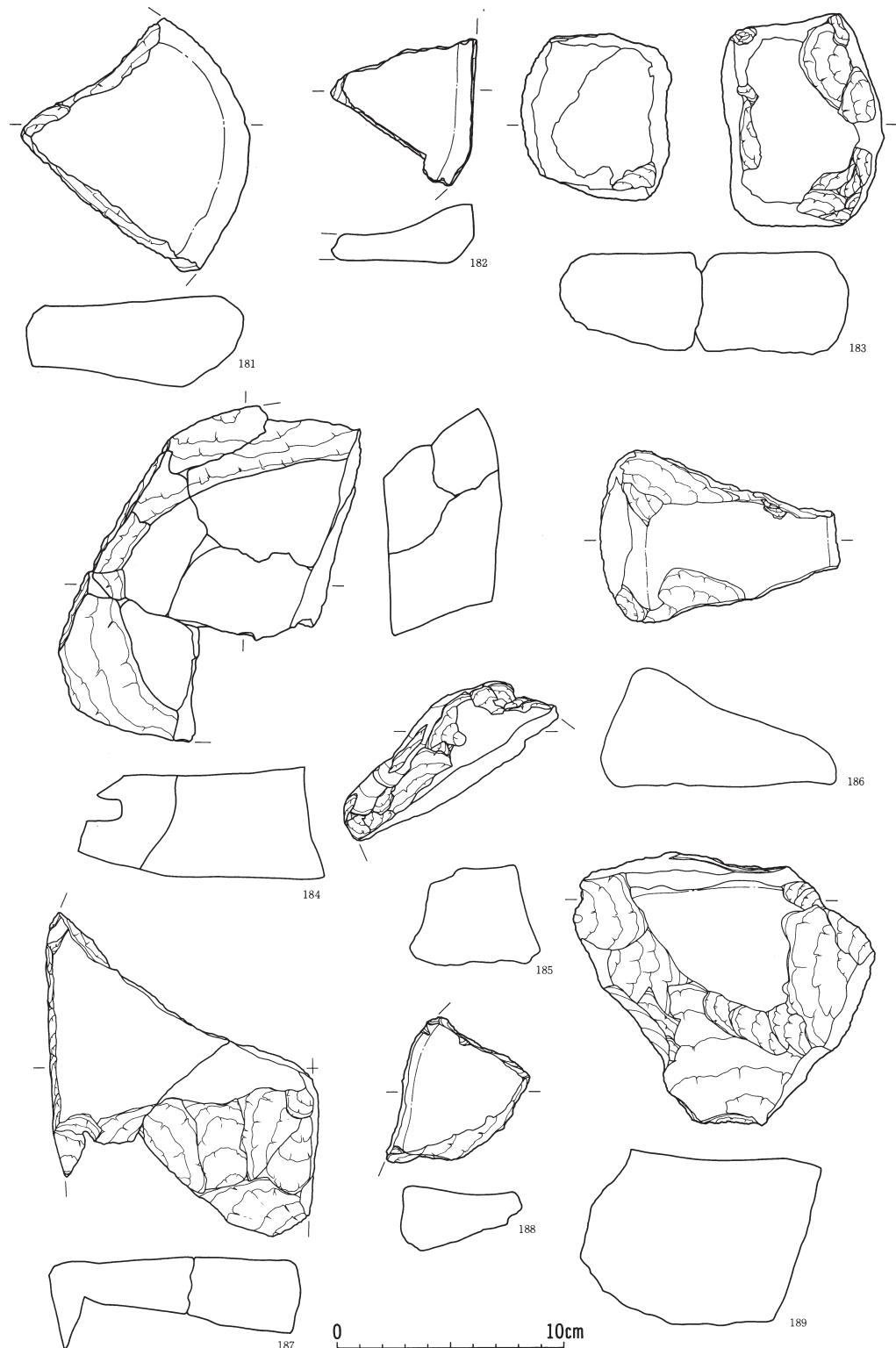
第136図 石器実測図（敲磨器III-c・d類）



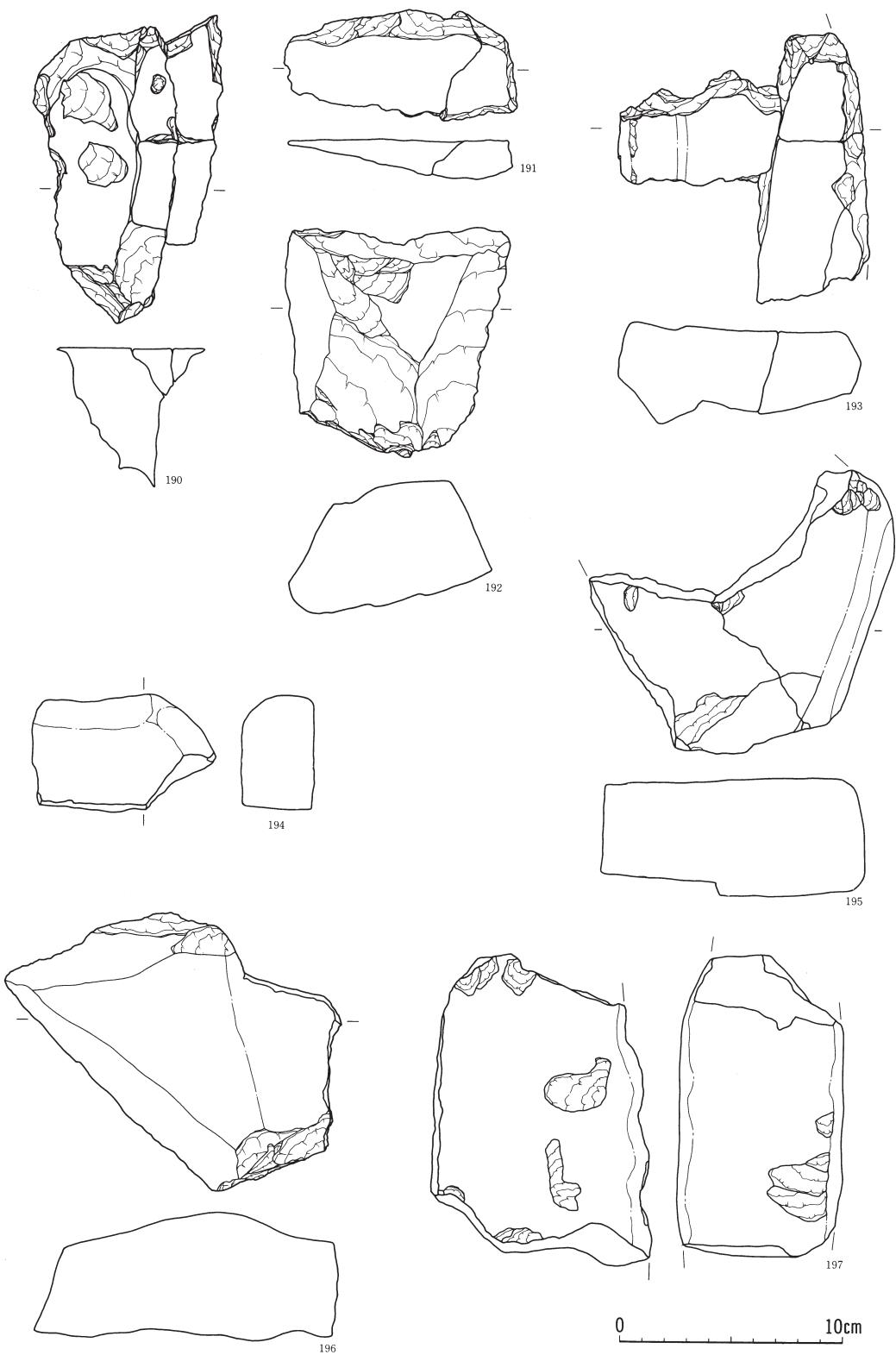
第137図 石器実測図（敲磨器III-d・IV類）



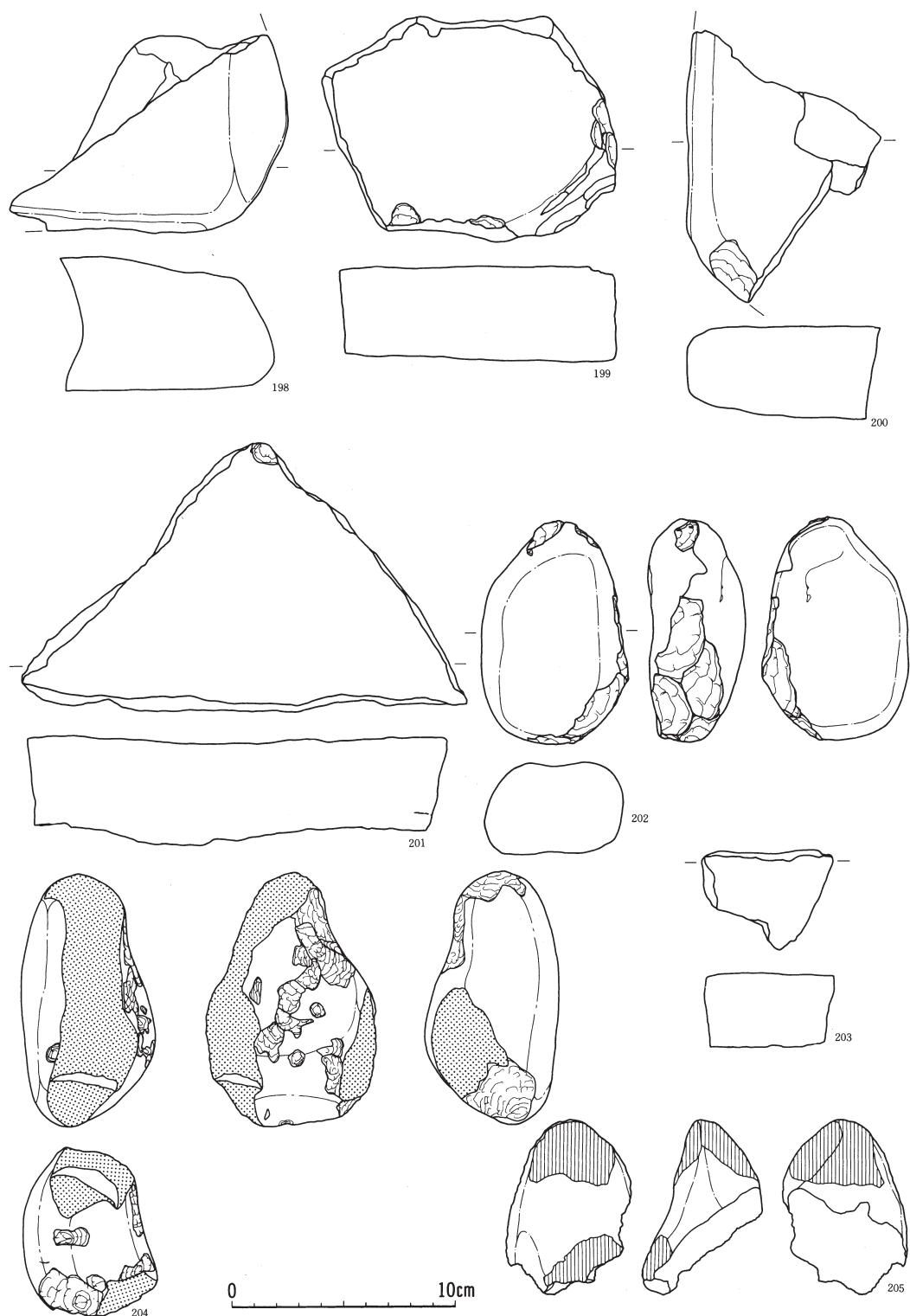
第138図 石器実測図（敲磨器V・VI類）



第139図 石器実側図（敲磨器VI類）



第140図 石器実測図（敲磨器VII類）



第141図 石器実側図（敲磨器VI類・VII類・その他）

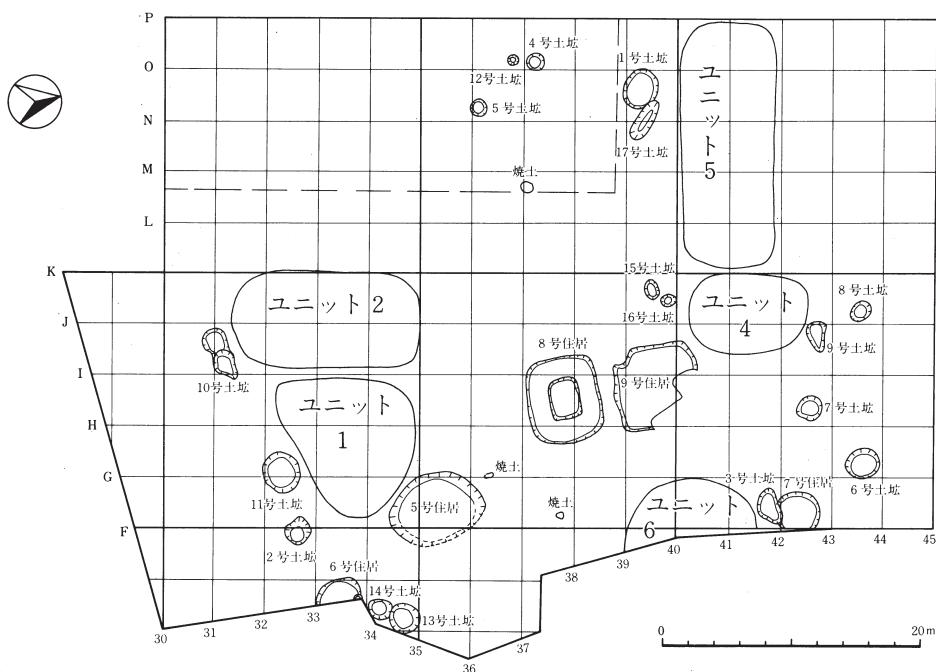
第3節 分析と考察

1. 遺跡の構造

本来遺跡の構造を論ずる場合、その遺跡全体が把握されない限り困難ではあるが、現実的には調査区域内に限定せざるを得ない。ここでも、このような大きな制約はあるが、本遺跡の主体をなす第6群土器、つまり早稲田5類期における遺跡の構造について、若干の検討を加えておく。

遺構の配置

早稲田5類期であることが明瞭な住居跡は、第5号～7号住居跡である。第8号住居跡は、床面・覆土中に土器がなく、また、第9号住居跡は覆土の上層部に若干の早稲田5類土器が含まれていただけである。この中で、第9号住居跡は、多くの石錐を伴っていたことから、少なくとも早稲田5類ないしは赤御堂式期のものであることが推定される。また、両住居跡とも遺構全体を覆う土層や、その土層中に散在する遺物の時期等を考慮するならば、第5号住居跡とほぼ同一、つまり早稲田5類期の可能性が強い。土壌では、第2～4、7～9、11、13～14号の各土壌が早稲田6種類と考えて大過ないであろう。第1号土壌は赤御堂、第17号土壌が長七谷地群、第10号が早稲田6種類と各々考えられ、不明なものは5・6・15・16の各土壌である。この中で第6号土壌は、遺構を覆う土層の関係からほぼ早稲田5類期と推察される。



第142図 繩文時代遺構配置図

住居跡は、規模が大きく壁柱穴をもつ第5・8・9号住居跡と、規模が小さく壁柱穴が不明瞭、もしくはもたない第6・7号住居跡とがあり、更に後者に類似するものには第11号土壙がある。後者は、可能性としては住居跡そのものではなく、作業小屋や物置き小屋等の別な性格をもつものとも考えられる。また、土壙のうち第3号及び第9号土壙は、他の土壙と区別される。それは、第3号土壙の場合、焼土・炭化材とともに多数の焼礫をもち、焼礫を用いた調理用の土壙と考えられるためである。第9号土壙は、焼礫等は伴わないが、その形態及び底面が焼けていることから、ほぼ同じ性格をもった土壙と考えられる。第7号土壙の底面も一部焼けてはいるが、土壙が深いこともあり、第3・9号土壙とは異なると考えられるが、その性格は不明である。他の土壙についても性格は不明である。

以上の各々性格の異なると考えられる住居跡・土壙が早稻田5類期のものと考えられるが、遺構配置図からも明らかなように、非常に近接するものや切り合うものもあり、すべてが同時に存在していたのではない。その中で、同一個体の土器・接合した礫を手掛けたりすると、同一個体の土器があり、破損した石斧が接合した第11号土壙と第14号土壙、敲磨器類とした三角柱状磨石が接合した第5号住居跡と第13号土壙、更に同一個体の土器をもつ第6号住居跡と第13号土壙があり、同時性も含め一応注目されよう。しかし、むしろ注目されることは、同時存在したものではないにもかかわらず、規模が大きく壁柱穴をもつ本来的な住居（第5・8・9）が構築された場を中心に、その南北両側に規模の小さな住居・調理場としての土壙、性格不明な土壙が並んでいる点にある。つまり、ある程度用途に応じた「場」が設定され、それが守られていたことであろう。

遺物の分布

第143図は、土器・石器（自然礫を含む）の分布状況である。ただし全遺物数によるものではなく、遺物番号を付して取り上げたものの数量に基づいたものであるが、その概略は把握し得るであろう。結論を述べるならば、遺物の集中部分と遺構は全く重複しないのである。

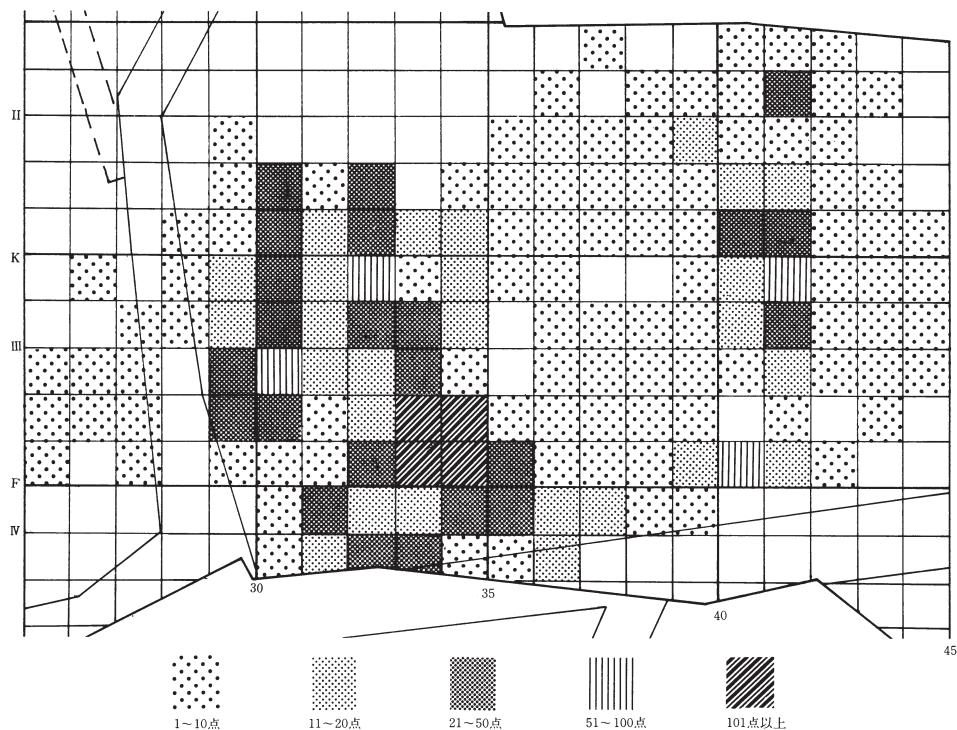
土器は遺物集中部分に限らず、ほとんどが小破片で、押しつぶされた状態のものではなく、異なる個体の土器が混在していた。この傾向は、特に大グリッド30において強くうかがうことができた。一方、復原し得ないまでも、同一個体がある程度まとまりをもって分布していた場所が3か所ある。これらを次のように「ユニット」の名称を付し、各ユニットおよび住居空間である35（F-39を除く）における主な石器の個々のあり方、及びユニットの組成等の概略についてみることにする。（第13表、第153～155図）。

ユニット1 F・H-31～34

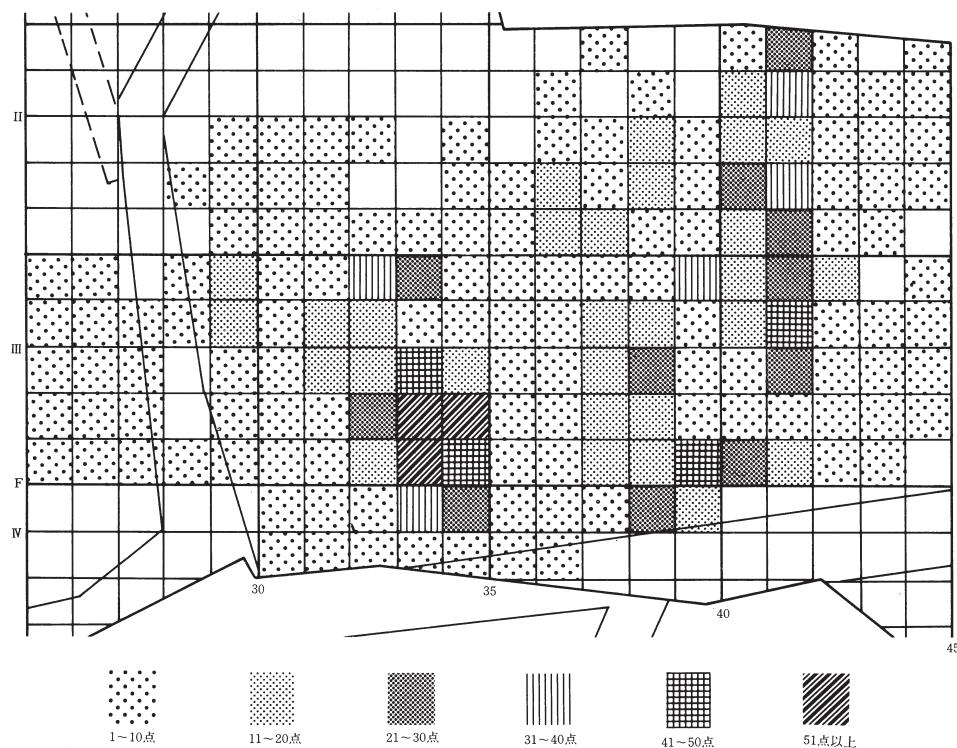
ユニット2 I・J-31～34

ユニット3 F・L-29～30

土器の分布



石器（礫を含む）の分布



第143図遺物分布図

ユニット4 I・J - 40~42

ユニット5 K~O - 44~41

ユニット6 F - 39 - 40

なお、上記ユニットのうち、ユニット3は第8群土器 早稲田6類 であるため、ここでは除外する。また、ユニット2は、若干数の第8群土器が混在し、更にユニット5では、特にM~Oにかけて第2群土器 日計式土器群 及び第8群土器も多く遺存していた。したがって、以下に述べる様相は、本来的なものとは若干異なるものである。また、ユニット6は、その大半が東側斜面に広がっているものと考えられ、歴史時代の第2号住居跡によっても一部破壊されているため、石器組成等は不完全なものとならざるを得ない。したがって、以下述べることは、大まかな傾向でしかない。

第13表 ユニット等主要石器組成表

	ユニット1		ユニット2		35 III		ユニット4		ユニット5		ユニット6		第5号住		第8号住		第9号住	
	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損
石 鎌	17	2	5	6	0	0	1	3	2	1	6	0	0	0	1	1	0	0
石 槍	4	14	1	2	3	7	1	4	3	4	3	8	0	0	1	1	0	0
石 匙	13	22	0	7	8	8	2	7	1	5	4	4	1	0	0	1	1	0
石 斧	2	12	1	2	5	5	0	6	1	5	3	1	0	2	0	0	2	1
石 鍤	5	2	3	0	11	1	26	7	5	7	0	0	0	0	0	0	10	0
三角柱状磨石	5	39	3	9	10	12	4	12	3	15	2	7	1	1	0	1	0	1
敲 石(皿)	4	0	0	6	2	1	6	8	9	3	1	3	2	1	0	2	1	1
石皿(台石含)	0	6	0	3	0	3	0	3	0	3	0	2	0	1	0	0	0	1
計	50	91	13	35	39	37	40	50	24	43	19	25	4	5	2	6	14	4
合 計		141		48		76		90		67		44		9		8		18

石鎌 第8号住居内から完形・破損各1点出土した以外、35からは全く出土していない。完形ないし略完形品はユニット1に17点、次いで同6に6点、同2に5点と多く、ユニット4及び5には1~2点で非常に少ない。破損品はユニット1に2点、同2に6点、同4に3点で完形品の場合と異なっている。

石槍 第8号住居跡内から完形・破損各1点出土したが、住居跡を除く35では完形品3、破損7点である。各ユニットとも完形品は3~4点であるが、破損品はユニット1が特に多く、次いでユニット6・35となる。ユニット2・4・5には少ない。

石匙 第5・9号住居跡から完形品が各1点、第8号住居跡から破損品が1点出土している。35では、完形8点・破損8点であるが、その分布には片寄りがみられる。ユニット1では、完形・破損とも多いが、ユニット2には、破損品は7点あるが完形品がない。ユニット4~6では、各々3ないし4点の完形品をもつ。ユニット4は、同3とともに同1に次いで破損品が多い。

石斧 第5号住居跡に破損品2点、第9号住居跡では完形品2・破損品1点出土している。住居外の35では完形品5点、破損品5点で、特に完形品の点数は他に比べ多く、注目される。ユニット1では完形2点・破損品12点、同4は破損品のみ4点、同5は完形品1・破損品5点、

しかし同 6 は完形品 3 点・破損品 1 点であり、ユニットの全容が不明であるにもかかわらず完形品の多いことが注目される。

石錘 第 9 号住居跡から 10 点出土したが、住居跡外の 35 では完形品 11 点・破損品 1 点出土し、ユニット 4 での完形品 26 点・破損品 7 点に次ぐ。しかしながら、ユニット 1 では完形品 5 点・破損品 2 点、同 2 では完形品 3 点、同 5 では完形品 5 点・破損品 7 点、更に同 6 には全く遺存しない。

三角柱状磨石 第 5 号住居跡から完形・破損品各 1 点、第 8 ・ 9 号住居跡から破損品各 1 点出土した。住居跡外の 35 では完形品 10 点・欠損品 12 点出土したが、完形品の多いことは群を抜く。この点、ユニット 1 は完形品 5 点・破損品 39 点、同 2 は完形品 3 点・破損品 9 点、同 4 は完形 4 点・破損品 12 点、同 5 は完形品 3 点・破損品 15 点、同 6 は完形品 2 点・破損品 7 点であり、破損品ではユニット 1 が群を抜いて多い。

敲石 第 5 号住居跡に完形品 2 点・破損品 1 点、第 8 号住居跡からは破損品 2 点、第 9 号住居跡からは完形・破損品各 1 点が出土している。住居跡以外の 35 では、完形品 2 点・破損品 8 点、同 5 は完形品 9 点・破損品 3 点、同 6 は完形品 1 点・破損品 3 点で、ユニット 4 と 6 で完形品の多いことが注目される。

石皿・台石 すべて破損品であり、非常に小さく、到底使用に耐えないものも含め 60 点強であるが、特に分布に差はみられない。

以上のように、第 5 ・ 8 ・ 9 号住居跡、住居跡を除く 35 、ユニット 1 ~ 6 について、主な石器の組成、及び各石器の完形・破損品の数量について概観した。これによると、各ユニット等に異なる特徴をみることができるようである。

ユニット 1 石鎚は、完形品が圧倒的に多く、石匙は完形品も多いが欠損品はそれ以上に多い。更に特徴的なことは、石槍・石斧・三角柱状磨石の破損品が特に多いことである。土器は数多くの個体の小破片が混在する。

ユニット 2 数量も少なく余り特徴はないが、全般に破損品が多い。土器はユニット 1 と同様、数多くの個体の小破片が混在する。

ユニット 4 全般的に破損品が多いが石錘が非常に多いこと、及び敲石が他に比べて多い点が注目される。土器は、前 2 者と異なり、同一個体のものがある程度のまとまりをもって分布する。

ユニット 5 ここも全般的に破損品が多いが、敲石の完形品が特に多く、また小さなユニットにもかかわらず、石槍の完形品を 3 点もっている点は注目される。土器は、同一個体の破片がある程度のまとまりをもって散在する。

ユニット 6 ユニットの一部分でしかないが、その割には石鎌がユニット 1 に次いで多く、しかもすべて完形品であること、また同様に石槍・石匙・石斧の完形品が多いといえる。土器は、同一個体のものがある程度まとまって散在していた。

35 遺物量は、上記各ユニットに比べて極端に少ないが、石器のあり方は非常に特徴的である。つまり、完形品が特に多い空間なのである。完形品の石斧・三角柱状磨石の数は、各ユニットに比べて特に多く、また、石匙はユニット 1 に次ぎ、石錐はユニット 4 に次ぐ。石槍の完形品も他と同数である。その一方で石鎌が全くない点も注目される。

以上のこと総合すると、ユニット 1 及び 2 は、各種遺物の捨て場と考えて大過ないであろう。ユニット 4 も同様と思われるが、石錐が特に多く、単純に捨て場とは断定できない。ユニット 5 も同様で、完形の敲石類が多く、単純な捨て場とはいえないようである。ユニット 6 は破損品が多いが、調査し得た面積は他に比べて非常に少ないと考えると、むしろ各種石器の完形品が多いといえるであろう。狩猟具である石鎌・石槍、加工具である石匙・石斧の多いことは、調理用の第 3 号土壙が近接して存在することと、何らかの関係を有するものと思われる。

次に、各ユニットの関係であるが、土器の接合ないし個体分け、破損した礫石器ないし礫の接合等と種々あるなかで、ある程度行い得たのは礫石器の接合だけであり、それもわずか 30 数例でしかない。したがって、各ユニットすべてが同時に形成されたものか否か、またその関係等については、極めて不十分なものとならざる得ないが、若干の可能性について記しておく。

礫石器の接合例が 30 数例あるなかで、数多くの接合によってユニットの関係を明確に把握し得るものはないが、以下の例を注目したい。

1 . 第 5 号住居跡内覆土・ユニット 1 及び近接グリッド (F · G - 34 · E - 33) ユニット 4 ないし 5 に近接する K - 42 グリッド、更にユニット 6 (F - 40) の各グリッドから出土した石皿の接合例

2 . ユニット 1 (G - 33) と、ユニット 6 (F - 40) の石皿の接合 3 例。

3 . ユニット 4 (J - 41) と、ユニット 6 (F - 41) の三角柱状磨石の接合例。

4 . ユニット 1 (H - 31 · G - 33) と、ユニット 4 (I - 41) の石斧の接合例。

5 . ユニット外の D - 33 とユニット 6 (F - 41) の敲石の接合例。

6 . ユニット外の D - 33 とユニット 4 (J - 40) の三角柱状磨石の接合例。

以上 6 項目、9 例の接合例から、ユニット 1 · 4 · 6 がある程度関連するものと考えられよう。つまり、先に述べたように、ユニット 1 は捨て場であり、ユニット 4 も同じく捨て場と思われるが、石錐・敲石を多くもっていることから、単なる捨て場ではなく何らかの作業場と考えられ、また、ユニット 6 は屋外の調理用土壙と関連すると思われるなど、各ユニットはその性格を異にしており、そしてこれらはほぼ同時期に存在した可能性をもっているといえよう。

ユニット2・5及び住居跡や土壙と各ユニット等の関係は、接合例が少ないため不明である。早稻田5類期における本遺跡の集落構造は、不充分な点も多いがほぼ以下のよう要約される。

1. 住居空間を中心とし、その南北両側に調理場・作業場・作業小屋(?)・捨て場が構成されている。

2. 住居の周辺は、遺物量が非常に少ないにもかかわらず、多数の完形石器が残されており、また、屋外の地床炉も存在することから、広場としての性格をもつと考えられる。この広場には西側の35も含まれるであろう。

3. 各遺構及びユニットは、すべてが同時存在したものではないが、各場の設定にしたがっており、本遺跡の早稻田5類期は、長期間断続したものではないと思われる。これは土器の観察結果とも矛盾しない。

4. ユニット1・2は捨て場、同4・5は捨て場の性格も一部もつが何らかの作業場、同6は調理場と関連した作業場で、各々性格が異なる。

5. 若手の接合例からするならば、ユニット1・4・6は同時存在の可能性をもつ。

(三 宅 徹 也)

2. 土器

本遺跡から出土した9群に及ぶ縄文土器のなかで、第3群(寺の沢式類似資料、物見台式類似資料)、第4群(ムシリ1式)、第7群(長七谷地群)土器を除く各群土器について若干述べておく。なお、第9群土器については2~3の類について関連する頃で述べることにする。

第1群土器

縄文時代草創期の爪形文系土器である。

当初は、早稻田5類に爪形文があるという記載があり(佐藤他1961c)、1点のみの出土でもあったため、早稻田5類土器のなかのバリエーションと考えた。しかし、胎土・器厚が異なること、及び早稻田5類における爪形文は、指頭圧痕文ないしその一部の可能性が強いこと等から、むしろ草創期のものと推定した。

本県における類例は鴨平(2)遺跡だけであるが、本遺跡例は金雲母を全く含まない点において大きく異なる。また、本遺跡の爪形は直線的であり、鴨平(2)遺跡よりやや長く、その間隔はむしろ狭い。反面、爪そのものによる施文ではない点や、爪形文の列間については鴨平(2)と同様である。

第2群土器

本群土器は、外側に削がれた口唇部形状、この口唇部外側に施文された刻目、更には口唇部に平行に施文された沈線文、胎土等、種々の面において鴨平(1)遺跡第層出土の土器に類似する。つまり、馬目氏が「東北系羽状縄文土器」と称したものである。この種の縄文及び沈線

文を施文した土器は、通常、日計式押型文土器に伴出するが、本遺跡の場合これは出土していない。

鶴平(1)遺跡からは1個体単独の出土であるが、座散乱木遺跡（石器文化談話会1978）や本遺跡の場合、ある程度の個体数にもかかわらず日計式押型文土器が出土していない。このことは、関東地方の撚糸文系土器における押型文土器伴出の有無と同様のこと、つまり「日計式押型文土器」と「東北系羽状繩文土器」を共伴する「日計式土器群」以前に、「日計式土器を伴わない土器群」の段階が存在する可能性が強いと考えられよう。この段階を相原淳一氏は「原日計期」と称したが、現在のところこの段階に相当すると考えられる繩文施文の土器と、日計式土器群における繩文施文の土器との差異が明瞭とはいえないようである。^(注6)

本群土器に伴出すると考えられるものに、魚骨回転文土器がある。この種の土器は、これまでのところ赤御堂式期をさかのぼる例はないが、胎土、焼成、魚骨回転文直下の繩文等の面からは、本群土器に伴出したと考えて大過ない。この施文の組合せは、新納屋(2)遺跡（青森県教育委員会1978d）から出土した、縦位の押型文と繩文を交互に施文した例と相通するものがある。この新納屋(2)遺跡でも、通常の日計式押型文は伴出していないようであり、注目される。

なお、第9群a類とした口縁部の小破片も、その繩文・胎土等本群土器に近似する。また、日計式土器群及びその関連資料中にも、口唇部が内側に削がれた例も若干みられる。

第5群土器

本群土器は、植物性纖維を含まない尖底の深鉢形土器で、器面の内外に斜行繩文を施文していることから、赤御堂式土器に含まれよう。しかし、繩文の施文は、赤御堂貝塚（八戸市教育委員会1976）や長七谷地貝塚（八戸市教育委員会1980、青森県教育委員会1980f）などのようない、単一方向の斜行繩文は少ない。繩文の施文方向が一定しないものが多く、また、羽状繩文を構成するものが多々みられる点や、綾杉状の繩文もあることなどは、長七谷地2号遺跡（八戸市教育委員会1982b）の第5群土器と共に通するといえ、村木氏が推定したように、早稻田5類への移行期と思われる。

第6群土器

早稻田5類に相当する土器である。昭和57年度に実施した売場遺跡の調査で、更に良好な資料を得ているため、ここでは、本群土器の特徴を列記し、これに該当する他遺跡の資料と若干の対比を行うに留める。

第6号土器の特徴

1. 平底の深鉢形土器で、平縁が圧倒的である。
2. 底部には、外周縁が張り出すものや上げ底のもの等も多い。
3. 胎土には、植物性纖維・白色凝灰岩粒・沼鉄・砂粒を含む。全般的にもろい。

4 . 繩文の施文は、器形の成形と相前後して行われることが多い。

5 . 口縁部文様帯を構成するものは約7%と少ないが、その中にあって、繩文原体の側面圧痕を横位に数段施文したものが多い。

6 . 使用される繩文原体は0段多条によって作られたものが多い。種類は、2段単節の繩文が50%強、綾杉状を呈する繩文が40%を占め、その他直前段反撲によるもの、結束第1種による羽状繩文・短軸絡条体等の各種がある。

7 . 繩文原体の回転方向は、全面に同一方向を探るものは少なく、その方向を変えてやや乱雑な羽状繩文を構成するものが多い。基本的には、1種類の原体を用いて施文する。

8 . 器内面に繩文や条痕文を施文するものがあるが、その施文は部分的である。

9 . 口唇部に何らかの施文があるものは約27%、底部周縁に指頭圧痕文があるものは約40%である。

おおむね以上の特徴をもつが、主として5・6・9の項目について若干の対比を行う。

長七谷地貝塚第2次調査（青森県教育委員会1980f）における大湯氏の観察によると、口縁部文様帯をもつものが約5%、口唇部に施文のあるものが約30%で、本遺跡と類似する。ただし、底部に指頭圧痕文のあるものは、掲載資料16例中1例で、非常に少ない。表館遺跡（青森県教育委員会1981a）では、14例中8例に指頭圧痕をもつ。大湯氏によると、長七谷地貝塚第一次調査（青森県教育委員会1980f）における貝塚及び貝塚周辺の赤御堂式土器では、口縁部文様をもつものは約20%、口唇部に施文のあるものは約60%で、器面に施文される繩文原体は、0段多条によらない通常の単節がすべてであるという。これに対し、長七谷地2号遺跡での赤御堂式土器は、村木淳氏の観察によると、口縁部文様をもつものが少ないと、また、口唇部に施文のあるものは32%、繩文原体では0段多条による単節の繩文が15%、撫り戻し（綾杉状）14%、通常の単節63%という比率が得られている。村木氏が、この結果から尖底を呈する長七谷地2号遺跡第群土器を、赤御堂式から早稻田5類への移行期と位置づけた。和野前山第5群は、まさに長七谷地2号遺跡第群に相当するものであるが、これを和野前山第6群を含めて比較すると、赤御堂式土器に比べて口縁部文様をもつものが減少、口唇部に施文するものが激減し、0段多条による繩文及び綾杉状の繩文の出現と増加、という傾向がうかがわれるるのである。

綾杉状の繩文の占める比率は、前述のように赤御堂式の後半期に属する長七谷地2号遺跡第群土器では14%、早稻田5類に属する本遺跡第6群土器では約40%を占めているが、このほか唐貝地貝塚では16%、坊主沢遺跡では56%、早稻田貝塚では15%という早稻田5類土器における比率が示されている（佐藤他1961c）。これに関する限り、本遺跡例は坊主沢例に近似するといえるが、唐貝地例や早稻田例のように比率の少ないものが早稻田5類の中でも古く、長七

谷地 2 号遺跡例に近似した位置を与えられるか否かは明らかでない。それは、早稻田 5 類に後続すると考えられる長者森 群 a 類（青森県教育委員会1983c）や長七谷地 群には、綾杉状の繩文が全く存在せず、また下田代納屋 B 遺跡（青森県立郷土館1976）の早稻田 5 類では含まれていないためである。つまり、綾杉状の繩文は、赤御堂式の後半に使用され始め、早稻田 5 類のある段階まで盛行するが、以後減少・消滅すると考えられるのである。本遺跡の場合はその比率が高いことから、早稻田 5 類のなかでも中葉以前と考えたい。

口縁部文様帯が繩文原体の側面圧痕によるものがある。本遺跡例ではすべて横位であるが、坊主沢例・長七谷地貝塚 1 次・2 次例・表館例には、このほか斜位・縦位のものがあり、各々組み合わせて施文している。しかし、長七谷地 群や、長七谷地 群と早稻田 5 類の間に位置づけられた長者森遺跡 群 a 類の文様構成とどのように関連するものであるかは、文様構成をなす資料自体が少ないため不明といわざるを得ない。

赤御堂式と早稻田 5 類土器とは、前者は植物性纖維を含まない尖底の土器、後者は植物性纖維を含む平底の土器という大きな違いがある。しかしながら赤御堂式土器の後半期、つまり早稻田 5 類期への移行期が示されたことによって、非常にスムーズな変遷過程をたどっていることが理解される。それは、口縁部文様帯や口唇部文様をもつものの減少化、0 段多条による繩文原体や綾杉状を呈する繩文の出現と盛行という面において代表され、また、土器の成形過程等も共通する点が多いようである。先に若干の対比を行い、その違いは十分把握されるものの、このような観点からするならば、両型式は共通した基盤に立脚した 1 つの土器群（文化）としてとらえることが可能である。^(注8) しかしながら、この総括された土器群中における細別は、先に掲げた文様をもつものや繩文の種類等の構成比率によっては変遷過程をある程度たどることができるものの、構成比を基準としての細別型式の設定は今のところ困難であり、更に分析が必要であろう。現在のところ、底部形状と植物性纖維含有の有無による赤御堂式・早稻田 5 類の両細別以外、有効な手段は見当らない。

第 8 群土器

早稻田 6 類に最も近似するものである。この早稻田 6 類は、春日町式土器（児玉他1954）の細分を基に、6 a 類（器面全面に半截竹管押し引き文を施文するもの）、6 b 類（竹管文が各部に分離するもの）、6 c 類（繩文のみのもの）と細分され、後にこれに尾駒出土例（竹管文が口縁部の狭い範囲に限られるもの）を加えて、早稻田 6 類は 6 a 類（姉沼）、6 b 類 尾駒と変遷するものとした（佐藤他1961a）。

本遺跡の第 8 群土器は、A 類が 6 a 類に、B₁ 類と B₃ 類が 6 b 類に、B₂ 類が尾駒例に、また、C・D 類は早稻田例にはみられないが、E 類は 6 c 類に各々相当しよう。しかし、遺物の分布状況等から、佐藤達夫氏の推定した変遷とは異なるものがある。それは、第 8 群土器が、A・B₂

・ B₃類を含むユニットと、B₁類を含むユニットに分かれて存在していたためである。A類およびB類の個体数は少ないが、B₁類は他の類と大きく異なる点がある。それは、B₁類の押し引き沈線が縄文地文上になされる点と、その押し引きの長さが長い点、更には、基本的な文様構成が若干異なり、押し引き沈線文の間隔が広いなどの諸点である。また、地文の縄文は、結束した通常のLRと0段多条のLRである。一方のA・B₂・B₃類は同一ユニット内であるとともに、押し引き沈線文の長さが短かく、その間隔は密で無文面上に施文されるという点で共通している。したがって、本遺跡では、尾駒例は早稻田6a類と共存したものと考えられる。

早稻田6a類を出土する遺跡は幾つか知られている（佐藤他1961、橘他1977）が、その多くは6b類と混在している。単独と思われるものは姉沼2遺跡（H・A・Maccord1955）であるが、佐藤氏によれば6b類も採集されている。したがって、現在のところ6a類の単純遺跡として良好な遺跡はないが、6b類の単純遺跡としては鷹架遺跡（青森県教育委員会1981c）がある。

鷹架遺跡第 群土器は、成田滋彦氏によってA・羽状縄文のみのもの、B₁・無文面上に押し引き沈線文をもつもの、B₂、B₃・縄文の地文上に押し引き沈線文をもつもの等に細分され、

群Aは早稻田6c類、群Bは早稻田6b類に相当するとされた。そして、群A、B類は共存の可能性はあるとしながらも、長七谷地 群における羽状縄文との関係から、長七谷地

鷹架 A 鷹架 Bと変遷すると想定したのである。しかし、群A類に結束による羽状縄文のみを当てていること、及び変遷を想定するに際し、文様の有無に基づいていることは問題であろう。本来 群に含めるべきと思われるものが 群E・G類中に散見される。群A・B類は装飾されない土器と、装飾された土器の違いであって共存するのであり決して時間差をもつものではない。また、群B類も、更に地文の有無・地文の種類によって分けられており、この中には、口縁部文様帯の広いものと狭いものがある。後者は、佐藤達夫氏の変遷からするならば尾駒例に相当しうが、器形・縄文等を含め斎一性が強く、分離し得る可能性はない。したがって鷹架 群A・B類は單一型式であると考えられよう。

鷹架 群A・B類によって把握される型式の特徴（以下鷹架 群とする）は、0段多条による単節の縄文・結束第1種羽状縄文が非常に多く、これに少数のループ文が伴う。結節回転文もみられるがその数は不明である。文様は、半截竹管によって長目に引かれた押し引き沈線文を主体とし、これに円形竹管文を配するものが多い。竹管押し引き文様の構成は、波状口縁に沿った波状、平行、山形等である。器形は、4ないし6波状及び平縁で鋭角な尖底をもつ。

和野前山8群土器にあって、この鷹架 群に近似するといえるのは、8群B類とした羽状縄文を地文として、長目に引かれた押し引き文により文様構成をしたもの1例だけである。ただし、文様構成のあり方や円竹管文を施文しないこと、膨らみをもつ底部形状等の違いはある。

このように、早稻田 6 類は、鷹架 群と和野前山 8 群（一応 B 類及びこれと同一ユニットのものを除く）とに細分され得ることになろう。尾駫例（尾駫出土土器そのものということではなく、口縁部の極く狭い範囲に施文されるものの意味）は、両者に含まれるものである。佐藤達夫氏の変遷にしたがえば、和野前山 8 群 鷹架 群となろう。

和野前山 8 群は、押し引き沈線文に多様性がみられ、使用される繩文は、通常の 2 段単節・0 段多条単節・及びこの繩端回転文・ループ文が多く、これに対し鷹架 群では、押し引き沈線による文様は単純であり、繩文は羽状繩文が多く、ループ文は少ない。また、繩端回転文はみられない。

このような特徴をもつ両者が、佐藤達夫氏が考えたように推移するものとした場合、早稻田 6 類に先行する長七谷地 群、及び通常後続する位置を与えられている芦野 群（名久井 1971）・表館式（佐藤 1961b）と整合するのであろうか。

長七谷地 群の特徴は種々あるが、施文される繩文に觀点を置くと、異原体による結束されない羽状繩文を特徴とし、ループ文は伴わない。また、芦野 群では、ループ文や繩端回転文が盛行するとともに竹管文（施文手法は若干異なるが）も盛行している。つまり、結束と無結束のちがいはあるが、鷹架 群は長七谷地類似し、ループ文や繩端回転文の存在から和野前山 8 群は芦野 群・表館式に近似することになり、佐藤氏の想定とは異なる結果とならざるを得ない。

佐藤達夫氏による早稻田 6 類の変遷は前述したように、春日町遺跡における出土状況を前提としたものである。春日町遺跡では、春日町式 A 類土器のうち若干数が最下層の 層中にあり、中間層の 層中に A・B・C 類の 3 者がみられたという。これをよりどころとして、春日町式は、竹管押し引き文の盛行した A 類から衰退した B 類へ、更に、消滅した C 類へという変遷図式が描かれたわけである。しかし、春日町遺跡における出土状況は、果たして層位的に区別されたものと認定し得るであろうか。中間層のあり方、つまり各種が混在するのが本来的なあり方であり、その中にたまたま A 類の極く一部が含まれていたと理解すべきであろう。したがって春日町遺跡の出土状況は、早稻田 6 類の変遷を考える際の根拠とはなり得ないのであろう。

春日町式の中で文様構成をしたものは A・B 類に分けられているが、春日町 A 類が和野前山 8 群に、また、同 B 類が鷹架 群にそれぞれ相当するものであろうか。この問題については、昭和 58 年に調査した表館遺跡が関連すると思われるため、現段階での予測を簡単に述べるに留める。

春日町 A 類の押し引き沈線による文様は、無文面上になされるが、和野前山 8 群 A 類に比べて変化に乏しく、平行線文を主体としている。押し引き沈線文には長めのものと短めのものとがみられ、また同一施文具による刺突文をもつ。春日町 B 類は、繩文の地文上に押し引き沈線

を施文するが、鷹架群に比べて平行線によるものが多く、山形等の文様構成をなすものは少ないようである。また、円形竹管文を配するものはない。繩文は、結束第1種による羽状繩文が多く、通常の2段単節・0段多条による2段単節のほか、ループ文も鷹架に比べて多いようである。春日町式は、鷹架群に後続し、和野前山8群の前段階に位置づけられる可能性が強いといえよう。

以上のことまとめると下記のとおりである。

1. 器面の全面に竹管押し引き文を施文するものは、鷹架群には存在しないようであるが、文様が分離するものや口縁部の狭い範囲に限られるもの等は、各期におけるバリエーションである。

2. 早稻田6類は、鷹架群から和野前山8群へ変遷する。

3. 春日町式土器は、前2者の中間的位置を占める。

4. 和野前山8群B類を含むユニットは、同8群Aを含むユニットよりもやや古い様相を示すものといえる。

(三 宅 徹 也)

3. 石 器

剥片石器

多種多用であるが、その器種の多くは東北地方北部における繩文時代各期を通じて一般的に製作・使用されたものである。しかし、青森県内に限っても、各器種の形態は時期的・空間的に異なるようである。この中で、特にその諸特徴が明瞭に観察される石鏃と石匙について、他遺跡出土資料と若干の対比を行うことにする。

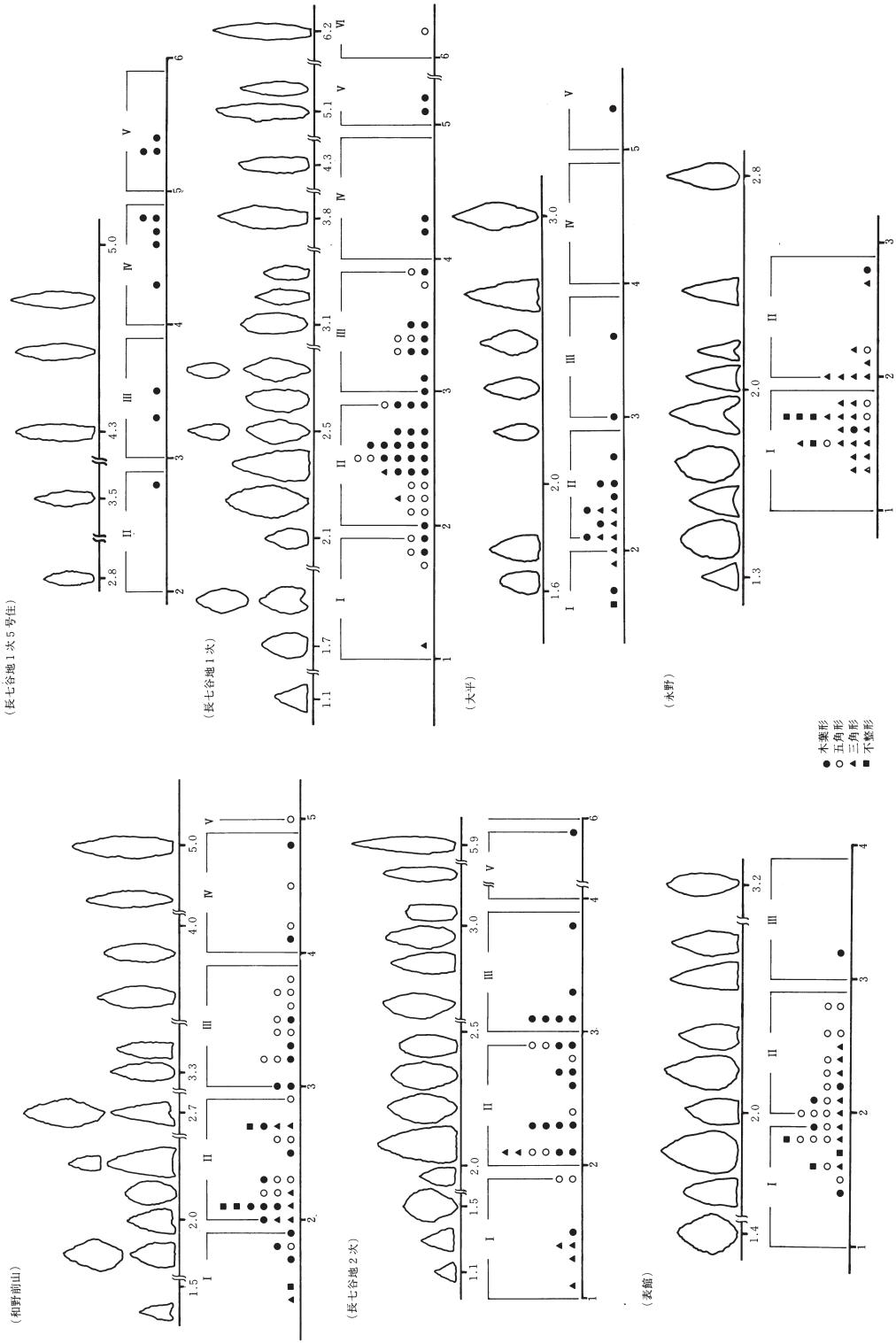
石 鏃

石鏃と石槍における形態とその変遷については、すでに工藤竹久氏による論考がある（工藤1977）。それは、有茎・無茎・形態等について北日本における繩文時代全般を通じて考察したものである。

本遺跡出土の石鏃の形態には、大きく分けて三角形鏃、五角形鏃、木葉形鏃、不定形鏃の4種が認められ、これをその長幅比によって更に細分した。第144図1はその長幅比を横軸に、点数を縦軸として作成したものである。^(注9)これによると、その長幅比は1.4：1から5：1の間にあり、その差是非常に大きいが、長幅比が2：1の付近に1つのまとまりがみられ、更に2.6：1から3.8：1まで2～3個づつではあるが平均的に存在し、4：1を超えるものは少数である。これを形態の面からみると、有茎・不定形・二等辺三角形鏃はすべて3：1以内に存在するが、五角形鏃及び木葉形鏃は各群にみられる。しかし、同じ形態名で呼称されるものの、実際にはかなり異なっており、3：1以上のものは柳葉形に近似した形態となっている。そして本遺跡の場合、五角形鏃と木葉形鏃が全体の65%以上を占め、そのなかで、3：1以上の狭長

(和野崩山)

(長七谷地1次5号柱)



第144図 石錫形態の対比

なものとそうでないものとはほぼ同数となっている。

上記と同様な分析を長七谷地貝塚第1・2次、表館遺跡、永野遺跡（青森県教育委員会1980e）大平遺跡出土資料（青森県教育委員会1980a）で行ってみた（第144図）。この結果、長七谷地貝塚第1次調査における石鏃の傾向とほぼ一致した。この中で特に異なるものは、同第2次における長幅比が1：1近辺のほぼ正三角形を呈する石鏃の存在で、これは、貝殻・沈線文系土器がやや多く出土していることを関連するものと思われる。更に、同第1次調査における第5号住居跡では、ピット内で積み重なった状態で出土した11点を含む14点の石鏃が出土したが、このうちの完形、略完形品11点中10点が長幅比3：1以上のものである。この住居跡が早稻田5類期のものであることは、狭長な五角形・木葉形を呈する石鏃を考える場合重要と思われる。

一方、同じく早稻田5類土器及びこれに近接する諸型式の土器が出土した表館遺跡の石鏃をみると、その形態には、二等辺三角形、五角形、木葉形等あるが、その長幅比が3：1を超えるものは1例しかない。

永野遺跡は、芦野群ないしは深郷田式土器を主体とし、その他貝殻・沈線文系、早稻田6類、芦野群、円筒上層式等の諸型式が出土している。二等辺三角形鏃が主体を占め、これに若干の有茎と思われる鏃と正三角形鏃があり、五角形、木葉形を呈するものは極く少数で、1.5～1.8：1の間にまとまる傾向にある。3：1を超えるものは破損品の1例しかない。

大平遺跡は、円筒下層b式を主体とする遺跡である。五角形鏃と思われるものはまれで、二等辺三角形鏃と木葉形鏃が主体を占める。ただし、大平遺跡における木葉形鏃は最大幅が基部近くになるもので、円基と称される類のものが多く、この中の若干数に長幅比が3：1以上のものがみられる。

以上、数遺跡における石鏃の形態を比較してみたが、本遺跡で30%以上の高率を占める五角形鏃、同じく30%以上を占める狭長な五角形鏃ないし木葉形鏃は、時間的、空間的にも近似する長七谷地貝塚において特徴的に存在するが、時間的に近似するが空間的には異なる表館遺跡の場合、五角形鏃の存在は特徴的ではあるがその長幅比にかなりの違いが認められる。永野・大平遺跡の場合は時間的にも空間的にも異なるとされているものであり、その違いは更に明瞭である。

石 槍

本遺跡出土資料の場合、本来相当数を占めるであろうと思われる狭長な石槍に欠損例が多い。このため、前述の石鏃と同様な手法による比較を行ったとしても、その意義はかなり薄らぐと思われたので、石槍については行わなかった。

ただし、狭長で背面に向けてかなり急峻な調整を行った半両面加工のものと、更に狭長な両面加工の石槍が特徴的といえよう。

石匙

縦型と横型の2種類みられるが、前者が圧倒的に多く、この傾向は前期中葉まで変わらない。縦型石匙は、その刃部形状等によって細分されたが、その形状やつまみのつけ方等は長七谷地貝塚出土のものと非常に類似している。しかし、主要剥離面側に調整用打面を設けた例は、長七谷地貝塚に多く、本遺跡では少数である。また、本遺跡とほぼ同時期、ないしは近接した時期にある表館遺跡と鷹架遺跡では、全体的に幅広で偏平な類が多く、しかもその大半に調整用打面を設けている。更に、前期中葉の熊沢遺跡では、同じく縦型石匙を主体とするが幅広で肉厚なものが多い。しかし、調整用打面を設けた例は1~2例しかないようである。数遺跡を比較したにすぎないが、同じ縦型石匙を主体としながらも、各々異なっていることが明らかであり詳細な比較検討を加えるならば、早期中葉から前期中葉まで主体を占める縦型石器の技術的・形態的変遷をたどることが可能と思われる。

本遺跡の縦型石匙は、他遺跡に比べてその先端が特に鋭く尖るものが多いようである。この先端部に石錐的な使用痕を観察し得る例は少ないが、石錐そのものの出土が少ないと考えると、その代用をも果たしていたのではないかと推察される。

彫器・削片

彫器が3点と、削片が2点出さした。本遺跡における彫器は、ほぼ両面加工した不定形石器の類に1~2条の楕状剥離を加えたもので、器体の調整は別としても、先土器時代末期のものに類似する面がある。彫器は、旧石器時代に特有な石器とされ、繩文時代では草創期以外には極めてまれであるが、本遺跡における繩文時代早期末葉の石器組成に、少ないながらも含まれている点は注目される。

石器製作について

剥片類、及び各種剥片石器が合計約1,100点出土した。その構成は第151図に示したが、石鏃・石槍の狩猟具が約20%、石匙・石籠・不定形石器等の加工具が約40%を占めている。つまり、製品が約60%を占めていることになる。この事実から、今回の調査対象区域外に石器製作跡が存在する可能性と、石器の多くが製品ないし半製品として搬入された可能性とが考えられる。

遺構の分布及び遺物の分布状況から、遺跡は今回調査した部分から更に東側緩斜面への広がりを示唆しており、地点を異にする幾つかのユニットが存在する可能性をもっている。したがって、別地点に石器製作跡が存在する可能性もある。しかし、すでに述べたように、調査対象区域内では、住居跡を中心に屋外炉・土壙・作業場・捨て場等がみられ、極言するならば、集落構造としてほぼ完結した内容をもつといえよう。このような状況にあって、本来製品の数倍以上に及ぶはずの剥片が、本遺跡ではむしろ少いことは重視されるべきであろう。

剥片の中には、同一母岩であることが明瞭なものも多く、特に第8号住居跡内出土の黒曜石

製の石器は、住居跡内に同一母岩の小剥片や破片が残されていることから、当住居跡内で製作されたものであることは明白である。しかしながら、本遺跡の剥片の多くは、数量が少ないだけでなく、全体的に小さい。なかには、大型の石槍・箇状石器・狭長な縦形石匙などの製作が可能な大きさのものもあるが、厚さが足りないものも多い。更には、不定形の剥片が多く、製品、特に定形石器の素材とされているある程度画一的に剥離されたと考えられるような縦長剥片の類は、ほとんどみられない。^(注10)また、石核と考えることのできるものが数点あるが、それ以上の剥片剥離は困難なほど小さなものである。仮に石器及び剥片を母岩別に分けた場合、かなりの数量にのぼると思われるが、それにもかかわらず、礫表皮をもつ剥片は少ない。

以上のことから、本遺跡から出土した製品の多くは、完成された製品として、または半製品としての剥片で、あるいは礫の表皮を取り除いた石核として搬入された可能性が極めて強い。そして、それが石核の場合、徹底した剥片剥離がなされたものと思われる。半製品として搬入された剥片から製作された石器や、完成品として搬入された石器は、木葉形等の石槍のうち、の大型で狭長なものや、箇状石器、大型で狭長な縦長石匙などであろうと推察される。上述した推論は、松山力氏が述べたように、「珪質頁岩は、硬質の黒色頁岩を別にすれば、県南地方の東部にはほとんど分布しない」点に起因し、その結果「下北半島あるいは津軽地方ないし岩手県の脊梁山地周辺から礫のまま移入されたもの」という見解（八戸市教育委員会1976）からも、ほぼ妥当なものといえよう。

（三 宅 徹 也）

石斧の破損と使用について

破損状態などの観察から、使用方法との関連性について考えてみたい。

使用による破損は、小さいものでは刃部における使用痕跡として、大きいものでは器体の欠損として確認される。本遺跡出土の石斧の使用による刃部の破損は次のとおりである。

1. 刃部先端に、潰れと刃こぼれ状の小剥離を残すもの14点、2. 小さな剥離は認められるが刃部を欠損していないもの5点、3. 刃部の中央を欠くもの1点、4. 刀部の一端を欠くもの2点、5. 刀部の両部を欠くもの1点、6. 3～5の組み合わせによるもの5点、7. 縦割れしているもの3点。

これらの中で、使用による剥離が、片面からのものと両面からのものとが認められる。

片面を欠くもの（加撃方向が片面からのもの）は、3・4に多く、両面を欠くもの（加撃方向が両面からのもの）は、6に多い。1・2は使用痕跡程度のものであり、1は、両面に使用痕跡をもつものが多く、2は、片面に小剥離が認められるものが多い。

全体的には、使用による欠損等の痕跡が、両面に認められるものが約60%と、片面を欠くものよりやや多い。（片面を欠くものでも、使用による微小な使用痕を両面にもっているが、破損という観点からこれを除いて考えた。）

ひとつの剥離が、刃部の半分以上に及んでいるものも 1 点みられる。

使用による器体の破損

折損の状態（接合したもの）

磨製石斧 5 (両刃　円刃) 2 か所折損 第115図 - 11

平面では 2 か所とも斜めに、断面では 2 か所ともほぼ平坦に折れている。平面中軸線上での折れ部分の比率は、刃部 1 : 胴部 2 : 基部 2 となっている。

磨製石斧 14 (片刃　円刃) 1 か所折損 第116図 - 18

平面では基部の方へ若干丸みを帯びて、斜めに折れている。断面でも同様に斜めに折れている。平面中軸線上での比率は、ほぼ刃部 2 : 基部 1 である。

磨製石斧 85 (刃部欠失) 2 か所折損 第51図 - 6

平面では、刃部寄りの方がやや斜めに、基部寄りの方では大きく斜めに折れている。断面では、刃部寄りの方が基部に向かって馬の背状に弧を描いており、基部寄りの方は平坦である。中軸線上での比率は、ほぼ 1 : 1 である。

打製石斧 49 (片刃　円刃) 1 か所折損 第118図 - 27

平面ではほぼ真横に、断面ではやや斜めに折れている。中軸線上の比率は、ほぼ 3 : 2 である。

打製石斧 57 (片刃　円刃) 2 か所折損 第120図 - 39

平面では、刃部寄りの方がやや斜めに、基部寄りの方が斜めに折れている。断面でも、刃部寄りの方がやや斜めに、基部寄りの方が斜めに折れている。中軸線上での比率は、2 : 1 : 1.5 である。

打製石斧 58 (片刃　円刃) 1 か所折損 第119図 - 37

平面では、刃部寄りの方が斜めに折れている。断面でも斜めに折れている。中軸線上での比率は、2 : 1.3 である。

打製石斧 39 (片刃　円刃) 1 か所折損 第120図 - 40

平面では真横に、断面では斜めに折れている。中軸線上での比率はほぼ 1 : 1 であり、基部の方がやや長い。断面の中軸線上での比率は、3 : 5 である。

その他の欠損品を、形状の類似する完形品と照合していると、器体全体に対する残存部分の割合と各点数は次のようになる。胴部片は全体の形状を推定する根拠に乏しいため除いた。

また、それぞれの割合は大まかなものであり、厳密なものではない。

刃部破片 $\frac{1}{5}$ - 1 点 $\frac{2}{5}$ - 3 点 $\frac{3}{5}$ - 2 点 $\frac{4}{5}$ - 1 点 $\frac{1}{2}$ - 2 点 $\frac{2}{3}$ - 1 点

基部破片 $\frac{2}{5}$ - 7 点 $\frac{3}{5}$ - 2 点 $\frac{4}{5}$ - 2 点 $\frac{1}{2}$ - 2 点 であり第145図のようになる。

器体の折れ方は、一般的には、平面上では斜めに、断面上ではほぼ真横に折れるか、またはその逆を呈するが、欠損品を観察した結果、このパターンによる折れ方を明瞭に示しているものは少なく、平面・断面上の両者ともに、ほぼ真横だけ又は斜め

だけに折れるものが多く認められる。また、刃部形状から考え得る使用法（アックス的又はアッズ的使用）による折れ方とは異なる折れ方を呈しているものも多い。更に、打撃の角度等により、折断面の形状が弧状を呈するものや、さざくれ状を呈するものも認められる。

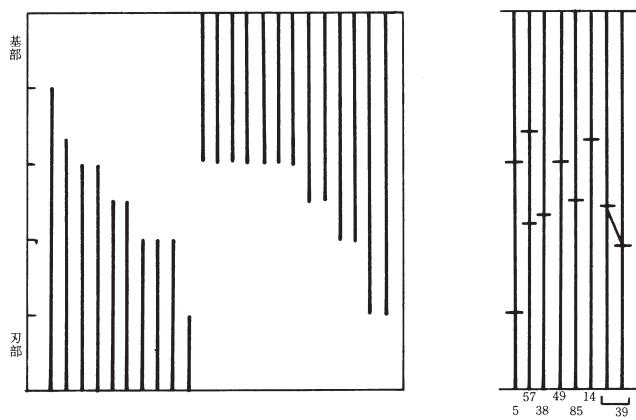
これらの観察結果から、石斧は、基本的に器体の中央約 $1/5$ ほどの部分を中心として破損し、両刃・片刃の別によるアックス的使用、アッズ的使用による基本的な破損形態とは異なる折れ方を示すものも多いことが理解できる。

アックス的・アッズ的使用による破損の典型的な例は、5・39にみられるが、他の石斧は、少しづつその破損形態を異にする。

これらの種々の破損状態は、使用における石斧本来の（刃部形状、大きさによって機能・使用法は異なるが、その種別ごとの）機能すべき方向性と、やや異なる方向での使用による食い違いから派生した結果によると思われる。具体的には、打撃の角度の不適性及び対象となるものの偶然的な要素（木の瘤や土中の石等）などである。これらの要素により、力がスムーズに伝達されずに意図した方向とは異なる方向へ向かったために、負担の多くかかった部分が、基本的な破損状態とは異質の折れ方を呈したものと推察される。また、他の器種の代用など、本来の使用法と異なる使用によって破損したものもあると思われる。

斧の形状及び破損状態から、本来的なアックス的・アッズ的使用のほかに、楔としての使用・ハンマー的な使用などが考えられる。本遺跡出土の石斧では、基部先端が破損しているもの及び頭頂部に敲打痕を有するものがほとんど認められないことから、楔的使用があったとしても、非常に頻度の少ないものであったと考えられる。

分類中、その他の打製石斧としたものの中で、刃部の形状から石斧とした大型の、重量的にも重く、刃部が鈍角に近い数点のものは、刃部先端が面を構成している部分もあることから、



第145図 欠損品残存部位図

破碎するものとしての機能を加味したハンマー的なものと推定される。また、打製石斧の刃部が両面加工による2点も大型であり、破碎するものとしての機能をもち合わせていると思われる。打製石斧の39は、片刃で、刃部先端が先細であることから、アッズ的使用法の中でも、鋭利な掘削を用途とするツルハシ的なものと考えられる。

破損の状態については、両刃・片刃など、形態ごとの共通性は顕著な形では見出せなかったが、刃部の形状による柄の装着法は、それに決まった形があったものと考えられる。第145図から、器体中央のほぼ5分の1ほどの部分を中心として破損していることが理解されたが、破損状態の諸要素から、ほぼこの部分が支点としての役割を果たしていたと推察される。このことから、アックス的使用・アッズ的使用の両者とも、おむねこの部分に柄が装着されたものと思われる。前述の打製石斧39の場合は、破損状態からソケット様・もしくは柄穴状の器体固定具の使用が考えられる。

(白鳥文雄)

石錘について

形状と抉りの位置の関係及び他遺跡出土のものとの比較について考えてみたい。

(文中の分類番号は、第章2節2項を参照のこと)

<形状と抉りについて>

b類は、形状分類の2と、3・4のうち、厚さの最大値・最小値に大きな開きのある素材を使用しているものがほとんどである。特に、2においてはすべてが b類であり、抉りは直線的な側縁側に片寄る。(2はすべて直線的な側縁側に最大厚をもつ)

b類の抉りが最大厚をもつ側に片寄って作出されていることは、断面形状がレンズ状を呈するもの又は厚さの最大値・最小値に開きの少ないものが中軸線上に作出されていることに対して、大きな特色を示すものである。これは(錘の使用方法全般にもかかわることと思われるが)錘自体が、使用に際して傾かないようにしたものか、あるいは繩かけの方法等に起因するものかは不明であるが、素材自体の重心に關係するものと思われる。

抉りの位置は、この重心を通る線のうち、繩をかけた場合に最も安定する線上に設けられたものと推定される。

形状分類の2は、形状が非常に類似していることから、ある用途をもったものとも考えられる。

<他の遺跡出土の石錘との比較>

本遺跡の主体となる時期とほぼ同時期の長七谷地貝塚遺跡、古い時期のものとして貝殻文系土器を主体とする下田代納屋B遺跡・千歳遺跡(13)・新納屋遺跡出土の石錘と比較してみた。

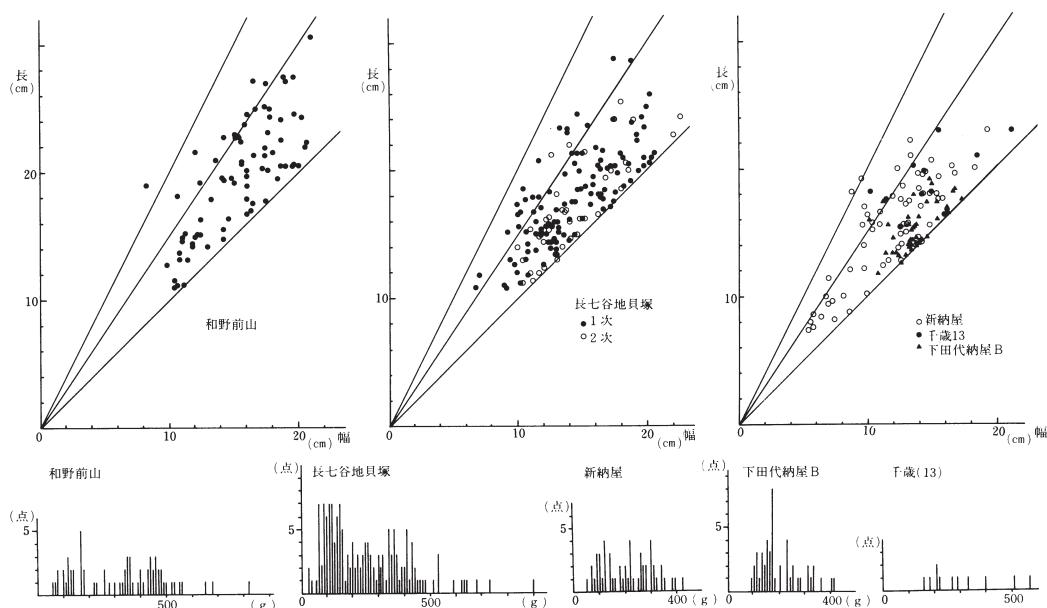
長さ、長七谷地貝塚遺跡では最小5.4cm・最大14.4cmで、5.4cm~12.2cmにほとんど含まれる。6.9cm~9.5cmと9.9cm~11.0cmに集中するが全体的な広がりをみせる。新納屋遺跡では最小3.7cm・最大11.5cmで、7.0cm~7.9cm、8.5cm~9.3cm、9.6cm~10.3cmに若干集中す

る傾向を示す。下田代納屋B遺跡では最小5.9cm、最大10.0cmであり、6.5cm～8.1cmにほとんどが集中する。千歳遺跡(13)は対象資料が少ないため、まとめはつかめなかった。最小8.2cm、最大11.5cmである。

重さ、長七谷地貝塚遺跡では、最小30g、最大900gであり、70g～480gに集中し、特に70g～160gに多く集中する。新納屋遺跡では、最小7.7g、最大420gであり、70g～110g、180g～230g、250g～300gと3つの部分に集中する傾向を示すが、全体的に広がりを持っている。下田代納屋B遺跡では、最小90g、最大410gであり、90g～180gに多く集中し、230g～250gに若干集中する。千歳遺跡(13)は対象資料が少ないため明確に把握できないが、200gを中心として数点がまとまる。最小164g、最大566gである。

長さ・幅の比率では、1：1～1.5：1の間に各遺跡ともほとんどが含まれ、1：1～2：1の範囲内に1・2点の例外を除いてすべて包含される。下田代納屋B遺跡出土の石錘は、長さと幅の差が少なく、1：1.2の間に78%が含まれるという特色を示す。

本遺跡出土の石錘と比較すると、貝殻文系の遺跡出土のものは全般に小型であり、重さでも200g未満に多く集中する。長七谷地貝塚遺跡出土のものは、本遺跡出土のものと非常に類似した傾向を示すが、重さでは、本遺跡のものは300g以上が多いのに対し、長七谷地貝塚遺跡のものは300g以下が多い。300g以上のものでは両遺跡の傾向は類似している。長さでは、本遺跡出土のものは9.5cm～11.4cmに集中しており、長七谷地貝塚遺跡出土のものも9.9cm～11.0cmに集中する部分をもつが、概ね6.9cm～9.5cmの広い幅に含まれる。これらのことから、本遺跡出土の石錘は、全体的に大型であるといえる。また、長七谷地貝塚遺跡に多い300g未



第146図 他遺跡出土石錘との比較

満の石錐が本遺跡ではほとんど欠如している。

貝殻文系の遺跡と比較して、本遺跡のものが大型ではあったが、これは遺跡の立地条件と密接にかかわる問題であり、貝殻文系土器に伴出する石錐が、縄文系土器に伴出するものより小型であるという結論には至らない。

(白鳥文雄)

土器片錐と石錐について

土器片錐と石錐は、素材に相異点はあるが、一般的には漁網用の錐として同一の用途をもつものと考えられる。

本遺跡出土の両者を比較すると、土器片錐は、長さ・幅では小型の石錐の部類に入り、厚さ・重量では、石錐にはない低い数値を示す。長幅指数では、縦長の石錐と一部数値が重複し、石錐に比して全体に縦長の傾向を示す。抉りは、概して石錐よりやや長く作出されている。また、土器との共伴関係をみると、石錐が早稻田類に伴うのと対照的に、土器片錐はすべて早稻田類の破片を素材としている。

県内では、土器片錐が出土した遺跡は、本遺跡を含めて10遺跡で、まとまって出土した例は発茶沢遺跡^(注11)の43点だけで、他は1・2点の出土である。

本遺跡の土器片錐と同時期のものとしては、六ヶ所村の3遺跡と他の3遺跡出土のものが挙げられる。素材となる土器の型式名は、口縁部片がないことから明確ではないが、縄文の特徴から、前期初頭のものと考えられる。

重量的には、新納屋遺跡出土の、器長4~5cmほどの極小石錐に近似するが、土器片錐(本遺跡・発茶沢遺跡出土のもの)の方が若干重い。土器片錐の重量の分布する30g~100gの範囲に重複する石錐は、数遺跡の資料との比較においても非常に少なく、特に、土器片錐のもっとも集中する重量である30g~60gの石錐は非常にまれである。本遺跡出土の石錐でも、100g未満のものは4点である。

同重量の石錐に比して、土器片錐は器体が大きく、また、偏平であることから、漁網錐として使用した場合、水の流れ等の影響をより多く受けるものと思われる。また、石錐と土器片錐との共伴関係がほとんど認められない現在においては、土器片錐だけでの使用を考えるのが妥当と思われる。しかし、抉りを作出しない礫石錐との同時使用の可能性も考えられる。

これらのことから、錐を全て漁労具とすると、石錐を主体とする縄文時代早期と、土器片錐を主体とする前期初頭とは、漁法に相異があったものと考えられる。また、土器片錐の使用に伴う特性(水の影響を受けやすい等)から、対象水域が穏やかであったとも考えられる。漁法の変化の要因としては、対象魚類・対象水域及び水流の変化等が考えられる。

また、石錐においても、形態・重量に数種のグループ分けができることから、使用目的や漁網のどの部位に設置されるかによって、数種類の機能分担があつたと考えられる。

土器片錐は、県内での出土総数が100点に達していない現在においては、その使用目的等についてあくまでも推測の域を出ない。

(白鳥文雄)

礫 器

礫器として分類したものは9点であるが、チョッパー的なものが8点ある。このうち7点は、その刃部作出の剥離が少なくとも3~4回のパンチを用いた間接打法によっている。関東地方等における礫器の製作に関する記述からは、すべてが荒割りによると思われ、パンチを用いた例はないようである。

パンチを用いた間接打法は、通常、剥片剥離に際し用いられるものであるが、本遺跡における礫器がチャートや安山岩等を用いており、これが剥片剥離の母岩とは考え難い。やはりチョッパー的な機能をもつ石器と考えざるを得ないが、その刃部作出の技法は注目される。また、^(注15)関東以北では礫器の出土例は少なく、本県では初めてのものである。

敲磨器 類(三角柱状磨石)について

通常磨石・擦石・特殊磨石など様々な名称が付されているが、ここではこれを三角柱状磨石(青森県教育委員会1982)と称する。それは「形にのみ固執することは意味がない」(八木1976)との見解もあるが、一般的の形状として多いということであり、河原の転石利用のものに対して厳密な規定を設定することはないという点と、石器の名称は用途ないし形状から命名されているのが一般的であり、「特殊」という形容詞を付して、特定な石器の名称とすることはどうかと考えたためである。時期的にはある程度限定されるようであるが、その分布には特に偏在する傾向はみられない。したがって関東・中部地方では、最近「特殊磨石」との名称が一般化しているが、あえて三角柱状磨石の名称を用いることとする。

本遺跡からは、200点を超える資料が得られたため、できる限りの多面的な観察を試みた。の結果は、十分なものとはいえないが、この種の石器に対しては、従来以上に理解し得たものと考えてあり、以下、本遺跡における一般的な形状とその特徴等、更に用途は別としてもその使用方法について考えてみたい。

一般的大きさ

平均的大きさ 長さ14cm、幅7.5cm、厚さ4.5cm、重量680g

石材 砂岩又は安山岩(全体の70%)

平面形状 楊円形(全体の45%)

断面形状 機能面を下にすると「逆三角形」(全体の60%)

機能面の特徴

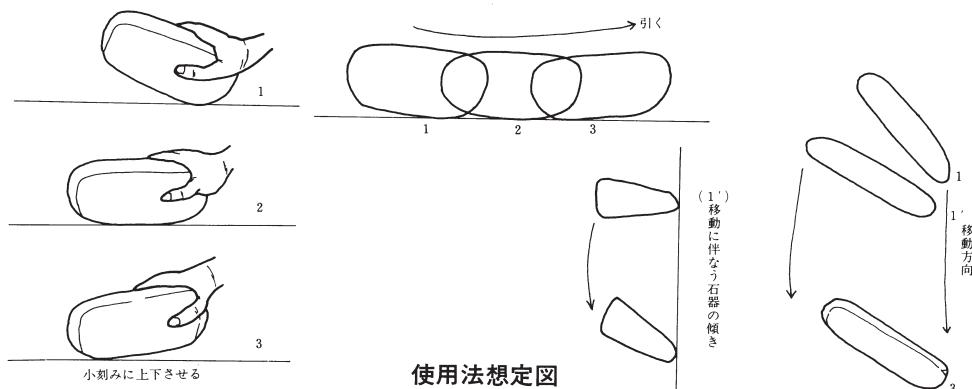
機能面の大きさ 長さ10cm(最大長の70%)、幅1.2cm(最大厚の26%)

機能面の形状 平坦面をなさず、すべて長幅の両方向に凸状の曲面をなす

機能面の側面	剥離をもたないもの	46%
	両側面に剥離をもつもの	37%
	一側面に剥離をもつもの	17%
機能面の感触	ややつるつるしたもの	33% (側面に剥離のないものが多い)
	荒れてざらざらしたもの	30% (両側面に剥離をもつものが多い)
	両者の中間的なもの	37%

機能面の片減り 43点で18%に認められる。機能面が荒れた感触のものには少ない。

機能面の長さの平均が10cmと長く平坦面をなさないこと、及び幅が1.2cmと狭いにもかかわらず凸状の曲面をなし、決して平坦面をなさないことから、使用に際して、機能面の全面が常に対象物と接しているのではなく、接する面はごく一部で、わずかずつ移動した結果と推定され、そして片減りは、機能面の幅方向での移動が強く大きくなされたものに生じたものと推定される。このことは、腕や手首の運動性と密接な関係があると思われる。そこで、上述の事項を満足させ得る使用状態を想定し、その概略を模式化してみた。この模式図をもとに、この種の石器の使用方法を想定してみる。



なお、使用によって機能面に感触の差や剥離を生じ、更に、破損率が高いことを考へるならば、常に、他の石と接触する状態で用いられたものと考えられる。しかし、その一方で機能面の感触や剥離の有無に関係なく機能面自体の形状はすべて同一であるため、ほぼ一定の状況下で使用されたものと考えられる。それは、手にもった石などの不安定なものに対して用いられたのではなく、固定された台（石）上において、何らかの作業を行ったものと考えられる。

さて、石器の断面形状は、逆三角形や橢円形をなすものがもち易く、またその長さや重量からすれば、先端部や中間部より手前はじの方方がやはり持ち易い。このほうが小刻みな上下運動を反復して行い易く、その結果、長軸方向での凸状をなす曲面が自然に生じると思われる。

石器をもって作業を行う際、使用者と石器の長軸とは恐らく直交せず、ある程度の角度をなす

ものと思われる。そして、使用中ほぼその角度と位置を保つ場合と、使用により徐々に使用者側、つまり手前に移動し、使用者と石器の長軸のなす角度が平行に近くなる場合とが想定される。後者の場合、石器と作業台とのなす角度は、ほぼ直角な状態からある程度の角度を生じ易く、機能面幅における凸状の曲面はこのような移動により自然に生じるものと思われる。そして、その反復の度合により片減りの有無が生じるものと考えられる。

以上のような持ち方及び使用法によった場合には、機能面の長さと幅方向での面の状況を比較的満足させ得ると思われる。なお、両手に持ち使用する方法も当然考えられるが、別々の作業内容では可能でも、組み合わせて使用し、機能面に生じる状態を満足させることは困難と思われる。

機能面の両側に剥離が生じ易いのは、上下運動を主として行った場合であり、恐らく、片減りが生じたと同様の移動方向を探りながら上下運動を行った結果と推定される。

敲磨器　・　類

通常、敲石と称するものを一括し、厚さを基準とした長幅比に基づいて4細分したが、これに 類としたスタンプ状石器を加えて、若干述べることにする。

敲石の大半は、自然礫を用いたものである。 類全体では、チャートが54%を占めるが、特に c・dにおいて圧倒的であり、石英も同じく c・dに特徴的である。これに対し、a・bではかなり多様な石材を用いており、その中のチャートの占める割合はむしろ少ない。

また、a・bには少数ではあるが、器体を調整したと考えられる例があることや、機能面に接し剥離を生じたものが多いこと、更には重量の軽いものが選ばれていることなどから、c・dとは異なった使用法・目的をもっていたと考えられる。この点においては、a～cに少数みられた類 機能面が滑らかで表裏に分かれて稜をなし、剥離を生じていないもの も区別すべきかもしれない。これを一応 eとする。cとdはその厚さ以外、あまり差は認められない。aとbは形状だけではなく、その使用部分もc・dとは明らかに異っている。

以上のことから、敲石として一括されている石器には、その使用法・目的によって a・b、cとd、eの4種類に分けて考える必要があろう。また、 類としたスタンプ状石器は、分割されている点を除くならば aに近いと考えられるが、これに関しては、今後類例の多い関東地方との対比が必要であろう。

敲磨器　・　類

類は通常、凹石と称するもの、 類はその凹石ほど明瞭に凹んではないが、細かな凹みが多数生じ、面が強く荒れたもの、 類は磨滅した面や擦った面をもったものである。 ~ 類は ~ 類と異なり、扁平ないし球形に近い礫の端部や側縁ではなく、扁平面を使用したものである。 類は、本来的には 類の中で細分すべきものともいえるものであるため、凹石類

と球形磨石とに大別しておく。

敲磨器類

石皿の類である。当初石皿と作業用の台としての台石を分離しようとしたが、台石と考えられるものにも磨滅した面をもつもののが多かったため一括した。ただし、石皿としてのみ使用されたものもあり、むしろ分離すべきであったかも知れない。完全なものは全くなく、すべて破損もしくは分割したものの再加工品と小断片である。その数量は約60点であるが、本来の個体数は20個以内と思われる。

敲磨器～類及び類は、敲く、擦る、潰す等の作業を単独ないしは組合せて行ったものと考えられるものである。各々形態が異なっているため、何らかの使い分けがあったと思われるが、これについては不明である。これらの敲磨器は、器の石皿や台石とともに用いられ、通常、植物性食糧の分碎・製粉や、土器混和材としての石を粉末化したものと推定されている。破損率が高く、しかも多数出土していることから、狩猟・漁労用具とともに、特に食生活上欠くことのできない重要な道具であったと思われる。

敲磨器・類は凹石、及びこれに類するものである。これについては堅果類の殻割り説や発火具説などであるが、明瞭ではない。

(三 宅 徹 也)

注

注1 鈴木克彦氏は、本報告における第5～8群土器を「縄文土器群土器」と称して施文に至るまでの諸項目を観察している(青森県教育委員会1980f)。その観察結果は、本項におけるものと一致する部分も少なくないが、諸先学によって設定された諸型式の特徴がむしろ埋没する結果を生じている。それは、細別型式の諸特徴を明確にしないまま、グルーピングしたためであろう。

注2 縄文を施文した各土器群のうち、出土量が非常に少ない第7群土器を除いたものについて、その器面に観察される縄文の節を計測し、長さと幅の関係をグラフにしてみた。縄文の節の大小が型式にある程度関連していることは一般論的には把握されているが、実際にグラフ化してみたところ、その差は歴然としている。

注3 富岸遺跡(北海道埋蔵文化財センター1981)報文中に掲載された施文実験写真との比較、及び同センター西田茂氏の御教示による。

注4 石材によって、また同じ石材でもその成分によってもかなり異なる。このため転石によって磨滅した礫表面を基準としたが、その時々によっても異なり、40点前後のものについて判断に差を生じた。ここでは最も差の少ない時の数値を用いた。

注5 各グリッドの総点数は確認していないが、35に關しては土器・石器とも番号を付したもののは70～80%に及ぶと思われる。しかし、その他の部分、特にユニット関係では土器の場

合30~40%、石器（自然礫を含む）の場合は20~40%でしかない。

注6 工藤大氏は、鴨平（1）遺跡資料と日計式押型土器に伴出する縄文施文の土器に関し、施文された縄文と沈線の差異について言及している（青森県教育委員会1983a）

注7 岩手県崎山弁天遺跡（草間編1974）では、ほぼ赤御堂式に対比される第群中に、また北海道美々6遺跡（北海道埋蔵文化財センター19）や有珠川2遺跡では東釧路式に伴っている。

注8 鈴木克彦氏は赤御堂式から前期初頭の早稻田6類土器までを、縄文を主体として施文する土器群であるとして縄文土器群土器と統括し、赤御堂土器様式と称している（青森県教育委員会1981f）。しかし早稻田6類土器の場合、単に前期の土器であるというだけでなく、後続する芦野群（表館式）と統括されて、関東地方の関山式に対比されるべきものであり、恐らくその文化的基盤も赤御堂式や早稻田5類とはかなり異なるであろう。

注9 石鎚の分類、及び本図の作成は小笠原幸範氏の協力によるものである。

注10 縄文早期末葉の石核の実態に関しては不明な部分が多い。しかし、背面構成が一定しない縦長剥離が多いことから、円筒下層式土器前半期における剥片剥離とさほど変わりはない。恐らく、大面遺跡（青森県教育委員会1980d）の石核と同様、打面を次々に転位させながら剥片を剥取したものと思われる。

注11 八戸市一王寺貝塚・三沢市野口貝塚・市浦村オセドウ貝塚・金木町芦野遺跡・六ヶ所村新納屋2遺跡・同102号遺跡・同鷹架遺跡・同発茶沢遺跡・今別町山崎遺跡・八戸市和野前山遺跡の10遺跡である。

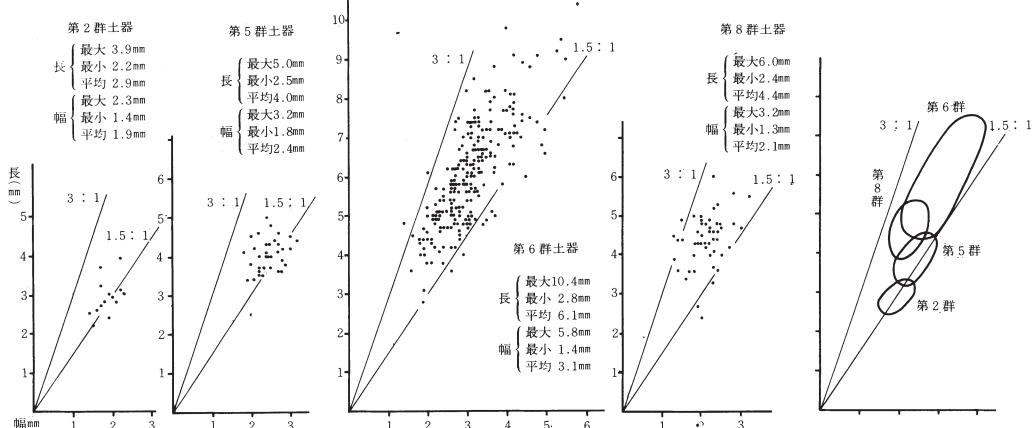
注12 青森県埋蔵文化財調査報告書第67集、43点中の2点は、本発掘以前の出土品である。

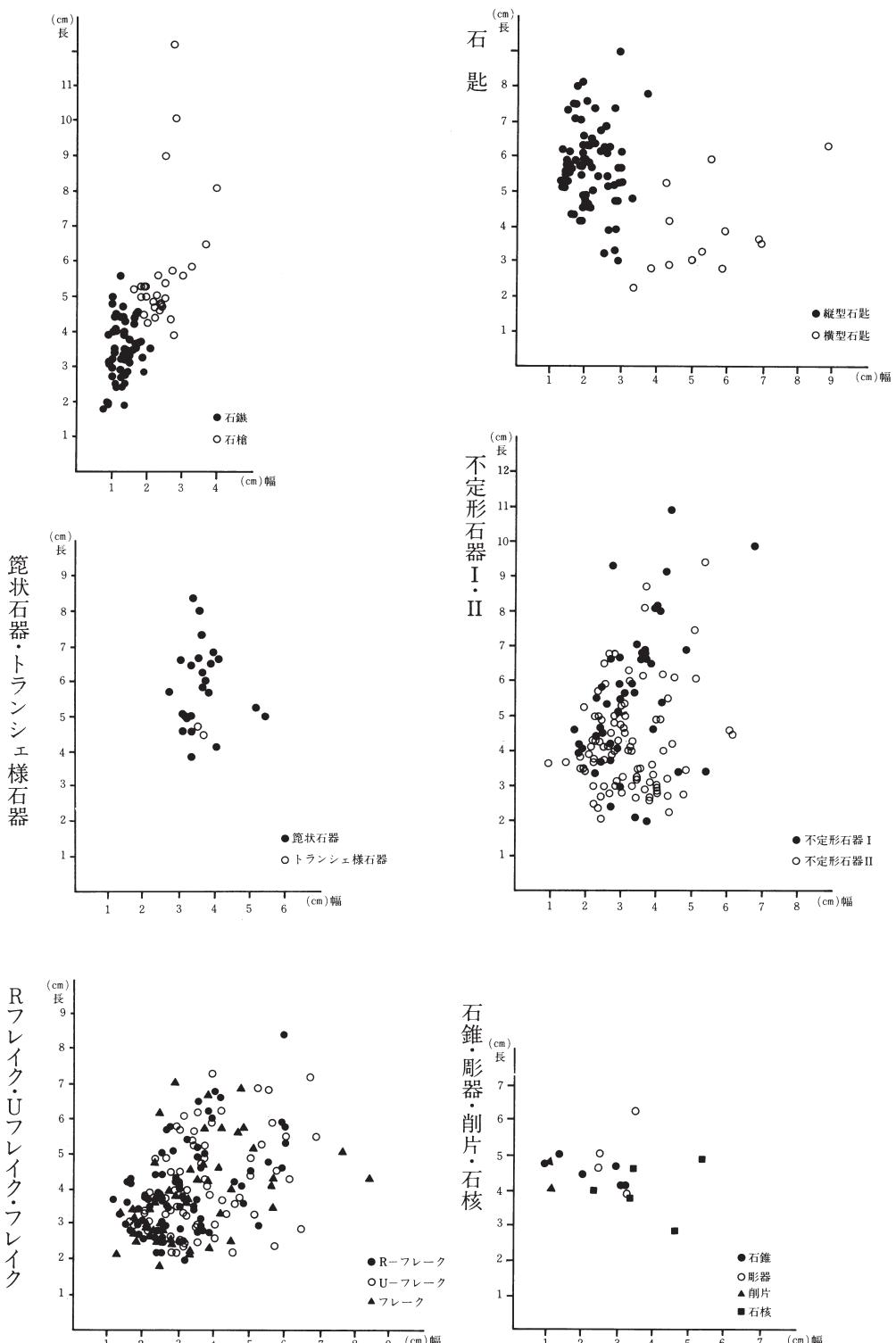
注13 注11の内、野口貝塚・芦野遺跡・山崎遺跡・102号遺跡・鷹架遺跡・発茶沢遺跡。

注14 青森県埋蔵文化財調査報告書第62集

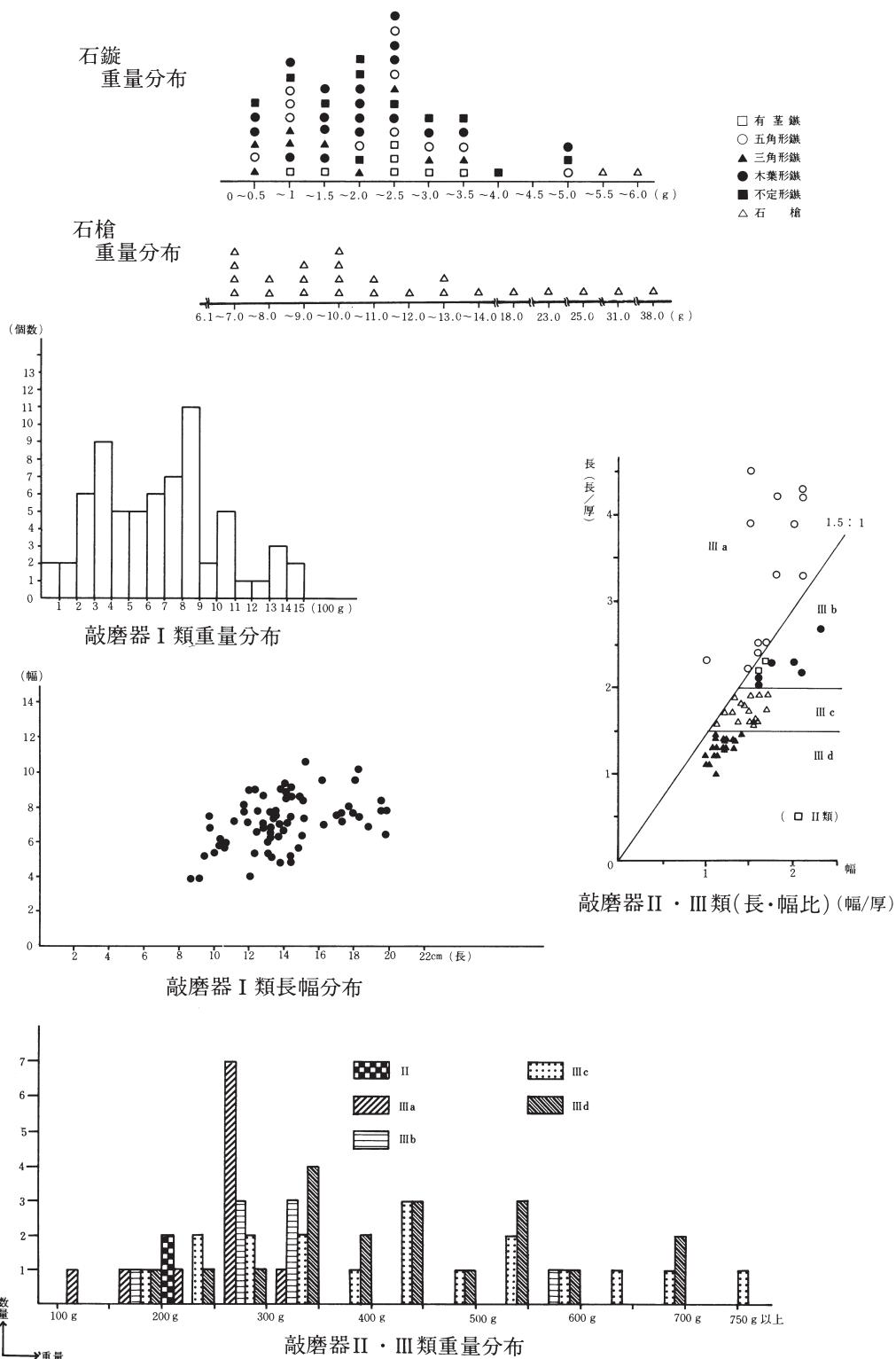
注15 長七谷地貝塚の第1次調査において109点の礫器が報告されているが、これは本遺跡で打製石斧としたものの類に近似する。

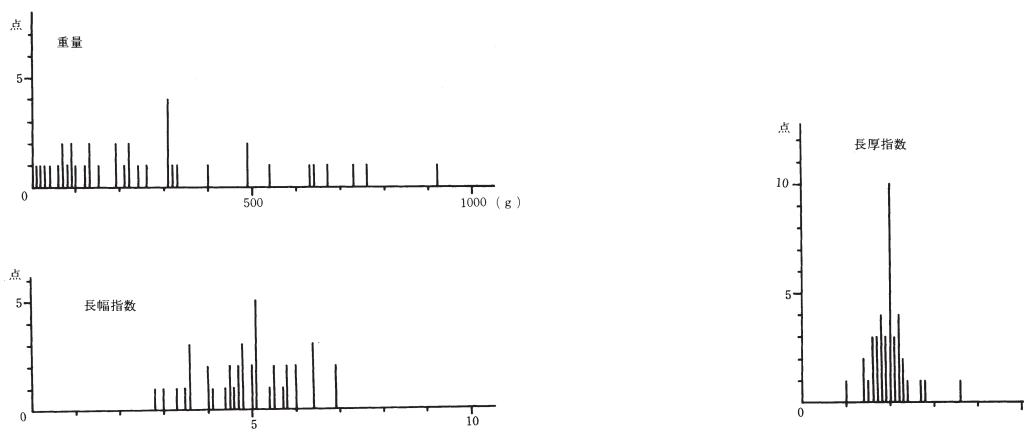
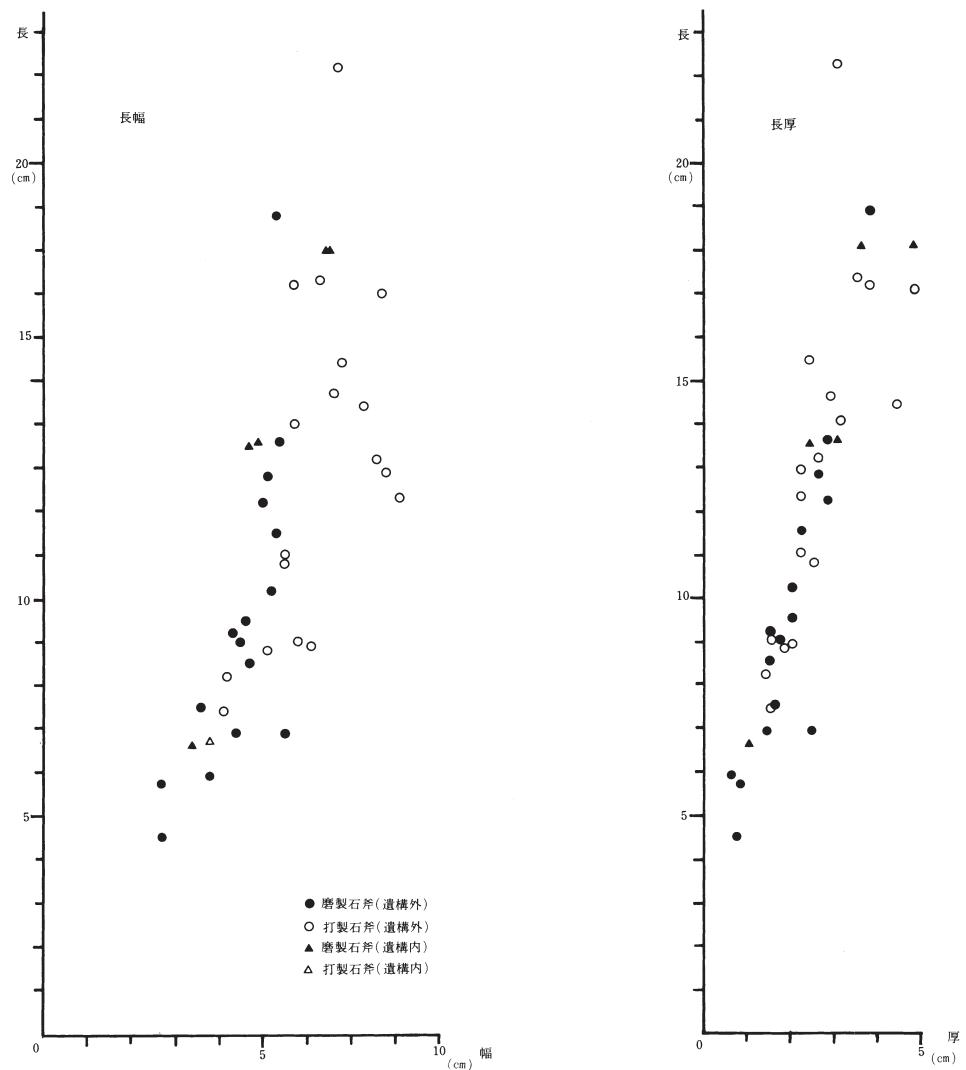
各群土器における縄文の節の大きさ（注2）



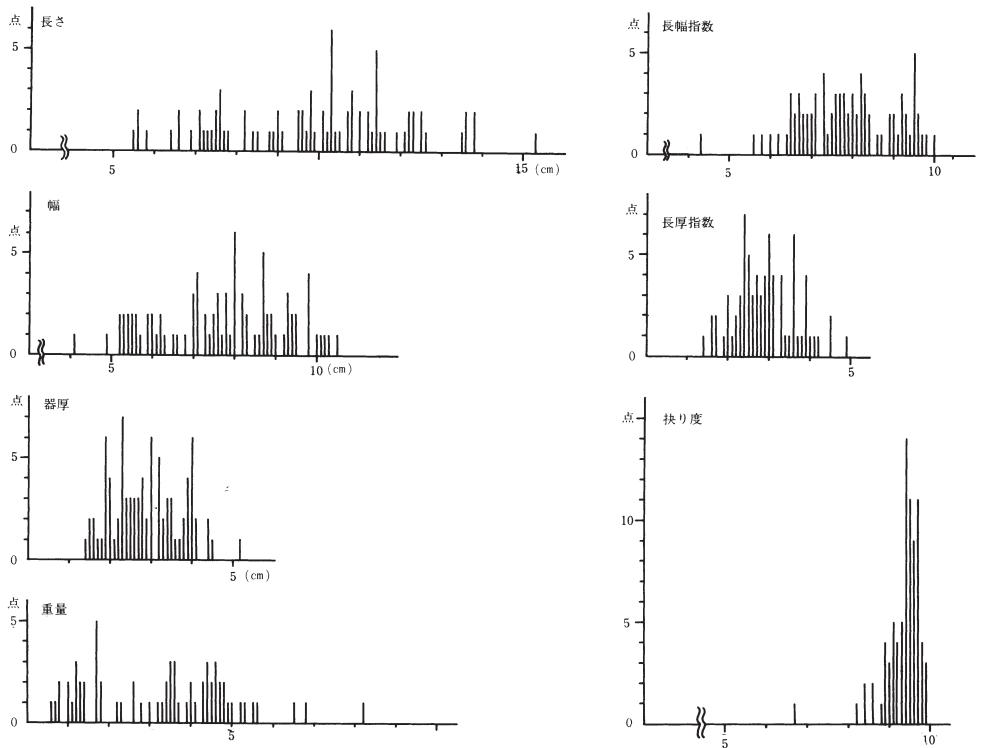
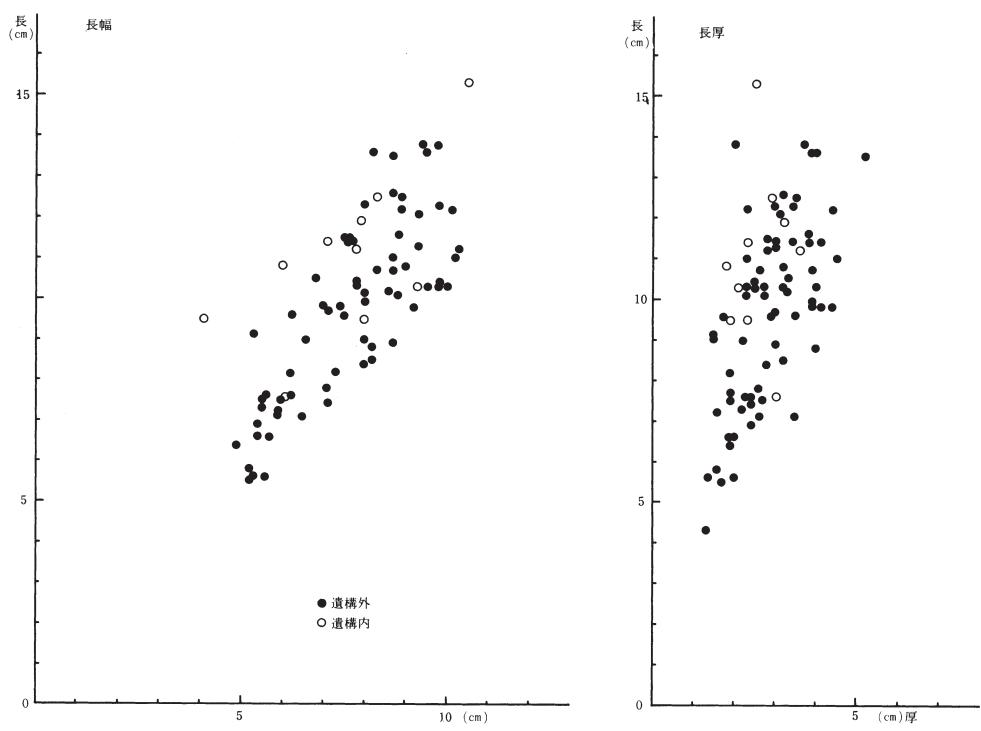


第147図 剣片石器計測分布図

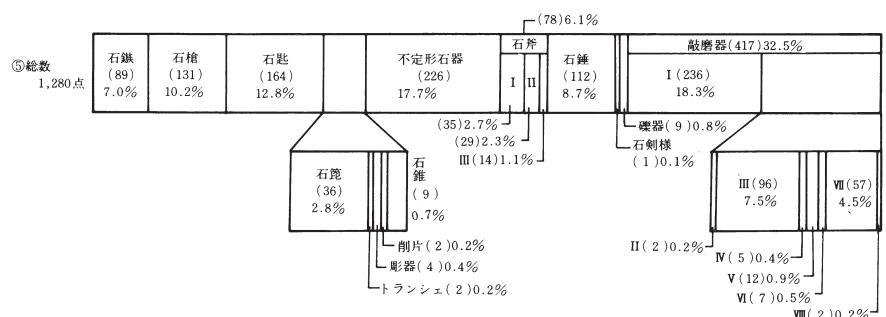
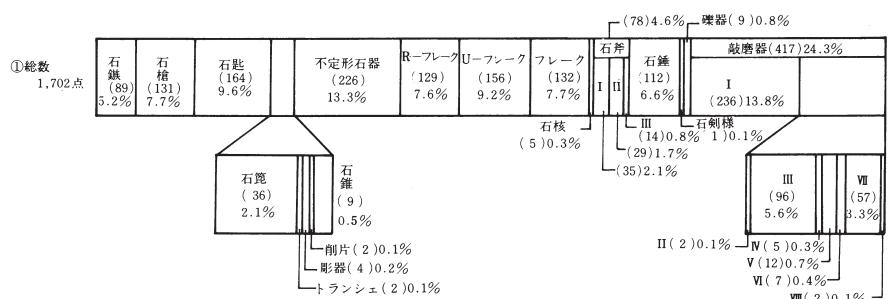
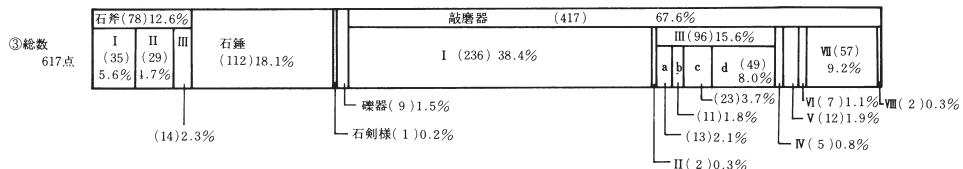
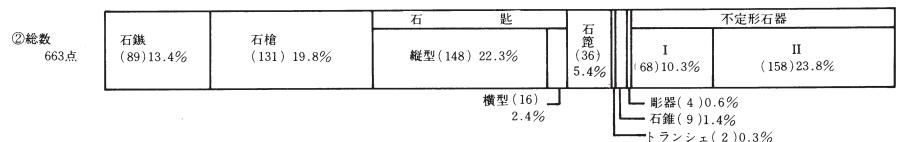
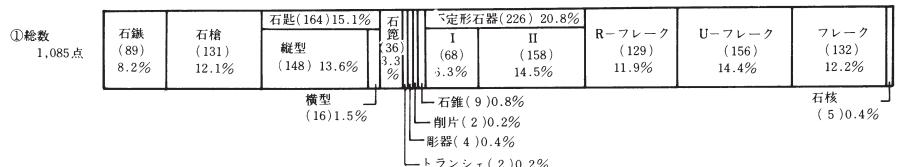




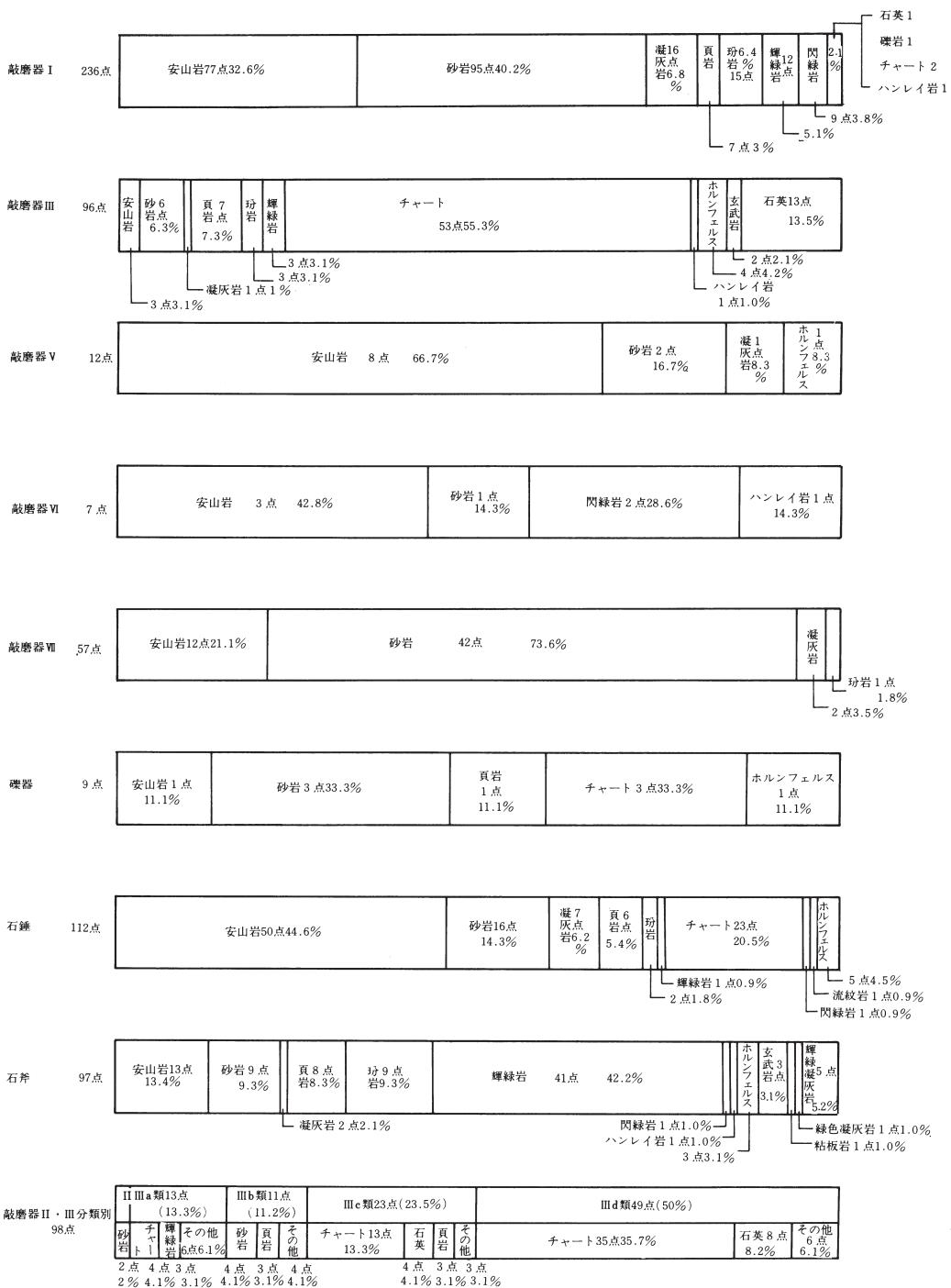
第149図 石斧計測分布図



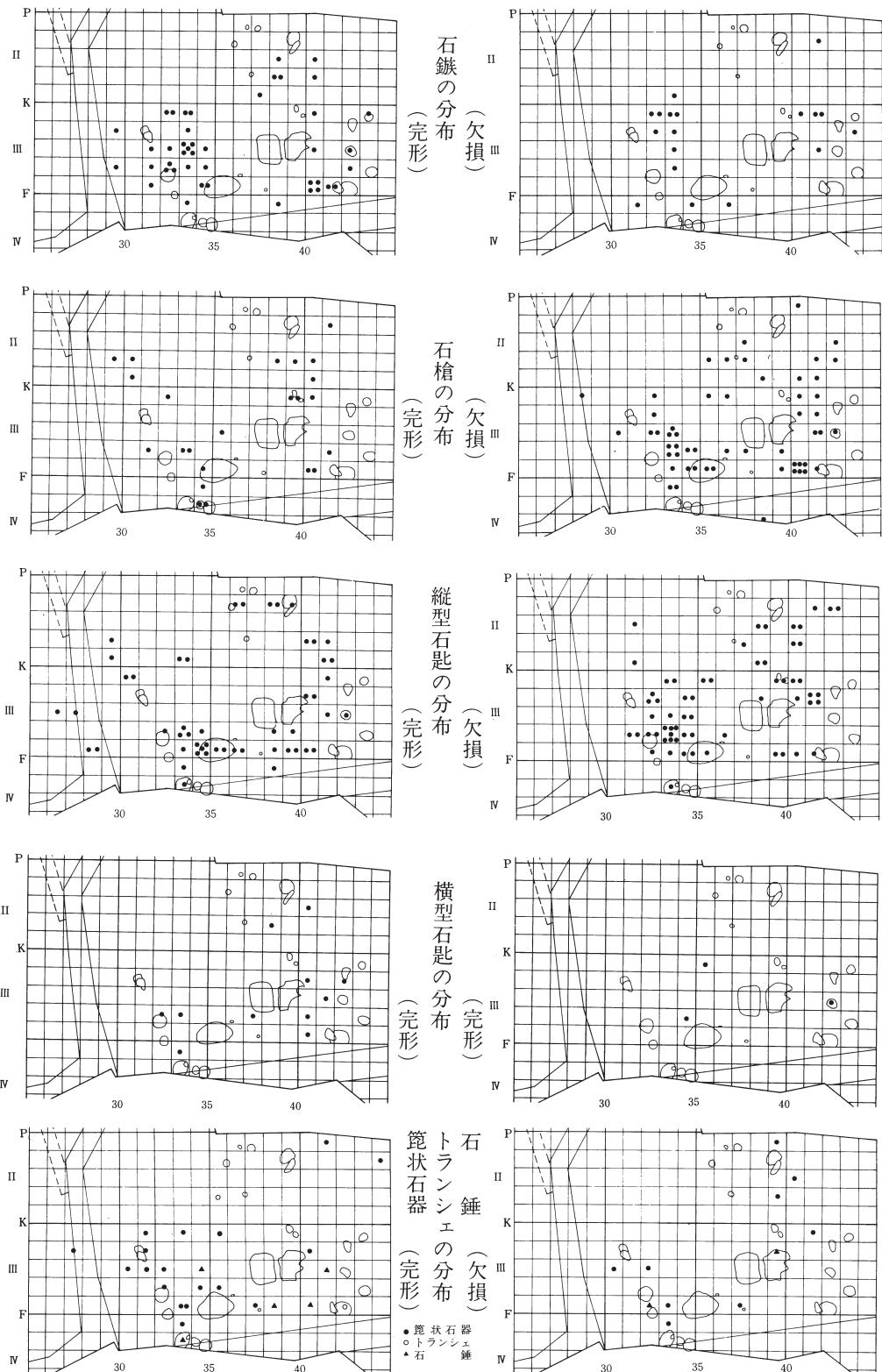
第150図 石錐計測分布図



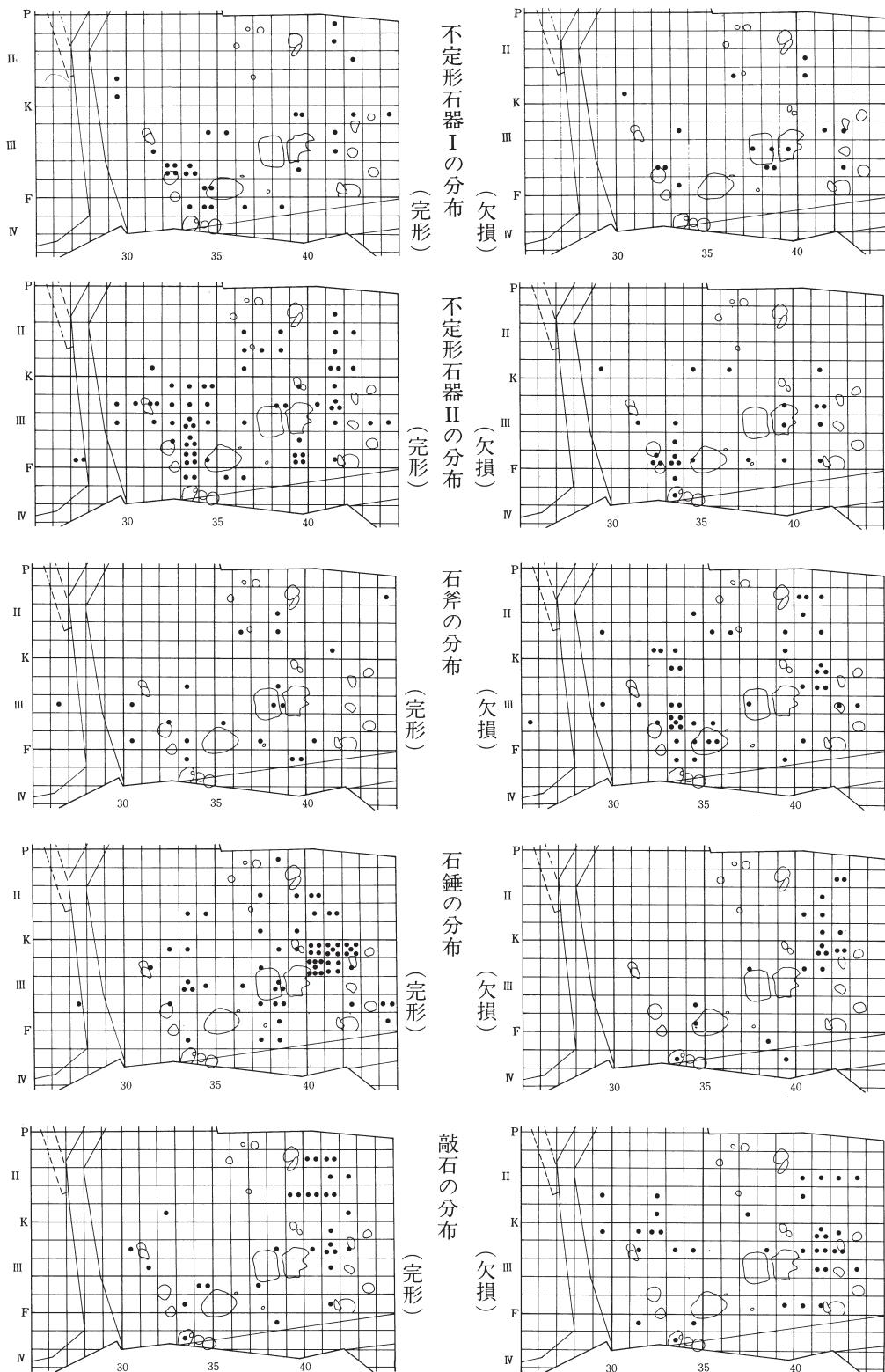
第151図 石器組成

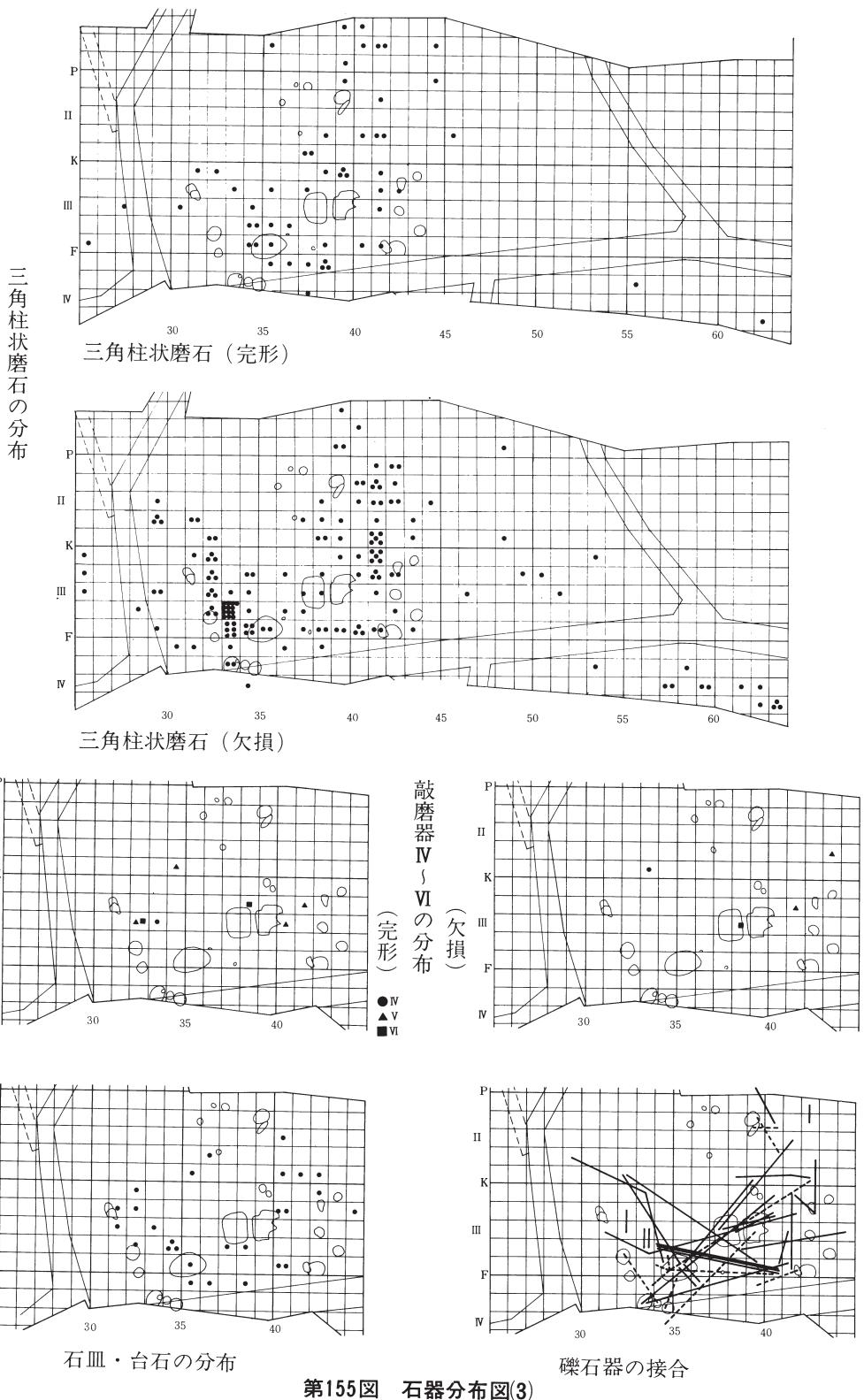


第152図 石器石質組成（遺構外）



第153図 石器分布図(1)





第155図 石器分布図(3)

第14表 遺構内出土土器観察表 (1)

遺構内出土土器

図版	層	文様		厚 (mm)	備考	群
		外 面	内 面			
第5号住居跡						
9-1	床	LR※		9.2	実測図参照	6
2	覆	L(R·R·L·L)※5種		13.6	実測図参照	6
第6号住居跡						
13-1	覆			11.9	同一個体	6
2	"			7.5		6
3	"			8.7		6
4	"			9.1		6
5	"	LR 3種	外面同	12.4	実測図参照	6
14-6	"			8.6	補修孔	6
7	"			7.7		6
8	"	LR 3種		9.2		6
9	"	LR※3種		10.9		6
10	"	RL 3種		11.1		6
11	"	LR※3種	外面同	12.2	実測図参照	6
12	"	R(R·R)1種		-	底面: R(R·R)	6
13	"	LR※3種	外面同	11.5	実測図参照	6
14	"	L(R·L)※5種	外面同	11.2	実測図参照	6
第7号住居跡						
15-1	覆			8.6	補修孔(未貫通)	6
2	"	LR※3種		12.0		6
3	"	LR※3種		12.5		6
4	"	LR※3種		12.4		6
第9号住居跡						
19-1		RL 3種		13.5	口唇: 繩端刺突、 RL側面押圧 同一個体	6
2		RL 3種		12.4		6
3		RL 3種		12.1		6
4		RL 3種		12.0		6
5	覆	RL 3種		10.2		6
第1号土塙						
24-1	覆	LR※3種		6.5	実測図参照	5
2	"	R(R·R)1種		6.7	口唇: 棒状工具刺突	6
3	"	LR※3種		10.4	口唇: 指頭圧痕・爪痕	6

図版	層	文様		厚 (mm)	備考	群
		外 面	内 面			
24-4	覆	L(R·L)5種		11.2	口唇: 繩端刺突	6
5	"	LR 3種		8.3		6
6	"	LR		8.0		5
7	"	RL※		6.3		5
8	"	LR		6.7		5
9	"	LR		6.5		5
10	"	RL※		7.6		5
11	"	R(L·R)※		6.7		5
12	"	R(L·R)5種	外面同	6.6		6
13	"	R(L·R)5種		5.6		6
14	"	R(L·R)5種		10.0	条痕	6
25-15	"	R(L·R)5種		8.8		6
16	"	R(L·R)5種		8.6		6
17	"	R(L·R)5種		10.1		6
18	"	R(R·R)1種		10.0		6
19	"	R(R·R)1種		8.1		6
20	"	R(R·R)1種		8.3		6
21	"	LR 3種		12.6		6
22	"	LR※3種		14.0		6
23	"	LR※3種		13.3		6
24	"	LR※3種		12.9		6
25	"	L(R·L)※5種?		11.2		6
26	"	LR※3種		11.9		6
27	"	LR※3種		10.8		6
第2号土塙						
28-1	覆	R(L·L·R·R)※5種		11.0	口唇: 棒状工具刺突	6
2	"	LR 3種		6.6		6
3	"	貝殻腹縁・棒状工具刺突		8.3		3
4	"	LR※3種	外面同	10.3		6
5	"	LR※3種		12.5		6
6	"	LR※3種	外面同	13.2		6
第3号土塙						
30-1	覆	LR※3種		10.4	実測図参照	6
2	"	LR※3種		11.2		6
3	"	LR※3種		11.7		6
4	"	LR※3種		11.6		6

第15表 遺構内出土土器観察表 (2)

図版	層	文様		厚 (mm)	備考	群	厚 (mm)	備考	群
		外 面	内 面						
30-5	覆	L R ※ 3種		9.6		6			
第4号土塙									
33-1	覆	L R ※ 3種	外面同	9.5		6			
2	"	L R ※ 3種	外面同	12.7		6			
3	"	L R ※ 3種		10.2		6			
4	"	L(R·L) 5種		10.1		6			
第7号土塙									
37-1	覆	L 単軸絡条体第1類		11.6	剥落面: RL 3種	6			
2	"	L 単軸絡条体第1類		-		6			
第8号土塙									
37-4	覆	LR 3種		10.8		6			
第9号土塙									
38-1	覆	RL 3種	外面同	10.0		6			
第10号土塙									
39-1	覆	竹管押引き		9.1		8			
2	"	LR		7.2		8			
3	"	LR 3種		10.8		6			
4	"	RL ※		9.9		8			
5	"	LRL		9.4		8			
第11号土塙									
41-1	覆	L(R·L)※ 5種		13.3		6			
2	"	LR ※ 3種		9.6		6			
3	"	LR ※ 3種	条痕	11.4		6			
4	"	L 単軸絡条体第1A類	条痕	11.3		6			
43-5	"	R(LR·R)		9.1	実測図参照	6			
44-6	"	R(R·R) 2種		11.6		6			
7	"	LR ※ 3種		10.4	LR 3種側面押压	6			
8	"	LR ※ 3種		11.6		6			
9	"	LR ※ 3種		10.4	底辺部: 指頭圧痕	6			
10	"	LR ※ 3種		9.4	底辺部: 指頭圧痕	6			
第13号土塙									
45-1	覆	LR ※ 3種		11.2	補修孔	6			
2	"			9.6		6			
3	"	LR ※ 3種		13.2		6			
4	"	L(R※·R) 3種?		11.2	LR ※ 3種側面押压	6			
第14号土塙									
46-1	覆	LR ※ 3種				11.1			6
2	"	R(LR·R)側面押压				10.2			6
3	"	L(R·L) 5種				11.1			6
4	"	R(R·R) 2種				13.7			6
第17号土塙									
49-1	覆	LR ※ 3種				7.2	沈線		2
2	"	LR ※ 3種				6.0			2
3	"	RL 3種				8.2			2
4	"	LR 3種				6.2			5
5	"	LR 3種				7.2			5
6	"	LR 3種	外面同			7.6			5
7	"	RL 3種				5.4			5
50-8	"	LR 3種				7.9			6
9	"					8.7	口唇: 指頭圧痕・爪痕		6
10	"	LR 3種	外面同			11.4			6
11	"	LR 3種	外面同			-			6
12	"	LR 3種	外面同			13.0			6
13	"	R(R·R) 1種				11.3			6
14	"	R(R·R) 1種				10.7			6
15	"	R(L·R) 5種				9.0			6
16	"	R(L·R) ※ 5種				10.0			6
17	"	RL ※ 3種、LR ※ 3種				7.5	実測図参照		7

*……○段多条
頁……頁岩
黒……黒曜石
安……安山岩
砂……砂岩

閃……閃綠岩
凝……凝灰岩
玢……玢岩
輝……輝綠岩
チャ……チャート
ホ……ホルンフェルス

石英……石英
花崗……花崗閃綠岩
石ホ……石英ホルンフェルス
輝凝……輝綠凝灰岩

第16表 遺構内出土石器観察表(1)
遺構内出土石器(剝片)

図版 No.	器種	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
第5号住居跡								
10-1	石匙	床	45.5	27.0	8.0	(8.45)	頁	
2	不定 I	覆	20.0	37.5	7.8	(8.20)	"	
第8号住居跡								
17-1	石鍛	床	35.5	15.5	6.5	(3.45)	頁	
2	石鍛	覆	(33.0)	(10.0)	(4.5)	(1.50)	"	
3	石槍	"	52.0	18.0	9.5	(7.95)	"	
4	石匙	床	(46.0)	(19.0)	(8.0)	(7.30)	"	
5	不定 II	"	(39.0)	(26.5)	(14.0)	(10.40)	"	
6	石槍	"	(30.0)	(24.0)	(12.0)	(8.55)	黒	
7	不定 II	"	(25.0)	(28.0)	(8.5)	(6.15)	頁	
8	不定 II	"	45.0	27.0	7.5	(7.65)	"	
第9号住居跡								
20-1	不定 I	覆	36.5	24.5	8.5	7.40	頁	
2	不定 II	"	(33.0)	(27.5)	(11.0)	(11.60)	"	
3	石匙	"	63.0	19.0	4.5	6.60	"	
第1号土塙								
26-2	不定 II	覆	49.0	43.0	12.0	35.00	頁	
3	石槍	"	(27.0)	24.0	7.0	(3.10)	"	
4	不定 II	"	(25.0)	(23.0)	(11.0)	(0.90)	"	
5	石鍛	"	34.0	13.0	5.0	2.20	"	
第6号土塙								
35-1	不定 II	覆	43.0	29.0	11.5	13.00	頁	
2	不定 II	"	27.0	24.0	7.5	5.15	"	
第7号土塙								
37-3	石鍛	覆	36.0	13.0	7.0	3.55	頁	
第10号土塙								
39-6	不定 II	覆	49.0	24.5	11.5	12.40	頁	

図版	器種	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
第13号土塙								
47-1	石槍	覆	58.9	25.0	10.0	14.50	頁	
2	R フレ	"	40.0	30.0	15.0	21.60	"	
4	石匙(横)	"	69.0	35.0	8.0	14.30	"	
5	石槍	"	(29.0)	(23.5)	(11.5)	(7.50)	"	
第14号土塙								
47-3	不定 II	覆	68.0	26.5	7.0	12.70	頁	
6	石槍	"	42.0	21.0	11.5	10.00	"	
第15号土塙								
48-1	石匙	覆	(71.0)	24.0	10.0	(14.70)	頁	
2	不定 I	"	56.5	34.0	10.0	18.25	"	
5	不定 II	"	(64.0)	32.0	8.5	(17.90)	"	
第16号土塙								
48-4	籠	覆	80.0	35.5	8.5	28.70	頁	
第17号土塙								
51-1	籠	覆	56.0	37.0	12.0	24.00	頁	
2	不定 II	"	52.0	31.0	9.0	10.40	"	
3	不定 I	"	(22.0)	(23.0)	(17.0)	(42.50)	"	
4	石槍	"	(32.5)	(22.0)	(8.0)	(5.00)	"	

遺構内出土石器(礫)

図版	器種	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
第5号住居跡								
11-3	石斧 I c	覆	(122)	(48)	25	(231)	木	
4	石斧 I c	"	(92)	(48)	(32)	(194)	輝	
5	敲磨 III	"	90	72	(47)	(380)	チャ	
6	敲磨 I	"	138	89	42	718	安	機能面60×8 mm
7	敲磨 V	"	151	85	37	610	砂	
8	敲磨 I	"	(120)	(100)	42	(574)	砂	機能面(88)×8、13号土塙と接合
9	敲磨 III	"	96	53	36	355	輝	

第17表 遺構内出土石器観察表(2)

図版	器種	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
11-10	敲磨Ⅲ	覆	61	59	54	305	安	
10-11	敲磨Ⅶ	" (212)	(273)	52	(4400)	玢	E33・F34・F40・G34・K42と接合	
第6号住居跡								
14-15	礫器?	覆	62	51	15	75	頁	
第8号住居跡								
17-9	敲磨Ⅰ	床	(102)	68	73	(615)	安	機能面(75)×15mm、39×15mm
10	敲磨Ⅲ	覆	68	62	(51)	(284)	チャ	
11	敲磨Ⅲ	"	76	(54)	(40)	(182)	チャ	
12	敲磨Ⅵ	床	106	94	67	900	花閃	
第9号住居跡								
20-4	礫器	覆	88	81	34	320	チャ	
5	敲磨Ⅰ	" (59)	(48)	(23)	(70)	砂		
21-6	石斧Ⅱb	"	180	65	48	920	凝	
7	石斧Ⅰc	" (86)	—	38	(240)	安		
8	石斧Ⅰc	"	180	65	36	668	輝	
9	敲磨Ⅲ	"	156	75	34	748	輝	
10	敲磨Ⅲ	"	80	76	69	545	砂	
11	敲磨Ⅶ	" (205)	(101)	64	(1625)	砂		
22-12	石錐Ⅰ	"	125	83	29	461	チャ	
13	石錐Ⅰ	"	112	78	36	427	安	
14	石錐Ⅰ	"	103	93	21	334	石ホ	
15	石錐Ⅰ	"	119	79	32	447	安	
16	石錐Ⅰ	"	114	71	23	296	砂	
17	石錐Ⅰ	"	153	105	25	493	安	
18	石錐Ⅰ	"	108	60	18	173	安	
19	石錐Ⅰ	" (94)	(86)	(29)	(309)	チャ		
20	石錐Ⅰ	"	95	80	23	260	安	
第1号土塙								
26-1	石斧Ⅱb	覆	67	38	16	70	輝	
6	石錐Ⅰ	" (94)	75	24	(220)	チャ		

図版	器種	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
26-7	敲磨Ⅰ	覆	(57)	(68)	(30)	(95)	砂	
8	敲磨Ⅲ	"	80	(55)	53	(214)	凝	L40と接合
第3号土塙								
31-1	敲磨Ⅰ	覆	(88)	64	48	(328)	安	機能面(56)×7mm
2	礫器	"	83	70	46	326	砂	
3	石斧Ⅰc	" (54)	(43)	(11)	(36)	頁	E39と接合	
第9号土塙								
38-2	石錐Ⅰ	覆	95	41	19	110	砂	
第11号土塙								
44-1	敲磨Ⅰ	覆	(78)	65	50	(352)	安	機能面(42)×12mm
2	石錐Ⅰ	" (100)	(51)	(29)	(264)	砂		
3	敲磨Ⅲ	"	75	56	17	110	砂	
4	敲磨Ⅲ	" (58)	(72)	(32)	(192)	頁		
5	石斧Ⅰc	" (87)	(50)	(27)	(177)	砂	14号土塙と接合	
6	礫器?	"	71	50	26	110	凝	
7	敲磨Ⅲ	" (119)	59	30	(305)	輝		
第13・14号土塙								
47-7	敲磨Ⅰ		(116)	(75)	(55)	(557)	安	機能面98×9mm、(第14号土塙)
8	敲磨Ⅲ	覆	(67)	(66)	(55)	(230)	石	
9	敲磨Ⅰ	"	101	62	25	231	安	機能面66×6mm
10	敲磨Ⅰ	" (77)	(85)	(32)	(214)	砂	機能面66×31mm、(第14号土塙)	
11-8	敲磨Ⅰ	" (120)	(100)	42	(574)	砂	(第13号土塙)、5号住居と接合	
44-5	石斧Ⅰc	" (87)	(50)	(27)	(177)	砂	(第14号土塙)、11号土塙と接合	
第16号土塙								
48-3	石斧Ⅰc	覆	66	34	10	37	輝凝	
第17号土塙								
51-5	石斧Ⅰc	覆	135	47	24	189	輝	
6	石斧Ⅰc	" (107)	(50)	27	(223)	輝	N40と接合	
7	石錐Ⅱ	"	76	61	30	178	石ホ	
8	敲磨Ⅶ	" (131)	(106)	23	(120)	砂		
9	敲磨Ⅲ	"	76	62	46	320	チャ	

第18表 遺構外出土土器觀察表(1)

図版	出土 地点	層	文 様		厚 (mm)	備 考
			外 面	内 面		
第1群						
53-1	F31	V	爪形文		4.3	
第2群						
53-2	35 I	R L		7.0	沈線	
3	H42	V R L		8.9	沈線	
4	M40	R L R		6.4		
5	Q42	L R		9.6		
6	N40	R L, L R		6.2	羽状構成	
7	P40	L R		5.5	羽状構成	
8	M41	L R		6.4		
9	I41	V R L		5.7		
10	Q39	IV R L R		6.5		
11	M39	R L R		7.0		
12	35 I	R L R		7.9		
13	P39	R L R		6.6		
14	35 I	R L R		8.3		
15	O41	V R L R		8.2		
16	R40	R L R		7.7		
17	O41	V R L		7.5		
18	O39	R L R		6.8		
19	M39	VI R L R		7.0		
20	35 I	R L		8.6		
21	Q40	L R		7.2		
22	P39	R L R		7.4		
23	P42	R L R		7.5		
24	M39	R L R		8.0		
25	P38	攤 R L		7.6		
26	P42	R L R		7.2		
27	35 I			7.3		
28	Q40			7.7		
29	M39	VI R (R · R)		6.0		
第3群						
54-30	K17		貝殻腹縫、棒状工具刺突	8.4	口唇：貝殻腹縫刺突、補修孔	
31	I45	I	貝殻腹縫	9.8		
32	M39	V	貝殻腹縫	7.4		
33	M23	III	擦痕	9.1		
第4群						
54-34	H22	V	貝殻条痕、沈線	6.2		
35	H22	V	貝殻条痕	5.7		

図版	出土 地点	層	文 様		厚 (mm)	備 考
			外 面	内 面		
第5群						
54-36	2住	覆	R L		8.4	
37	K38	VI	R L		8.7	
38	F41	V	R L		7.9	
39	I44	V	L R		6.4	補修孔
40	B63	V	R L		7.4	
41	B63	V	R L		5.3	
42	N40		L R		7.4	
43	J42	V	R L *		5.7	
44	H41	V	L R		7.2	
45	40II		L R *		7.1	
46	J41	V	L R		6.5	
47	J31		L R		6.3	
48	J42	V	L R		6.9	
49	C62	V	R L		7.1	
50	2住	覆	R L *		5.7	
51	O40	V	L R		7.0	
52	N40		L R		7.4	
53-53	I41	V	L R		6.8	
54	L37		L R		7.2	
55	C63	V	R L		5.9	
56	L35		R L		8.4	
57	H51	V	R L		6.7	
58	J40	V	L R		7.4	
59	60IV		L R		6.1	
60	B64	V	R L		8.4	
61	B63	V	R L		7.5	
62	L44		L R		6.8	
63	65IV		R L		9.1	
64	M48		L R		6.8	
65	D51	V	L R		7.1	
66	B63	V	L R		7.3	
67	40III	V	L R		8.3	
68	B63	V	R L		8.8	
69	65IV		L R		7.0	
70	G56	V	L R		7.5	
71	40I		L R *		5.1	
第6群						
58-72-62-99 実測図参照						
63-100	G33	V	L R *	3種	9.2	口縁：指頭圧痕、沈線
101	G33	V	L R *	3種	11.0	沈線
102	3住	覆	L R	3種	8.5	口縁：指頭圧痕、爪痕

第19表 遺構外出土土器観察表(2)

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外面	内面		
63-103	I 34	V	R L 3種		12.4	口縁: R L 3種側面押压
104	M 41		L R ※ 3種側面押压		7.8	
105	M 36	VI	L R ※ 3種		8.4	口唇: 指頭圧痕
106	M 36	VI	L R ※ 3種		9.1	口唇: 指頭圧痕、口縁: 側面押压
107	I 40	V	L R ※ 3種		11.2	R原体馬蹄形圧痕
108	L 40		L R 3種		6.4	
109	J 33	IV	L R ※ 3種		7.6	口唇: 指頭圧痕、爪痕
110	F 33	V	R (R・R) 2種・L R 3種		12.8	結束第1種
111	M 39	VI	R L ※ 3種・L R ※ 3種		14.7	結束第1種、補修孔
112	F 39	V	R L 3種		10.0	
113	K 33	V	L R 3種		10.1	
114	I 31	V	L R ※ 3種		11.9	口唇: L R ※ 3種回転
115	F 41	V	L R ※ 3種		12.9	口唇: 繩端圧痕、補修孔
116	H 42	V	L R ※ 3種	条痕	10.3	口唇: 指頭圧痕
117	15III 盛		L R ※ 3種		8.6	
118	F 41	V	L R ※ 3種	外面同	7.6	口唇: L R ※ 3種側面押压
119	F 41	V	L R ※ 3種		9.5	
64-120	I 34	V	R L 3種	外面同	10.0	口唇: R L 3種回転
121	G 30	V	L R ※ 3種		9.7	口唇: R L 3種側面押压
122	F 37	V	R L 3種		12.0	
123	N 41	V	L R 3種		13.8	
124	J 32	IV	L R 3種		8.5	
125	G 33	V	L R 3種		9.6	
126	H 33	V	L R 3種		10.1	口唇: 鋸歯状キザミ
127	G 33	IV	L R 3種		8.6	
128	G 33		L R 3種		10.8	口唇: 鋸歯状キザミ
129	E 33	V	L R 3種		9.5	
130	I 42	V	L R 3種	外面同	10.9	
131	B 56	III	L R 3種	外面同	10.2	外: 羽状構成
132	G 33	V	L R 3種		13.0	
133	G 33	IV	L R 3種		14.2	羽状構成
134	F 33	V	L R 3種		8.1	
135	G 34	V	L R 3種		8.3	口唇: 指頭圧痕
136	G 33	V	L R 3種		8.1	口唇: 指頭圧痕
137	G 33	V	L R 3種		8.0	口唇: 指頭圧痕
138	N 41	V	L R 3種		6.9	羽状構成
139	I 41	V	L R 3種		10.3	
140	G 33	V	L R 3種		8.7	
65-141	G 33	V	L R 3種	外面同	11.1	
142	G 33	V	L R 3種		8.9	口唇: L R 3種側面押压

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外 面	内 面		
65-143	K 33	V	L R ※ 3種		13.7	口唇: L R 3種回転
144	P 40	IV	R (L・R) 5種		7.6	口唇: 繩端圧痕
145	30II		R (L・L・R) 5種?		9.0	
146	H 31	V	R (L・L・R・R) 5種?		8.7	
147	P 40	V	R (L・R) 5種		9.3	
148	G 33	IV	R (L・L・R・R) 5種		8.1	
149	G 34	V	R (L・L・R・R) 5種		8.7	
150	G 34	V	R (L・L・R・R) 5種		8.1	
151	15III	III	L(R・R・L・L・R・L・R・L)	5種	7.4	
152	I 41	V	R (L・L・L・R) 5種		10.3	補修孔(未貫通)
153	I 32	V	R (L・L・R・R) 5種		10.1	口唇: 鋸歯状キザミ
154	K 41	V	R (L・R) 5種		9.0	補修孔
155	J 41	V	R (L・R) 5種?		10.7	
156	G 33	V	R (L・R) 5種		7.8	補修孔
157	K 41	V	R (L・R) 5種		9.0	
158	G 33	V	R (L・L・R) 5種?		6.4	条痕
159	2 住	掘	R (L・L・R) 5種		8.2	
160	J 40	V	L (R・R・L・L) 5種		10.1	
66-161	J 41	V	R (L・L・R) 5種		8.0	
162	J 41	V	R (L・L・R) 5種		8.0	条痕
163	I 41	V			9.3	
164	G 33	V	R (L・L・R) 5種		8.7	
165	1 住	覆	R (L・L・R・R) 5種		8.2	口唇: 繩端圧痕
166	J 40	V	L (R・L) 5種		9.5	
167	J 42	V	R (L・L・R・R) 5種?		9.3	補修孔
168	J 41	V	L (R・R・L・L) 5種		10.3	
169	F 40	V	R (L・R) 5種		10.2	
170	F 40	V	R (L・R) 5種		10.5	
171	L 41	IV	L (L・L・R・R) 5種		9.1	
172	L 32	撥	R (L・R) 5種?		9.0	
173	H 33	V	R (L・R) 5種		7.5	
174	I 31	V	L (R・R・L・L) 5種		10.5	口唇: 鋸歯状キザミ
175	K 40	V	L (R・L・L) 5種?		8.6	
67-176	N 42	V	R (R・R) 2種		9.8	
177	L 41	V	L (R・L・L) 5種?		8.6	
178	F 40	V	R (L・R) 5種?		9.9	口唇: 鋸歯状キザミ
179	J 32	IV	R (L・R) 5種		9.5	
180	L 41	V	L (R・L・L) 5種?		8.1	
181	F 34	V	R (R・R) 2種		8.2	
182	F 34	V	R (L・L・R) 5種?		9.3	口唇: 鋸歯状キザミ
183	G 33	V	R (L・L・R・R) 5種?		6.1	
184	I 32	V	R (R(L・R)・R(L・R))		10.2	

第20表 遺構外出土土器觀察表(3)

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外 面	内 面		
67-185	H39	V	R (L・R) 5種?		11.7	口唇：指頭圧痕、爪痕
186	I41	V	LR※3種		10.3	口唇：RL※3種側面押圧
187	J31	V			9.2	口唇：R (R・R) 2種回転
188	L41	VI	LR 3種		9.8	LR※3種側面押圧
189	K41	V	LR※3種		12.1	LR 3種側面押圧
190	G43	V	LR※3種		10.4	LR※3種側面押圧
68-191	M36	VI	LR※3種		11.3	LR※3種側面押圧
192	M36	VI	LR※3種		10.9	LR※3種側面押圧
193	K41	V	LR※3種、L(L・L)2種側面押圧?		12.2	LR 3種側面押圧
194	G34	V	LR※3種側面押圧		10.6	
195	I41	V	LR※3種		13.1	繩端馬蹄形圧痕
196	G41	V	LR※3種		10.1	LR※側面押圧
197	L41	V	LR※3種		10.5	
198	F41	V	LR 3種		10.3	
199	J32	V	LR※3種		13.1	
69-200	E33	V	LR※3種		12.3	
201	I41	V	LR※3種		12.1	
202	I31	V	LR※3種		12.4	
203	F34	V	LR※3種		11.7	
204	H31	V	LR※3種		9.8	
205	H41	V	LR※3種		12.1	
206	G33	V	LR※3種		13.0	
207	F34	V	LR※3種		10.0	
208	L40	V	LR 3種		10.3	補修孔
209	G34	V	LR※3種		10.8	
210	F34	V	LR※3種		12.1	
211	L41	V	LR※3種		12.6	
212	F40	V	LR※3種		9.7	
213	J32	V	LR※3種		10.7	
70-214	F42	V	LR※3種		10.5	
215	F40	V	LR※3種		12.2	
216	F34	V	LR 3種		9.4	
217	K41	V	LR※3種		9.8	
218	H33	V	LR※3種		12.3	
219	J40	V	LR 3種		11.3	
220	J41	V	LR※3種		12.9	
221	G33	V	LR※3種		10.2	
222	G33	V	LR※3種		12.4	
223	L40	V	LR 3種		8.7	
224	F40	V	LR※3種		13.8	

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外 面	内 面		
70-225	F41	V	LR※3種		12.8	
71-226	F40	V	LR※3種		13.0	
	H41	V	LR※3種		13.9	
	E31	V	LR※3種		11.7	
	I42	V	LR 3種		10.1	
	L40	V	LR※3種		9.8	
	D53	IV	LR 3種		12.6	
	H31	V	LR※3種		12.7	
	I42	V	LR※3種		11.0	
72-234	M42	V	LR※3種		12.6	
	K43	V	LR 3種		11.7	
	I34	V	RL※3種		10.2	
	M41	VI	LR※3種		15.1	
	I34	V	RL※3種		10.9	
	I41	V	LR※3種		9.8	
	F17	V	LR※3種		12.3	
	J34	V	RL※3種		10.3	
	35 I	V	LR※3種		14.0	
	J32	V	LR※3種		11.5	
	C57	IV	LR※3種		11.8	
73-245	H33	V	LR※3種		11.0	
	J32	V	LR※3種		11.2	
	Q38	IV	LR※3種		10.8	
	J33	V	LR 3種		11.0	
	I31	III	LR※3種・RL※3種		7.6	
	P40	V	LR※3種		11.0	
74-251	F33	V	R (R・R) 2種		10.9	
	G33	IV	R (R・R) 1種		11.1	
	P40	V	R (R・R) 1種		8.7	
	N39	V	R (R・R) 1種		8.5	
	G33	V	R (R・R) 2種		11.6	
	J41	V	R (R・R) 2種		10.4	
	N36	攪	R (L・R) 5種		7.0	
	F33	V	L (R・L) 5種		12.6	
	G34	V	R (L・R) 5種		6.9	
	F33	V	L (L・R) 5種+R		11.3	付加条?
	H38	III	L (R・L) 5種		12.1	
	F33	V	L (R・L) 5種		12.0	
75-263	G34	IV	R (L・L・R) 5種		11.8	
	G34	IV	R (L・L・R) 5種		11.5	
	K33	VI	R (L・L・R) 5種		10.3	
	J32	V	R (L・L・R) 5種		10.8	

第21表 遺構外出土土器観察表(4)

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外面	内面		
75-267	G33	V	R (L・L・R) 5種	条痕	11.0	
	268	J32	V	R (L・L・R) 5種	条痕	11.2
	269	D34	V	L (R・R・L) 5種	外面同	9.4
	270	I32	V	R (L・L・R) 5種	条痕?	11.0
	271	2住掘	V	R (L・L・R) 5種?		11.8
	272	F34	V	R (L・L・R) 5種		9.5
76-273	J32	V	R (L・L・R・R) 5種		10.9	
	274	40III	V	R (L・L・R) 5種		9.8
	275	J41	V	R (L・R・R) 5種?		10.2
	276	J31	V	R (L・L・R) 5種		11.8
	277	J41	V	R (L・L・R・R) 5種		10.6
	278	G33	V	R (L・L・R) 5種		12.0
	279	G33	V	LR3種・R (L・R・R) 5種	LR 3種	9.3
	280	J41	V	L (R・L・L) 5種		10.2
	281	L41	V	L (R・L・L) 5種		10.0
	282	P40	V	R (L・L・R) 5種		11.1
	283	G33	V	R (L・R・R) 5種	外面同?	11.9
	284	I40	V	R (L・R・R) 5種		11.0
77-285	F40	V	L (R・R・L・L) 5種		13.7	
	286	I40	V	L (R・R・L・L) 5種		12.0
	278	F34	V	R (L・L・R・R) 5種		8.8
	288	G34	V	R (L・L・R・R) 5種		9.8
	289	2住掘	V	R (L・L・R・R) 5種		10.5
	290	J32	V	R (L・L・R・R) 5種		9.5
	291	I40	III	R (L・R・R) 5種		8.0
	292	L32	V	R (L・R) 5種		8.7
	293	H47	IV		R (L・R) 5種側面押压	10.0
	294	15III	III	L (R・R・L・L・R・L・R・L) 5種		10.7
	295	J42	V	L単軸絡条体第1類	12.5 羽状構成	
	296	J42	V	L単軸絡条体第1類	12.8 羽状構成	
	297	J42	V	L単軸絡条体第1類	11.2	同一個体
	298	J42	V	L単軸絡条体第1類	11.2	
	299	F34	V	L単軸絡条体第1類	8.0	
	300	15III	盛	L単軸絡条体第1類	9.8	
	301	C52	IV	L単軸絡条体第4類	10.5	

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外 面	内 面		
306	M23	III	LR※・RL※		7.7	羽状構成、補修孔
第8群						
79-307~82-322	実測図参照					
83-323	J34	III	竹管押引き		7.6	324・325同一個体
	324	J35	III	竹管押引き	6.3	
	325	J34	III	竹管押引き	7.4	
	326	J26	III	竹管押引き	6.2	328~330、333、336同一個体
	327	J29	V	竹管押引き	7.2	
	328	J26	III	竹管押引き	5.0	
	329	J26	III	竹管押引き	6.0	
	330	J26	III	竹管押引き	6.6	
	331	I30	V	竹管押引き	6.4	332、344同一個体
	332	I31	V	竹管押引き	7.9	第10号土塙接合
	333			竹管押引き	7.1	
	334	J28	V	竹管押引き	7.3	335同一個体
	335	J32	V	竹管押引き	8.0	
	336	I27	IV	竹管押引き	5.8	
	337	L32	VI	竹管押引き	8.2	338~341同一個体
	338	J32	IV	竹管押引き	7.9	
	339	J28	IV	竹管押引き	7.8	
	340	J31		竹管押引き	8.7	
	341	J31		竹管押引き	7.9	
	342	G29	V	ループ文	6.9	
	343	F30	III	ループ文	7.9	
	344	J31	V	竹管押引き	10.5	
	345	G30	V	ループ文	7.1	342・343同一個体
84-346	I30	V	LR		7.1	
	347	G29	IV	RL	8.3	
	348	K41	IV	L結節横位回転	7.9	
	349	H29	V	RL	7.3	
	350	G26	V	RL	7.1	補修孔
	351	H29	V	RL	9.4	第2号溝状ピット接合
	352	L30	V	LR L	7.2	
	353	D31	V	RL	8.2	
	354	N41	V	LR※	9.8	
	355	H30	V	LR※	8.3	
	356	H30		LR※	9.0	
	357	O41	IV	RL※	7.3	
	358	C50	IV	RL※	7.2	補修孔
	359	P40	IV	LR※	8.4	
	360	N41	IV	LR※	9.2	補修孔
	361	3住覆		LR※	9.4	補修孔

第22表 遺構外出土土器觀察表(5)

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外 面	内 面		
84-362	K40	V	LRL		7.8	
363	F25		RRL		8.4	
364	25III		RRL		8.7	
365	K36	V	LR*		8.3	
366	H27	IV	LRL		7.3	補修孔
367	F25	III	LR*		9.1	
85-368	K30	VII	LR*		8.6	
369	K30	VII	LR*		8.9	
370	G27	IV	ループ文・RRL		8.0	
371	N41	IV	ループ文・LR*		10.5	
372	L30	V	LR*		10.3	補修孔
373	N41	V	ループ文・RL*		10.3	
374	J34	V	ループ文・RL*		8.1	
375	J33	V			12.6	補修孔
376	N41		ループ文・RL*		8.6	
377	K33	V	ループ文・RL*		8.8	
378	K44	V	ループ文・RL*		9.8	
379	J30	I	ループ文・RL		8.3	
380	J35	III			10.9	
381	H31	V	ループ文		8.5	
382	K37	IV	ループ文・LR*		10.4	
383	L43	V	ループ文・LR*		11.0	
384	G30	V	ループ文・LR*		10.9	
385	G26	V	ループ文・RL*		8.9	
86-386	I29	V	LR*		7.6	羽状構成
387	F40	V	LR*・RL*		8.2	
388	G29	V	LR*		9.0	
389	G29	IV	LR		8.4	羽状構成、補修孔
390	K32	V	LR*		9.8	羽状構成、補修孔
391	M47		LR		8.7	交差
392	G35	IV	LR*		9.2	羽状構成
393	H36	V	LR・RL*結束第1種		7.0	羽状構成
394	G30	V	RL結束第1種		8.0	
395	H29	V	RL結束第1種		8.0	
396	H27	III	LR結束第1種		9.3	羽状構成、補修孔
397	H29	V	RL*・LR*結束第1種		8.2	羽状構成
398	H29		RL*・LR*結束第1種		8.1	羽状構成
399	M45	V	LR*・RL*		10.2	羽状構成
87-400	K40	IV	LR*		10.6	補修孔
401	F29	V	RL*		8.0	

図版	出土地点	層	文様		厚 (mm)	備考
			外 面	内 面		
87-402	H30	IV	R L		7.8	
403	L30	IV	LR		7.1	
404	20III	III	LR*		8.2	
405	O39	IV	LR*		8.8	
406	Q41	V	LR		10.4	
407	I29	IV	LR*・R結節横位回転		8.5	
408	K47	V	RL		7.3	
409	G30	IV	RL		7.8	
410			RL*		9.1	
411	79-312		参照			
412	81-315		参照			
413	79-309		参照			
第9群						
88-414	I39	IV	LR		5.9	
415	M41		魚骨回転文		8.4	
416	M41		魚骨回転文・LR		7.8	
417	J39	IV	L単軸絡条体第1類		6.4	
418	J39	III	L単軸絡条体第1類		7.3	
419	G29	IV	半截竹管沈線・RL*		9.0	
420	H30	V	L(R・L・R)・R(L・L・R))		9.4	
421	I29	II	単軸絡条体第5類		8.2	
422	G32	V	単軸絡条体第5類		8.3	

第23表 遺構外遺物観察表(6)

石 鏃

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
92-1			37.5	15.0	5.0	2.15	玉	II	2.4	
-2			34.5	14.0	4.0	1.35	貞	I	1.9	
-3	H40	I	42.5	13.5	6.0	2.9	"	II	2.6	
-4			35.0	16.5	6.0	2.4	"	II	2.0	
-5			24.0	13.0	4.0	0.85	玉	I	1.4	
-6	H32	IV	37.0	18.0	6.5	3.35	貞	I	1.7	
-7	2住床	(34.5)	18.0	9.0	(5.7)	"	I	1.9		
-8	盛	(28.0)	(13.0)	7.0	(2.0)	"				
-9	2住掘	32.0	10.0	4.0	2.1	"	III	3.2		
-10	F31	V	34.5	10.0	4.0	1.0	"	III	3.5	
-11	H33	"	29.5	10.0	3.5	1.1	"	III	3.0	
-12	J33	"	35.0	13.0	4.0	1.0	"	II	2.7	
-13	G29	IV	27.5	14.0	3.5	1.25	"	II	2.0	
-14	K47		36.5	16.5	3.5	1.8	"	II	2.2	
-15	J32	V	19.0	9.5	2.0	0.4	"	II	2.0	
-16	I33	"	19.0	14.0	3.5	1.8	"	I	1.4	
-17	J33	"	25.0	14.0	3.0	1.0	"	I	1.8	
-18			30.0	9.5	3.0	0.95	"	III	3.2	
-19	F41	V	31.0	9.0	3.0	0.7	"	III	3.4	
-20	I29	"	44.0	12.0	4.0	2.2	緑貞	III	3.7	
-21	F40	"	39.5	10.5	5.0	2.0	貞	III	3.8	
-22	F19	"	45.5	17.0	5.5	3.0	"	II	2.7	
-22			17.5	8.0	3.0	0.2	"	II	2.2	
-24	H34		19.5	9.5	1.5	0.36	"	II	2.1	
93-25	G32	V	44.0	13.0	6.0	0.3	"	III	3.4	
-26	F34	"	47.0	13.0	6.0	2.6	"	III	3.6	
-27	H33	"	35.0	10.5	5.0	1.5	"	III	3.3	
-28	L40	"	33.5	10.5	4.5	1.5	"	III	3.2	
-29	H33	"	38.5	13.5	5.0	2.05	"	II	2.9	
-30	F41	"	29.0	12.5	4.5	2.0	"	II	2.3	
-31	H33	"	25.0	11.0	5.5	1.1	"	II	2.2	
-32			32.5	12.5	3.0	1.0	"	II	2.6	
-33	M38	IV	43.5	16.5	8.5	5.0	"	II	2.6	
-34	F34	V	40.0	11.5	4.5	2.2	"	III	3.5	
-35	M40	"	56.0	12.5	6.0	3.3	"	IV	4.5	
-36	F40	"	50.0	10.0	6.0	2.5	"	V	5.0	
-37			45.0	11.0	5.5	1.95	"	IV	4.1	
-38	G32	V	44.0	10.5	4.5	1.8	"	IV	4.2	
-39	F40	"	40.5	11.0	5.0	2.3	"	III	3.7	
-40	G42	"	33.0	13.0	6.0	1.9	"	IV	4.8	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
93-41	F40	V	31.5	13.5	5.5	2.1	貞	III	3.8	
-42	H31	IV	31.0	15.0	3.0	0.9	"	III	3.0	
-43	I33	V	28.5	15.0	7.5	2.78	"	II	2.7	
-44	H47	IV	26.5	13.0	6.0	2.1	"			
-45	J43		24.0	11.5	2.5	0.5	黒			
-46	G33	V	28.5	13.5	5.0	2.05	貞			
-47	G34	"	32.5	18.5	5.5	2.86	玉			
-48	E33	"	35.0	20.5	8.5	5.0	貞			
-49	G31	"	28.5	19.5	6.0	3.4	"			
94-50	K37		48.0	10.0	5.0	2.3	"			
-51	G32	V	39.5	10.5	5.5	1.9	"			
-52	盛		40.0	13.5	7.5	3.1	"			
-53	E38	IV	44.5	16.5	7.5	4.8	"			
-54	J40	V	(39.0)	9.0	4.0	(1.0)	"			
-55	耕	(29.0)	(10.0)	(4.0)	(0.8)	"				
-56	I32	V	(37.0)	(11.0)	5.5	(2.0)	"			
-57	H42	"	(33.0)	(10.5)	6.0	(1.5)	"			
-58	H41	"	(28.5)	(10.5)	3.5	(1.0)	"			
-59	J33	"	(33.5)	(11.5)	5.0	(1.85)	"			
-60	盛	(30.0)	(12.0)	4.5	(1.5)	"				
-61	H33	V	(31.5)	(11.5)	(6.0)	(2.13)	"			
-62	E31	II	(31.5)	(12.0)	6.0	(2.1)	"			
-63	J40	V	(30.0)	(13.0)	(6.0)	(2.0)	"			
-64	E36	IV	(46.0)	(20.0)	4.0	(2.5)	"			
-65		(31.5)	(16.0)	(6.0)	(2.15)	"				
-66		V	33.0	15.0	11.0	2.8	"	II	2.2	
-67	E34	"	(28.0)	(15.0)	5.0	(1.0)	"			
-68	2焼	(31.0)	(14.5)	(10.0)	(3.5)	"				
-69	L38	VI	42.0	16.0	6.5	3.8	"	II	2.6	
-70	M23	III	37.0	17.5	4.0	1.8	"	II	2.1	
-71	J32	IV	34.5	15.5	3.5	1.9	"	II	2.2	
95-72	L38	VI	(27.0)	10.0	5.0	(2.3)	"			
	G33	V	(16.5)	(11.5)	(3.5)	(0.42)	"			
	73									
	74	H33								
	75	I43	II	(21.0)	(10.0)	5.0	(0.7)	"		
	76	J41	IV	(23.5)	(10.0)	3.0	(0.85)	"		
	77	J32	V	(24.0)	(10.5)	4.0	(1.1)	緑貞		
	78	J32	IV	(25.0)	(11.5)	5.0	(0.9)	貞		
	79	J33	(18.5)	(10.0)	(3.0)	(0.73)	"			
	-80	K33	VI	(17.0)	(9.5)	3.0	(0.3)	"		
	-81	J41	IV	(21.5)	(11.5)	5.0	(0.8)	"		
	-82	N41	"	(21.5)	(16.0)	4.0	(0.85)	"		

第24表 遺構外遺物観察表(7)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
95-83	2住	覆	31.0	9.0	3.0	1.1	頁	III	3.4	
-84	2住	(32.0)	11.0	4.5	(1.3)	"				
-85	L40	VI	(28.0)	14.0	8.0	(3.1)	"			

石 槍

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
96-86	J39	V	121.5	27.5	12.5	38.0	頁	IV	4.4	
-87	G33	IV	90.0	25.0	12.5	24.5	"	III	3.6	
-88	D34	V	52.0	16.0	9.5	6.5	玉	III	3.3	
-89	I40	" (54.0)	(18.0)	10.0	(9.3)	頁				
-90	F40	" (62.0)	(19.0)	9.0	(10.0)	"				
-91	G33	"	53.0	19.5	11.0	6.2	"	II	2.7	
-92	L39	IV	53.0	19.0	10.0	8.2	"	II	2.8	
-93	J32	"	53.0	18.0	10.0	8.15	"	II	2.9	
-94	III	65.0	36.5	13.0	22.2	"	I		1.8	
-95	盛	56.0	30.0	11.5	17.2	"	I		1.9	
97-96	H35	V	43.5	26.5	8.5	10.0	"	I	1.6	
-97	"	57.5	27.0	8.5	10.8	"	II		2.1	
-98	K30	"	49.5	25.0	11.0	12.2	"	II	2.0	
-99	N41	IV	50.5	22.5	8.5	10.8	"	II	2.2	
-100	G31	V	46.5	24.5	10.0	11.1	"	I	1.9	
-101	L40	"	47.0	22.0	7.5	7.5	"	II	2.1	
-102	J39	III	100.5	28.0	12.0	30.1	"	III	3.6	
-103	C53	IV (53.5)	(19.0)	9.0	(7.8)	"				
-104	F40	V	56.0	23.0	11.0	13.5	"	II	2.4	
-105	L30	"	47.5	24.0	9.5	9.4	"	II	2.0	
-106	G41	IV	54.0	25.0	9.5	9.2	"	II	2.2	
-107	盛	50.0	19.5	10.5	6.0	"	II		2.6	
-108	D34	V	46.0	23.5	10.0	8.9	"	II	2.0	
-109	F40	"	42.5	20.0	9.5	6.8	"	II	2.1	
-110	L34	攪	48.5	21.5	13.5	12.2	"	II	2.3	
-111	K40	V	44.0	22.0	7.5	6.73	"	II	2.0	
98-112	H22	IV (51.5)	(27.0)	(11.5)	(15.7)	"				
-113	G33	V (48.0)	(26.5)	(14.5)	(15.26)	"				
-114	J41	" (47.0)	(18.5)	(7.5)	(8.31)	"				
-115	F34	"	45.0	19.0	7.0	5.3	"	II	2.4	
-116	K40	" (50.0)	(16.5)	(6.0)	(4.03)	"				
-117	H33	" (42.5)	(21.0)	(10.5)	(7.25)	"				
-118	G34	" (39.0)	(25.0)	(11.0)	(5.02)	"				

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
98-119	K41	V	(41.5)	(29.0)	(13.0)	(11.02)	頁			
-120	F40	"	(33.0)	(26.0)	(10.0)	(7.0)	"			
-121	F34	"	(39.0)	(26.5)	(7.5)	(7.9)	"			
-122	H41	"	(41.5)	(23.5)	(9.0)	(7.3)	"			
-123	B59	"	(36.0)	(24.5)	(7.5)	(6.5)	"			
-124	J35	"	(38.0)	(27.5)	(7.5)	(10.1)	"			
-125	C38	"	(34.5)	(19.5)	(6.5)	(4.3)	"			
-126	III	(31.5)	(21.5)	(14.0)	(7.1)	"				
-127	M37	攪	(34.5)	(23.0)	(11.0)	(7.5)	"			
-128	G39	"	(30.0)	(23.0)	(9.0)	(5.0)	"			
-129	F40	V	(31.5)	(24.0)	(7.0)	(4.2)	"			
-130	G33	"	(32.0)	(26.0)	(11.5)	(5.65)	"			
-131	H33	"	(21.5)	(23.0)	(7.0)	(2.6)	"			
-132	F39	III	(21.0)	(27.5)	(7.0)	(4.85)	"			
-133	K38	"	(29.0)	(22.5)	(7.5)	(4.52)	"			
-134	L41	IV	(36.5)	(31.0)	(9.0)	(7.63)	"			
-135	J32	"	(30.0)	(26.0)	(7.5)	(5.15)	"			
-136	F34	V	(28.0)	(21.0)	(6.0)	(3.55)	"			
-137	G33	"	(32.0)	(26.0)	(11.5)	(5.65)	"			
99-138	2住	床	50.0	18.0	9.5	7.95	"			
-139	2住	掘	(33.0)	(21.0)	(8.5)	(5.75)	"			
-140	J28	III	(27.0)	(26.0)	(13.0)	(7.1)	"			
-141	J36	V	(38.0)	(30.5)	(11.5)	(10.9)	"			
-142	2住	攪	(32.0)	(20.5)	(10.0)	(5.15)	"			
-143	2住	掘	(38.0)	(28.0)	(13.0)	(8.15)	"			
-144	H33	V	(38.0)	(30.0)	(16.0)	(12.75)	"			
-145	F40	"	(31.5)	(28.0)	(7.0)	(7.2)	"			
-146	M42	"	(35.0)	(26.5)	(10.5)	(10.63)	"			
-147	G33	"	(33.5)	(31.0)	(10.5)	(10.9)	"			
-148	L35	攪	(25.0)	(26.0)	(7.0)	(5.0)	"			
-149	F35	V	(24.0)	(23.0)	(8.0)	(4.76)	"			
-150	H30	"	(26.5)	(17.0)	(9.5)	(3.75)	"			
-151	F40	"	(26.0)	(18.5)	(8.5)	(2.9)	"			
-152	G33	"	(43.0)	(34.5)	(16.0)	(16.9)	"			
-153	H49	"	(45.5)	(32.5)	(13.5)	(20.1)	"			
-154	L36	"	(32.5)	(24.5)	(10.0)	(9.63)	"			
-155	H42	V	(32.0)	(21.0)	(8.5)	(4.7)	"			
-156	G36	"	(22.0)	(25.0)	(9.5)	(5.8)	"			
-157	H32	V	(18.5)	(22.0)	(11.5)	(6.32)	"			
-158	L37	"	(36.0)	(30.0)	(15.0)	(18.98)	"			
-159	F33	V	(14.0)	(21.0)	(7.0)	(2.3)	玉			
-160	O40	"	(15.0)	(23.5)	(10.0)	(4.1)	頁			

第25表 遺構外遺物観察表(8)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
99-161	J 40	V	(44.0)	(30.5)	(15.5)	(26.8)	頁			

石匙(縦型)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
100-162	F 34	V	61.0	18.0	9.0	9.6	頁			
-163	G 34	"	70.0	18.0	10.0	13.32	"			
-164	D 52	III	62.0	13.0	6.5	5.4	"			
-165	K 29	攪	61.5	14.5	7.0	7.3	"			
-166	K 33	V	75.5	19.5	10.0	15.2	"			
-167	F 38	IV	80.0	17.0	10.0	13.8	"			
-168	K 41	VI	73.0	13.5	9.0	8.3	"			
-169	C 56	V	81.0	18.0	7.0	11.1	"			
-170	J 41	"	59.0	14.0	17.5	5.5	"			
-171	F 40	III	43.0	16.0	8.5	7.0	"			
-172	F 34	V	(55.0)	(19.5)	9.0	(8.5)	"			
-173	L 40	"	64.0	21.5	8.0	11.4	"			
-174	F 28	III	59.5	19.5	7.0	8.1	"			
-175			58.0	21.0	9.0	9.53	"			
-176	J 30	IV	51.0	13.0	6.0	3.9	"			
101-177	H 27	V	89.5	29.0	9.5	25.3	"			
-178	N 36	攪	57.0	18.5	7.5	13.8	"			
-179	L 29	"	55.5	15.0	9.0	7.2	"			
-180	F 34	V	55.5	14.0	8.0	5.9	"			
-181	盛		55.5	14.0	8.0	5.3	"			
-182	H 26	IV	73.5	22.0	8.5	14.9	"			
-183	盛		83.0	37.0	9.0	23.8	"			
-184	D 33	V	56.5	15.5	8.0	7.2	"			
-185	L 40	"	(73.5)	21.0	9.0	(14.9)	"			
-186	J 40	"	(54.5)	(17.5)	9.0	(8.4)	"			
-187	H 41	"	54.5	18.5	8.5	8.9	"			
-188	盛		65.0	21.0	9.5	11.1	"			
-189	"		65.5	19.0	8.5	8.4	"			
-190	F 39	V	(64.5)	(20.5)	9.0	(11.1)	"			
-191	G 39	III	62.5	26.5	8.0	12.8	"			
-192	E 38	V	57.0	21.0	8.5	9.0	"			
102-193	P 41	IV	62.0	24.0	7.0	11.0	"			
-194			50.0	22.0	6.0	6.7	"			
-195	F 32	V	(54.5)	21.5	6.5	(8.4)	"			
-196	H 32	"	(56.5)	(23.0)	(9.5)	(13.3)	"			

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
102-197	J 35		(54.0)	(19.0)	5.5	(5.5)	頁			
-198			(49.5)	16.0	6.0	(5.9)	"			
-199	H 51	IV	56.5	29.0	10.0	13.4	"			
-200	F 39	V	46.0	20.5	6.0	5.3	"			
-201	H 48	VI	(44.0)	(21.0)	6.0	(5.8)	"			
-202	D 52	III	62.0	13.0	6.5	5.4	"			
-203	F 34	V	48.0	19.0	8.5	6.8	"			
-204	I 40	"	53.0	15.0	9.0	5.9	"			
-205	盛		63.0	20.0	10.0	13.7	"			
-206	"		(68.0)	(21.5)	9.5	(14.2)	"			
-207	J 39	IV	(71.0)	(16.0)	8.0	(9.5)	"			
-208	H 42	V	67.5	24.0	7.0	10.5	"			
-209	G 33	"	52.5	29.5	5.5	7.1	"			
-210	C 59	"	70.5	16.5	8.0	9.0	"			
-211	G 34	IV	64.0	(21.0)	9.0	(10.0)	"			
-212	G 33	V	59.0	17.0	8.0	8.1	"			
-213	F 19	IV	54.0	23.0	9.0	9.9	"			
103-214	M 31	"	(71.0)	(37.0)	7.5	(17.2)	"			
-215	E 33	V	73.5	28.0	8.5	15.8	"			
-216	P 39	IV	61.0	26.0	6.0	10.0	"			
-217	K 41	V	62.5	25.0	9.0	13.3	"			
-218	L 41	"	54.0	25.5	10.5	13.3	"			
-219	K 33	"	61.5	29.5	9.5	16.5	"			
-220	2住		51.0	26.0	9.0	11.7	"			
-221	G 46	V	(56.5)	(31.5)	10.0	(16.8)	"			
-222	N 38	攪	47.0	28.0	10.5	12.2	"			
-223	I 41	III	(74.0)	(27.0)	(8.0)	(13.8)	"			
-224	G 32	V	(49.5)	(18.0)	(7.5)	(6.8)	"			
-225	K 38	"	(68.0)	(27.0)	(10.5)	(26.03)	"			
-226	G 32	V	68.5	25.0	9.0	14.2	"			
-227	2住	掘	(48.0)	(19.5)	(11.2)	(11.25)	"			
-228			(55.0)	23.0	8.0	(11.1)	"			
-229	K 31	V	(26.5)	(25.0)	(11.0)	(8.18)	黒			
-230	2住	覆	39.5	28.0	6.2	8.15	頁			
-231	I 42	V	32.0	25.0	6.0	1.5	"			

石匙(横型)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
104-232	H 41	V	42.0	43.0	9.5	10.2	頁			
-233	L 38	攪	49.5	54.5	10.5	18.9	"			

第26表 遺構外遺物觀察表(9)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
104-234	G33	V	63.0	88.0	14.5	49.1	頁			
-235	G37	"	32.5	52.5	10.0	10.6	"			
-236	F40	"	30.5	49.5	7.0	7.5	"			
-237	I41	"	29.0	42.0	7.0	5.5	"			
-238	M40	"	28.0	58.0	8.0	11.5	"			
-239	G32	IV	22.5	33.0	5.5	3.0	"			
-240	E33	V	39.0	59.0	10.5	9.8	"			
-241	H42	"	27.5	(35.5)	4.5	(4.2)	"			
-242	2住掘		35.0	64.0	8.0	23.35	"			
105-243	G34	V	(18.0)	(31.5)	(6.0)	(4.55)	"			
-244	C58	"	53.0	42.0	10.5	17.8	"			
-245	G40	II	28.0	37.5	5.5	5.0	"			
-246	J35	V	(27.0)	(34.0)	6.5	(5.2)	玉			

範状石器

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
106-247	J35	V	60.0	37.0	8.5	22.2	頁			
-248	E33	"	66.5	35.0	13.0	27.2	"			
-249			57.0	27.0	8.5	14.5	"			
-250		III	64.5	33.0	12.8	27.8	"			
-251	H32	V	56.5	38.0	13.5	22.1	"			
-252	G32	"	58.5	36.5	11.0	22.84	"			
-253	F33	"	49.5	32.0	9.5	16.5	"			
-254	H31	"	45.5	31.0	9.5	16.2	"			
-255	G35	"	50.0	31.5	10.5	16.3	"			
-256	C54	"	45.5	33.0	13.0	18.0	"			
107-257	盛		62.5	36.5	11.0	24.0	"			
-258	H31	IV	66.5	30.0	14.5	25.8	"			
-259	I27	"	83.5	34.0	13.5	41.8	"			
-260	I40	V	73.5	36.0	10.5	29.9	"			
-261	J31	III	68.0	39.0	18.5	37.3	"			
-262	O41	V	66.5	41.0	12.0	25.13	"			
-263	N44	"	50.0	33.0	10.5	17.2	"			
-264	"		38.0	33.0	10.0	11.9	"			
108-265	H30	IV	50.5	30.5	12.5	27.35	"			
-266	H32	V	(47.5)	(34.5)	(11.5)	(23.0)	"			
-267	F33	"	65.0	38.5	15.0	36.88	"			
-268	F37	III	52.5	51.5	15.0	43.8	"			
-269	G34	V	41.0	40.0	14.5	24.1	"			

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
108-270	J33	V	50.0	54.0	12.0	40.2	頁			
-271	L39	"	(32.0)	(40.0)	(9.5)	(12.85)	"			
-272			(37.0)	(38.5)	(12.5)	(22.2)	"			
-273	J41	V	(31.0)	(35.0)	(8.0)	(12.62)	"			
-274	F33	"	(30.0)	(42.5)	(10.0)	(15.02)	"			
-275			(36.5)	(25.5)	(12.0)	(16.0)	"			
-276	M40	"	(30.0)	(34.0)	(14.0)	(11.05)	"			
-277	O39	IV	(43.5)	(33.5)	(10.5)	(15.2)	"			
-278	F37	V	(66.0)	(58.0)	(21.0)	(62.2)	"			
-279	H30	"	(61.0)	(47.0)	(16.0)	(55.0)	"			
-280	E33	"	(56.5)	(34.5)	(11.0)	(17.9)	"			

トランシェ様石器

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
109-281	L35	VI	47.0	35.0	10.5	14.8	頁			
-282	F42	II	44.5	36.5	9.5	14.5	"			

彫器

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
109-283			46.0	24.0	8.0	8.92	頁			
-284	H33	III	50.0	24.5	13.5	17.4	"			
-285	E38	V	62.0	34.5	13.0	28.1	"			
-286			38.5	32.0	7.0	9.2	"			

削片

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
110-287	G32	V	40.0	11.0	10.0	3.6	頁			
-288	I30	IV	48.0	10.0	10.0	3.98	"			

石錐

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
110-289	D33	V	41.0	31.0	8.0	9.87	頁			
-290	H34	"	41.0	32.0	11.5	13.65	"			
-291	F38	"	47.0	9.0	6.0	3.5	"			

第27表 遺構外遺物観察表(10)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
110-292	Q38	(45.0)	29.0	10.0	(10.7)	頁				
-293	Q41	IV	46.5	29.5	10.0	11.75	"			
-294	F40	V	44.0	20.0	10.0	6.5	"			
-295	I39	III	(66.0)	(34.0)	(14.0)	(20.95)	"			
-296	F32	V	(67.0)	(39.0)	13.0	(19.3)	"			
-297	H41	"	50.0	13.0	9.0	5.85	"			

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
113-328	M42	V	54.0	41.5	7.5	16.4	頁			
-329	E34	"	64.5	38.5	11.5	35.2	"			
-330	I41	"	(37.5)	(31.0)	(13.0)	(12.2)	"			
-331	G41	IV	(45.0)	(34.0)	(10.0)	(15.8)	"			
-332	H41	V	46.0	39.0	11.0	12.3	"			
-333	G38	III	(40.0)	(33.5)	(10.0)	(15.5)	"			
-334	"	(34.5)	(33.5)	(16.0)	(12.07)	"				
-335	I49	V	(38.0)	(55.5)	9.0	(18.4)	"			

不定形石器 I

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
111-298	M41	V	40.0	31.5	8.0	10.93	頁			
-299	F34	"	65.5	35.5	11.0	15.9	"			
-300	H37	IV	(48.0)	42.5	15.0	(32.45)	"			
-301	G32	V	59.0	29.5	13.0	14.5	"			
-302	盛		53.0	26.0	7.0	10.0	"			
-303			55.0	23.0	8.5	10.1	"			
-304	M38	攪	67.5	37.0	11.0	30.15	"			
-305	E34	V	90.5	42.5	17.0	52.9	"			
-306	L29	攪	80.0	41.0	17.0	43.8	"			
-307	E38	V	46.5	24.0	9.5	10.4	"			
-308			55.0	23.0	8.5	10.1	"			
-309	H38	IV	(80.0)	(36.5)	13.0	(36.6)	"			
-310	E33	V	34.0	46.0	9.0	13.8	"			
112-311	G33	"	68.0	36.0	12.5	30.5	"			
-312	G32	"	66.0	37.0	11.5	16.9	"			
-313	L29	攪	58.5	22.5	12.0	25.2	"			
-314			46.0	16.5	6.0	5.4	"			
-315	E36	IV	44.0	23.0	6.5	1.6	"			
-316	I42	V	(46.0)	(38.0)	11.5	(20.2)	"			
-317	N41		58.0	24.5	9.0	15.05	"			
-318	I33	IV	(51.0)	(27.5)	(12.5)	(15.15)	"			
-319	H41	V	(42.0)	(23.5)	(12.5)	(7.0)	"			
-320	G33	"	70.0	34.5	16.5	38.1	"			
-321	G32	"	68.5	48.5	15.5	47.16	"			
-322	J42	"	81.0	39.5	14.0	36.0	"			
-323	J39	IV	98.5	67.5	13.0	74.2	"			
113-324	J49	"	93.0	27.5	12.5	31.85	"			
-325	2住掘		81.5	40.0	12.0	43.7	"			
-326	M38	攪	59.0	33.0	7.5	15.55	"			
-327	2住掘	(28.0)	(28.0)	(10.0)	(7.1)	"				

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
113-336	I33	V	44.5	61.5	14.5	29.2	頁			
-337	I38	IV	32.0	34.0	8.0	9.13	"			
-338	2住掘		43.0	22.0	12.5	11.1	"			
-339	K30	攪	(41.5)	(39.0)	(7.5)	(13.8)	"			
114-340	I38	IV	59.0	25.5	12.0	14.86	"			
-341	M38	攪	(30.0)	(35.0)	11.0	(11.83)	"			
-342	H38	IV	(80.0)	36.5	13.0	(36.6)	"			
-343	G50	V	(29.0)	(25.0)	(6.0)	(4.72)	"			
-344	J49	"	72.5	35.0	7.5	14.2	"			
-345	F39	"	50.0	28.0	8.0	9.23	"			
-346	G32	"	41.0	26.5	10.0	11.33	"			
-347	F33	"	45.0	31.0	15.0	12.85	"			
-348	F33	"	(44.5)	(49.0)	(16.0)	(34.8)	"			
-349	I40	"	32.0	43.0	10.0	12.08	"			
-350	I41	"	45.0	(25.0)	11.0	(9.99)	"			
-351	H29	I	29.0	40.0	9.0	10.45	"			
-352	2住床	(41.0)	(37.5)	(16.5)	(15.5)	"				
-353	"	掘	(39.0)	(39.0)	(12.0)	(17.0)	"			
-354	"	"	50.0	31.0	14.5	11.3	"			
-355	"	"	46.5	31.0	11.0	11.7	"			
-356	"	"	33.0	20.0	7.6	7.6	"			

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	斧No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)					
115-1			45	27	7	15	I a		2		
2	G32	IV	75	36	16	61	輝	I b	3		
3			57	27	8	14	頁	I c	15		

石斧

第28表 遺構外遺物観察表(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	斧No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)					
II5-4	D55	IV	69	44	24	129	輝凝	I a	1		
-5	L36	VI	(47)	34	10	(27)	輝	I c	22		
-6	F33	V	(27)	(16)	(7)	(6)	輝凝	"	23		
-7	F30	"	59	38	6	26	頁	"	17		
-8	M21	IV	95	46	20	126	綠凝	"	10		
-9	P40	"	115	53	22	209	輝	"	8		
-10	F37	"	188	53	38	541	木	"	4		
-11			136	54	28	308	輝	"			
	F34	V	(45)	(53)	(24)				5	刃部	
	J33	"	(66)	(54)	(28)					胴部	
	L29	攪	(57)	(47)	(27)					基部	
II6-12	E39	V	122	50	28	244	輝	I c	6		
-13	F40	"	(119)	42	23		粘	"	9		
-14	E39	"	102	52	20	193	輝	"	13		
-15	H38	IV	128	51	26	259	"	"	7		
-16	E33	V	85	47	15	72	玢	"	11		
-17	16土		66	34	10	37	輝凝	"	88		
-18	F40	IV	69	55	14	87	輝	"	14		
-19	H30	V	90	45	17	102	玢	"	16		
II7-20	G35	"	(123)	(51)	(28)	(258)	輝	"	19		
-21	L36		140	57	31	323	凝	II	36		
-22	H42	V	(122)	(54)	(53)	(435)	砂	"	56		
-23	H26		154	68	24	314	"	"	35		
-24	M38	攪	170	77	48	757	"	"	44		
-25	L41	IV	(101)	51	28	(188)	"	"	48		
II8-26	I38	V	108	55	25	216	玢	"	42		
-27	G35	"	90	58	15	116	輝	"	49		
-28	F35	"	88	51	18	(120)	"	"	50		
-29	F33		147	66	29	394	"	"	37		
-30	H29	V	74	41	15	(63)	玄	"	51		
-31	L38		129	78	22	307	安	"	38		
-32	60IV		82	42	14	79	"	"	52		
II9-33	N44	V	172	57	38	628	輝	"	40		
-34	K41	"	144	73	44	725	玢	"	43		
-35	H38	III	123	81	22	325	"	"	45		
-36	D59	V	(77)	(57)	23	(157)	輝	転	65	敲磨器	
-37			132	76	26	400	"	II	58		
	K32	IV	(87)	(76)	(24)	(260)				刃部	
	F35	V	(62)	(71)	(26)	(140)	輝	転	64	基部	
-38	N40	VI	(85)	(45)	28	(174)	輝	転	57	敲磨器	
II0-39			173	63	35	487	安	II			

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	斧No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)					
	G33	V	(65)	(56)	(30)	(114)					基部
	H31	"	(48)	(62)	(34)	(142)					胴部
	I41	"	(81)	(63)	(33)	(231)					刃部
II0-40			222	67	31	637	輝	II		39	再利用
	I40	V	127	67	31	428					
	H37	IV	(106)	(65)	(28)	(209)					
	I33	V	92	43	15	88	輝	I c		12	
	I41	"	(131)	52	23	(217)	安	"		18	
	L39	"	(55)	(48)	(36)	(124)	砂	"		20	
	G33	V	(70)	(48)	(26)	(134)	閃	"		21	
	K39	"	(82)	(44)	(29)	(161)	玢	"		24	
	I41	"	(74)	(60)	(34)	(194)	安	"		25	
	G33	"	(81)	(71)	(21)	(148)	玢	"		26	
	H43	"	(90)	(51)	(38)	(260)	玄	"		27	
	35III	"	(61)	(47)	(26)	(100)	輝	"		28	
	J40	V	(93)	53	(27)	(201)	安	"		29	
	M34	攪	(82)	(39)	(20)	(89)	頁	"		30	
	J41	IV	(63)	(46)	(27)	(105)	安	"		31	
	3住		(40)	(40)	(12)	(31)	頁	"		32	
	2住		(32)	(59)	(31)	(99)	輝	"		33	
	15III	"	(49)	(57)	(30)	(153)	砂	"		34	
	G33	V	(167)	(68)	(21)	(272)	"	"		41	
	M40	"	(110)	65	36	(404)	"	"		46	
	K32	VI	110	55	21	(243)	"	"		47	
	L35	"	(58)	(79)	(21)	(139)	"	"		53	
	K33	V	(106)	(77)	(34)	(379)	輝	II		54	
	15III	III	(46)	(57)	(18)	(61)	安	"		55	
	E34	V	(69)	(60)	(22)	(112)	玢	"		59	
	N41	"	(76)	(62)	(38)	(271)	安	"		60	
	2住		(51)	(59)	(18)	(89)	輝	"		61	
	H33	V	(70)	(69)	(34)	(180)	"	"		62	
	G47	"	89	61	20	150	玢	"		63	
	G34	"	(129)	55	26	(255)	輝	"		66	
	H33	"	(63)	(69)	(40)	(259)	斑	"		67	
	B60	"	(81)	(49)	(19)	(94)	頁	"		68	
	E33	"	(72)	(59)	(25)	(134)	"	"		69	
			(95)	(78)	(44)	(328)	輝	"		70	
	25II	攪	(83)	(42)	(17)	(68)	砂	"		71	
	J33	V	(69)	(47)	(18)	(73)	輝	"		72	
	G46	"	(82)	(51)	(22)	(120)	玄	"		73	
	G25	"	(81)	(41)	(18)	(74)	木	"		74	
	G33	"	(72)	(35)	(22)	(91)	安	"		75	

第29表 遺構外遺物観察表(12)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	長幅	斧No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)					
	G 32	IV	(67)	(57)	(27)	(128)	輝		76		
	C 60	V	(39)	(51)	(13)	(44)	輝凝		77		
1土			67	38	16	70	輝	II	78		
5住			(122)	(48)	25	(231)	ホ	I c	79		
"			(91)	(49)	(19)	(94)	輝	"	80		
9住			180	65	36	668	"	"	81		
"			(86)	—	38	(240)	安	"	82		
"			(180)	65	48	920	凝	"	83		
17土			135	47	24	189	輝	"	84		
			(107)	(50)	27	(223)	"	"	85		
17土			(82)	50	27	(133)					
N 40	V		(82)			(26)	(90)				
			(54)	(43)	(11)	(36)	頁	I c	86		
3土			(50)	(41)	(6)	(12)					
E 39	V		(54)	(43)	(7)	(24)					
13-14土			(55)	50	28	(99)	砂	I c	87		
5溝			136	49	30	308	輝	"	89		

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	鍾No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	块(mm)	重(g)			
123-60	J 38		98	92	41	92	473	安	66	
-61	H 38	V	97	71	30	96	313	"	56	
-62	J 33	IV	102	86	33	100	446	玢	59	
124-63	L 34	攪	123	98	34	116	546	凝	46	
-64	H 36	V	114	76	34	98	368	安	22	
-65	I 37	IV	75	60	27	71	167	"	31	
-66			114	76	30	107	361	"	114	
-67	I 31	V	96	62	28	94	256	"	21	
-68	H 33	"	73	55	22	72	132	"	25	
-69	L 41	"	56	56	14	50	66	凝	65	
I 41	"		136	95	40	128	683	砂	1	
J 41	IV		104	78	25	92	349	安	2	
2住下			116	88	38	110	524	"	3	
J 42	V		103	98	40	87	439	凝	4	
I 40	"		125	89	35	117	481	安	5	
I 41	"		115	(76)	28	111	(466)	"	6	
F 41	"		84	80	28	79	230	"	7	
J 32	IV		78	71	26	76	165	"	8	
J 40	V		85	82	32	81	(278)	"	9	
J 41	IV		72	59	16	71	(93)	凝	10	
J 41	V		(85)	85	40	(74)	(345)	チヤ	11	
2住下			82	63	(27)	73	(136)	安	12	
J 42	V		71	65	35	58	221	"	13	
30IV			66	54	20	62	99	"	14	
35III			138	94	37	131	(518)	"	15	
I 40	V		(125)	94	34	113	(360)	凝	16	
J 40	"		135	87	52	121	461	安	23	
E 33	"		74	71	24	67	171	"	24	
L 33			75	55	19	73	119	"	26	
I 41	V		126	87	32	122	437	"	27	
J 41	IV		71	59	26	63	143	"	28	
G 44	V		122	89	23	115	347	"	29	
G 38	IV		136	82	39	132	651	"	30	
L 41	V		69	54	24	62	129	"	32	
M 37			138	98	20	131	444	砂	33	
G 37	IV		103	98	25	97	410	"	37	
J 42	V		88	82	40	84	361	チヤ	41	
I 41	"		103	78	27	94	310	"	43	
15III			91	53	15	85	120	"	44	
O 38	V		55	52	17	50	(56)	頁	45	
I 40	"		99	80	39	92	468	玢	48	
M 40			110	87	23	103	310	安	53	

石錘

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	鍾No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	块(mm)	重(g)			
121-41	J 40	V	122	101	44	118	822	砂	36	
-42	I 40	"	114	76	41	111	528	"	34	
-43	G 42	"	98	74	44	90	311	安	20	
-44	20III	"	96	75	35	89	342	"	19	
-45	J 42	"	98	70	39	93	350	"	17	
-46	E 37	"	76	56	23	73	123	"	51	
-47	H 33	"	66	57	19	64	104	チヤ	42	
-48	G 32	"	58	52	16	56	63	"	38	
-49	H 34	"	56	53	20	54	80	"	39	
122-50	J 40	"	103	100	23	96	401	安	60	
-51	J 42	"	108	90	32	104	403	砂	35	
-52	55W		82	73	19	78	184	凝	47	
-53	I 40	V	110	102	45	98	561	安	18	
-54	H 38	"	103	95	32	89	464	チヤ	61	
-55	H 33	"	76	62	24	70	167	輝	49	
123-56	J 39	III	113	93	30	107	477	チヤ	40	
-57	F 39	IV	107	87	39	104	425	安	50	
-58	G 27	III	90	80	15	76	137	"	52	
-59	F 34	V	107	83	26	103	341	砂	64	

第30表 遺構外遺物観察表(13)

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	錐No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	抉(mm)	重(g)			
I 40	V	121	93	31	114	(507)	チャ	54		
L 40	"	101	88	23	91	278	頁	55		
I 42	"	114	77	38	107	(446)	安	57		
K 39		112	103	28	105	501	チャ	58		
M 40		89	87	30	83	356	頁	62		
H 38	V	105	68	33	102	320	"	63		
K 37		101	80	27	93	(240)	安	67		
E 38	V	64	49	19	58	76	チャ	68		
55IV		77	(74)	19	72	(163)	"	69		
J 41	V	90	66	22		(226)	頁	70		
E 38	"	(90)	(60)	(20)		(135)	安	71		
J 42	"	108	(79)	(24)	104	(286)	"	72		
D 39		(45)	(60)	(23)		(93)	"	73		
15III		(66)	(68)	(31)		(152)	"	74		
M 41	V	(48)	(70)	(18)		(62)	"	75		
N 42	"	(93)	(60)	(20)		(195)	砂	76		
F 34	"	(90)	(80)	(26)		(263)	"	77		
L 41	"	(80)	(48)	(16)		(105)	"	78		
J 41		(107)	(74)	(44)		(403)	チャ	79		
L 40	V	(81)	(58)	(17)		(122)	"	80		
J 42	"	(95)	(95)	(23)		(258)	"	81		
I 40	II	(90)	(69)	(21)		(170)	"	82		
2住床		(86)	73	40		(253)	凝	83		
N 42	V	(64)	70	20		(121)	石ホ	84		
		(68)	(93)	(120)		(146)	"	85		
K 41		(85)	(53)	(33)	(76)	(150)	安	86		
J 41	IV	(94)	(98)	(44)		(541)	石ホ	87		
I 37	"	(84)	(98)	(44)		(435)	砂	88		
I 41	V	(98)	(87)	(32)		(334)	閃	89		
J 41	IV	(83)	(79)	(32)		(230)	流	90		
15III		(53)	(74)	(32)		(106)	チャ	91		
K 42		(36)	(41)	(28)		(50)	安	92		
G 34	V	(46)	(57)	(20)		(44)	砂	93		
D 33	"	(110)	(62)	(25)		(224)	頁	94		
1 土		(60)	(61)	(17)		(76)	チャ	101		
"		(94)	75	(24)		(220)	"	102		
9 住		(95)	70	40	92	(395)	"	103		
"		108	60	18	98	173	安	104		
"		95	80	23	87	260	"	105		
"		123	80	30	121	393	砂	106		
"		119	79	32	114	447	安	107		

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	錐No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	抉(mm)	重(g)			
9 住			103	93	21	99	334	石ホ	108	
"			114	71	23	112	296	砂	109	
"			125	83	29	119	461	チャ	110	
"			112	78	36	108	427	安	111	
"			(94)	(86)	29		(309)	チャ	112	
"			153	105	25	147	493	安	113	
9 土			95	41	19	90	110	砂	115	
11 土			(100)	(51)	(29)		(264)	"	116	
19溝			(116)	(118)	(26)		(462)	安	117	
17土			76	61	30	51	178	石ホ	118	

石剣様石器

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	錐No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	抉(mm)	重(g)			
125-70	K 39	V	151.0	33.0	13.0		81.3	粘		

礫 器

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	錐No.	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	抉(mm)	重(g)			
125-71			100.3	60.0	30.0		261.0	チャ		
-72	O 40	IV	93.0	90.0	33.0		420.0	安		
-73	F 40	V	86.0	32.0	12.0		42.8	頁		
-74	N 40	"	72.0	88.0	45.0		315.0	砂		
-75	G 30	"	85.0	66.0	41.0		235.0	ホ		
-76	Q 42	IV	65.0	84.0	24.0		221.0	砂		
-77	F 40	V	179.0	107.0	45.0		1,180.0	チャ		
-78	K 40	IV	71.0	95.0	39.0		260.0	"		
-79	N 40	V	90.0	95.0	42.0		405.0	砂		

敲 磨 器 I

図版	出土地点	層	計測値					石質	機能面			片 減 り	火 熱	炭 化 物
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	分類	面	長(mm)	幅(mm)				
126-80	K 45	V	161.0	95.0	64.0	1,320.0	安	a	1	85.0	7.0~15.0			
-81	L 46	II	143.0	74.0	53.0	829.8	"	"	"	86.0	10.0~12.0			
-82	E 38	V	197.0	78.0	66.0	1,350.0	砂	"	"	156.0	10.0~12.0	○	○	○
-83	J 39	"	163.0	70.0	52.0	894.3	"	"	3	125.0	7.0~11.0	○		
-84	J 39	IV	104.0	58.0	40.0	312.4	"	"	"	38.0	1.0~ 5.0	○		
-85	F 34	V	86.0	39.0	16.0	77.2	安	"	2	58.0	2.0~ 3.0			
127-86	O 39	IV	135.0	78.0	47.0	834.7	輝	a	3	80.0	4.0~ 9.0			
-87	J 31	V	124.0	78.0	33.0	387.6	砂	"	"	97.0	5.0~ 7.0			

第31表 遺構外遺物観察表(14)

図版	出土地点	層	計測値			石質	機能面			片減り	火熱	炭化物	
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)		分類	面	長(mm)	幅(mm)			
127-88	I 34	V	140.0	64.0	31.0	(345.2)	砂	a	2	114.0	3.0~ 7.0	○	
- 89	L 41		105.0	58.0	37.0	355.6	閃	"	3	80.0	4.0~ 9.0	○	○
- 90	J 39	IV	106.0	60.0	29.0	279.3	安	b	2	75.0	6.0~ 8.0	○	○
- 91	盛		137.0	48.0	56.0	501.3	凝	a	"	98.0	4.0~ 6.0	○	○
- 92	L 41	IV	143.0	49.0	30.0	303.1	砂	"	3	125.0	5.0~ 6.0	○	○
- 93	Q 41	"	130.0	60.0	53.0	554.3	安	c	"	86.0	16.0~20.0	○	
128-94	R 39		118.0	71.0	72.0	646.0	"	"	1	65.0	8.0~15.0	○	
- 95	F 39	IV	(134.0)	76.0	46.0	(583.3)	砂	a	"	105.0	2.0~ 9.0	○	○
	K 32												
- 96	B 62	V	(122.0)	84.0	42.0	(570.0)	砂	(a)	1-3	(60.0)	3.0~ 6.0	○	
- 97	K 41	VI	(121.0)	39.0	21.0	(156.2)	"	a	1	70.0	3.0~ 8.0	○	
- 98	J 32		124.0	66.0	46.0	465.3	玢	"	3	60.0	3.0~ 7.0	○	
- 99	L 23	IV	141.0	78.0	43.0	600.4	砂	"	"	52.0	2.0~ 3.0	○	
- 100	C 34	V	(142.0)	84.0	53.0	(658.6)	"	"	2	29.0	4.0~ 7.0	○	○
										32.0	7.0~15.0		
129-101	G 33	V	183.0	88.0	52.0	1,140.0	砂	b	3			○	
	H 34												
- 102	G 35	V	198.0	64.0	35.0	658.8	安	b	2	170.0	2.0~11.0	○	
- 103	G 36	III	132.0	63.0	35.0	463.2	輝	"	3	85.0	5.0~ 8.0	○	
- 104	H 41	V	117.0	81.0	41.0	380.2	凝	"	2	100.0	3.0~ 8.0	○	○
130-105	J 38	"	127.0	71.0	35.0	466.0	安	"	"	84.0	7.0~12.0	○	○
- 106	H 29	"	106.0	56.0	46.0	(352.8)	"	"	"	83.0	6.0~13.0	○	
- 107	G 32	"	(108.0)	58.0	38.0	(369.7)	"	"	"	75.0	5.0~10.0	○	
- 108	F 34	"	(125.0)	83.0	49.0	(752.2)	玢	"	3	(103.0)	7.0~13.0	○	
- 109	G 34	"	143.0	82.0	40.0	599.2	砂	"	2	108.0	5.0~ 8.0	○	
- 110	I 35	"	196.0	78.0	38.0	829.8	"	"	"	155.0	7.0~14.0	○	
131-111	F 25	III	136.0	68.0	53.0	733.2	"	"	3	115.0	10.0~27.0	○	
- 112	F 35	V	151.0	73.0	58.0	768.2	安	"	2	85.0	5.0~15.0	○	○
- 113	L 40	"	148.0	86.0	45.0	840.8	玢	c	3	90.0	7.0~12.0	○	○
- 114	J 26	III	(147.0)	65.0	47.0	(538.8)	安	b	"	100.0	3.0~ 9.0	○	○
- 115	K 37	V	172.0	73.0	41.0	830.4	閃	c	"	136.0	7.0~15.0	○	○
- 116	E 38	"	188.0	70.0	43.0	840.7	砂	"	"	140.0	10.0~15.0	○	○
132-117	E 37	"	170.0	95.0	68.0	1,250.0	"	a	2	92.0	6.0~10.0	○	
- 118	K 37		150.0	64.0	49.0	700.1	安	c	3	95.0	3.0~10.0	○	
- 119	E 36	V	136.0	63.0	24.0	281.1	"	b	2	105.0	3.0~ 5.0	○	
- 120	F 38	"	140.0	93.0	44.0	763.2	砂	c	"	104.0	6.0~14.0	○	
- 121	O 44	"	103.0	61.0	22.0	193.6	"	"	"	55.0	3.0~ 8.0	○	
- 122	H 32	"	179.0	77.0	55.0	1,045.0	閃	b	3	160.0	15.0~22.0	○	
	I 32												

敲磨器 II・III

図版	出土地点	層	計測値				石質	分類	火熱	備考
			長(mm)	幅(cm)	厚(mm)	重(g)				
133-123			95.0	71.0	41.0	214.3	砂	II	○	小剝離
- 124	I 41	V	73.0	53.0	33.0	218.2	"	"	"	
- 125	H 41	"	94.0	49.0	24.0	187.8	斑	III a	"	
- 126				122.0	47.0	289.7	凝	"	"	
- 127				98.0	45.0	279.0	安	"	"	
- 128	K 42		9.0	36.0	23.0	140.7	輝	"	"	小剝離
- 129	L 39		98.0	48.0	23.0	221.5	"	"	"	
- 130	I 24	IV	79.0	51.0	32.0	241.0	頁	"	"	
- 131	N 41	"	93.0	63.0	39.0	294.0	チャ	"	"	小剝離
- 132				106.0	58.0	32.0	268.0	"	"	
- 133	L 32		87.0	58.0	39.0	320.0	輝	"	"	接合敲打による面調整
	E 41	V								
134-134	P 33	"	85.0	92.0	20.0	280.3	砂	III b		
- 135	I 24	IV	72.0	68.0	32.0	324.3	木	"	"	
- 136	E 38	V	71.0	54.5	34.0	194.5	石	"	"	
- 137	I 40	"	92.5	79.0	34.0	311.0	玢	"	"	
- 138				88.0	(56.0)	37.0	(245.2)	砂	"	
- 139	J 41		(68.0)	(75.0)	32.0	(289.6)	輝	"	"	
- 140	I 38			122.0	76.0	37.0	573.0	チャ	"	
	J 41									
135-141	L 40	V	121.0	84.0	76.0	1,068.8	安	III c	○	側面に凹み有り
- 142	M 42			76.0	39.0	284.0	石	"	"	凹みあり
- 143	N 41	V	64.0	60.0	41.0	260.0	木	"	"	"
- 144	N 40	"	87.0	66.0	48.0	520.5	頁	"	"	
- 145	H 31	"	101.0	86.0	58.0	618.5	チャ	"	○	
- 146	E 33	"	68.0	68.0	40.0	304.5	"	"		
- 147	I 41	"	89.0	75.0	46.0	448.5	砂	"		
136-148	L 39		81.0	72.0	57.0	502.0	玄	III d		
- 149	I 38	IV	80.0	72.2	61.0	518.0	チャ	"		
- 150	I 30	V	96.0	77.2	55.0	470.0	"	III c		
- 151	G 34			78.0	74.0	58.0	484.0	石	III d	凹み有り
- 152	L 41	V	73.0	57.0	50.0	300.0	安	"	○	タール?
- 153				78.0	72.0	58.0	424.0	石	"	
- 154	F 41	"	102.0	81.0	51.0	548.0	"	III c		
- 155	N 41	"	83.0	65.0	61.0	426.5	チャ	III d	○	(欠けた後も使用)
- 156				76.0	66.0	54.0	394.0	"	"	
- 157	G 34	V	87.0	71.0	67.0	680.5	"	"		
137-158	I 42	"	76.0	73.0	64.0	525.0	チャ	"	○	
	G 37	IV								
- 159	C 54	"	85.0	81.0	72.0	682.0	チャ	III d	○	
- 160	F 35	V	80.0	84.0	77.0	765.2	"	"		

第32表 遺構外遺物観察表(15)

敲磨器IV・V・VI

図版	出土地点	層	計測値				石質	分類	火熱	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
137-161			106.0	62.0	34.0	287.0	安	IV		
-162			(122.0)	(72.0)	32.0	(320.0)	"	"		(破損)両面
-163	K33		(97.0)	(74.0)	(45.0)	(352.0)	"	"		(")
-164	L23	III	97.0	55.0	(39.0)	(222.0)	砂	"		(")
-165	H33	V	77.0	53.0	26.0	152.0	安	"		
138-166	Q42	III	93.0	68.0	44.0	486.0	"	V		両面
-167	I32		78.0	63.0	36.0	210.0	"	"	○	
-168	K34		103.0	66.0	59.0	519.0	"	"		両面・側稜の一部も荒れ
-169	2住	覆	102.0	68.0	19.0	230.0	"	"	○	"
-170	I41	V	105.0	70.0	35.0	356.0	"	"		"
-171	H40	"	118.0	63.0	24.0	265.0	"	"		"
-172			(88.0)	77.0	(42.0)	(390.0)	"	"		(破損)両面
-173			107.0	55.0	26.0	225.0	"	VI		
-174	I41	V	(63.0)	(72.0)	(37.0)	(220.0)	砂	V	○	(破損)
-175			88.0	73.0	56.0	575.0	斑	VI	○	裏面平粗部が荒れ(VII)
-176	D57	V	(98.0)	82.0	39.0	(512.0)	安	"	○	(破損)両面
138-177	I38	IV	113.0	89.0	55.0	815.0	砂	"	○	
-178	H32	V	95.0	82.0	40.0	526.0	閃	"		
-179	C57	"	112.0	98.0	39.0	640.0	安	"		
-180	H38	"	(69.0)	(91.0)	(51.0)	(477.0)	閃	"	○	

図版	出土地点	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
140-194	B63	V	127.0	55.0	43.0	273.0	砂	(破損)
-195	F40		78.0	51.0	31.0	216.0	安	"
	G34		140.0	126.0	53.0	1580.0	"	"
-196	C60	V	150.0	97.0	67.0	1180.0	砂	"
-197	H37	"	149.0	93.0	75.0	1700.0	安	"
141-198	"		119.0	96.0	61.0	831.0	"	"
-199	F35	"	129.0	97.0	42.0	1020.0	"	"
-200			126.0	89.0	51.0	1030.0	"	"
-201	E35	V	199.0	122.0	48.0	1380.0	"	"
-203			58.0	44.0	33.0	109.0	安	"

敲磨器VIII

図版	出土地点	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
141-202	L40		101.0	66.0	443.0	415.0	砂	
-204	P39		114.0	72.0	60.0	604.0	"	

磨製石器(?)

図版	出土地点	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
141-205			80.0	53.0	42.0			

敲磨器VII

図版	出土地点	層	計測値				石質	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		
139-181	D57	IV	(103.0)	(85.0)	(40.0)	(325.0)	安	両面スリ痕 (破損)
-182	表採		67.0	68.0	29.0	85.0	砂	"
-183	I44	V	68.0	94.0	52.0	500.0	"	
	G38		62.0	73.0	50.0	340.0	"	{ 破損後個別に再使用 "
-184	K41	VI	125.0	68.0	45.0	405.0	"	両面スリ痕 "
	K42							"
-185	L36		104.0	76.0	53.0	384.0	砂	"
-186	J32	V	102.0	38.0	52.0	220.0	"	"
-187	I40	"	151.0	117.0	38.0	498.0	"	"
-188			66.0	54.0	29.0	105.0	"	両面スリ痕 "
-189	E38	V	117.0	130.0	78.0	1270.0	"	"
140-190	E36	"	134.0	90.0	77.0	640.0	安	"
-191	K35		103.0	51.0	18.0	108.0	玢	"
-192	G34		107.0	99.0	60.0	710.0	砂	"
-193	C60	V	72.0	62.0	49.0	216.0	"	"

グリッド 種類	15IV	15III	15II	20 III			20 II			20 I			25 III								
	一括 19	F 21	一括 22	H 24	一括 23	M 21	M 23	一括 25	F 27	F 28	F 29	G 25	G 27	G 28	G 29	H 25	H 26	H 27	H 29		
石 錐	1				4		1	1								1					
石 槍				1	1		1				2										
石 鍔(縦)	1	1																1	1		
石 鍔(横)																					
範 状 石 器	1				1																
ト ラ ン シ エ																					
彫 器																					
削 片																					
石 锥																					
不 定 形 I			1																		
不 定 形 II		1			3					2									1		
石 斧		2				1								1				1	1		
石 锤		3			1									1							
礫 器																					
敲 磨 器 I					1	1				1			1		1	1	1	1	2		
敲 磨 器 II						1															
敲 磨 器 III			2		1				1												
敲 磨 器 IV							1														
敲 磨 器 V				1																	
敲 磨 器 VI				1																	
敲 磨 器 VII																					

グリッド 種類	25 III						25 II						30 IV						30 III							
	I 25	I 27	I 29	J 25	J 28	J 29	K 29	L 29	M 29	一括 34	C 34	D 33	D 34	E 30	E 31	E 33	E 34	一括 30	F 30	F 31	F 32	F 33	F 34	G 31	G 32	
石 錐		1													1	1	1	1	1			2	1	3		
石 槍				1					1					2		2	1					1	3	1		
石 鍔(縦)						1	1				2					1						1	2	7	2	
石 鍔(横)																1									1	
範 状 石 器	1															2						3			1	
ト ラ ン シ エ																										
彫 器										1										1						
削 片																										
石 锥																										
不 定 形 I						1	1				1					1	2	1				1	3		6	
不 定 形 II		1				1			1		1					4	1				3	7	2		1	
石 斧							1		1							2	1		1		2	1		2	2	
石 锤											1					1	1					2			1	
礫 器																										
敲 磨 器 I	1		1				3	1		1	2		1	1	1						6	6		3		
敲 磨 器 II																										
敲 磨 器 III						1	1									1	1	4		1						
敲 磨 器 IV								1																		
敲 磨 器 V																										
敲 磨 器 VI																										
敲 磨 器 VII																										1

グリッド 種類	30 III															30 II								
	G 33	G 34	H 30	H 31	H 32	H 33	H 34	I 30	I 31	I 32	I 33	I 34	J 30	J 31	J 32	J 33	J 34	一括	K 30	K 31	K 32	K 33	K 34	L 30
石 錐	2	1		1	1	6	1			1	2				4	4	2			1				
石 槍	6	2	1		2	3				1					2			1					1	
石 匙(縦)	10	3			1	1	2			3		2	2			2	3	1		2				
石 匙(横)	1	1																						
範 状 石 器		1	2	1	2				1					1		1								
ト ラ ン シ エ																								
彫 器							1																	
削 片																								
石 錐																								
不 定 形 I	3			1							1	1						1						
不 定 形 II	4			2	1	4	1	1	2	2	1	1				1	1	2	3	1		1		
石 斧	5	1	1	1		2				1					2				2	1				
石 锤		1			3	1		1							1	1								
礫 器																								
敲 磨 器 I	13	3	1		3	1	2			3	1	2		2	4					2			2	
敲 磨 器 II																								
敲 磨 器 III		2		1				1	1		1	1		1	2				2					
敲 磨 器 IV					1														1					
敲 磨 器 V										1										1				
敲 磨 器 VI						1																		
敲 磨 器 VII		3		1		1			1	1				1										

グリッド 種類	30 II					30 I								35 IV							35 III						
	L 32	L 33	L 34	M 31	M 34	一括	P 33	C 37	C 38	D 39	E 35	E 36	E 37	E 38	E 39	一括	F 35	F 36	F 37	F 38	F 39	G 35	G 36	G 37	G 38		
石 錐										1		1															
石 槍		1			1				1								1	2			1	1	1	1			
石 匙(縦)			1													1	1	3	2	1	4	1	1	1			
石 匙(横)																								1			
範 状 石 器																	2		1								
ト ラ ン シ エ																											
彫 器																				1							
削 片																											
石 錐																											
不 定 形 I		1									1		1		1										2		
不 定 形 II				3						1	1					2		1	5								
石 斧	1	1	1												3	1	2	1		2							
石 锤									1			1	2							1		1	2				
礫 器							1					1	2	1	4		3	1	3	2	1	2	1				
敲 磨 器 I								1			1	2	1	4			3	1	3	2	1	2	1				
敲 磨 器 II																											
敲 磨 器 III	1			1	1							1			1		1							1			
敲 磨 器 IV															1												
敲 磨 器 V					1																						
敲 磨 器 VI																											
敲 磨 器 VII											1	1		1		1								1			

グリッド 種類	35 III														35 II									
	G 39	H 35	H 36	H 37	H 38	H 39	I 35	I 36	I 37	I 38	I 39	J 35	J 36	J 38	J 39	一括	K 35	K 36	K 37	K 38	K 39	L 35	L 36	L 37
石 錐																	1							2
石 槍	1	1									1	1		2					1	1	1	1	1	
石 鍤(縦)	1								1	2			2						2				1	
石 鍤(横)										1													1	
範 状 石 器										1														
ト ラ ン シ エ																							1	
彫 器											1													
削 片																								
石 锥																								
不 定 形 I	1			1	1	1	1								2	1							1	
不 定 形 II	1		1			1				2	1				1	3		2				1	1	1
石 斧				1	2					1					2					1	1	2	1	
石 锤				1	3			2					1	1				1	1					
礫 器																								
敲 磨 器 I				1	1		1	1	1	1				1	4			2	2	1			1	2
敲 磨 器 II																								
敲 磨 器 III										2					2									
敲 磨 器 IV															2									
敲 磨 器 V																								
敲 磨 器 VI							1			1														
敲 磨 器 VII					1											1							1	

グリッド 種類	35 II												35 I							40 III							
	L 39	M 36	M 37	M 38	M 39	N 36	N 38	N 39	O 38	O 39	一括	P 37	P 39	Q 35	Q 38	Q 39	R 37	R 39	一括	F 40	F 41	F 42	F 43	G 40	G 41		
石 錐				1															4	2							
石 槍	1	1								1									8	1					1		
石 鍤(縦)			2		2	2	1				1								3	1							
石 鍤(横)																			1						1		
範 状 石 器	1							1	1									1									
ト ラ ン シ エ																								1			
彫 器																1			1								
削 片																	1										
石 锥																											
不 定 形 I				2																						1	
不 定 形 II		1	1							4	1					1				2							
石 斧	1			1															2								
石 锤				1	1			1											1								
礫 器																			2	4	3		1				
敲 磨 器 I	1			1					1	3	1						2										
敲 磨 器 II																											
敲 磨 器 III	2									2					1			1	2								
敲 磨 器 IV																											
敲 磨 器 V																											
敲 磨 器 VI																											
敲 磨 器 VII									2									2									

グ リ ッ ド 種類	40 III															40 II									
	G 42	G 44	H 40	H 41	H 42	H 43	H 44	I 40	I 41	I 42	I 43	I 44	J 40	J 41	J 42	J 43	J 44	一括	K 40	K 41	K 42	K 43	L 40	L 41	L 42
石 錐	1		1	1	1					1			2	2		1		2				2			
石 槍			2	1				1	1				2	1				1	2	1		1	1	1	
石 匙(縦)			1	1				3	4				2	1					2			4	1		
石 匙(横)			1	1				1		1										2					
範 状 石 器								1							1			1							
ト ラ ン シ エ																									
彫 器			1																						
削 片																									
石 錐																		3							
不 定 形 I			1	1				3	2							1		1	3			1			
不 定 形 II			2		1	1	1	5						1	1			3	3	1		1			
石 斧				1	1			1	2					3				2	1			1			
石 锤	1	2						8	5	1			4	8	7				1	1	2	3			
礫 器																									
敲 磨 器 I	1		2					1	4	3				1	6				5	1	1	3			
敲 磨 器 II									1																
敲 磨 器 III			3		1			2	4	2				4	1			4			3	2			
敲 磨 器 IV																									
敲 磨 器 V			1						2							1									
敲 磨 器 VI								2					1		1			1	1	1					
敲 磨 器 VII																									

グ リ ッ ド 種類	40 II															40 I						45 III			
	L 43	M 40	M 41	M 42	M 43	M 44	N 40	N 41	N 42	N 44	O 40	O 41	O 42	O 44	一括	P 41	Q 40	Q 41	Q 42	Q 44	R 40	R 42	G 41	G 42	G 43
石 錐	1							1																	
石 槍			1					1			1														
石 匙(縦)	2							1	2							1	1						1		
石 匙(横)																									
範 状 石 器	1									1	1														
ト ラ ン シ エ																									
彫 器																	1								
削 片																									
石 錐																									
不 定 形 I	1	1	1					1			1														
不 定 形 II		1	1					1								1								1	
石 斧	1						2	1		1							1					1	1		
石 锤	2	1								2															
礫 器																									
敲 磨 器 I	1	1	2	2			1	2	4	1			1	2	1			2	2		1	1			
敲 磨 器 II																									
敲 磨 器 III		1	2	2	1	1	2	3										1		1					
敲 磨 器 IV																									
敲 磨 器 V	1																	1							
敲 磨 器 VI																									
敲 磨 器 VII		1																							

グリッド 種類	45 III								45 II				45 I		50 IV						50 III				55 IV		
	H 46	H 47	H 48	H 49	I 45	I 48	I 49	J 48	K 47	K 48	L 45	一括	P 48	C 50	C 51	C 53	C 54	D 52	D 53	G 50	H 51	I 50	J 53	B 59	C 56		
石 錐		1							1		1																
石 槍				1																1	1					1	
石 鍤(縦)			2																		1		2			1	
石 鍤(横)																											
範 状 石 器																				1							
ト ラ ン シ エ																											
彫 器																											
削 片																											
石 錐																											
不 定 形 I								1	1																		
不 定 形 II																				1	2						
石 斧																											
石 锤																											
礫 器																											
敲 磨 器 I	1							1		1	1		1							1		1	1	1	1		
敲 磨 器 II																											
敲 磨 器 III								1	1								1		1	1		1					
敲 磨 器 IV																											
敲 磨 器 V																											
敲 磨 器 VI																											
敲 磨 器 VII								1																			

グリッド 種類	55 IV								60 IV								60 III		65 IV		その 他						
	C 57	C 58	C 59	D 55	D 57	D 58	D 59	一括	B 60	B 61	B 62	B 63	C 60	C 61	C 62	D 62	一括	一括	一括	表 採							
石 錐																			1			2					
石 槍																			1								
石 鍤(縦)			1					1														3					
石 鍤(横)		1																				1					
範 状 石 器								1																			
ト ラ ン シ エ																											
彫 器								1																			
削 片																											
石 錐																											
不 定 形 I									1		1											4					
不 定 形 II									1			4						1				2					
石 斧				1		1		1				1					1		1			3					
石 锤								2														1					
礫 器																											
敲 磨 器 I	2	2	1	1						2	3		1	1													
敲 磨 器 II																											
敲 磨 器 III								3	2			1									2						
敲 磨 器 IV																											
敲 磨 器 V																					1						
敲 磨 器 VI	1				1					2					1	2		1			1		1				
敲 磨 器 VII					1			2						1	2		1			1		1					

第 章 弥生時代の土器

約110片の出土であり、うち33片がR - 33グリッドからまとまって出土したが、他にはつまりはみられない。

1. 甕形土器の口縁から胴部上半にかけての破片で、17片が接合した。

口縁部は無文で、みがきが施されている。肩部から下方は繩文（R L）が縦位及び斜位に施文されている。条は右下がりのものと左下がりのものがみられるが、両者に規則性は認められない。口唇部は、緩やかな起伏が見られる。内面は、口縁部から肩部までは外面と同様のみがきが施されており、胴部もみがかれているが、指頭によるものと思われる圧痕も認められる。胎土中には小石と砂粒を含む。外面の一部にスス状の炭化物の付着がみられる。

2. 精製の壺形土器の胴部片で、最大径をもつ部分のものである。

上半部と下半部との境界に隆帯を巡らし、その上に2条、下に3条の沈線が横位に施文されている。上半部は、沈線の上方に、2条の沈線による鋸歯文がみられるが、山の下端は連続しておらず、その途切れる部分に薄手の瘤が貼り付けられている。沈線によって区画された山形の部分と沈線間の稜は磨消しがなされており、山形に隣接する逆三角形の部分は、繩文（R L）が斜位に施文され条は横走する。

下半部には、沈線の下方に条が縦走する繩文（R L）がみられる。

内面は、みがきが施されている。外面にスス状炭化物の付着が見られる。

3. 横位に1条と、途中欠損しているが弧状を呈する沈線1条が施文されている。他の部分は無文で、みがきが施されている。

4. 口縁部片で、口唇部は平坦である。また、無文で、外面はみがきが施されている。

5. 繩文（L R）の施文後に、横位に2条と斜位に1条の沈線が施文されている。斜位の沈線の左側は磨消しが行われている。

6. 甕の口縁部片で、口唇部は平坦である。条が縦走する繩文（R L）の上に、横位に3条の沈線が施文されている。中段の沈線以外の2条の沈線には、重なりのある部分が見られる。

7. 胴部片で、繩文（L R）が施文されている。内面にスス状炭化物の付着が見られる。

8. 小型壺形土器の肩部片である。横位に2条の沈線が施文され、その下方に条が縦走する無節の繩文（R）が見られ、沈線の間は磨消しが行われている。内面はみがきが施されている。

9. 壺形土器の口縁部付近の破片で、内外面ともみがきが施されており、ともに横位に2条の沈線が施文されている。

10. 横位に3条の沈線が施文されているが、うち2条の沈線はその鞍部で欠損している。内外

面ともていねいなみがきが施されている。

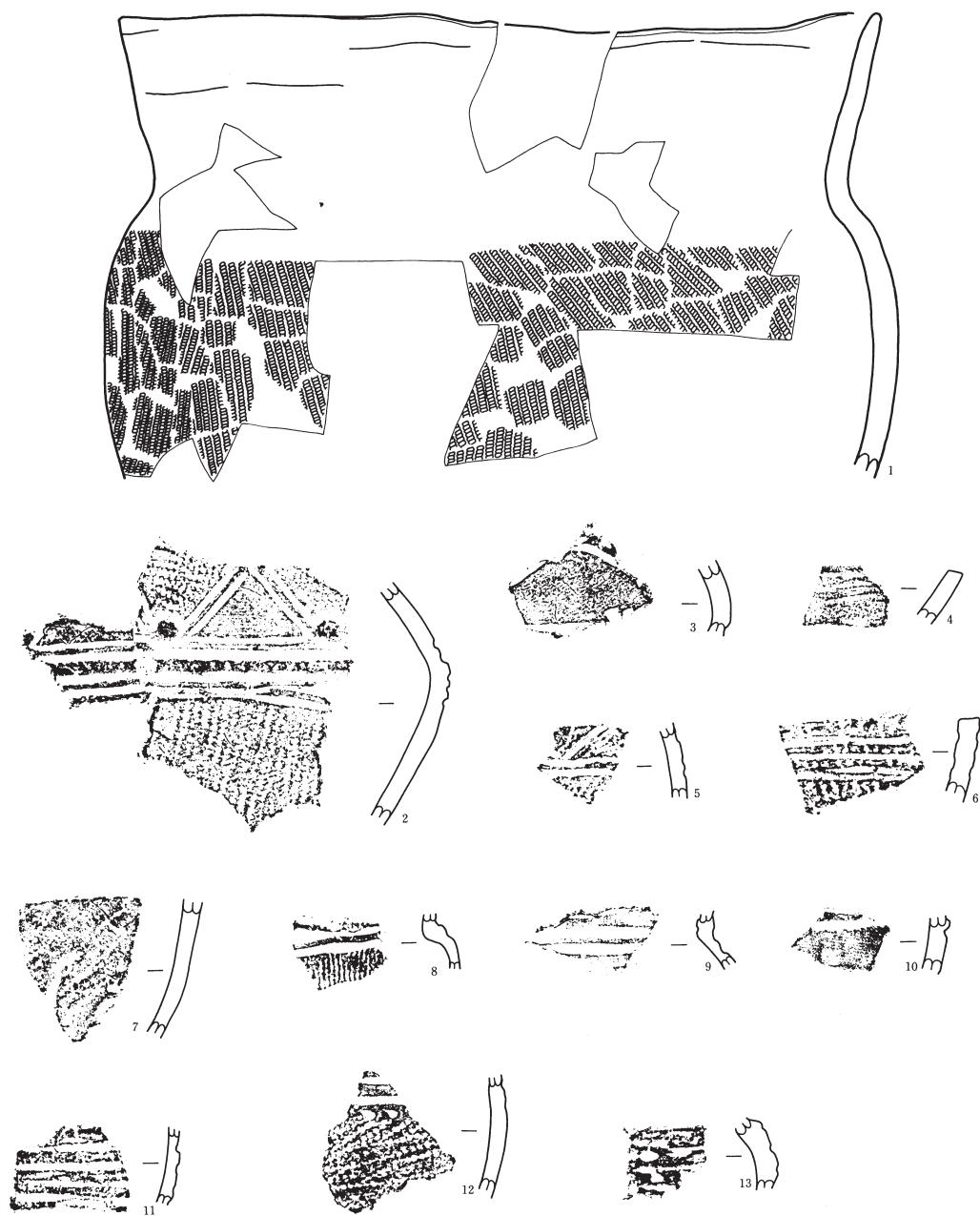
11. 横位に 4 条の沈線が施文されている。器表面は荒れている。

12. 上部に 2 条の沈線が施文されている。沈線間は無文である。沈線の下方に繩文（L R）が施文され、沈線の直下に斜め横から刺突が施されている。表面にスス状炭化物の付着が見られる。

13. 肩部片で、3 条の細い沈線が施文されており、沈線間に斜め横から半截竹管状の工具による刺突が施されている。

すべてが破片であり、1 の除いてはほとんど接合しなかったために、編年的位置については断定し得る資料がない。2 は、胴部中央の隆蒂及び鋸歯文等に田舎館式の特徴をもつが、内面の調整等が雑であり、やや異なるものと思われる。その他の破片についてもまた同様であるが、田舎館式の前段階とされる宇鉄式における特徴を有するものはない。6 は五所式に近いものと思われる。これらのことから、本遺跡出土の群土器は、田舎館式より若干古いものと思われる。

（白鳥文雄）

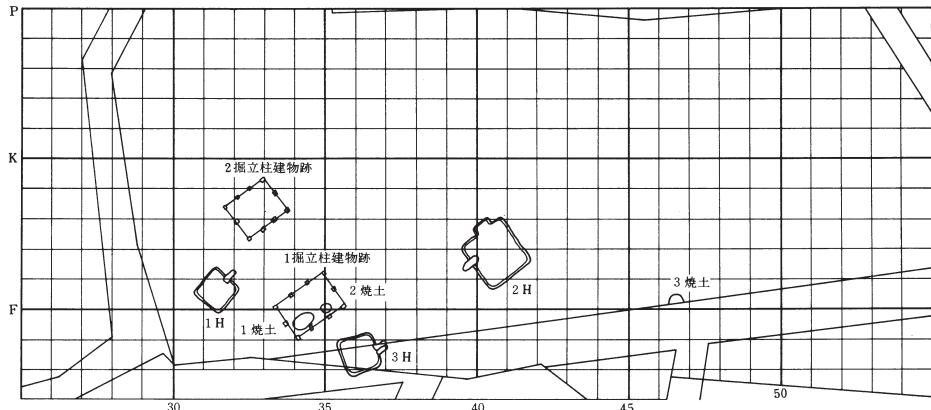


第156図 弥生時代土器拓影図

第 章 歴史時代の遺構と遺物

住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、焼土遺構3基が検出された。また、時期不明の建物跡1軒が検出された。

遺物は、土師器、須恵器を中心としており、ほとんどが平安時代の所産である。



第157図 歴史時代遺構配置図

第1節 検出遺構と遺構内出土遺物

第1号竪穴住居跡（第158～162図）

<位置> E 31、F 30・31・32、G 30・31グリッドに位置し、層中において確認した。

<規模> 北東壁3.8m、南東壁4.1m、南西壁4.3m、北西壁4.3mのややゆがんだ方形を呈する。

カマドを除いた床面積は16.3m²で、主軸方位はN 41° Wである。

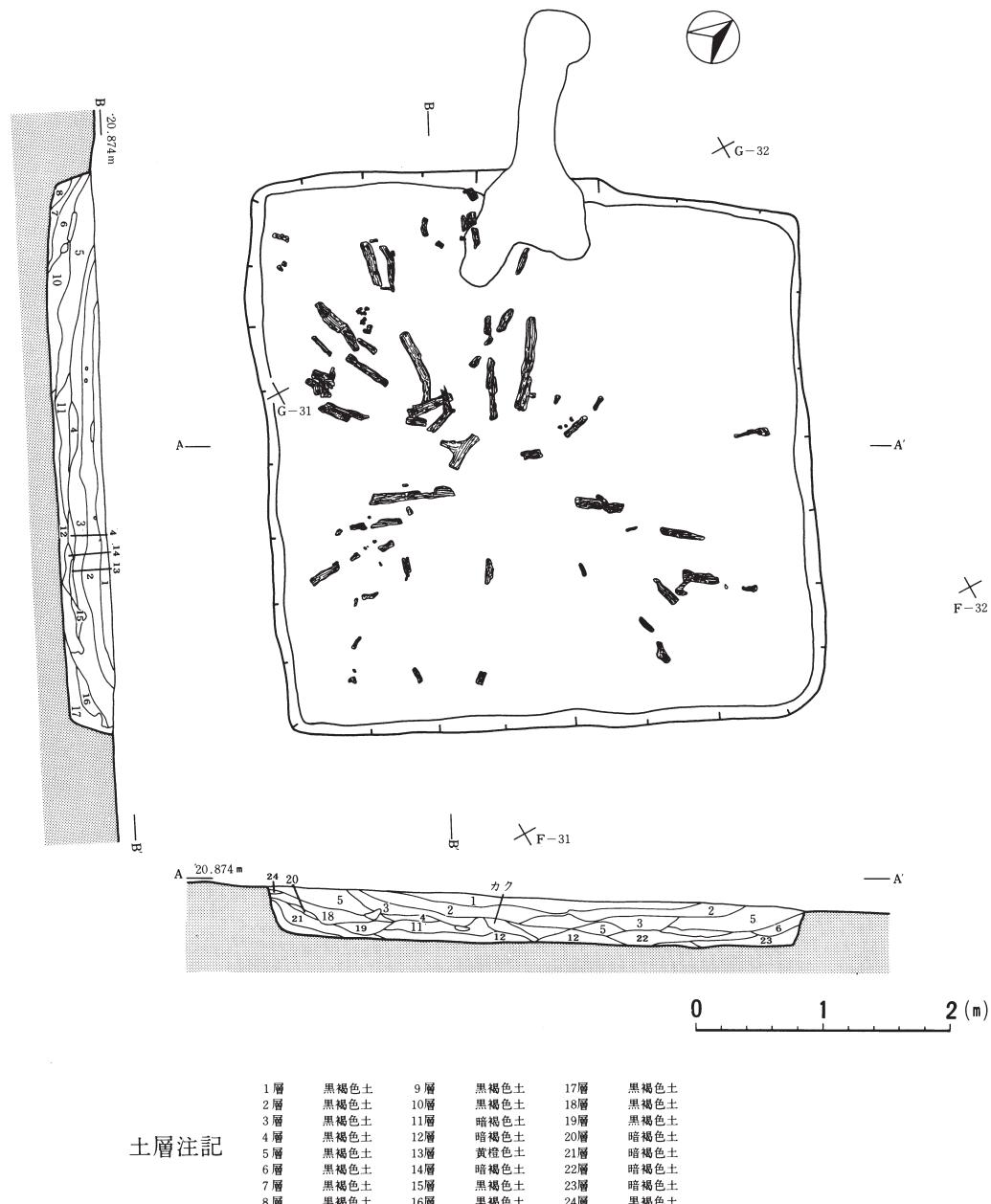
<壁> 垂直に立ち上がる。地山の土質の相違により締まりは異なる。特にプラン確認面においては、地山が中摺浮石を多く含むためもろく、崩れやすい。全体的に壁上部がもろく、床面に近づくにしたがってかたく締まっている。北東壁中央部とカマド北側部分に不明瞭な部分がある。

<床面> ほぼ全面貼り床と思われるが、層まで掘り込んでいるために不明瞭な部分が多い。全体的にやわらかで、緩やかな起伏をもっているが、カマド付近はやや高くなっている。

<柱穴> 床面上に数か所のしみを確認したが、1～3cm程の深さであり、柱穴と断定できるものはない。

<覆土> 混入物及び締まり等から24層に細分したが、ほとんどが黒褐色土と暗褐色土である。2層中には色調の異なる2種類の火山灰がブロック状に混入する。この火山灰は、不連続ではあるがほぼ住居全体にナベ底状に堆積している。また、炭化物及び炭化物粒の混入も多い。

<カマド> 北西壁中央に位置する。壁を掘り込んでおり、粘土等で煙道部を構築している半



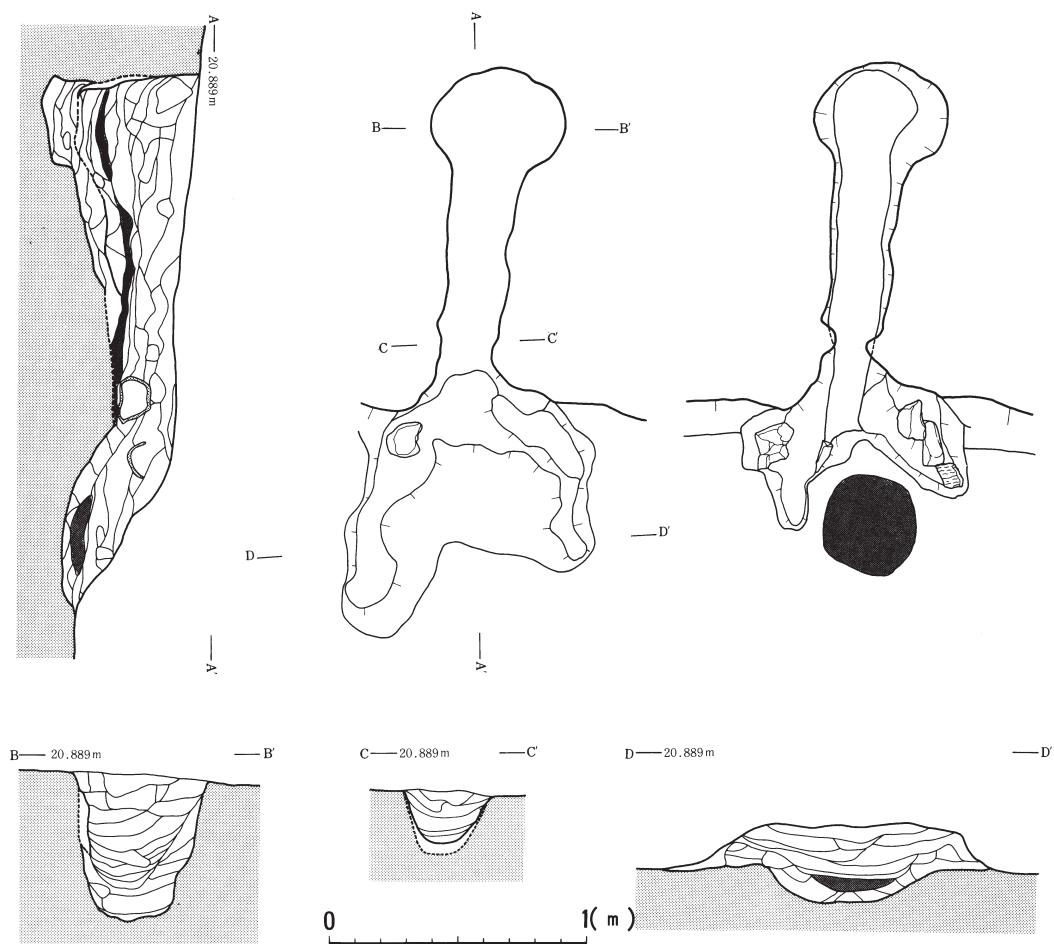
第2層中に降下火山灰がブロック状に混入する。

第158図 第1号堅穴住居跡平面図

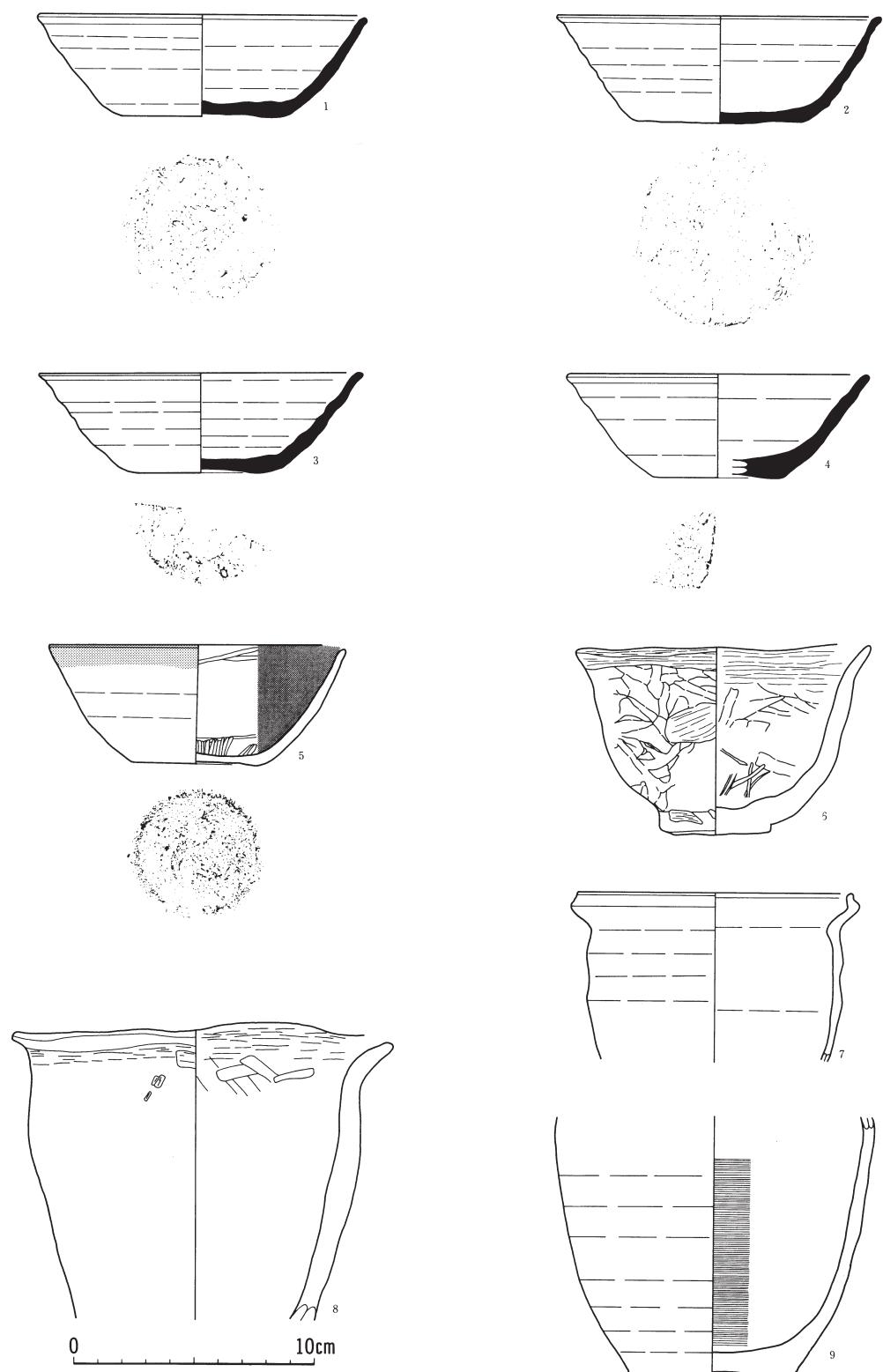
地下式の構造である。燃焼部は円形に掘り込まれている。焼土は、最大厚8cmのレンズ状であるが、しまりはない。袖部分は、石材を芯材として使用しており、燃焼部及び粘土中に破損した状態で検出された。煙道部は緩やかに立ち上がり、煙出し孔付近で下降する。粘土等が強い焼化を受けており、かたくしまった焼土及び灰褐色土が確認された。煙出し孔は垂直に立ち上がり、上面がやや広い。煙道部には土の流れ込みはほとんど認められないが、煙出し孔には焼土等を含む土が流入している。掘り方は、煙道部中央付近から煙出し孔に向かって下降しており、煙出し部直下では非常に深く掘り込まれている。

<炭化材> 壁面から住居跡中心部に向かって丸太状の炭化材が多量に検出されたが、板状のものはほとんど認められなかった。南コーナーから中心部に向かって丸太状の炭化材が確認され、主柱の可能性が考えられたがコーナーには柱穴は認められなかった。

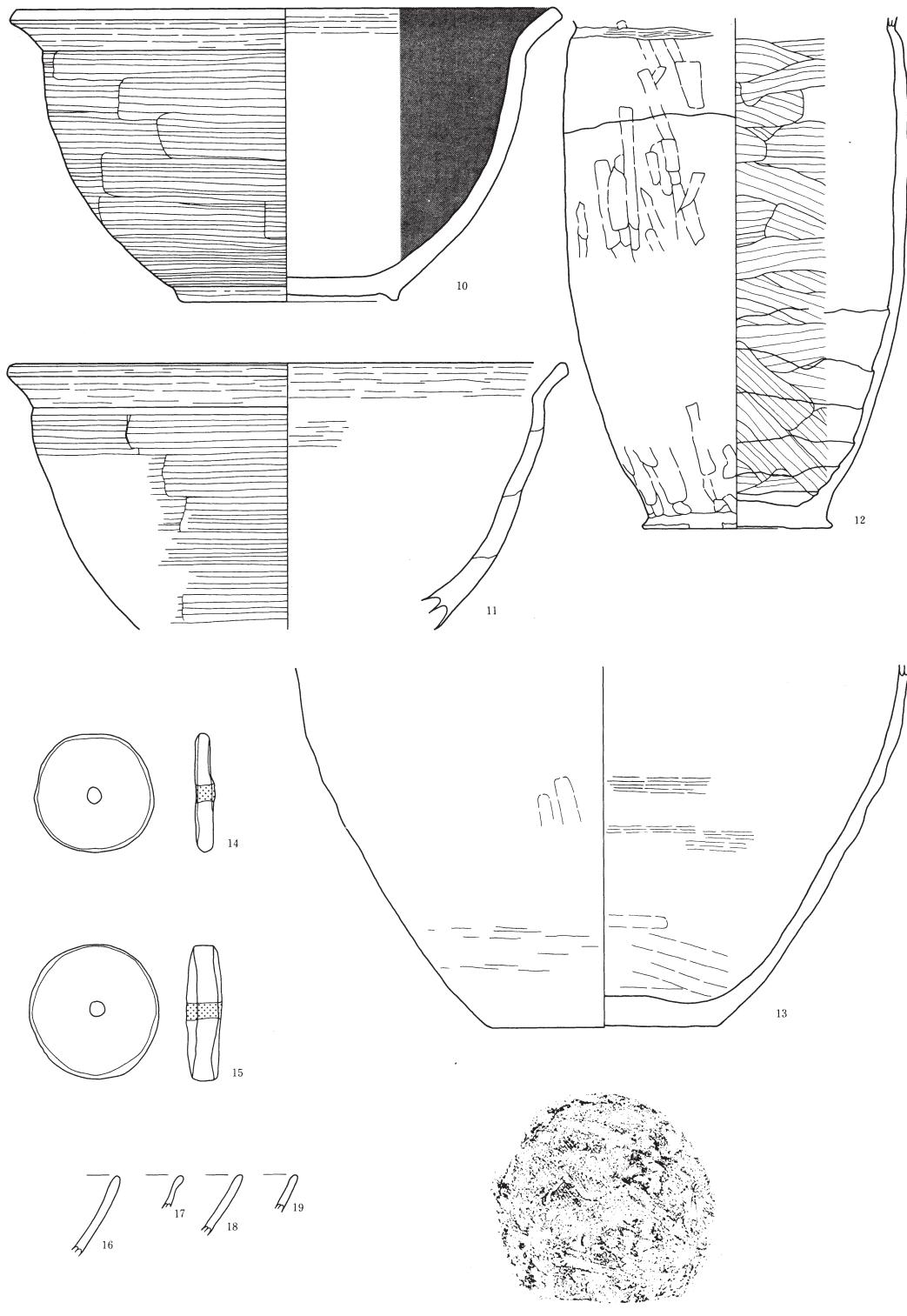
<出土遺物> 土師器壺・甕・鉢、須恵器壺・甕破片・紡錘車、砥石、軽石、白色粘土等が出士した。



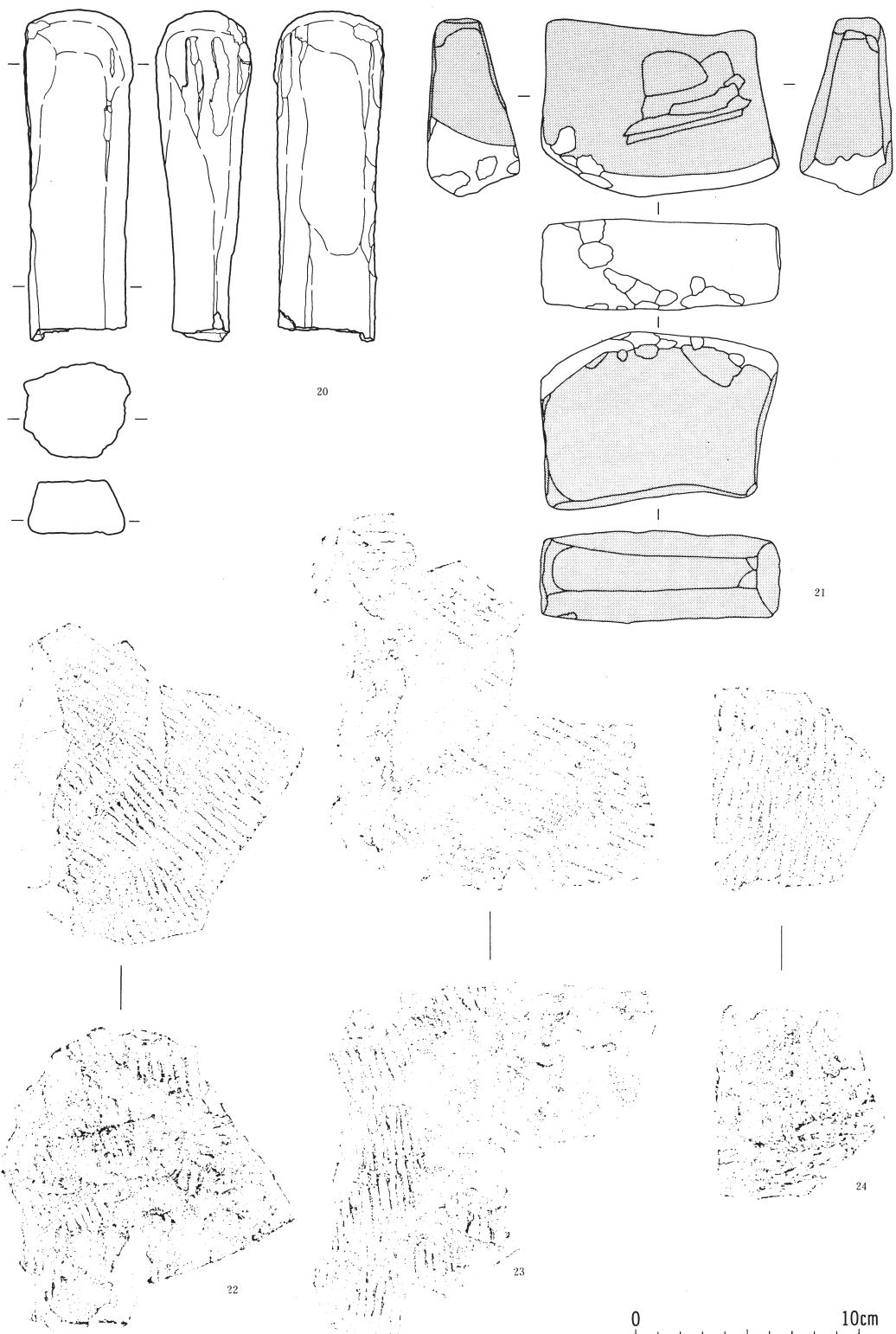
第159図 第1号竪穴住居跡カマド



第160図 第1号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第161図 第1号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



第162図 第1号竪穴住居跡出土遺物実測図・拓影図(3)

第2号竪穴住居跡（第163～167図）

<位置> F 40、G 39、40、41、H 39・40・41グリッドに位置し、層中において確認した。

<規模> 北壁7m、東壁7m、南壁6.9m、西壁6.5mのややゆがんだ方形を呈する。西壁中央から北寄りに南壁1.6m、西壁1.4m、北壁1.2mの張り出し部をもつ。張り出し部は住居跡内から掘り込んでいる。カマド・柱穴・周溝・張り出し部を除いた床面積は43.1m²で、主軸方位はS 21° Eである。焼失家屋である。

<壁> 垂直に立ち上がる。地山の土質の相違により締まりは異なる。

<床面> 全面貼り床であり、部分的に締まりは異なるが全体的にやわらかい。

<柱穴> 12基のピットが確認されたが、1～10が柱穴である。3は、床面に炭化材の一部と粘土が存在し、柱穴内は中空で検出された。1・2・3・10は柱痕が確認された。

<周溝> カマドと、張り出し部と接する部分を除いて全周する。幅は10cm以下であり、深さは2cm～10cmである。

<覆土> 自然的堆積状態を示し、24層に区分できた。黒褐色土と暗褐色土が主体であり、4層中に2種類の火山灰を含む。また、焼土や炭化物を混入し、床面に近づくにつれて炭化物の混入が多くなる。

<カマド> 南壁西寄りに位置し、半地下式である。

燃焼部は、若干掘り込んでおり、焼土は厚さ8cmほどである。また、砂粒を含み、かたく締まっている。袖部は粘土で構築されたものと思われる。燃焼部上に石材が多数確認された。煙道部は煙出し孔に向かって緩やかに下降しており、側壁及び底面の一部は粘土により構築されているが、天井部は不明瞭である。煙出し部はほぼ円筒状であり、上部がやや広い。煙出し孔直下は35cmほど掘り込まれているが、壁が崩壊して内部に流れ込んでいる。火床面下部にピットが検出された。

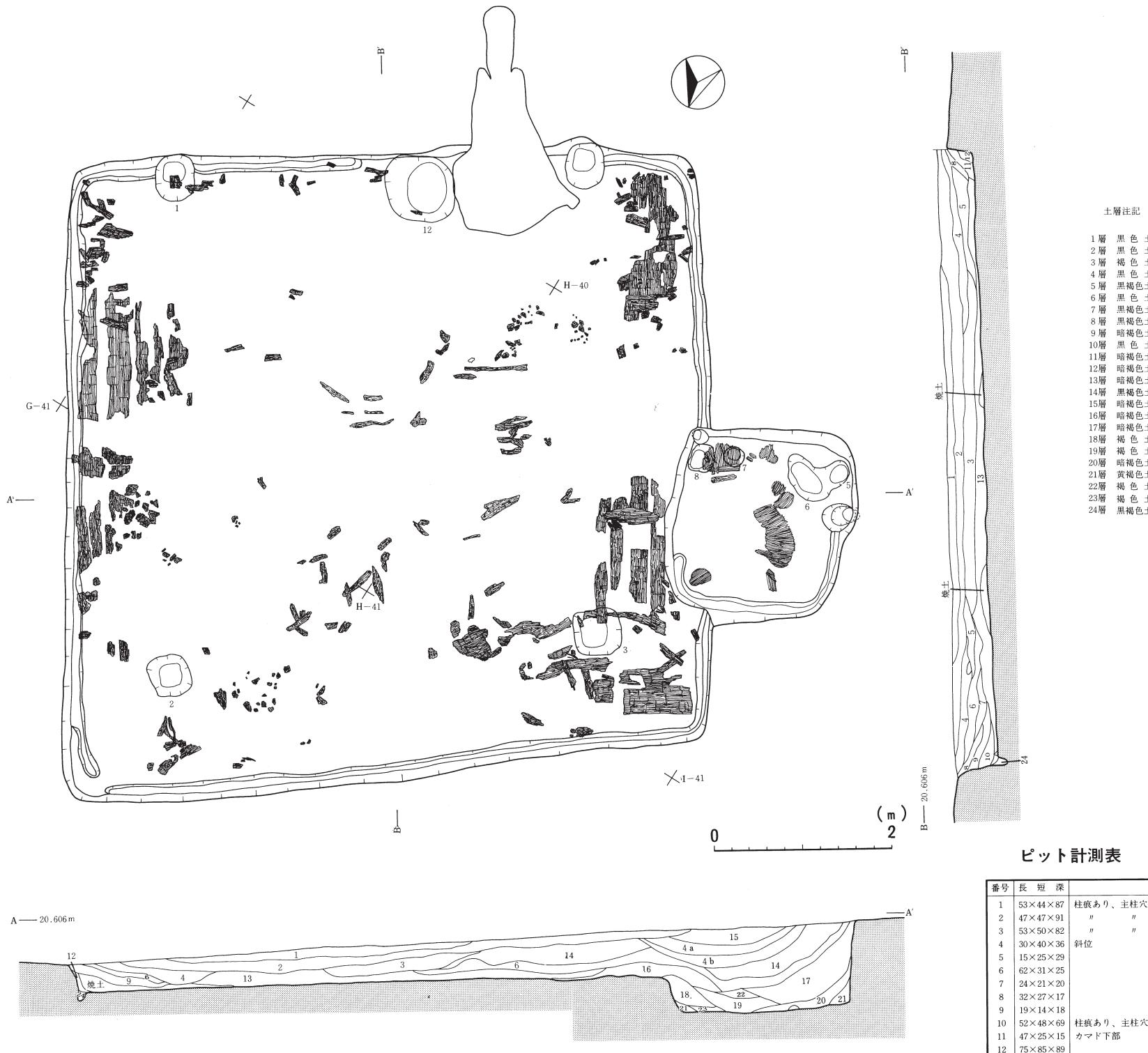
<付属施設> 張り出し部が西壁北寄りに構築され、住居跡床面より低く掘り込まれている。北壁には周溝が設けられ、南壁には対して柱穴が5基掘り込まれている。住居内との境界部分に板状の炭化物が倒れており、しきりとして使用されたものと思われる。また、板状炭化物の検出されない部分は、この張り出し部への出入口と推定される。貯蔵用施設と思われる。

ピット12はカマド東側に位置する。焼土・炭化材・灰等が混入しており、カマドに付随するものと思われる。

<掘り方> 中央部が高く、壁に向かい緩やかに下降する。多量の縄文時代の遺物が出土した。

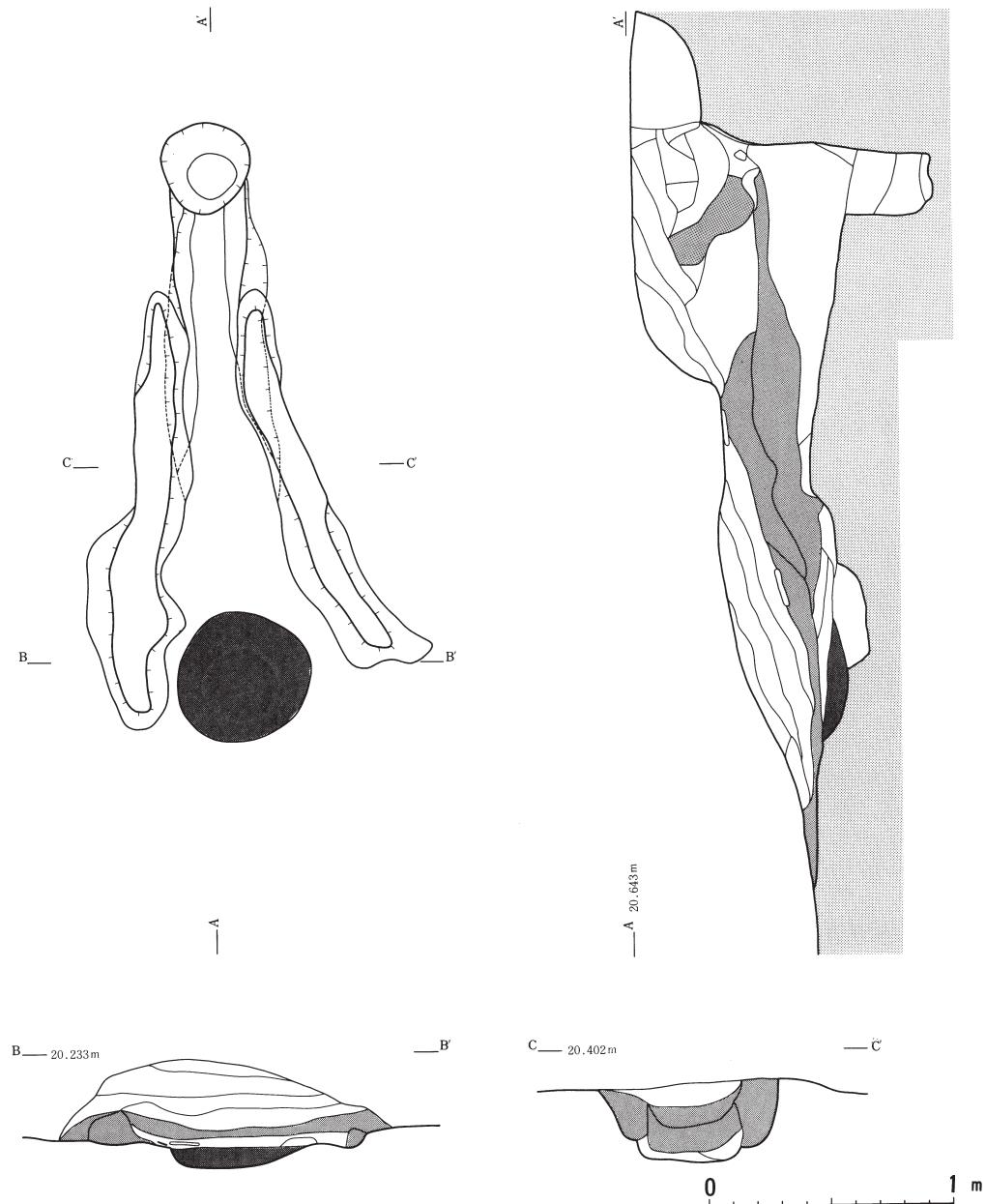
<重複関係> 第19号溝状ピットと東壁で切り合っており、本住居跡が新しい。

<炭化材> プラン確認時には、南壁東側においてプランに沿って腰板が直立のまま検出され



第163図 第2号竪穴住居跡平面図

ており、南東、南西コーナーでは丸太が直立の状態で検出された。このコーナー部の丸太は柱として使用されたと思われるが、床面までは達しておらず、プラン確認面から10cmほどで消失している。すべての壁面に板状及びワラ状の炭化物が粘土に貼り付いた状態で検出された。床面直上には板状の炭化物が壁と平行して倒れており、更に東壁部では、この板状炭化物の上に丸太状の炭化物が直交して倒れている。炭化材は、その上下を焼化を受けた粘土で覆われているが、この粘土は、腰板等を安定させるために使用されたものと思われる。張り出し部との境



第164図 第2号竪穴住居跡カマド

界にも板状の炭化物が住居跡内に倒れておりまた、張り出し部内には、ワラ状炭化物が数プロックに分かれて検出された。このワラ状炭化物は、各プロックごとに一定の指向性を示す。床面との間に焼化した粘土が検出されていることから、上屋施設の一部と思われる。

<出土遺物> 土師器坏・甕、須恵器坏・長頸壺・広口壺・甕破片・紡錘車、砥石、木器、金雲母、炭化種子、繩文時代土器片、等が出土した。

第3号竪穴住居跡(第168~170図)

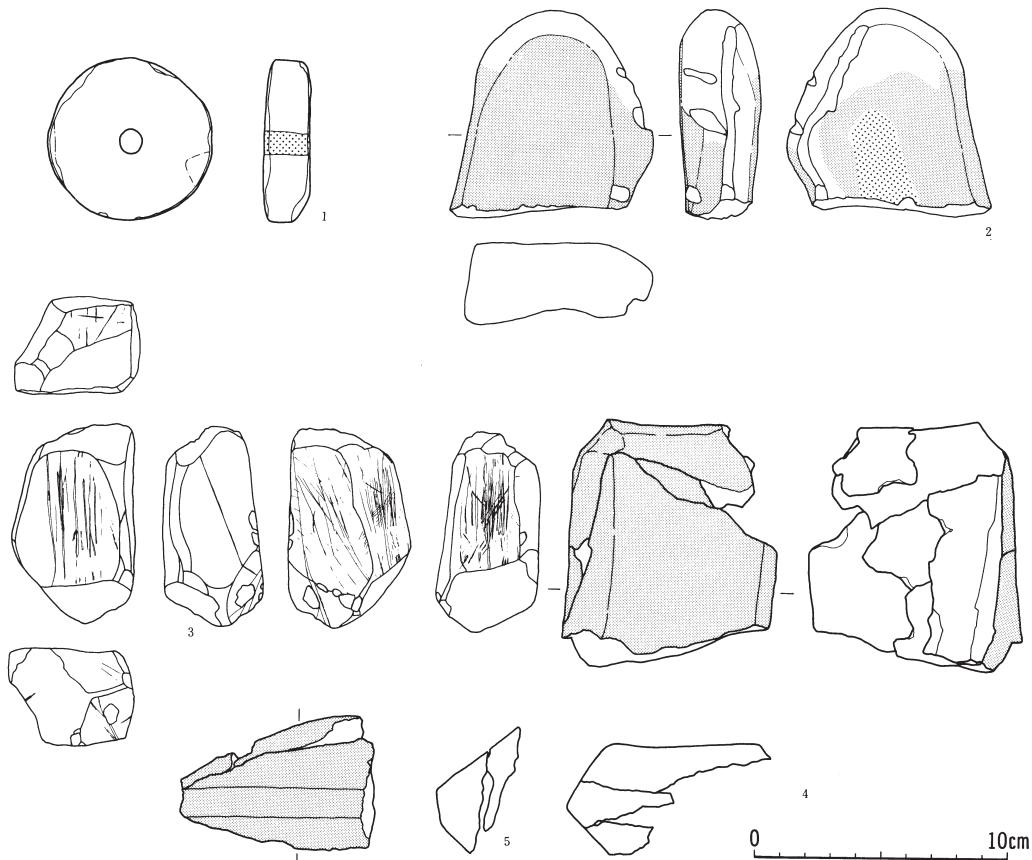
<位置> C 35・36、D 35・36、E 35・36グリッドに位置し、層中において確認した。

<規模> 北東壁4.5m、南東壁5.1m、南西壁4.5m、北西壁4.6mの方形を呈する。カマド柱穴を除いた床面積は15.2m²で、主軸方位はN 19.2° Wである。

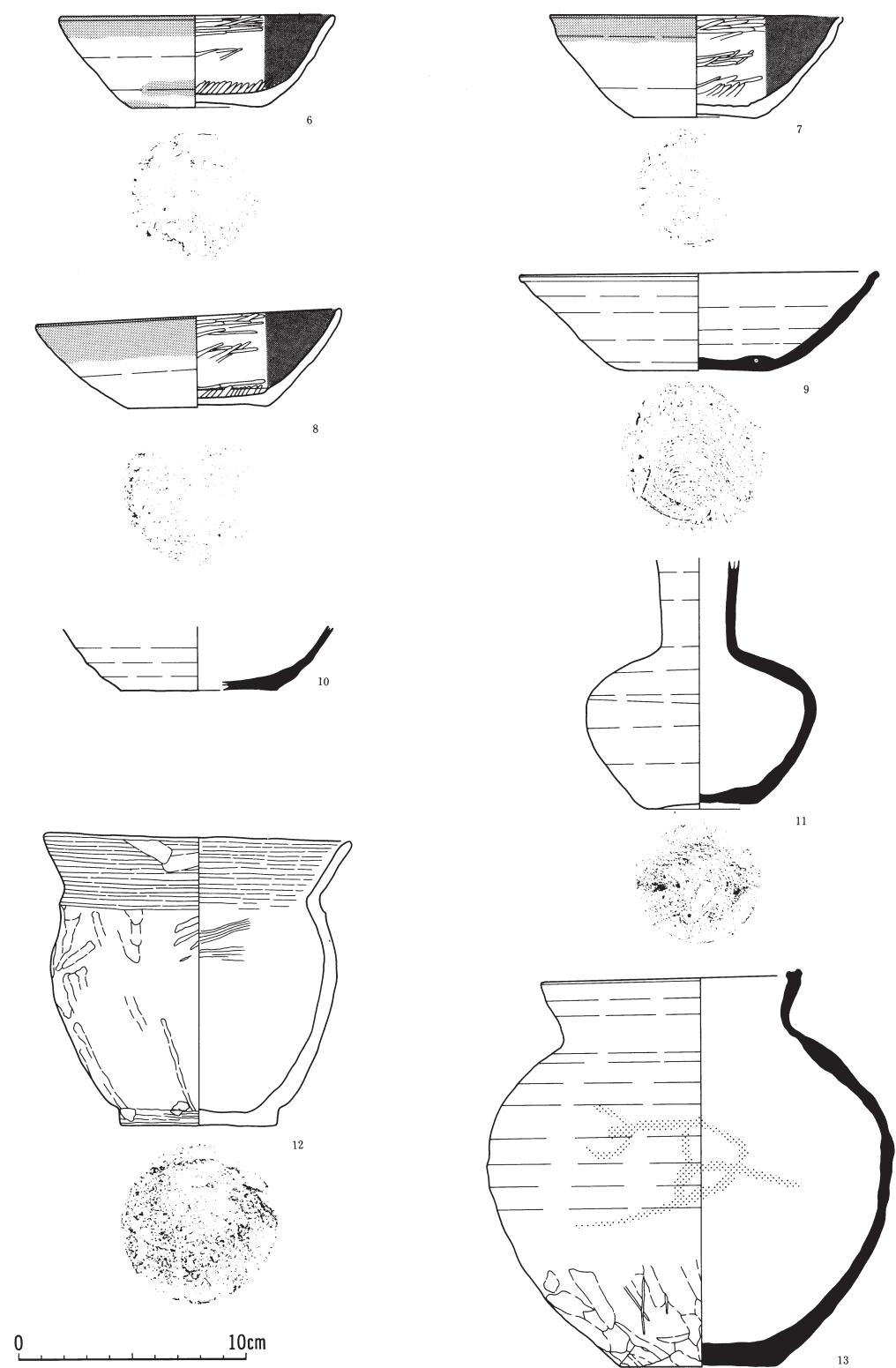
<壁> 垂直に立ち上がる。地山の土質の相違により締まりは異なる。

<床面> 全面貼り床であり、部分的にかたさが異なる。中央部はかたく締まっており、特に西寄りに長楕円形の非常にかたい部分が認められる。

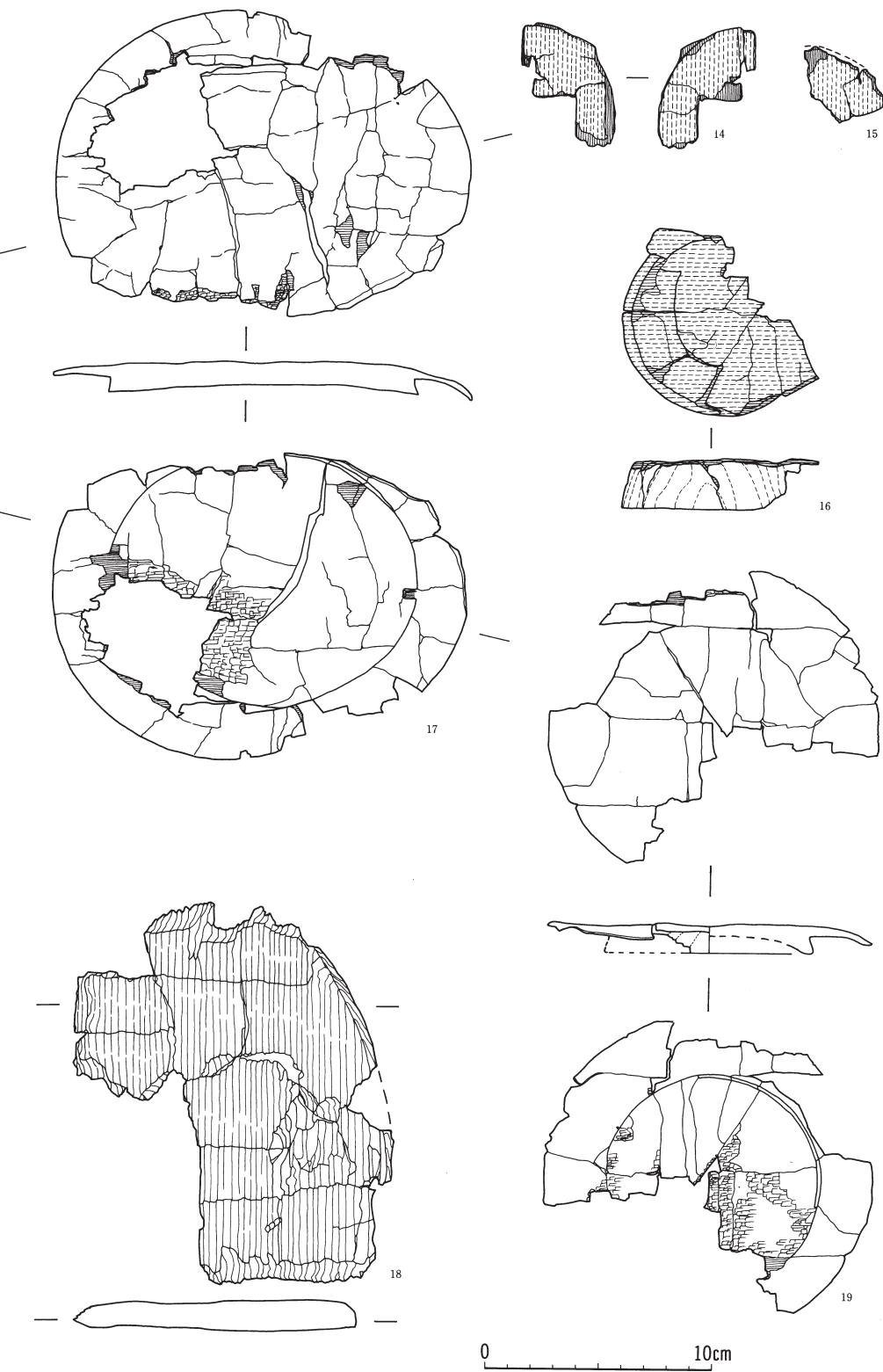
<柱穴> 3基検出した。ピット1・2は深さ20cmほどであり、3は35cmほどである。これら



第165図 第2号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第166図 第2号竪穴住居跡出土遺物実測図(2)



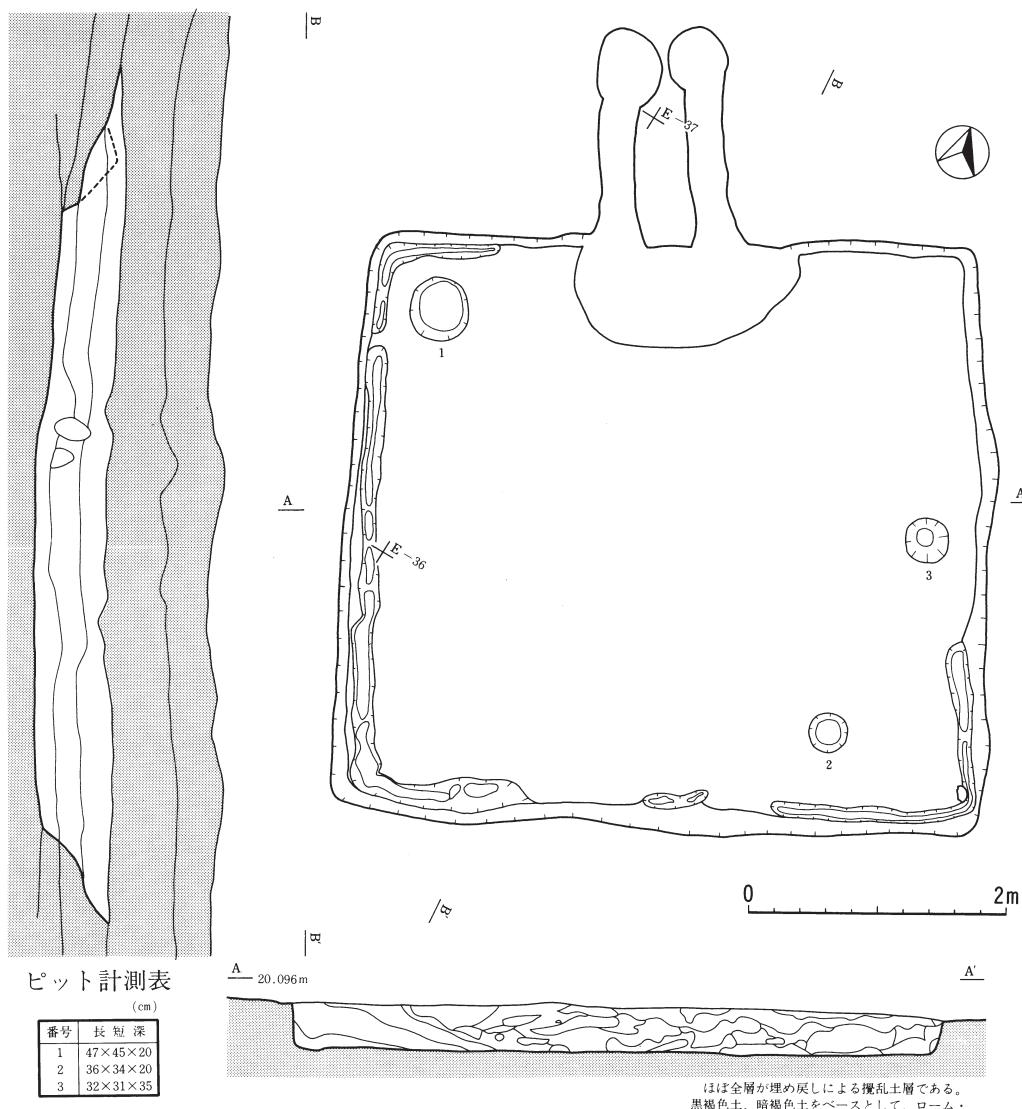
第167図 第2号竪穴住居跡出土遺物実測図(3)

のピットに対応するピットは検出できなかった。

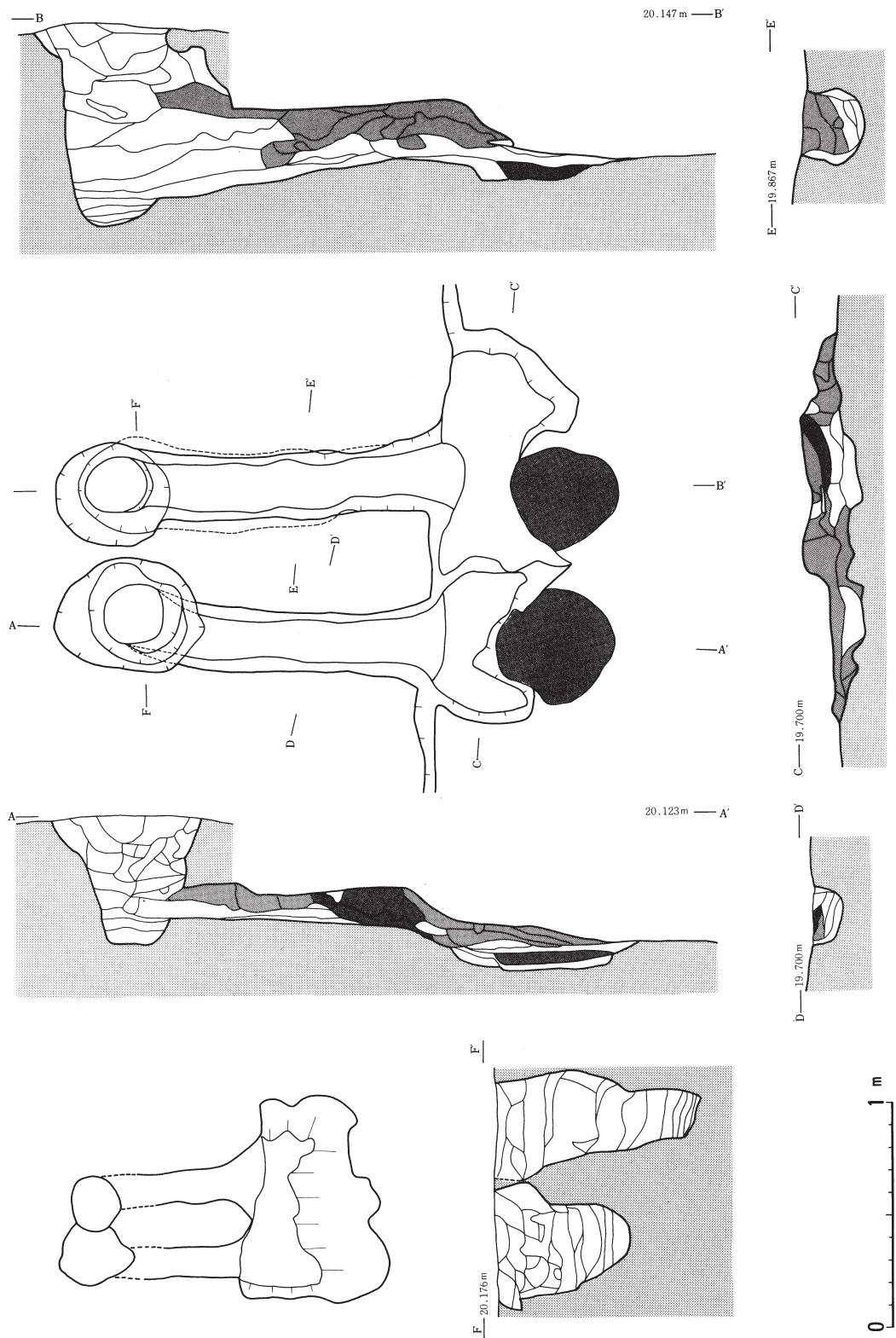
<周溝> カマド東側から南東壁の約3分の2と南西壁の中央部の一部を除いて構築されている。

<覆土> 黒褐色土と暗褐色土が主体となっており、壁際の一部の堆積土を除いて人為的堆積状態を示す。覆土中に火山灰がブロック上に混入する。

<カマド> 北東壁中央に2基構築されている。東寄りのものが新しく、いずれもトンネル式である。



第168図 第3号竪穴住居跡平面図

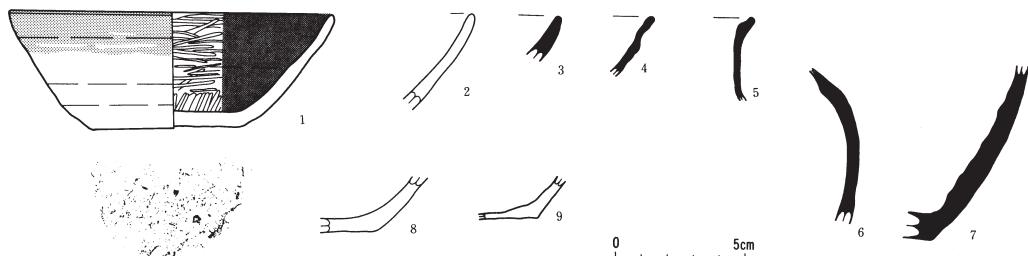


第169図 第3号堅穴住居跡カマド

カマド1. 西寄りのカマドで、燃焼部は円形に掘り込まれており、焼土の厚さは5cmほどであるが縫まりに欠ける。袖部は、粘土によって構築されたものと思われ、燃焼部横及び燃焼部上に残存していた。煙道部は、煙出し孔に向かって緩やかに上昇している。煙道部の土は、焼化を受けているが全体的にやわらかい。煙出し部分は逆台形状を呈しており、煙出し孔直下は煙道部から10cm以上掘り下げられている。煙出し部内の覆土は焼土の混入が多い。煙道部の上面は削平により構築方法が不明瞭であるが、煙出し部分及び掘り方からトンネル式と推定される。廃棄されたものと思われる、袖部分等、壁から内側の諸施設は部分的に取壊されている。燃焼部上面をカマド2の袖部分の粘土が覆っていた。

カマド2. 東寄りのカマドで、燃焼部は掘り込まれており、焼土の厚さは5cm～8cmであるが、縫まりに欠ける。袖部は、粘土で構築されたものと思われるが、袖上面及び横に石材が確認されていることから、これらの石材を芯材として使用した可能性も考えられる。煙道部は、壁部分で一度上昇し、煙出し孔に向かって下降する。焼化を受けているが、焼土をブロック状に含む部分が多く、全体的に、かたく焼き締まっている部分は認められない。粘土等の使用は一部を除いて認められない。煙出し部は、煙出し孔に向かって広がっており、煙出し孔直下は煙道部より10cmほど掘り下げられている。1と同様、煙道部上面は削平により不明瞭であるがトンネル式と推定される。

<出土遺物> 繩文時代土器片・土師器片・須恵器片等出土したが、接合するものは少なく、土師器甕破片が数片接合しただけである。破損した汁器類を捨てたような出土状態である。



第170図 第3号竪穴住居跡出土遺物実測図

第4号竪穴住居跡（第171図）

<概要> M 40、N 39～40グリッドに位置する。北壁・南壁3.6m、東壁・西壁2.8mの長方形を呈し、面積は11.2m²である。b層直下において平面形を明確に把握できた。壁は、西壁がやや傾斜するが、他は垂直である。床面は平坦であり、縫まっている。壁面直下において18基の柱穴を確認した。5基はやや斜行するが、他は垂直である。径は11～15cmであり、深さは17.5cm～28.9cm、平均で23cmである。

覆土は、・～層の混合土であり、各層の混入の度合により3層に区分した。全体的に締まりがなくやわらかい。

1層 褐色土の混入が多く、部分的に層に類似した黒色土の混入が認められる。覆土のほとんどがこの層に含まれる。層と類似する土も多く混入する。

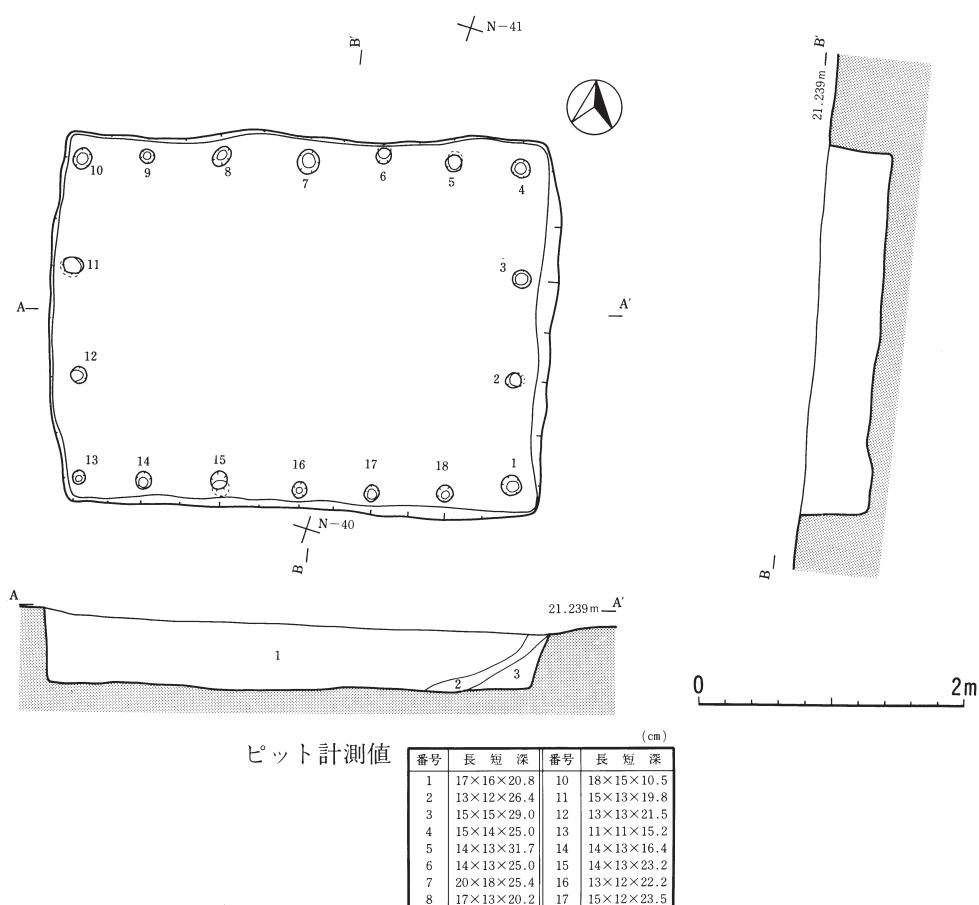
2層 黒褐色土で、層と思われる土が、 $5 \times 10\text{mm} \sim 10 \times 20\text{mm}$ の小ブロック状に混入するが、本遺構はこの層まで掘り込んでいない。

3層 暗黄褐色土で層と層の混合土である。全体的にしまりがない。

覆土及び堆積の状態から人為的な埋め戻しと思われる。

構築時期は不明であるが、掘り込み及び覆土の状態から極新しいものと思われる。

形状から住居跡に含めたが、性格は不明であり、あるいは貯蔵用小屋跡の可能性も考えられる。焼土及び火の使用に関する痕跡は確認できなかった。



第171図 第4号堅穴住居跡平面図

第1号掘立柱建物跡（第172図）

C - 34、E - 33～35、F 33～35、G - 34グリッドに位置する。10基の柱穴から構成される桁行3間、梁行2間の建物跡で、桁行方向はN - 20° - Wである。

各柱穴間の距離は、桁行で270cm（9尺）梁行で280cm（9.25尺）であり、梁行の方がやや長い。

柱穴は、ピット5が若干ゆがむのを除いてほぼ方形であり、規模は、46cm～56cm×48cm～57cmで、平均は50cm×55cmである。深さは、確認面の高低差によって一定しておらず、また、底面の絶対高にもばらつきがみられる。柱穴の壁面はしっかりしており、ほぼ垂直に掘り込まれている。10基中6基で柱痕を確認した。4基は柱痕が柱穴のほぼ中央に位置する。

柱痕は平均で径17cmほどであるが、ピット8は19cm×23cmと太い。

ピット6は、層と層の境離面から掘り込まれているようにみられるが、層下部から掘り込まれたものか、層最上部からの掘り込みかは判然としない。

本建物跡内において土師器片等の散布がみられ、これらの集中部分は第1号、第2号焼土遺構として確認された。この焼土遺構が本建物跡に付随するものかどうかは断定できない。

第2号掘立柱建物跡（第173図）

H - 31～33、I - 31～33、J - 32～33グリッドに位置する。10基の柱穴から構成される桁行3間、梁行2間の建物跡で、桁行方向はN - 20° - Wである。

各柱穴間は距離は、桁行で200cm（6.6尺）～210cm（6.6尺）梁行で270cm（9尺）～290cm（9.6尺）とばらつきがみられる。桁行では、ピット2～3と7～8が、1～2・3～4・6～7・8～9の間隔より狭く、梁行では1～10～9よりも4～5～6の間隔が若干広い。

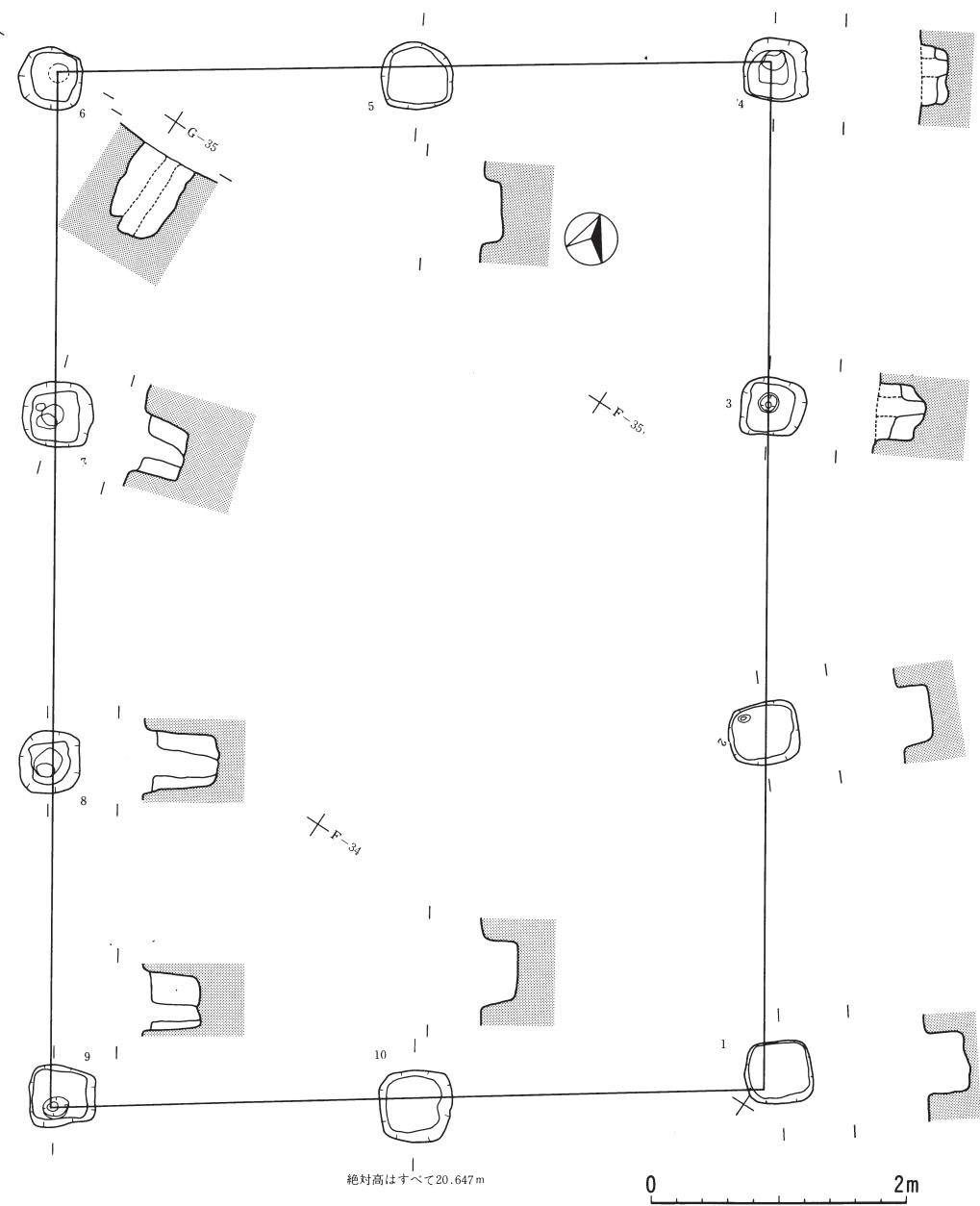
柱穴は、2、3、4、5が長方形であり、他はほぼ方形である。2、3、4は底面に2か所もしくは3か所の窪みが認められる。規模は、29cm～40cm×31cm～67cmで、平均は34cm×45cmである。深さは、確認面の高低差によって一定していないが、底面の絶対高ではおおむね一致する。柱穴の壁面はほぼ垂直に掘り込まれている。10基中7基で柱痕を確認したが柱痕の位置は、柱穴の中央からずれている。

柱痕は、径5cm～18cmであり、（ピット2は推定値であるため除いた）平均は径17cmほどである。柱穴配置は全体的にゆがんでいる。

第1号及び第2号掘立柱建物跡は、桁行方向及び位置関係から同時存在が考えられる。

第1号焼土遺構（第174～175図）

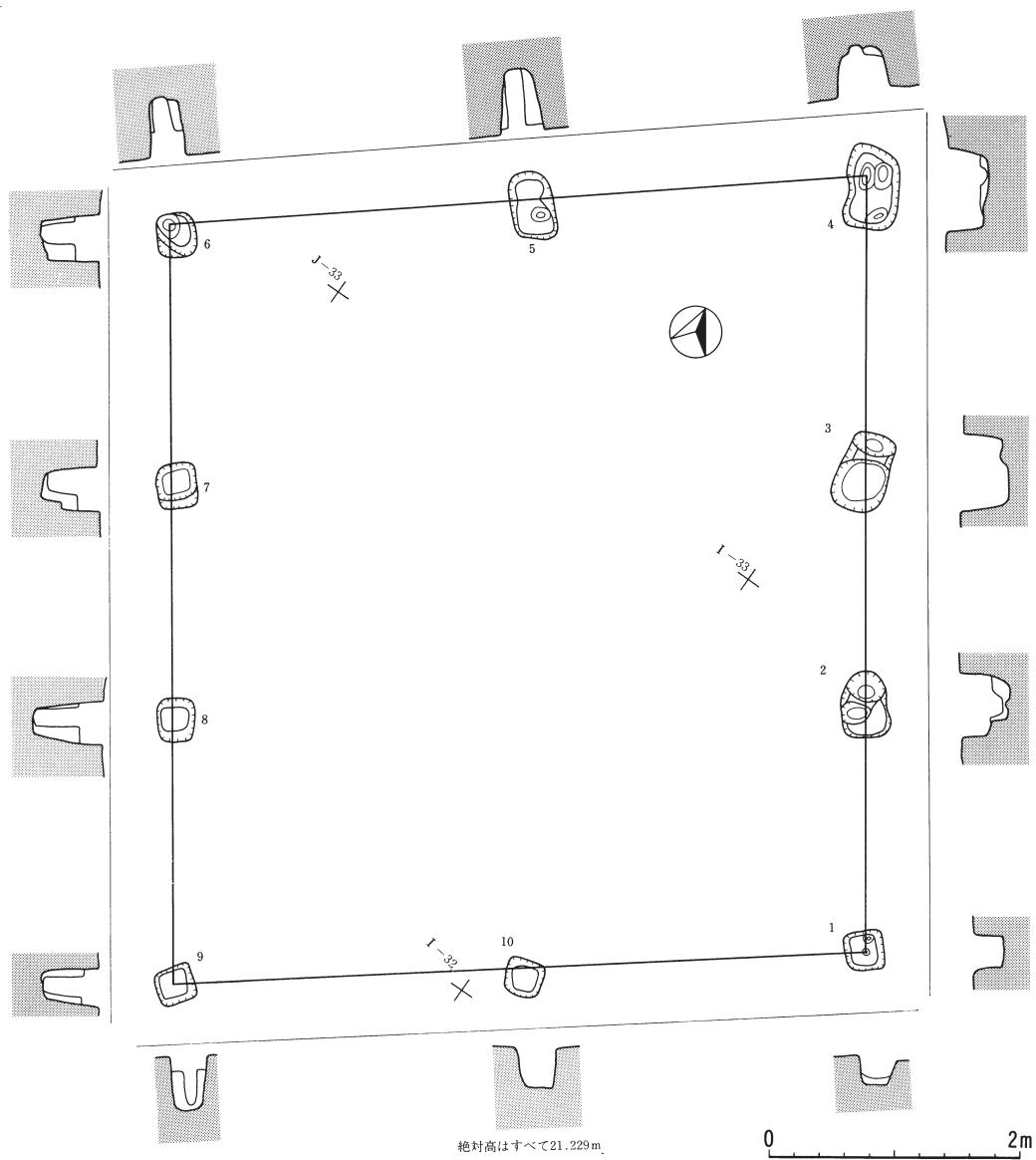
E - 34グリッド、第1号掘立柱建物跡の北東隅に位置する。層中で、暗褐色土及び焼土の広がりとして確認した。焼土を中心として暗褐色土及び褐色土が混入しており、ベースとなる黒褐色土も他の地点の層に比して若干締まりがない。焼土は3か所あり、2か所は確認面上に、他の1か所は10～15cm下面において検出した。いずれもレンズ状の堆積を示している。



柱穴計測表

(cm)									
番号	短	長	深	柱 痕	番号	短	長	深	柱 痕
1	50×53×33				6	47×55×73		14×14	
2	50×55×26				7	51×56×39		16×16	
3	46×52×48	14×16			8	46×55×59		19×23	
4	48×48×21	16×18			9	54×54×46		17×20	
5	54×56×16				10	56×57×28			

第172図 第1号掘立柱建物跡平面図



柱穴計測表

番号	短	長	深	柱	痕	番号	短	長	深	柱	痕
1	32	32	25			6	32	36	48	18	17
2	36	54	41	(20)	×(20)	7	33	38	46	17	17
3	40	65	38			8	30	36	55	16	16
4	40	67	35	15	× 16	9	29	32	46	16	18
5	34	56	52	17	× 17	10	30	31	34		

第173図 第2号掘立柱建物跡平面図

推定される掘り方は不整形であり、ナベ底状を呈する。

焼土 1 は最上面で確認された。厚さ10cmでレンズ状に堆積するが、掘り方は不明瞭である。

焼土 2 は 1 とほぼ同レベルで確認された。非常にやわらかく、砂粒の混入がみられサラサラしている。

焼土 3 は最下部で確認された。3か所の焼土の中で一番かたくしまっており、移動していないものと思われる。2と地点的には重なっているが、堆積状態から直接の関係はないものと思われる。この焼土は、非常にかたく焼き締まった部分と、暗褐色土に焼土が混じっている部分焼土に暗褐色土が混じっている部分に大きく分けられるが、最初のかたくしまった部分は、砂粒を多く含む層が焼化を受けて硬化したものと思われる。

確認面上において、土師器片、須恵器片の散布がみられる。

第2号焼土（第175図）

F - 34グリッド、第1号掘立柱建物跡のほぼ中央部に位置する。第1号焼土遺構と隣接しており、確認状況も同様である。焼土はレンズ状の堆積を示し、3層に区分できるが、上の部分は暗褐色土と焼土が混じり合っている。中の部分はほぼ焼土のみであるがやわらかい。最下部は、焼土が非常にかたく締まっており、色調も明るい。全体的に層の砂粒を多く含む土層が焼化されたように思われ、第1号焼土遺構の焼土3に似ている。

第1号焼土遺構同様に黒褐色土中から検出したため、掘り方は不明瞭であるが、ほぼ円形でナベ底状を呈する。

第1号、2号の焼土遺構は、第1号掘立柱建物跡の柱穴範囲内にあり、柱穴6の確認層位とほぼ同じレベルで検出している。このことから、これら焼土は掘立柱建物跡に付随する可能性も考えられる。

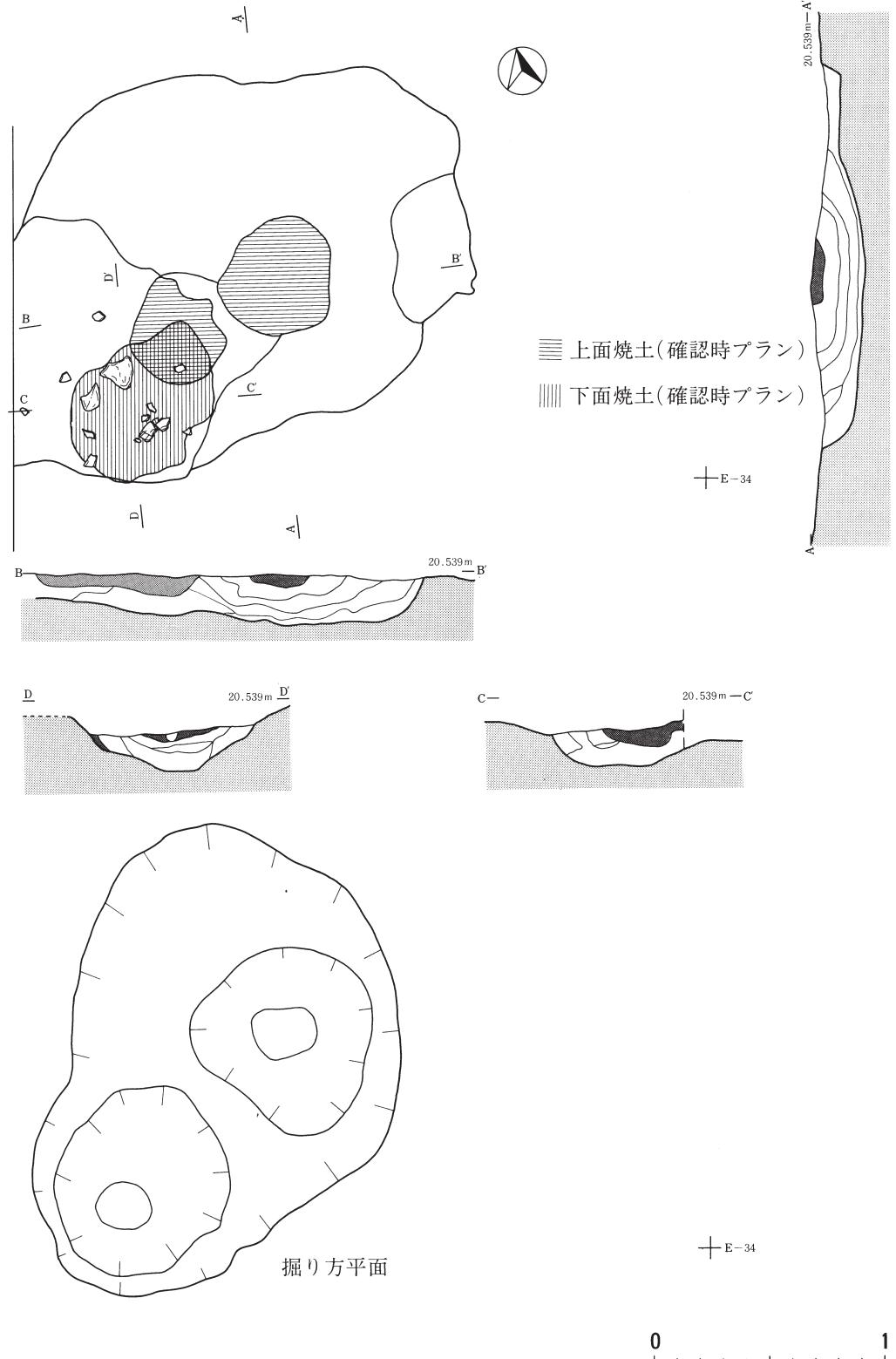
第3号焼土遺構（第176図）

F - 47グリッドに位置する。黒褐色土中で、暗褐色土及び焼土の広がりとして確認された。焼土は2か所あり、堆積土は、赤褐色（焼土）部分と、暗褐色土及び黒褐色土に焼土が混入している部分とに分けられる。1か所は、2cm～5cmほどの厚さであり、やわらかく締まりがない。他の1か所はかたくしまっており、最もかたく焼化されている部分は斜めに堆積している。焼土の直下は層及び層である。掘り方は長楕円形を呈する。

焼土を中心とする部分とこの南側部分に、土師器片が密集する部分があり、焼土横からは、内面黒色処理の施された壺形土師器が完形で出土した。

また、焼土に隣接して、深さ20cmほどの円形ピットが検出されたが、遺物等は含まれていない。

焼土の断面形状（焼土が斜行していること、地山上に標準土層と異なる土の堆積がみられる

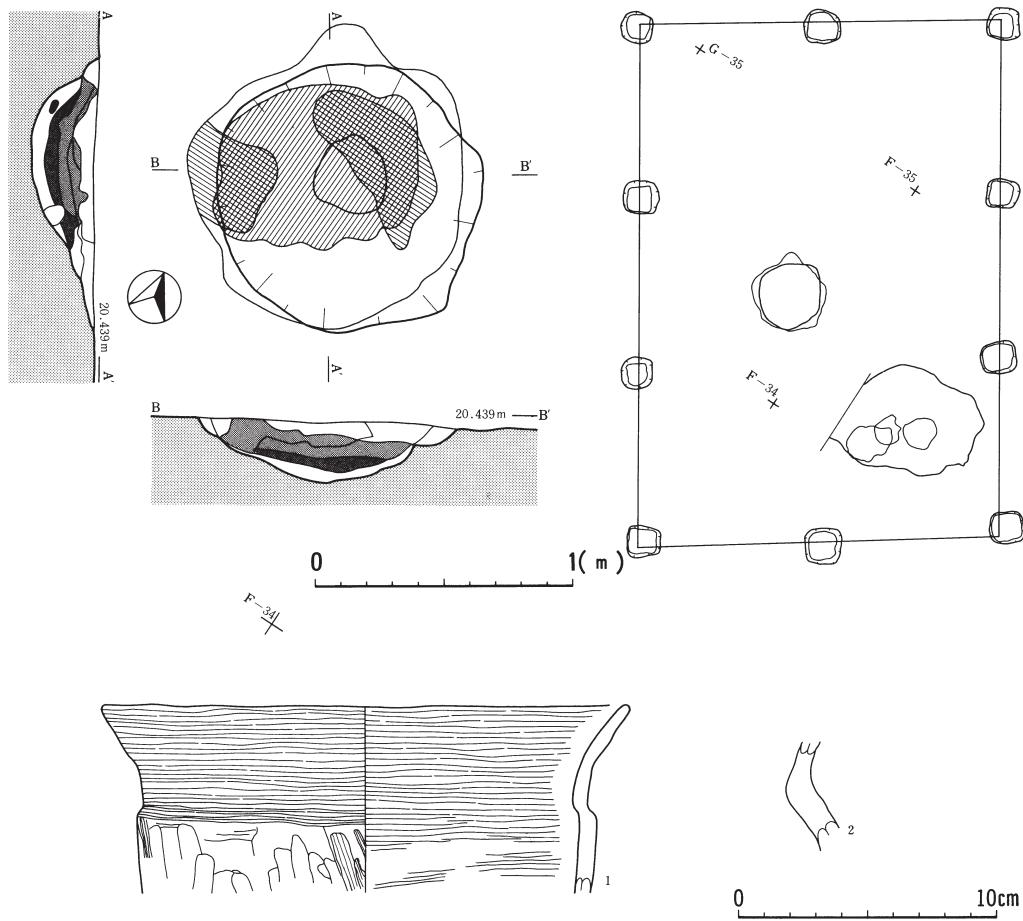


第174図 第1号焼土遺構平面図

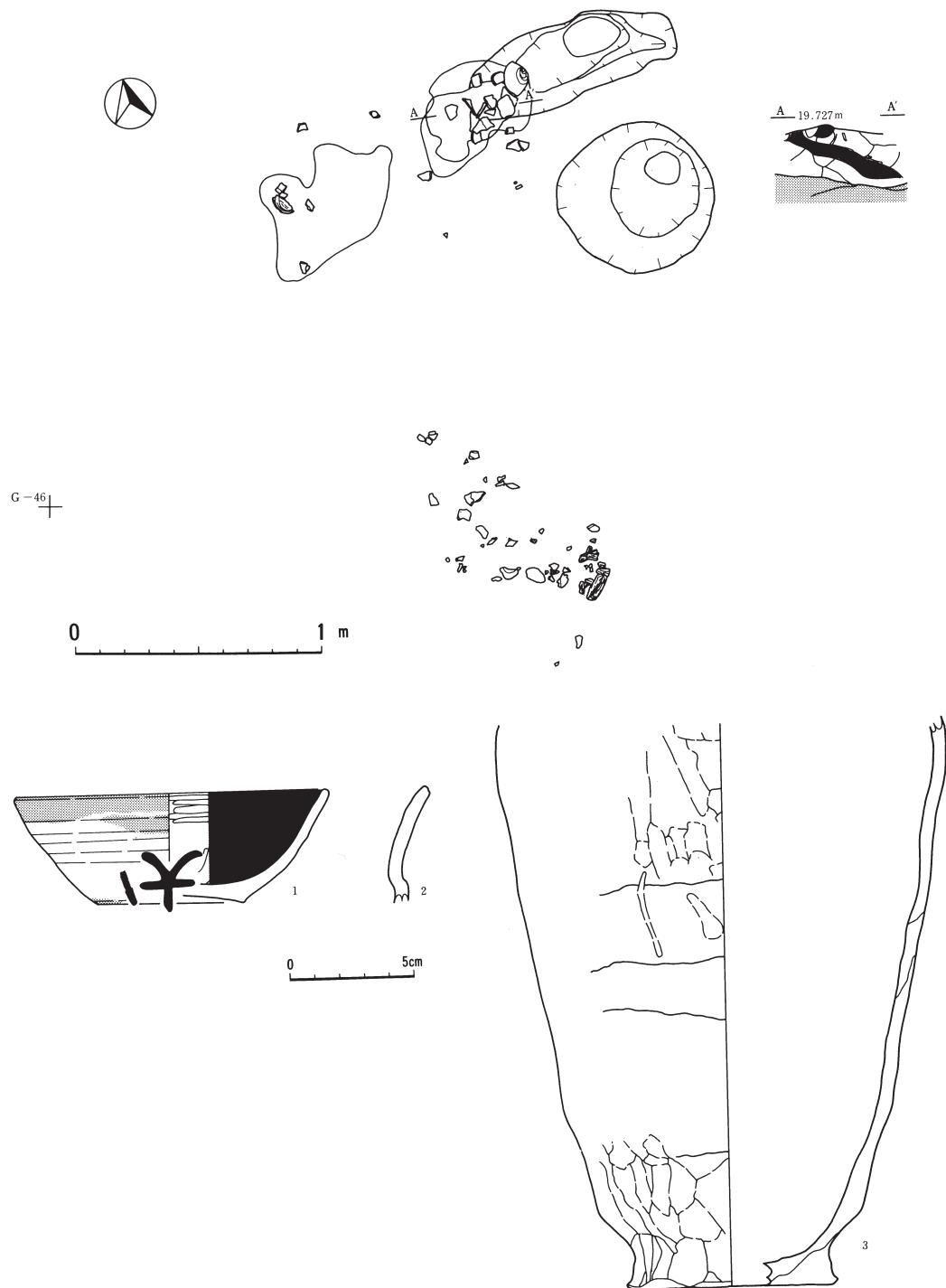
こと)や、長楕円形の掘り方をもつこと、更に、掘り方の延長線上に薄い堆積ではあるが焼土が検出されたことなどから、カマド跡の可能性も考えられた。

したがって、焼土周辺及び地山(ローム層)まで精査したが、円形のピットを除いて、周辺部に、床面に相当するようなかたく締まった部分は確認できず、人為的なものは全く検出できなかった。

(白鳥文雄)



第175図 第2号焼土遺構平面図・第1号建物跡との配置関係・第1号焼土遺構出土遺物実測図



第176図 第3号焼土遺構平面図・出土遺物実測図

第2節 遺構外出土遺物

1. 土 器

土師器（第177図）

約450片出土した。すべて破片での出土であり、接合したものは少ない。ほとんどが甕の破片である。

甕、土師器破片中約80%近くが甕の破片である。

口縁部は、すべて外反するが、肉厚のものとやや丸味を帯びる薄手のものがある。口縁部から頸部は、横位にナデが施され、肩部から胴部は縦位及び斜位にナデが施されている。頸部と肩部の境に段をもつものがある。底部は、破片全体からみると非常に少数である。長胴甕のものと思われるものが多く、肉厚で、木葉痕が認められるものが多い。底部から胴部にかけて非常にていねいなナデの施された小型甕の破片が1点ある。

内面の調整は、カキ目状のナデ痕のあるものが若干認められるが、他はおおむね、横位又はやや斜めのナデが施されている。巻き上げの痕跡を残すものも多い。

二次的な焼化を受けたと思われるものも多く、器面が非常に荒れているものや、はじけがみられるものがある。

器面は不明であるが、立ち上がりが非常に緩やかな底部片が2片認められた。

底部破片の内、2個体が製塩土器の可能性がある。また、底部立ち上がり際に繩目文様のついた破片2片（同一個体）が出土している。

坏、総個体数は不明である。6片を除いてほとんどが内面黒色処理が施されている。口クロ成形であり、外面は、切り離し後にほとんどの坏に再調整（みがき）が行なわれている。特に口縁部に1cm～2cm幅でていねいなみがきがみられ、底部端から胴部下間にかけてもみがきが施されている。底部はほとんどが回転糸切りによるもので、底部外面の立ち上がり際に、切り離し時の糸かけの失敗による痕跡が残るものが多くみられる。

墨書坏、4点出土している。いずれも破片で、胴部破片に墨書がみられるもの1点、底部外面にあるもの3点である。文字は「犬」・「玉」、判読が不可能なもの2点である。

台付坏、2点出土した。9は赤褐色を呈しており、断面形状から、坏整形後に台部を接着したものと思われる。底部の両面は、ヘラ状もしくは棒状工具によりみがきが施されており、接合部の外面では、坏部と台部の境に棒状工具による一条の段が認められる。台部内外面ともにみがきが施されている。みがきは全体的に雑である。内面は赤変しており、二次的焼化を受けたものと思われる。光沢の状態から内黒であった可能性も考えられる。

10は、壊整形後、台部を接着したもので、台部は欠失しており、底部端に剥落した痕跡を残している。底部外面はナデが施されており、切り離しの痕跡は認められない。内面黒色処理が施されている。

須恵器（第177図）

約120片出土した。すべて破片であり、接合したものは非常に少ない。60%以上が大甕の破片である。

甕、約70片出土したが接合したものは非常に少ない。

口縁部片は4片で、2片づつ接合した。いずれもやや軟質であり、表面がザラザラしていて軽い。頸部片が3片あり、1片は口縁部と同一個体である。底部片は認められない。

胴部片は、すべてが表面に叩き目を、内面に当て木の痕跡をもつ。叩きはすべて平行条の叩き木で打たれており、叩き目に重ねてカキ目状のナデが認められるものも多い。当て木の痕跡は不明瞭であるが、叩き目と同じ痕跡をもつものもある。また、ナデがきれいに施されているものもある。指頭により押されたものと思われる痕跡も非常に多く認められる。

胎土中には細礫が混入し、焼成は良好でほとんどすべての破片に共通である。色調は若干異なり、自然釉が見られるものも数片ある。

口縁部の2点は別個体と思われるが、胴部片は同一個体の可能性もあり、二個体以上の破片と推定される。

壊、総個体数は不明である。

口縁部破片は17片である。うち同一個体のものと思われるものが4片あり、口縁はやや外反し、口クロ成形による稜が大きな起伏を構成している²¹。14は口縁部～底部直上までの破片であり、非常に直線的である。胴部片で内面に巻き上げの痕跡が認められるものが2片ある。底部片は6片であり、内1点は小型の壺の可能性がある。切り離しはすべて回転糸切技法による。切り離し後、底部直上で整形時にはみでた粘土を、ヘラ状工具によりナデつけている痕跡が認められるものがある。

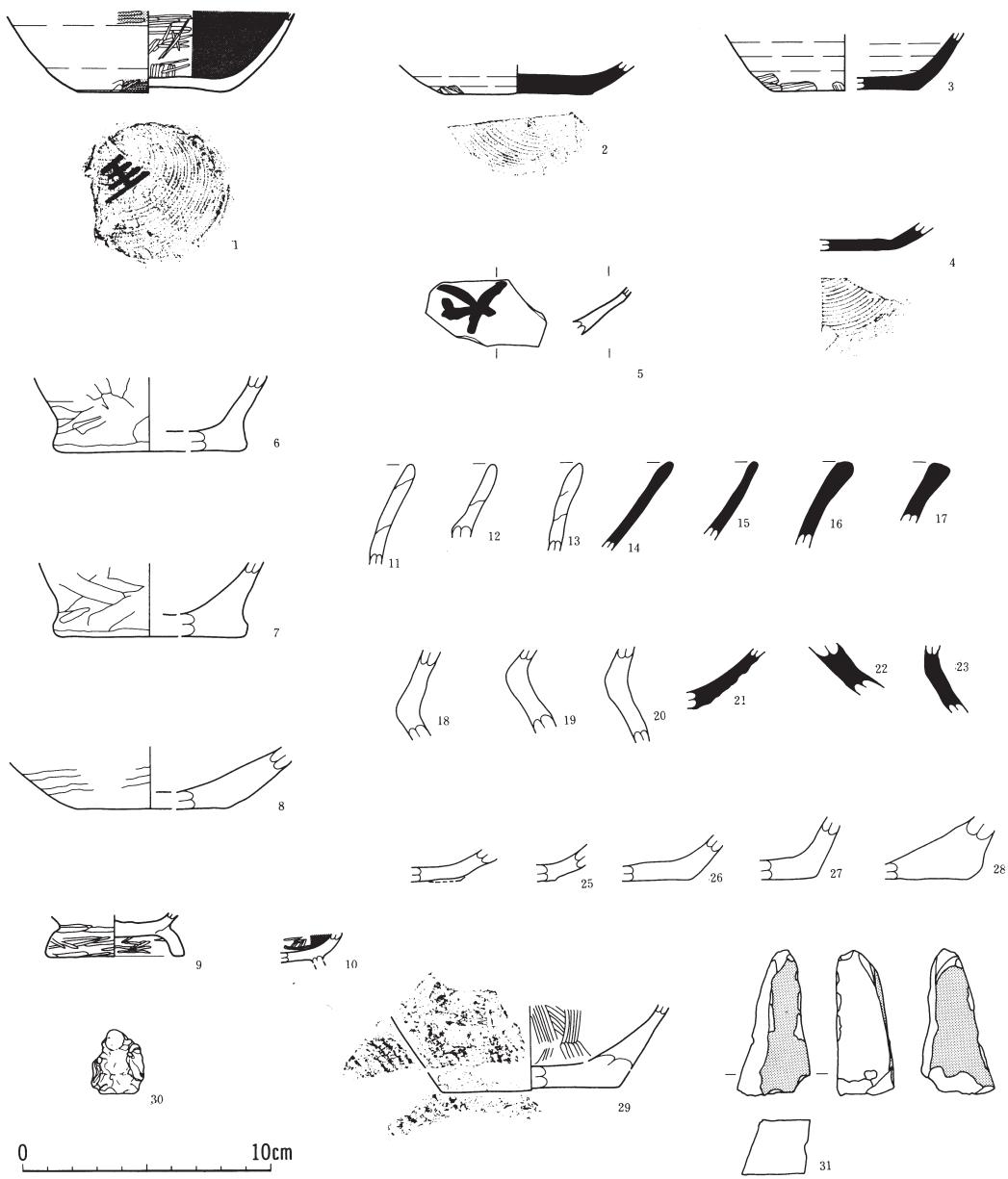
2. その他

砥石（第177図）

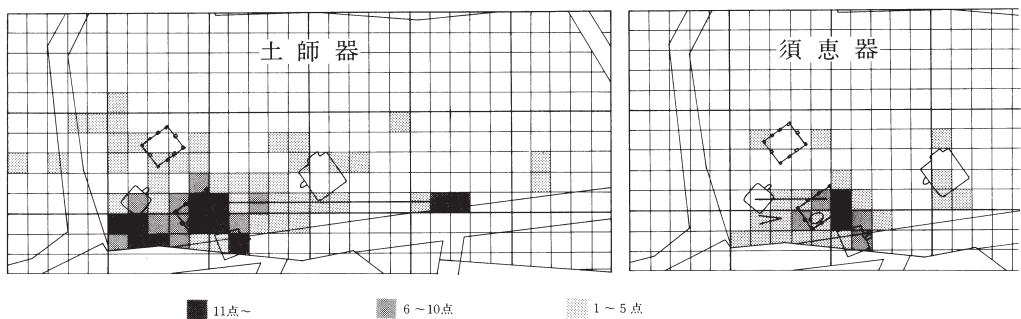
凝灰岩製で1点出土した。6.0cm×2.7cm×2.6cmであり、破損している。使用面は2面で、1面は平坦であるが1面は末端部がやや湾曲している。

泥面子（第177図）

1点出土した。耕作土中よりの出土である。2.6cm×2.1cm×0.8cmであり、完形品である。表面は全身像で、細部は不明瞭であり全体に光沢がある。裏面は指頭及びヘラ状工具による圧痕がみられ、平坦ではない。立像であり、左肩に袋を掛けていることから大黒天と推定される。



第177図 遺構外出土遺物実測図



第178図 遺構外出土遺物分布図

第3節 分析と考察

本遺跡の歴史時代について、遺物、遺構をまとめながら全体像を考えてみたい。

遺 物

土師器、完形品及び復原できたものはすべて遺構内からの出土であり、遺構外からは破片だけの出土であった。

坏 すべて口クロ成形であり、切り離しは回転糸切り技法による。静止糸切りの可能性のあるものも2片認められる。遺構外出土の数片を除いて、すべて内面黒色処理が施されている。内面のみがきは非常にていねいに行われており、口縁部から胴部にかけては横位及びやや斜位に、底部では中央を中心とする放射線状及び中央で互いに交差する横位のみがきが施されている。外面は切り離し後に再調整（みがき・ナデ）が施されている。特に口縁部は、幅1cm～2cmほどがていねいにみがきかけられており、底部の立ち上がり際もていねいにみがかれているものがみられる。胴部のみがきは軽いものであり、口クロの回転による横位の線状痕（口クロ目）はほとんどが残存している。底部外面の切り離し痕を磨消しているものは認められない。

底部外面は、平坦なものと、中央部が内湾するものとがあり、住居跡内出土のものはほとんどが内湾する。

底部の立ち上がり際には、切り離し時の糸かけによるものと思われる線状痕の認められるものが多数あり、底部外面に再調整が加えられているものに対し、この線状痕は磨消されていないものが多い。

胎土中に細砂粒を含む。また、スサの混入も認められる。焼成は良好である。

墨書のものが5点出土した。1点は第3号焼土遺構中からのものであり、他の4点は遺構外出土のものである。第3号焼土遺構出土のものと、遺構外出土のものは、胴部下半に底部を上

にして「犬」と記されている。他の3点はいずれも底部外面に記されており、1点は「主」であり、他の2点は欠損のため墨書の痕跡を残すだけである。

台付のものが2点出土した。本県では、青森市螢沢遺跡・朝日山遺跡^(注1)で出土しており、内面黒色処理されたものが多い。

本遺跡出土の坏は、口クロを使用しているが、外面に再調整を施すなど、口クロ未使用期の製作技法を踏襲している。しかし、口クロ未使用期のみがきの技法に比して、本遺跡のものは、表面に光沢を与える程度の軽いものであり、口クロ目を多く残している。

甕 長胴甕では、口縁部は長く外反し、頸部はほぼ垂直で、肩部が小さく張り出すものと、肩部から直接外反するものとがある。前者は、頸部と肩部との境に棒状工具によって一条の段を構成する。外面は、縦位方向にヘラナデが施されており、巻き上げの痕跡をほとんど磨消しているが、内面は巻き上げの痕跡が胴部下半において顕著に残り、全面にカキ目状のナデが施されている。口クロは使用していない。後者は、内外面ともにヘラナデが施されているものである。

小型甕は、口クロ使用のものと未使用のものとがあり、前者は、内面にもヘラ状工具によるものと思われる口クロ目が認められる。第1号住居跡出土のものは、口縁部が須恵器の模倣と思われる二重口縁のものである。^(注2) 口クロ未使用のものは、口縁部が外反し、口縁部は横位のナデ、胴部は縦位又は斜位にヘラナデが施されており、内面もヘラナデが施されている。

第1号住居跡出土のものに、胴部が非常に丸みを帯びるものが1点ある。

鉢 第1号住居跡から2点出土した。ともに口クロ使用であり、外面はハケ目の口クロ目が全面に認められる。1点は内面黒色処理が施されており、底部に低い台が付いている。他の1点は底部を欠失している。この形状のものは、本県で数か所の遺跡から出土しているが、本遺跡出土のもののように整った形態を呈するものはない。また、口縁部が真横に張り出すものや、丸底を呈するものが多い。他遺跡出土のものは、堀に近く、用途も煮沸用と考えられている。本遺跡出土のものは、台がついていることなどから、これらとは用途を異にするものと思われる。

繩目文様をもつもの 2片出土した。同一個体であり、底部外面の立ち上がり部分に斜行する繩文が、絡状体圧痕ふうに認められる。須恵器の技法である叩きによるものと推定され、木に繩を巻き付けた叩き木によるものと思われる。文様部分は2cmほどの幅であり、内面はカキ目状のナデ調整が施されている。

須恵器 完形品は遺構内出土のものだけであり、遺構外からは破片だけの出土である。

坏 口クロ使用であり、切り離しは、回転糸切りのものとヘラ切りのものがある。切り離し後、無調整のものと、底部立上がり際に、切り離し時にでた粘土をヘラ状工具によりナデつけ

ているもの、（他の部分は無調整）とがある。内面に、底面までの全面にヘラ状工具による口クロ目がみられるものがある。外面は、ロクロ回転による稜が非常に突出しているものと、平滑なものとが認められる。第1号住居跡出土のものに、非常に軟質のものがある。

甕 大甕の破片が出土しているがほとんど接合しない。表面は平行条の叩き木により叩き締められており、叩き目の上にカキ目状のナデが施されている。内面は当て木の痕跡が認められるが不明瞭であり、指頭によるものと思われる圧痕がみられる。

壺 第2号住居跡と第3号住居跡から出土した。第2号住居跡からは、広口壺と長頸径（口縁部欠矢）が出土している。両者とも、底部から胴部中央・胴部中央から肩部・肩部から口縁部と3つの部分を接合したものであり、底部から胴部に掛けてはケズリ・ナデがみられる。広口壺は、接合後、口縁部から胴部中央までロクロにより調整されているが、胴部下半は、ケズリ・ナデ・の痕跡が明瞭にみられる。切り離し法は不明である。長頸壺は、胴部下半にケズリの痕跡を残すが、接合後、ロクロにより全面調整を施している。切り離しは糸切りであるが、回転・静止の別は不明である。両者ともに、色調・胎土は類似している。

第3号住居跡から破片が出土したが、復原には至らない。切り離し後、無調整であり、第2号住居跡出土のものに比して黒っぽく、各破片とも全面にロクロ目が認められる。回転糸切りである。

木器 第2号住居跡から皿が出土した。台付と台をもたないものとがあり、台部分御及び皿の周縁にロクロによる成形痕が認められる。カマド横出土の台をもたない皿は、樹種同定の結果、スギ材であることが分かった。^(注4)他の木器も、本質が類似していることからどうようの材であると推定される。

その他 第1号住居跡から4つの研磨面をもつ珪化木が出土した。砥石として使用されたものと思われるが、他の遺跡での出土は報告されていない。また、同住居跡から、石皿を転用したと思われる砥石（非常に目が荒く、荒砥として使用したものと思われる）が出土している。この一面は弧状を呈し、鉄分の付着による赤褐色の部分が認められる。これは、この面の幅が、狭いことから、何らかに湾曲面をもつ鉄製品の研磨に使用されたものと推定される。

同住居跡と遺構外から2点の鉄滓が出土したが、他に鉄に関するものは出土していない。

第2号住居跡から炭化種子が出土したが、種類は不明である。

遺物の分布

土師器は主に調査区の東側に分布して出土し、特に、D～F - 30～40グリッドに集中する。F - 45～47にも集中する部分がある。須恵器も土師器の分布と重なり、特に土師器の密集部分と重複する。

遺物の接合

遺物の集中する部分においては、同一グリッド内及び隣接するグリッド間で数片の接合が認められる。墨書坏の1点は、F - 34グリッド出土1片とF - 46グリッド出土3片とが接合した、ものである。直線で約45mほどの距離であり、ともにあまり移動のみられない土層中からの出土である。

遺構

歴史時代の遺構は、第1～4号住居跡・第1～2号掘立柱建物跡、第1～3号焼土遺構である。第4号住居跡は、近現代のものと思われるためこの項から除く。

3棟の住居跡は、カマドの位置と構築法・周溝・柱穴の有無・張り出し部の有無によって、それぞれ異なる性格をもつ。

第2号住居跡について

床面上で検出した炭化板材については、板材の上下に粘土（貼り床の粘土とは異なるものである）が検出されたことから、床に敷いたものではなく、腰板として使用されたものが倒れたものと考えられる。また、板材の上面に接して、交差する状態で丸太状の炭化材（支柱と考えられる）が検出されたことから、壁面に支柱を立て、それに腰板を横位に設置したものと思われる。支柱と板材との接合方法は不明であるが、県内の報告例では、腰板はすべて縦位に設置しており、本住居跡の例は特異である。また、張り出し部との境にも板状炭化物が確認されこのように、間仕切りに板材を使用している報告例は未見である。^(注5)

主柱穴は、方形を呈しており、壁寄りに2基、住居跡内部に2基確認された。また張り出し部にも、一方の壁寄りに柱穴が並び、相対する壁直下には周溝が構築されていることから、本住居跡の屋根は、基本的には片流れ状の構造をもつものと思われ、張り出し部の柱穴の並びや、カマドの位置から、南側（カマド側）が高く、北側に向けて低くなるものと推定される。

第3号住居跡について

カマドが再構築されており、長期間にわたっての使用と推定される。廃棄後、人為的に埋め戻されているという特徴をもつ。また、覆土中に含まれる土器片、特に須恵器片に、本住居跡以外出土の破片と性格を異にしているものがあることと、土師器坏の破片が口縁部外面にみがきが施されていないことなどから、本遺跡出土の土師器の主流を成す時期と（大差はないと思われるが）若干異なるものと推定される。また、覆土上面及び覆土中から須恵器大甕の破片（遺構出土の大甕破片と同じものかと思われる）が出土しているが、この1点で、本住居跡の時期の新旧を断定し得ない。

掘立柱建物跡と焼土遺構について

第1～2号掘立柱建物跡は、規模・配列から同時存在のものと思われる。第1号建物跡の柱穴配列に比して、第2号建物跡のものは雑である。

柱穴の形状であるが、方形の柱穴による建物跡の報告例は、当該時期のものとしては松元遺跡にみられる。この建物跡は、本遺跡の土師器の時期より、やや新しい土師器を伴出する住居跡の貼り床面下より検出されており、建物跡の方が古い。本遺跡の主体時期と、第1～2号建物跡が同時期とすれば、松元遺跡の検出例とは、時期的にほぼ合致するものである。

焼土遺構は第1号建物跡の範囲内にあり、第1号焼土は南東隅に、第2号焼土はほぼ中央に位置している。建物跡の柱穴の掘り込み面とほぼ同レベルで確認され、焼土中からは、甕口縁部（頸部がほぼ垂直なもの）及び他の土師器片が出土している。場所及び確認層位においては、付属施設として非常に良い条件を示すが、建物跡の上屋構造、特に床面の状態（土間、板敷き、高床）によって焼土の意味合いは変わってくるものと思われる。

焼土周辺が他の部分同様締まりに欠けることから、土間・板敷きの可能性は少ない（粗掘時に、かたい面を削平してしまった可能性も考えられる）が、焼土の在り方からするとより自然である。高床の場合、焼土面との高さにもよるが、焼土の位置が低すぎるよう思われる。また、囲炉裏のような構築物の痕跡も認められない。一部、床面のない部分を設けていたなどとも考えられるが、推測の域を出ず、すべてにわたって明確な裏付けはできない。

付属施設であるとすれば、この建物跡は火を伴うことから何らかの作業場的な要素をもつものと推定される。

歴史時代の遺物・遺構の時期について

時期決定の指標には、土師器坏が有効である。本遺跡出土の坏は、前述したとおりロクロ使用・回転糸切りによる切り離し・切り離し後、特に口縁部を主体に行われる再調整（みがき）・内面黒色処理等の特徴から、桜井第1型式の中でも古い傾向を示す。更に伴出する甕などに須恵器の特徴を部分的に模倣しているものもみられ、また、第1号住居跡出土の小型甕が「あかやき土器」の初現的要素をもつことなどから、土師器坏を基本とした本遺跡の時期は、9世紀前半と考えられる。

各遺構の時期は、第1号住居跡出土遺物のセット等、時期決定の要素と重複することから9世紀前半と考えられる。第2号住居跡は坏の特徴は変わらないが、伴出する他の遺物の要素（甕が少ない、木器を伴う）から、同時期ではあるが若干前後する可能性も考えられる。第3号住居跡は、決定資料に乏しく時期は不明である。第3号焼土遺構は、時期決定の基本となる遺物を出土していることから、これもほぼ同時期と考えられる。しかし、第1～2号焼土は、確認面上では坏破片の散布をみたが、焼土中からは甕の破片が出土しただけであり、決定はし得ない。また、この焼土と関連して考えられる掘立柱建物跡に関しても同様である。

これらのことから、本遺跡における歴史時代の主体となる時期は9世紀前半と推定される。

（白鳥文雄）

第38表 出土遺物観察表(1)

図版	器種	層	成形・調整・切離し等	法量 (mm)				備考	
				口径×底径×高さ					
第1号住居跡									
160-1	須坏	床 直	ロクロ・ヘラ切	白灰色	138	·	68	·	43
-2	"	"	" · 糸切	"	135	·	67	·	46
-3	"	"	" · ヘラ切	"	136	·	(52)	·	42
-4	"	"	" · 糸切	"	(126)	·	(52)	·	44
-5	土坏	床 直	" · " · 内里・外面再調整		124	·	52	·	49
-6	" 梗	カマド	口縁指ナデ・胴ヘラナデ		122	·	46	·	78
-7	" 裹	"	ロクロ・横位ナデ	あかやき?	(114)	·			
-8	" "	"	口縁指ナデ・胴ヘラナデ		158	·			
-9	" "	"	ロクロ・糸切			·	70		
161-10	" 鉢	床 直	" · 台付き・内黒・カキ目		240	·	98	·	32
-11	" "	カマド	" · カキ目		242	·			
-12	" 裹	"	外面ナデ・内面カキ目			·	85		
-13	" "	"	外面ナデ・内面部分的にカキ目			·	101		
-16	" 坏	"	ロクロ・内黒・口縁外面ミガキ						
-17	"	"	" "						
-18	"	"	" "						
-19	"	"	" "						
162-22	須裹	カマド	叩き目(平行状) 内面当て木痕 厚さ 5~12						
-23	"	"							
-24	"	"							
14~15紡錘車(カマド横) · 20砥石(珪化木・カマド横) · 21砥石(安山岩・多孔質)									
第2号住居跡									
166-6	土坏	床 直	ロクロ・糸切・内黒・外面再調整		120	·	57	·	41
-7	"	"	" · " · " · " · "		130	·	54	·	45
-8	"	"	" · " · " · " · "		133	·	61	·	45
-9	須坏	"	" · " · 底部 "		159	·	62	·	43
-10	"	"	" · " · "			·	(66)	·	
-11	須壺	"	" · " · 接合面にナデ			·	48	·	
-12	土裹	カマド	口縁部ナデ・胴ヘラナデ・木葉痕		136	·	68	·	128
-13	須壺	"	ロクロ・底部ケズリ・接合面ナデ		114	·	69	·	175
1紡錘車・床直・黒色処理 · 2砥石(安山岩・多孔質) · 3砥石(線状痕多し・全面に脂状付着物)									
4 · 5砥石(焼化を受けている・同一個体・全面使用) · 14~19木製皿16 · 17 · 19は台付・ロクロ使用									
18カマド横・他は床直で重い・て出土・炭化種子を伴出									
第3号住居跡									
170-1	土坏	"	ロクロ・糸切・内黒・外面再調整						
-2	"	"	" · " · " · "		126	·	57	·	45
-3	須坏	"	"						
-4	"	"	ロクロ						
-5	" 壺	"	"	黒灰色					
-6	" "	"	"						
-7	" "	"	" · 糸切						
-8	土 "	"	" · "						
-9	" 裹	"	"						
第1号焼土遺構									
175-1	土裹	"	口縁指ナデ・胴ヘラナデ		204				
-2	"	"	指ナデ						
第3号焼土遺構									
176-1	土坏	"	ロクロ・糸切・内黒・外面再調整		127	·	52	·	45
-2	" 裹	"	指ナデ						
-3	" 裹	"	ヘラナデ		84				

第39表 出土遺物観察表(2)

図版	器種	グリッド	成形・調整・切離し等	法量 (mm)		備考
				口径×底径	×高さ	
遺構外						
177-1	土坏	F-34他	ロクロ・糸切・内黒・墨書		59	Gはグリッド
-2	須〃	D-33	〃・〃・ナデ痕		(59)	12G離れて接合
-3	〃〃	F-41	〃・〃・〃		(57)	
-4	〃〃	G-40	〃・〃		(78)	
-5	土〃	I-37	〃・内黒・墨書			
-6	土甕	F-34他	ヘラナデ・木葉痕			3 G接合
-7	〃	D-31他	〃・〃		80	2 G〃
-8	〃	F-35	〃		60	
-9	土坏	K-30他	台付・ミガキ		56	
-10	〃	H-25	台付・ミガキ・内黒			
-11	〃甕	E-34	指ナデ(横位)			
-12	〃	30IV				
-13	〃	G-35				
-14	須坏	D-36	ロクロ			
-15	〃	E-33他	〃			
-16	〃甕	E-26	〃			
-17	〃	D-33				
-18	土甕	E-31	指ナデ・肩部下部はヘラナデ			
-19	〃	H-51				
-20	〃	E-31				
-21	須坏	E-35	ロクロ			甕?
-22	〃甕	E-35	〃			
-23	〃	D-33				
-24	土坏	F-40	ロクロ			
-25	〃	G-51				
-26	土坏	E-31	ロクロ・糸切			
-27	〃甕	H-42	ヘラナデ			
-28	〃	E-31				
-29	土甕	35III	内面カキ目・外面叩き痕		72	
30泥面子(表採・大黒天)・31砥石(凝灰岩・2面使用)						

注 1 「螢沢遺跡」 青森市螢沢遺跡発掘調査団 昭和54年

「朝日山遺跡」 青森県教育委員会 昭和59年刊行予定

2 第160図-7 この口縁部を持つものは各所で出土している。

3 浅瀬石遺跡(県埋文報26集)・近野遺跡(県埋文報33集)・アイヌ野遺跡(県埋文報71集)他、浅瀬石のものは須恵器である。

4 第 章 樹種同定結果による。

5 三内遺跡(県埋文報37集)・近野遺跡(前出)・浅瀬石遺跡(前出)・鳥海山遺跡(県埋文報32集)で11軒の住居跡における報告がある。

6 松元遺跡(県埋文報46集) 第4号住居跡と第1号掘立柱建物跡

第 章 溝 状 ピット

一般にTピットと呼称されるピットであり、本遺跡では108基検出した。個々の溝状ピット（以下、ピットという）の検出地点・計測値は一覧表にまとめた。

<形態> 基本的に次の形状が想定される。

(1) 開口部の平面形態

- A 幅が狭く、細長いもの
- B 葉巻形のもの
- C 幅が広く、ずんぐりしたものの
- D 両端が広がるもの（鉄アレイ型）

A は、直線的なものと弧状を呈するものが見られる。Cは、建築時の形態そのままのものと、崩落によるものとがあると思われる。

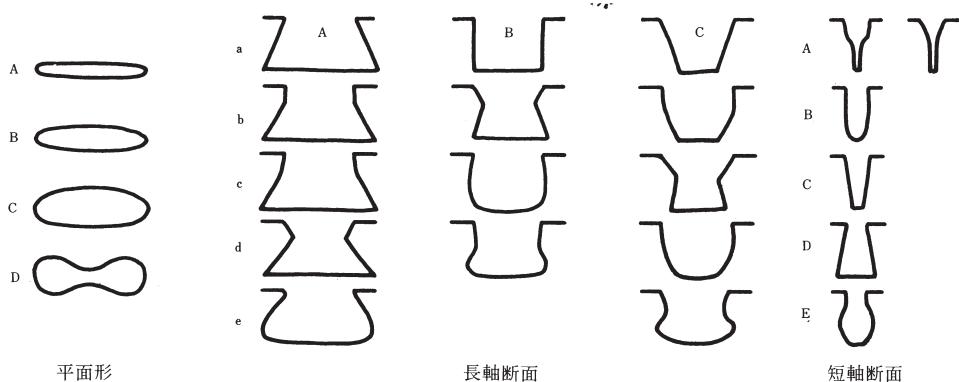
(2) 長軸の断面形態

- A 開口部より底面が広いもの
 - a 開口部から底面に向かい外側に一様な傾斜を持つもの（台形状）
 - b 開口部から中位までほぼ垂直で、中位から底面に向かい外側に一様に傾斜するもの
 - c 開口部から中位まで緩い傾斜をもち、中位から底面に向かい外側に一様に傾斜するもの
 - d 中位が突出するもの
 - e 袋状を呈するもの
- B 開口部と底面の幅がほぼ同じもの
 - a 開口部から底部までほぼ垂直のもの
 - b 中位が突出するもの
 - c 袋状を呈するもの
 - d 底部が膨らむもの
- C 開口部が底面より広いもの
 - a 開口部から底面に向かい内側に一様に傾斜するもの（逆台形）
 - b 開口部から中位までほぼ垂直で、中位から底面に向かい内側に一様に傾斜するもの
 - c 中位が突出するもの
 - d 袋状を呈するもの
 - e 底部が膨らむもの

(3) 短軸の断面形態

- A . 開口部から中位までは一様な傾斜をもち、下部はほぼ垂直なもの（Y字状）
- B . 開口部から底面まで垂直なものと（U字状）
- C . 開口部から底面まで一様に傾斜するもの（V字状）
- D . 開口部より底面が広いもの（台形状）
- E . 袋状を呈するもの

Aは、傾斜部分が湾曲するものと直線的なものがある。Eは、崩落によるものと思われる。



(4) 底面の状態

長軸

- a 平坦
- b 片方が上がる
- c 両端が上がる
- d 両端が下がる
- e 段をもつ

短軸

- a 平坦
- b 弧状を呈する

以上の形態分類から本遺跡のピットを見ると次のようになる。

平面形対ではAタイプ24基・Bタイプ59基・Cタイプ8基・Dタイプ7基であり、Bタイプが最も多く55%を占める。その他として、一端が狭く、他の一端が広いものが9基ある。

長軸断面形態では、Aタイプ38基・Bタイプ40基・Cタイプ9基・両端の形状が異なるもの9基である。A・Bはそれぞれ40%・42%を占める。Aタイプでは、A a 27基・A b 6基・A c 2基・A e 3基でA dは0である。Bタイプでは、B a 37基・B b 2基・B d 1基で、B cは0である。Cタイプでは、C a 8基・C e 1基でC b～C dは0である。

短軸断面形態では、Aタイプ20基・Bタイプ7基・Cタイプ74基・Eタイプ6基であり、D

タイプは0である。Cタイプは全体の69%を占める。A・Eタイプは、崩落のためにこの形状となったものが多く、Eタイプはすべてが崩落によるものである。

<規模>

長さは、255cm×426cmであり、314cm～367cmに集中する。平均値は、上端342.6cm、下端347.3cmである。幅は10cm～142cmであり、40cm～66cmに集中する平均は、上端56.0cm、下端12.7cmである。深さは30cm～170cmであり、90cm～120cmに集中する。平均値は99.7cmである。

いずれの計測値もプラン確認時のものであり、確認面の高低差等により、構築時のものとは相當に異なる数値も含まれている。

<検出層位>

調査区域は、畠地として利用されていたため、特に高い部分においては削平の度合いが高い。そのため、すべてのピットの検出層位を明確にすることはできない。平面プランは、層で確認できるものもあるが不明瞭であり、ほとんどが層で確認された。

標準土層観察用のベルトから断面を確認できたピットが3基ある。(52・65・107)

52、層が覆土上部に流れ込んでいるが、層から掘り込んでいるものではなく、覆土の1層の堆積状況から、流れ込んでいる層の土は壁の崩落によるものと思われる。したがって掘り込み面は、層かその上部の層と推定される。

65、層下部から掘り込まれているようにみられるが、ピット最上部が不明確であるために断定は出来ない。層は確実に掘り込まれている。

107、層を掘り込んでいる。ピット上面が削平され、その上を耕作さが覆っているために掘り込み面は不明である。

<重複しているピット>

第2号竪穴住居跡と19号ピットが重複関係にあり、住居跡が新しい。

他はピット同士の重複である。

4と5、5が新しい。23と24、24が新しい。47と48、48が新しい。55と56、55が新しい。
57と58、新旧不明である。103と104が新しい。85と108が重複しているが108は、先端部だけの確認であり、新旧関係は不明である。

<遺物を含むピット>

1・2・4・5・8・9・16・19・36の9基から遺物が出土した。

1.早稲田6類6片。

2.早稲田6類11片・敲磨器類1点・類1点・自然礫2点。

4.自然礫3点・フレーク2点・5から石斧c類1点。

8.Uフレーク1点・Rフレーク2点。

10. 早稻田 5 類 3 片・敲磨器 1 点・不定形削器 1 点・R フレーク 1 点。

16. 自然礫 1 点。

19. 赤御堂式 2 片・早稻田 6 類 1 片・石錐 1 点・不定形削器 1 点・フレーク 1 点。

36. 赤御堂式 1 片。

いずれも覆土中からの出土であり、1・2 は開口部近くからの出土である。

<炭化物を含むピット>

1. 52 の 2 基の覆土中から炭化物が検出された。

1. 8 層中に多量の、9 層中に若干の炭化物粒が混入していた。

52. 床面直上に堆積した 9 層中に若干の炭化物粒が混入していた。

<開口部をロームにより覆われているピット>

100. 最上層に明黄褐色土（ローム）が堆積しており、非常にかたい。他の層は、暗褐色土層を主体としており、部分的に黒褐色土層及び黄褐色土層を含む。各層とも混合土が主体で、パミスを混入し、全体がしまりなくもろい。

下部の数層は、自然的堆積状態を呈すると思われるが、上部は埋め戻された可能性が強い。

分布等について

調査区の南西端を除く全域から検出された。平坦部の一部において疎であることを除けば、傾斜の度合との関連性は希薄である。数基ずつが集中して確認される部分も認められる。しかし、調査区を含めた周囲の地形をみると、調査区の中央付近に若干の高まりが認められることから、この調査区内で検出されたピットだけでは、分布の全容を予測できず、また、数基が集中する部分についても、全体像が不明な点から、性格等については推察できない。

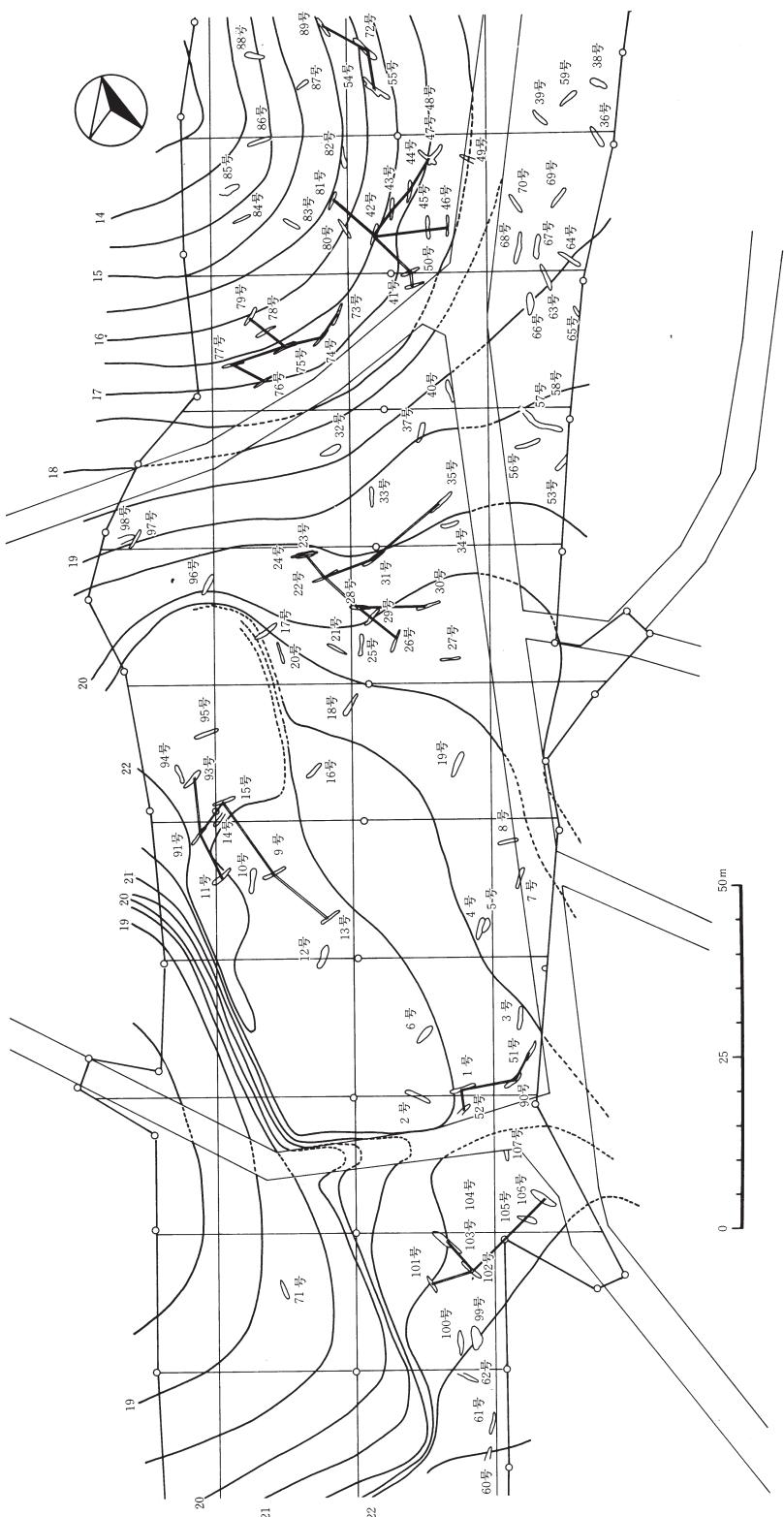
斜面の緩急が集中度に関連する傾向は、若干読み取れる。

長軸方向では、まとまりは全く認められない。これは、ピットと方位との関連性がほとんどないことを示している。地形の起伏があまりない台地上に立地した発茶沢遺跡では、ある程度の指向性は読み取れるが、本遺跡では、地形の起伏・傾斜が一様ではないことから、前述のようなまとまりのない結果が出たものと思われる。

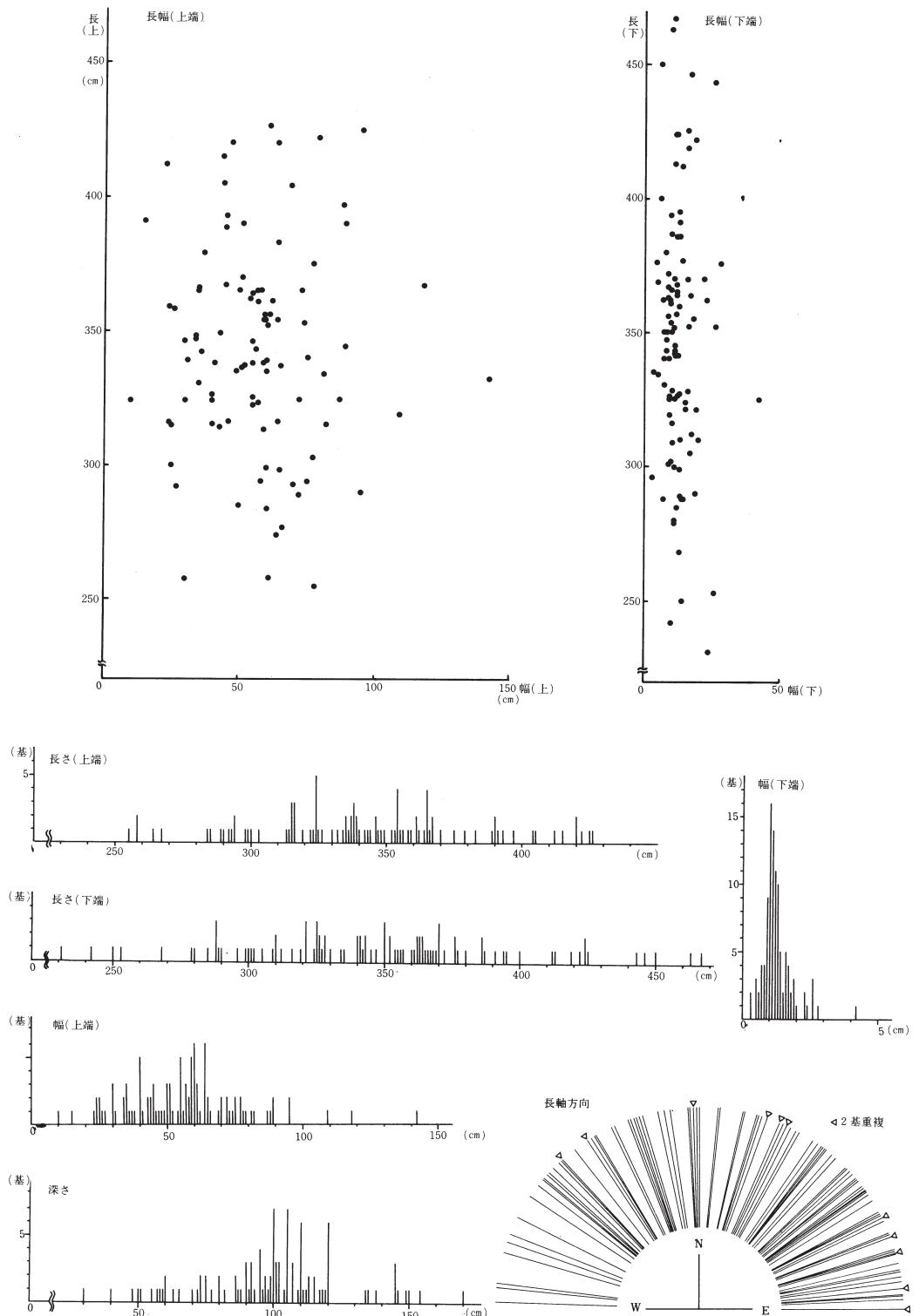
組み合わせについては、数種類の組み合わせパターンが考えられるが、推定の域を出ない。考えられる組み合わせについては、配置図上に接合線により示した。

ピットの年代について

不明瞭ではあるが、中摺浮石層相当の層において確認できる。このため、中摺浮石層の形成時期以降に構築・使用されたものと思われる。しかし、層において確認し得ずに、層において確認されたものも数例あるため、すべてのピットが同一時期とは考えられない。重複関係もあることなどから、幅をもった期間において営まれたものと推定される。（白鳥文雄）



第179図溝状ピット配置・組合せ図



第180図 溝状ピット計測分布図

第40表 溝状ピット計測表(1)

No.	グリッド	長 (cm)			幅 (cm)			深 (cm)	長軸方向	
		上	中	下	上	中	下			
1	F・G-30	352	319	321	60	24	11	135~149	90°E	8・9層にカーボン混入遺物出土
2	H-29・30・I-30	404	415	467	69	25	11	114~120	48.5°W	"
3	D-E-33・34	339	317	326	60	32	9	125~134	16.5°W	
4	F-35・36	354	354	364	59	15	17	99~110	26.5°E	Old 遺物出土
5		258	224	231	61	17	24	140~146	33.5°E	New "
6	H-32	337	351	370	52	38	16	55~111	69°E	
7	E-37・38・D-38	348	371	380	34	17	8	90~92	36.5°E	
8	F-38	316	306	299	46	28	13	83~86	88°W	遺物出土
9	M・N-38	426	443	450	61	15	6	60~75	74°W	
10	N-37・38	390	430	422	51	37	19	95~110	24°E	遺物出土
11	O・P-37・O-38	420	440	463	47	14	10	90~105	35°E	
12	L-34・35・K-35	367	370	376	118	62	28	91~102	37°E	
13	K・L-36	324		335	10		3	50~58	68°E	
14	N-39・40・O-39			386			12	120	53°E	
15	O・P-40	358	362	376	26	13	5	73~82	78.5°E	
16	L-41・42	324	315	321	72	37	19	101~105	55.5°E	遺物出土
17	M-47・N-46	412		413	23		11	19~30	64°E	
18	K-43・44・J-44	355	346	352	50	27	16	97~105	52.5°E	
19	G-41・42・F-42	390	371	365	89	44	12	150	37.5°E	遺物出土
20	M-45・46	316		321	24		15	52~60	2°W	
21	K-46	330	353	327	35	17	13	60~72	46°W	
22	K・L-48・K-49	391		400	15		6	43~48	80.5°E	
23	L-49	316		363	64		9	109	86°E	Old
24		379		424	37		12	82~86	90°E	New
25	J-46	359	359	394	24	17	10	90~95	16°E	
26	I-46	346		328	30		10	40~50	29°E	
27	G-45	339	345	341	31	18	11	70~73	83°W	
28	J・K-47	315	330	324	82	30	15	68~73	71°W	
29	J-47	300	297	309	25	16	10	93~113	54°E	
30	H・G-47	361	357	364	57	45	12	84~90	87°E	
31	I・J-49	393	387	386	45	37	13	104~119	62°E	
32	K・L-53	319	311	352	109	59	26	140~145	69°E	
33	J-51・52	337	326	328	65	32	16	91~100	5.5°E	
34	G-50	284	350	360	60	27	13	90~120	61°E	
35	G・H-51	415		419	44		16	44~51	57.5°E	
36	B-64・65・C-64	334	301	310	81	30	20	100~105	20°W	遺物出土
37	H-53・54	353	342	340	74	35	9	100~105	47°E	
75	L・M-57	366		370	35		11	40	84°E	
76	M-56・N-55・56	315		316	25		10	47~55	72.5°E	
77	N・O-56	342		342	36		11	46~57	84°W	
78	M・N-57・M-58	349		341	43		12	60~75	73.5°E	
79	N-59	299	294	305	60	30	17	90~107	50°E	
80	J・K-61	338	325	343	55	24	11	90~92	21°W	
81	K-62	324		326	30		12	60~63	23°E	
82	K-63・64	294	292	288	75	36	14	103~105	5°E	
83	L・M-61	313	308	319	59	35	9	70~96	48°W	
84	N・O-61・N-62	258		250	30		14	64~70	82°E	
85	N・O-63・O-62	290	282	355	95	62	18	154	73°E	切り合
86	M・N-64・M-65	422	413	425	79	20	16	85~90	74°E	
87	L-66	255	250	253	78	74	26	113~118	63°E	
88	M・N-67・N-68	298	279	268	65	35	13	94~100	68.5°W	
89	K-68・69・L-69	325	312	302	55	20	10	80~88	19°W	
90	E-30	315	340	354	40	25	10	86~88	67.5°E	
91	P-39	324	377	369	40	12	5	67~93	50.5°E	
92	R-40				48	31	12	90	32.5°W	

第41表 溝状ピット計測表(2)

No.	グリット	長 (cm)			幅 (cm)			深 (cm)	長軸方向	
		上	中	下	上	中	下			
93	P・Q-41	314	302	285	43	23	12	76~87	53.5°E	
94	Q-41・42	293	321	363	70	45	23	95~97	10.5°W	
95	O・P-43	405	388	395	44	39	13	90~91	85.5°E	
96	O・P-48	294	278	288	58	30	7	105~113	40°E	
97	R・S-50・S-49	335	316	310	60	28	13	98~107	46°E	
98	R・S-50	274	280	290	64	50	19	92	79°E	
99	F-20・21	332	325	312	142	30	17	140~145	1°W	
100	G-20・21	354	335	334	59	30	5	115~120	12.5°E	
101	H-22・23	365	359	362	57	17	7	102~112	17°W	
102	F・G-23	354	337	350	61	15	10	102~104	33.5°W	
103	G・H-24	375	350	366	77	39	10	143~145	16.5°W	Old New
104		323	322	330	57	21	7	100~115	31.5°W	
105	D・E-25	303	304	296	77	22	3	95~99	50°W	
106	C・D-25・26	425	426	424	95	31	12	135	42.5°W	
107	E-27				40	20	11	120	2°W	
108	O-62・63									85と重複

第42表 出土遺物観察表

土 器

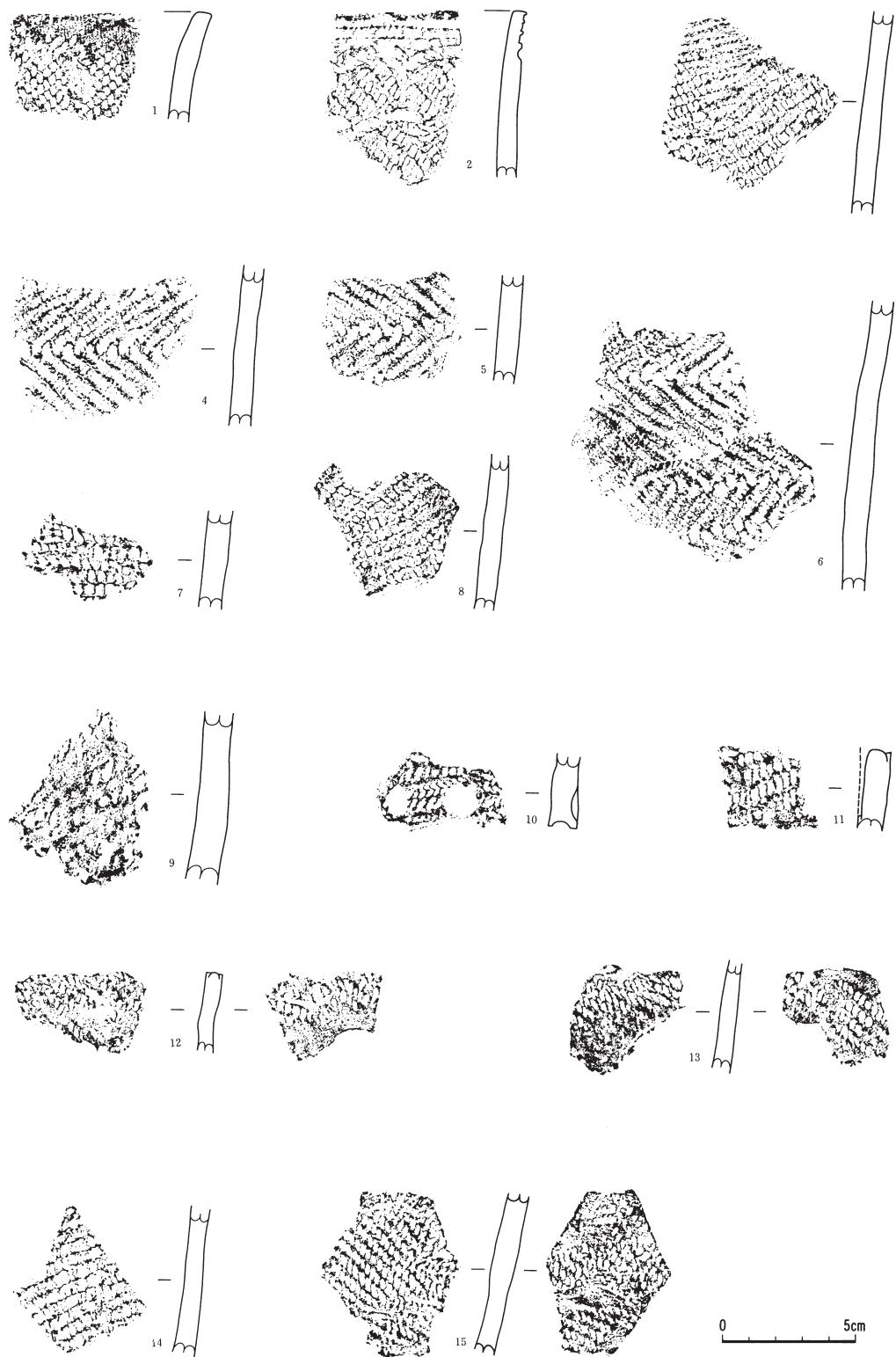
(mm)

図版番号	出 土 地 点	層 位	文 樣		器厚	備 考
			外 面	内 面		
1	第1号溝状ピット	フク土	LR		7.8	
2		フク土	RL (O段多条)		7.4	(口縁) 竹管横位押引き (胴) L結節横位回転
3		フク土	RL		7.7	
4	第2号溝状ピット	フク土	LR・RL (O段多条) 第1種結束		7.8	
5		フク土	LR・RL (O段多条) 第1種結束		8.3	
6		フク土	LR・RL (O段多条) 第1種結束		8.5	
7		フク土	RL		8.4	
8		フク土	RL		8.0	
9	第10号溝状ピット	フク土	LR		11.7	
10		フク土	?		10.0	指頭圧痕
11		フク土	LR (O段多条)		—	
12	第19号溝状ピット	フク土	RL	RL	6.4	
13		フク土	RL	RL	6.5	
14		フク土	LR (O段多条)		7.4	
15	第36号溝状ピット	フク土	RL	RL	7.0	

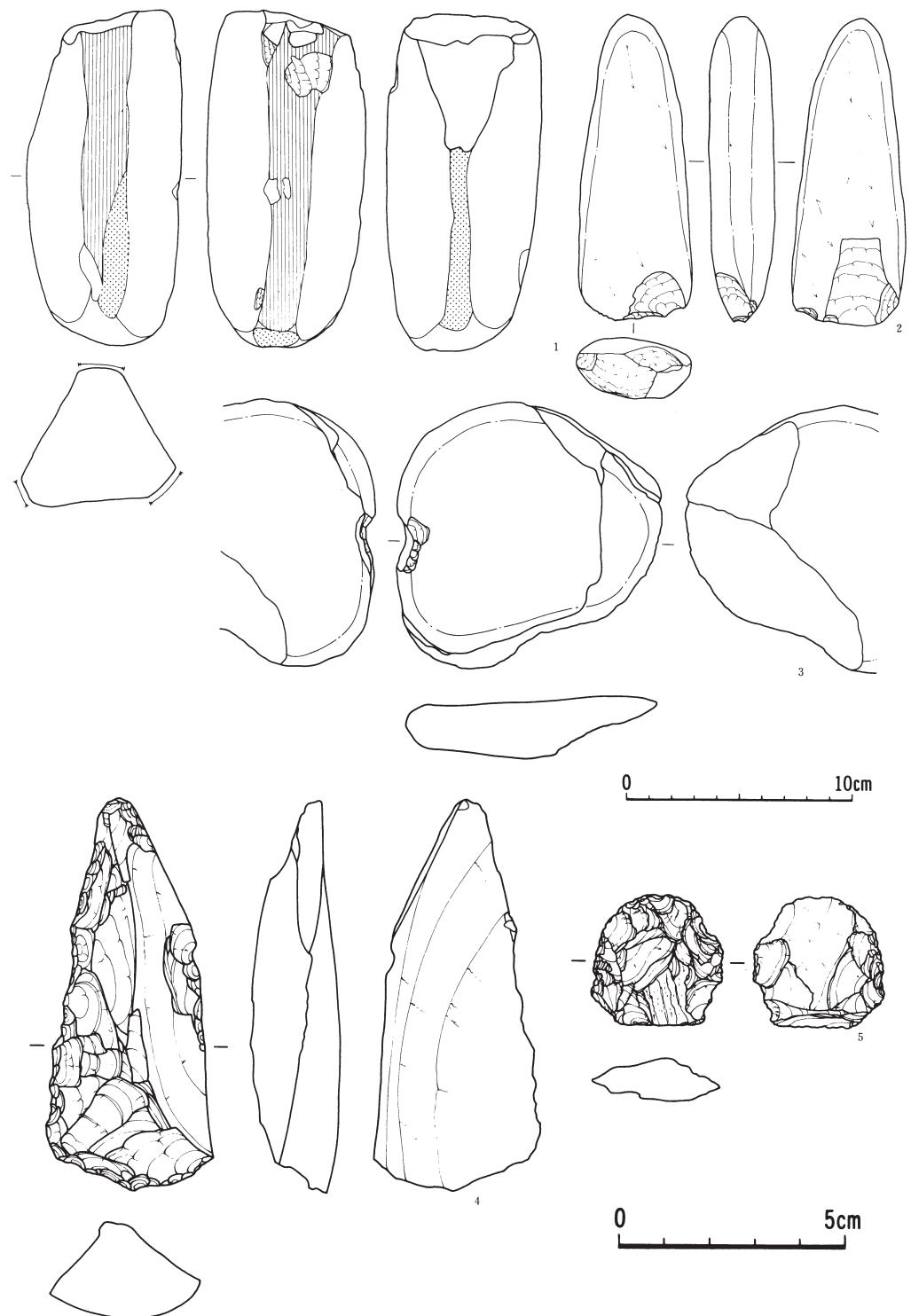
石 器

(mm)

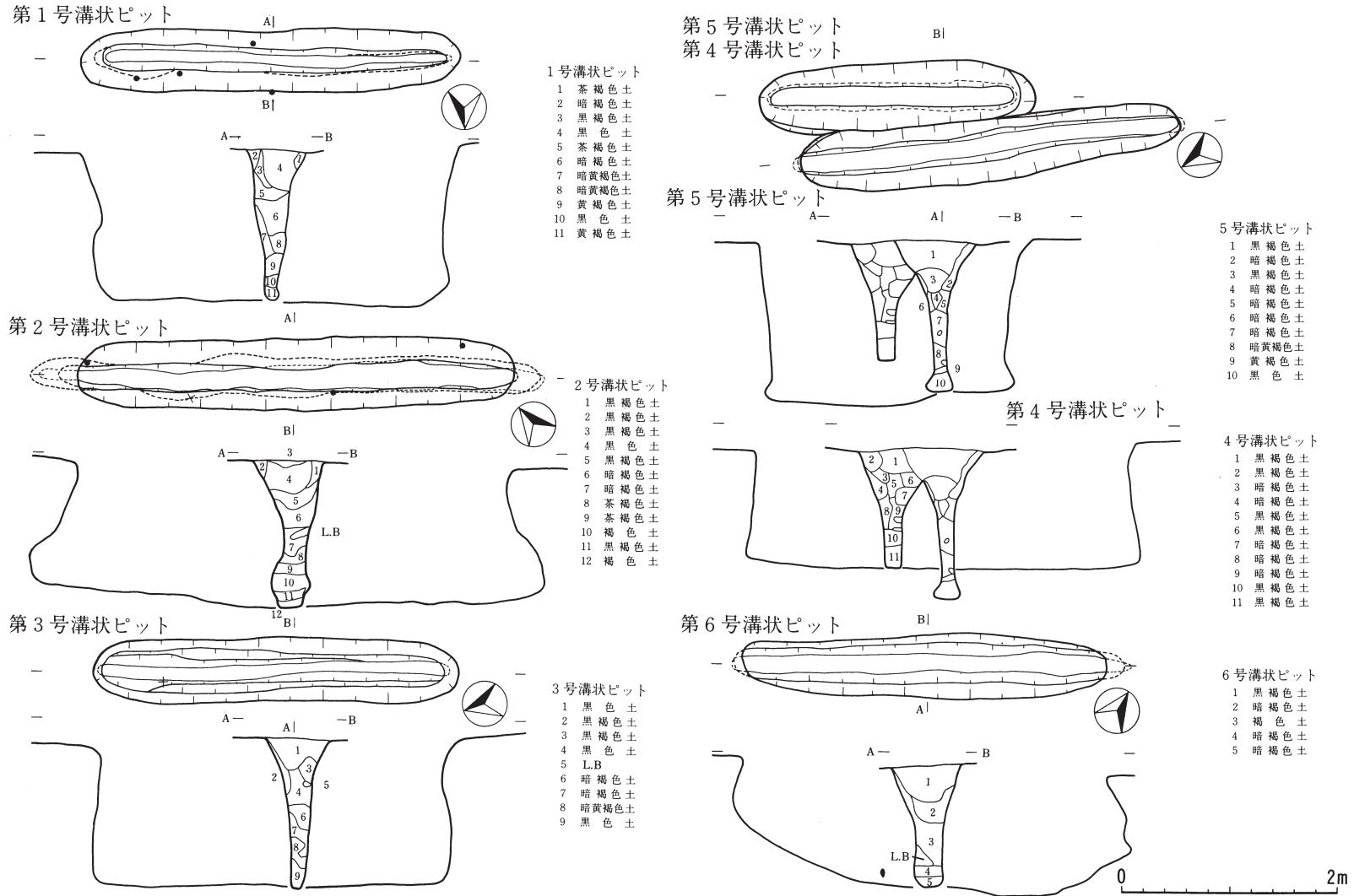
No.	出 土 区	器 種	長	幅	厚	重	石 質
2	5号溝状ピット	石 斧	(136)	49	30	(308)	輝
4	10号溝状ピット	不 定 I	97	39	21	522	貞
1	10号溝状ピット	敲 磨 I	(150)	68	63	935	安
5	19号溝状ピット	不 定 I	(29)	28	(76)	9.5	貞
3	19号溝状ピット	石 錘	(116)	118	26	(462)	安



第181図 溝状ピット出土土器拓影図

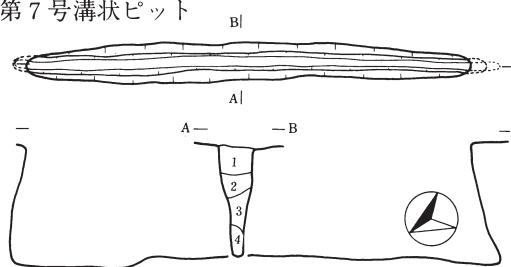


第182図 溝状ピット出土石器実測図



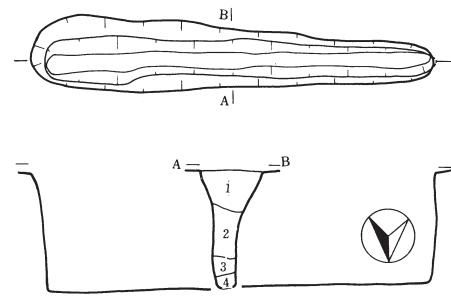
第183図 溝状ピット(1)

第7号溝状ピット



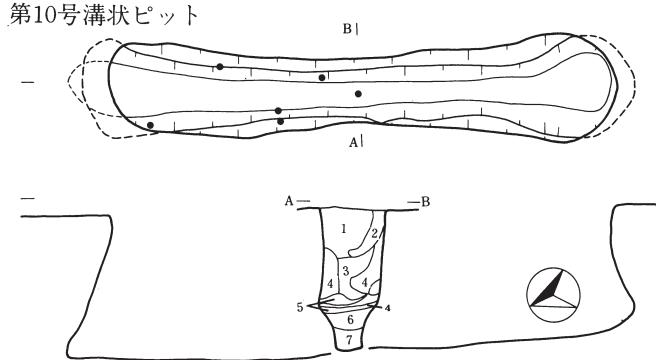
7号溝状ピット
1 黒色土
2 暗褐色土
3 暗黄褐色土
4 黒色土

第8号溝状ピット



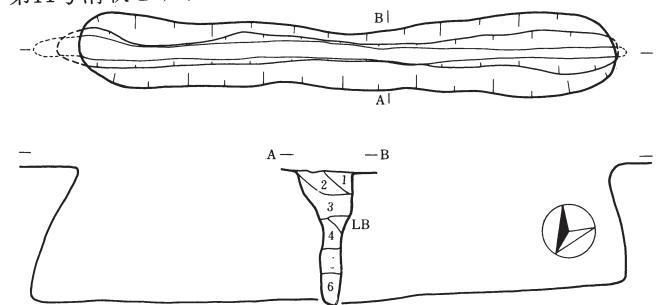
8号溝状ピット
1 黒褐色土
2 黒色土
3 黒褐色土
4 暗褐色土

第10号溝状ピット



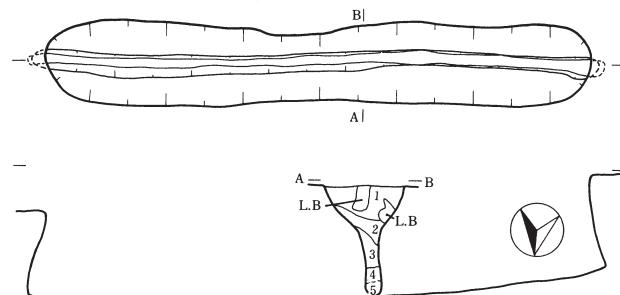
10号溝状ピット
1 暗褐色土
2 崩落土
3 褐色土
4 崩落土
5 黑褐色土
6 明黄褐色土
7 灰黄褐色土

第11号溝状ピット



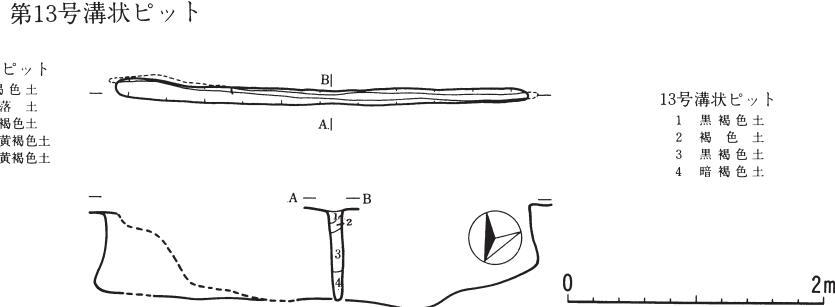
11号溝状ピット
1 崩落土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土
5 黄褐色土
6 黄橙色土

第9号溝状ピット



9号溝状ピット
1 黄褐色土
2 崩落土
3 暗黄褐色土
4 暗灰黄褐色土
5 暗灰黄褐色土

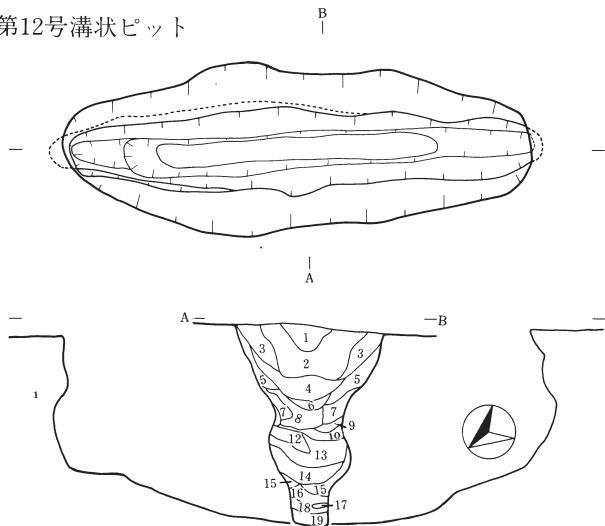
第13号溝状ピット



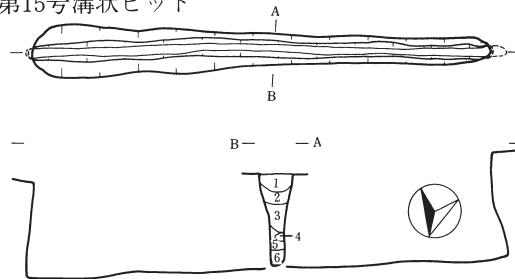
13号溝状ピット
1 黑褐色土
2 褐色土
3 黑褐色土
4 暗褐色土

第184図 溝状ピット(2)

第12号溝状ピット



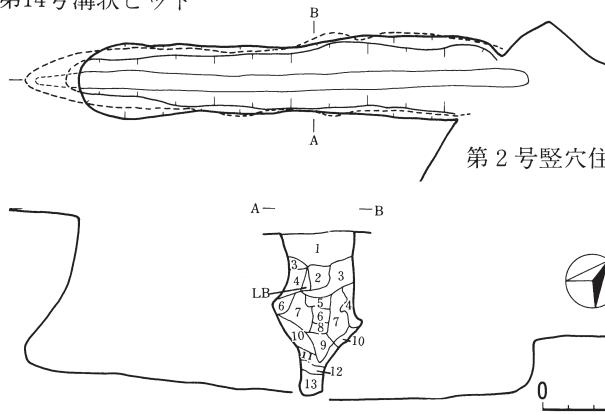
第15号溝状ピット



15号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黑褐色土

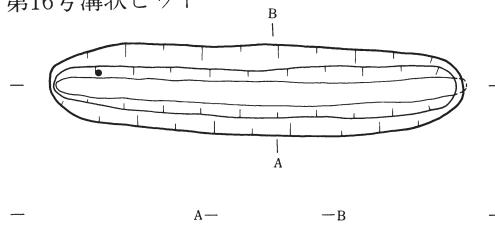
第14号溝状ピット



第2号豎穴住居跡

第185図 溝状ピット(3)

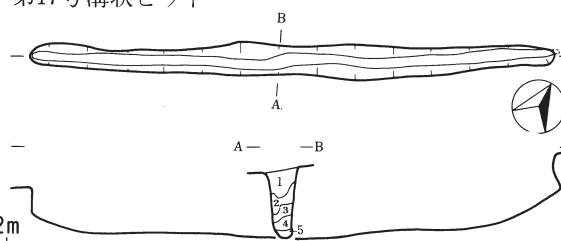
第16号溝状ピット



16号溝状ピット

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黑褐色土
- 6 灰黄褐色土
- 7 灰褐色土

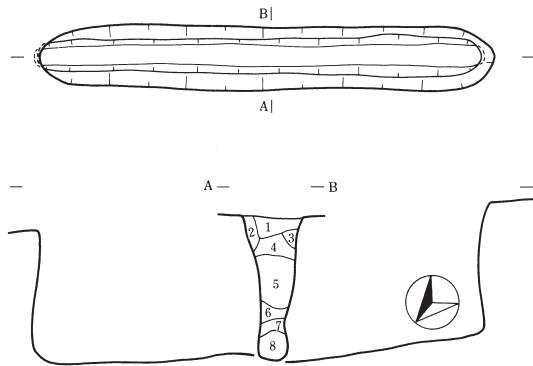
第17号溝状ピット



17号溝状ピット

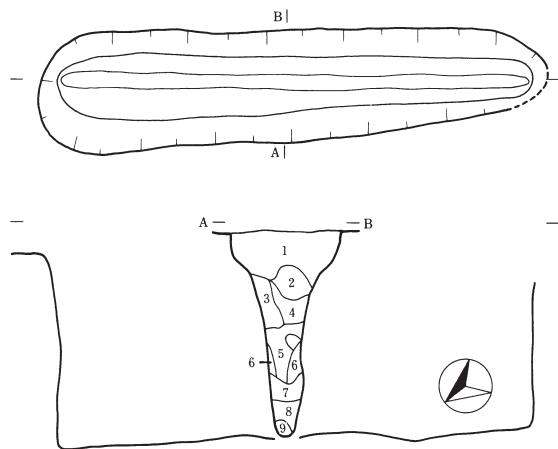
- 1 黒色土
- 2 褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黑褐色土

第18号溝状ピット



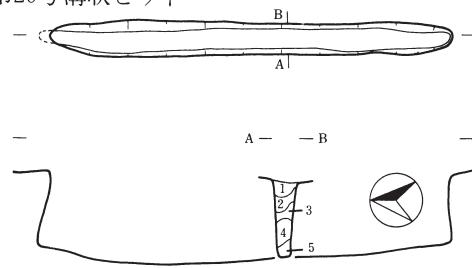
- 18号溝状ピット
1 暗褐色土
2 棕色土
3 棕色土
4 暗褐色土
5 黑褐色土
6 棕色土
7 黄褐色土
8 黑色土

第19号溝状ピット



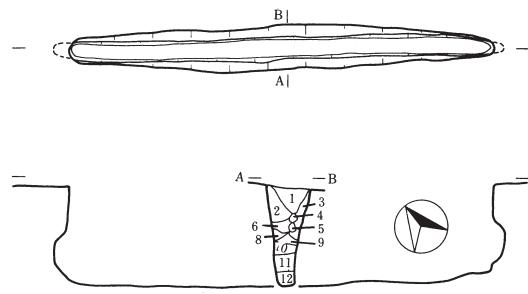
- 19号溝状ピット
1 黑褐色土
2 黑色土
3 暗褐色土
4 黑褐色土
5 黑色土
6 暗褐色土
7 棕色土
8 暗褐色土
9 黑褐色土

第20号溝状ピット



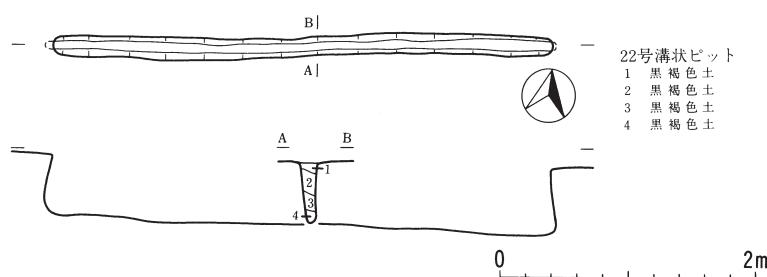
- 20号溝状ピット
1 黑色土
2 黑褐色土
3 暗褐色土
4 黑色土
5 黑褐色土

第21号溝状ピット



- 21号溝状ピット
1 黑色土
2 黑色土
3 黑褐色土
4 黑褐色土
5 黑褐色土
6 暗褐色土
7 暗褐色土
8 暗褐色土
9 黑褐色土
10 棕色土
11 黄褐色土(にぶい)
12 黑色土

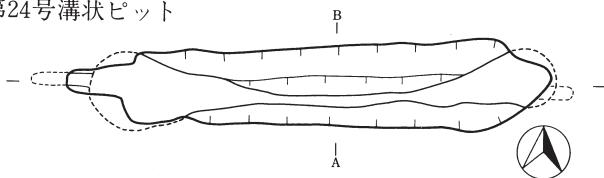
第22号溝状ピット



- 22号溝状ピット
1 黑褐色土
2 黑褐色土
3 黑褐色土
4 黑褐色土

第186図 溝状ピット(4)

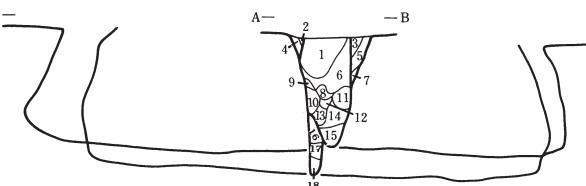
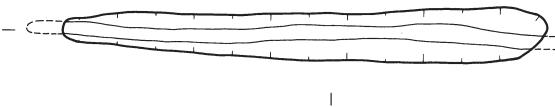
第23号溝状ピット
第24号溝状ピット



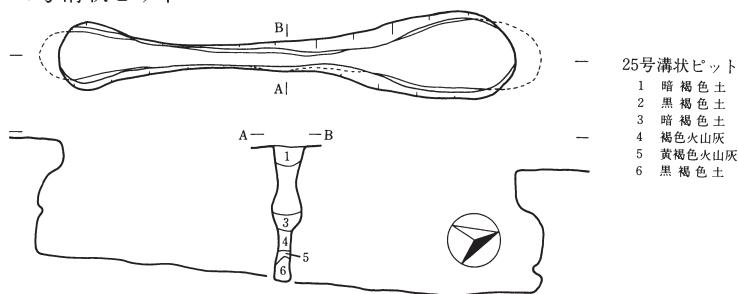
第23号溝状ピット



第24号溝状ピット

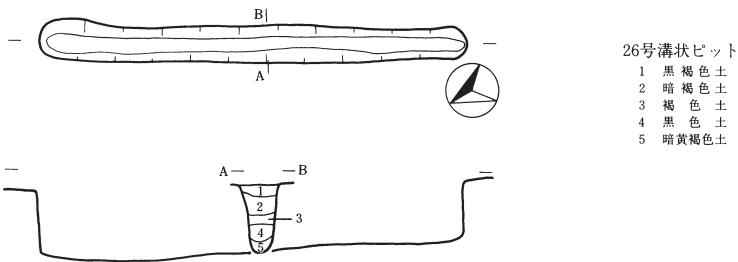


第25号溝状ピット



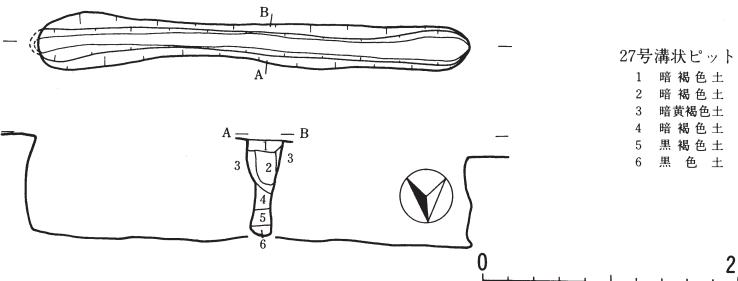
- 25号溝状ピット
- 1 暗褐色土
 - 2 黒褐色土
 - 3 暗褐色土
 - 4 褐色火山灰
 - 5 黄褐色火山灰
 - 6 黑褐色土

第26号溝状ピット



- 26号溝状ピット
- 1 黒褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 褐色土
 - 4 黑色土
 - 5 暗黄褐色土

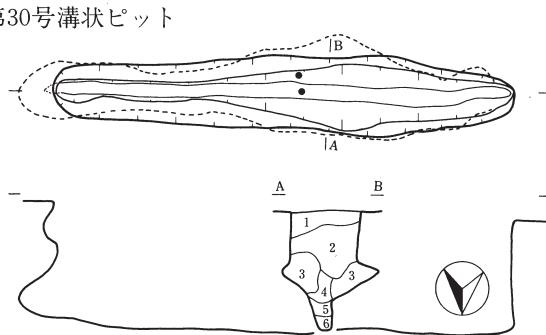
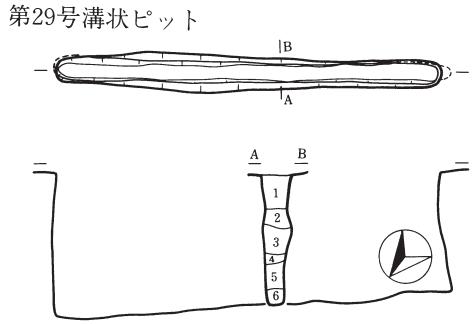
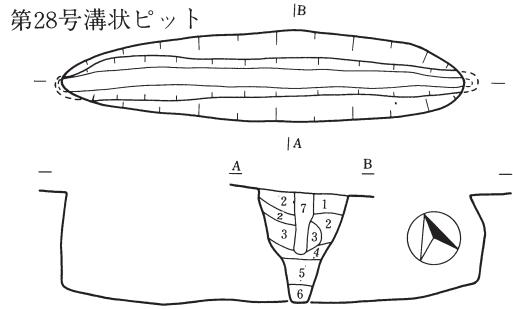
第27号溝状ピット



- 27号溝状ピット
- 1 暗褐色土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗黄褐色土
 - 4 暗褐色土
 - 5 黑褐色土
 - 6 黑色土

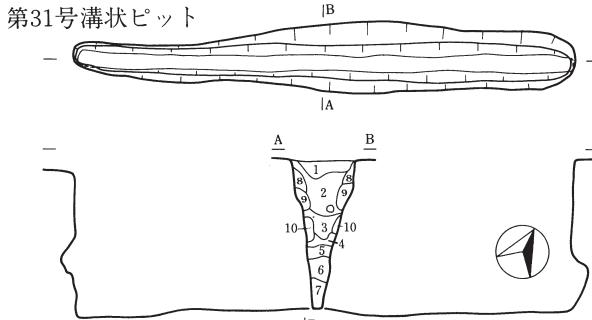
第187図 溝状ピット(5)

2m



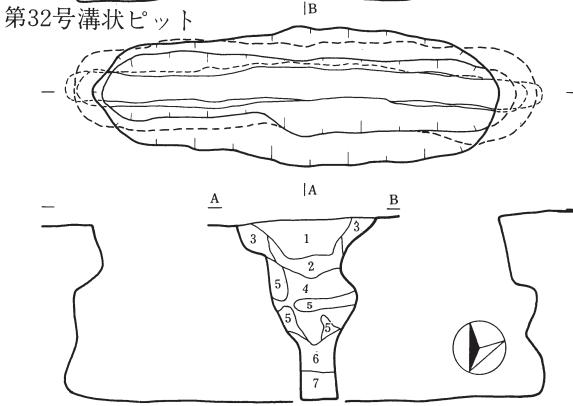
28号溝状ピット

1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 褐色土
4 黄褐色土
5 黑褐色土
6 黑褐色土
7 黑色土



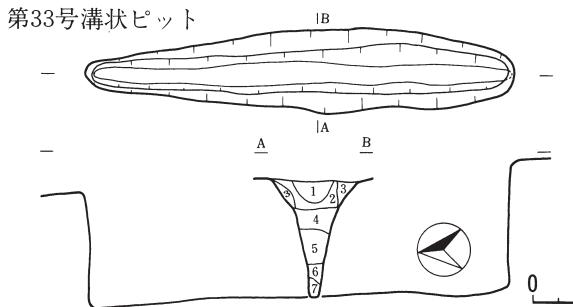
31号溝状ピット

1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土
4 暗褐色土
5 黑褐色土
6 明褐色土
7 黑褐色土
8 暗褐色土
9 暗褐色土
10 黄褐色土



32号溝状ピット

1 黒褐色土
2 黒褐色土
3 暗褐色土
4 暗褐色土
5 明黄褐色土
6 黄褐色土(にじい)
7 黄褐色土

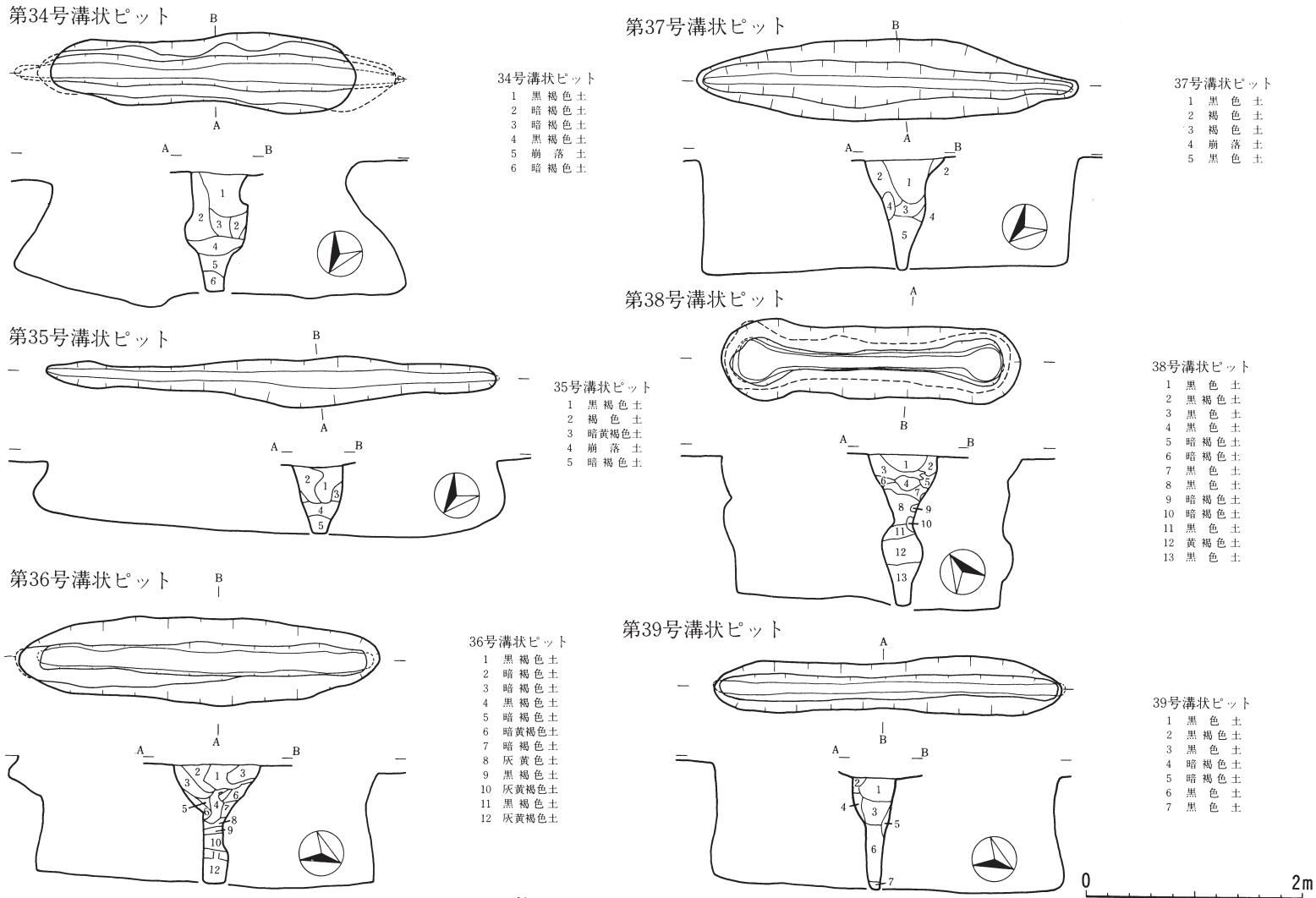


33号溝状ピット

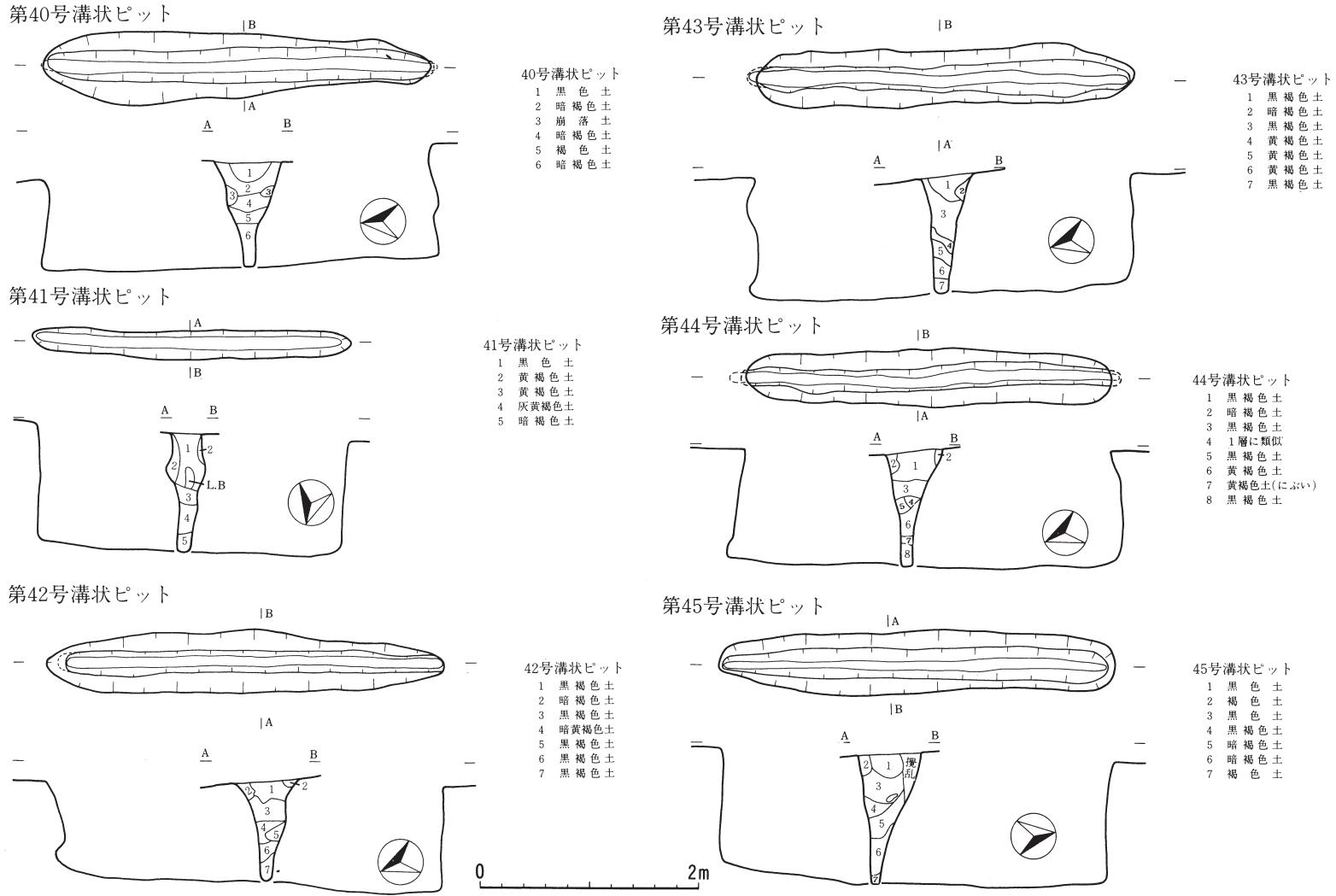
1 黒色土
2 暗褐色土
3 暗褐色土
4 黑褐色土
5 暗褐色土
6 暗黄褐色土
7 暗褐色土

第188図 溝状ピット(6)

2m

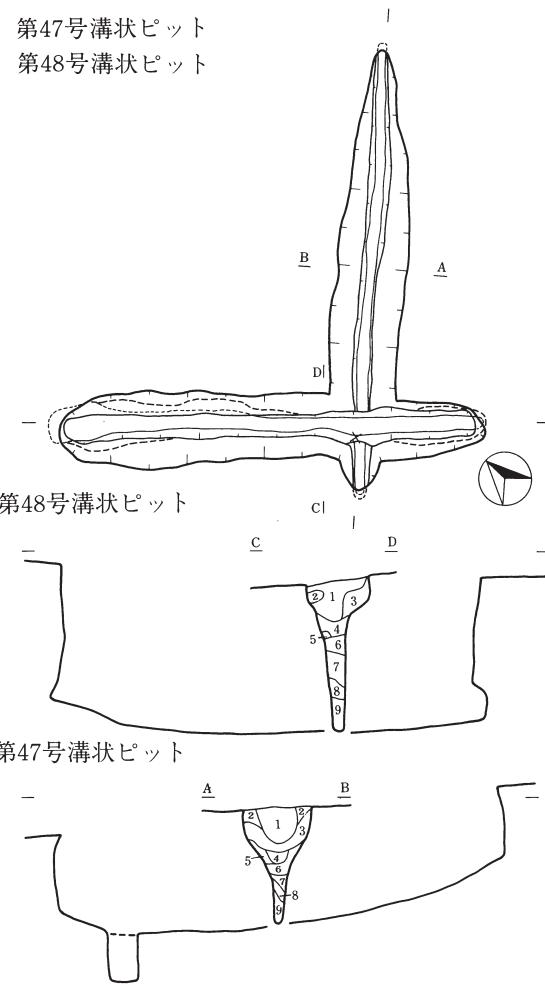


第189図 溝状ピット(7)

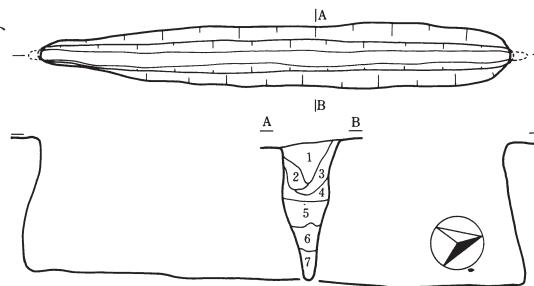


第190図 溝状ピット(8)

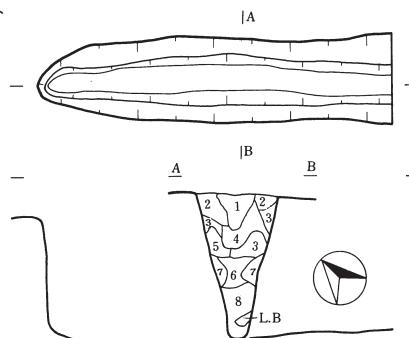
第47号溝状ピット
第48号溝状ピット



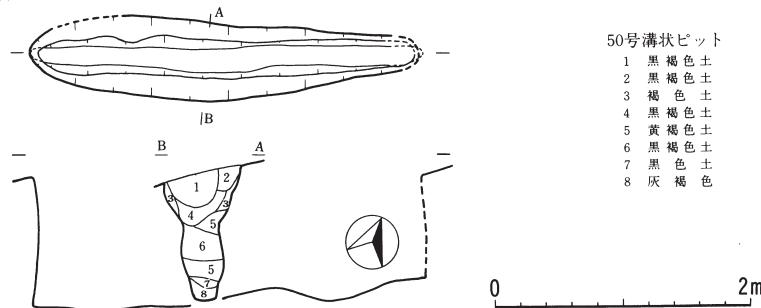
第46号溝状ピット



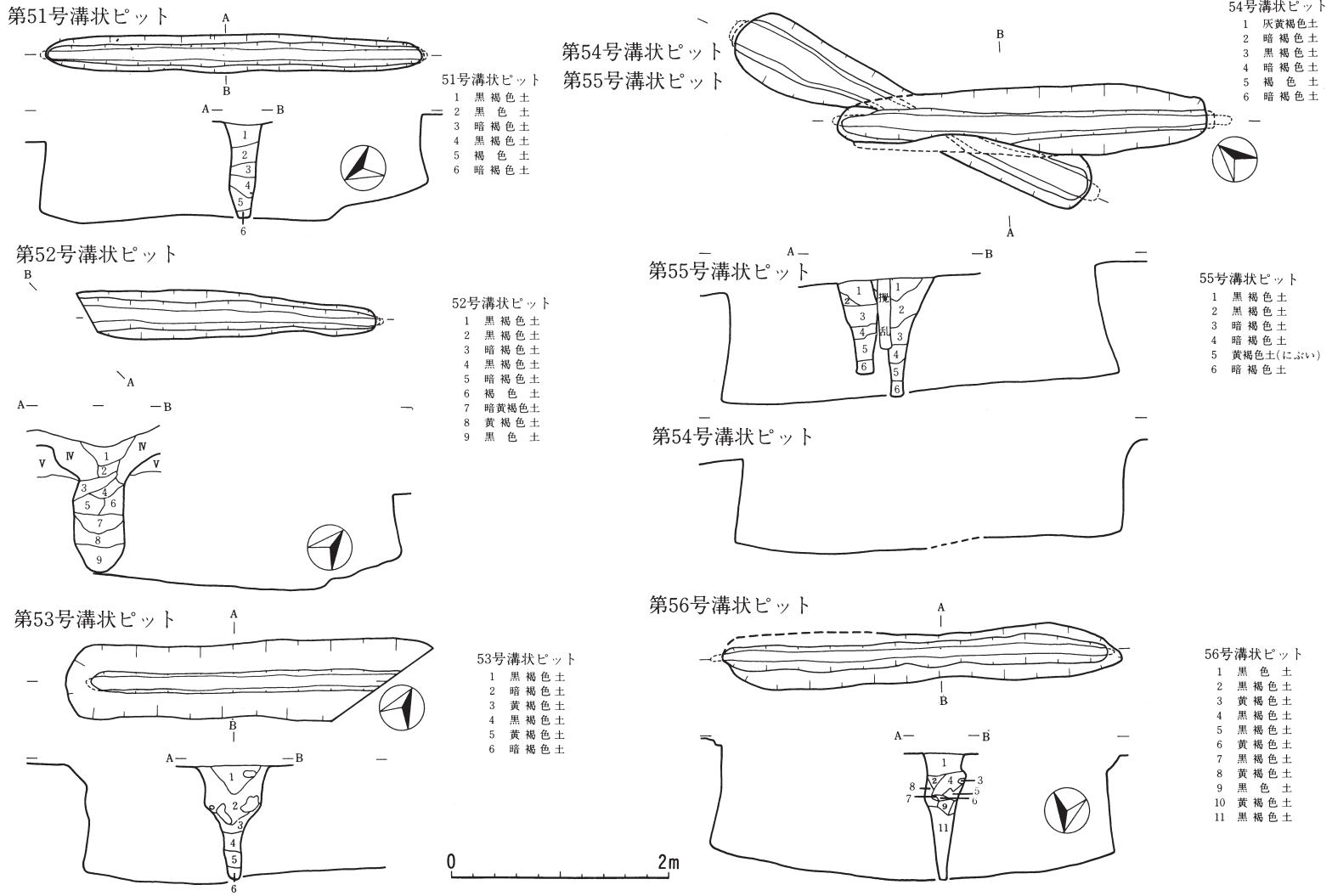
第49号溝状ピット



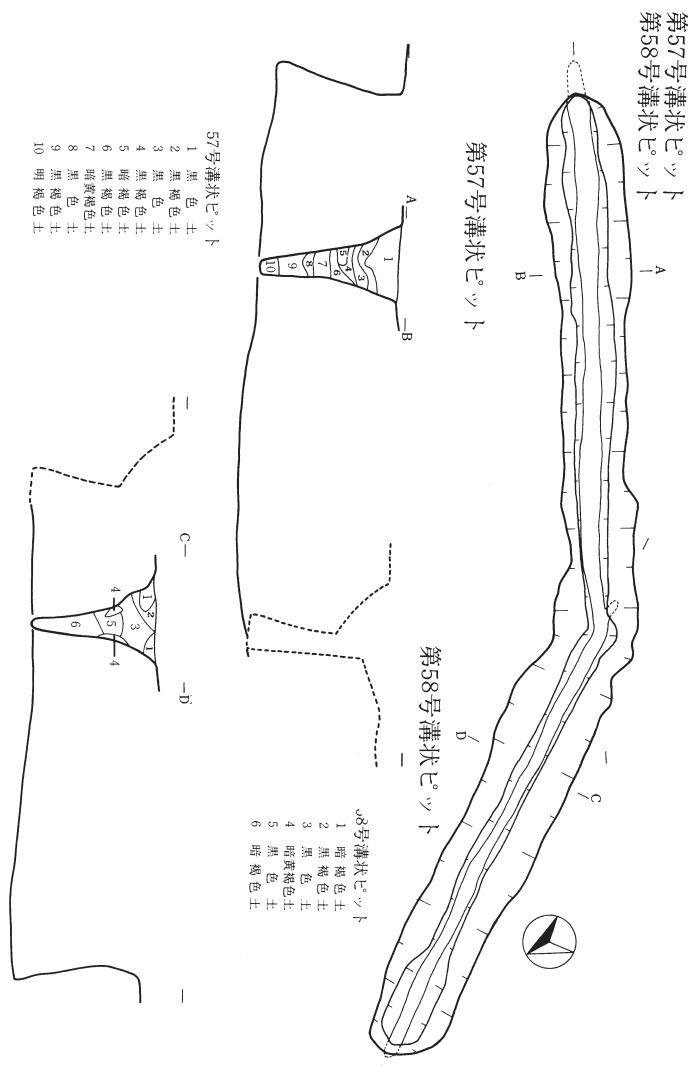
第50号溝状ピット



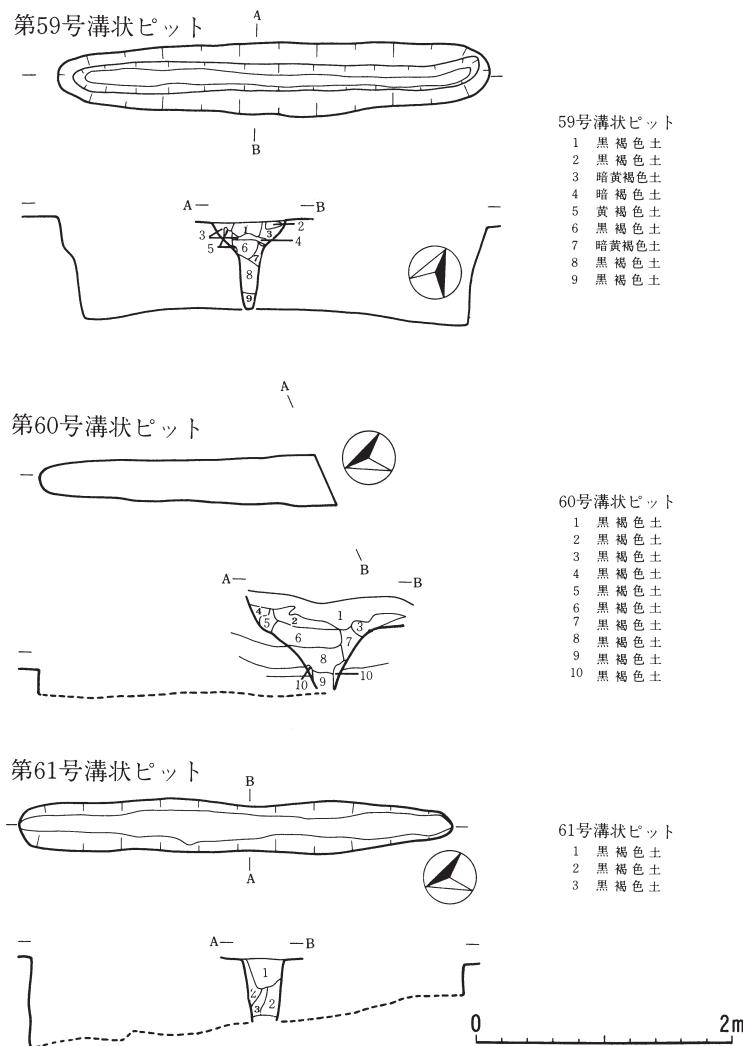
第191図 溝状ピット(9)

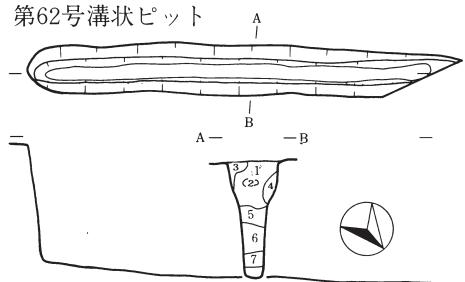


第192図 溝状ピット(10)



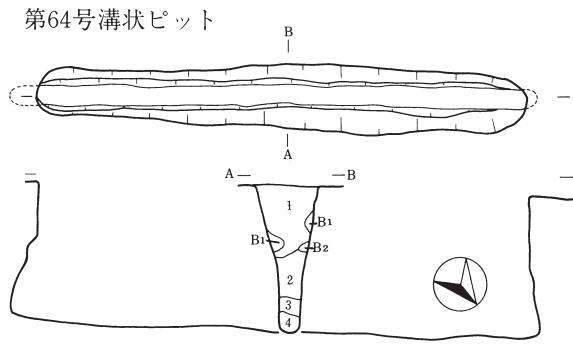
第193図 溝状ピット(11)





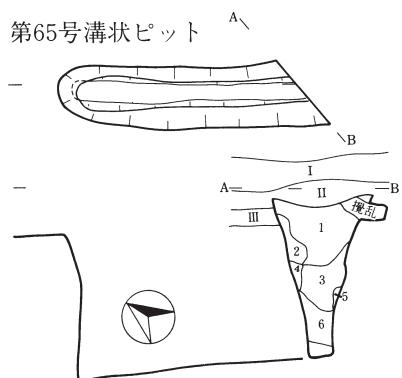
62号溝状ピット

1	暗褐色土
2	褐色土
3	明褐色土
4	褐色土
5	暗褐色土
6	暗褐色土
7	暗褐色土
8	黒褐色土



64号溝状ピット

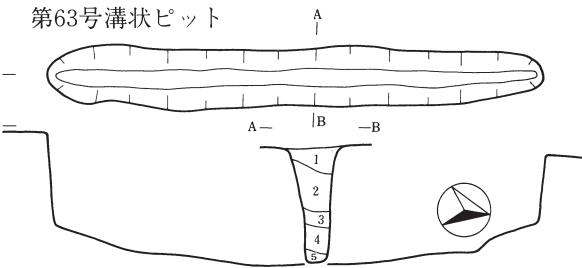
1	黒褐色土
2	暗褐色土
3	黄褐色火山灰
4	暗褐色土
B ₁	暗褐色土
B ₂	黄褐色火山灰



65号溝状ピット

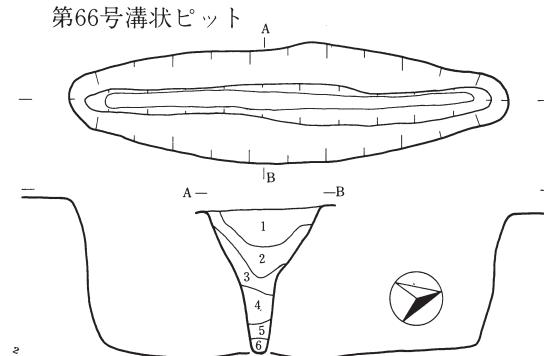
1	黒褐色土
2	暗褐色土
3	暗褐色土
4	黄褐色土
5	黄褐色土
6	褐色土
7	暗褐色土

第194図 溝状ピット(12)



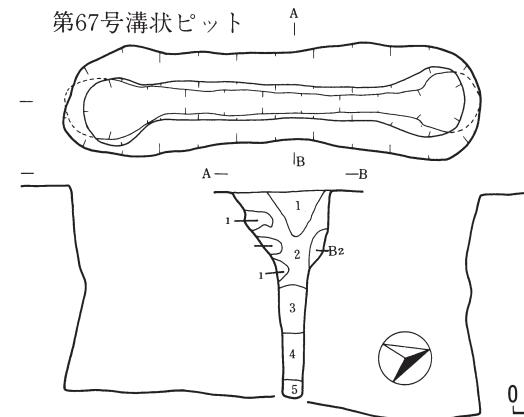
63号溝状ピット

1	暗褐色土
2	暗褐色土
3	暗褐色土
4	明褐色土
5	黄褐色土



66号溝状ピット

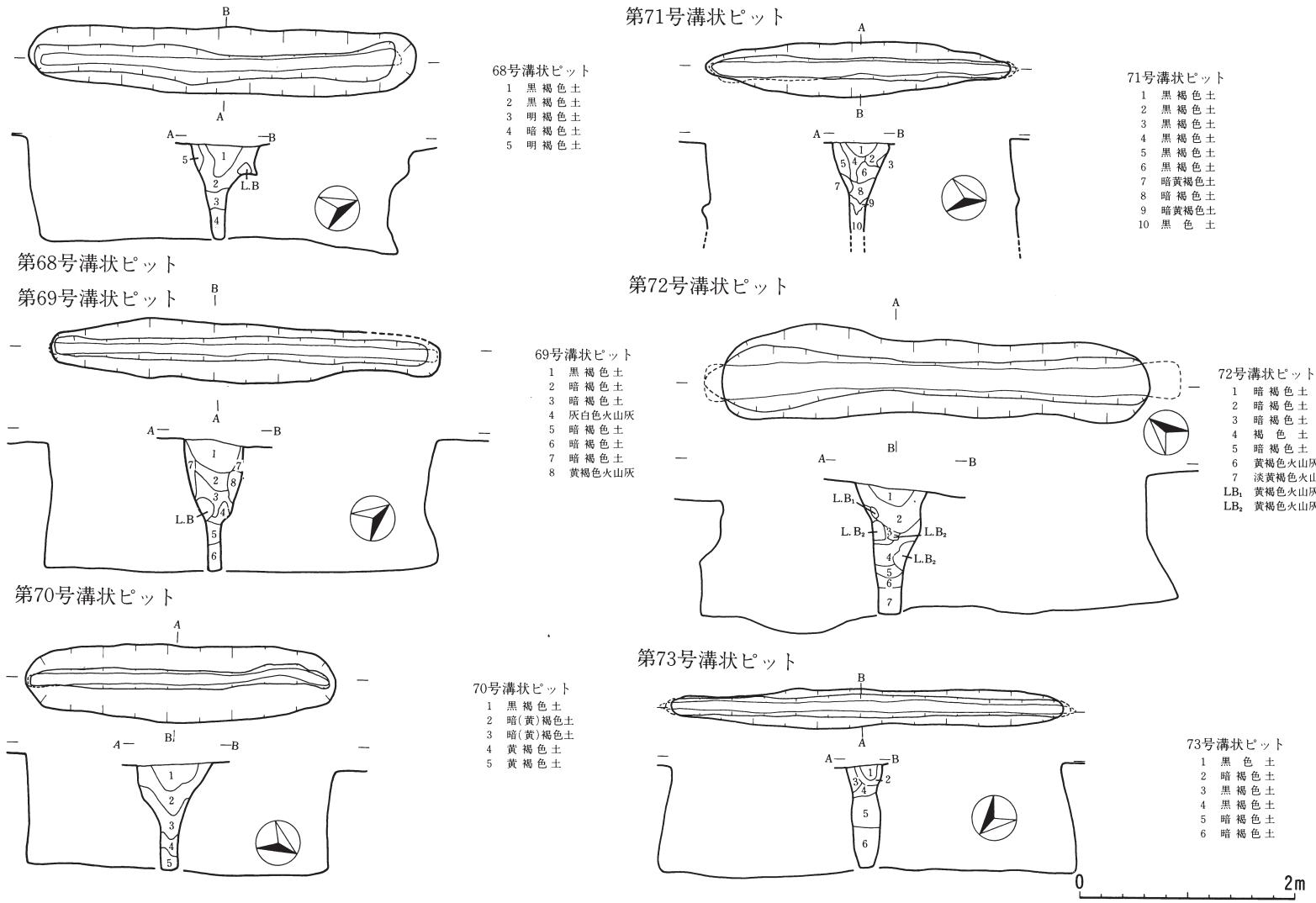
1	黒褐色土
2	黒褐色土
3	暗褐色土
4	暗褐色土
5	暗褐色土
6	黄褐色土



67号溝状ピット

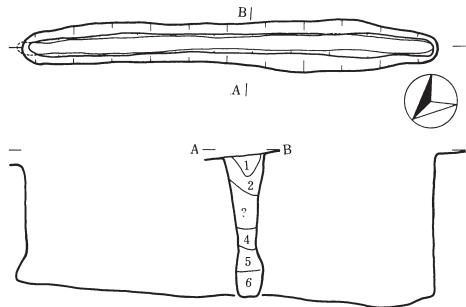
1	暗褐色土
2	暗褐色土
3	黄褐色土
4	淡黄褐色土
5	暗褐色土
B ₁	黄褐色土
B ₂	黄褐色土

0 2m



第195図 溝状ピット(13)

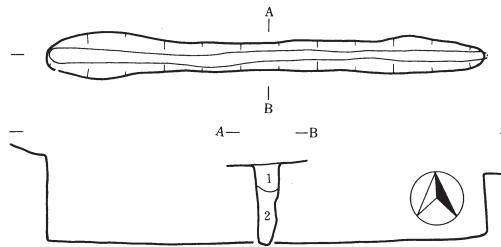
第74号溝状ピット



74号溝状ピット

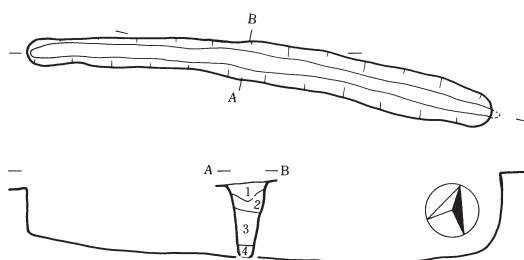
- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗黃褐色土
- 6 暗褐色土

第77号溝状ピット



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土

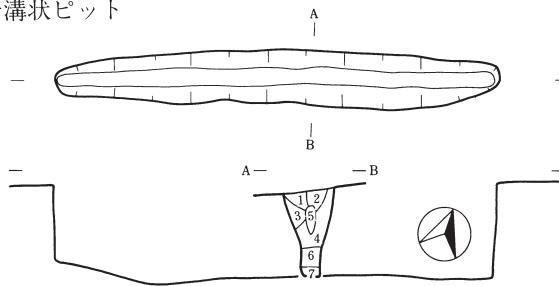
第75号溝状ピット



75号溝状ピット

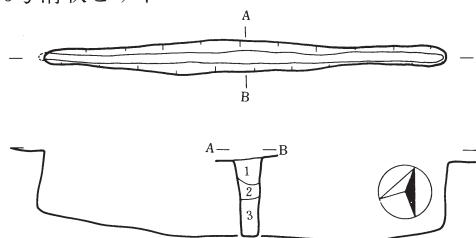
- 1 黒色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 黑色土

第78号溝状ピット



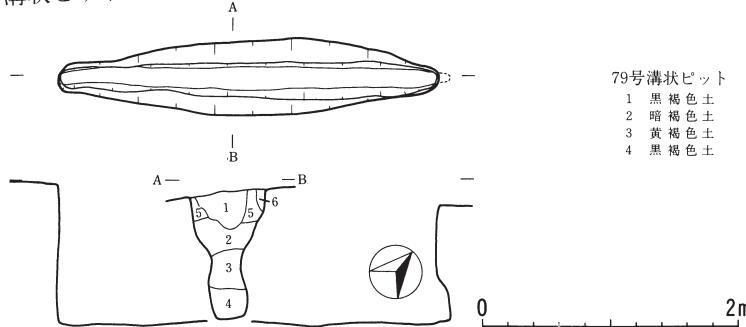
- 1 極暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 褐色土
- 4 明褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 明褐色土
- 7 黑色土

第76号溝状ピット



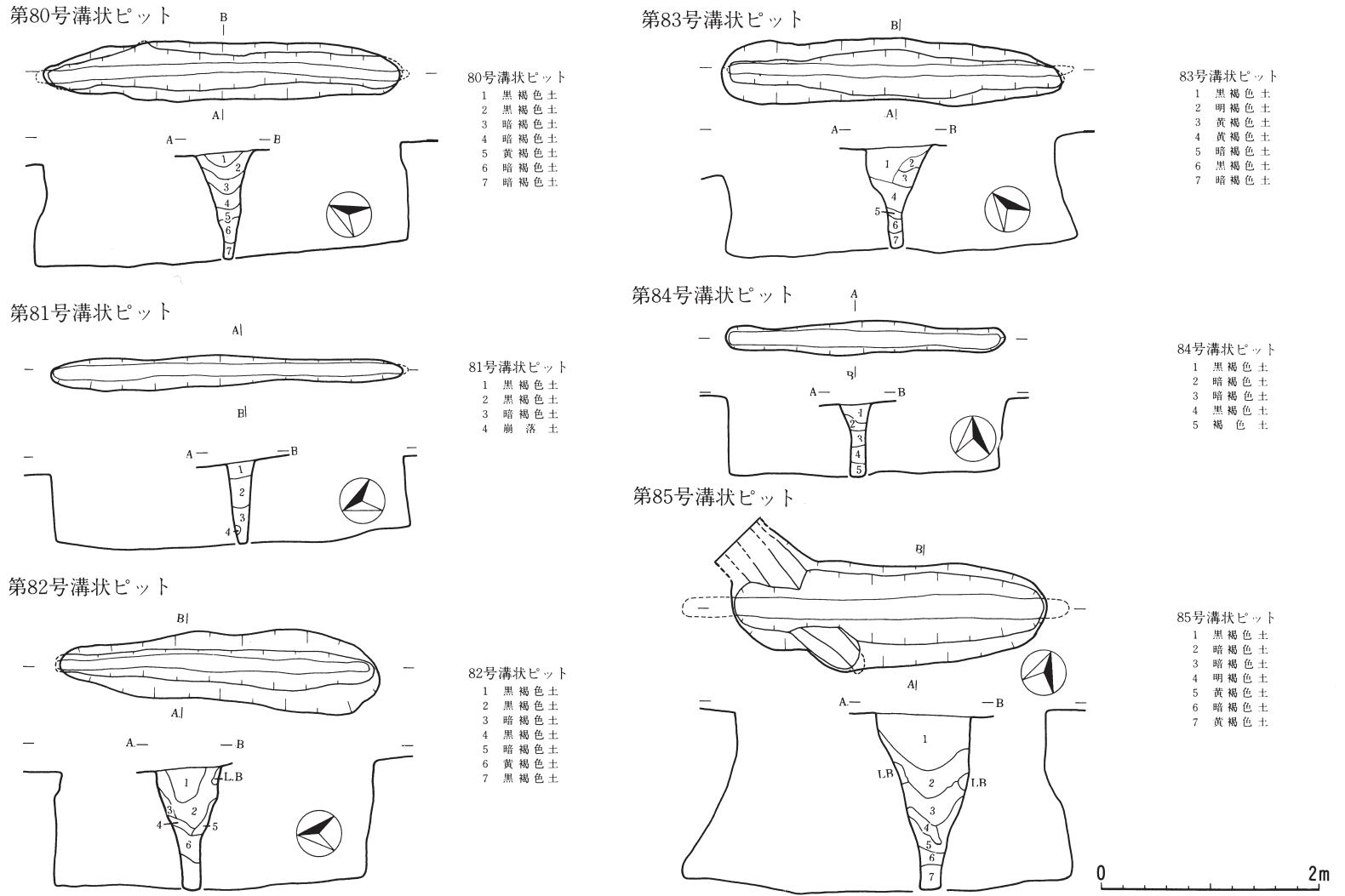
- 1 暗褐色土
- 2 褐色土
- 3 黑褐色土

第79号溝状ピット



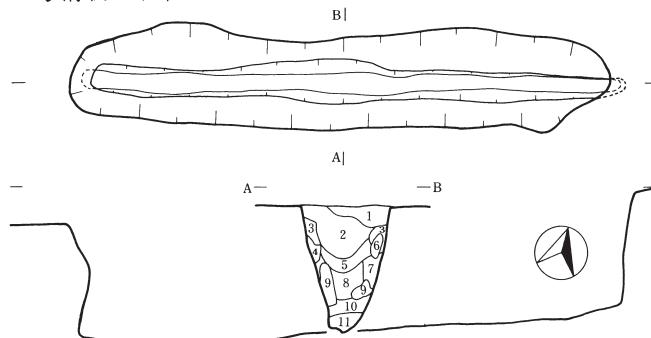
- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 黑褐色土

第196図 溝状ピット(14)

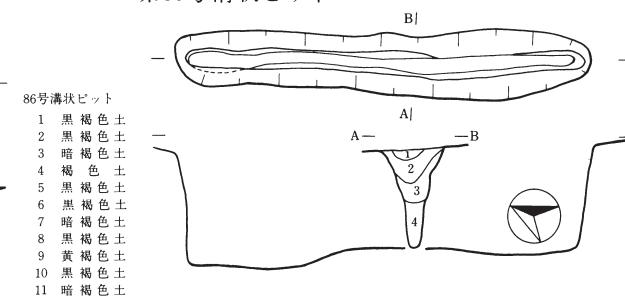


第197図 溝状ピット(15)

第86号溝状ピット



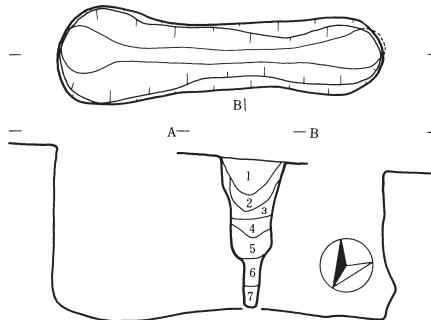
第89号溝状ピット



89号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土

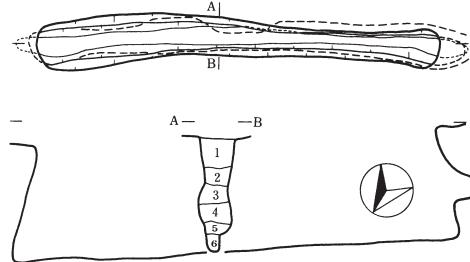
第87号溝状ピット A|



87号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 暗褐色土

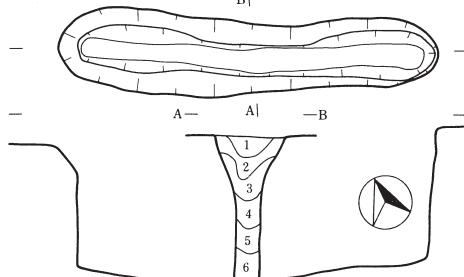
第90号溝状ピット



90号溝状ピット

- 1 黒色土
- 2 黑褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗黄褐色土
- 5 崩落土
- 6 暗褐色土

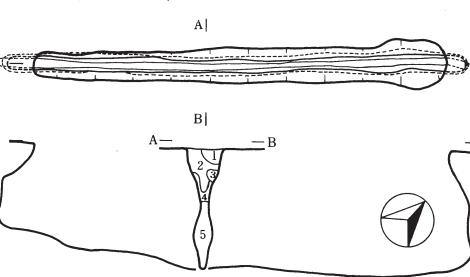
第88号溝状ピット



88号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黄褐色土

第91号溝状ピット



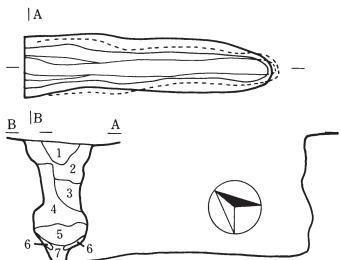
91号溝状ピット

- 1 暗褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黑褐色土

第198図 溝状ピット (16)

0 2m

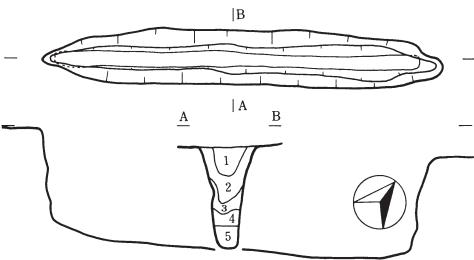
第92号溝状ピット



92号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黑褐色土
- 6 暗黄褐色土
- 7 黑褐色土

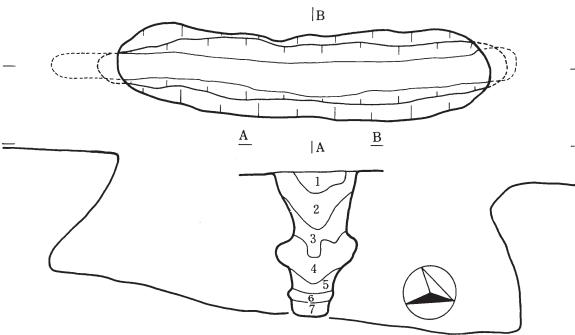
第93号溝状ピット



93号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 明褐色土
- 4 黄褐色火山灰
- 5 黑褐色土

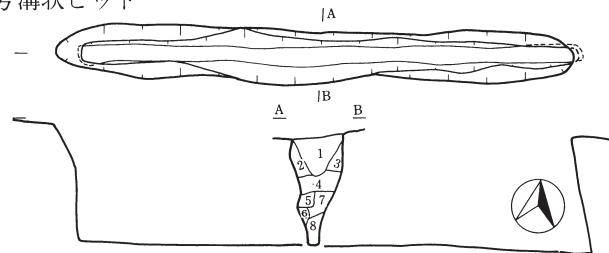
第94号溝状ピット



94号溝状ピット

- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土
- 4 黄褐色火山灰
- 5 黄褐色バミス
- 6 黑褐色土
- 7 暗褐色土

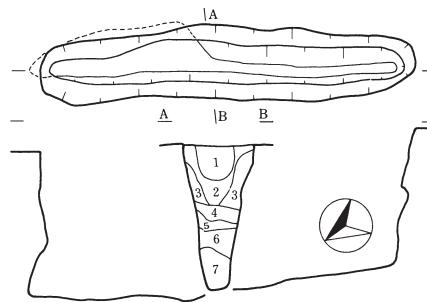
第95号溝状ピット



95号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 黑褐色土
- 8 黑褐色土

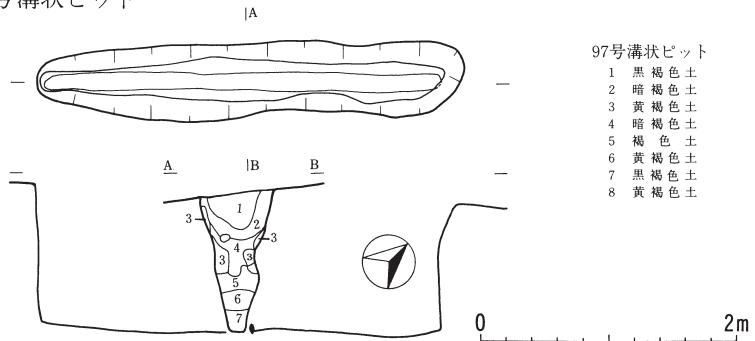
第96号溝状ピット



96号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 黑褐色土

第97号溝状ピット

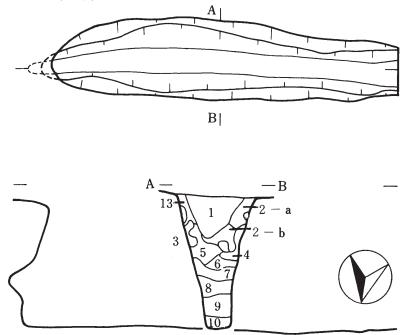


97号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 黑褐色土
- 8 黄褐色土

第199図 溝状ピット(17)

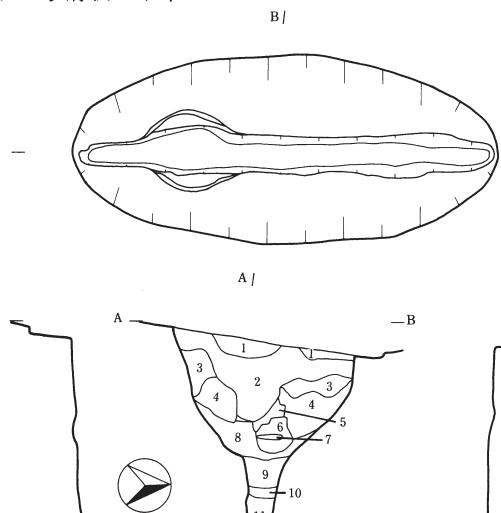
第98号溝状ピット



98号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2-a 暗褐色土
- 2-b 暗褐色土
- 3 明黄褐色土
- 4 明黄褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 黑褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 黄褐色土

第99号溝状ピット



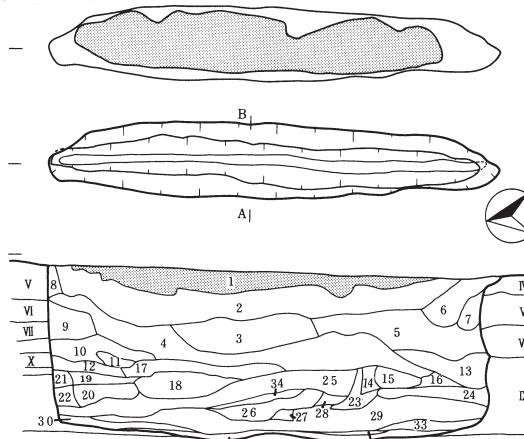
99号溝状ピット

- 1 暗褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 明褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黑褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗黄褐色土
- 9 黑褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 明褐色土

0
2m

第200図 溝状ピット(18)

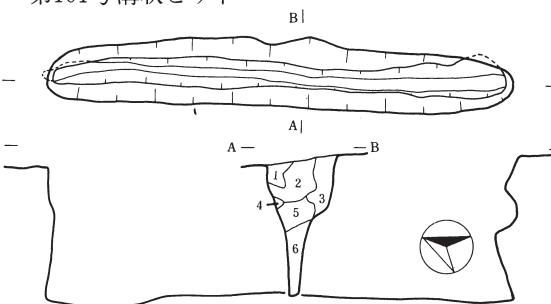
第100号溝状ピット



100号溝状ピット

- 1 明黄褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黑褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗褐色土
- 10 暗褐色土
- 11 暗褐色土
- 12 暗褐色土
- 13 黑褐色土
- 14 黑褐色土
- 15 暗褐色土
- 16 暗褐色土
- 17 黄褐色土
- 18 暗褐色土
- 19 黄褐色土
- 20 黄褐色土
- 21 暗褐色土
- 22 暗褐色土
- 23 暗褐色土
- 24 暗褐色土
- 25 暗褐色土
- 26 暗褐色土
- 27 暗褐色土
- 28 暗褐色土
- 29 黄褐色土
- 30 暗褐色土
- 31 明灰褐色土
- 32 暗褐色土
- 33 黑褐色土
- 34 黑褐色土
- 35 暗褐色土
- 36 暗褐色土
- 37 暗褐色土
- 38 暗褐色土
- 39 黑褐色土
- 40 暗褐色土
- 41 暗褐色土
- 42 黄褐色土

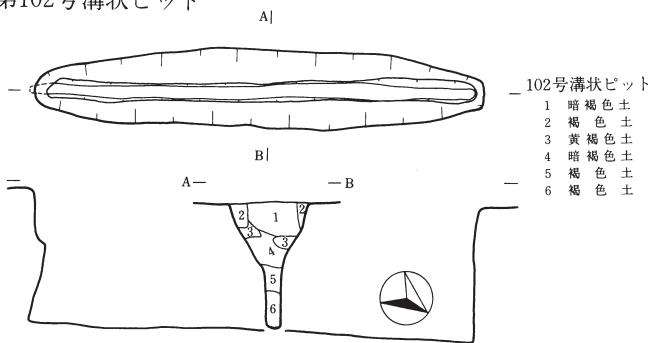
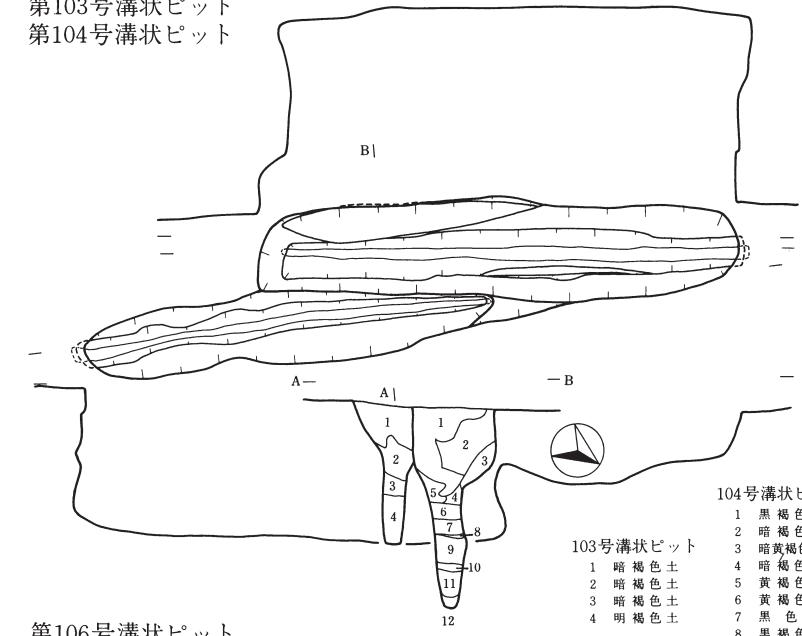
第101号溝状ピット



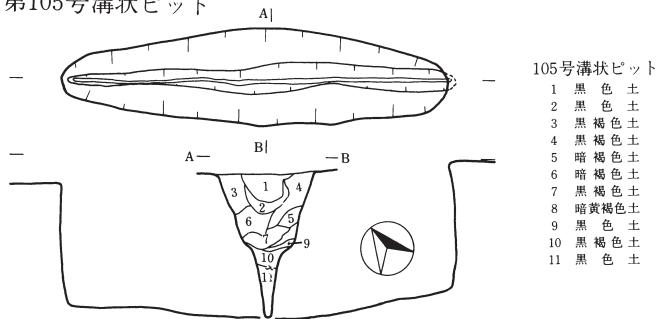
101号溝状ピット

- 1 暗褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土

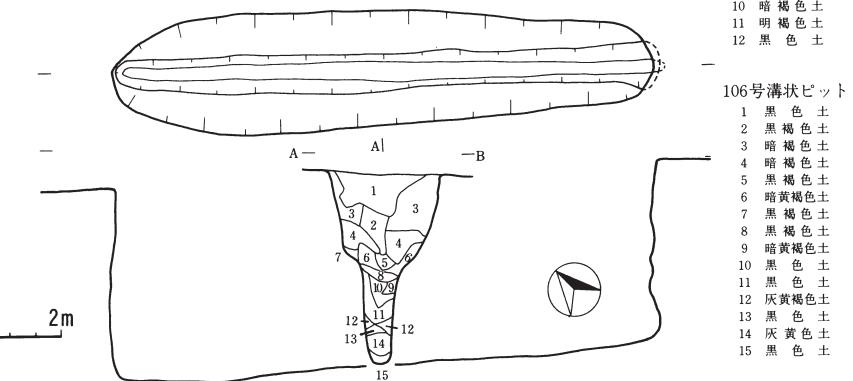
第102号溝状ピット

第103号溝状ピット
第104号溝状ピット

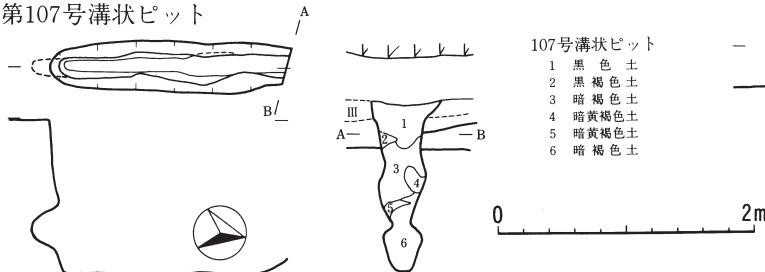
第105号溝状ピット



第106号溝状ピット



第107号溝状ピット



第201図 溝状ピット(19)

第 章 科 学 的 分 析

歴史時代の住居跡から出土した鉄滓（化学組成）及び炭化材（樹種同定）の科学的分析を依頼した。試料は、第1号住居跡出土の鉄滓1点と、第1・2号住居跡出土の炭化材10点である。分析結果は次の通りである。

1. 鉄 滋

分析者 青森県機械金属試験所

化学課技師 前 田 哲

資料の調整法

破碎した鉄滓（塊状）の一部を全量粉碎し、マグネットにて金属鉄を除去し、 100μ 以下の微粉末とした。

第43表

項 目 品 名	試 験									
	T·Fe (%)	FeO (%)	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	CaO (%)	MgO (%)	P (%)	S (%)	TiO ₂ (%)	Mn (%)
第1号住居跡覆土	41.48	43.23	25.86	9.63	3.30	2.02	0.160	0.047	0.55	0.21

- 各成分の分析法 T·Fe 過マンガン酸カリウム滴定法
FeO 炭酸ガス置換 過マンガン酸カリウム滴定法
SiO₂ アルカリ溶融 重量法
Al₂O₃ リン酸アルミニウム 重量法
CaO シュウ酸カルシウム 過マンガン酸カリウム滴定法
MgO ピロリン酸マグネシウム 重量法
P 硫酸ヒドラジン還元リンモリンモリデン青、吸光光度法
S 赤外線吸収法
TiO₂ 過酸化水素吸光光度法
Mn 原子吸光光度法

2. 樹種

和野前山遺跡から出土した炭化材の樹種

嶋倉巳三郎

青森県八戸市和野前山にある平安時代の遺跡から出土した炭化材の樹種を調査した。試料は木炭状の小塊片で、これらを反射顕微鏡で観察し、解剖学的な特徴から樹種を決めたが、その結果は次のようにになった。

第44表 炭化樹種一覧表

試料	出土地點	時期	樹種	備考	試料	出土地點	時期	樹種	備考
No. 1	1号住居跡 C-10	平安時代	コナラ		No. 6	2号住居跡 C-6	平安時代	コナラ	
No. 2	" C-10	"	コナラ		No. 7	" C-10	"	コナラ	
No. 3	" C-10	"	コナラ		No. 8	" C-3	"	ヤチダモ	
No. 4	"	"	コナラ		No. 9	" ピット2	"	コナラ	
No. 5	2号住居跡 C-4	平安時代	ヤチダモ		No. 10	" ピット1	"	スギ	本製品の一部

コナラ炭は早材部道管の大きな環孔材で、晩材部の道管は小さく、多数集まって斜線上に配列し、放射組織は単列のもと幅の広い大きなものとがある。

ヤチダモ炭は早材部道管の大きな環孔材で、晩材部の道管は小さく、厚壁で、単独時として2~3個連続して疎らに期在する。放射組織は1~3細胞幅であり、同性。

スギ炭は針葉材で樹脂細胞があり、放射組織の分野にはタキソデオイドの壁孔がある。

その他（石質）

宮城一男氏（弘前大学教養部教授）の御教示によると、第141図~205は、蛇紋岩であるが、部分的に硬質の脈が入っており、この部分が一ノ渡遺跡（1984年刊行）出土の硬玉の大珠に類似していることから、硬玉の可能性が考えられるということである。また石斧で、輝緑凝灰岩とした1・23・88も同様の可能性が考えられるということである。（白鳥文雄）

第 章 ま と め

1 . 繩文時代

遺構

出土した縄文土器は草創期の爪形文系土器から前器初頭の早稻田 6 類土器まで断続的に 9 型式に及んでいるが、早期終末の早稻田 5 類期以外では遺物・遺構とも少ない。遺構・遺物の分布状況からするならば、遺跡は、更に東側斜面に広がるものと推定される。

早稻田 5 類期では各種の遺構が検出され、不十分な点は多いが、遺物の密集する部分に幾つかの特徴があることが明らかになった。調査区域内には、住居跡 3 軒とたき火をした場所 3 か所を含めた広場があり、この南北両側には作業小屋と考えられる小住居が 2 軒、土壙が 7 基、屋外の作業場が 3 か所、捨て場が 2 か所存在していた。すべてが同一時期に存在したものではないが、礫石器による若干の接合例からは、10~20m 離れて所在する捨て場・作業場、調理場等が互いに関連した様相を示し、その中の幾つかは同時に所在した可能性がうかがわれた。

遺物

土器は 9 型式に及ぶが、幾つかの新しい知見を得たのでこれを列記する。

- a 爪形文土器の検出は、胎土に若干の違いはあるが、同じく八戸市内に所在する鶴平(2)遺跡に次いで 2 例目である。
- b 日計式押型文土器に関する縄文を施文した土器を得たが、これには日計式押型文土器は全く伴わず、この時期には類例のない魚骨回転文を伴うことが明らかとなった。この魚骨回転文の所在により、本県における漁撈の開始は、早期初頭までさかかのぼることになる。
- c 本遺跡における赤御堂式土器は、その全体的様相から、後半期である長七谷地 2 号遺跡群土器に該当する。
- d 本遺跡で主体的位置を占めるのは早稻田 5 類土器である。早稻田 5 類土器を綾杉状縄文を手掛けりとして前半期、後半期に分けて考えるならば、本遺跡のそれは前半期であろう。
- e 赤御堂式土器から早稻田 5 類土器への変容には断絶が認められず、極めてスムーズであるとともに多くの類似する内容をもち、概観するならば一つの土器群としてとらえることができよう。そしてこの土器群の細別型式として、赤御堂式土器と早稻田 5 類土器とが存在するが、細々別型式の設定は現段階では困難といわざるを得ない。ただし、長七谷地 2 号遺跡 群土器は、赤御堂式における細分型式となり得ると思われるが、そのためには諸要素の更に詳細な分析が必要となろう
- f 早稻田 6 類土器は、その特徴により鷹架 群から和野前山 8 群への変遷が明らかとなった。

これについては文様構成等も明瞭に異なり、各々を細別型式と考えてよい。

石器は剥片石器・礫石器を含め約1,700点出土した。9型式に及ぶ縄文土器が出土しているため各石器類の時期を特定することは困難であるが、その大半は、本遺跡の主体である早稻田5類期のものであろう。以下本遺跡における特徴等について列記する。

- a 剥片石器・礫石器とも器種は多様であるが、縄文時代には通常見られない彫器、及び関東・中部地方以北では例のない礫器とスタンプ状石器を含み、器種構成上看過し得ない点がある。
- b 各種石器の中で、石鏃・石槍・石錐等の狩獵・漁撈具の占める比率に比べ、植物性食物加工用と考えられる敲磨器類がやや高い。いづれも破損率が高いため実務とは異なるが、植物性食物もかなりの比重を占めていたものと思われる。
- c 剥片石器類のなかで、石槍・石匙・籠状石器の多くは製品として、または素材としての剥片の状態で他から搬入されたものと思われる。
- d 漁撈具として礫石錐と土器片錐とが存在するが、前者は早稻田5類に伴出し、後者は早稻田6類に伴出した。これまでの類例からしても、貝殻・沈線文系土器以降の早期では、礫石錐が圧倒的で土器片錐はまれであるのに対し、前期の早稻田6類・芦野群(表館式)ではすべて土器片錐である。その原因は不明であるが興味深い事実である。

(三 宅 徹 也)

2. 弥生時代

約100片の土器片が出土したが、遺構は検出されなかった。遺物は小砂片が多いために、時期設定までには至らず、田舎館式の特徴を有するものもあるが、内面の調整等からやや古いものと推定される。また、他の破片も田舎館式より若干古いものと推定される。

3. 歴史時代

住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟、焼土遺構3基が検出された。各遺構とも特色をもっているが、特に。2号住居跡において検出された腰板は、従来の検出例とは異なり、板材を横に設置しているという特殊性が認められる。また、張り出し部との間仕切りに板材を使用していたことが確認されたことも大きな成果である。

掘立柱建物跡は、この時期のものとしては、南部地方では初めての検出例となる方形の柱穴をもつものであり、焼土遺構との関連性など重要な要素をもつものである。

遺物は、土師器が主体であり、ほとんどの壺口縁部外面に再調整痕を有するものである。この特徴と伴出遺物から、9世紀前半という時期設定が可能となった。

歴史時代の集落構成 本遺跡出土の土師器壺はほぼ同一の特徴を有しているが、第3号住居跡出土の須恵器壺破片等が、これらの壺に伴う須恵器とは製法を異にしている点から、すべて同一時期に営まれた集落とは考え難い。このことから、数時期にわたっての集落構成も考えら

れるが、今回の調査範囲においてはほぼ同一時期の所産と考えられる。また、住居跡の配列等から集落の主体部は調査区の東側に広がるものと推定される。

4 . 溝状ピット

調査区のほぼ全域で検出された。起伏及び傾斜が一様でないため、方向性等には規則性が認められなかった。また、調査区が台地の一部を通っているにすぎないため、ピット配置の全様を把握するには至らず、配列・組み合わせ等も推測の域を出ないものであったが、ピットが地理的条件に大きく関係していることが理解された。

(白鳥 文雄)

引用参考文献

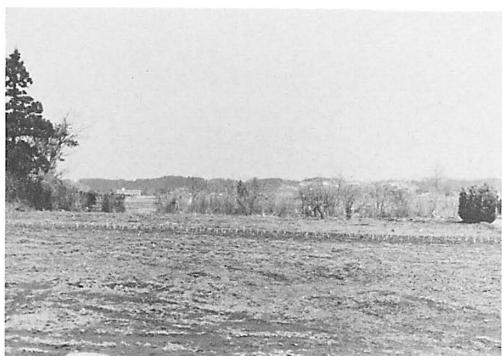
- ア . 相原淳一 1982 「日本式土器群の成立と解体」 赤い本 創刊号
- 青森県教育委員会 1976 a 「黒石市牡丹南遺跡、浅瀬石遺跡発掘調査報告書」
- " 1976 b 「千歳遺跡(13)発掘調査報告書」
- " 1976 c 「五戸町中沢西張遺跡、古街道長根遺跡」
- " 1977 a 「鳥海山遺跡発掘調査報告書」
- " 1977 b 「近野遺跡発掘調査報告書()・三内丸山()遺跡発掘調査報告書」
- " 1978 a 「青森市三内遺跡」
- " 1978 b 「熊沢遺跡」
- " 1978 c 「源常平遺跡発掘調査報告書」
- " 1978 d 「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」
- " 1979 a 「松元遺跡発掘調査報告書」
- " 1979 b 「近野遺跡()」
- " 1980 a 「大平遺跡発掘調査報告書」
- " 1980 b 「大鰐町砂沢平遺跡発掘調査報告書」
- " 1980 c 「碇ヶ関村古館遺跡」
- " 1980 d 「大面遺跡」
- " 1980 e 「永野遺跡発掘調査報告書」
- " 1980 f 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告書 昭和52年度第1次発掘調査」
長七谷地貝塚
- " 1980 g 「長七谷地貝塚遺跡発掘調査報告 昭和53年度第2次発掘調査」
長七谷地貝塚
- " 1981 a 「表館遺跡発掘調査報告書」
- " 1981 b 「新納屋遺跡(2)発掘調査報告書」
- " 1981 c 「鷹架遺跡発掘調査報告書」
- " 1982 d 「発茶沢遺跡」
- " 1983 a 「鴨平(1)遺跡」
- " 1983 b 「鴨平(2)遺跡」
- " 1983 c 「長者森遺跡」
- " 1983 d 「鶲窪遺跡」
- 青森県立郷土館 1976 「下田代納屋B遺跡発掘調査報告書」
- " 1979 「宇鉄 遺跡発掘調査報告書」
- 石岡 憲男 1980 「所謂Tピットについて」 土曜考古 2
- 岩手県埋蔵文化センター 1979 「湯沢(A)遺跡」
- 江坂 輝弥 1950 「青森県下北部東通村尻屋見台遺跡調査報告」 考古学雑誌 36 - 4
- " 1955 「青森県下北部ムシリ遺跡」 日本考古学年報 3

- 江坂 輝弥 1957「ムシリ 式土器について」 先史時代 5
- " 1957「三戸群大館村十日市赤御堂貝塚調査略報」 奥南史苑 2
- " 1962「青森県八戸市長七谷地貝塚」 考古学年報 11
- 力. 霧ヶ丘遺跡調査団 1973「霧ヶ丘」武蔵野美術大学考古学研究会
- 草間俊一編 1974「崎山弁天遺跡」
- 工藤 竹久 1977「北日本の石槍・石鎌について」 北奥古代文化 9
- 児玉作左衛門 大場利夫 1954「函館市春日町出土の遺物について」北方文化研究報告 9
- サ. 笹津 備洋 1960「八戸市日計遺跡調査報告」 三田史学33 - 1
- 佐藤 達夫 二本柳正一、鹿角扇三、1958「青森県上北群早稻田貝塚」考古学雑誌 43 - 2
- " " 1961 a 「六ヶ所村尾駒出土の土器」 上北考古学会誌 2
- " 渡辺 兼庸 1961 b 「六ヶ所村尾駒出土の土器」 上北考古学会誌 2
- " 二本柳正一 1961 c 「六ヶ所村出土早稻田 5 類土器」 上北考古学会誌 2
- 鈴木道之助 1981「図録石器の基礎知識 繩文」
- 石器文化談話編 1978、1981「座散乱木遺跡発掘調査報告書」
- タ. 橋 善光、奈良正義 1977「金谷貝塚調査報告」 むつ市文化財調査報告 3
- ナ. 名久井文明 1971「青森県芦野遺跡の土器群について」 考古学雑誌 57 - 2
- " 1974「北日本繩文早期編年に関する一試考」 考古学雑誌 65 - 1
- ハ. 八戸市教育委員会 1976「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」
- " 1980「長七谷地貝塚発掘調査報告書」
- " 1982 a 「史跡根城跡発掘調査報告書」
- " 1982 b 「長七谷地 2 号遺跡」 長七谷地遺跡発掘調査報告書、長七谷地
地 2 · 7 · 8 号遺跡
- " 1983 a 「史跡根城跡発掘調査報告書」
- " 1983 b 「」
- 福田 友之 1981「溝状ピット研究に関する覚書」「弘前大学考古学研究 1」
- 螢沢遺跡発掘調査団 1979 「螢沢遺跡」
- 北海道埋蔵文化財センター 1981「社台 1 遺跡・虎杖浜 4 遺跡・千歳 4 遺跡・富岸遺跡」
- マ. Mac Cord. Howard A. 1955 Contributions to Archaeology of Northern
Honshu. Pt. J. Jomon Sites in Aomori Prefecture. American
Antiquity Vol XXI
- 馬目 順一・吉田生哉 1982「竹之内遺跡」
- ヤ. 八木 光則 1976「いわゆる『特殊磨石』について」 信濃 28 - 4
- 山内 清男 1979「日本史器の繩文」 先史考古学会
- ワ. 渡辺 誠 1975「繩文時代の植物食」

写 真 図 版



遺跡遠景

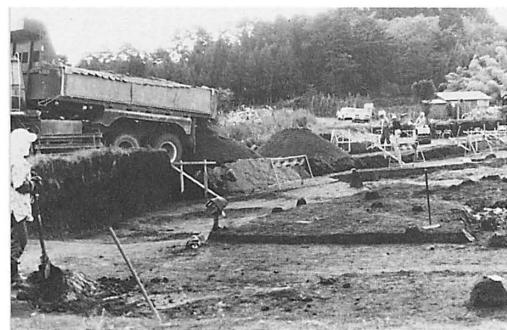


調査前の状況

作業風景



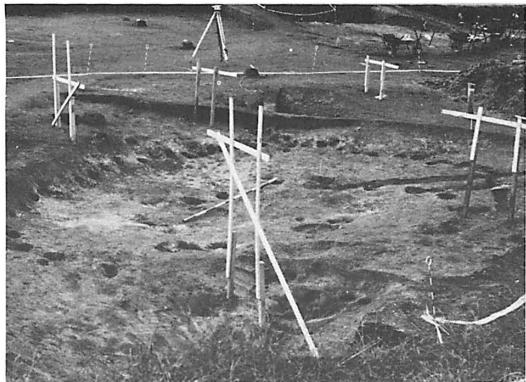
作業風景



重機導入風景

仮設道路建設作業風景

P L 2

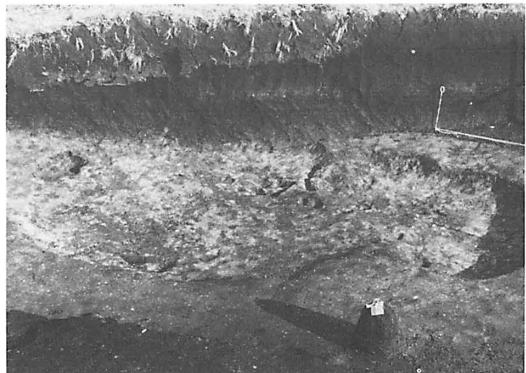


1

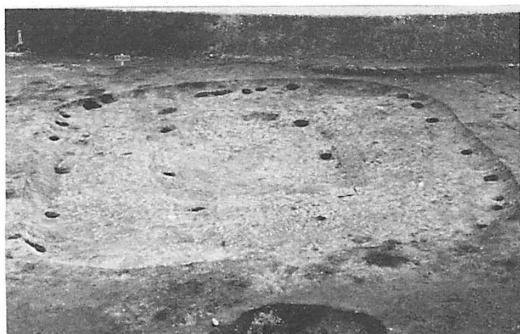
2



3



4



5



6



7

第5号竪穴住居跡(1・2)
第6号竪穴住居跡内遺物(3)
第7号竪穴住居跡・第3号土塙(4)
第8号竪穴住居跡(5~7)

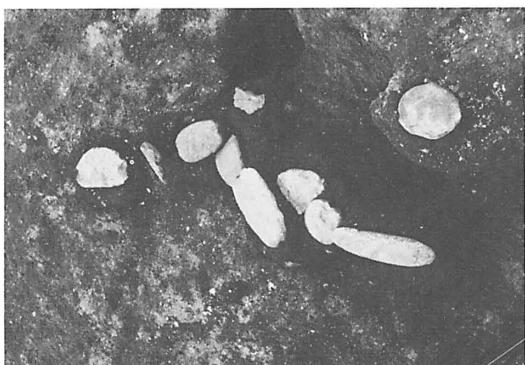
縄文時代遺構(1)



1



2



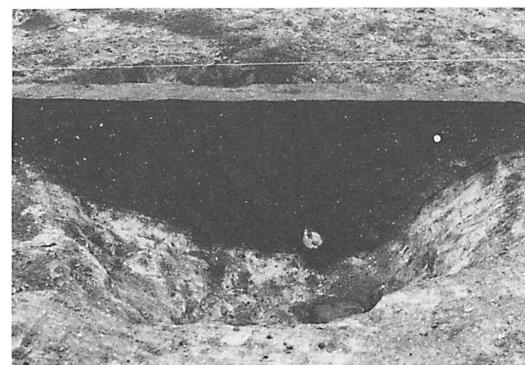
3



4



5

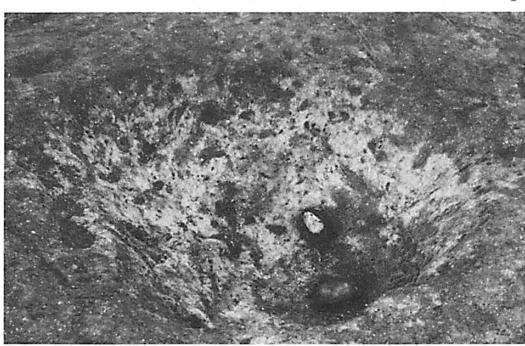


6

第9号竪穴住居跡(1～3)

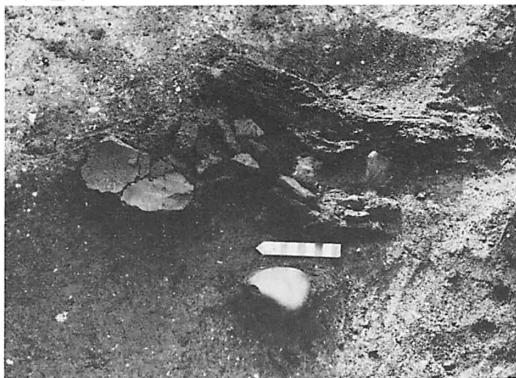
第1号土塙(4・5)

第2号土塙(6・7)



7

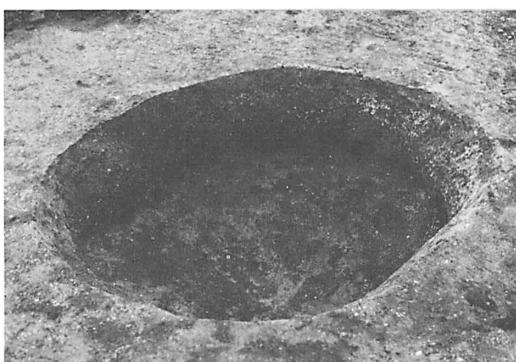
縄文時代遺構(2)



1



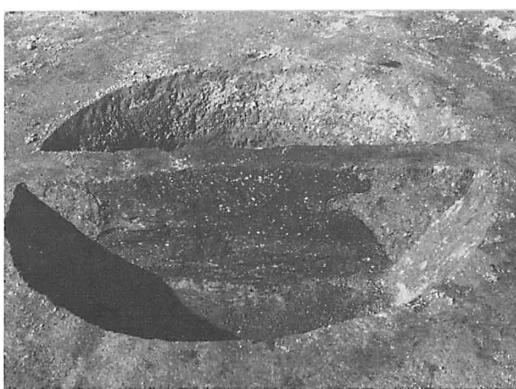
2



3



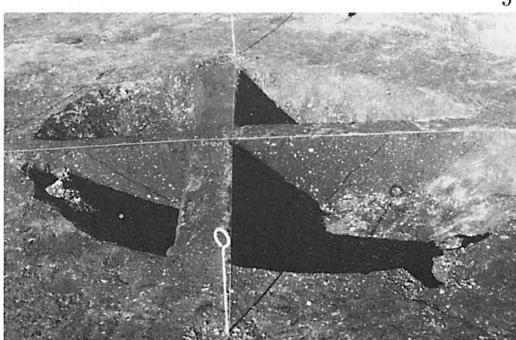
4



5

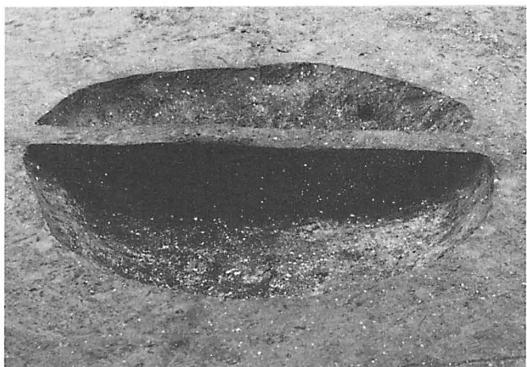


6

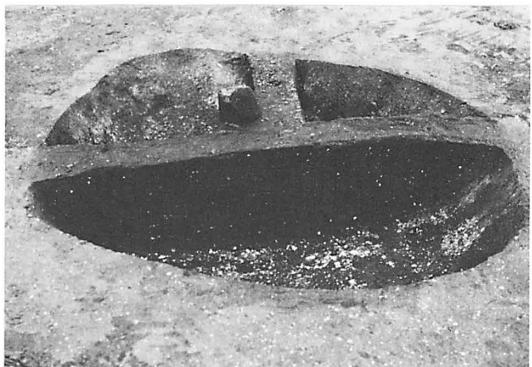


7

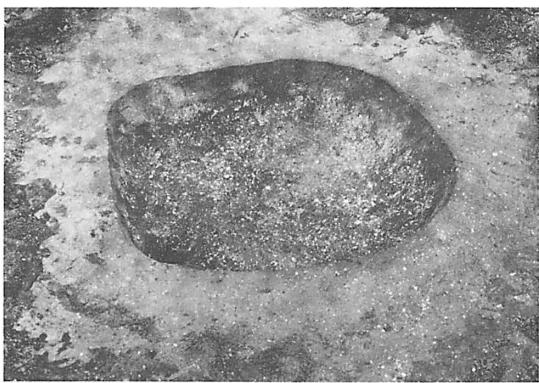
第3号土塙(1・2)
第4号土塙(3・4)
第5号土塙(5・6)
第6号土塙(7)



1



2



3



4

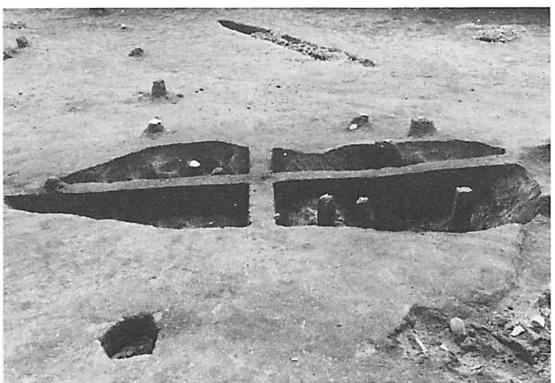


5

第7号土塙(1・2)

第8号土塙(3)

第9号土塙(4)



6

第10号土塙(5・6)

P L 6



1



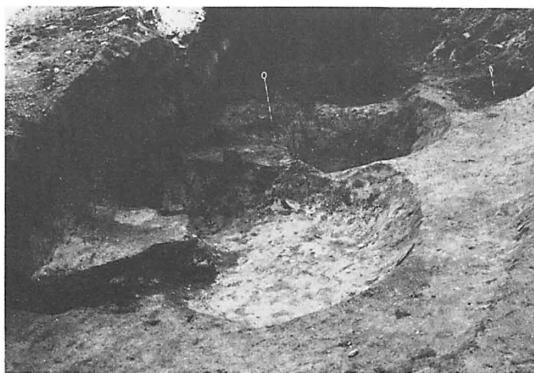
2



3



4



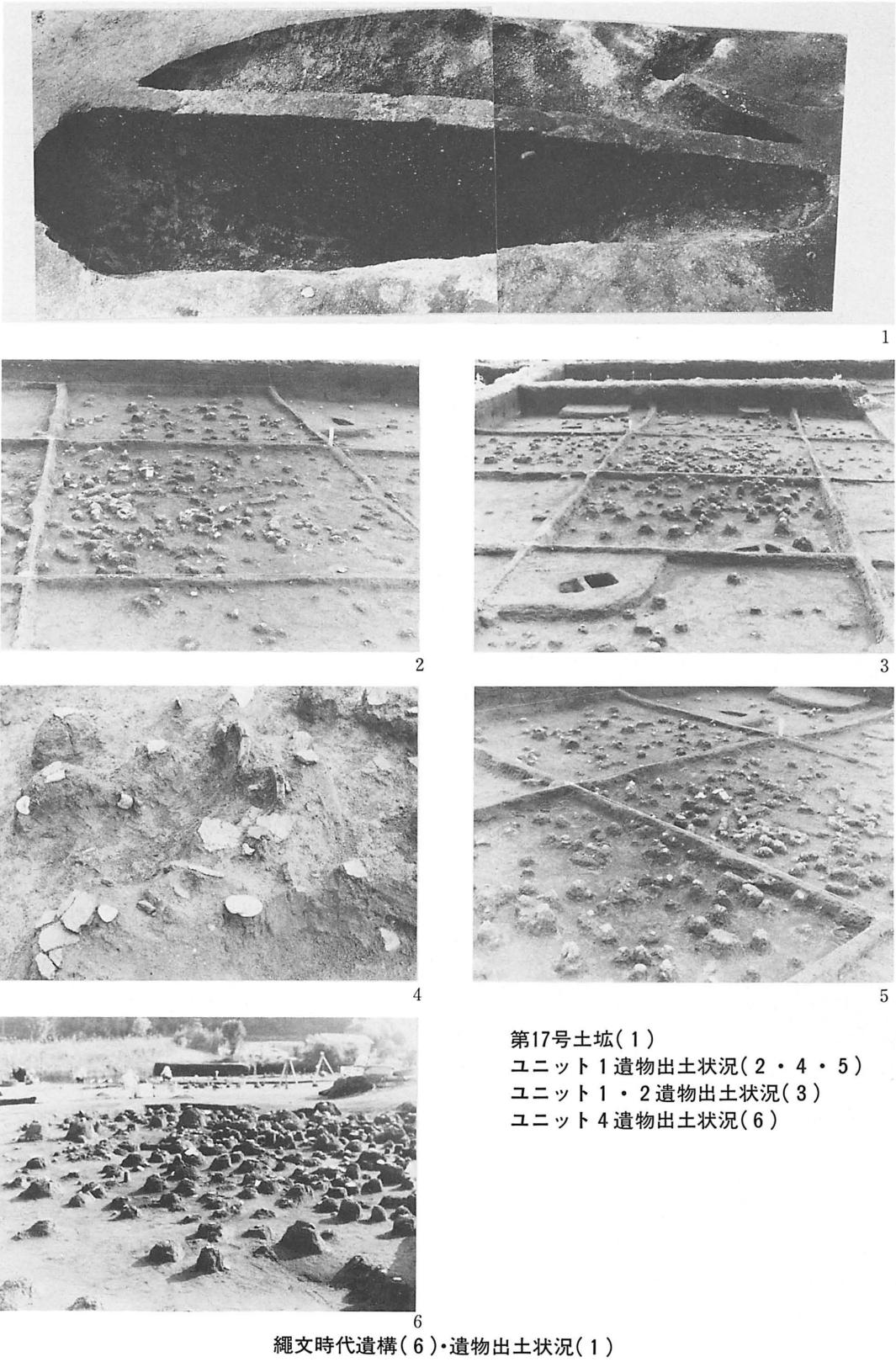
5



6

第11号土坛(1 ~ 3)

第13・14号土坛(4 ~ 6)



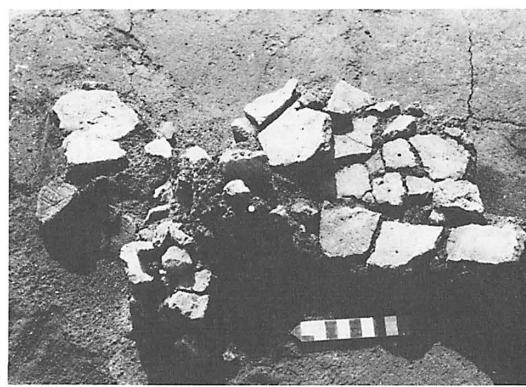
P L 8



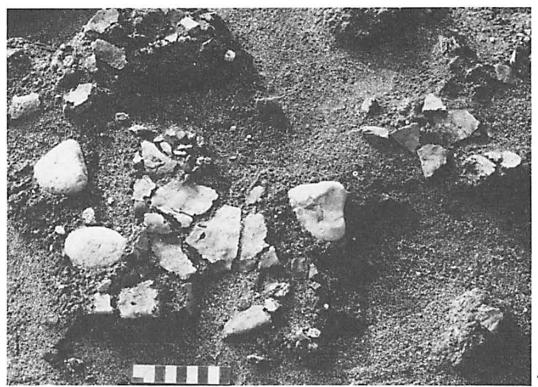
1



2



3



4



5



6

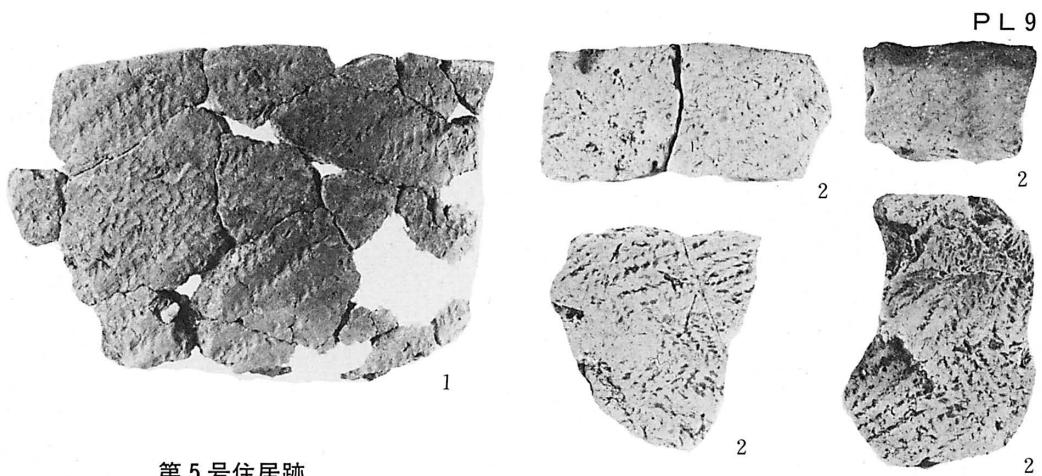


7

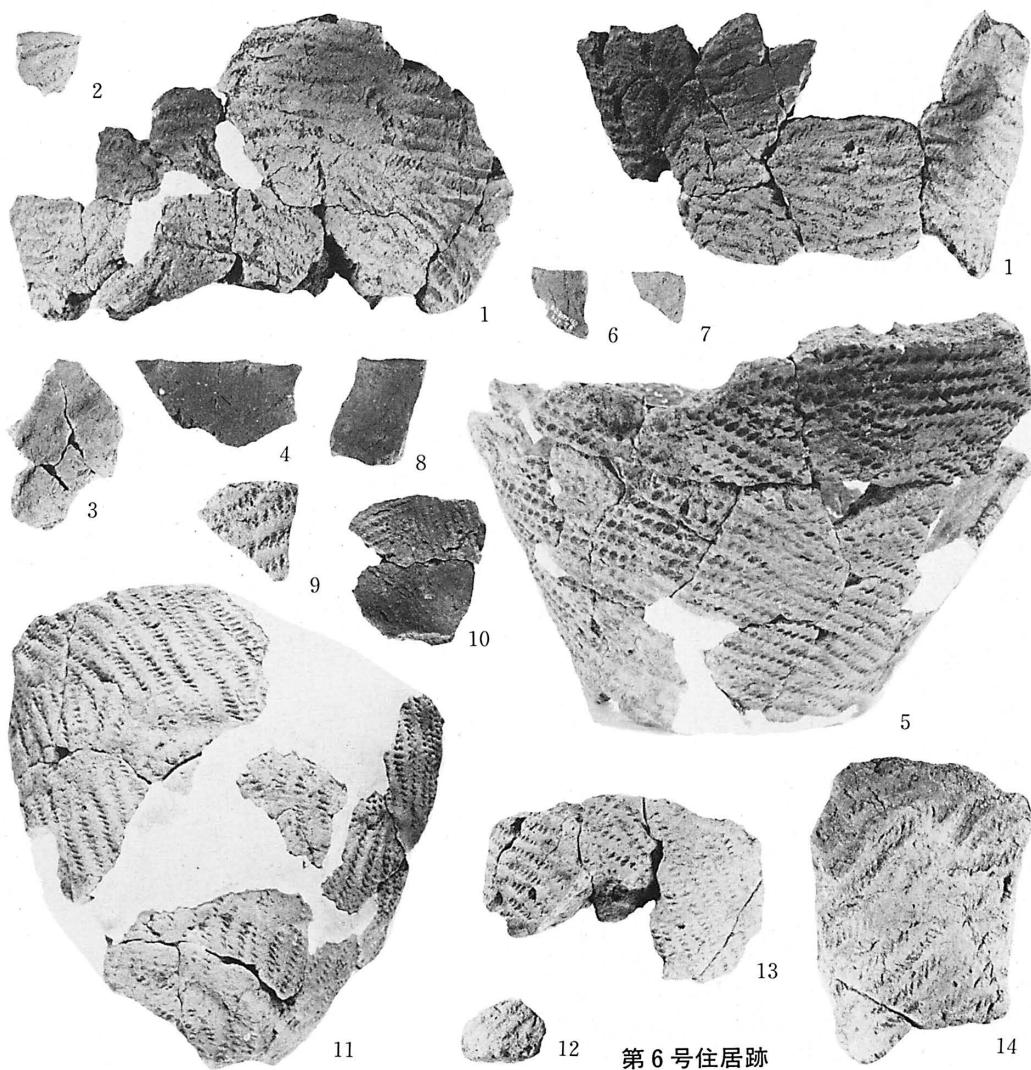
ユニット3
土器片
錐出土
状況

ユニット4 遺物出土状況(1~6)

遺物出土状況(2)



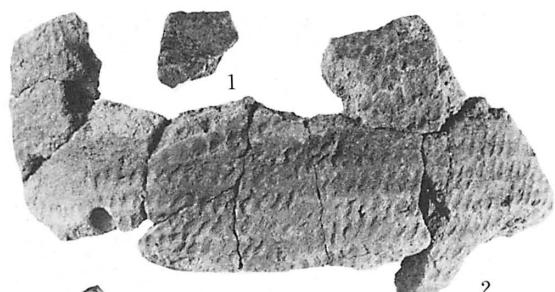
第5号住居跡



第6号住居跡

遺構内出土土器(1)

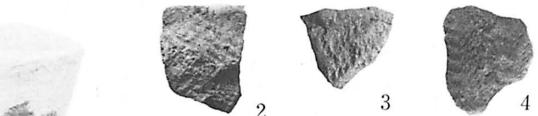
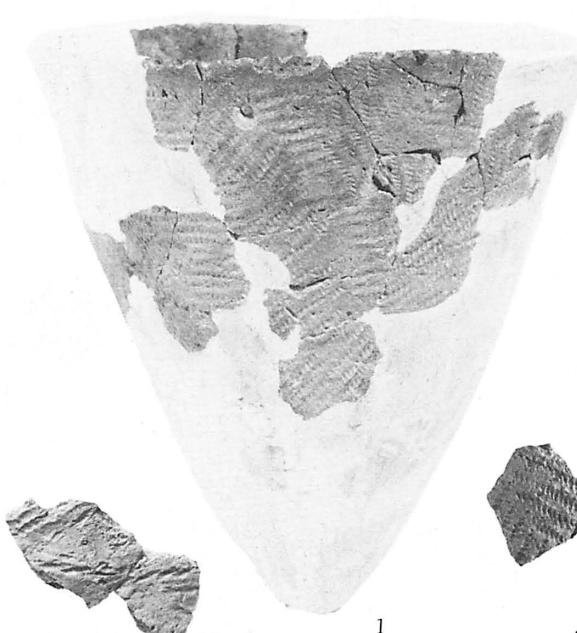
P L 10



第 7 号住居跡



第 9 号住居跡



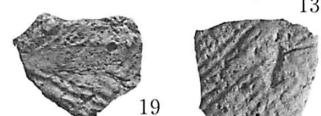
1



10



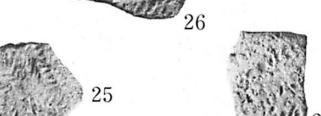
11



12



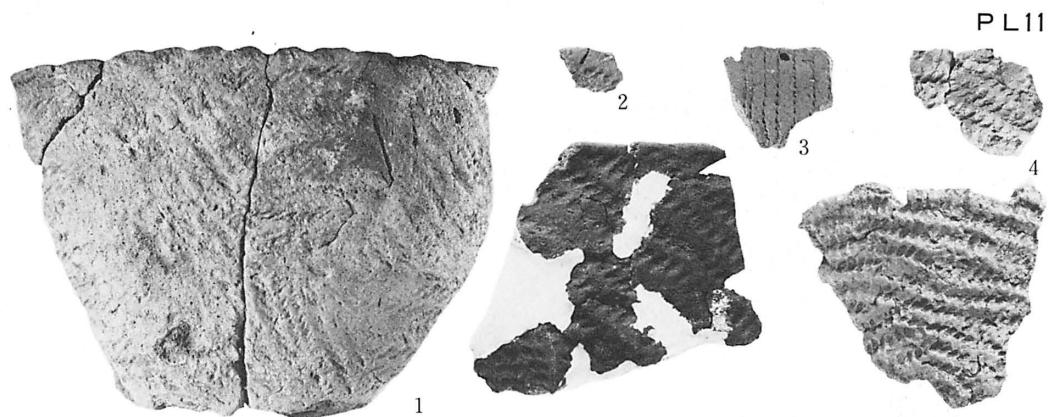
13



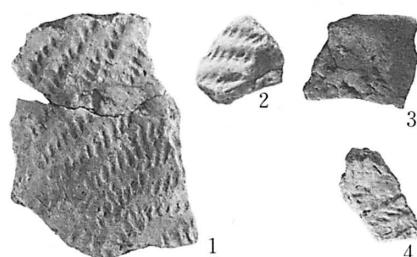
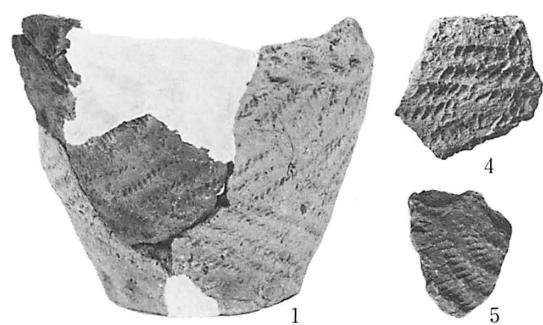
14

遺構内出土土器(2)

第 1 号土塙



第2号土塙



第4号土塙



第3号土塙



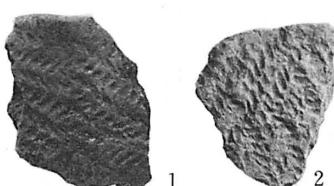
第7・8号土塙



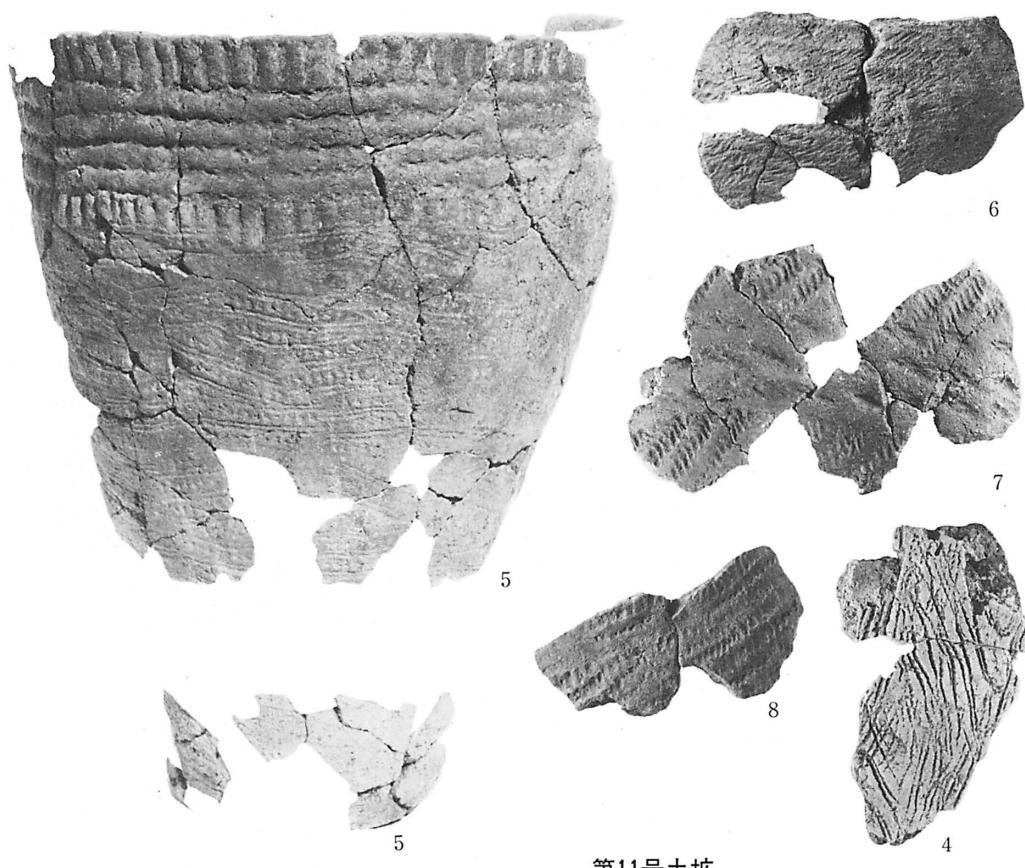
第9号土塙



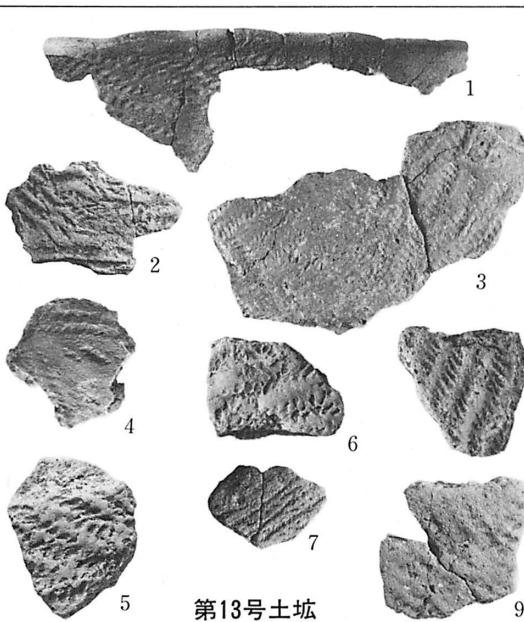
第10号土塙



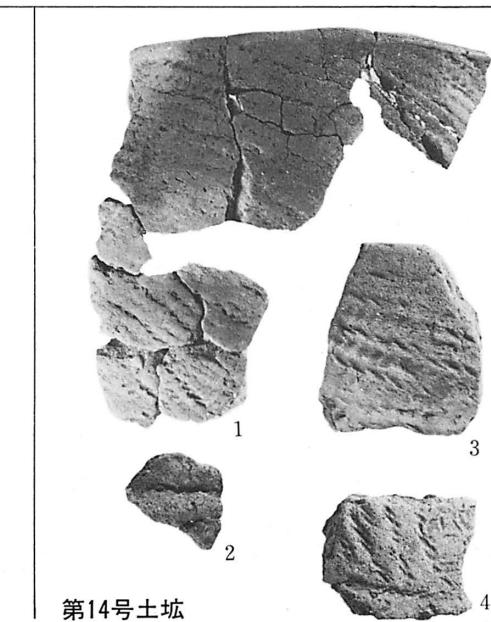
遺構内出土土器(3)



第11号土塚



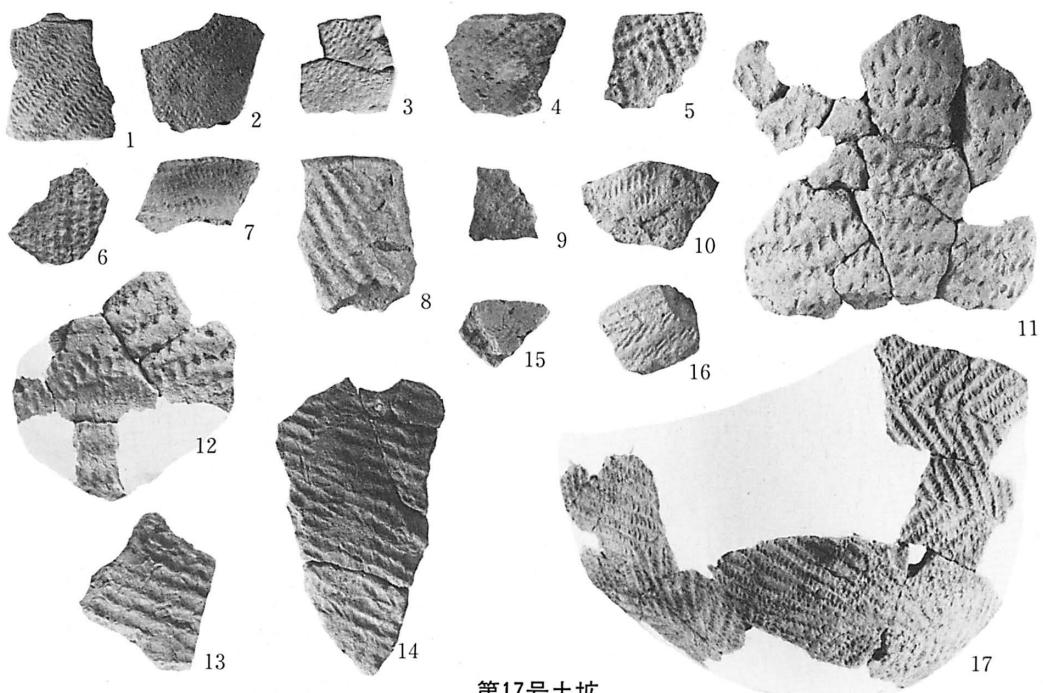
第13号土塚



第14号土塚

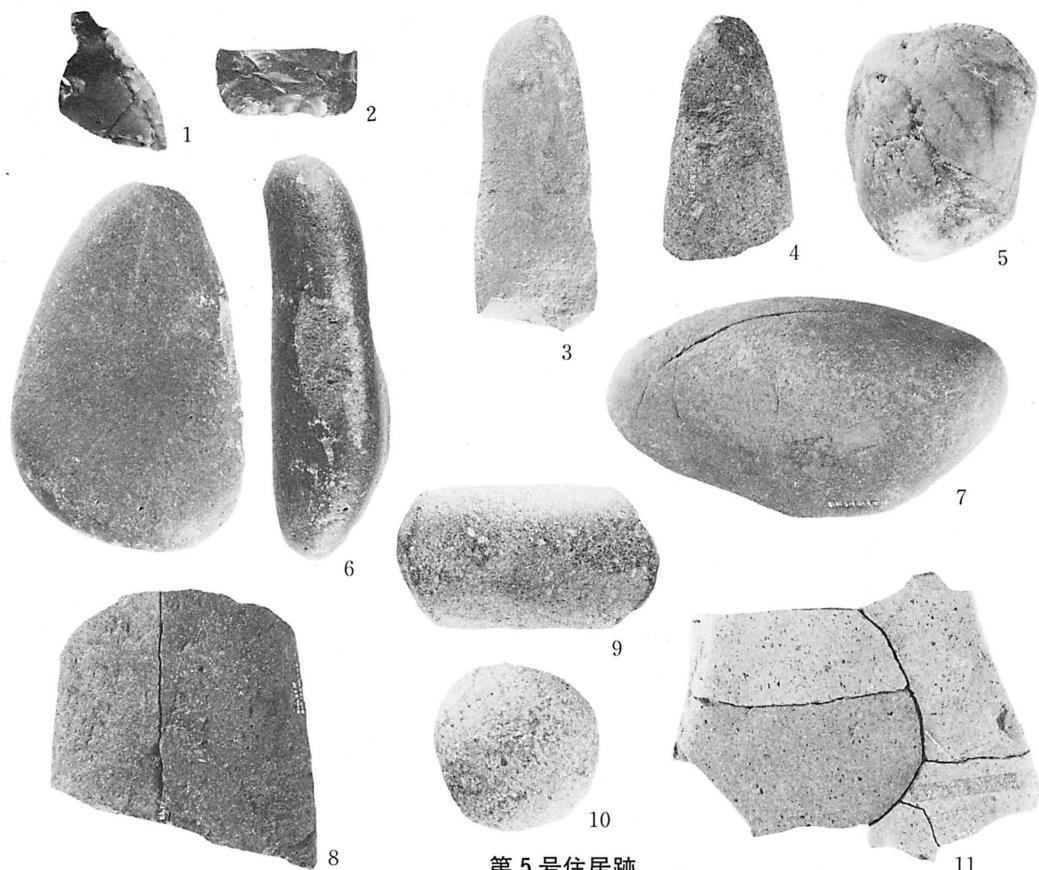
遺構内出土土器(4)

P L 13



第17号土坡

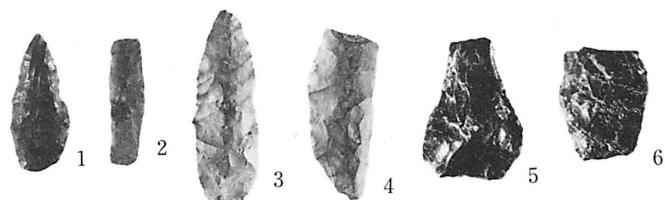
P L 14



第5号住居跡



第6号住居跡



第8号住居跡

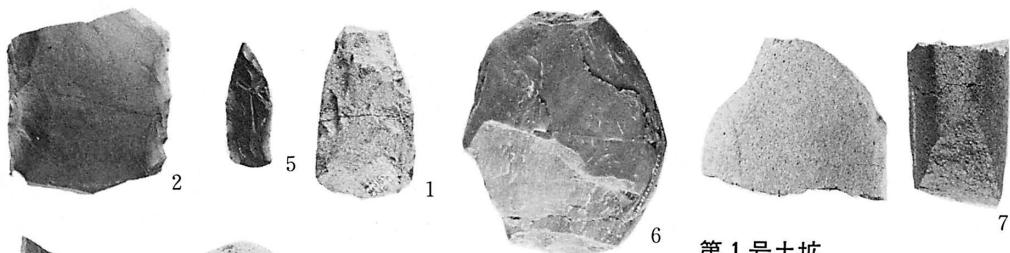
遺構内出土石器(1)



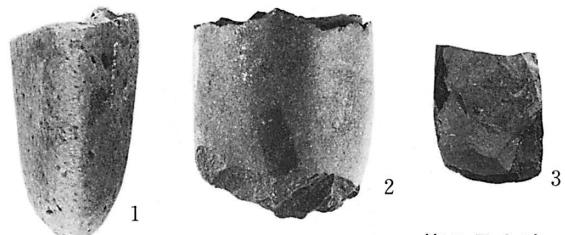
第9号住居跡

遺構内出土石器(2)

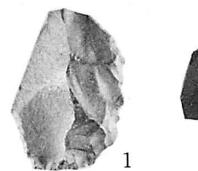
P L 16



第1号土塙



第3号土塙



第6号土塙



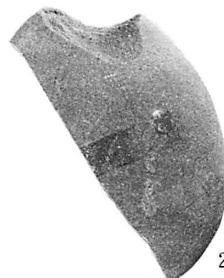
第7号土塙



第9号土塙



第10号土塙



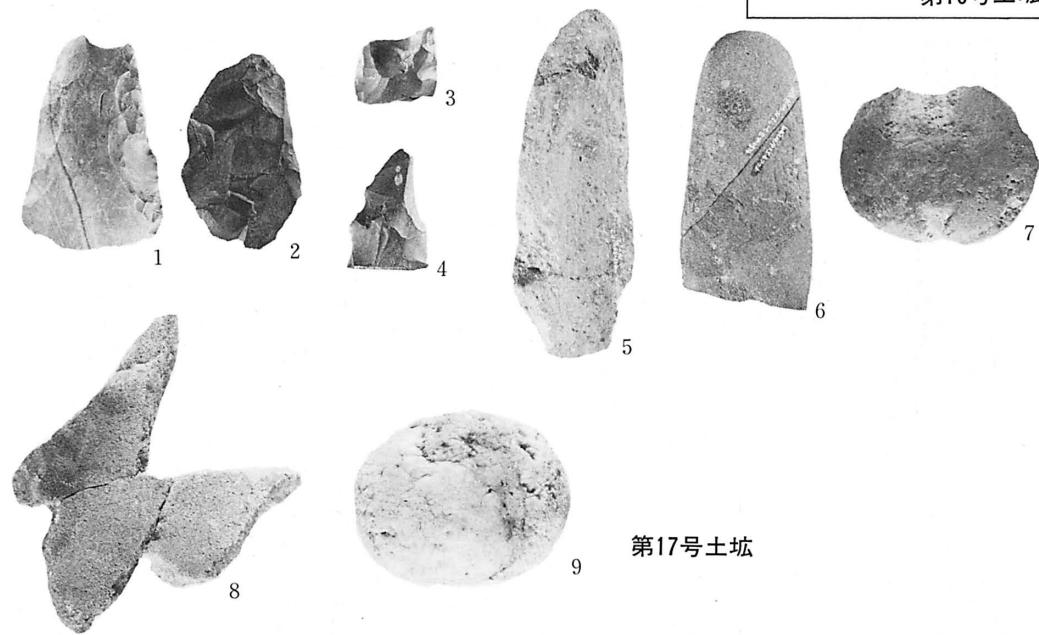
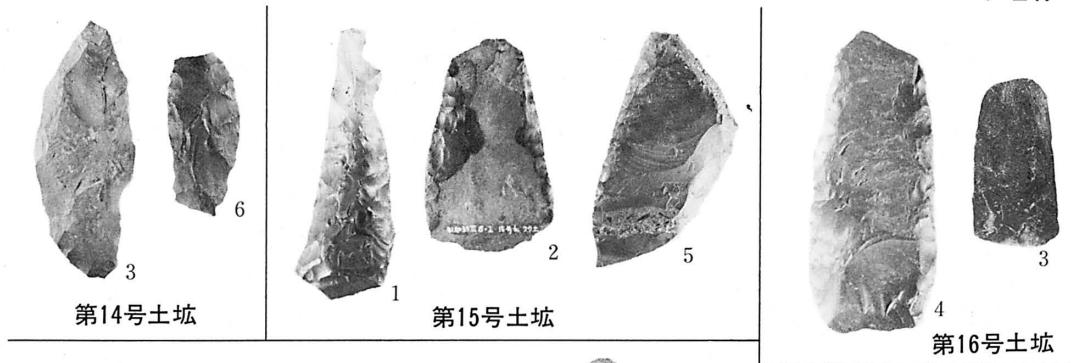
第11号土塙



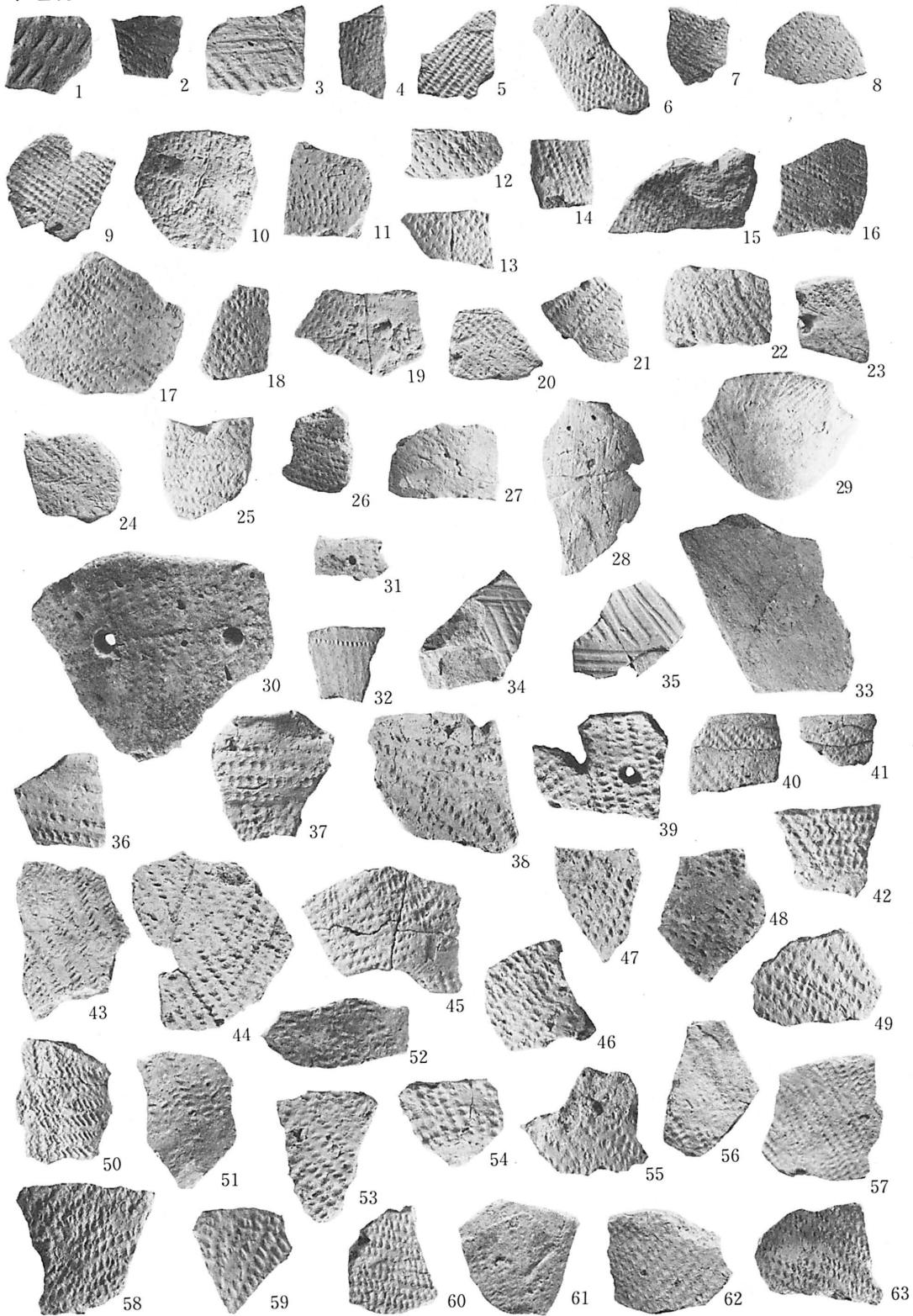
第13・14号土塙

遺構内出土石器(3)

P L17

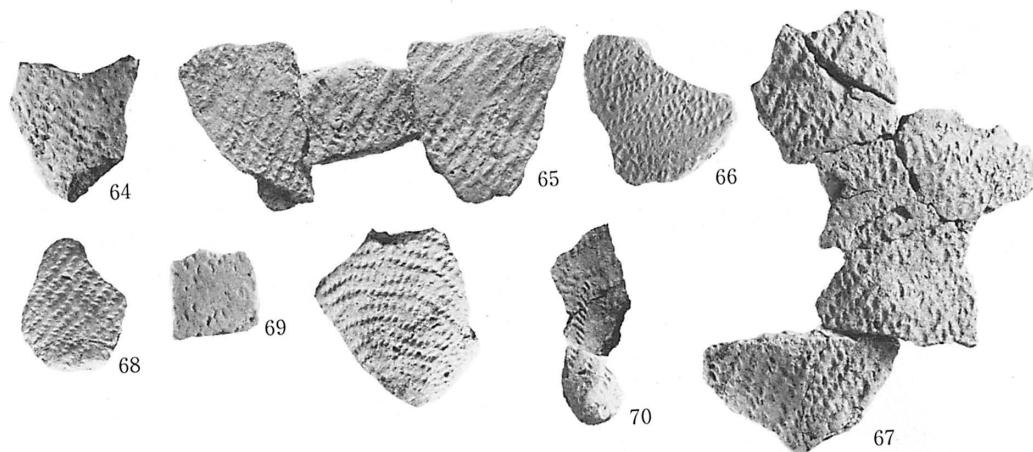


P L 18



遺構外出土土器(1)

P L 19



P L 20



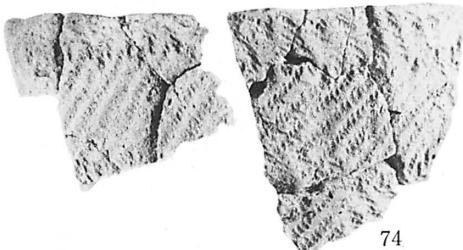
72



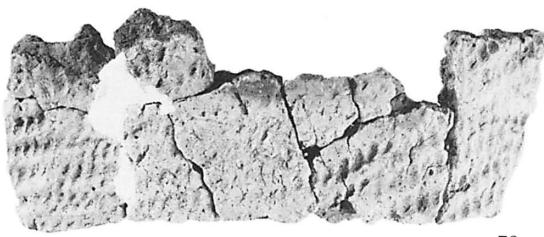
73



73



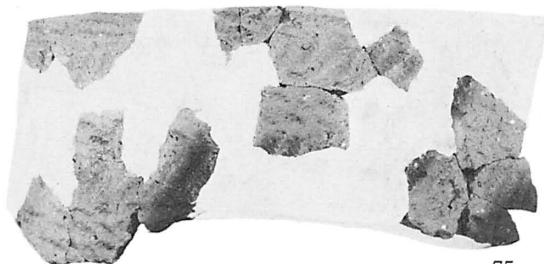
74



73



13



75

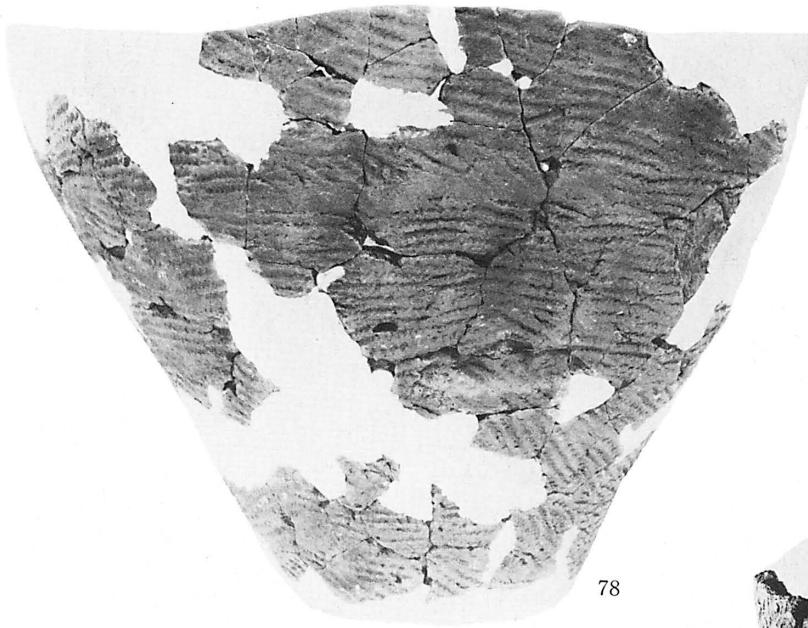


77



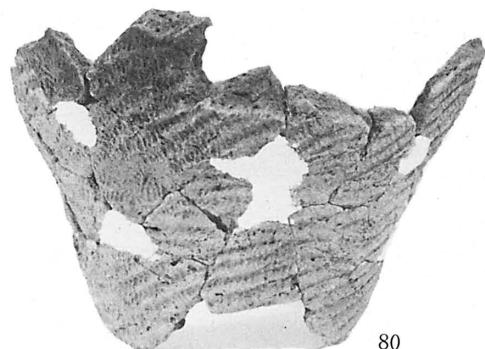
76

遺構外出土土器(3)

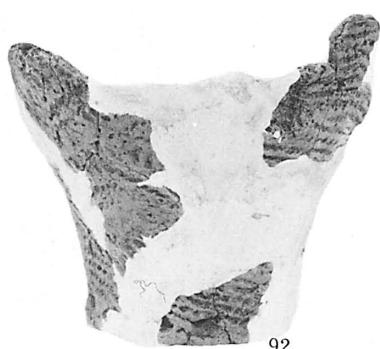


遺構外出土土器(4)

P L 22



80



92



83



81



85



86



87



88



89



90



91



93



94



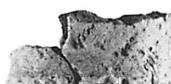
95



96



97



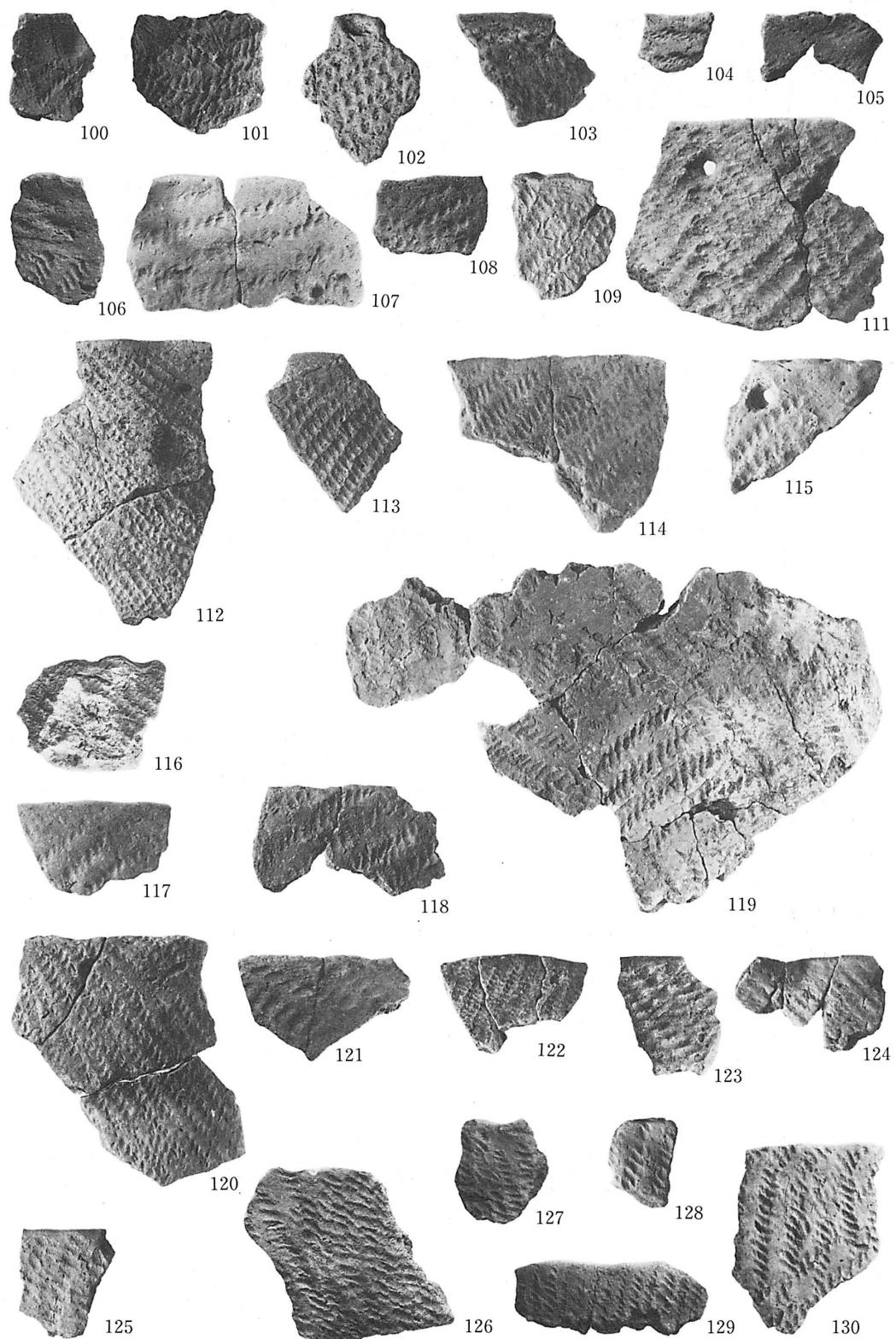
98



99

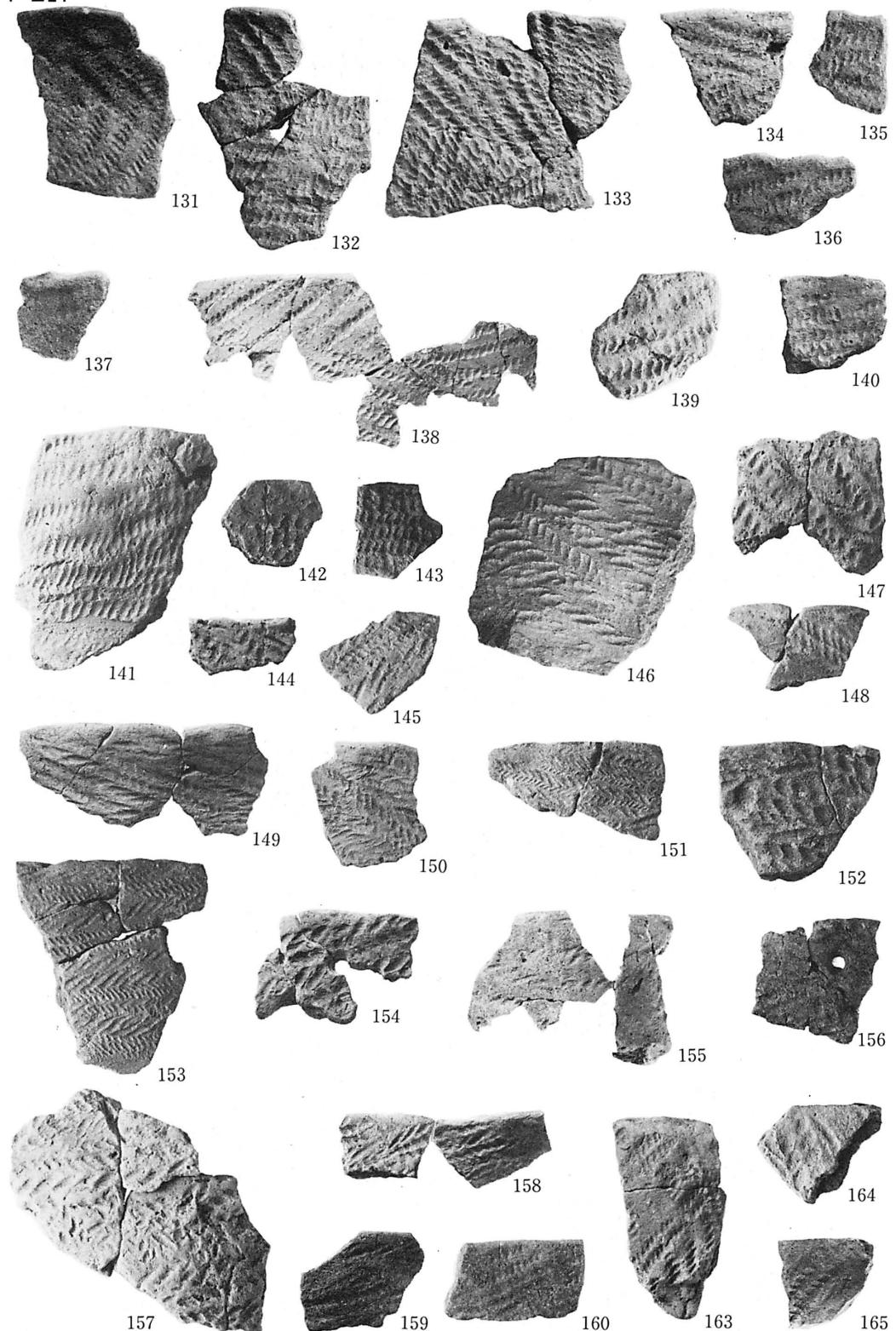
遺構外出土土器(5)

P L 23



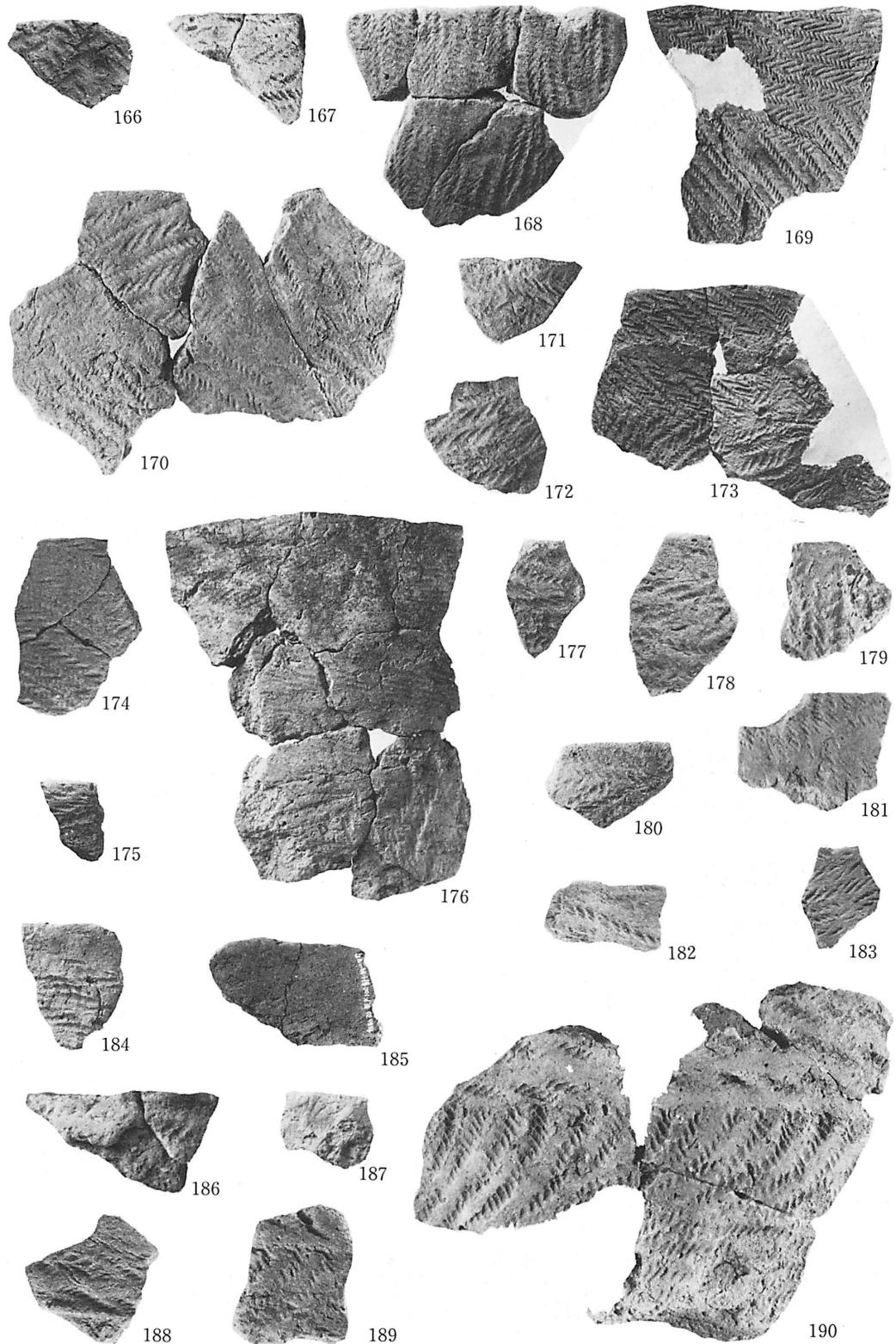
遺構外出土土器(6)

P L 24

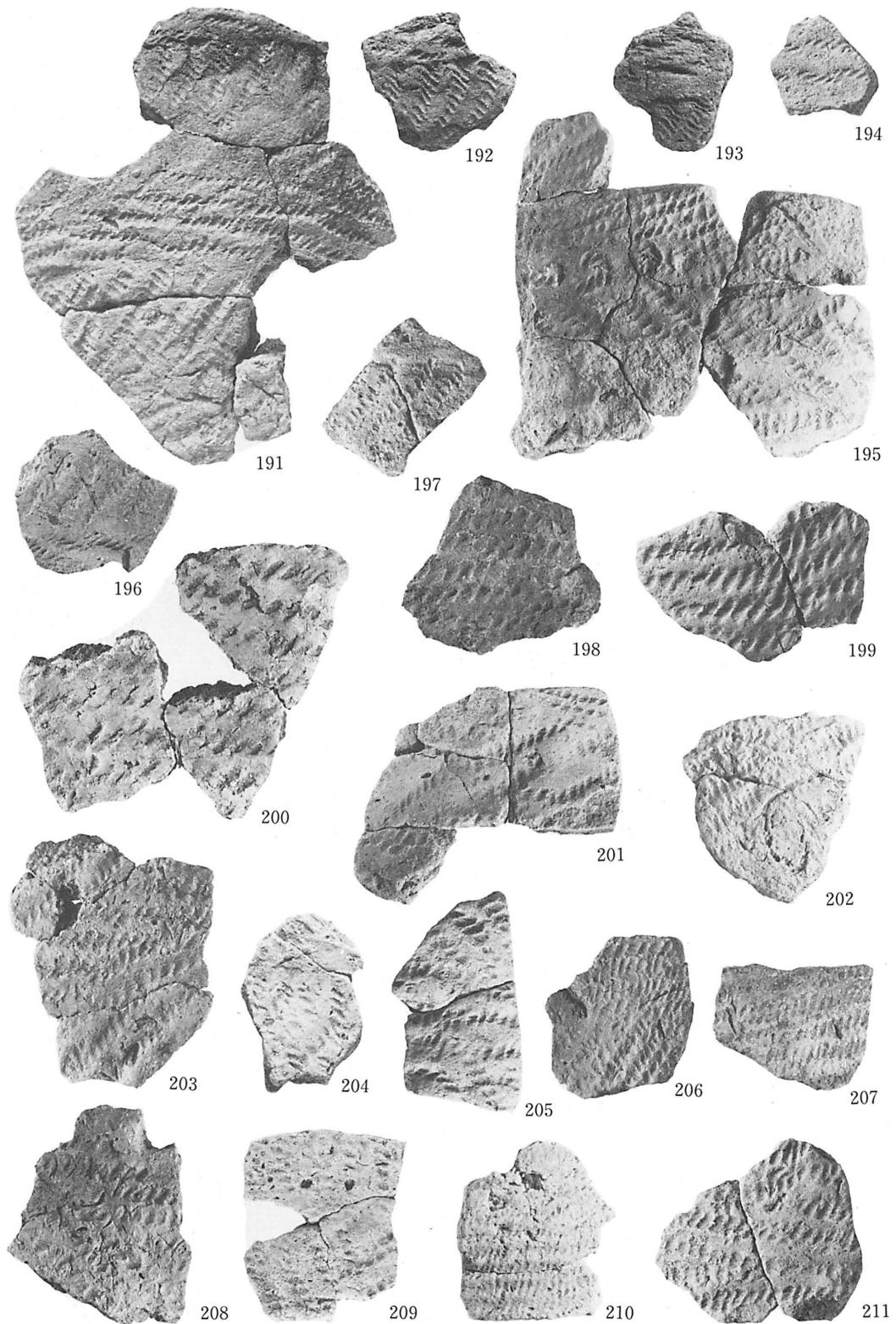


遺構外出土土器(7)

P L 25

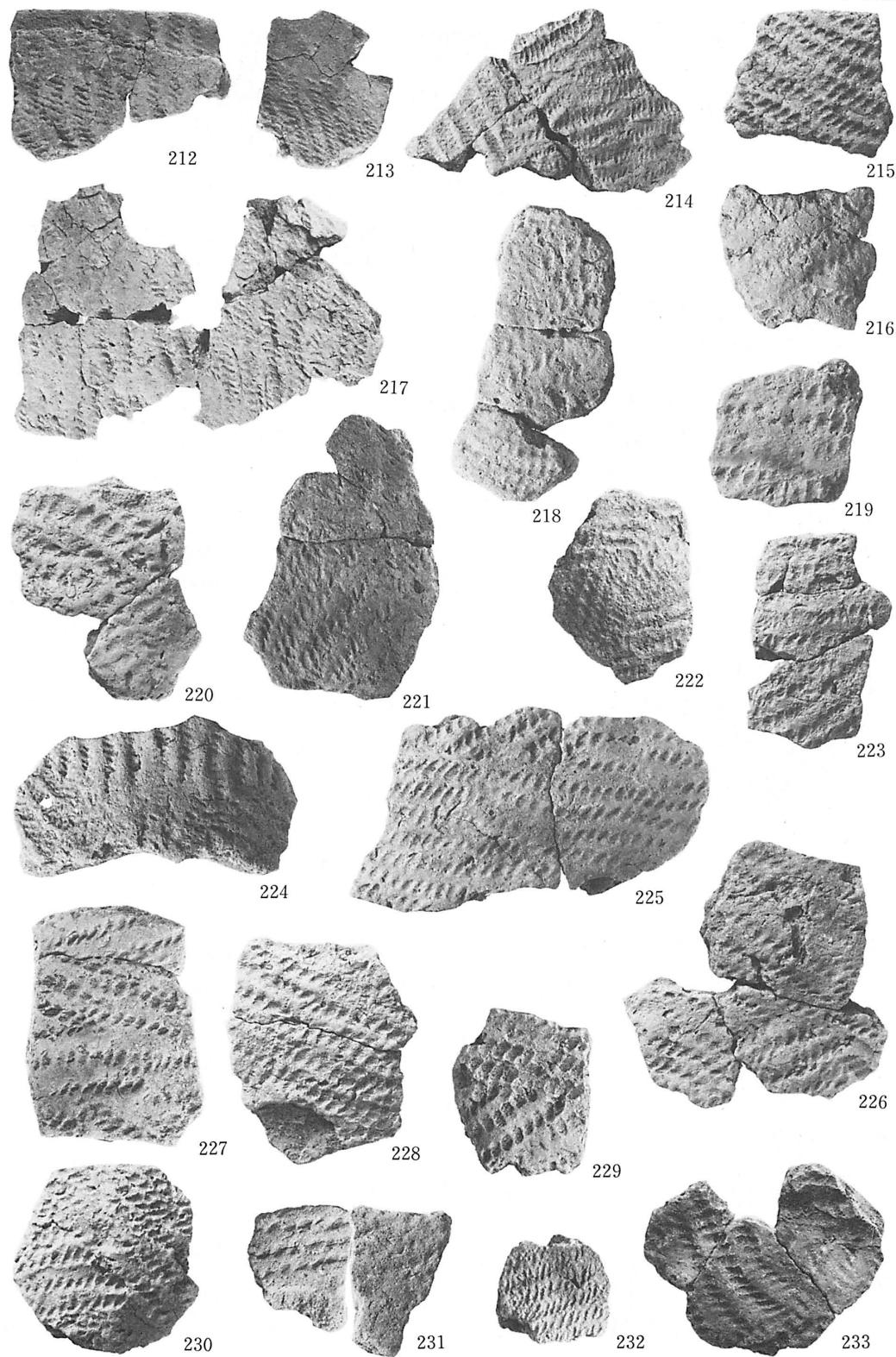


遺構外出土土器(8)



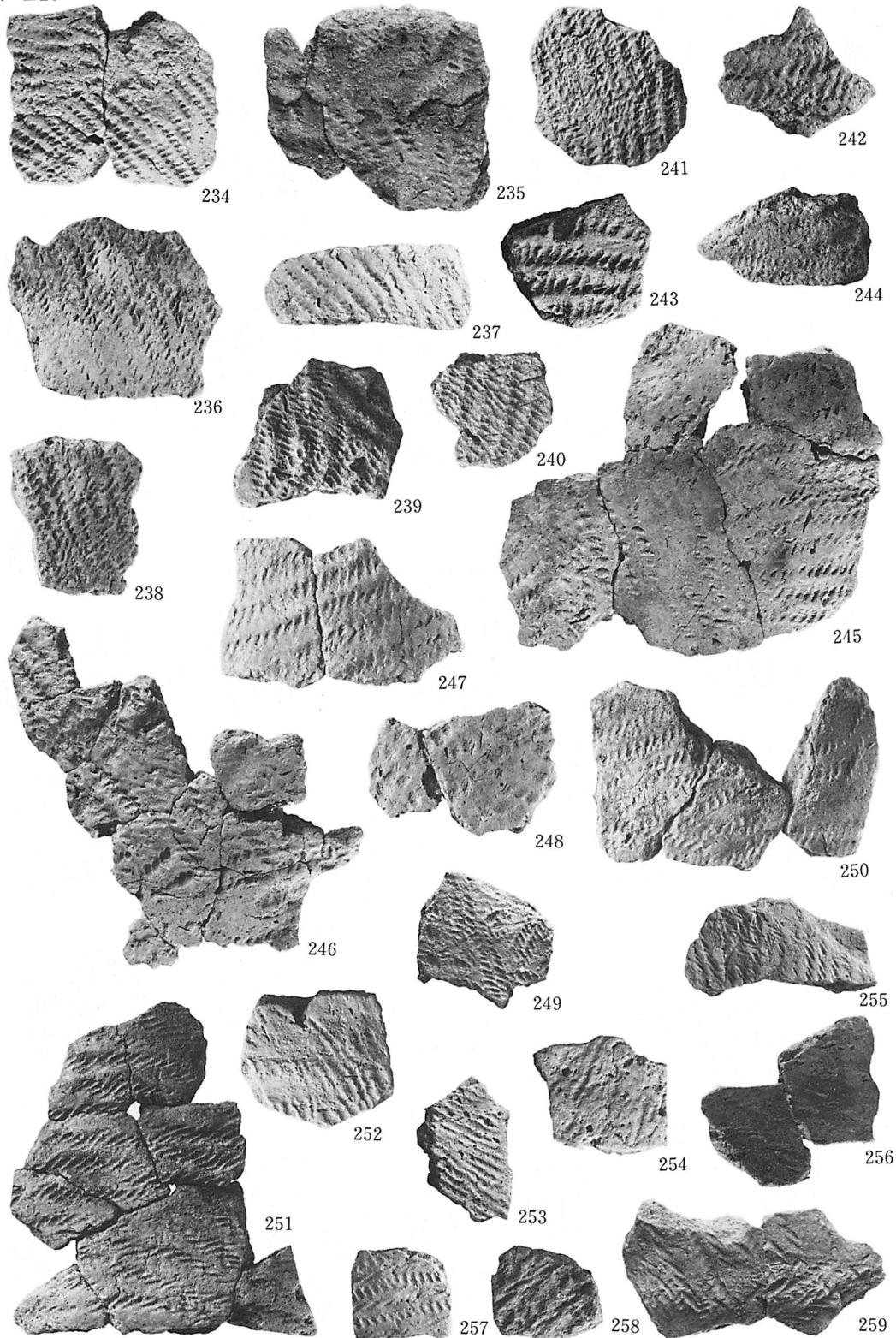
遺構外出土土器(9)

P L 27

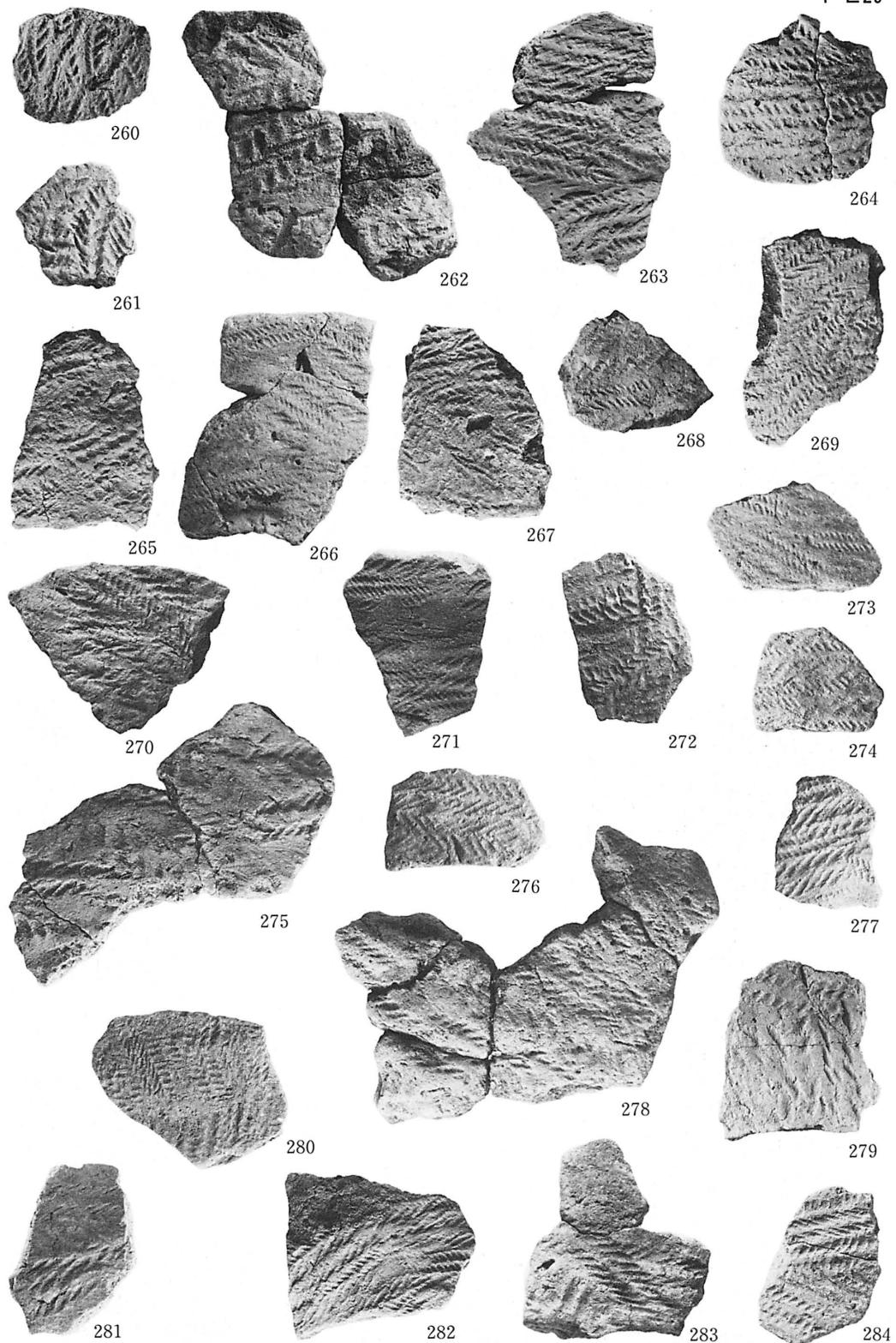


遺構外出土土器(10)

P L 28

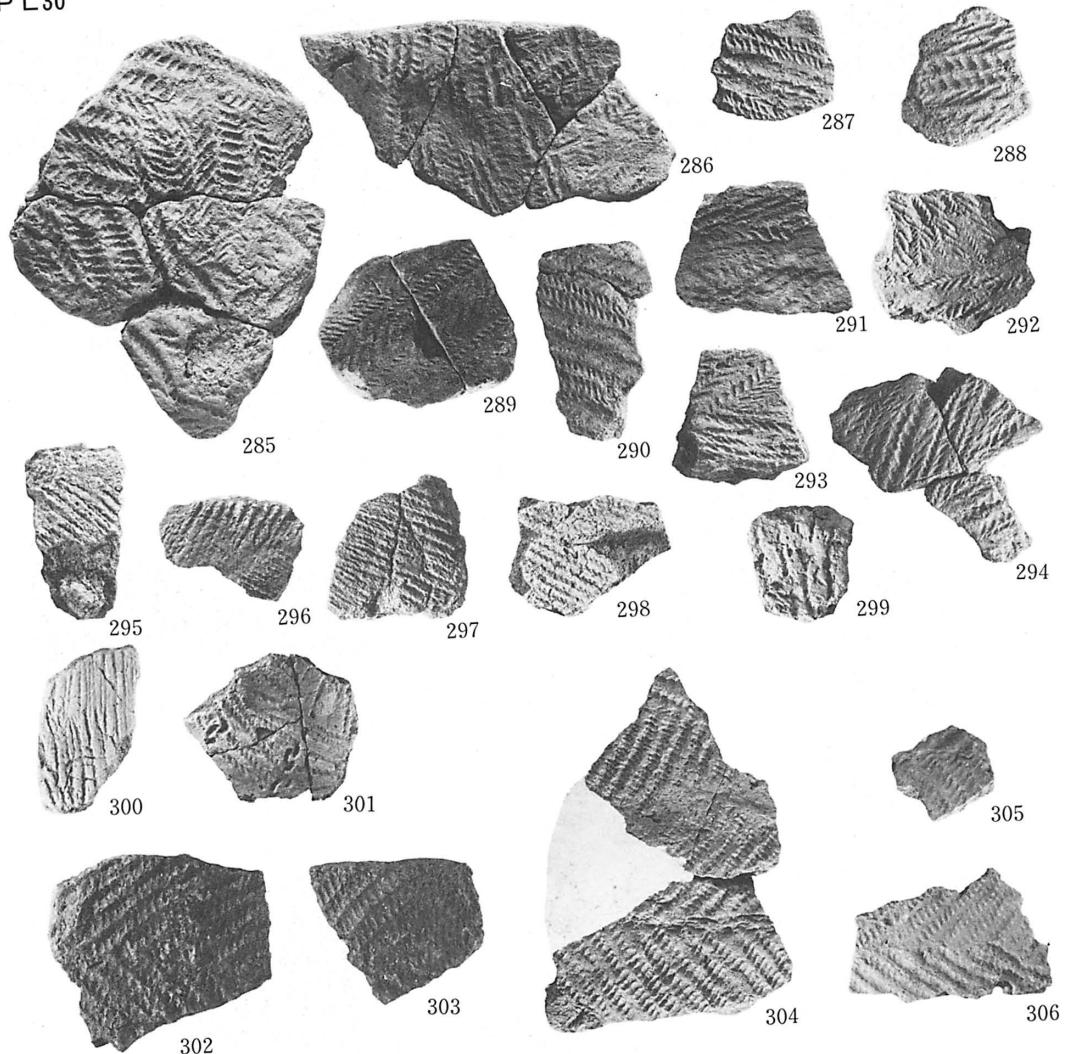


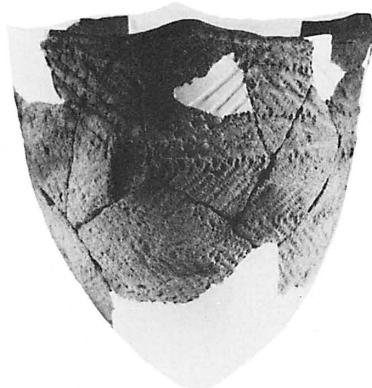
遺構外出土土器(11)



遺構外出土土器(12)

P L 30

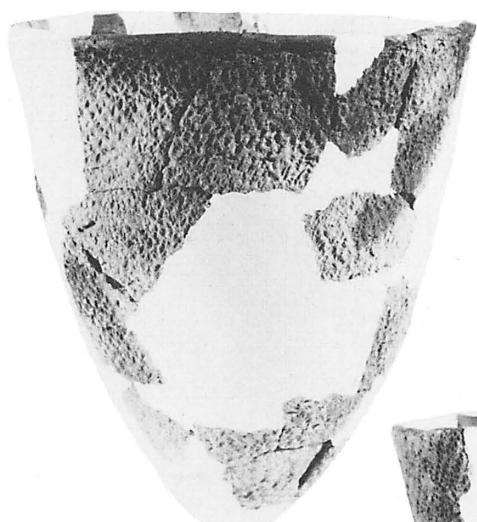




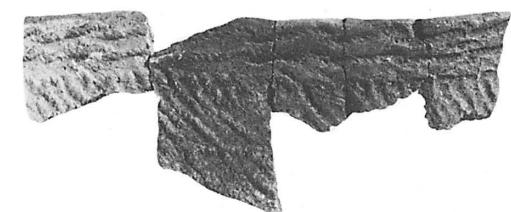
307



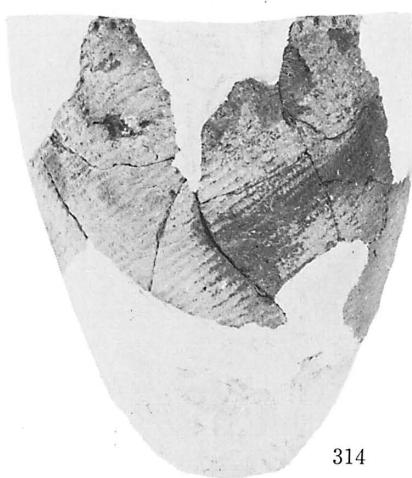
308



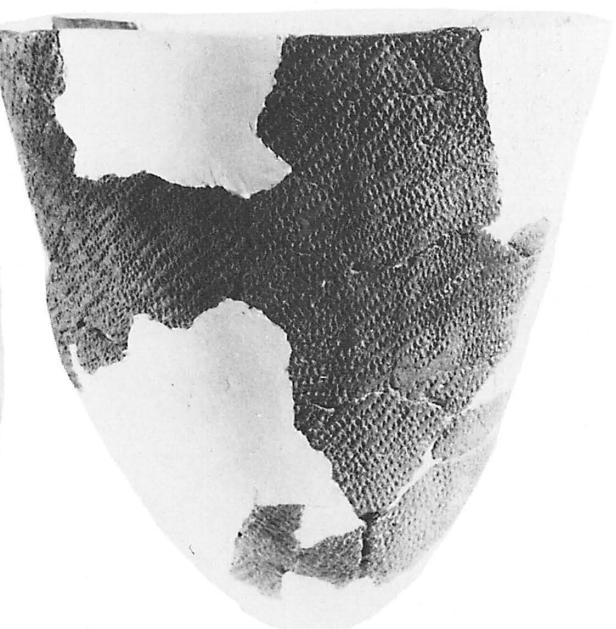
309



312



314



313

遺構外出土土器(14)

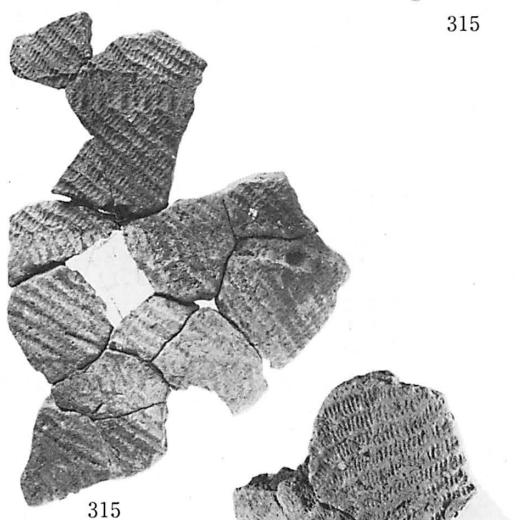
P L 32



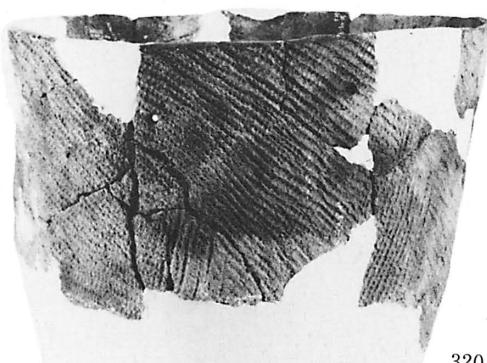
315



316



315



320



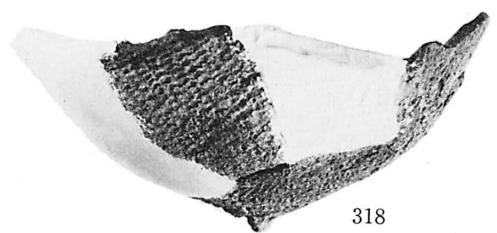
319



317



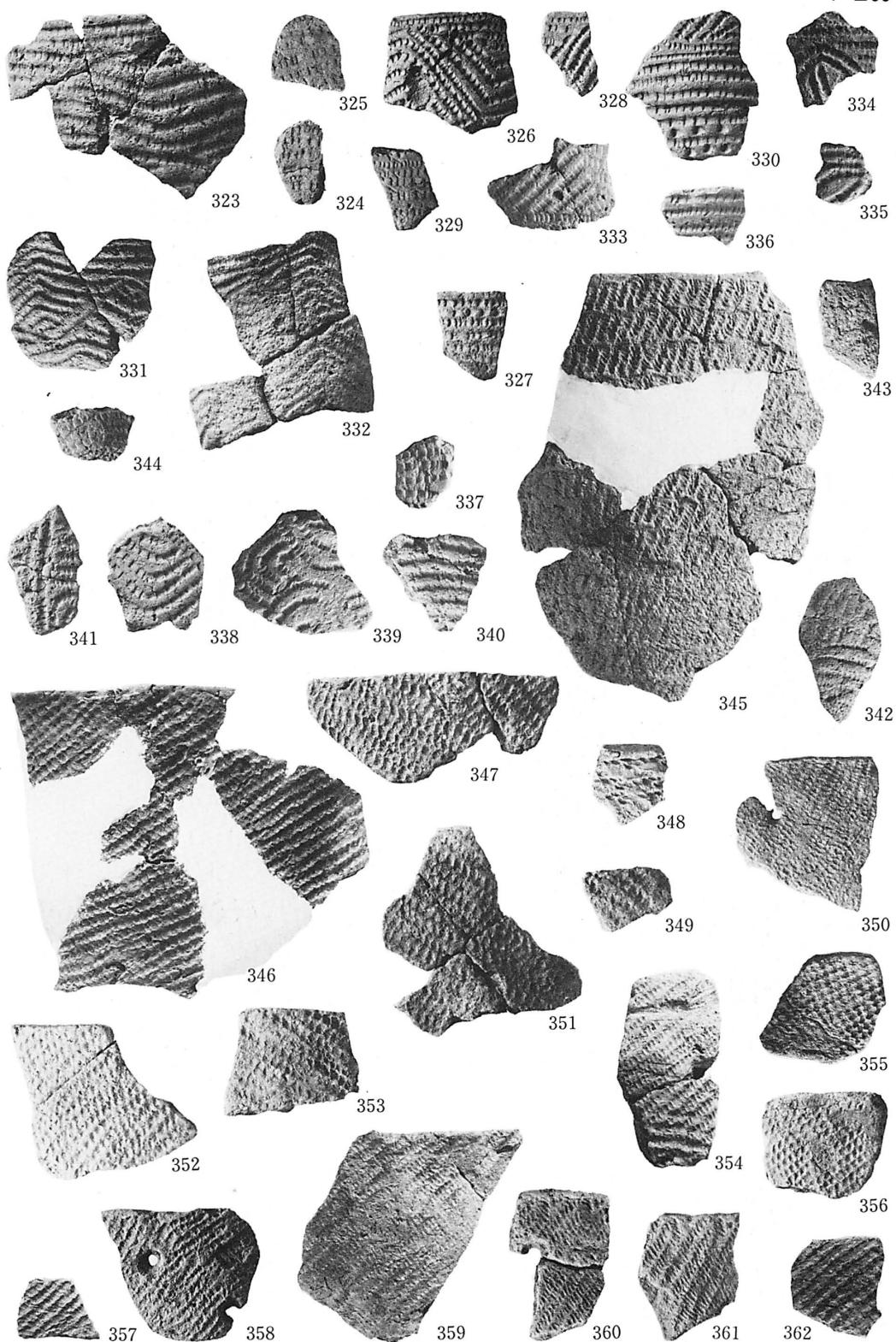
321



318

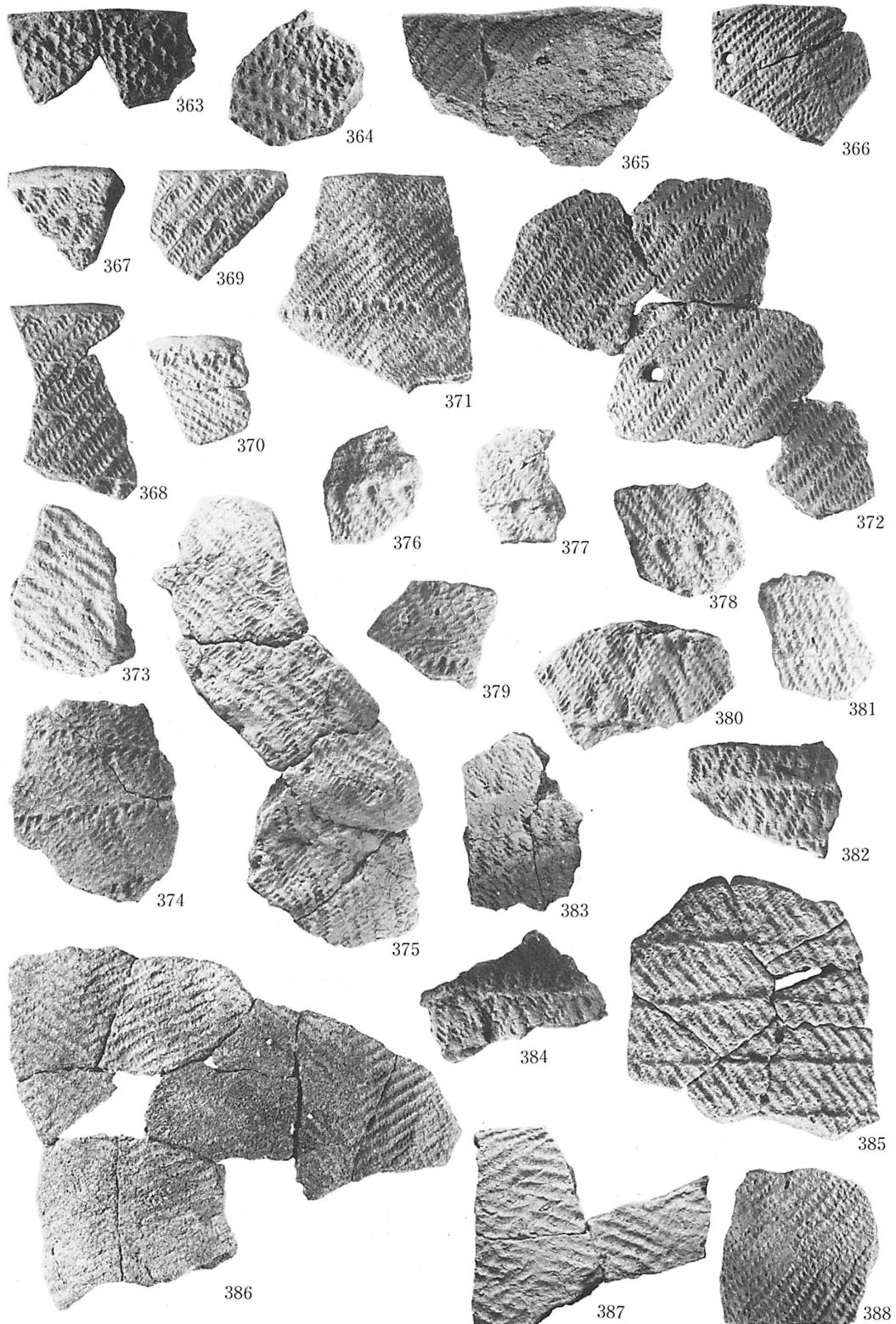
遺構外出土土器(15)

P L 33



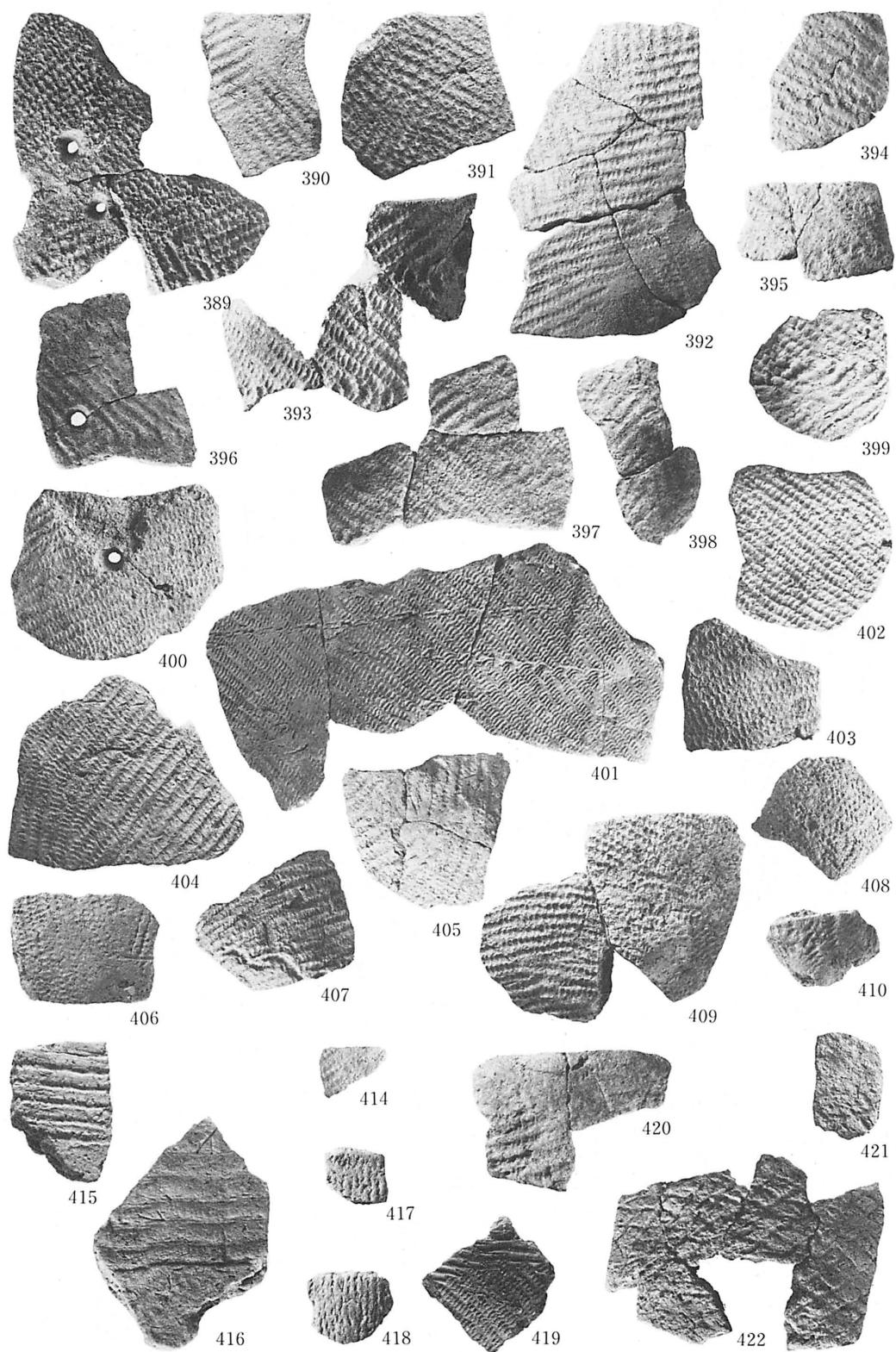
遺構外出土土器(16)

P L34



遺構外出土土器(17)

P L 35



遺構外出土土器(18)

P L 36



1



2



3



4



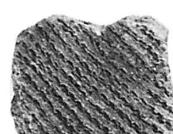
5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18

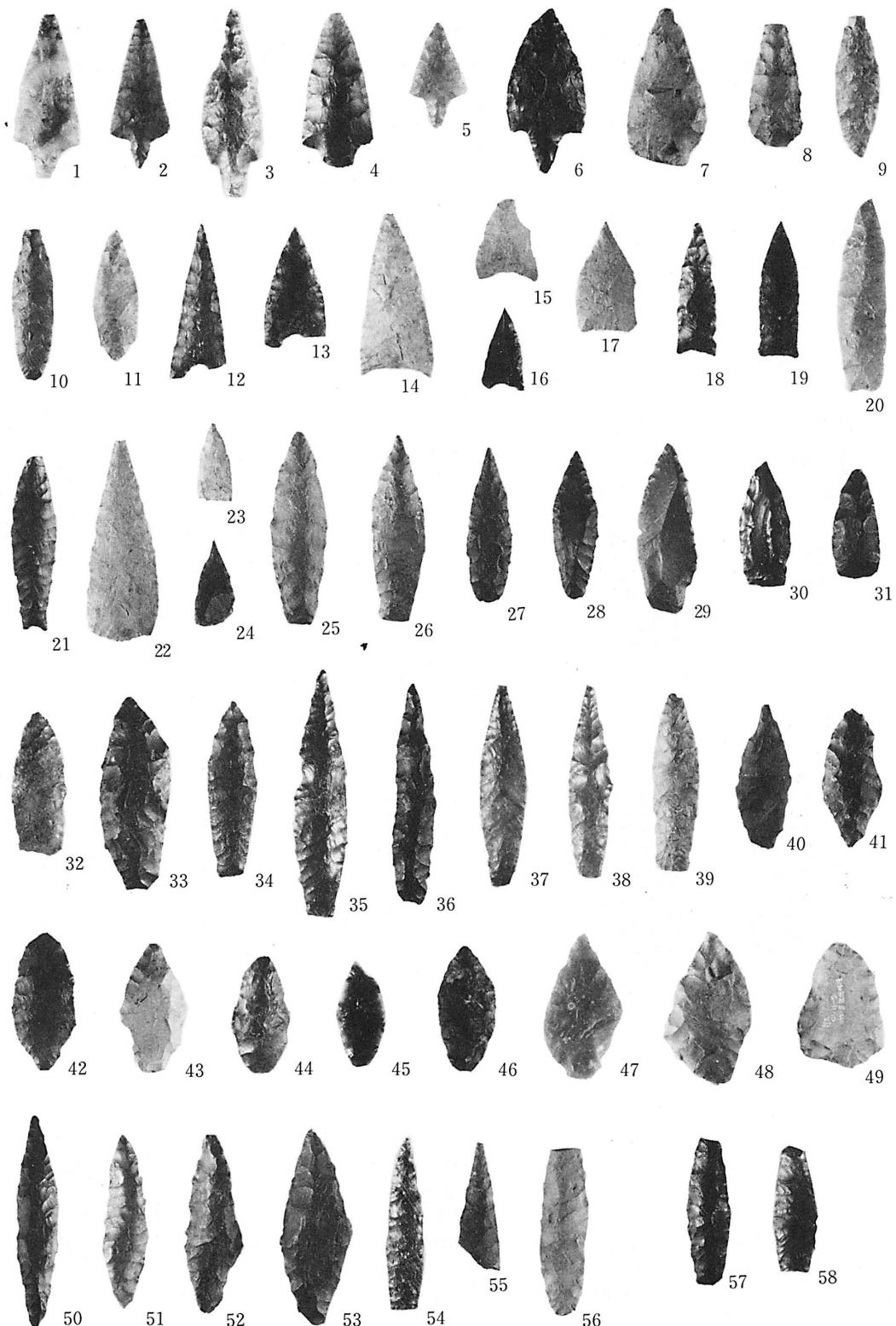


19



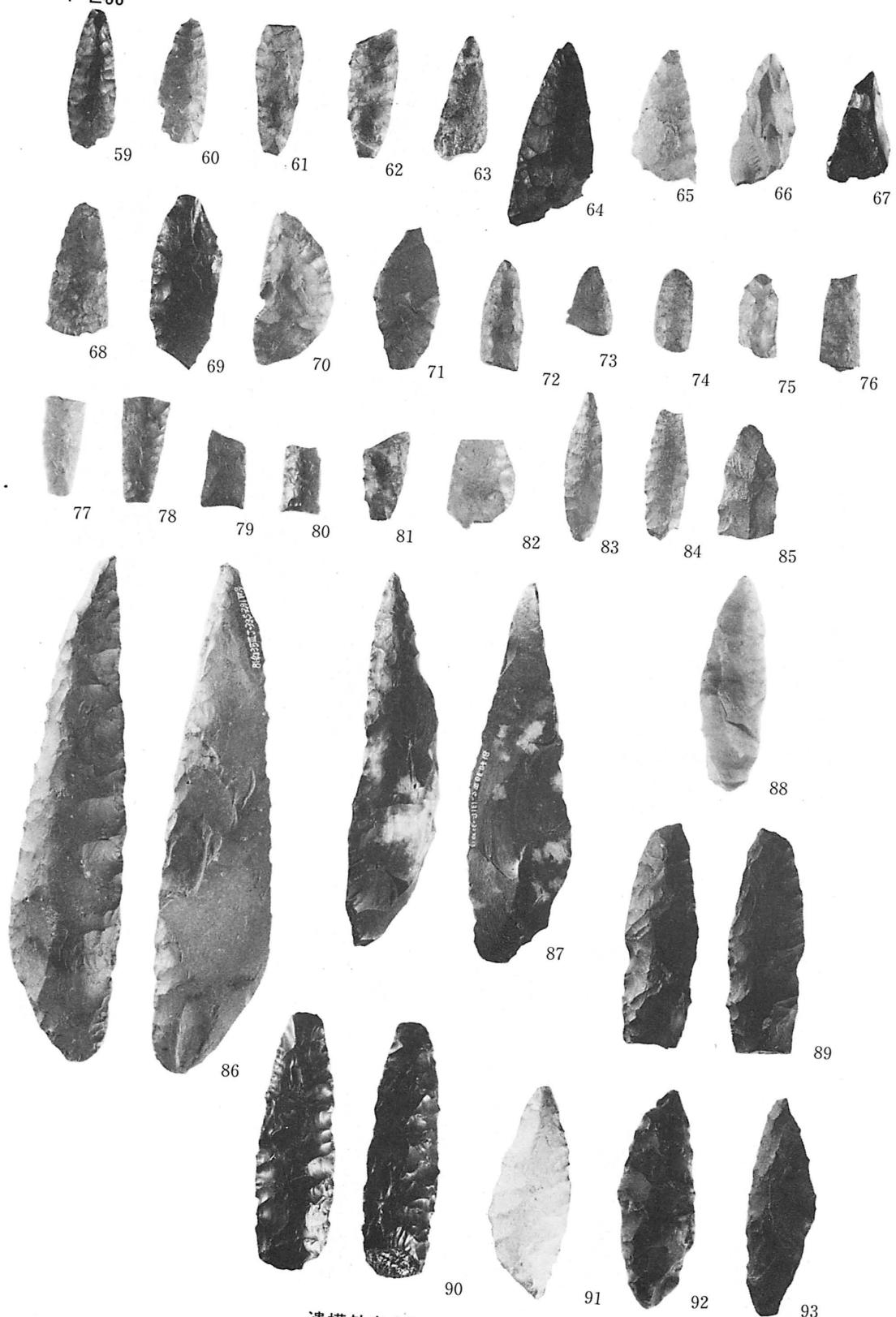
20

土器片錐



遺構外出土石器(1)

P L 38



遺構外出土石器(2)



94

95

96

97



98

99

100

101

102



103

104

105

106

102



107

108

109

110

111

112



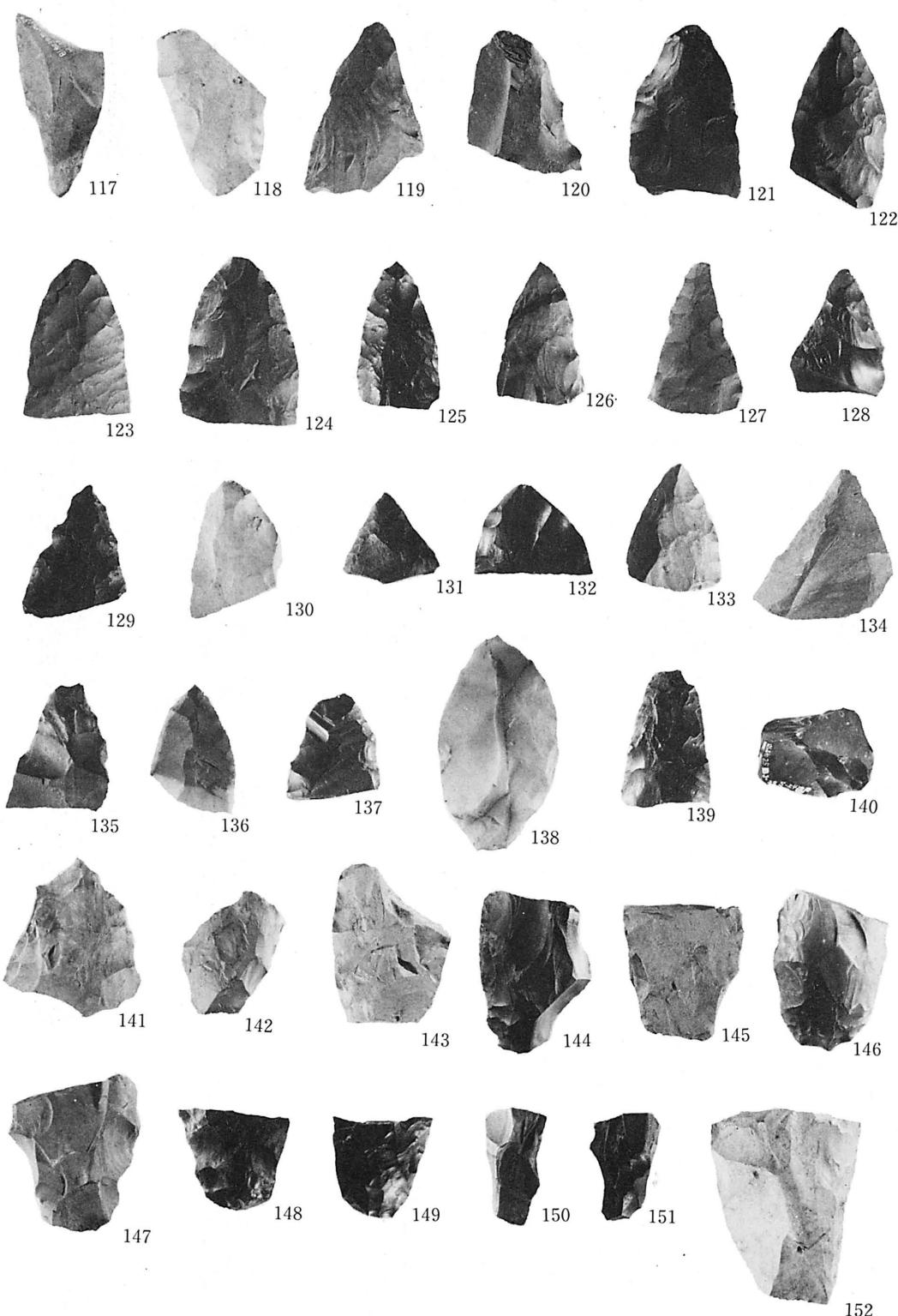
113

114

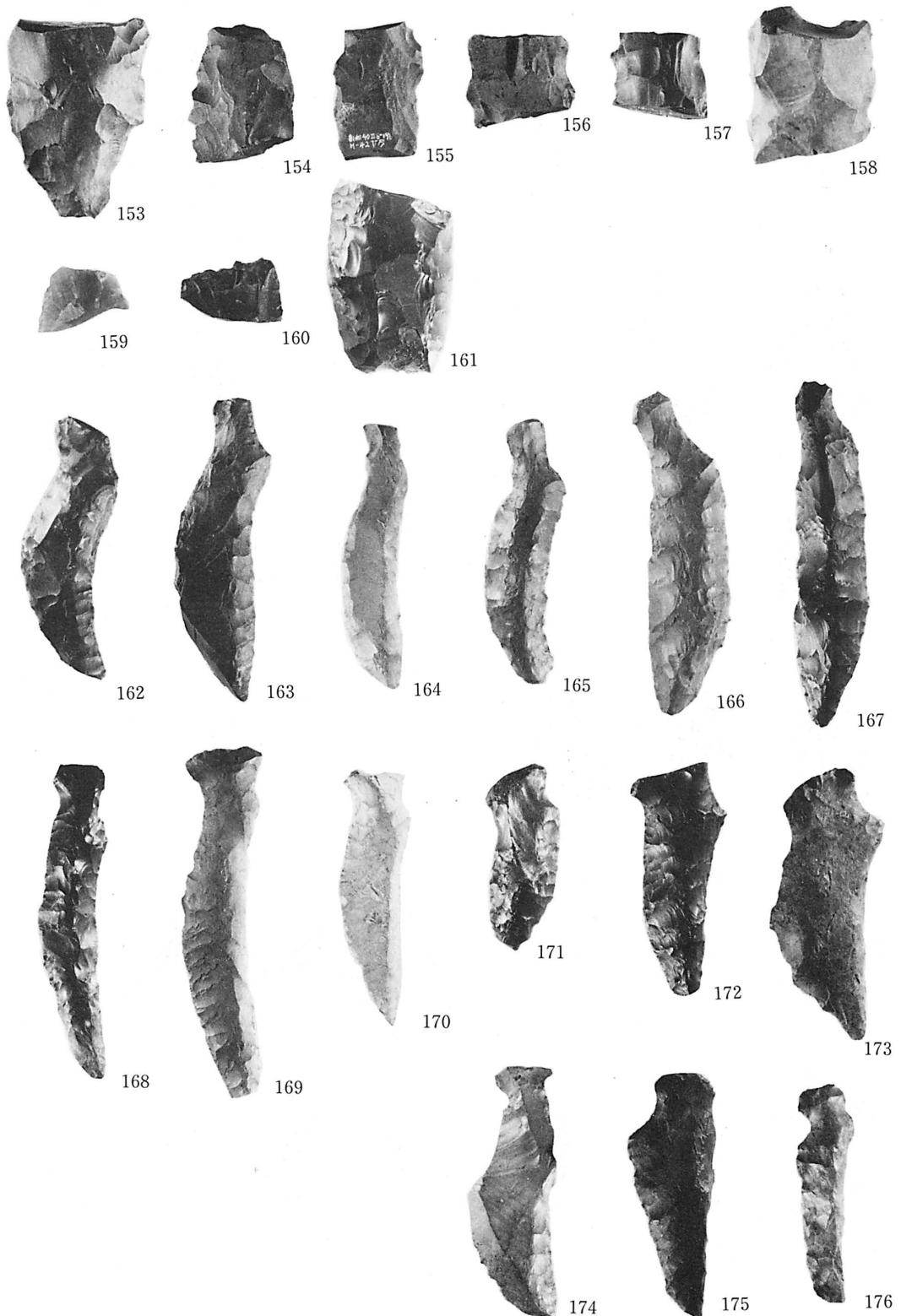
115

116

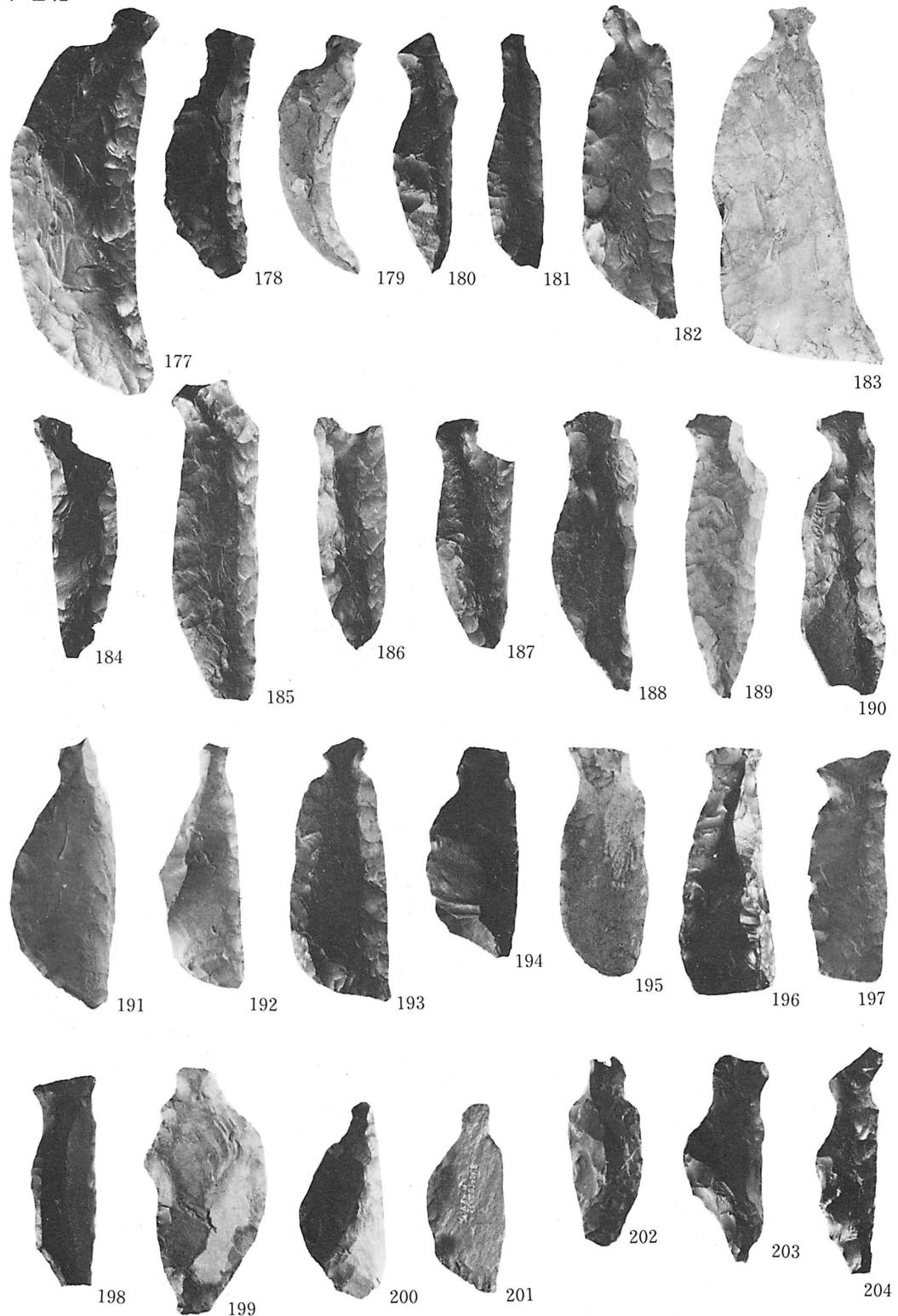
遺構外出土石器(3)



遺構外出土石器(4)

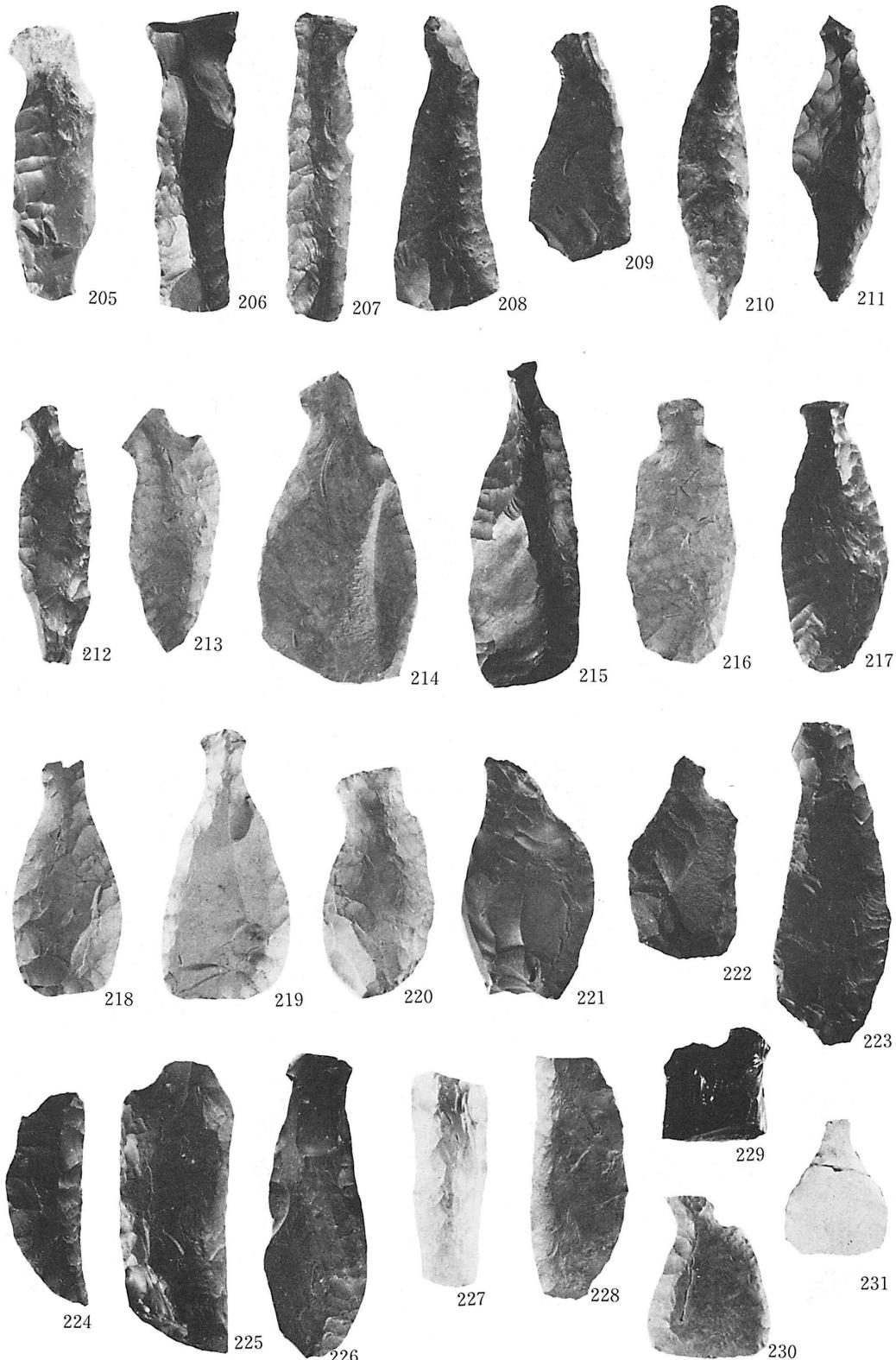


遺構外出土石器(5)



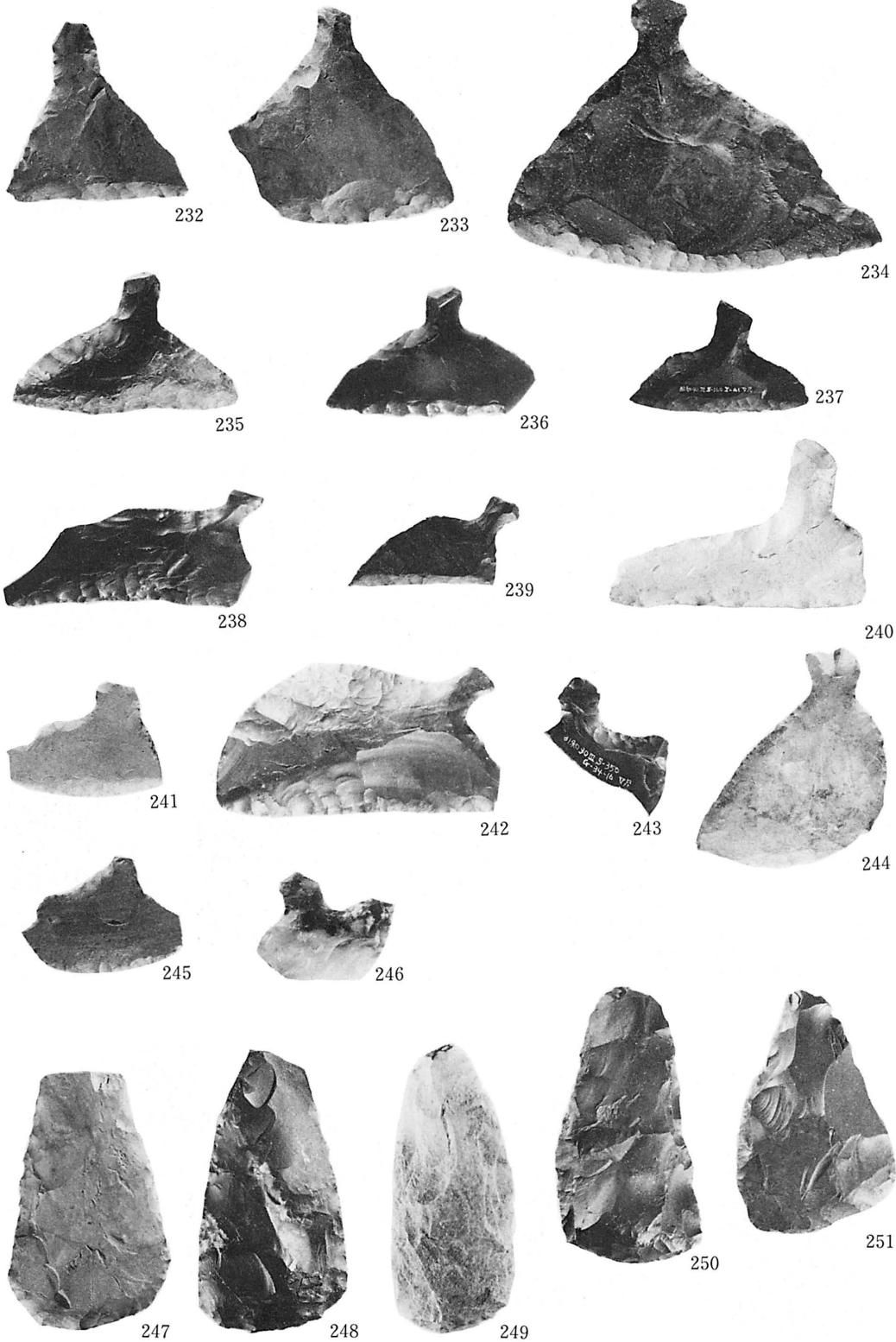
遺構外出土石器(6)

P L 43

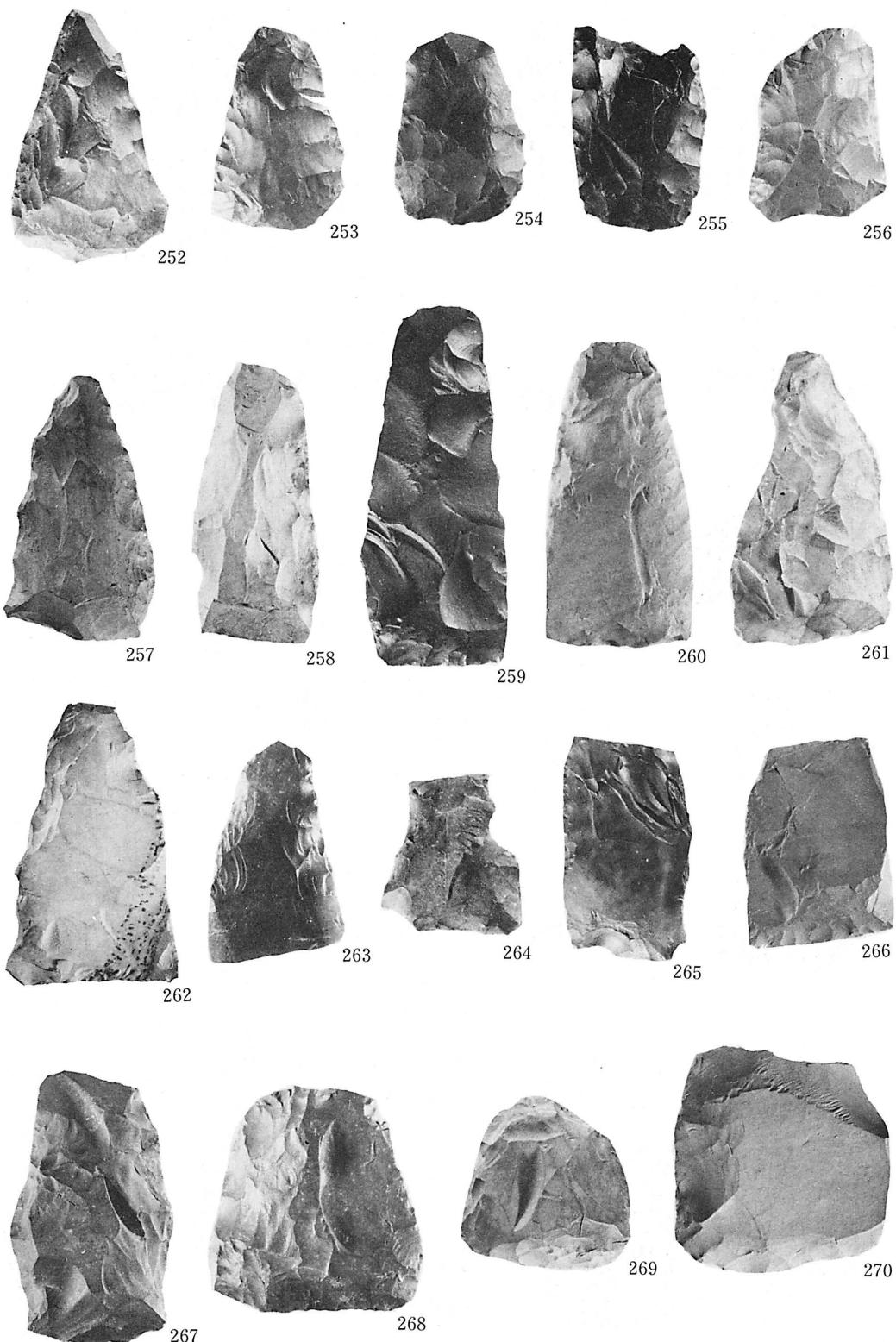


遺構外出土石器(7)

P L 44

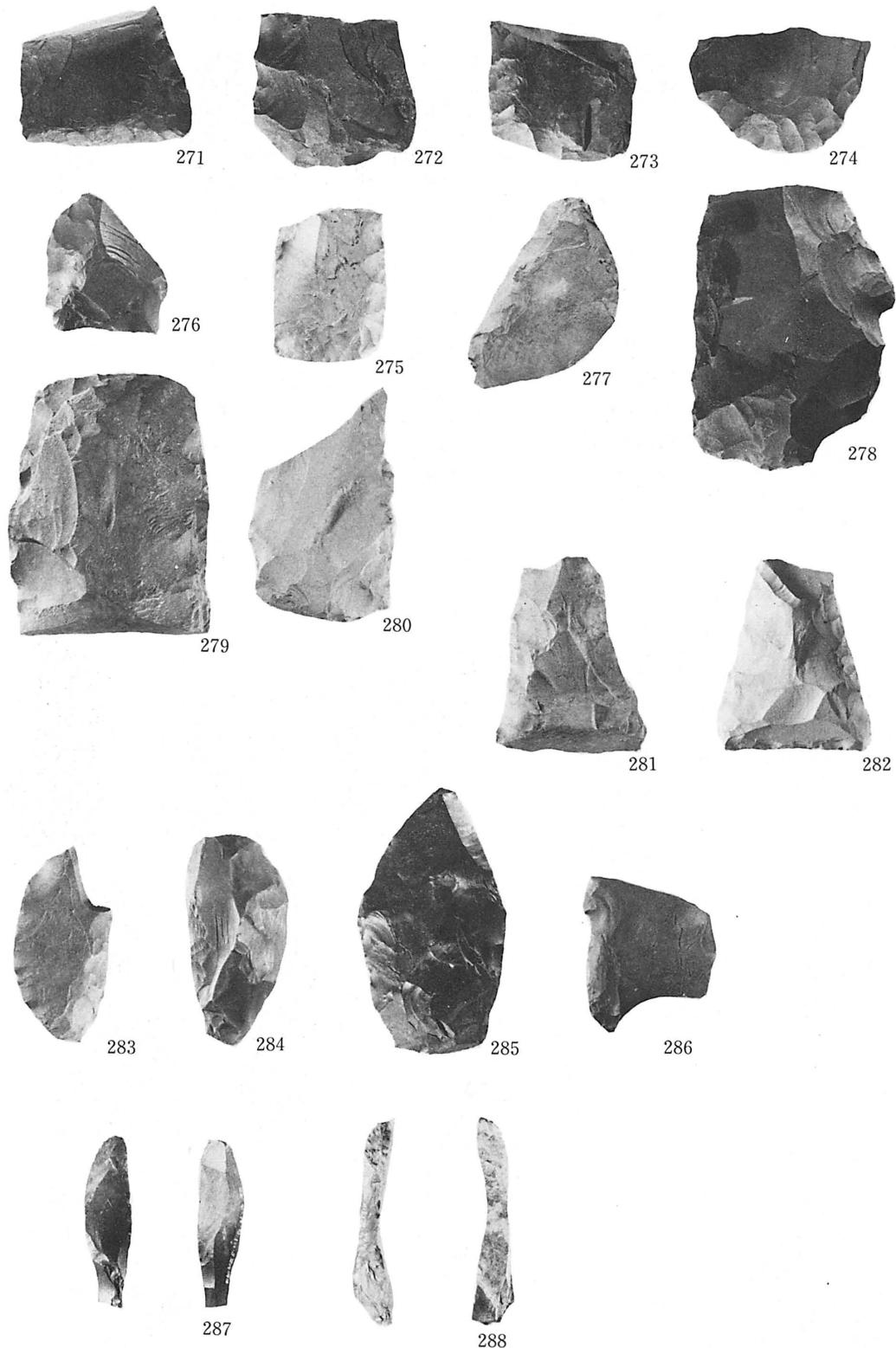


遺構外出土石器(8)

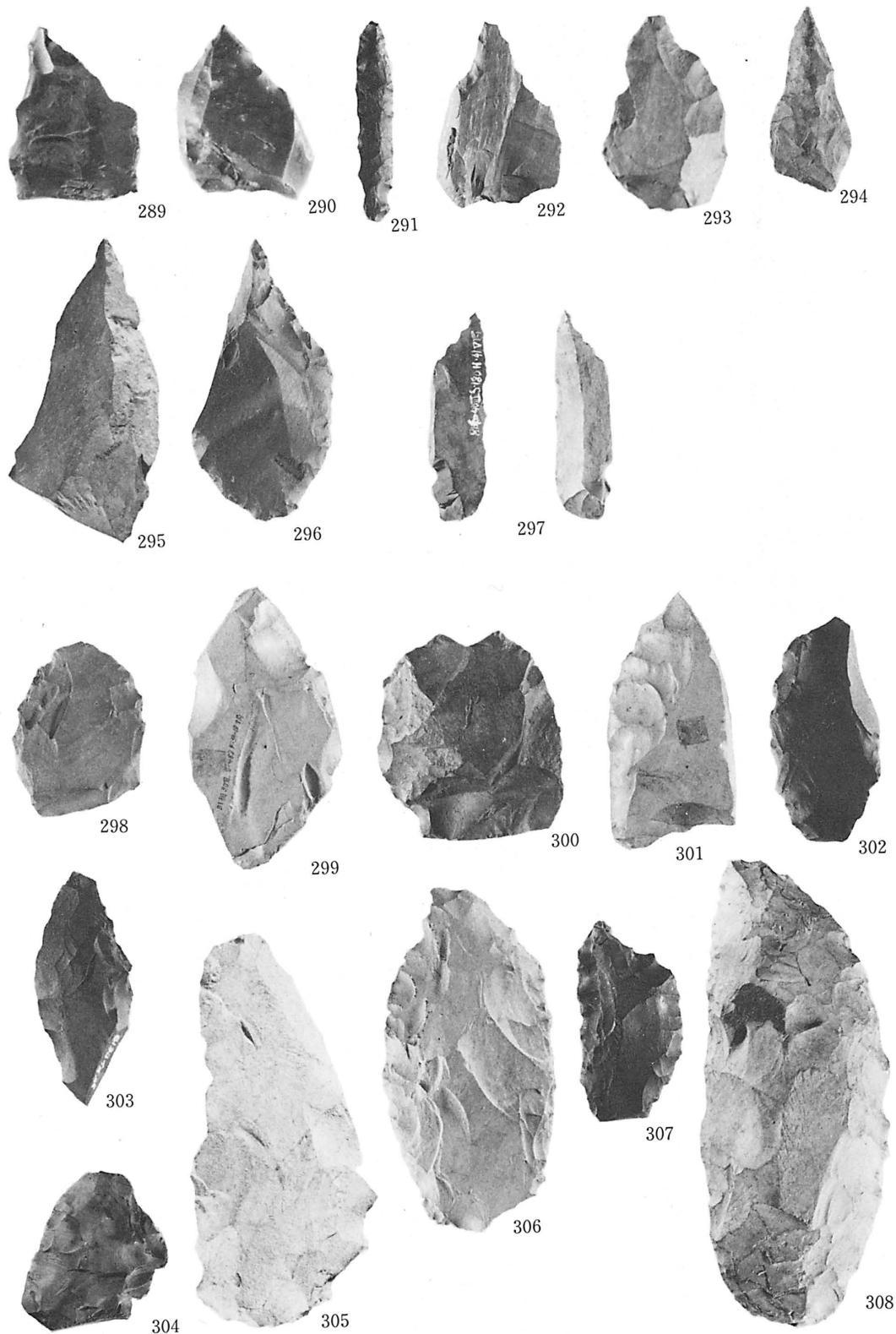


遺構外出土石器(9)

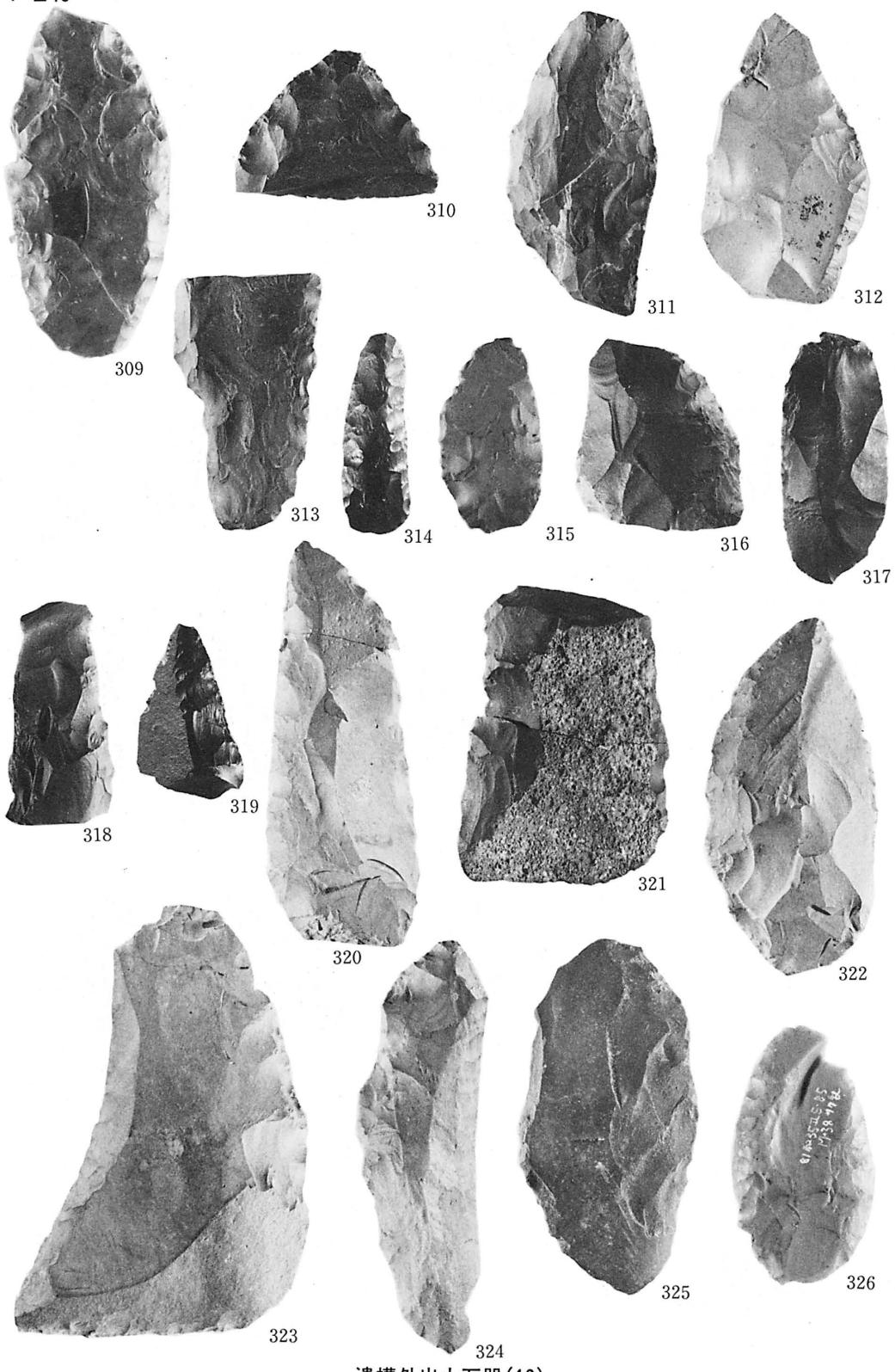
P L 46



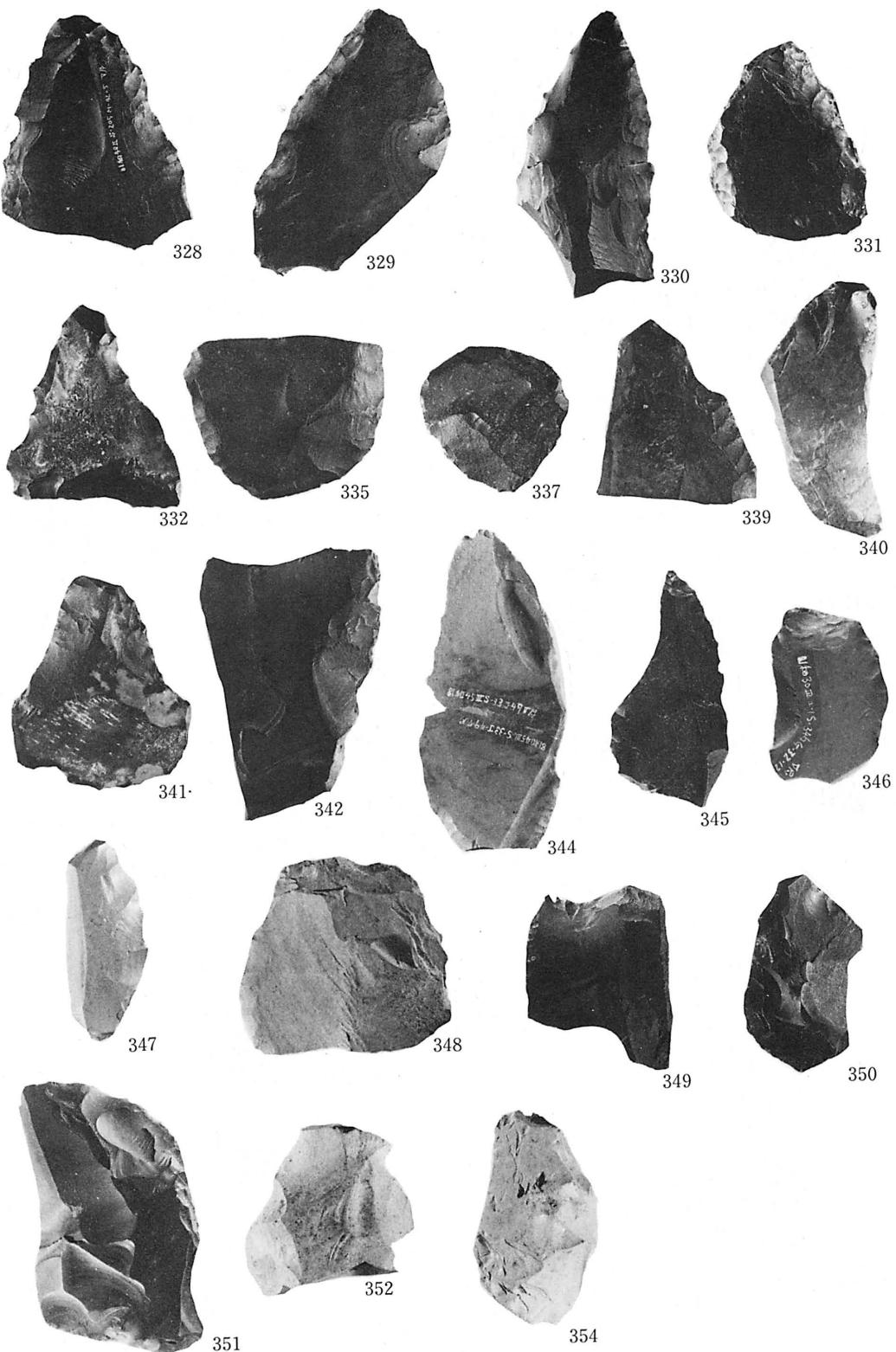
遺構外出土石器(10)



遺構外出土石器(11)

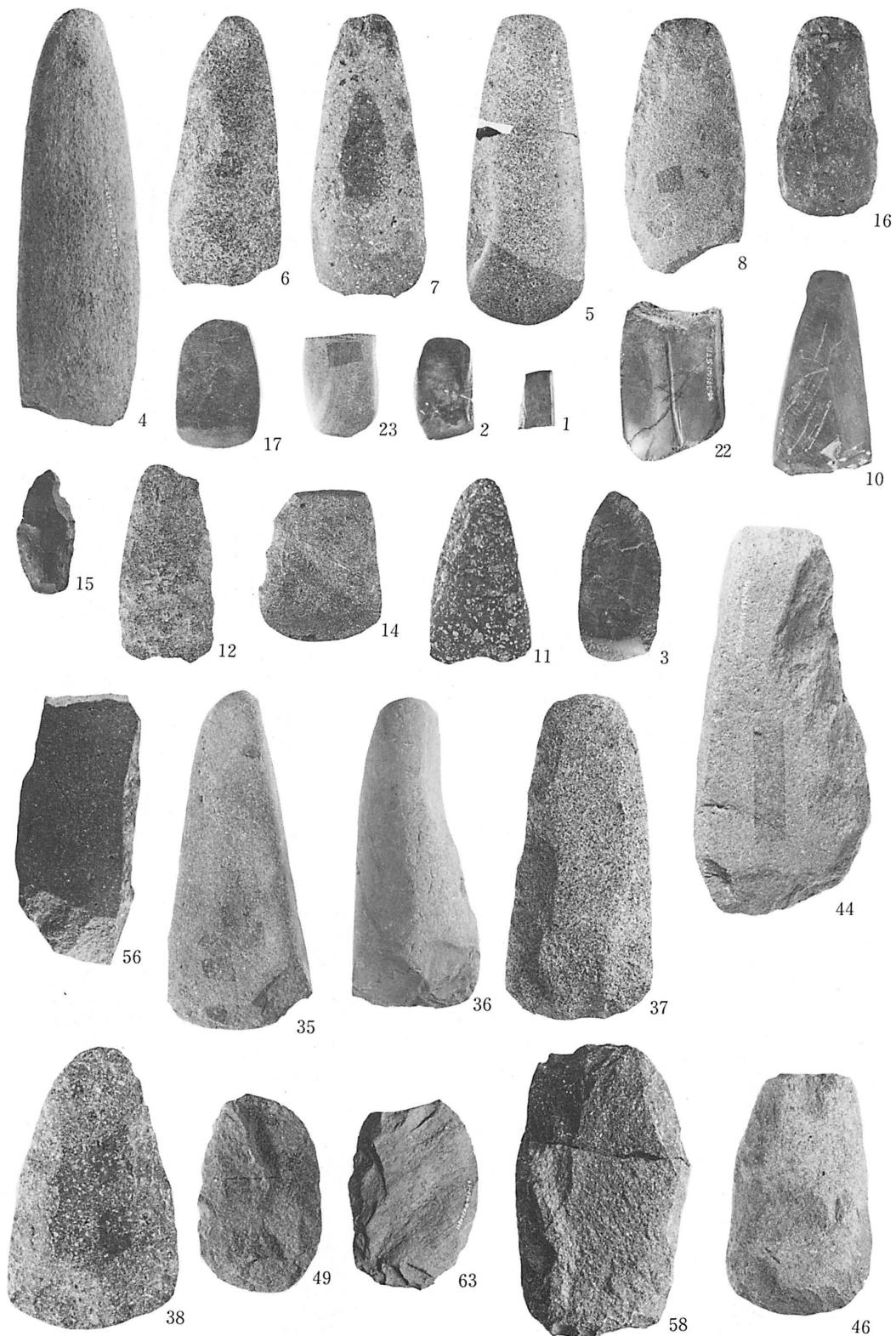


遺構外出土石器(12)

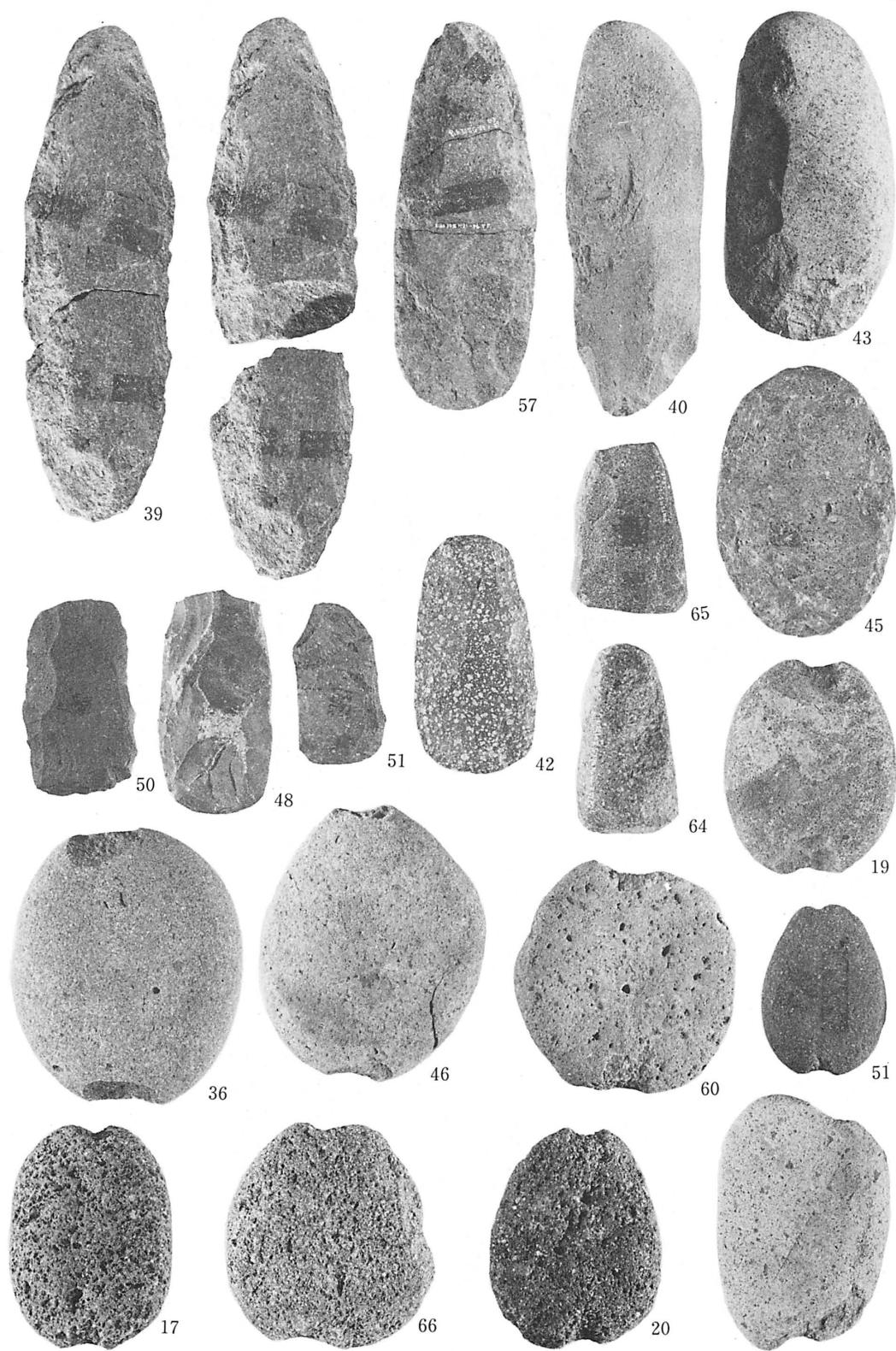


遺構外出土石器(13)

PL 50

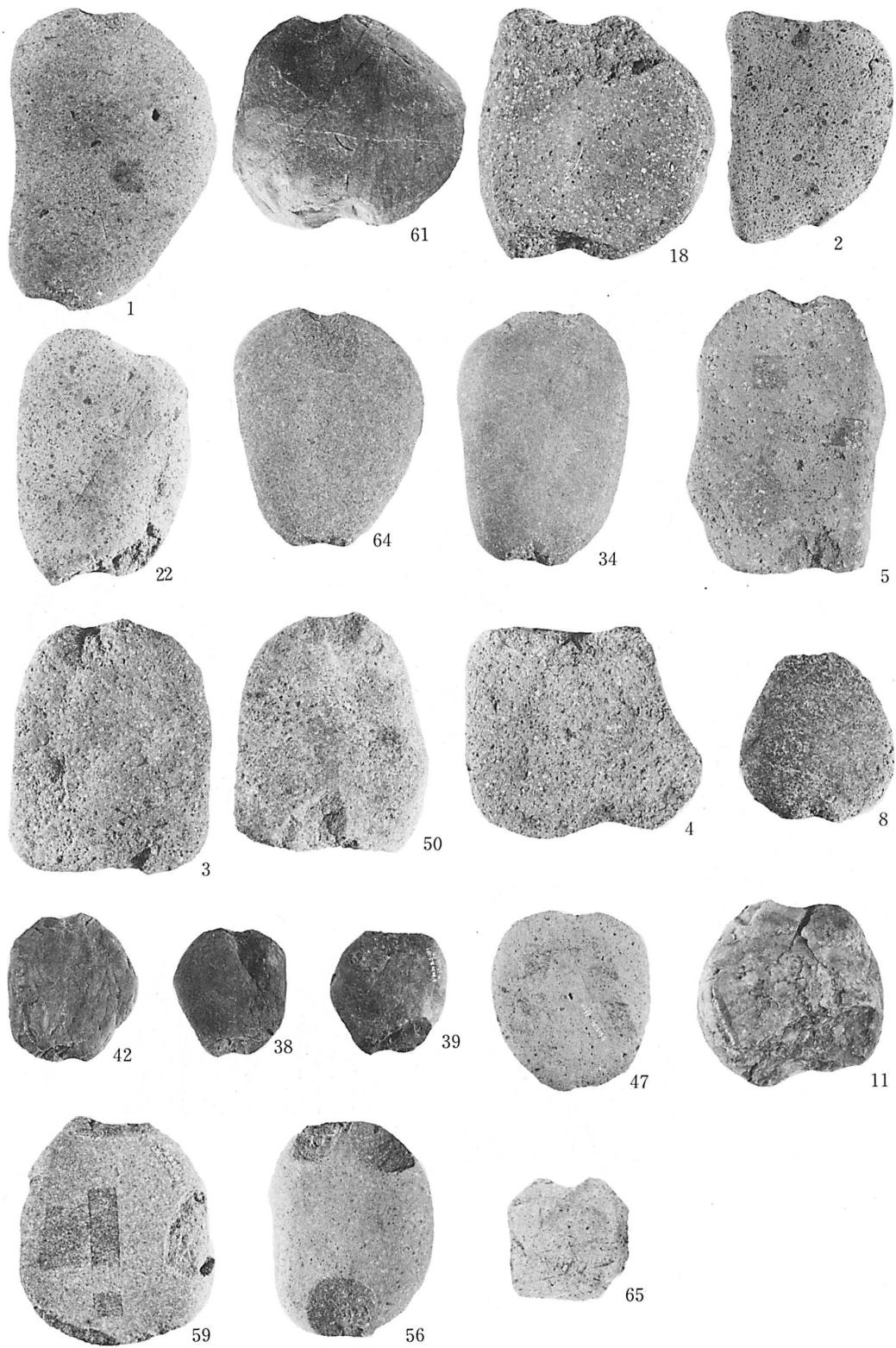


遺構外出土石器(14)

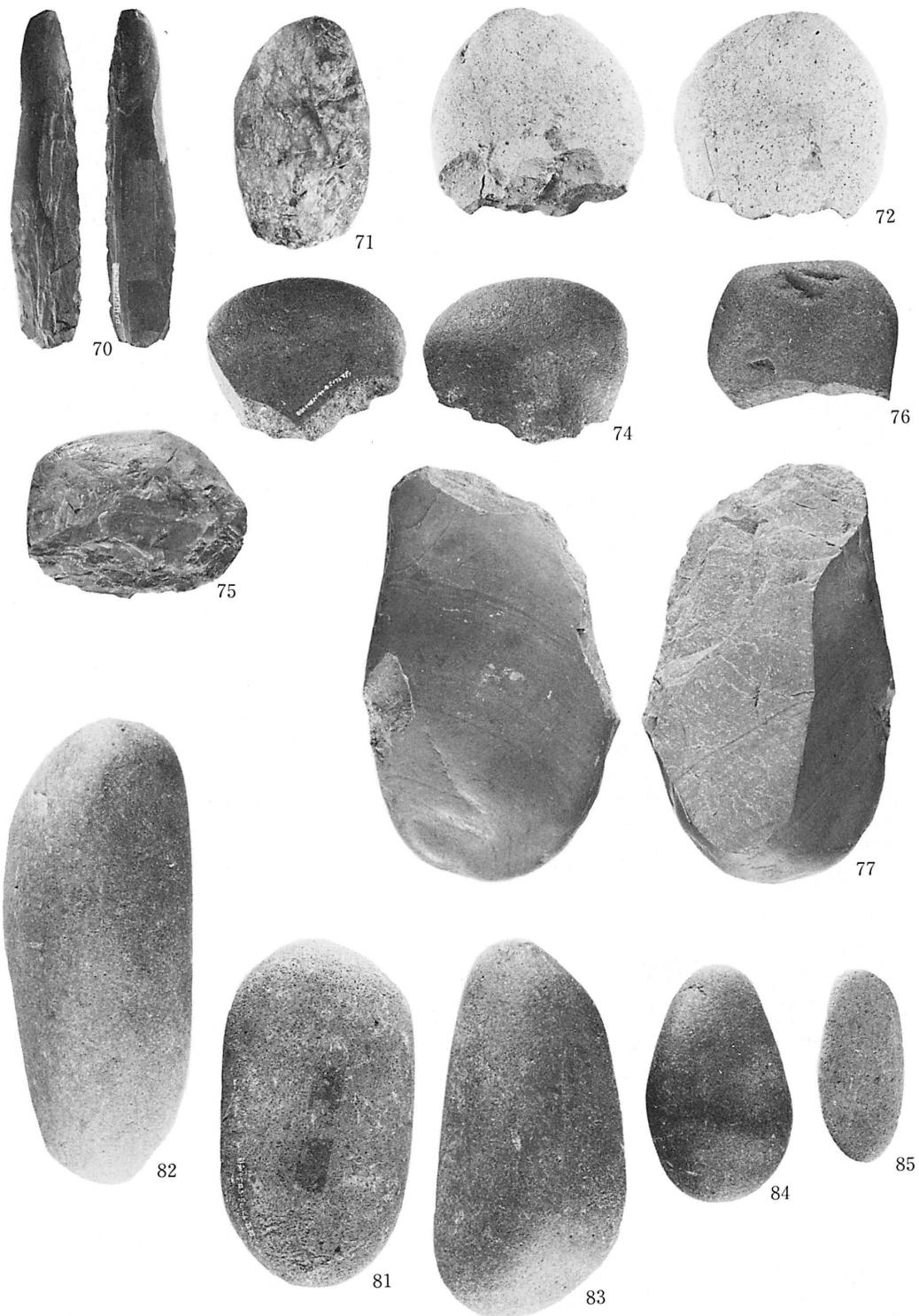


遺構外出土石器(15)

P L 52



遺構外出土石器(16)

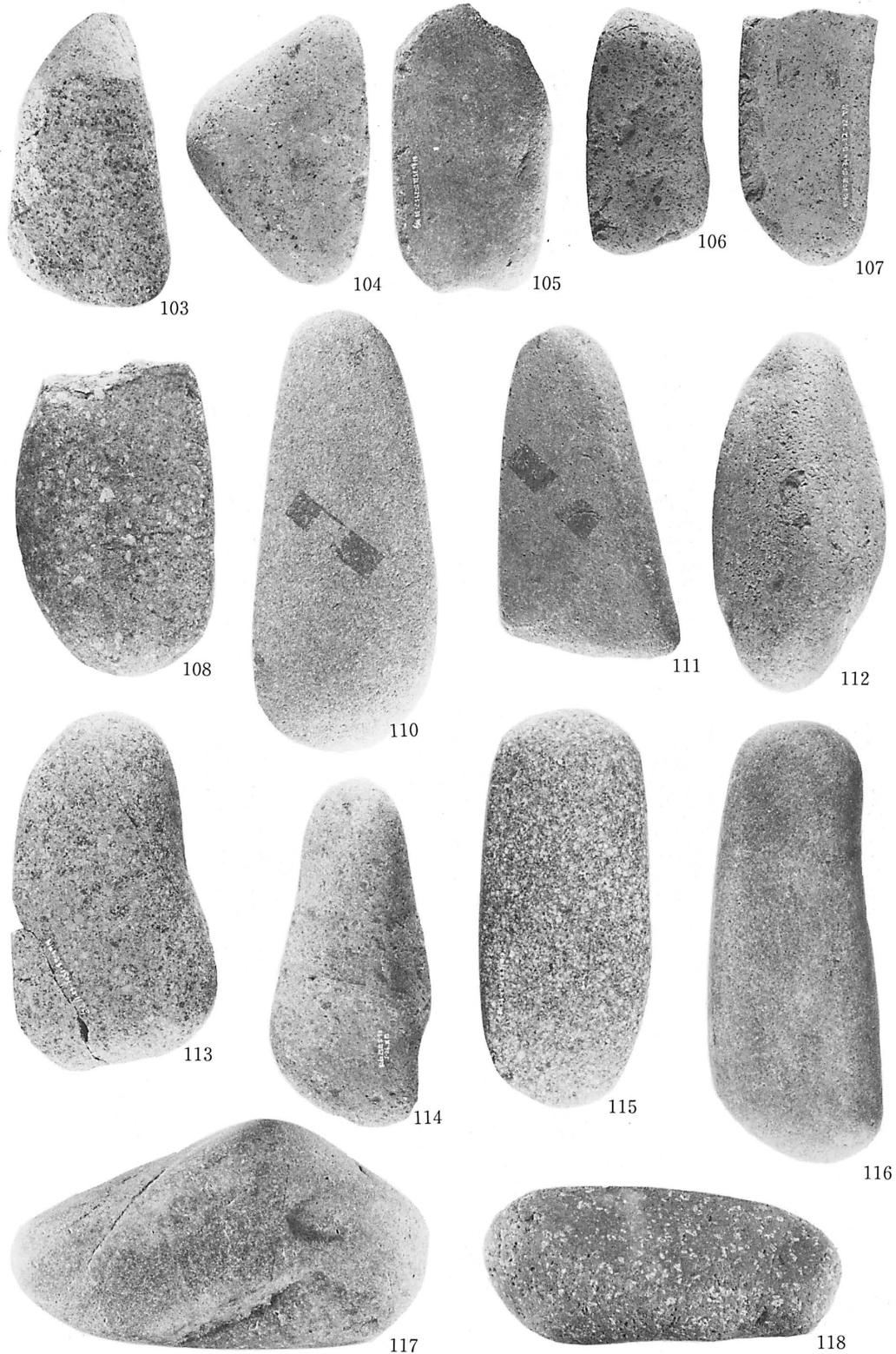


遺構外出土石器(17)

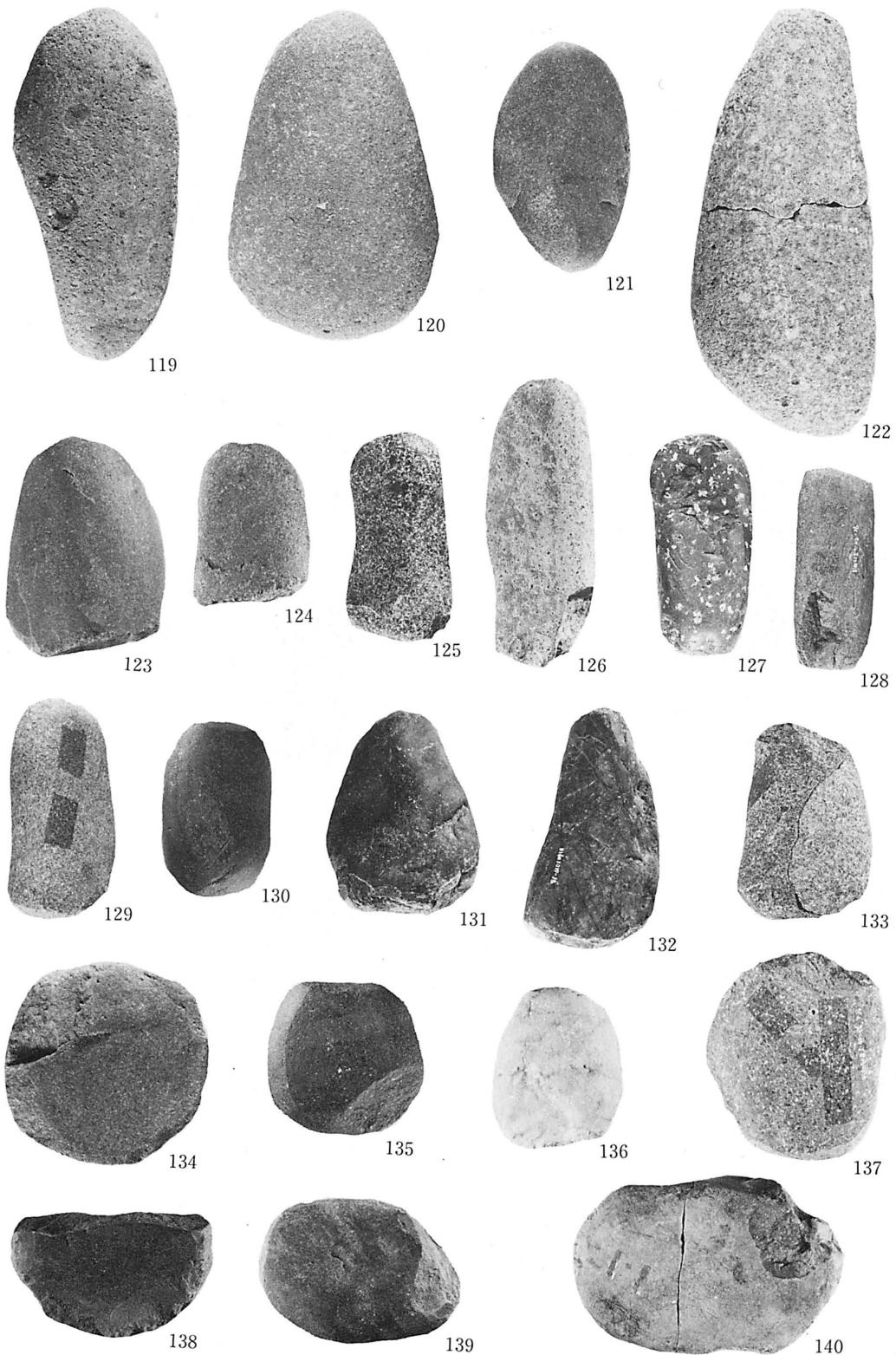
P L 54



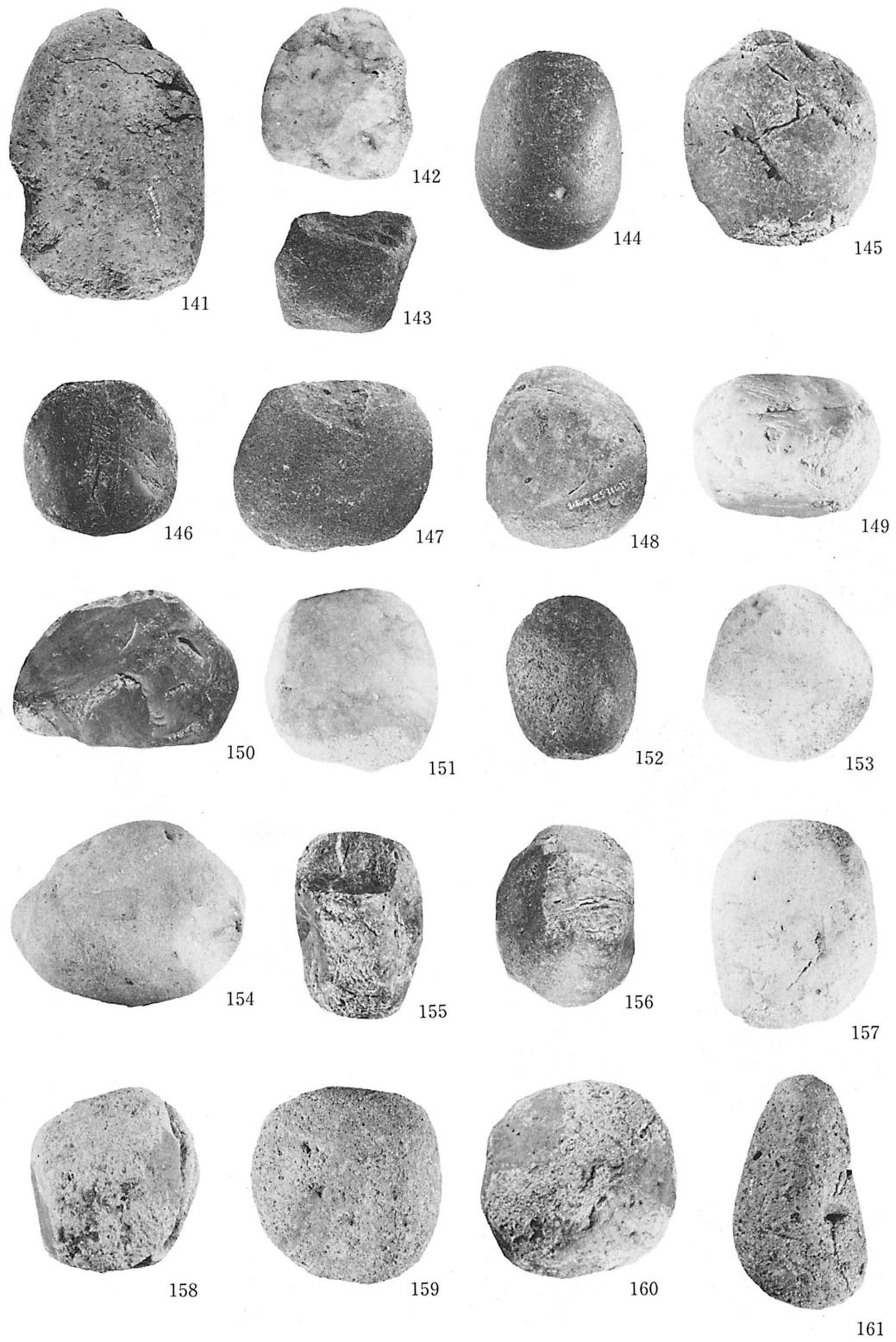
遺構外出土石器(18)



遺構外出土石器(19)



遺構外出土石器(20)

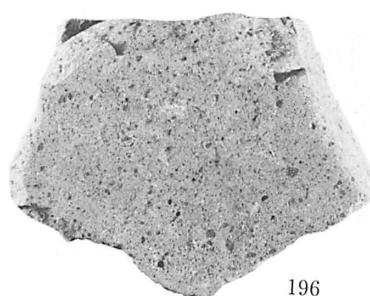
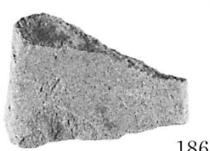
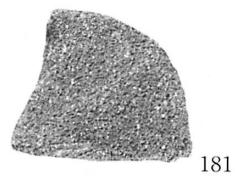
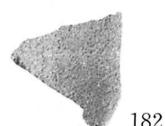
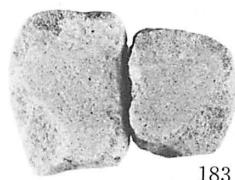


遺構外出土石器(21)

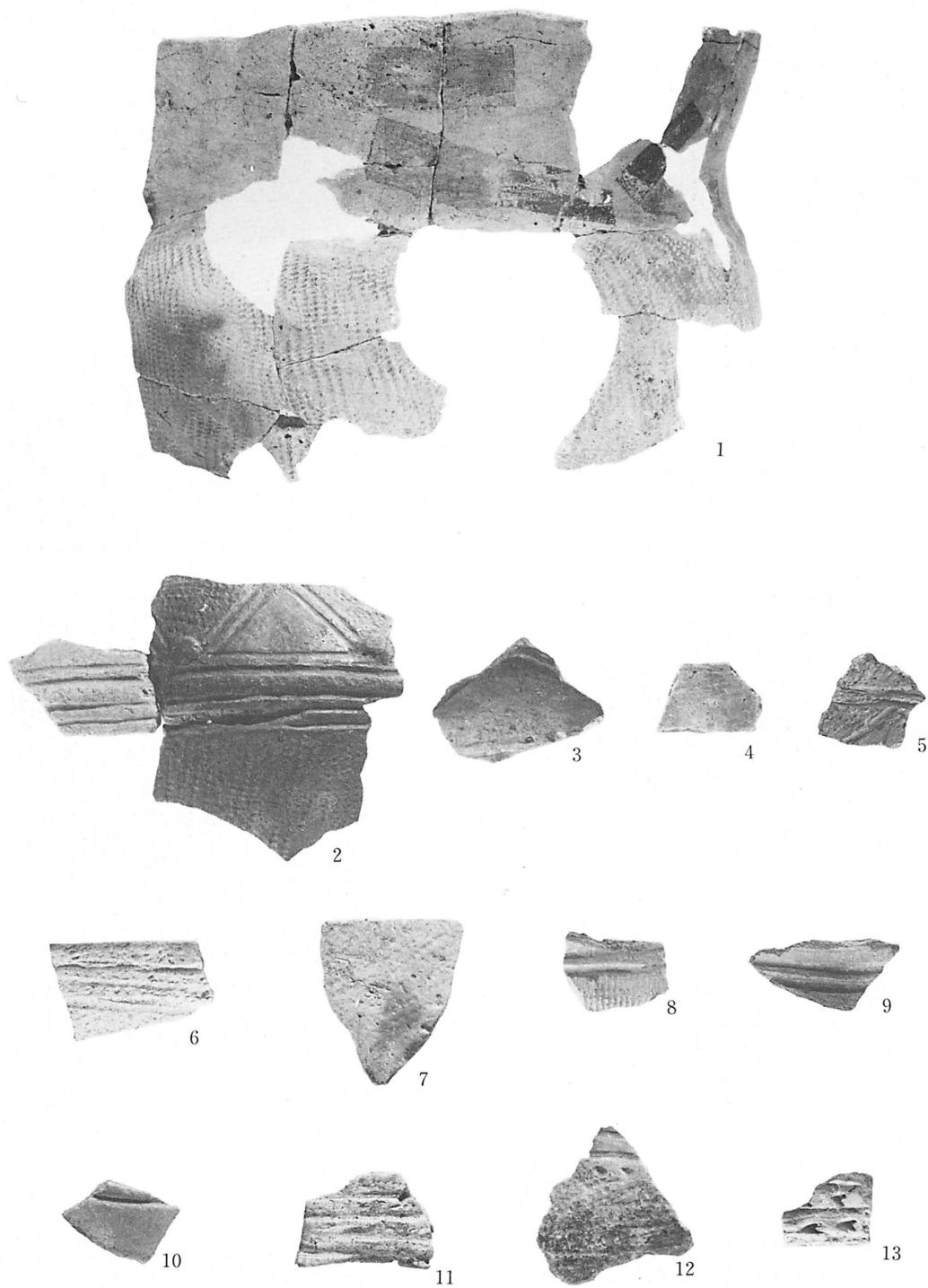
P L 58

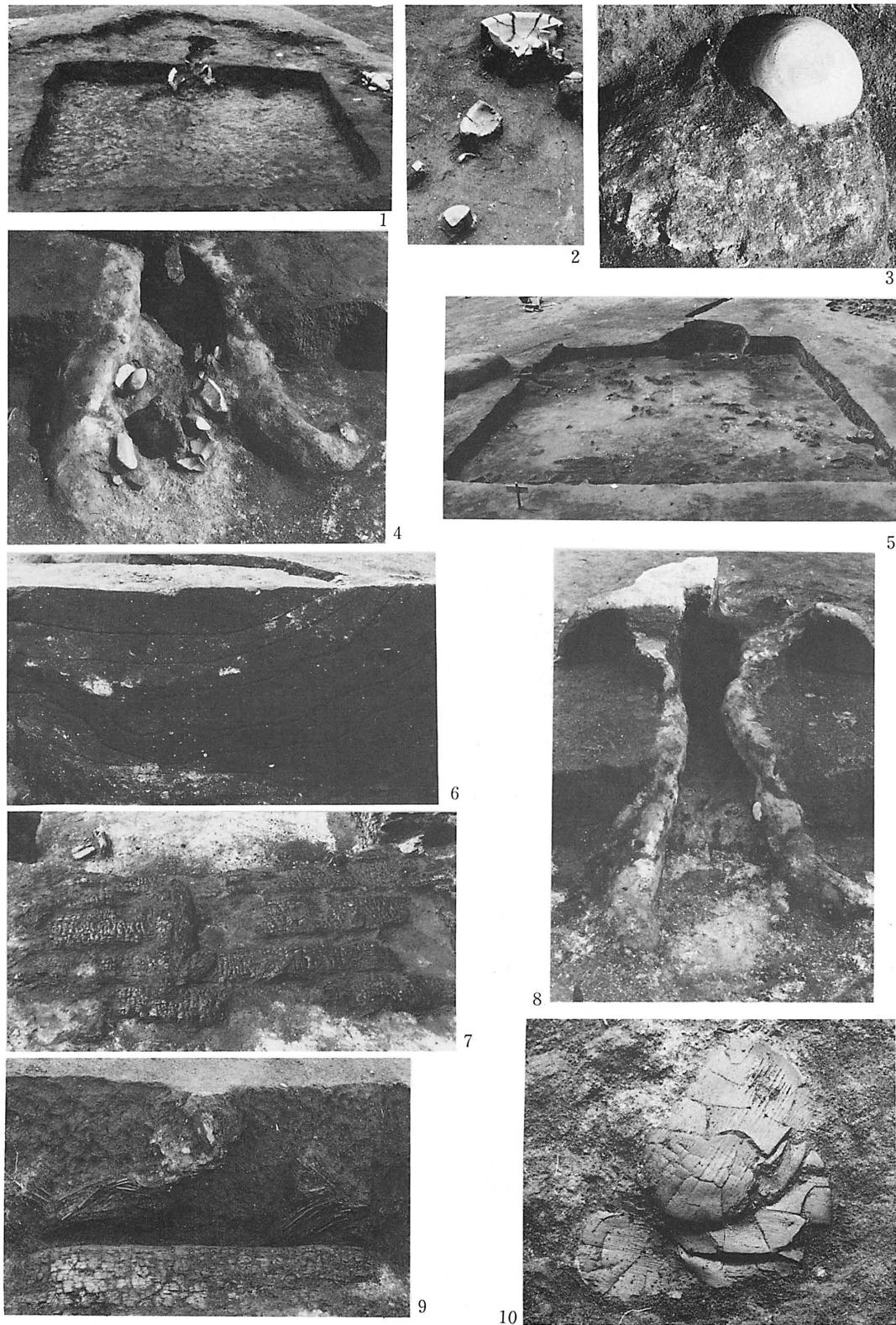


遺構外出土石器(22)



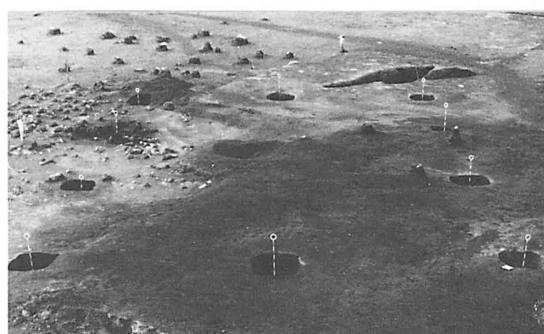
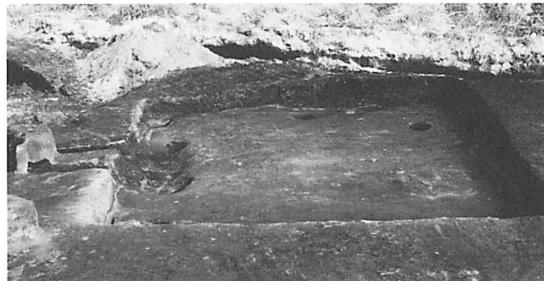
遺構外出土石器(23)



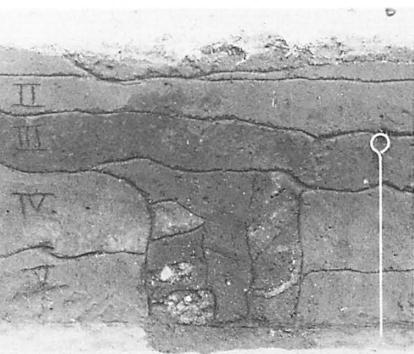
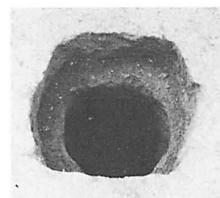


歴史時代遺構(1)

P L 62



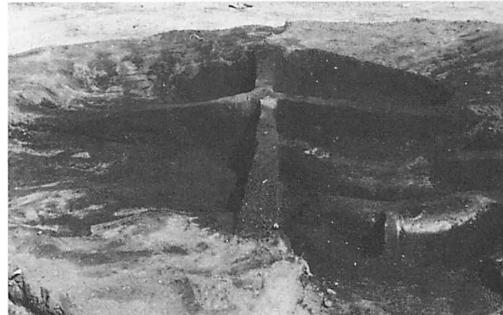
12



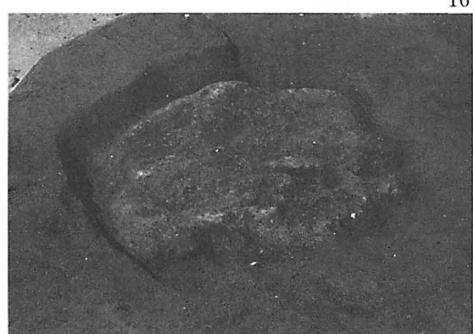
16



15



17



18



19

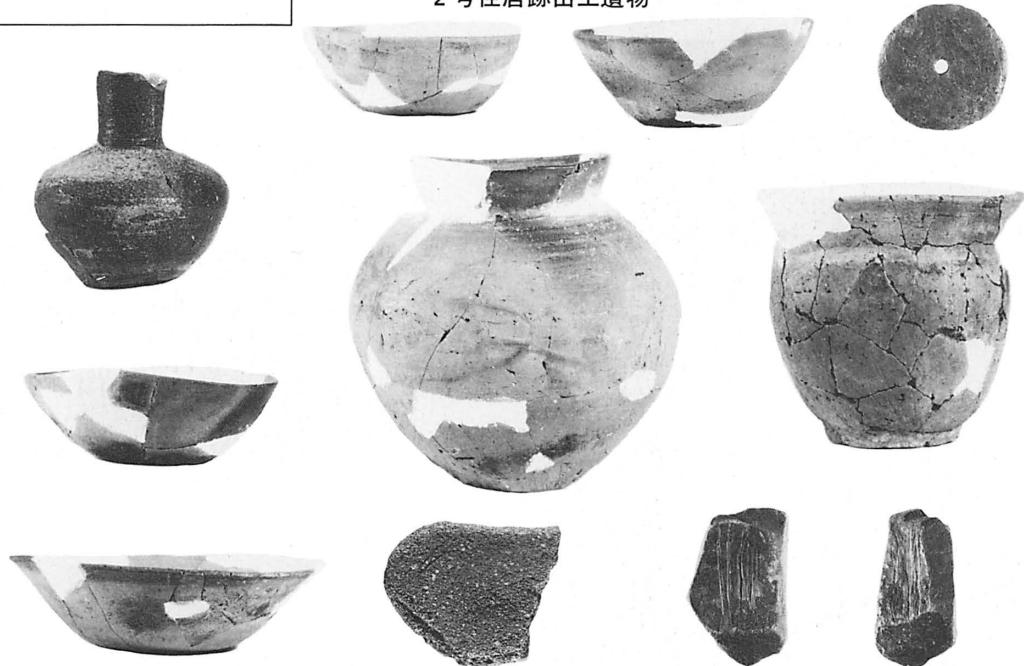
1~4-1号住居跡 5~10-2号住居跡 (6-夏土内火山灰
7-腰板・8-壁面の炭化物・10-木器出土状態)
11-3号住居跡 12-4号住居跡 13・14・16-1号掘立柱建物跡
15-2号掘立柱建物跡 17・18-1号焼土遺構
19-3号焼土遺構

歴史時代遺構(2)



1号住居跡出土遺物

2号住居跡出土遺物

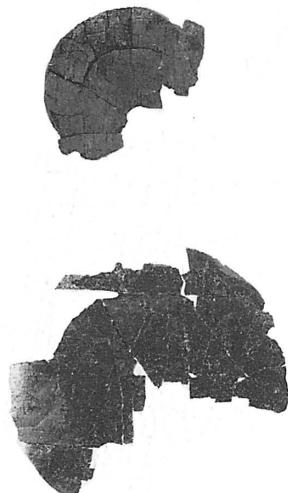


遺構内出土遺物(1)

P L 64



1号住居跡出土須恵器

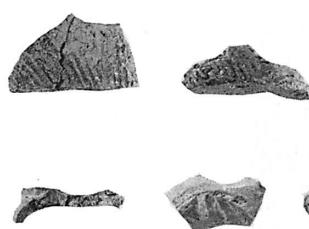


3号住居跡出土坏



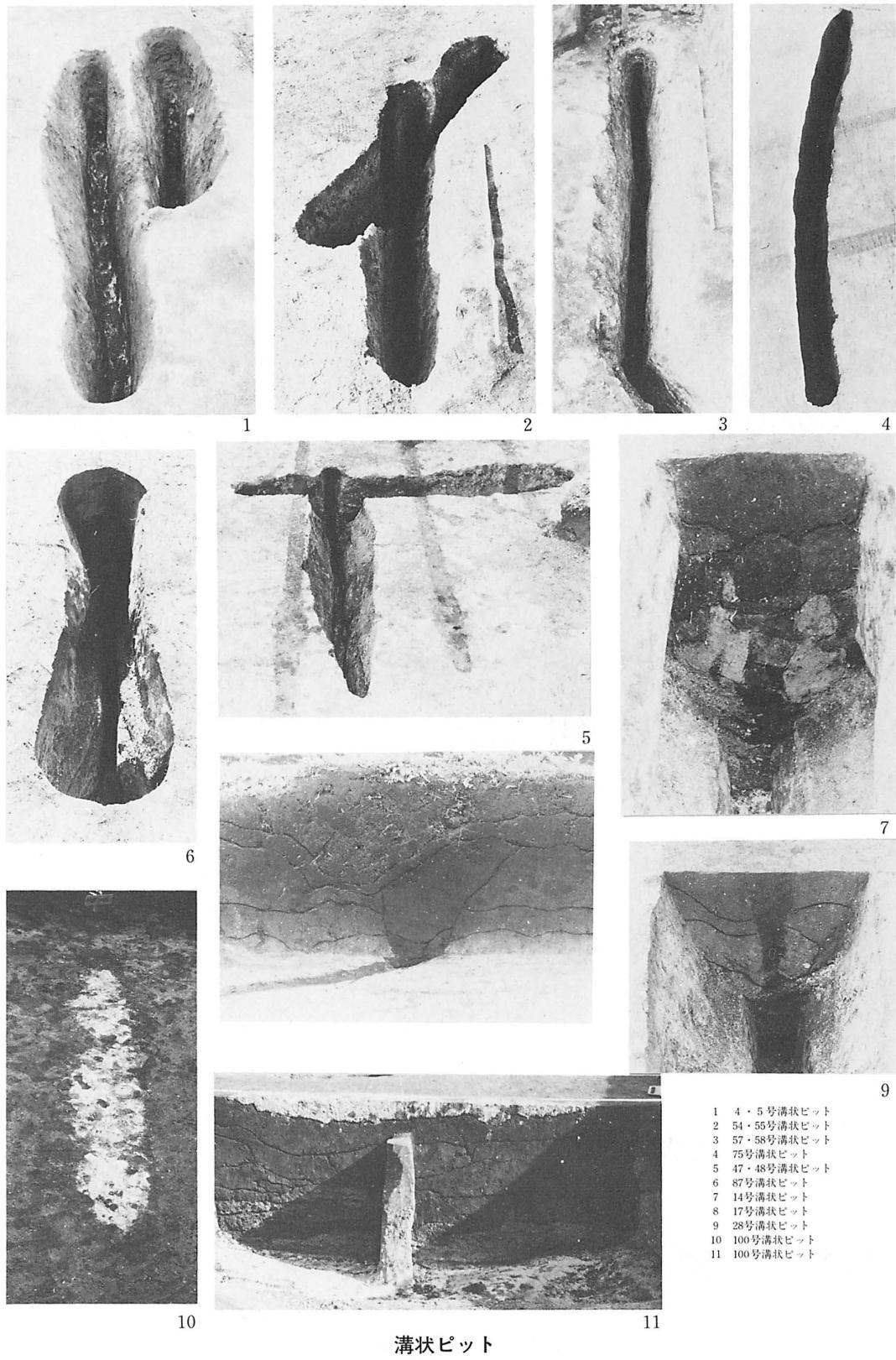
2号住居跡出土木器・種子・金雲母

3号焼土遺構出土坏(墨書)



遺構外出土遺物

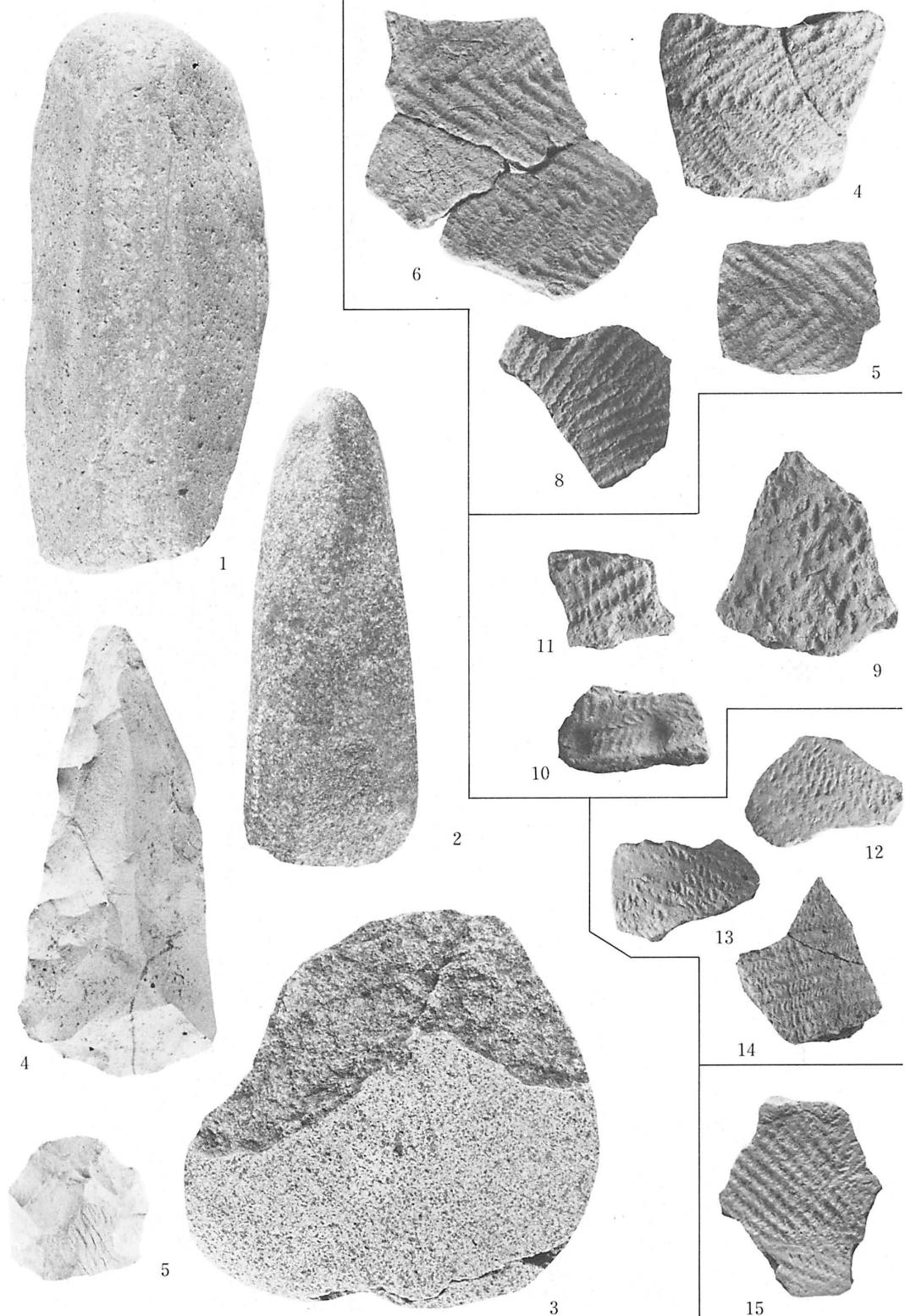
遺構内出土遺物(2)・遺構外出土遺物



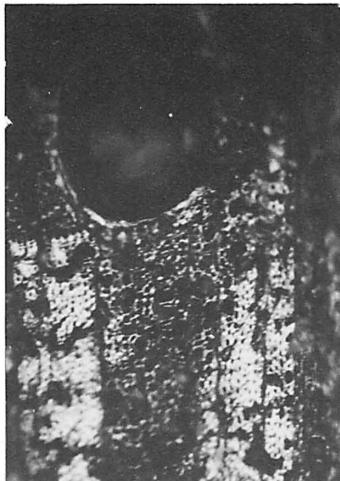
溝状ピット

- 1 4・5号溝状ピット
- 2 54・55号溝状ピット
- 3 57・58号溝状ピット
- 4 75号溝状ピット
- 5 47・48号溝状ピット
- 6 87号溝状ピット
- 7 14号溝状ピット
- 8 17号溝状ピット
- 9 28号溝状ピット
- 10 100号溝状ピット
- 11 100号溝状ピット

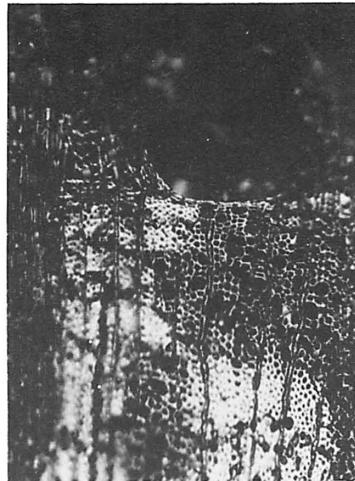
P L 66



溝状ピット出土遺物



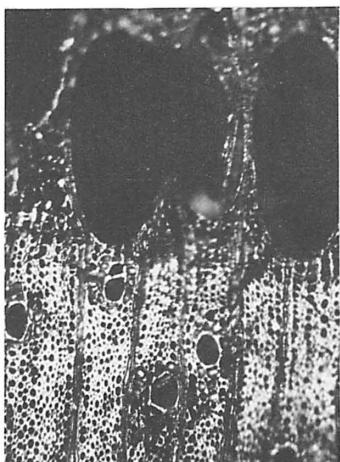
1. コナラ (No. 2) 木口×50



2. コナラ (No. 9) 木口×50



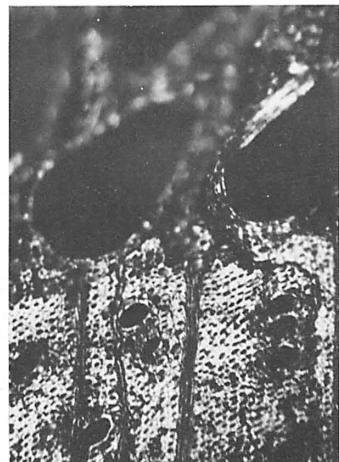
3. コナラ (No. 9) 板目×50



4. ヤチダモ (No. 5) 木口×50



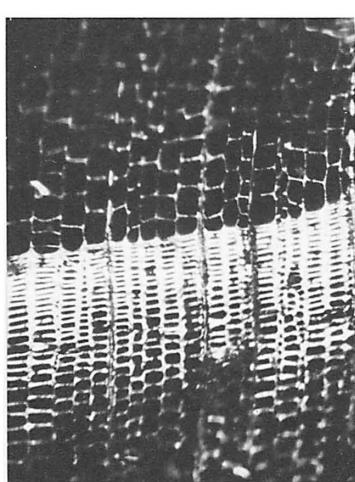
5. ヤチダモ (No. 5) 板目×100



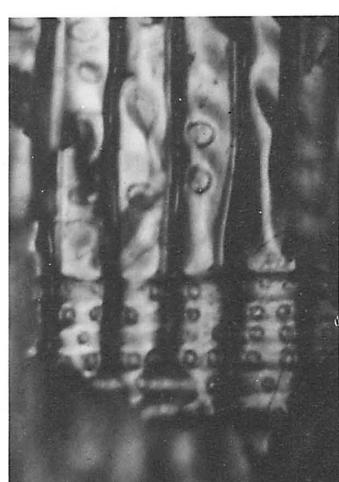
6. ヤチダモ (No. 8) 木口×50



7. コナラ (No. 7) 木口×50



8. スギ (No.10) 木口×50



9. スギ (No.10) 桟目×250

出土炭化材（鳴倉巳三郎氏撮影）

青森県埋蔵文化財調査報告書第82集

和野前山遺跡調査報告書

印刷発行 昭和59年 3月30日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

青森市新城字天田内152-15

印 刷 青森コロニー印刷

青森市大字幸畠字松元62-3

電 話 0177（38）2021
